

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

一括ダウンロード

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-04-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00009025

国立民族学博物館

研究年報

National Museum of Ethnology

2016

目次

あいさつ	3	外来研究員	286
1 組織		特別共同利用研究員	292
組織構成図	4	[2-7 データの利用]	293
運営組織	5	標本資料および映像音響資料に関するデータ	293
館内運営組織	5	文献図書資料の収集・整理・利用状況	294
現員	6	民族学資料共同利用窓口	295
歴代館長・名誉教授	6	民族学研究アーカイブズの構築事業	296
研究部教員の紹介	7	データベースの作成・利用状況	296
・館長	8	[2-8 みんなく施設の利用]	302
・副館長	9	博物館施設の利用状況	302
・民族社会研究部	15	施設の整備状況	303
・民族文化研究部	41	[2-9 受賞・特許]	303
・先端人類科学研究部	76	受賞	303
・研究戦略センター	100	知的財産形成・特許出願など	303
・文化資源研究センター	116	3 展示	
・国際学術交流室	139	入館者数	304
・梅棹資料室	140	本館展示	304
・機関研究員	140	特別展示・企画展示など	308
・プロジェクト研究員	152	展示関連出版物およびプログラム	310
・拠点研究員（人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター・		4 国際連携と研究協力	
「北東アジア地域研究」国立民族学博物館拠点）	157	海外研究機関との研究協力協定	314
・拠点研究員（人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター・		MINPAKU Anthropology Newsletter	319
「現代中東地域研究」国立民族学博物館拠点）	158	みんなくフェローズ	320
・拠点研究員（人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター・		国際研修博物館学コース	321
「南アジア地域研究」国立民族学博物館拠点）	159	国内研究機関等との研究連携、協力の推進	322
・客員教員（先端人類科学研究部・文化動態研究部門）	162	5 広報・社会連携	
・客員教員（先端人類科学研究部・日本財団助成手話言語学研究部門（附置））	162	概観	324
・客員教員（文化資源研究センター）	164	国立民族学博物館要覧2016	326
・特別客員教員（先端人類科学研究部・社会環境研究部門）	165	ホームページ	326
・特別客員教員（先端人類科学研究部・文化動態研究部門）	168	報道	327
・特別客員教員（先端人類科学研究部・応用民族学部門）	173	月刊みんなく	328
・特別客員教員（先端人類科学研究部・日本財団助成手話言語学研究部門（附置））	182	みんなくゼミナール	328
・特別客員教員（文化資源研究センター）	183	みんなくウィークエンド・サロン	330
・外国人研究員 客員（研究戦略センター・超領域研究部門）	186	研究公演	336
2 研究および共同利用		みんなく映画会	337
概観	204	博物館社会連携	339
[2-1 みんなくの研究]	205	その他の事業	340
特別研究	205	ボランティア活動	341
人類の文化資源に関するフォーラム型情報		一般財団法人千里文化財団の事業	341
ミュージアムの構築	207	6 研究戦略センター	
共同研究	217	研究戦略センターの設立の趣旨と経緯	348
研究成果公開プログラムによる館のシンポジウム、		2016年度の活動概要	348
研究フォーラム、国際研究集会への派遣	256	7 文化資源研究センター	
館長リーダーシップ経費による事業・調査	260	文化資源研究センターの設置目的	350
民博研究懇談会	263	文化資源研究センターの研究事業	350
[2-2 人間文化研究機構 基幹研究プロジェクト]	263	文化資源関連事業	350
人間文化研究機構 基幹研究プロジェクト	263	8 国際学術交流室	
広領域連携型	263	設置目的	358
ネットワーク型	267	機能	358
[2-3 外部資金による研究]	272	2016年度活動内容	358
科学研究費助成事業による研究プロジェクト	272	9 人間文化研究機構	
受託事業	274	組織構成図	360
民間などの研究助成金などによる研究活動	282	運営組織	361
[2-4 研究成果の公開]	282	10 総合研究大学院大学	362
刊行物	282	彙報	366
国立民族学博物館学術情報リポジトリ	284	研究部の人事異動	366
学術講演会	284	来館者抄	366
[2-5 学会開催]	286	索引	370
学会開催	286	利用案内	372
[2-6 研究員制度]	286		

国立民族学博物館（みんぱく）は創設43年をむかえ、研究調査、博物館事業、大学院教育、広報・社会貢献、そして大学共同利用機関としてさまざまな活動を展開しております。2004年4月からは大学共同利用機関法人・人間文化研究機構の一員となり、機構内の5機関と連携して人間と文化についての総合的研究を推進しています。

みんぱくは、世界の民族、社会や文化とこれらの変革などを研究対象とし、フィールドワークにもとづいて、文化人類学およびその関連研究分野の基礎的かつ理論的研究をおこなってきました。グローバル化によって、人類は生活や社会のしくみだけでなく価値観にいたるあらゆる面で未曾有の経験に直面しています。この動きの実際とプロセス、そして将来の方向性を現地での参与観察にもとづいて明らかにすることが文化人類学の今日的課題といえましょう。

文化人類学の国際的研究拠点であるみんぱくは、共同研究を推進し先端的研究を牽引し、その成果を国内外に発信するとともに現地の人びとや社会と共有し、ともに議論し、考える「フォーラム型」研究をめざしています。また、異文化をより深く理解するために、物質文化、生活様式、芸能・音楽などの資料や多様な情報取積も積極的にすすめ「世界の博情館」としての役割をはたしています。現在、34万点の民族資料、7万点の映像・音響資料、そして66万点の文献図書資料を収蔵し、学界や一般の人びとにも公開しています。

2014年度からは、文化資源のデータベースをもとに、多言語化して世界に発信する情報ミュージアムをオンライン上に構築する「人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」プロジェクトを文部科学省の特別経費でスタートさせました。また、2008年度からはじめた本館展示の新構築は、オセアニア、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカ、西アジア、南アジア、東南アジア、朝鮮半島、中国地域、日本、音楽、言語、そしてインフォメーション・ゾーンを終え、2016年度に中央・北アジアとアイヌ文化の展示改編で完成しました。

『研究年報』は、みんぱくの教員が実践する研究調査から、国際研究集会・学術交流、大学院教育、社会貢献にいたる多方面の活動とその成果についてみなさまに知っていただくために編集されました。本誌は大学共同利用機関としての活動の集大成といえます。一方、みんぱくのウェブサイトには、本誌の情報にくわえ、研究活動、研究集会や展示を含め、種々の館内外のイベントの最新情報を掲載し、『研究年報』の内容を補足しています。

本誌によって、文化人類学とその関連分野の研究所および大学共同利用機関としての国内外の研究拠点であり、同時に人類の文化資源の国際的資料情報センターであるみんぱくの活動をご理解いただき、今後とも本館にたいしてみなさまからのご助言とご支援をお願いする次第です。

2017年3月

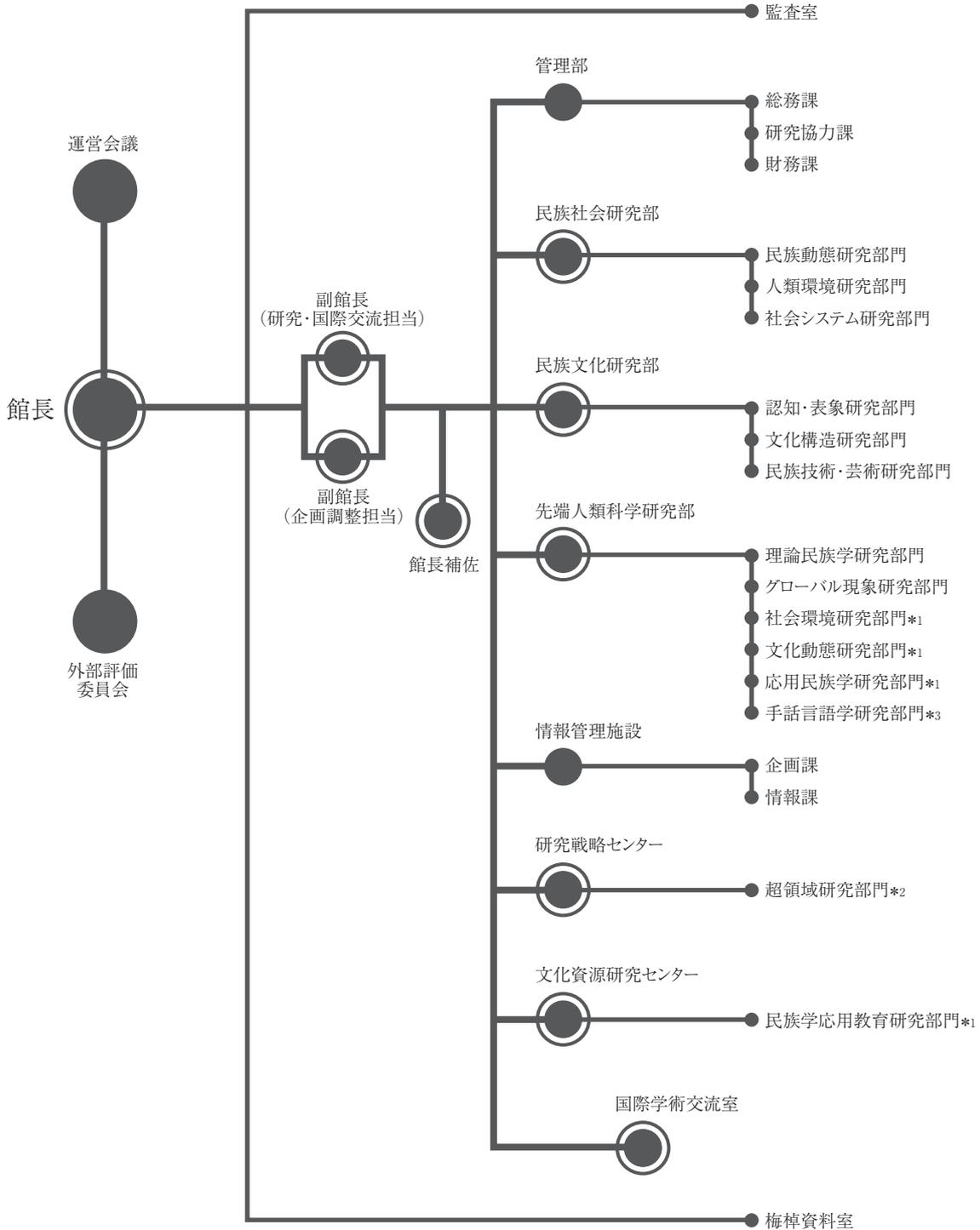
国立民族学博物館長

須藤 健一



1 組織

組織構成図 (2017年3月31日現在)



注) *1 客員研究部門
 *2 外国人客員研究部門
 *3 附置研究部門

運営組織 (2017年3月31日現在)

●運営会議

窪田幸子	神戸大学大学院国際文化学研究科教授 *1
栗田博之	東京外国語大学総合国際学研究院教授 *2
栗本英世	大阪大学大学院人間科学研究科長*1 大阪大学人間科学部長
佐野千絵	東京文化財研究所文化財情報資料部長 *3
富沢寿勇	静岡県立大学国際関係学部教授*1
松田 凡	京都文教大学総合社会学部教授*3
松田素二	京都大学大学院文学研究科教授*2
山梨俊夫	国立国際美術館長
渡邊欣雄	國學院大學文学部教授*2
(館内)	
池谷和信	民族文化研究部長*1*2*3
鈴木七美	研究戦略センター長*1*2*3
關 雄二	先端人類科学研究部長*1*2*3
園田直子	民族社会研究部長*1*2*3
西尾哲夫	副館長(研究・国際交流担当)*1*2*3
野林厚志	文化資源研究センター長*1*2*3
横山廣子	総合研究大学院大学文化学研究科地域 文化学専攻長 民族社会研究部教授 *1
吉田憲司	副館長(企画調整担当)*1*2*3 注) *1 人事委員会委員 *2 共同利用委員会委員 *3 研究倫理委員会委員

●外部評価委員会

安達 淳	国立情報学研究所副所長
北野尚宏	独立行政法人国際協力機構 JICA 研究 所長
八村廣三郎	立命館大学情報理工学部特任教授
廣富靖以	公益財団法人りそなアジア・オセアニア 財団理事長
堀井良殷	公益財団法人関西・大阪21世紀協会理 事長
水沢 勉	神奈川県立近代美術館長
山極壽一	京都大学総長
山下晋司	帝京平成大学現代ライフ学部教授 東京大学名誉教授
山本真鳥	法政大学経済学部教授

館内運営組織 (2017年3月31日現在)

●部長会議

●館内各種委員会

自己点検・評価委員会	「人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト」
開館四十周年記念事業推進委員会	地域研究推進事業国立民族学博物館拠点運営委員会
福利厚生委員会	大学院委員会
安全衛生委員会	図書委員会
ハラスメント防止委員会	情報システム委員会(休止)
広報企画会議	情報運営会議
機関研究運営会議	文化資源運営会議
刊行物審査委員会	国際研修博物館学コース運営委員会
研究出版委員会	施設マネジメント委員会
知的財産委員会	危機管理委員会
科学研究費補助金管理体制検討委員会	大規模災害復興支援委員会
	フォーラム型情報ミュージアム委員会

現員 (2017年3月31日現在)

区 分	館長	教授	准教授	助教	事務職員・技術職員	計
館長	1					1
管理部					29	29
情報管理施設					19	19
監査室					1	1
研究部		15	17(1)	1(1)		33(2)
研究戦略センター		4	4	0		8
文化資源研究センター		3	6	2		11
客員 (国内)		11	6			17
客員 (国外) *		8	3			11
計	1	41	36(1)	3(1)	49	130(2)

注) ()は特任研究員の人数を外数で示す
注) 客員 (国外)*は、のべ人数

歴代館長・名誉教授 (2017年3月31日現在)

●歴代館長

初代	梅棹忠夫 (故人)	1974年6月～1993年3月
第2代	佐々木高明 (故人)	1993年4月～1997年3月
第3代	石毛直道	1997年4月～2003年3月
第4代	松園萬亀雄	2003年4月～2009年3月
第5代	須藤健一	2009年4月～2017年3月

●名誉教授

祖父江孝男 (故人)	1984年4月1日	栗田靖之	2003年4月1日
岩田慶治 (故人)	1985年4月1日	杉田繁治	2003年4月1日
加藤九祚 (故人)	1986年4月1日	熊倉功夫	2004年4月1日
伊藤幹治 (故人)	1988年4月1日	立川武藏	2004年4月1日
中村俊亀智 (故人)	1988年4月1日	田邊繁治	2004年4月1日
君島久子	1989年4月1日	藤井龍彦	2004年4月1日
和田祐一 (故人)	1990年4月1日	山田陸男 (故人)	2004年4月1日
垂水 稔 (故人)	1991年4月1日	江口一久 (故人)	2005年4月1日
杉本尚次	1992年4月1日	大塚和義	2005年4月1日
梅棹忠夫 (故人)	1993年4月1日	松原正毅	2005年4月1日
大給近達 (故人)	1993年4月1日	石森秀三	2006年4月1日
片倉素子 (故人)	1993年4月1日	野村雅一 (故人)	2006年4月1日
竹村卓二 (故人)	1994年4月1日	大森康宏	2007年4月1日
周 達生 (故人)	1995年4月1日	山本紀夫	2007年4月1日
松澤員子	1995年4月1日	松園萬亀雄	2009年4月1日
大丸 弘 (故人)	1996年4月1日	松山利夫	2010年4月1日
友枝啓泰 (故人)	1996年4月1日	長野泰彦	2011年4月1日
藤井知昭	1996年4月1日	秋道智彌	2012年4月1日
佐々木高明 (故人)	1997年4月1日	中牧弘允	2012年4月1日
杉村 棟	1997年4月1日	小林繁樹	2014年4月1日
和田正平	1998年4月1日	田村克己	2014年4月1日
清水昭俊	2000年4月1日	吉本 忍	2014年4月1日
黒田悦子	2001年4月1日	久保正敏	2015年4月1日
崎山 理	2001年4月1日	庄司博司	2015年4月1日
端 信行	2001年4月1日	八杉佳穂	2015年4月1日
小山修三	2002年4月1日	朝倉敏夫	2016年4月1日
森田恒之	2002年4月1日	佐々木史郎	2016年4月1日
石毛直道	2003年4月1日	杉本良男	2016年4月1日

研究部教員の紹介 (2017年3月31日現在)

組織図に基づく現員一覧

館長		須藤健一		
副館長 (企画調整担当)		吉田憲司		
副館長 (研究・国際交流担当)		西尾哲夫		
研究部	職名・研究部門	教授	准教授	助教
民族社会研究部	研究部長	園田直子		
	民族動態	塚田誠之 平井京之介 横山廣子 小長谷有紀 (併)	三島禎子	
	人類環境	印東道子 MATTHEWS, Peter J.		
	社会システム	韓 敏	佐藤浩司 宇田川妙子 太田心平	吉岡 乾
民族文化研究部	研究部長	池谷和信		
	認知・表象	森 明子	山中由里子 齋藤玲子	
	文化構造	寺田吉孝 笹原亮二	新免光比呂 廣瀬浩二郎 藤本透子	
	民族技術・芸術	竹沢尚一郎 出口正之	鈴木 紀	
先端人類科学研究部	研究部長	關 雄二		
	理論民族学	齋藤 晃	菊澤律子 飯田 卓 三尾 稔	
	グローバル現象	丸川雄三 松尾瑞穂 卯田宗平 相島葉月		
附 置	日本財団助成 手話言語学	※飯泉菜穂子 (併) 菊澤律子		※相良啓子
研究戦略センター		鈴木七美 (センター長) 岸上伸啓 西尾哲夫 (副館長) 樫永真佐夫	丹羽典生 南 真木人 菅瀬晶子 河合洋尚	
文化資源研究センター		野林厚志 (センター長) 吉田憲司 (副館長) 信田敏宏	福岡正太 山本泰則 林 勲男 日高真吾 上羽陽子 伊藤敦規	川瀬 慈 寺村裕史
国際学術交流室		西尾哲夫 (室長) (併) 印東道子 (兼務) 韓 敏 (兼務) 齋藤 晃 (兼務) MATTHEWS, Peter J. (兼務)		

※は特任研究員を示す。

1946年生。【学歴】埼玉大学教養学部卒（1969）、東京都立大学大学院社会科学研究科（社会人類学専攻）修士課程修了（1972）、東京都立大学大学院社会科学研究科（社会人類学専攻）博士課程単位取得満期退学（1975）【職歴】国立民族学博物館第3研究部助手（1975）、国立民族学博物館第1研究部助教授（1986）、神戸大学国際文化学部教授（1993）、神戸大学国際文化学部長（2000）、神戸大学大学院総合人間科学研究科長（2002）、神戸大学附属図書館長（2005）、神戸大学大学院国際文化学研究科教授（2007）、国立民族学博物館館長（2009）【学位】文学博士（東京都立大学 1986）、文学修士（東京都立大学 1972）【専攻・専門】社会人類学、オセアニアの社会と文化、海外移住、伝統政治と民主主義【所属学会】日本文化人類学会、日本オセアニア学会、太平洋諸島学会

【主要業績】

[単著]

須藤健一

2008 『オセアニアの人類学——海外移住、民主化、伝統の政治』東京：風響社。

1989 『母系社会の構造——サンゴ礁の島々の民族誌』東京：紀伊国屋書店。

[編著]

須藤健一編

2012 『グローカリゼーションとオセアニアの人類学』東京：風響社。

【受賞歴】

2010 第2回石川榮吉賞

1985 第16回澁澤賞

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

伝統的航海術における呪術・宗教的世界に関する人類学的研究

・研究の目的、内容

星と波と風をたよりの伝統的航海術とカヌーを駆使して島間を行き来する人びとが今でもミクロネシアのサタワル島とその周辺の島じまに暮らしている。星の出没位置を利用するスターコンパスと西流する海流や北東からの貿易風など自然現象に規則性を見抜いて航海を実践する。乗り物は10m足らずのシングルアウトリガー・カヌー。科学的には不正確な方位と洋上の位置の割り出し技術、そして脆弱な舟による航海は常に危険を伴う。この危険性を除去する主要な方法が呪文と儀礼からなる呪術の力である。サタワルの航海者が航海において依拠してきた呪術的世界を明らかにすることが本年度の研究目的である。

・成果

ミクロネシア・サタワル島の航海者が航海において依拠してきた呪術的世界についての研究を進めると同時に、伝統的航海術に関する研究については、今までの調査結果をもとに講演会などで発表を行った。

◎出版物による業績

[論文]

須藤健一

2017 「心のなかの島——オセアニアの伝統航海術」『獅子ヶ城』（創立120周年記念特集号）61, pp.15-25, 新潟：新潟県立佐渡高等学校生徒会編集部。

[監修]

須藤健一

2017 『それ日本と逆!? 文化のちがひ 習慣のちがひ』東京：学研プラス。

[その他]

須藤健一

2016 「悼む 伊藤幹治さん」『毎日新聞』5月9日朝刊。

2016 「考える舌 みんなく食の民族誌 39 オセアニアの「石蒸し料理」」『京都新聞』5月25日朝刊。

2016 「国立民族学博物館の収蔵資料と今後の活用——挨拶にかえて」伊藤敦規編『伝統知、記憶、情報、

イメージの再収集と共有——民族誌資料を用いた協働カタログ制作の課題と展望』（国立民族学博物館調査報告137）pp.5-10、大阪：国立民族学博物館。

2016 「Brief overview of Minpaku Collection and Foresight: Greetings」伊藤敦規編『伝統知、記憶、情報、イメージの再収集と共有——民族誌資料を用いた協働カタログ制作の課題と展望』（国立民族学博物館調査報告137）pp.11-14、大阪：国立民族学博物館。

2016 「国立民族学博物館の収蔵品⑤ ミクロネシアの外洋航海カヌー」『文部科学通信』399：表紙裏。

2017 「本館展示の新構築とその心——40年ぶりの改変をおえて」『国立民族学博物館研究報告』41(4)：393-450。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年4月3日 「Cultural Anthropology Research and Museology at the National Museum of Ethnology, Japan」東アジア人類学会国際大会、神戸大学

2016年5月14日 「みんなの現在」堺市・国立文化財機構主催、東京シンポジウム2016「文化遺産を考える——文化遺産と博物館」東京国立博物館

2016年10月29日 「沖縄国際海洋博覧会（1978）とオセアニアの文化復興」海洋博公園40周年記念海洋文化シンポジウム「太平洋を越えた人類のグレートジャーニー」第1部、海洋博公園海洋文化館、沖縄

・広報・社会連携活動

2016年4月9日 「みんなの今昔物語」2016年度佐渡高校同窓会関西支部講演会、国立民族学博物館

2016年10月4日 「みんなの展示刷新とその心」神戸市シルバーカレッジ校外学習、国立民族学博物館

2016年10月22日 「心のなかの島——オセアニアの伝統航海術」佐渡高等学校創立120周年記念講演、アミューズメント佐渡

2016年11月1日 「心のなかの島——海を越える知と技」第44回産経適塾講演、産経新聞大阪本社

2016年11月24日 「展示キュレーションの誘惑——新しいオセアニア展示ができるまで」連続講座「みんなのナレッジキャピタル」CAFE Lab. グランフロント大阪ナレッジキャピタル

・みんなのウィークエンド・サロン

2017年3月12日 「新構築展示のこころとかたち」第458回みんなのウィークエンド・サロン研究者と話そう

・館内研修

2016年5月11日 「みんなの今と昔」2016年度民博新任職員講習会、国立民族学博物館

◎調査活動

・海外調査

2016年6月29日～7月8日—アメリカ（アメリカの博物館視察）

2016年7月21日～7月23日—台湾（企画展「台湾原住民族をめぐるイメージ」の事前記者会見出席のため）

2017年2月2日～2月10日—ハワイ（ハワイにおけるトンガ系移住者の動向調査）

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

公益財団法人大阪府文化財センター評議員、公益財団法人大阪ユニセフ協会理事、金沢大学大学院人間社会環境研究科文化資源マネージャー養成プログラムアドバイザー、関西サイエンス・フォーラム理事、京都大学人文科学研究所共同利用・共同研究拠点運営委員、独立行政法人国立美術館 国際美術館評議員、彩都（国際文化公園都市）建設推進協議会特別委員、公益財団法人坂田記念ジャーナリズム振興財団理事、公益財団法人太平洋人材交流センター最高顧問、日本ニュージーランドセンター理事、公益財団法人日本博物館協会参与、NPO法人 パシフィカ・ルネサンス顧問、文化遺産国際協力コンソーシアム運営委員、第25回山片蟠桃賞審査委員、公益財団法人りそなアジア・オセアニア財団助成事業選考委員長

吉田憲司 [よしだ けんじ]——副館長（企画調整担当）、文化資源研究センター教授

1955年生。【学歴】京都大学文学部哲学科美学美術史学専攻卒（1980）、大阪大学大学院文学研究科芸術学専攻博士前期課程修了（1983）、大阪大学大学院文学研究科芸術学専攻博士後期課程単位取得退学（1987）【職歴】ザンビア大学アフリカ研究所共同研究員（1984）、大阪大学文学部助手（1987）、国立民族学博物館助手（1988）、国立民族学博物館助教授（1992）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1993）、国立民族学博物館博物館民族学研究部教

授（2000）、国立民族学博物館文化資源研究センター教授（2004）、国立民族学博物館文化資源研究センター長（2006）、放送大学客員教授（2010）、国立民族学博物館副館長（2015）【学位】学術博士（大阪大学大学院文学研究科 1989）、文学修士（大阪大学大学院文学研究科 1983）【専攻・専門】文化人類学、博物館人類学【所属学会】日本文化人類学会、日本アフリカ学会、民族藝術学会、王立人類学協会（Royal Anthropological Institute イギリス）、アフリカ学会美術協議会（The Arts Council of the African Studies Association アメリカ）

【主要業績】

[単著]

吉田憲司

2014 『宗教の始原を求めて——南部アフリカ聖霊教会の人びと』東京：岩波書店。

1999 『文化の「発見」——驚異の部屋からヴァーチャル・ミュージアムまで』東京：岩波書店。

1992 『仮面の森——アフリカ・チェワ社会における仮面結社、憑霊、邪術』東京：講談社。

【受賞歴】

2004 第1回木村重信民族藝術学会賞

2000 第22回サントリー学芸賞（芸術・文学部門）

1993 日本アフリカ学会研究奨励賞

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

文化の創造・継承と表象に関する博物館人類学的研究

・研究の目的、内容

文化の創造と継承、そしてその表象における博物館・美術館の役割に改めて注目が集まっている。文化の創造と継承の過程をいかに追跡し、いかなる形で自文化と異文化を含む文化の表象に結び付けていくのか。その作業に、博物館・美術館はいかなる形で関与するのか。本研究は、文化の研究と表象の課題を改めて検証し、問題点を洗い出すとともに、その将来に向けての新たな可能性を実践的に考究することを目的としている。

本年度は、科学研究費補助金・基盤研究（A）「アフリカにおける文化遺産の継承と集団のアイデンティティ形成に関する人類学的研究」の一環として、南部アフリカ、チェワ社会における文化の伝統とその創造的継承の実態についての現地調査を継続し、とくに博物館建設を介した伝統的首長制度の再構築のプロセスを検証する。あわせて、博物館による文化の表象のあり方について、2000年以降の世界の博物館の動向を踏まえて、実践を通じて新たな提言をおこなう。

・成果

南部アフリカ、チェワ社会における文化の伝統とその創造的継承に関する研究について、2016年8月に現地調査を実施した。

1984年の最初の訪問以来、調査を継続してきたチェワ社会の秘密結社の仮面舞踊が、2005年に「人類の無形遺産に関する傑作リスト」（現在のユネスコの無形文化遺産）に記載されたことが契機になり、あらたな現象が生起している。現在、チェワの人びとはザンビア、モザンビーク、マラウイにまたがって居住しているが、ザンビアでおこなわれたチェワの祭りに、2007年、三国の大統領がそれぞれの国のチェワのチーフたちとともに参列した。さらに、祭りのなかで、ザンビアのチェワの王ガワ・ウンディに対して、それぞれの国のチェワのチーフが、自分の地域のニャウの仮面舞踊を奉納した。この祭りは、もともとはザンビアに暮らすチェワが「伝統を始めよう」というスローガンのもとに、民族全体の祭りとして1984年に始めたものである。これまで、モザンビークに住むチェワもマラウイのチェワも、それぞれにチーフをいただき、ザンビアにおけるチェワの王がチェワという民族全体の王であるという認識をもってはなかった。しかし、このできごとを契機に、チェワの人びとの思いに変化が起き始めている。今回の滞在中、マラウイやモザンビークからザンビアの村への来訪者たちに、ザンビアのチェワの王を、3国のチェワ全体の王とみなすかどうかについてインタビューをおこなったが、その大半が「チェワという民族集団全体の王とみなす」という肯定的な回答をしている。20年前には、ありえなかった回答である。今後も継続的に、この集団のアイデンティティの変化のプロセスを追いかけていくことになる。

また、博物館による文化の表象のあり方については、民博と国立新美術館の共同企画による特別展「イメー

ジの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる」を、瀬戸内国際芸術祭2016の連携企画として香川県高松の香川県立ミュージアムで巡回開催した（会期：2016年10月～11月）。同展の開催に当たっては、同時に、瀬戸内海歴史民俗資料館（香川県立ミュージアム分館）の収蔵する民俗資料を用いて、東京藝術大学の教員が制作したインスタレーションの展示「れきみん×東京藝大セレクト展『瀬戸内のくらし——ハレとケ』」が開催され、いわば、博物館の所蔵資料と美術館の所蔵作品の区別を乗り越えたふたつの展示の連携が実現した。後者の「ハレとケ」展が、前者、すなわち民博の「イメージの力」展の試みに触発されたものであることは言うまでもない。報告者がこれまで継続してきた、博物館と美術館の間にある区別を問い直し、その問題点と可能性を検証するという作業が、国内の文化的・芸術的諸実践に確かな影響を及ぼしつつあることが確認された事例とよい。

◎出版物による業績

[論文]

Yoshida, K.

2016 Masks and Secrecy among the Chewa. *African masks and Masquerades Part One: A Batch from African Arts*, pp.840-1211. Cambridge: The MIT Press (Kindle Edition).

2016 Museums and Community Development: With Special Reference to Zambian Cases. In N. Sonoda (ed.) *New Horizons for Asian Museums and Museology*, pp.187-200. Singapore: Springer.

[その他]

吉田憲司

2016 「生き続ける仮面」『EPTA』（特集 仮面大国）Vol.76, pp.17-22, 東京：ヒノキ新薬株式会社。

2016 「考える舌42 ザンビアの仮面舞踊 飢饉に備え果実の重み共有」『京都新聞』6月15日朝刊。

2016 「この一年 関西の文芸・論壇 & 書店 民博常設展示刷新が終了」『毎日新聞』12月13日朝刊。

2016 「海外博物館の担い手育成 研修通じ文化支援」『中日新聞』12月21日朝刊。

2016 「国立民族学博物館の収蔵品8 武器をアートに」『文部科学 教育通信』402：裏表紙。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年5月4日～5月9日 Chair 'Ethnographic Museums: Approaches and perspectives in the contemporaneity' IUAES "The International union of Anthropological and ethnological Sciences) Inter-Congress 2016" Dubrovnik, Croatia.

2016年5月28日 「災害ミュージアムの役割と可能性」日本文化人類学会第50回研究大会、南山大学名古屋キャンパス

2016年6月13日 「写真が開く地域研究」京都大学稲盛財団記念館

・共同研究会での報告

2017年2月13日 「武器をアートに——モザンビーク内戦後の平和構築」『地域文化の継承と創造』国立民族学博物館

・研究講演

2016年10月8日 「イメージの力をさぐる——国立民族学博物館コレクションから」香川県立ミュージアム

・展示

2016年10月8日～11月27日 「イメージの力 国立民族学博物館コレクションにさぐる」香川県立ミュージアム

・広報・社会連携活動

2016年6月22日 「仮面の世界をさぐる——アフリカとミュージアムの往還」カレッジシアター「地球探検紀行」あべのハルカス近鉄本店

2016年12月10日 「遠山霜月祭見学——神と人が集う夜」国立民族学博物館友の会第74回体験セミナー（千里文化財団）、長野県飯田市

◎調査活動

・国内調査

2016年4月23日～4月24日—お茶の水女子大学（民族芸術学会理事会・大会参加による、文化遺産の表象に関する比較研究）

2016年6月4日～6月5日—日本大学生物資源科学部（日本アフリカ学会学術大会参加による、アフリカの文化遺産の表象に関する比較研究）

2016年6月8日—東京（平成28年度全国博物館長会議へ出席）

- 2016年6月18日—浦浜民俗芸能伝承館（復興支援現地公開フォーラム準備委員会に出席）
- 2016年9月28日～9月30日—お茶の水女子大学（情報メディアとしての博物館のあり方に関する調査・研究）
- 2016年10月1日～10月4日—香川県立ミュージアム（巡回展「イメージの力」の設営と民族造形の受容に関する調査）
- 2016年10月6日～10月8日—香川県立ミュージアム（巡回展「イメージの力」の設営と民族造形の受容に関する調査）
- 2016年10月22日～10月23日—野外民族博物館リトルワールド（民族芸術学会第143回研究例会参加、南アフリカ・ンデベレの壁絵文化の表象に関する研究）
- 2016年10月29日—戸隠神社中社（戸隠神社蔵のアフリカ象の象牙製「通天牙笏」の調査）
- 2016年10月30日—信州大学（同上調査結果の分析と、次年度ガーナでの科研調査計画の打ち合わせ）
- 2016年11月10日—中部大学高等学術研究所（地域研究画像デジタルライブラリにかかわる資料調査）
- 2016年11月11日—片倉もところ記念沙漠文化財団（地域研究画像デジタルライブラリにかかわる資料調査）
- 2016年11月17日～11月18日—群馬県立歴史博物館（第64回全国博物館大会「博物館と地域をつなぐ」に出席）
- 2016年11月27日～11月28日—香川県立ミュージアム（巡回展「イメージの力」の設営と民族造形の受容に関する調査）
- 2016年12月18日—神奈川県立近代美術館・葉山館（アフリカ美術の創造と表象に関する資料調査）
- 2017年1月26日～1月27日—一般財団法人片倉もところ記念沙漠文化財団（地域研究画像デジタルライブラリーに関する資料調査）
- 2017年2月16日～2月20日—沖縄県立芸術大学（民族藝述の受容と表象に関する動向調査）
- 2017年3月11日～3月12日—長崎歴史文化博物館（シーボルト収集の日本関連コレクションの調査）
- 2017年3月25日～3月26日—石川県立歴史博物館（巡回展開催による博物館ネットワーク構築にむけての現地調査）
- 2017年3月3日～3月4日—戸隠神社中社（戸隠神社蔵のアフリカ象の象牙製「通天牙笏」の調査）
- 2017年3月5日—信州大学教育学部（同上調査結果の分析と、次年度ガーナでの科研調査計画の打ち合わせ）
- ・海外調査
- 2016年5月4日～5月13日—クロアチア（IUAES（国際人類学民族学科学連合）2016中間会議（博物館・文化遺産委員会の組織運営）に参加及びクロアチア国内博物館とのネットワーク構築・関連資料調査）
- 2016年7月1日～7月11日—イタリア（ICOM（国際博物館会議）ミラノ大会参加による世界の博物館とのネットワーク形成及びフィレンツェ、ピサにおける博物館を介した世界文化遺産管理に関する実態調査）
- 2016年8月3日～9月2日—ザンビア（ザンビアにおける文化遺産の継承と集団のアイデンティティ形成についての調査）
- 2017年1月5日～1月9日—ドイツ（ドイツ国内の民族学博物館とのネットワーク形成と、所蔵資料調査）
- 2017年1月9日～1月16日—イギリス（イギリスにおいて開催された日本古美術展にみる日本観に関する基礎的研究）

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（5人）

◎社会活動・館外活動等

・他の機関から委嘱された委員など

文化遺産国際協力コンソーシアム運営委員会運営委員

・非常勤講師

放送大学「博物館概論（11）」

◎学会の開催

2016年11月13日 国立民族学博物館主催「郷土芸能復興支援メッセ」大船渡市立三陸公民館

西尾哲夫 [にしお てつお] ————— 副館長（研究・国際交流担当）、研究戦略センター教授

1958年生。【学歴】大阪外国語大学外国語学部アラビア語科卒（1981）、京都大学大学院文学研究科修士課程言語学専攻修了（1984）、京都大学大学院文学研究科博士後期課程言語学専攻満期退学（1987）【職歴】東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助手（1989）、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教授（1994）、国立民族学博物館第2研究部助教授（1996）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（1998）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1998）、国立民族学博物館研究戦略センター助教授（2004）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2006）、国立民族学博物館民族文化研究部長（2008）、国立民族学博物館研究戦略センター長（2011）、国立民族学博物館副館長（2012）、国立民族学博物館民族社会研究部長（2015）、国立民族学博物館副館長（2016）【学位】文学博士（京都大学大学院文学研究科 2005）、言語学修士（京都大学大学院文学研究科 1984）【専攻・専門】言語学・アラブ研究 1）アラブ遊牧民の言語人類学的研究、2）アラビアン・ナイトをめぐる比較文明的的研究【所属学会】日本言語学会、日本中東学会、日本オリエント学会

【主要業績】

[単著]

西尾哲夫

- 2013 『ヴェニスの商人の異人論——人肉—ポンドと他者認識の民族学』東京：みすず書房。
- 2011 『世界史の中のアラビアンナイト』（NHK ブックス）東京：NHK 出版。
- 2007 『アラビアンナイト——文明のはざまに生まれた物語』東京：岩波書店。

【受賞歴】

- 2011 第28回田邊尚雄賞（東洋音楽学会）
- 1992 オリエンツ学会奨励賞
- 1992 新村出記念財団研究助成賞
- 1992 流沙海西奨学会賞

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

アラブ世界の言語社会的位相と文学伝統の変容

・研究の目的、内容

2010年、エジプト検察当局は、イスラーム系弁護士団体による「アラビアンナイト発禁処分申し立て」を「古くから読まれており芸術家にも影響を与えてきた」という理由で却下した。近世エジプトでは、都市部中流層の台頭などによる中間アラビア語の誕生にともない、中世シリアの伝承物語集に民間説話が付加されて現在のアラビアンナイトが成立した。この過程ではキリスト教徒も関与しており、挿絵入りエジプト系写本が新たに発見された。近世エジプト系写本の物語および言語分析を通し、相反する価値観が併存してきた理由ならびに異文化交流による成立過程を解明する。また、中間アラビア語の発生と伝播を通じて顕著にみられるアラブ世界に特徴的な言語社会的位相を分析し、フェイスブック革命に代表される社会変動メカニズムを解明する。

・成果

- ①著書として、*Complete Texts of Umm Kulthūm's Lyrics*（現代中東地域研究民博拠点、2017）を刊行した。
- ②共編著として、『中東世界の音楽文化——うまれかわる伝統』（水野信男と共編著、スタイルノート、2016）を刊行した。また同書中の論文「ベリーダンサーは何を表現しようとしているのか？——舞踊における意味の深みへ」では、中東世界の民衆文化について社会的位相の観点から考察した。
- ③研究発表として、人間文化研究機構が包括的学術協定を締結しているフランス社会科学高等研究院（EHESS）とネットワーク型基幹研究プロジェクト「現代中東地域研究推進事業」との共催による国際シンポジウム「La culture populaire au Moyen Orient: Approches franco-japonaises croisées」（パリで平成29年3月27～28日に実施）にて、L'Histoire de Sindbad le Marin est-elle de la littérature populaire?: Une nouvelle démarche entre tradition littéraire et culture populaire au Moyen Orientと題して口頭発表をした。
- ④一般向けの研究広報として、みんなくウィークエンド・サロン、現代中東地域研究推進事業設置関連の企画による民博友の会講演会ならびに東京講演会で講演した。大阪府高齢者大学校や産経新聞「カレッジシアター、

地球探検紀行」で講演した。聖教新聞文化欄、毎日小学生新聞、朝日小学生新聞で中東文化の紹介をした。『名著により世界史120』（山川出版社、2016）に「千夜一夜物語」の小論を寄稿した。

⑤科学研究費補助金・基盤研究（A）「アラブ世界の都市部中流層文化とアラビアンナイト——エジプト系伝承形成の謎を解く」（代表・西尾哲夫）による国内調査ならびに文献調査をおこなった。

◎出版物による業績

[単著]

Nishio, T. and N. Mizuno

2017 *Complete Texts of Umm Kulthūm's Lyrics* (Resources for Modern Middle Studies 1). Osaka: Center for Modern Middle East Studies, National Museum of Ethnology. (国立民族学博物館・現代中東地域研究拠点)。

[編著]

西尾哲夫・水野信男編

2016 『中東世界の音楽文化——うまれかわる伝統』府中：スタイルノート。[書評有：『音楽の友』（2016年12月号）、『図書新聞』（2017年1月）、『東洋音楽研究』（第82号、2017年）]

[論文]

西尾哲夫

2016 「ベリーダンサーは何を表現しようとしているのか？——舞踊における意味の深みへ」西尾哲夫・水野信男編『中東世界の音楽文化——うまれかわる伝統』pp.74-95, 府中：スタイルノート。

[その他]

西尾哲夫

2016 「ネフェルティティの墓 エジプト美女列伝第2回」『ベリーダンス・ジャパン』36：100-101。

2016 「世界の文字を集めた中西亮」（文化欄）『聖教新聞』5月11日。

2016 「終わりのない物語——アラビアンナイトの世界」新国立劇場バレエ公演『アラジン』（公演パンフレット）pp.26-27。

2016 「みんなく世界の旅 エジプト① 近代化すすむ砂漠の暮らし」『毎日小学生新聞』7月2日。

2016 「みんなく世界の旅 エジプト② コーヒーでお客さまをおもてなし」『毎日小学生新聞』7月9日。

2016 「みんなく世界の旅 エジプト③ 恵みの木 ナツメヤシ」『毎日小学生新聞』7月16日。

2016 「みんなく世界の旅 エジプト④ 1000年前から伝わる物語集」『毎日小学生新聞』7月23日。

2016 「ハトシェプスト女王の船団 エジプト美女列伝第3回」『ベリーダンス・ジャパン』37：100-101。

2016 「新たな民博の研究に向けて」（池谷和信、野林厚志と共著）『民博通信』154：4-9。

2016 「先住民族を知ろう⑤ コプト」『朝日小学生新聞』10月10日。

2016 「愛と美の王妃、ネフェルタリ エジプト美女列伝第4回」『ベリーダンス・ジャパン』38：92-93。

2016 「中東のおとぎ話 千夜一夜物語」池田嘉郎・上野慎也・村上 衛・森本一夫編『名著で読む世界史120』pp.135-137, 東京：山川出版社。

2017 「キスワ 国立民族学博物館の収藏品⑨」『文部科学教育通信』403：2。

2017 「お茶を飲む 紅茶と緑茶」野林厚志監修『日本と世界のくらし どこが同じ？ どこがちがう——教科書に出てくる「くらしの中の和と洋」食』pp.26-29, 東京：汐文社。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2017年3月27日～28日 「L'Histoire de *Sindbad le Marin* est-elle de la littérature populaire?: Une nouvelle démarche entre tradition littéraire et culture populaire au Moyen Orient」国際シンポジウム『La culture populaire au Moyen Orient: Approches franco-japonaises croisées』人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「現代中東地域研究推進事業」、フランス社会科学高等研究院（EHESS）主催、フランス社会科学高等研究院（EHESS）、パリ

・広報・社会連携活動

2016年5月25日 「言葉から文化を読む——アラビアンナイトの言語世界」カレッジシアター「地球探検紀行」あべのハルカス近鉄本店

2016年6月4日 「シンドバード航海記の成立の謎を追って——中東地域の民衆文化研究への新視点」第455回国立民族学博物館友の会講演会（現代中東地域研究推進事業関連）国立民族学博物館

2016年10月15日 「言葉から文化を考える——『アラブ的思考様式』再考」第461回みんなくゼミナール、国立

民族学博物館

2016年11月11日 「アラブ・イスラーム社会の民衆文化——アラビアンナイトからみたイスラームの世界観」大阪高齢者大学「世界の文化に親しむ科」大阪府社会福祉会館

2016年11月25日 「アラブ・イスラーム社会の民衆文化——アラブ遊牧民（ベドウィン）の生活世界」大阪高齢者大学「世界の文化に親しむ科」大阪府社会福祉会館

2017年2月25日 「異文化が交差する物語——アラビアンナイトからのぞく中東世界」第117回国立民族学博物館友の会東京講演会、モンベル御徒町支店4Fサロン

・みんぱくウィークエンド・サロン

2016年5月8日 「グローバル化の中のアラビア語と中東地域の人びと」第424回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費助成事業（基盤研究（A））「アラブ世界の都市部中流層文化とアラビアンナイト——エジプト系伝承形成の謎を解く」研究代表者、科学研究費助成事業（基盤研究（B・特設分野））「中東地域における民衆文化の資源化と公共的コミュニケーション空間の再グローバル化」研究代表者、科学研究費助成事業（新学術領域研究（研究領域提案型）『学術研究支援基盤形成』）「地域研究に関する学術写真・動画資料情報の統合と高度化」研究分担者

◎社会活動・館外活動等

- ・他の機関から委嘱された委員など

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所運営委員、国立大学教育評価委員会専門委員

- ・非常勤講師

京都大学文学部「アラブ語」

民族社会研究部

園田直子 [そのだ なおこ] ————— 部長（併）教授

【学歴】 パリ第1大学文学部卒（1980）、パリ第1大学科学技術修士課程修了（1982）、エコール・ド・ルーブル卒（1983）、パリ第1大学博士課程修了（1987）**【職歴】** フランス博物館科学研究所研究員（1987）、国立美術館絵画修復研究所（フランス）研究員（1989）、国立歴史民俗博物館助手（1991）、国立民族学博物館第5研究部助手（1993）、国立民族学博物館第5研究部助教授（1997）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助教授（1998）、総合研究大学院大学文化科学研究科兼任（1999）、国立民族学博物館文化資源研究センター助教授（2004）、国立民族学博物館文化資源研究センター教授（2007）、国立民族学博物館情報管理施設長（2009）、館長補佐（2010）、国立民族学博物館民族社会研究部長（2016）**【学位】** Doctorat de 3ème cycle (Histoire de l'art) 博士（美術史）(Université de Paris I, 1987)、Maîtrise des Sciences et Techniques (Conservation et restauration des oeuvres d'art, des sites et objets archéologiques et ethnologiques) 科学技術修士 (Université de Paris I, 1982) **【専攻・専門】** 保存科学 **【所属学会】** ICOM (国際博物館会議)、IIC (国際文化財保存学会)、文化財保存修復学会、IIC-Japan (国際文化財保存学会日本支部)

【主要業績】

[編著]

Sonoda, N. (ed.)

2016 *New Horizons for Asian Museums and Museology*. Singapore: Springer.

園田直子編

2010 『紙と本の保存科学（第2版）』東京：岩田書院。

[学位論文]

Sonoda, N.

1987 *Identification des matériaux synthétiques dans les peintures fines pour artistes par pyrolyse couplée*

avec la chromatographie en phase gazeuse. Application à l'étude de quelques tableaux d'art contemporain, Thèse de Doctorat de 3ème cycle, Université de Paris I, Panthéon-Sorbonne.

【受賞歴】

2010 文化財保存修復学会第4回業績賞

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

大型民族資料を対象とした環境に「やさしい」殺虫処理法の使い分け ③

・研究の目的、内容

国立民族学博物館では、民族資料の防虫・殺虫処理法を選択するにあたっては、ひと、資料、環境に配慮してきた。2004年度以降は、海外からの新着資料には化学薬剤を用いた殺虫・殺カビ処理を行い、国内で加害された資料に関しては化学薬剤を用いない手法として二酸化炭素処理を中心に、高温処理や低温処理、あるいは低酸素濃度処理を必要に応じて併用している。この方針に沿いながら、2016年度は、高温処理の殺虫条件精査と、虫害にあいやすい材質でできた資料の低酸素濃度環境下での保管システムの基礎実験に取り組む。

・成果

高温処理においては、日本の気候条件下で太陽光を利用した手法を確立することを目的にしている。具体的には、恒温恒湿槽の中で処理温度と処理時間を変えながら、100%の殺虫効果が得られるよう条件を絞り込む実験が進行中である。材質的に虫害にあいやすい資料を安定した状態で保管する手法としては、事例としてアシ舟を選択した。アシ舟を低酸素濃度環境下で密封保管したところ、空調制御のない収蔵施設内でも現在まで虫菌等の発生はなく、安定した状態にある。さらに経過観察を続け、長期的視点での効果を検証する。

本館の殺虫処理方針とその実践、具体的な総合的有害生物管理（IPM）の活動について、国内においては文化財保存修復学会と九州国立博物館IPMセミナー、国外ではパリ国際IPMコンファレンス（3rd International conference IPM 2016）と国際文化財保存学会（IIC, International Institute for Conservation of Historic and Artistic Works）ロスアンゼレス大会、それぞれで成果発表をおこなった。

◎出版物による業績

[編著]

Sonoda, N. (ed.)

2016 *New Horizons for Asian Museums and Museology*. Singapore: Springer. [査読有]

[論文]

Sonoda, N.

2016 Introduction: Twenty-Year of International Cooperation for Museums and Museology. In N. Sonoda (ed.) *New Horizons for Asian Museums and Museology*, pp.1-15. Singapore: Springer. [査読有]

2016 Managing and Analyzing Museum Environmental Data. In N. Sonoda (ed.) *New Horizons for Asian Museums and Museology*, pp.97-109. Singapore: Springer. [査読有]

[その他]

岡山隆之・門屋智恵美・関正純・殿山真央・園田直子

2016 「セルロースナノファイバーコーティングによる劣化紙の強化処理」『文化財保存修復学会第38回大会於神奈川研究発表要旨集』 pp.110-111。[査読有]

殿山真央・関正純・園田直子・木村優季・岡山隆之

2016 「セルロースナノファイバーを用いたエレクトロンスピニング法による紙資料の強化処理」『文化財保存修復学会第38回大会於神奈川研究発表要旨集』 pp.112-113。[査読有]

園田直子・日高真吾・末森薫・村田忠繁・奥村泰之・河村友佳子・橋本沙知・和高智美

2016 「国立民族学博物館における展示照明のLED化——民族資料の展示を想定した照明実験」『文化財保存修復学会第38回大会於神奈川研究発表要旨集』 pp.114-115。[査読有]

日高真吾・園田直子・末森薫・西澤昌樹・松田万緒・河村友佳子・橋本沙知・和高智美・木川りか・川越和四

2016 「太陽光を利用した高温処理システム開発——殺虫条件を満たすための処理空間の創出を目指した試験について」『文化財保存修復学会第38回大会於神奈川研究発表要旨集』 pp.134-135。[査読有]

園田直子

- 2016 「18. 民俗・民族資料」公益財団法人日本博物館協会編『改訂版 博物館資料取扱いガイドブック』pp.197-209, 東京：日本博物館協会。
- 2016 「対談特集 国立民族学博物館のIPMの歩みと課題」(対談：須藤健一・黒澤真次, 陪席者：園田直子・日高真吾・本田光子・和高智美, 進行役：森田稔・川越和四)『クリンライフ 2016ミュージアムIPM編Ⅳ』pp.2-16, 千葉：環境文化創造研究所。
- 2017 「フランス国立映画センターのアーカイブス」『月刊みんぱく』41(1)：10-11。
- 2017 「絵画をかたちづくるもの——絵具の科学」『平成27年度関西大学文化財保存修復セミナー講義録』関西大学。
- 2017 「書く、伝える——和紙と洋紙」上羽陽子監修『日本と世界の暮らし どこが同じ？どこがちがう？——衣 教科書に出てくる「暮らしの中の和と洋』』pp.34-37, 東京：汐文社。
- 2017 「あかり——日本のあかりとヨーロッパのあかり」日高真吾監修『本と世界の暮らし どこが同じ？どこがちがう？——住 教科書に出てくる「暮らしの中の和と洋』』pp.42-45, 東京：汐文社。
- 2017 「旅・いろいろ地球人 パリの近代建築① モンパルナスタワー」『毎日新聞』1月12日。
- 2017 「旅・いろいろ地球人 パリの近代建築② ポンピドゥー・センター」『毎日新聞』1月19日。
- 2017 「旅・いろいろ地球人 パリの近代建築③ ガラスのピラミッド」『毎日新聞』1月26日。
- 2017 「旅・いろいろ地球人 パリの近代建築④ フィルハーモニー・ド・パリ」『毎日新聞』2月2日。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2016年10月26日 「パリ国際IPMコンファレンス2016報告（世界のIPMの動向）と国立民族学博物館における取り組み」平成28年度九州国立博物館IPMセミナー、九州国立博物館
- 2016年9月12日～9月16日 'Common challenges for ethnographic and modern art collections: Pest control for large and complex objects containing new materials' (ポスター発表) Saving the Now: Crossing Boundaries to Conserve Contemporary Works, IIC 2016 Los Angeles Congress, Millennium Biltmore Hotel Los Angeles, US
- 2016年9月13日～9月15日 '25 years of implementation and development of IPM at the National Museum of Ethnology, Japan' (ポスター発表), IPM 2016, 3rd international IPM Conference in Museums, Archives, Libraries and Historic Buildings, Auditorium du Louvre, France

◎大学院教育

・大学院ゼミでの活動

- 2016年10月4日～10月6日 総合研究大学院大学『資料保存学』、国立民族学博物館

◎調査活動

・海外調査

- 2016年7月1日～7月11日—イタリア (ICOM (国際博物館会議) ミラノ大会参加による世界の博物館とのネットワーク形成及びフィレンツェ、ピサにおける博物館を介した世界文化遺産管理に関する実態調査)
- 2016年9月10日～9月21日—フランス (IPM国際会議 (博物館・アーカイブ・図書館等における総合的有害生物管理) 参加と発表、映像使用の保存に関する実態調査)

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

- 科学研究費補助金 (基盤研究 (B) (一般) (2015-2017)) 「セルロース系ナノファイバーの紙資料保存への応用」(研究代表者)、科学研究費補助金 (基盤研究 (A) (一般) (2015-2019)) 「ネットワーク型博物館学の創成」(研究分担者)、科学研究費補助金 (基盤研究 (B) (一般) (2015-2017)) 「東日本大震災で被災した民俗文化財の保存および活用に関する基礎研究」(研究分担者)、科学研究費補助金 (基盤研究 (B) (一般) (2015-2017)) 「文化人類学における映像制作とアーカイブズ活用の新展開」(研究分担者)

◎社会活動・館外活動等

・他の機関から委嘱された委員など

- 国立歴史民俗博物館資料保存環境検討委員会委員、舞鶴市ユネスコ世界記憶遺産有識者会議委員、知覧特攻平

和会館保存討委員会委員

・他大学の客員、非常勤講師

関西大学国際文化財・文化研究センター2015年度文化財保存修復セミナー「文化財各論・美術工芸品 (I) 絵画」

印東道子 [いんとう みちこ] ————— 教授

【学歴】東京女子大学文理学部史学科卒（1976）、ニュージーランド・オタゴ大学人類学部修士課程修了（1982）、ニュージーランド・オタゴ大学人類学部大学院博士課程修了（1988）【職歴】東京女子大学文理学部史学科研究助手（1976）、北海道東海大学国際文化学部助教授（1988）、北海道東海大学国際文化学部教授（1996）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2000）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任教授（2001）、総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻長（2004）、放送大学客員教授（2006）【学位】Ph.D.（オタゴ大学人類学部大学院博士課程1989）、M.A.（オタゴ大学人類学部大学院修士課程1982）【専攻・専門】オセアニア先史学・民族学 1）オセアニアの土器文化、2）島嶼環境における人間居住【所属学会】日本オセアニア学会、日本人類学会、日本考古学協会、New Zealand Archaeological Society、Indo-Pacific Prehistory Association

【主要業績】

[単著]

印東道子

2014 『南太平洋のサンゴ島を掘る——女性考古学者の謎解き』（フィールドワーク選書4）京都：臨川書店。

2002 『オセアニア 暮らしの考古学』（朝日選書715）東京：朝日新聞社。

[編著]

印東道子編著

2013 『人類の移動誌』京都：臨川書店。

【受賞歴】

2006 大同生命地域研究奨励賞

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

島嶼環境への人類の移動と適応

・研究の目的、内容

1. ファイス島で行ってきた発掘調査と化学分析、骨類分析などの総合報告書の作成を引き続き行う。
2. 科研費基盤研究B「ウォーラシア海域と環太平洋域における人類移住・海洋適応・物質文化の比較研究」（研究代表：小野林太郎）の研究分担者として、主としてインドネシア多島海地域とオセアニアの物質文化の比較研究を行う。

・成果

1. 2016年3月に終了した科研費基盤研究A「東南アジア・オセアニアにおける現生人類の拡散移住史」（研究代表者：松村博文）の成果報告が、オーストラリア国立大学より刊行された
Intoh, M., Colonization and/or Cultural Contacts: A Discussion of the Western Micronesian Case. In, P. Piper, H. Matsumura and D. Bulbeck (eds.), *New Perspectives in Southeast Asian and Pacific Prehistory*, pp.233-241. Canberra: Australian National University Press (March, 2017).
2. 共同研究会「アジア・オセアニアにおける海域ネットワーク社会の人類史的研究：資源利用と物質文化の時空間比較」（研究代表：小野林太郎）の成果を共同編者としてまとめ、単行本として出版する（民博の出版助成を受け、昭和堂出版から2018年3月刊行予定）。
3. 共同研究会「世界のピース」に関連した特別展の図録を執筆。「ウミギクガイは権力の象徴」民博特別展図録『ピース——つなぐ かざる みせる』（池谷和信編）pp.60-61, 国立民族学博物館（2017年3月）。

◎出版物による業績

[論文]

Intoh, M.

2017 Colonization and/or Cultural Contacts: A Discussion of the Western Micronesian Case. In P. Piper, H. Matsumura and D. Bulbeck (eds.) *New Perspectives in Southeast Asian and Pacific Prehistory*, pp.233-241. Canberra: Australian National University Press.

[その他]

印東道子

2017 「ウミギクガイは権力の象徴」『ピース——つなぐ かざる みせる』pp.60-61, 大阪：国立民族学博物館。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・広報・社会連携活動

2016年5月20日 鼎談「フィールドワークの楽しさ」(印東道子・關 雄二・白川千尋)、ジュンク堂書店大阪本店

2016年6月10日 南太平洋のサンゴ島を掘る——女性考古学者の謎解き」千里文化財団×モンベル連続講座『素顔の地球に出会う——人類学者たちのフィールドワーク』モンベル渋谷店

2017年2月22日 「ブタを連れて海を渡った人たち——ミクロネシアの発掘調査から」カレッジシアター「地球探究紀行」あべのハルカス近鉄本店

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員(3人)

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金(基盤研究(B)(海外))「ウォーラシア海域と環太平洋域における人類移住・海洋適応・物質文化の比較研究」(研究代表:小野林太郎)研究分担者

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

日本学術会議第23期連携会員、日本オセアニア学会評議員、日本人類学会評議員、大同生命地域研究賞審査委員、りそなアジア・オセアニア財団環境事業選考委員

韓 敏 [ハン ミン]————— 教授

【学歴】 中国吉林大学外国語学部日本語科卒(1983)、中国吉林大学大学院外国文学・言語研究科日本文学専攻修士課程修了(1986)、東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻修士課程修了(1989)、東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻博士課程修了(1993) **【職歴】** 武蔵大学人文学部非常勤講師(1992)、東京大学教養学部客員研究員(1994)、東洋英和女学院大学社会科学部専任講師(1995)、東洋英和女学院大学社会科学部助教授(1998)、国立民族学博物館民族学研究部助教授(2000)、総合研究大学院大学文化科学研究科助教授併任(2001)、国立民族学博物館民族社会研究部助教授(2004)、国立民族学博物館民族社会研究部教授(2011)、国立民族学博物館民族社会研究部長(2012) **【学位】** 学術博士(文化人類学)(東京大学大学院総合文化研究科1993)、学術修士(文化人類学)(東京大学大学院総合文化研究科1989)、文学修士(中国吉林大学大学院外国文学・言語研究科1986) **【専攻・専門】** 文化人類学、現代中国の漢族研究 **【所属学会】** 日本文化人類学会

【主要業績】

[単著]

韓 敏

2015 『大地の民に学ぶ 激動する故郷、中国』(フィールドワーク選書18) 京都：臨川書店。

Han, M.

2001 *Social Change and Continuity in a Village in Northern Anhui, China: A Response to Revolution and Reform* (Senri Ethnological Studies 58). Osaka: National Museum of Ethnology. 313p.

2007 『回心革命与改革——皖北李村的社会変遷与延續』(陸益龍・徐新玉訳) 南京: 江蘇人民出版社。

[編著]

韓 敏編

2009 『革命の実践と表象——現代中国への人類学的アプローチ』東京: 風響社。

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

中国の社会と文化の再構築に関する人類学的研究

・研究の目的、内容

本研究は、中国における聖地作りと英雄崇拝に焦点を当てることにより、国家と社会の多様な関係性を考察し、文化の連続性と非連続性のメカニズムを明らかにすることを目的とする。

①共同研究「聖地の政治経済学——ユーラシア地域大国における比較研究」(代表者 杉本良男)の分担者として、近代中国の聖地作りのプロセスとメカニズムを明らかにする。

②科研「中国周縁部における歴史の資源化に関する人類学的研究」(代表者 塚田誠之)の分担者として、中国における英雄崇拝の変遷と歴史の資源化の関連性を調べる。

③終了した機関研究「中国における家族・民族・国家のディスコース」の成果を執筆し、代表者として論文集を編集する。

・成果

①共同研究「聖地の政治経済学——ユーラシア地域大国における比較研究」(代表者 杉本良男)の分担者として、近代指導者ゆかりの聖地作りのプロセスとメカニズムについて論文を執筆している。

②2016年8月12～13日、中国食文化研究会と北京師範大学が共催した「第二回国際食文化発展大会」において、「日本における食文化の展示と研究——国立民族学博物館を事例に」を発表した。

③8月17日～21日に科研「中国周縁部における歴史の資源化に関する人類学的研究」(基盤研究A 代表者: 塚田誠之)の分担者として、少数民族であるシボ族の集中している瀋陽市で文献調査と参与観察を行った。具体的にシボ族の聖地とされる家廟、文化行政機関である瀋北新区文教局及び黄家郷八家村の村で聞き取り調査を行い、民族文化の資源化の実態を考察した。

④9月8～14日に浙江省杭州市で、南宋の英雄岳飛の墓と廟に焦点をあて、文献調査のほかに、当廟の運営にあたる行政部門、岳廟管理委員会、岳氏一族、岳飛研究会、観光客などを対象に聞き取り調査をおこなった。その成果の一部をまとめ、10月22日に開催された国際シンポジウムにおいて、「岳飛の社会記憶とその資源化——杭州岳廟を中心に」というタイトルの発表を行った。

⑤岳飛という歴史人物がだれにどのように記憶されてきたのか、すなわち記憶の主体性と記憶の形に注目し、南宋、元、明、清、民国と中華人民共和国の時代変化とともに、岳飛記憶とその意味の変化を分析した論文を執筆し、本館のSERに投稿した。

⑥終了した機関研究「中国における家族・民族・国家のディスコース」の成果について、代表者として論文集『当代人類学理論探索——中国和日本の人類学田野、民族志与文化研究』(韓敏&色音)を編集し、本館のSESとして出版申請を行った。

また、中国文化の連続性・非連続性について、以下の論文も刊行した。

2016a 「出産と死亡——人間と靈魂にかかわる文化的営み」武田雅哉、加部勇一郎、田村容子(編著)『中国文化 55のキーワード』pp.80-83, 京都: ミネルヴァ書房(2016.04.10)

2016b 「面子と交際——名誉と人間関係の原動力」武田雅哉、加部勇一郎、田村容子(編著)『中国文化 55のキーワード』pp.72-75, 京都: ミネルヴァ書房(2016.04.10)

◎出版物による業績

[その他]

韓 敏

2016 「面子と交際——名誉と人間関係の原動力」武田雅哉・加部勇一郎・田村容子編『中国文化55のキーワード』pp.72-75, 東京: ミネルヴァ書房。

2016 「出産と死亡——人間と靈魂にかかわる文化的営み」武田雅哉・加部勇一郎・田村容子編『中国文化55のキーワード』pp.80-83, 東京: ミネルヴァ書房。

2016 「『すごろく』のゲームで東アジアを往来する」『学校と博物館でつくる国際理解教育のワークショップ

ブ』（国立民族学博物館調査報告138）p.143、大阪：国立民族学博物館。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2016年7月24日 「北東アジア研究の可能性——中国シボ族を事例に」人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト地域研究推進事業北東アジア地域研究センター第3回月例会、国立民族学博物館拠点

2016年10月22日 「岳飛の社会記憶とその資源化——杭州岳廟を中心に」国際シンポジウム『中国における歴史の資源化——その現状と課題に関する人類学的分析』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年8月13日 「日本の食文化的展示と研究——以日本国立民族学博物館为例」第2回中国食文化研究会、中国北京前門ホリディ・イン・エクスプレスホテル [招聘基調講演]

・みんぱくウィークエンド・サロン

2016年10月30日 「食からみる中国文化および世界とのつながり」第443回みんぱくウィーク・エンドサロン 研究者と話そう

・広報・社会連携活動

2016年9月28日 「大地の民に学ぶ——激動する故郷、中国」カレッジシアター「地球探究紀行」あべのハルカス近鉄本店

◎調査活動

・海外調査

2016年8月11日～8月12日—中国（第二屆国際食文化発展大会の参加と発表）

2016年8月17日～8月21日—中国（シボ族の歴史と文化の資源化に関する調査）

2016年9月8日～9月14日—中国（中国における歴史の資源化に関する人類学的研究）

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（5人）、副指導教員（1人）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究期間の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト地域研究推進事業北東アジア地域研究（国立民族学博物館拠点）共同研究員、科学研究費助成事業（基盤研究A）「中国周縁部における歴史の資源化に関する人類学的研究」（研究代表者：塚田誠之）研究分担者

・民間の奨学金および助成金からのプロジェクト

公益財団法人三島海雲記念財団平成28年度学術研究奨励金「総合的な『食文化データベース』構築へ向けた基礎的研究」（立命館大学国際食文化研究センター）分担者

◎社会活動・館外活動等

・他の機関から委嘱された委員など

独立行政法人日本学術振興会、特別研究員等審査会専門委員及び国際事業委員会書面審査員・書面評価員

小長谷有紀 [こながや ゆき]—————教授（併）

1957年生。【学歴】京都大学文学部史学科卒（1981）、京都大学大学院文学研究科修士課程修了（1983）、京都大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学（1986）【職歴】京都大学文学部助手（1986）、国立民族学博物館第1研究部助手（1987）、国立民族学博物館第1研究部助教授（1993）、総合研究大学院大学文化科学研究科兼任（1993）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（1998）、国立民族学博物館民族学研究開発センター助教授（2000）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2003）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2004）、総合研究大学院大学地域文化学専攻長（2005）、国立民族学博物館研究戦略センター長（2007）、国立民族学博物館民族社会研究部長（2009–2011）、人間文化研究機構理事（2014）【学位】文学修士（京都大学大学院文学研究科1983）【専攻・専門】人文学【所属学会】国際モンゴル学会、日本文化人類学会、日本モンゴル学会、人文地理学会、生き物文化誌学会

【主要業績】

[単著]

小長谷有紀

2014 『人類学者は草原に育つ——変貌するモンゴルとともに』（フィールドワーク選書9）京都：臨川書店。

[編著]

小長谷有紀・シンジルト・中尾正義編

2005 『中国の環境政策「生態移民」——緑の大地、内モンゴルの砂漠化を防げるか?』京都：昭和堂。

小長谷有紀編

2004 『モンゴルの二十世紀——社会主義を生きた人びとの証言』（中公叢書）東京：中央公論新社。

【受賞歴】

2016 第3回ゆとろぎ賞

2015 モンゴル国科学アカデミー 名誉博士

2013 紫綬褒章

2013 教育研究に関する感謝状ならびに優秀学術研究者徽章（モンゴル国教育文化科学省）

2009 大同生命地域研究奨励賞

2007 モンゴル国ナイラムダルメダル（友好勲章）

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

モンゴルにおける社会主義的近代化

・研究の目的、内容

〈目的〉これまで、「モンゴルにとって20世紀とはなんであったか?」という問いを立てて行ってきた研究を継承しつつ、「社会主義的近代化」とはなんであったか?という問いへと問題を鋭角に転換し、各個研究ではモンゴルおよび中国内モンゴル自治区についての事例研究を目的とする。

〈内容〉社会主義的近代化を体現した当事者たちによるナラティブ（語り）を収集し、それらを多声的に構成して近代化という時空間に関するモノグラフ（民族誌的歴史）を描くことによって、公式的な歴史記述とは異なるテキストをナラティブから構成する。

・成果

1) モンゴルの口述資料について、モンゴル語、邦訳、英訳を見直した。

2) モンゴルの社会主義プロパガンダ・ポスター集の英訳を準備した。

3) ロシア人地理学者 A. シムコフ著作集の続編を準備した。

◎出版物による業績

[編著]

小長谷有紀・鈴木紀・旦匡子編

2016 『ワールドシネマ・スタディーズ——世界の「いま」を映画から考えよう』東京：勉誠出版。

[分担執筆]

小長谷有紀

2016 「オアシスプロジェクト調査記録——砂漠に生きるモンゴル人の水利用を探る」秋道智爾・赤阪憲雄編『人間の営みを探る——フィールド科学入門』pp.66-113, 東京：玉川大学出版部。

2017 「『役に立つ』とはどういうことか?——モンゴルで見つけた『スローサイエンス』の力」国立研究開発法人科学技術振興機構研究開発戦略センター編『科学をめざす君たちへ——変革と越境のための新たな教養』pp.140-162, 東京：国立研究開発法人科学技術振興機構。

[論文]

小長谷有紀・秋山知宏

2017 「緑州項目調査記録——探索生活在大漠里的蒙古族人的水資源利用」『日本当代中国研究』2017(1): 57-79。

[その他]

小長谷有紀

2016 「ポスト移行期モンゴルのゆくえ」『学会会報』920：27-30。

◎映像音響メディアによる業績

- ・国立民族学博物館映像音響資料の制作・監修

小長谷有紀監修

2016 『南シベリアに住むトゥバの人びと』（みんぱく映像民族誌第20集）。

◎口頭発表・展示・その他の業績

- ・みんぱくゼミナール

2016年6月18日 「ポスト移行期モンゴルの文化変容」第457回みんぱくゼミナール

- ・研究講演

2016年6月4日 「ミルクの価値とその伝え方」牛乳の日記念学術フォーラム、東京大学伊藤国際学術研究センター謝恩ホール

- ・広報・社会連携活動

2016年6月25日 みんぱく映画会「モンゴル」

◎上記以外の研究活動

2017年3月1日 千葉大学日本・ユーラシア言語文化コースにてゼミナール

◎社会活動・館外活動等

文部科学省科学技術・学術審議会委員、中央環境審議会自然環境部会臨時委員、日本学術会議連携会員、国立大学法人京都大学経営協議会委員、JRA 馬事文化賞選考委員、三島海雲記念財団学術委員、Jミルク乳の学術連合幹事

塚田誠之 [つかだ しげゆき] ————— 教授

1952年生。【学歴】北海道大学文学部史学科東洋史学専攻卒（1978）、北海道大学大学院文学研究科修士課程東洋史学専攻修了（1980）、北海道大学大学院文学研究科博士後期課程東洋史学専攻単位取得（1987）【職歴】国立民族学博物館第3研究部助手（1988）、国立民族学博物館第2研究部助教授（1993）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1994）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（1998）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2000）、総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻長（2002）、国立民族学博物館先端人類科学研究部教授（2004）、総合研究大学院大学文化科学研究科研究科長（2011）国立民族学博物館民族社会研究部教授（2011）、国立民族学博物館民族文化研究部教授（2012）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2013）、総合研究大学院大学学長特別補佐（2013）【学位】文学博士（北海道大学 2001）、文学修士（北海道大学大学院文学研究科 1980）【専攻・専門】歴史学 中国南部地域（広西・貴州等）のチワン（壮）族をはじめとする諸民族の歴史民族学的研究【所属学会】日本文化人類学会、史学会、宋代史研究会、北海道大学東洋史談話会、北大史学会、漢民族研究学会（中国）、壮学学会（中国）

【主要業績】

[単著]

塚田誠之

2000 『壮族文化史研究——明代以降を中心として』東京：第一書房。

[編著]

塚田誠之編

2016 『民族文化資源とポリティクス——中国南部地域の分析から』東京：風響社。

[論文]

塚田誠之

2016 「壮族の『民族英雄』儂智高に関する研究の動向と問題点」『国立民族学博物館研究報告』40(3)：411-453。

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

中国南部・広西におけるチワン族の歴史の資源化に関する研究

・研究の目的、内容

中国の急速な経済発展にともない、歴史が資源化されている。それは、中華民族の一体性の構築に活用され、観光開発による実利の獲得など多様な目的と形態で進行している。歴史の資源化は、政府・知識人・企業・一般民衆など諸主体が対立、交渉、妥協しあいながら進行している。

本年度は、中国南部・広西におけるチワン族の歴史の資源化を対象として調査研究を進める。まず、チワン族の土着の権力者「土司」に関する史跡が、いかなる主体によってどのように資源化されているのかについて、調査研究を行う。さらに、チワン族の「民族英雄」として扱われている儂智高をめぐる史跡や記念活動の調査を行い、儂智高が誰によってどのように資源化されているのか検討を行う。くわえて、漢族の地域集団「六甲人」の歴史と現状についても調査を行う。外部資金として、科学研究費補助金「中国周縁部における歴史の資源化に関する人類学的研究」（基盤研究A、課題番号15H02615、平成27-29年度）により調査を行う。

・成果

10月22日に公開国際シンポジウム「中国における歴史の資源化——その現状と課題に関する人類学的分析」を開催し、中国において歴史がいかに資源化されているのかについて、政府・知識人・民衆等の諸主体の役割に留意しながら、民族英雄、史跡・景観・文物、記録・記憶・伝承といった問題領域に分けて、研究の最前線から最新の事例に基づいて掘り下げた検討を行い今後の課題を確認した。同シンポジウムは、館長リーダーシップ経費成果公開プログラム、科学研究費補助金「中国周縁部における歴史の資源化に関する人類学的研究」（基盤研究A、課題番号15H02615、平成27-29年度、代表者塚田誠之）、国立民族学博物館共同研究「資源化される『歴史』——中国南部諸民族の分析から」（代表者長谷川清）とのマッチングで行われた。

11月に中国雲南省文山州で、上記科研費による調査を行い、儂智高を記念する祭祀活動に関する情報を収集した。とともに儂智高が村落単位での地域社会の守護神、豊作をもたらす神として、住民のアイデンティティの核心になっていることを把握した。

さらに、6月に広西壮族自治区三江県で、漢族の地域集団「六甲人」の歴史と現状について調査を行い、彼らの一部が移住先でトン族の文化的影響を受容し民族成分の上でトン族になったが、同時に六甲人としての移住史・自己意識を維持していることを把握した。なお、以上のほか、6月15日に中国広西師範大学歴史文化与旅游学院にて招待講演「我的壮族研究——兼論日本壮族研究動向」を行った。

◎出版物による業績

[その他]

Tsukada, S.

2016 Looking Back at my Zhuang Research. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 43 : 1-5.

塚田誠之

2017 「中国の鉄道の今むかし」『月刊みんぱく』41(3) : 10-11。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2016年10月22日 「主旨説明」国際シンポジウム『中国における歴史の資源化——その現状と課題に関する人類学的分析』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年6月15日 招待講演「我的壮族研究——兼論日本壮族研究動向」中国広西師範大学歴史文化与旅游学院

2016年10月24日 廖国一報告「キン族伝統文化の保護及び開発」のコメントーター、第281回北海道大学東洋史談話会、北海道大学人文・社会科学総合教育研究棟

・広報・社会連携活動

2017年1月13日 「チワン（壮）族の暮らしと文化資源」大阪府高齢大学校「世界の文化に親しむ科」、大阪府社会福祉会館

2017年1月20日 「チワン（壮）族とベトナム民族との交流」大阪府高齢大学校「世界の文化に親しむ科」、大阪府社会福祉会館

・研究講演

2017年3月15日 退職記念講演「私の民族研究をふり返って」国立民族学博物館

◎調査活動

・海外調査

2016年6月19日～7月2日—中国（広西におけるチワン族・漢族の歴史・文化の資源化の調査）

2016年11月20日～12月1日—中国（雲南文山州におけるチワン族の歴史・文化の資源化の調査）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金「中国周縁部における歴史の資源化に関する人類学的研究」（基盤研究（A））研究代表者

MATTHEWS, Peter Joseph [マシウス、ピーター・ジョセフ]———教授

1959年生。【学歴】オークランド大学卒（1981）、オークランド大学大学院修士課程修了（1984）、オーストラリア国立大学大学院博士課程修了（1990）【職歴】科学技術庁特別研究員（農水省野菜茶業試験場）（1990）、日本学術振興会特別研究員（京都大学理学部）（1993）、国立民族学博物館第4研究部助手（1995）、国立民族学博物館民族学研究開発センター助手（1998）、国立民族学博物館民族学研究開発センター助教授（1999）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2002）、国立民族学博物館研究戦略センター助教授（2004）、国立民族学博物館民族社会研究部准教授（2008）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2015）【学位】Ph.D.（オーストラリア国立大学 1990）、M. Sc.（オークランド大学 1984）【専攻・専門】先史学、民族植物学【所属学会】Society for Economic Botany, Indo-Pacific Prehistory Association, Society of Writers, Editors and Translators, International Aroid Society, European Association of Science Editors, World Archaeology Congress, Royal Society of New Zealand

【主要業績】

[単著]

Matthews, P. J.

2014 *On the Trail of Taro: An Exploration of Natural and Cultural History* (Senri Ethnological Studies 88). Osaka: National Museum of Ethnology.

[編著]

Spriggs, M., D. Addison and P. J. Matthews (eds.)

2012 *Irrigated Taro (*Colocasia esculenta*) in the Indo-Pacific: Biological, Social and Historical Perspectives* (Senri Ethnological Studies 78). Osaka: National Museum of Ethnology.

[論文]

Ahmed, I, P. J. Matthews, P. J. Biggs, M. Naeem, P. A. McLenachan, and P. J. Lockhart.

2013 Identification of chloroplast genome loci suitable for high-resolution phylogeographic studies of *Colocasia esculenta* (L.) Schott (Araceae) and closely related taxa. *Molecular Ecology Resources* 13(5): 929-937.

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

1. Wild Taro Research Project (Matthews project)
2. Conservation of Traditional Plant Knowledge Among Ethnic Minorities in Marginal Areas, and Assessment of the Impacts of Local and Global Development. Collaborative research project led by Kazuo Watanabe, Tsukuba University.
3. Natural and Cultural History of the Paper Mulberry (*Broussonetia papyrifera*) in Asia and the Pacific (Matthews project).
4. George Brown Collection Info-Forum Project (2014-15). Project leader: Isao Hayashi, National Museum of Ethnology.
5. The 8th World Archaeology Congress, Kyoto, 28th Aug.-2nd Sept. 2016. Art & Archaeology Theme Co-organiser.

・研究の目的、内容

The main focus for 2016 was writing and publishing, further studies of taro and its relatives (Araceae), and participation in the 8th World Archaeology Congress, Kyoto 28th Aug. – 2nd Sept. 2016.

・成果

1. Wild Taro Research Project: Investigation of the natural and cultural history of taro and other edible aroids in Asia and the Pacific.

A new application to JSPS for Kaken B funding was submitted in October 2016. Field samples of *C. formosana* from Taiwan have been accessioned catalogued, and mapped at the Field Sciences Laboratory, after further discussion with co-collector Mr Kun-Chan Tsai.

2. Conservation of Traditional Plant Knowledge.

(a) In collaboration with Tsukuba University, I was able to attend the 1st International Agrobiodiversity Congress, Nov. 6–9, 2016, New Delhi, India, and then join a conference field trip to Kerala, southern India and make further observations on the distribution and uses of wild taro in India.

3. Natural and Cultural History of the Paper Mulberry.

(a) A report on this subject was presented in poster form as part of the exhibition, Garden of Fragments, held at the satellite venue of Ryosokuin Temple, Kenninji, Kyoto (8th World Archaeology Congress, Kyoto, 28th August 28 – 2nd September).

(b) Collaboration with colleagues in Chile and Taiwan resulted in the following journal publication: 2016 Peñailillo, J, G Olivares, X Moncada, C Payacán, C-S Chang, K-F Chung, PJ Matthews, A Seelenfreund, and D Seelenfreund, Sex distribution of paper mulberry (*Broussonetia papyrifera*) in the Pacific. PLoS ONE 11(8) e0161148.

4. George Brown Collection Info-Forum Project.

(a) Further content was developed for the George Brown Collection database at Minpaku, based on information provided by project research visitors, and based on my own study at museums in the United Kingdom, in FY 2015.

(b) The following spoken presentation introduced issues arising from the Project: PJ Matthews, Integrating local plant knowledge into wider knowledge systems: an example of work-in-progress for the George Brown Collection Info-forum Project. Spoken presentation for: Environmental Knowledge and Material Culture (Minpaku/RIHN Pre-workshop), National Museum of Ethnology, Osaka, 14th Feb. 2017.

(c) Correspondence with colleagues involved in Pacific research continued with the aim of developing the research network needed to support development of the Project.

5. The 8th World Archaeology Congress, Kyoto, 28th Aug.-2nd Sept. 2016. As co-organiser for Art & Archaeology Theme of this conference, I was responsible for administration and coordination of 11 academic sessions and the Garden of Fragments exhibition held in Kyoto during the Congress.

Collaboration

For research, writing and conference purposes, collaboration will continue with the following persons.

Dr E. Maribel Agoo, De La Salle University, Taft, Manila.

Dr Nicole Boivin, Research Laboratory for Archaeology & the History of Art, University of Oxford, Oxford.

Dr Ibrar Ahmed, Quaid-i-Azam University, Islamabad.

Dr Kuo-fang Chung, Academia Sinica, Taipei.

Dr John Ertl, Kanazawa University

Dr Ilaria M. Grimaldi, Rome.

Dr Robin Hide, Australian National University, Canberra.

Dr Danny Hunter, Bioversity International, Rome.

Dr Lila Janik, Cambridge University.

Dr Peter Lockhart, Massey University, Palmerston North.

Dr Chun-Lin Long, Minzu University of China, Beijing.

Dr Domingo A. Madulid, De La Salle University, Taft, Manila.

Dr Melanie P. Medecilo, De La Salle University-Dasmariñas, Manila.
 Dr Dilip K. Medhi, Guwahati University, Assam.
 Dr Nguyen Van Dzu, Institute for Ecology and Biological Resources, Hanoi.
 Mr Rhys Richards, Paremata Press, Wellington.
 Ms Aki Sahoko, Illustrator, Osaka.
 Mr Isamu Sakamoto, paper conservator, Tokyo.
 Dr Andrea Seelenfreund, Universidad Academia Humanismo Cristiano Santiago.
 Dr Daniela Seelenfreund, Universidad de Chile, Santiago.
 Dr Glenn Summerhayes, Otago University.
 Mr Danny Tandang, National Museum of the Philippines, Manila.
 Dr Craig Volker, University of Bern.
 Dr Kazuo Watanabe, Tsukuba University.
 Dr Yasuyuki Yoshida, Kanazawa University.

Publication in press:

PJ Matthews "Evolution and domestication of clonal crops" In: D. Hunter et al. (eds) Handbook of Agricultural Biodiversity, Earthscan.

Conference presentations.

PJ Matthews (with Ibrar Ahmed and Nguyen Van Dzu). 'Sympatry of *Colocasia esculenta* (taro) and its wild relatives in Southeast Asia: Implications for a commensal model of domestication For: What is Different About Early Agriculture in the Wet Tropics? (Session), 8th World Archaeology Congress, Kyoto, 28th August - 2nd Sept., 2016 (Talk).

PJ Matthews, 'The cat-tail reed (*Typha latifolia*): a wetland icon of abundance, beauty, and danger?' For: Art and Archaeology (Theme), 8th World Archaeology Congress, Kyoto, 28th August - 2nd Sept., 2016 (Poster).

Public outreach & exhibition

Website creation and administration:

- (1) The Research Cooperative (<http://researchcooperative.org>, an international, open-access social network and meeting place for researchers, students, editors, translators, illustrators and educational publishers).
- (2) "Wild Taro Research Project" (public website for recording progress of the project). The site was transferred to: <https://researchcooperative.org/wild-taro-research-project>
- (3) A new website was created on behalf of the New Zealand Studies Society-Japan: <http://nzstudies.org>
- (4) Exhibition: *Garden of Fragments*, Ryosokuin Temple, Kenninji, Kyoto (8th World Archaeology Congress, Kyoto, 28th August 28 - 2nd September) (Co-organiser with S. Aki and O. Nakamura).

Publications

- 2017 Matthews, PJ, PJ Lockhart and I Ahmed, Phylogeography, ethnobotany, and linguistics: Issues arising from research on the natural and cultural history of taro *Colocasia esculenta* (L) Schott. *Man in India* 97(1): 353-380.
- 2016 Nguyen, VD, PJ Matthews, I Ahmed, CS Nguyen, *Colocasia yunnanensis* (Araceae), a new record for the flora of Vietnam. *The Journal of Japanese Botany* 91: 223-229.
- 2016 Peñailillo, J, G Olivares, X Moncada, C Payacán, C-S Chang, K-F Chung, PJ Matthews, A Seelenfreund, and D Seelenfreund, Sex distribution of paper mulberry (*Broussonetia papyrifera*) in the Pacific. *PLoS ONE* 11(8) e0161148.

◎出版物による業績

[論文]

- Nguyen, V. D., P. J. Matthews, I. Ahmed, C. S. Nguyen, *Colocasia yunnanensis* (Araceae)
 2016 A new record for the flora of Vietnam. *The Journal of Japanese Botany* 91: 223-229.
- Peñailillo, J., G. Olivares, X. Moncada, C. Payacán, C-S Chang, K-F Chung, P. J. Matthews
 2016 Sex distribution of paper mulberry (*Broussonetia papyrifera*) in the Pacific. *PLoS ONE* 11: 8.

Matthews, P. J., P. J. Lockhart and I. Ahmed

2017 Phylogeography, ethnobotany, and linguistics: Issues arising from research on the natural and cultural history of taro *Colocasia esculenta* (L) Schott. *Man in India* 97(1): 353-380.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2017年1月28日 Building a house without walls and roof: archaeological reconstruction from the perspective of plant domestication and crop history. Ethnography of Archaeology (Workshop), National Museum of Ethnology.

2017年2月14日 Integrating local plant knowledge into wider knowledge systems: an example of work-in-progress for the George Brown Collection Info-forum Project. Environmental Knowledge and Material Culture (Minpaku/RIHN Pre-workshop), National Museum of Ethnology.

2017年3月26日 Perception gaps that may explain the status of taro as an 'orphan crop', despite its global distribution and utilization. 《Symposium by the Special Research Project of Minpaku》 Human Relationships with Animals and Plants: Perspectives of Historical Ecology, National Museum of Ethnology.

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年8月28日 (with I. Ahmed and V.D. Nguyen) Sympatry of taro (*Colocasia esculenta*) and its wild relatives in Southeast Asia. 8th World Archaeology Congress, Kyoto.

2016年8月28日 The cat-tail reed (*Typha latifolia*): a wetland icon of abundance, beauty, and danger? 8th World Archaeology Congress, Kyoto.

◎調査活動

・海外調査

2016年11月3日～11月15日—インド (1st International Agrobiodiversity Congressへの参加及び Keralaでの野外調査)

2017年2月28日～3月5日—ベトナム (ベトナムの Institute of Ecology and Biological Resources と民博の間で学術協定を締結するための事前調査)

◎大学院教育

・大学院ゼミでの活動

論文ゼミ「比較技術研究演習 I」

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金 (基盤研究 (A)) 「辺境少数民族地帯での植物利用および伝統知の遺存と地域発展活動や国際経済の影響評価」 (研究代表者: 渡邊和男) 研究分担者

平井京之介 [ひらい きょうのすけ] ————— 教授

【学歴】 東北大学文学部社会学科社会学専攻卒 (1988)、ロンドン大学ユニバーシティ・カレッジ人類学部社会人類学修士課程修了 (1992)、ロンドン大学ロンドン経済政治学院人類学部博士課程修了 (1998) 【職歴】 花王株式会社本社チェーンストア部 (1988)、国立民族学博物館第1研究部助手 (1995)、国立民族学博物館民族文化研究部助手 (1998)、国立民族学博物館民族文化研究部助教授 (2001)、総合研究大学院大学文化科学研究科併任 (2006)、国立民族学博物館研究戦略センター教授 (2013) 【学位】 Ph.D. (ロンドン大学ロンドン経済政治学院人類学部 1998)、M.Sc. (ロンドン大学ユニバーシティ・カレッジ人類学部 1992) 【専攻・専門】 社会人類学 1) 水俣病被害者支援運動の人類学的研究、2) タイのコミュニティ博物館についての人類学的研究 【所属学会】 日本文化人類学会、The Royal Anthropological Institute

【主要業績】

[単著]

平井京之介

2011 『村から工場へ——東南アジア女性の近代化経験』 東京: NTT 出版。

[編著]

平井京之介編

2012 『実践としてのコミュニティ——移動・国家・運動』京都：京都大学学術出版会。

Hirai, K. (ed.)

2015 *Social Movements and the Production of Knowledge: Body, Practice and Society in East Asia* (Senri Ethnological Studies 91). Osaka: National Museum of Ethnology.

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

水俣病支援運動の人類学的研究

・研究の目的、内容

本研究は、人びとが水俣病被害者を支援する運動を通じて新たにコミュニティを形成し、国家や社会との関係をつくりかえようとする過程を、人類学的アプローチを用いて明らかにする試みである。本研究では、熊本県水俣市の水俣病被害者支援NPOをコミュニティという観点から調査研究することによって、1970年代半ばから現在までのあいだに、この運動の活動や組織、関係性、資源と、そこに参加する人びとの志向する社会のイメージがいかに変化してきたか、またその過程において、国家統治や資本主義との関係をどのように変化させてきたかを解明することを目的とする。

・成果

平成25年から27年度にかけて実施した科学研究費助成事業プロジェクト（基盤研究C）「水俣病被害者支援運動のコミュニティに関する人類学的研究」のなかで収集した民族誌的データの整理をするとともに、新たに文献研究を遂行し、成果刊行のための準備を進めた。また、主な調査対象であるNPOの歴史の変容過程を明らかにするための補足調査とともに、新たにリニューアルオープンした水俣市立水俣病資料館の水俣病事件に関する展示について調査研究を実施した。

◎出版物による業績

[論文]

Hirai, K.

2016 Preserving the community: the rise of museum movements in rural Thailand. In S. Tanabe (ed.) *Communities of Potential: Social Assemblages in Thailand and Beyond*, pp.165-184. Chiang Mai: Silkworm Books. [共同研究成果]

[その他]

平井京之介

2016 「水俣病資料館の展示リニューアル」『月刊みんぱく』40(8)：4-5。

2016 「東南アジアの仏教（1）」『毎日小学生新聞』8月27日。

2016 「東南アジアの仏教（2）」『毎日小学生新聞』9月3日。

2016 「東南アジアの仏教（3）」『毎日小学生新聞』9月10日。

2016 「東南アジアの仏教（4）」『毎日小学生新聞』9月17日。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2016年11月25日 コメンテーター、セッション3「地域文化を活用する」国際フォーラム『地域文化の発見、保存、活用』台湾大溪多目的文化体育館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年4月18日 'Storytelling as Political Practice: An Anthropological Study of the Minamata Disease Movement.' Roundtable on Democracy and Social Movements in East Asia, 台湾交通大学

2016年4月20日 'Museum as Sites of Contestation: The Representation of the Minamata Disease Incident.' デパートメントセミナー、台湾交通大学人文社会科学部

・広報・社会連携活動

2016年8月7日 「僕のフィールドワーク論——微笑みの国の工場から」三省堂書店神保町本店

◎調査活動

・国内調査

- 2016年5月25日～5月30日—熊本県水俣市（水俣病被害者支援運動のコミュニティに関する人類学的研究）
2016年9月21日～9月25日—熊本県水俣市（水俣病被害者支援運動のコミュニティに関する人類学的研究）
2017年1月21日～1月22日—熊本県水俣市（水俣病被害者支援運動のコミュニティに関する人類学的研究）
2017年2月21日～2月23日—熊本県熊本市（水俣病被害者支援運動のコミュニティに関する人類学的研究）
2017年3月11日～3月14日—熊本県熊本市（水俣病被害者支援運動のコミュニティに関する人類学的研究）

・海外調査

- 2016年4月16日～4月24日—台湾（国立交通大学においてワークショップ、講演会に参加及び中央研究院民族学研究所において東アジアの社会運動についての人類学的研究）
2016年11月24日～11月27日—台湾（国際フォーラム「地域文化の発見、保存と活用」への参加と発表）

◎上記以外の研究活動

・他の機関から委嘱された委員など

- 「水俣病資料館資料整理等に係る業務・専門家会議委員」（熊本大学文学部）

横山廣子 [よこやま ひろこ] ————— 教授

【学歴】 東京大学教養学部教養学科文化人類学専攻卒（1977）、東京大学大学院社会学研究科修士課程修了（1981）

【職歴】 東京大学教養学部助手（1981）、東洋英和女学院短期大学国際教養科専任講師（1986）、東洋英和女学院大学人文学部社会科学科助教授（1989）、国立民族学博物館第2研究部助教授（1994）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1994）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（1998）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2015）、総合研究大学院大学地域文化学専攻長（2015）【学位】 社会学修士（東京大学大学院社会学研究科 1981）【専攻・専門】 文化人類学 1）雲南省大理白族社会の研究、2）中国における国家とエスニシティに関する研究、3）中国西南部から東南アジア大陸部における民族集団の移動と包摂に関する研究【所属学会】 日本文化人類学会、American Anthropological Association

【主要業績】

[編著]

横山廣子編

- 2004 『少数民族の文化と社会の動態——東アジアからの視点』（国立民族学博物館調査報告50）大阪：国立民族学博物館。
2001 『中国における民族文化の動態と国家をめぐる人類学的研究』（国立民族学博物館調査報告20）大阪：国立民族学博物館。

[共編]

塚田誠之・瀬川昌久・横山廣子編

- 2001 『流動する民族——中国南部の移住とエスニシティ』東京：平凡社。

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

An Anthropological Study on the Dynamics of Culture and Society in East Asia

・研究の目的、内容

中国や日本など東アジアにおいては近年、政治・経済・科学技術・環境の変化などにもともない、人々の生活のあり方が大きく変化してきている。現地調査や民族誌的データに基づき文化や社会がどのように変化し、どのような社会的課題が生じているのかを実証的に明らかにし、それらを比較考察することにより、東アジアの文化と社会の動態を分析・解明する視座を提供する。

・成果

日本の盆行事のような、東アジア地域に広範に見られる夏の死者儀礼について、中国と日本を中心にその歴史的起源や背景に関する研究や関連資料を整理すると同時に、地域事例の比較考察をおこなった。東アジアにおける共通性の基盤として、盂蘭盆経典を根拠とする仏教的思想と儀礼、太陰太陽暦、道教における7月15日の

中元節が相互影響しながら旧暦7月15日の死者儀礼が中国大陸で形成され、周辺に普及した歴史的過程を明らかにした。また、それが東アジア各地の儀礼として継承されていく過程において、それぞれ宗教儀礼のみならず、演劇や娯楽性を備えた多様な展開を見せていることが明らかになった。一般に中国東南部や海外華人地域においては、祖先祭祀と並んで、孤魂の救済の要素の比重が大きいが、漢族の影響を大きく受けた少数民族であるペー族の場合、祖霊の迎えと送りが中心をなす、日本の盆行事に似た様相を示す。以上の研究成果は、2017年3月4日～5日に民博で開催した国際シンポジウム「現代アジアにおけるお盆・中元節・七月の祭り——あの世とこの世をめぐる儀礼——」において「お盆、中元、鬼節、百種——東アジアの7月の儀礼」と題した研究報告で発表した。今後、日本語と中国語で刊行する予定である。

中国文化を継承するムスリムという特徴を有する回族について、雲南省の大理盆地において取材した映像素材をもとに、民博ビデオテーク番組、「新築祝い 雲南省回族の家屋落成式典」(24分16秒)、「回族の村の生活 雲南省大理盆地のイスラム教徒」(12分8秒)、「アラビア書道家 雲南省大理市南五里橋村の回族」(27分28秒)の3本を編集し、完成させた。

◎出版物による業績

[その他]

横山廣子

2016 「フィールドワーク①身体化された文化」『毎日新聞』11月10日。

2016 「フィールドワーク②調査への身支度」『毎日新聞』11月17日。

2016 「フィールドワーク③参与観察」『毎日新聞』11月24日。

2016 「フィールドワーク④当惑は発見の母」『毎日新聞』12月1日。

2016 「他人のための行動、当たり前」(先住民族を知ろう8)『朝日小学生新聞』11月20日。

◎映像音響メディアによる業績

・国立民族学博物館映像音響資料の制作・監修

ビデオテーク番組

2017 『新築祝い 雲南省回族の家屋落成式典』国立民族学博物館海外映像音響資料(24分16秒、2012年撮影、2017年製作)

2017 『回族の村の生活 雲南省大理盆地のイスラム教徒』国立民族学博物館海外映像音響資料(12分8秒、2010、2012年撮影、2016年製作)

2017 『アラビア書道家 雲南省大理市南五里橋村の回族』国立民族学博物館海外映像音響資料(27分28秒、2012年撮影、2016年製作)

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウム

2016年10月22日 「総合討論コメント」国際シンポジウム「中国における歴史の資源化——その現状と課題に関する人類学的分析」国立民族学博物館

2017年3月4日 「お盆、中元、鬼節、百種——東アジアの7月の儀礼」『現代アジアにおけるお盆・中元節・七月の祭り——あの世とこの世をめぐる儀礼』国立民族学博物館

◎大学院教育

地域文化学専攻長

・指導教員

主任指導教員(2人)、副指導教員(1人)

◎社会活動・館外活動等

・他の機関から委嘱された委員など

日本文化人類学会「学会賞検討委員会」委員、総合研究大学院大学全学入試委員会委員

宇田川妙子 [うだがわ たえこ] ————— 准教授

1960年生。【学歴】東京大学教養学部教養学科第一卒(1982)、東京大学大学院社会学研究科修士課程修了(1984)、東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得退(1990)【職歴】東京大学教養学部助手(1990)、中部大学国際関係学部講師(1992)、中部大学国際関係学部助教授(1995)、国立民族学博物館第3研究部併任助教(1997)、金沢大学文学部助教授(1998)、国立民族学博物館先端民族学研究部併任助教授(1998)、国立民族学博物館民族文化研究部助教授(2002)、総合研究大学院大学文化科学研究科併任(2002)、国立民族学博物館先端人類科学研究部助教

授（2004）、国立民族学博物館民族社会研究部准教授（2010）【学位】社会学修士（東京大学大学院社会学研究科1984）【専攻・専門】文化人類学 イタリアおよびヨーロッパ地域の人類学的研究・ジェンダーとセクシャリティ研究・ヨーロッパ近代をめぐる問題群【所属学会】日本文化人類学会、日本女性学会

【主要業績】

[単著]

宇田川妙子

2015 『城壁内からみるイタリア——ジェンダーを問い直す』京都：臨川書店。

[共編]

宇田川妙子、中谷文美編

2007 『ジェンダー人類学を読む——地域別・テーマ別基本文献レビュー』京都：世界思想社。

2016 『仕事の人類学——労働中心主義の向こうへ』京都：世界思想社。

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

公共性と親密性の再検討と再編

・研究の目的、内容

本研究は、近年さらなる注目を浴びている公共性と親密性（私性）という概念を、理論的に再検討していくことによって、生産的な意味での再編・陶冶につなげていくことを目的とする。具体的には、まずは、これまでの社会科学理論等における両概念の変遷や背景、多様性などを探っていく一方で、個別事例としてはイタリア社会を取り上げて、公共性と親密性という概念・構図が孕む限界や可能性を考察しながら、この概念図式のさらなる再編を試みていくつもりである。今年度は、昨年度に引き続き、特に地域性との関わりから考察をしていく。

・成果

地域性の問題については、すでに科学研究費基盤研究C「現代イタリア社会におけるローカルティに関する文化人類学的研究」（2014-2017）を取得し、本年度はその3年目として、昨年度同様に9月後半から約3週間ローマ近郊での現地調査を行い、地域性をめぐる人々の意識の変容に関する具体的な資料収集をおこなった。

また、イタリアの地域性を考えるためには、食という観点も有効である。そのため今年度は、その出発点として、イタリアにおける食研究の動向調査を始めると同時に、自身のこれまでの調査地における知見をまとめ、論点整理を行った。その成果の一端は、以下の発表および報告書で公表されている。

〈研究発表〉

2016年6月25日 関西学院大学EU情報センター主催 ミニ・シンポジウム「食文化・食生活の日欧比較」、
「イタリアにおける食の多様な意味」（大阪茶屋町アブローズ）。

〈報告書〉

2016年 「イタリアにおける食の多様な意味」、『関西学院大学EU情報センター（EUi）主催 ミニ・シンポジウム 食文化・食生活の日欧比較 報告書』、5-17頁、http://www.kwansei.ac.jp/i_industrial/attached/0000103294.pdf（最終アクセス2016年11月4日）

◎出版物による業績

[編著]

信田敏宏・白川千尋・宇田川妙子編

2017 『グローバル支援の人類学——変貌するNGO・市民活動の現場から』京都：昭和堂。[査読有、共同研究成果]

[論文]

宇田川妙子

2017 「市場を変える、地域から変える——イタリアの社会的協同組合の模索」信田敏宏・白川千尋・宇田川妙子編『グローバル支援の人類学——変貌するNGO・市民活動の現場から』pp.271-292, 京都：昭和堂。[査読有、共同研究成果]

[その他]

宇田川妙子

- 2016 「海と大陸——移民とは誰のことか」小長谷有紀ほか編『ワールドシネマ・スタディーズ』pp.229-236, 東京：勉誠出版。
- 2016 「人生ここにあり！——イタリアの社会的協同組合という挑戦」小長谷有紀ほか編『ワールドシネマ・スタディーズ』pp.237-244, 東京：勉誠出版。
- 2016 「バルという名のサロン——イタリアの喫茶店」『Vesta』103：20-21, 東京：味の素の文化センター。
- 2016 「ニョッキ」『月刊みんぱく』40(7)：14-15。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機構の連携研究会での報告

2017年3月5日 「イタリアの『地産地消』——食のローカリティを問い直す」人間文化研究機構基幹研究プロジェクト民博ユニット「文明社会における食の布置」成果公開一般講演会『人間と食との関係をとらえなおす』国立民族学博物館

・共同研究会での報告

2016年12月17日 「サブスタンスのリアリティ？——サブスタンス概念の有効性を検討するために」共同研究『グローバル化時代のサブスタンスの社会的布置に関する比較研究』秋田大学

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2016年6月25日 「イタリアにおける食の多様な意味」関西学院大学EU情報センター主催ミニ・シンポジウム『食文化・食生活の日欧比較』大阪茶屋町アプローズ
- 2016年12月10日 「『労働（仕事）』をつくる人たち——現代イタリア社会における『労働』」京都人類学研究会12月季節例会『「仕事」への人類学的アプローチ——家事、労働、手仕事から考える』京都大学
- 2017年3月3日 「ジェンダー人類学（研究）の軌跡からみるジェンダーの複雑さ」I-URIC フロンティアコロキウム分科会3、ホテルアソシア静岡

・広報・社会連携活動

- 2016年7月27日 「城壁内からみるイタリア——ジェンダーを問い直す」カレッジシアター「地球探求紀行」あべのハルカス近鉄本店
- 2016年11月22日 「イタリアの町からグローバル社会を見直す」阪神シニアカレッジ国際理解学科、尼崎市中小企業センター

◎調査活動

・海外調査

- 2016年9月21日～10月16日—イタリア（現代イタリア社会におけるローカリティに関する文化人類学的研究に関わる調査研究）
- 2017年3月6日～3月19日—イタリア（イタリアにおける食研究の動向調査）

◎大学院教育

・指導教員

副指導 1名

・大学院ゼミでの活動

地域文化学基礎演習（1年生ゼミ）

太田心平 [おおた しんぺい]——— 准教授

1975年生。【学歴】大阪大学人間科学部人間科学科社会学専修卒（1998）、大阪大学大学院人間科学研究科人間学専攻博士前期課程修了（2000）、ソウル大学大学院人類学科博士課程単位取得（2003）、大阪大学大学院人間科学研究科人間学専攻博士後期課程修了（2007）【職歴】日本学術振興会特別研究員（PD）（2004）、大阪大学大学院人間科学研究科特任助手（2005）、国立民族学博物館先端人類科学研究部助教（2007）、国立民族学博物館研究戦略センター助教（2010）、アメリカ自然史博物館上級研究員（2011）、国立民族学博物館民族社会研究部助教（2012）、国立民族学博物館民族社会研究部准教授（2013）、総合研究大学院大学文化科学研究科比較文化学専攻併任准教授（2014）【学位】博士（人間科学）（大阪大学 2007）、修士（人間科学）（大阪大学2000）【専攻・専門】社会文化人類

学、北東アジア研究【所属学会】日本文化人類学会、韓国文化人類学会（韓国）、Association for Asian Studies（米国）、韓国・朝鮮文化研究会

【主要業績】

[論文]

太田心平

2012 「国家と民族に背いて——アイデンティティの生き苦しさ、韓国を去りゆく人びと」太田好信編『政治的アイデンティティの人類学——21世紀の権力変容と民主化にむけて』pp.304-336, 京都：昭和堂。

Ota, S.

2015 Collection or Plunder: the Vanishing Sweet Memories of South Korea's Democracy Movement. *Social Movements and the Production of Knowledge: Body, Practice, and Society in East Asia* (Senri Ethnological Studies 91) pp.179-193. Osaka: National Museum of Ethnology.

2006 Ryohan: Anthropology of Knowledge and the Japanese Representation of Korean Yangban under Colonialization. *Korean Cultural Anthropology* 39(2): 85-128 (韓国語)。

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

韓国・朝鮮における社会文化の統合性と多様性

・研究の目的、内容

韓国・朝鮮の社会は民族的な均質性が高く、その文化も統合的に捉えられている傾向が強い。しかし、社会の表面に色々な対立項が看守できるように、韓国・朝鮮の社会には多様性が秘められている。この研究の目的は、韓国・朝鮮の事例をもとに、社会文化の統合性と多様性の両立状況がいかに可能であり、それによりもたらされる緊張状態がいかに文化変容の原動力となっているのかを明らかにすることにある。

この期間には、この研究に2つの柱を立て、それらを中心として研究を推進した。

第1の柱は、1980年代以降の政治文化を対象としたもので、韓国の社会文化が、「民主化」とその前後の過程において、どのようなマクロ-ミクロ双対性をもっていたのかを明らかにするものである。こうした分野の研究は、大きな物語としてのイデオロギーと、小さな物語としての民衆世界という二項対立で論じられてきたが、この研究はそういった先行研究の蓄積を脱構築しようとした。援用したのは、20世紀後半の社会科学がイデオロギーに着目する反面で、軽視してきたユートピアという概念である。対象化したのは、先行研究が民衆に寄り添うあまり、蔑ろにしてきた知識人社会である。

第2の柱は、現在進行形の事象を研究対象とするものであり、韓国・朝鮮の社会文化が、世界の博物館展示としていかに編成されるか、そのメカニズムを明らかにするものである。この分野を遂行するため、科学研究費（若手研究（B））（課題番号：25871066、平成25～28年度）を研究代表者として受諾している。また、研究者はアメリカ自然史博物館人類学部門の上級研究員を兼業しているが、この兼業の研究課題はこの分野である。日米韓の3ヶ国においてフィールドワークをはじめるとともに、並行して文献研究を進め、欧州諸国における比較調査も進めることで、研究の効率化をはかった。

・成果

第1の柱、韓国・朝鮮の社会文化の「民主化」前後のマクロ-ミクロ双対性の研究に関しては、国際学会に3本の学術発表を申請した。そのうち、採択され、かつ予算措置が可能だった1本、ソウル大学人類学科の「BK+」事業（日本のGPないしCOEにあたる国家戦略的な研究教育イニシアティブのひとつ）による国際会議で発表した。ここでのコメントをふまえ、英文の論文を作成し、学術雑誌に投稿中である。

第2の柱、韓国・朝鮮の社会文化の現在進行形の編成メカニズムに関しても、これまで国際ワークショップでおこなった2本の学術発表の内容をとりまとめ、英文の論文2編を作成し、公刊を待っている。なお、この研究につき受託している科学研究費（若手研究（B））（課題番号：25871066、平成25～28年度）は、海外研究協力者側の事情により予定していた補足調査がおこなえなかったため、平成29年度まで延長を申請し、許可された。

この他、日本の中堅研究者とともに、初学者むけの文化人類学および東アジア文化論の教科書を、上水流久彦・太田心平・尾崎孝宏・川口幸大（編）『東アジアで学ぶ文化人類学』（昭和堂、2017年）として共同編集した。現在、刊行準備中である。

◎出版物による業績

[論文]

Ota, S.

- 2016 「이민동기의 비합리성 : 2000년대 절망 이민과 2010년대 탈-헬-조선 이민과의 비교를 바탕으로」
(Irrationality of Migration Motives: Comparison of Emigrants with No Hope in the 2000s and
Escapees from Hell-Chosun in the 2010s) 『글로벌 한국학과 이주·이산의 인류학』 pp.221-230。

[その他]

太田心平

- 2016 「カフェとは」『Vesta (食の文化誌ヴェスタ)』103:6-11, 東京:味の素食の文化センター。
2016 「つねに何かが起きている場所——米国ニューヨークの猫カフェから」『Vesta (食の文化誌ヴェスタ)』103:36-37, 東京:味の素食の文化センター。
2016 「ソウルの巨大デモ」『月刊みんぱく』40(8):10-11。
2017 「韓国人観覧者の視点から学んだマトリックス展示法」『文部科学教育通信』408:2。

◎映像音響メディアによる業績

・展示場内の映像

[朝鮮半島の文化展示]

太田心平監修・出演

- 2016 「展示概要」(日本語、英語、韓国語、中国語)
2016 「精神世界」(英語、中国語)
2016 「住の文化」(英語、中国語)
2016 「食の文化」(英語、中国語)
2016 「衣の文化」(英語、中国語)
2016 「知の文化」(英語、中国語)
2016 「遊びの文化」(英語、中国語)
2016 「これまでの展示」(英語、中国語)
2016 「電子ガイド」(英語、中国語)
2016 「ビデオテーク」(英語、中国語)
2016 「みんぱく」(英語、中国語)

・電子ガイドの制作・監修

[中央・北アジアの文化展示]

太田心平監修

- 2017 「550 カザフの天幕」(韓国語)
2017 「551 カザフの定住家屋の室内」(韓国語)
2017 「552 ウズベキスタンの民家の台所」(韓国語)
2017 「554 織機」(韓国語)
2017 「556 中央アジアのイスラーム」(韓国語)
2017 「557 女性の装い」(韓国語)
2017 「558 ゆりかご」(韓国語)
2017 「559 カザフの結婚」(韓国語)
2017 「560 社会主義の時代」(韓国語)
2017 「561 モンゴルが経験した社会主義」(韓国語)
2017 「564 エンフバト家のゲル」(韓国語)
2017 「565 エンフバト家の家財道具 (夫の語り)」(韓国語)
2017 「566 エンフバト家の家財道具 (妻の語り)」(韓国語)
2017 「574 チュクチの暮らし (トナカイ飼育)」(韓国語)
2017 「575 チュクチの暮らし (海岸)」(韓国語)
2017 「576 樹皮製カヌー」(韓国語)
2017 「577 ワナ」(韓国語)
2017 「579 シャマニズムの世界」(韓国語)

[アイヌの文化展示]

- 2017 「600 アイヌ文化の成り立ち」(韓国語)
- 2017 「601 交易」(韓国語)
- 2017 「602 衣文化」(韓国語)
- 2017 「603 伝統的な住まい」(韓国語)
- 2017 「604 食文化」(韓国語)
- 2017 「605 狩猟と漁労」(韓国語)
- 2017 「606 イナウ」(韓国語)
- 2017 「607 まじない」(韓国語)
- 2017 「608 祭壇模型の複製」(韓国語)
- 2017 「609 アイヌ文化と観光」(韓国語)

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2016年10月22日 “이민동기의 비합리성 : 2000년대 절망 이민과 2010년대 탈-헬-조선 이민과의 비교를 바탕으로,” 서울대학교 인류학과・BK21플러스사업단 “글로벌 한국학과 이주・이산의 인류학,” Seoul: 서울대학교 아시아연구소. (“Irrationality of Migration Motives: Comparison of Emigrants with No Hope in the 2000s and Escapees from Hell-Chosun in the 2010s,” Department of Anthropology at Seoul National University & BK21Plus Group, “Global Korean Studies and Anthropology of Migration and Diaspora: Outbound Migration of Koreans and Korean Diaspora,” Seoul: Seoul National University Asia Center.

・研究講演

- 2016年4月28日 ‘The Enigmatic Legend of Feminized Men: A Sociocultural History of a Scholar-Bureaucrat Family in Gyeonggi Province’, Colloquium Series on Korean Cultural Studies. New York, Columbia University.
- 2016年12月3日 「『キムジャン』にみる韓国のご近所づきあい」堺市博物館第15回無形文化遺産理解セミナー、堺市博物館

・展示

- 本館展示「朝鮮半島の文化」部分改修
- 堺市博物館「コーナー展示 食がつける絆——韓国の『キムジャン』にみる分かちあいの文化」(無形文化遺産理解事業2016) 監修
- 開館40周年記念特別展「よみがえれ！ シーボルトの日本博物館」ワーキング

・広報・社会連携活動

- 2016年4月13日 視察団受入：国立釜慶大学(大韓民国)「東南アジア文化体験博物館」
- 2016年1月12日 視察団受入：亜州大学(大韓民国)社会科学海外踏査団
- 2017年3月31日 視察団受入：観光文化体育省(大韓民国)

・みんぱくウィークエンド・サロン

- 2016年10月16日 「人間にとってカフェとは何か？」第441回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎調査活動

・海外調査

- 2016年4月20日～5月28日—アメリカ(コロンビア大学ウェザーヘッド東アジア研究所において歴史的エリート層についてのコロキウム・シリーズに参加及び調査)
- 2016年7月12日～10月13日—アメリカ(博物館展示の再編過程に関する研究成果の現地還元及び補足調査)
- 2016年12月9日～2017年1月9日—アメリカ(博物館展示の再編過程に関する研究成果の現地還元と補足調査)

◎大学院教育

・指導教員

- 主任指導教員(1人)、副指導教員(1人)

・総研大の開講科目

- 博物館研究演習 I (前期)

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（若手研究（B））「博物館展示の再編過程の国際比較による『真正な文化』の生成メカニズムの解明」研究代表者、機関研究「文化遺産の人類学——グローバル・システムにおけるコミュニティとマテリアリティ」（研究代表者：飯田 卓）研究分担者、人間文化研究機構地域研究ネットワーク型基幹研究プロジェクト「北東アジア」ワーキングメンバー

◎社会活動・館外活動

- ・他の機関から委嘱された委員など

アメリカ自然史博物館人類学部門（アメリカ合衆国）上級研究員、味の素食の文化研究所編集企画委員、堺市博物館無形文化遺産理解事業2016アドバイザー

- ・非常勤講師

大阪大学大学院人間科学研究科「政治経済の人類学」

佐藤浩司 [さとう こうじ] ————— 准教授

【学歴】 東京大学工学部卒（1977）、東京大学大学院修士課程修了（1983）、東京大学大学院博士課程単位取得（1989）

【職歴】 国立民族学博物館助手（1989）、国立民族学博物館助教授（1998）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2000）、国立民族学博物館文化資源研究センター助教授（2004）、国立民族学博物館民族社会研究部准教授（2008）

【学位】 工学修士（東京大学工学部 1989）【専攻・専門】 建築史学、民族建築学【所属学会】 建築史学会、民俗建築学会、家具道具室内史学会

【主要業績】

[編著]

佐藤浩司編

1998～1999 『シリーズ建築人類学《世界の住まいを読む》1～4』 京都：学芸出版社。

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

- ・研究課題

東南アジア木造建築史の再構築

- ・研究の目的、内容

東南アジアの木造建築史を概観するための資料の作成と東南アジア史の再構築（継続）

- ・成果

科研「伝統的生産システムによる保存手法の研究——熱帯地域木造建造物保存の国際共同研究」（代表：上北恭史・筑波大学）により、インドネシアのニアス島、スマトラ島、スンバ島、バリ島、ジャワ島で調査に従事。成果はホームページにて逐次公開。

<http://www.sumai.org/index.html>

文化資源プロジェクト「三次元CGを利用した民族建築デジタルアーカイブの構築」によりデータベース「3次元CGで見せる建築データベース「東南アジア島嶼部の木造民家」」を作成、公開。

<http://htq.idc.minpaku.ac.jp/databases/3dcg1/>

<http://www.sumai.org/3dcg/>（もっか上記は館内公開のためmirrorサイト）

◎映像音響メディアによる業績

3次元CGで見せる建築データベース「東南アジア島嶼部の木造民家」

◎調査活動

- ・海外調査

2016年7月17日～8月6日—インドネシア（インドネシアにおける木造建築物の保存手法にかかる調査研究）

2017年3月18日～3月25日—インドネシア（インドネシアにおける木造建築物の保存手法にかんする調査研究）

1963年生。【学歴】セネガル共和国国立応用経済学院社会コミュニケーション学部卒（1989）、津田塾大学大学院国際関係学研究科博士前期課程修了（1992）、パリ第5大学大学院社会科学研究科第2課程修了（1992）、パリ第5大学大学院社会科学研究科第3課程修了（1993）【職歴】国立民族学博物館第3研究部助手（1995）、国立民族学博物館民族社会研究部助手（1998）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（2003）【学位】D. E. A. Sci. Soc（パリ第5大学大学院社会科学研究科 1993）、M. Soc.（パリ第5大学大学院社会科学研究科 1992）、国際関係学修士（津田塾大学大学院国際関係学研究科 1992）【専攻・専門】文化人類学（西アフリカ研究）【所属学会】アフリカ学会、日本文化人類学会

【主要業績】

[編著]

Charbit, Y. et T. Mishima (éds.)

2014 *Question de migrations et de santé en Afrique sub-saharienne*. Paris: L'Harmattan.

[論文]

Mishima, T.

2014 Anthropologie des migrations internationales des Soninké : Formation et transmission de la richesse. In Y. Charbit et T. Mishima (éds.) *Question de migrations et de santé en Afrique sub-saharienne*. Paris: L'Harmattan.

三島禎子

2011 「民族の離散と回帰——ソニンケ商人の移動の歴史と現在」駒井 洋監修・編，小川充夫編『グローバル・ディアスポラ』pp.105-130，東京：明石書店。

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

アフリカ商業民の財の形成と継承に関する文化人類学的研究

・研究の目的、内容

アフリカ商業民によるアジア・アフリカ間貿易は、中国経済の拡大とともに今日のアフリカ経済の主要な現象のひとつになっている。西アフリカに故地をもつソニンケ民族は、地球規模の民族ネットワークでつながり、他の集団に先駆けてこの新しい経済機会をとらえた。その経済倫理には民族文化の伝統が受け継がれていると考えている。

10世紀以上前から商業民として知られるソニンケ民族は、民族文化とともにある種の「財」を継承してきたと考えられる。この有形・無形の「財」の本質と、継承の形態について調査し、移動と商業を生業とするソニンケの民族文化について考察を深めるのが本研究の目的である。

他方、アフリカ商業民によるアジア・アフリカ間貿易はさきわめて日常的経済活動でもあり、多くのさまざまな人が参入している。このような今日的な現象を理解するためには、あらたな視点が必要である。個別の研究に並行して、移動先でアフリカ商業民が集住できる条件や、宗教や民族の違い、故地での動向などの視点を取り入れた大きな枠組みについても考察してゆく。

・成果

科学研究費・基盤研究B『日中韓在住アフリカ人の生活戦略とアジア——アフリカ関係の都市人類学的研究』（H26-H28:代表・和崎春日）において、韓国におけるアフリカ系移民の実態について調査をおこなった。アフリカ系移民はもっぱら工場労働者として滞在しており、アジア・アフリカ間貿易の第一段階として資本金を作ることを目的としている。ソニンケ民族はすでにその段階を終えているので、韓国では存在が認められなかったが、多くのアフリカ系移民がソウル郊外の工業地帯で賃金労働に従事している。これらの知見から、アジア各国でのアフリカ系移民の身分や経済活動の差異が明らかになった。

◎出版物による業績

[その他]

三島禎子

2016 「サハラの変遷商人から移民へ——世界を移動するソニンケ商人」『季刊民族学』157：93-103。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・広報・社会連携活動

2016年6月22日 「セネガルの食事情——クスクスとご飯」みんなく×ナレッジキャピタル『世界の台所第4回』、グランフロント大阪

2016年7月11日 「移民について考える——アフリカから世界へ広がる商人たち」大阪府高齢者大学「世界の文化に親しむ科」大阪府社会福祉会館

・みんなくウィークエンド・サロン

2016年4月3日 「創られた『アフリカの』なもの——アフリカプリント」第419回みんなくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎調査活動

・海外調査

2016年10月17日～10月21日—韓国（韓国におけるアフリカ系商人の集住に関する調査）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費助成事業（基盤研究（B））「日中韓在住アフリカ人の生活戦略とアジア——アフリカ関係の都市人類学的研究」（研究代表：和崎春日）研究分担者

◎社会活動・館外活動等

・他機関から委嘱された委員など

『Revue Européenne des Migrations Internationales』編集委員（アジア担当）、『アフリカ研究』編集委員

吉岡 乾 [よしおか のほる]————— 助教

1979年生。【学歴】東京外国語大学外国語学部ウルドゥー語学科卒（2003）、東京外国語大学大学院地域文化研究科博士前期課程（アジア第三専攻）修了（2007）、東京外国語大学大学院地域文化研究科博士後期課程修了（2012）【職歴】国立国語研究所言語対照研究系プロジェクト奨励研究員（2013）、日本学術振興会特別研究員PD（2013）、東京外国語大学世界教養プログラム非常勤講師（2013）、国立民族学博物館民族社会研究部助教（2014）【学位】博士（学術）（東京外国語大学 2012）、修士（言語学）（東京外国語大学 2007）【専攻・専門】言語学、記述言語学、ブルシャスキー語、ドマーキ語、シナー語、南アジア（パキスタン）研究【所属学会】日本言語学会、関西言語学会、日本南アジア学会

【主要業績】

[博士論文]

Yoshioka, N.

2012 A Reference Grammar of Eastern Burushaski. 東京外国語大学大学院地域文化研究科。

[論文]

Yoshioka, N.

2017 Nominal Echo-Formations in Northern Pakistan. *Bulletin of the National Museum of Ethnology* 41(2) : 109-125. [査読有]

吉岡 乾

2014 「格配列パターンを決める動詞的要素と名詞的要素——パキスタンの言語を対照して」『思言：東京外国語大学記述言語学論集』10：159-202。

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

北パキスタン諸言語の記述言語学的研究

・研究の目的、内容

本研究は、北パキスタンのギルギット・バルティスタン自治州フンザ・ナゲル県モミナバード村などで話されている、消滅の危機にある言語であるドマーキ語を中心にしつつ、ブルシャスキー語、シナー語といった周辺

言語も併せて、現地調査によって得られたデータを基に言語記述をしていくことを目的とする。この研究は主に、科学研究費補助金（若手研究（A））「北パキスタン諸言語の記述言語学的研究」により進める。

・成果

2016年度は夏にインドのカシミール地方（ジャンムー・カシミール州スリナガル市）へ現地調査に行き、ブルシャスキー語スリナガル方言の実際の使用を確認、インフォーマントを得て調査を開始した。カシミール語についての調査も始めた。秋にはパキスタン北西部のカラーシャの谷へ8年振りに行き、カラーシャ語とカティ語の調査を再開した。初春にパキスタン北東部へ行く予定だった調査は、一時的なテロの多発を受けて見送った。

研究の成果は、論文、国際学会、国内学会での発表という形で公表した。カティ語に関して、2017年5月に国際学会で発表する予定も入っている。予定していたブルシャスキー語の参照文法（博論の直し）、ドマーキ語の文法スケッチ（参照文法の骨組みとなる、簡易な文法解説）が遅延しているので、今後集中的に取り組んでいく。

◎出版物による業績

[論文]

Yoshioka, N.

- 2016 Domaaki as a language of northern Pakistan: from a geolinguistic point of view. *Papers from the Third International Conference on Asian Geolinguistics* (Studies in Asian Geolinguistics, Monograph Series 1), pp.38-45. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa (ILCAA), Tokyo University of Foreign Studies.
- 2016 Sun: South Asia (IE (Indic, Iranian, Nuristani), Dravidian, Andamanese, Nihali, Burushaski). *Studies in Asian Geolinguistics I*, pp.22-23. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa (ILCAA), Tokyo University of Foreign Studies.
- 2016 Rice: South Asia (IE (Indic, Iranian, Nuristani), Dravidian, Andamanese, Nihali, Burushaski). *Studies in Asian Geolinguistics, II*, pp.19-20. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa (ILCAA), Tokyo University of Foreign Studies.
- 2016 Milk: South Asia (IE (Aryan, Iranian, Nuristani), Dravidian, Andamanese, Nihali, Burushaski). *Studies in Asian Geolinguistics, III*, pp.24-25. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa (ILCAA), Tokyo University of Foreign Studies.
- 2017 Nominal Echo-Formations in Northern Pakistan. *Bulletin of the National Museum of Ethnology* 41(2): 109-125. [査読有]

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2016年4月28日 ‘Spatial expressions in Burushaski’ 32nd South Asian Languages Analysis Roundtable, Universidade de Lisboa, Portugal.
- 2016年5月8日 「32nd South Asian Languages Analysis Roundtableの報告」言語記述研究会第72回例会、京都大学
- 2016年5月24日 ‘Domaaki as a language of northern Pakistan: from a geolinguistic point of view.’ The 3rd International Conference on Asian Geolinguistics, Royal University of Phnom Penh, Cambodia.
- 2016年9月26日 ‘Using of Urdu numerals in languages of northern Pakistan’ 日本南アジア学会 第29回大会、神戸市外国語大学
- 2016年11月20日 「悲喜交々だよフィールド調査——但し、意見には個人差があります」東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所主催「世界の言語で読む Le Petit Prince」講演企画、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- 2016年11月26日 「ブルシャスキー語の文法書について」共同利用・共同研究課題「参照文法書研究」第2回研究会、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- 2017年2月11日 「ブルシャスキー語の節連結」共同利用・共同研究課題「『アルタイ型』言語に関する類型的研究」第6回研究会、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

・研究講演

- 2016年5月14日 「言語学とは何か」（みんぱくで言語学を学ぼう「楽しい言語学を学ぶ会」①）日本財団助成

- 手話言語学研究部門プロジェクト主催、国立民族学博物館
- 2016年6月4日 「音のつくり」(みんなくで言語学を学ぼう「楽しい言語学を学ぶ会」②) 日本財団助成手話言語学研究部門プロジェクト主催、国立民族学博物館
- 2016年6月18日 「語のつくり」(みんなくで言語学を学ぼう「楽しい言語学を学ぶ会」③) 日本財団助成手話言語学研究部門プロジェクト主催、国立民族学博物館
- 2016年7月8日 「言語学の研究発表・講演でこんな風に地図を使ってみた」総合研究大学院大学主催「遺伝研メソッド」によるプレゼンテーション・ワークショップ、国立民族学博物館
- 2016年7月9日 「文のつくり」(みんなくで言語学を学ぼう「楽しい言語学を学ぶ会」④) 日本財団助成手話言語学研究部門プロジェクト主催、国立民族学博物館
- 2016年7月23日 「言語で伝えるもの」(みんなくで言語学を学ぼう「楽しい言語学を学ぶ会」⑤) 日本財団助成手話言語学研究部門プロジェクト主催、国立民族学博物館
- 2016年8月6日 「色々な言語学」(みんなくで言語学を学ぼう「楽しい言語学を学ぶ会」⑥) 日本財団助成手話言語学研究部門プロジェクト主催、国立民族学博物館

・広報・社会連携活動

- 2017年3月4日 「パキスタン北西部の“異教徒”カラーシャ人」第464回 みんなく友の会講演会、国立民族学博物館

・みんなくウィークエンド・サロン

- 2016年7月3日 「言語と文化と翻訳：なぜ漱石は“I love you”を訳さなかったのか」第428回みんなくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎調査活動

・海外調査

- 2016年4月25日～5月3日—ポルトガル（第32回南アジア言語分析学会に参加、及び、ロマニー語調査）
- 2016年5月22日～5月26日—カンボジア（第3回アジア地理言語学会に参加）
- 2016年8月13日～9月13日—インド（ブルシャスキー語、カシミーリー語の調査）
- 2016年10月21日～11月11日—パキスタン（科研費によるカティ語、カラーシャ語、コワール語の調査、及び、文化資源研究プロジェクト経費による資料収集）
- 2017年1月23日～1月28日—パキスタン（南アジア地域研究経費によるパキスタン都市部の言語動態の調査、及び、文化資源研究プロジェクト経費による資料収集）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

人間文化研究機構地域研究推進事業「現代インド地域研究」国立民族学博物館拠点（代表者：三尾稔）拠点構成員、国立民族学博物館共同研究課題「高等教育機関を対象にした博物館資料の活用に関する研究」（代表者：呉屋淳子）共同研究員、国立国語研究所共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法：名詞修飾表現」（代表者：プラシャント・パルデシ）共同研究員、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同利用・共同研究課題「[アルタイ型]言語に関する類型的研究」（代表者：山越康裕）共同研究員、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同利用・共同研究課題「参照文法書研究」（代表者：渡辺己）共同研究員、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同利用・共同研究課題「アジア地理言語学研究」（代表者：遠藤光暁）研究協力者

民族文化研究部

池谷和信 [いけや かずのぶ] 部長(併) 教授

1958年生。【学歴】東北大学理学部地球科学系卒（1981）、筑波大学大学院環境科学研究科修士課程修了（1983）、東北大学大学院理学研究科博士課程単位取得退学（1990）【職歴】北海道大学文学部附属北方文化研究施設助手（1990）、国立民族学博物館第1研究部助手（1995）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（1998）、総合研究大学院大学先導科学研究科助教授（1999）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2007）、総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻長（2009～2010）、国立民族学博物館民族文化研究部教授（2014）【学位】理学博士（東

北大学大学院理学研究科 2003)【専攻・専門】環境人類学・人文地理学・地球学・生き物文化誌学 1) 世界の狩猟採集文化、家畜文化の研究、2) 植民地時代における民族社会の変容に関する研究、3) 地球環境問題および地球環境史に関する研究【所属学会】日本文化人類学会、日本アフリカ学会、日本地理学会、日本沙漠学会、人文地理学会、日本人類学会、日本熱帯生態学会、日本民俗学会、生き物文化誌学会、ヒトと動物の関係学会、国際人類学民族学連合 (IUAES)、アメリカ人類学会 (American Anthropological Association)、日本生態学会、日本動物考古学会、東北地理学会、日本養豚学会、環境社会学会、比較文明学会、生態人類学会

【主要業績】

[単著]

池谷和信

- 2014 『人間にとってスイカとは何か——カラハリ狩猟民と考える』(フィールドワーク選書5) 京都: 臨川書店。
- 2003 『山菜採りの社会誌——資源利用とテリトリー』 仙台: 東北大学出版会。
- 2002 『国家のなかでの狩猟採集民——カラハリ・サンにおける生業活動の歴史民族誌』(国立民族学博物館研究叢書4) 大阪: 国立民族学博物館。

【受賞歴】

- 2007 日本地理学会優秀賞
- 1998 日本アフリカ学会研究奨励賞

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

狩猟採集民の移動と定住に関する人類学的研究

・研究の目的、内容

現存する狩猟採集民は、もともとノマッドであるといわれてきた。しかし現在、世界的視野からみてノマッドはほとんど存在しない。彼らは、何らかの理由によって定住化を余儀なくされて本拠地をもつようになっている。本研究では、アフリカの狩猟採集民を主な対象にして、人類にとっての移動と定住の実態を把握して、それらの意味について考えることをねらいとする。

・成果

2015年5月の国際人類学民族学会・中間会議(クロアチア)のなかで、「牧畜民やノマッドの現在」“Pastoralists and Nomads Today”というパネルをもうけた(米国のエリオット・フラトキン教授との連名)。そこでは、世界の狩猟採集民、牧畜民、漁撈民などを対象にして移動と定住の議論を深めることができた。

また、Senri Ethnological Studiesの1冊として、Sedentarization among nomadic peoples in Asia and Africaが、印刷中になっている。この論文集は、オランダ、ノルウェー、インドネシア、エリトリアの4名以外は、日本からの執筆者から構成されている(合計で14名)。

◎出版物による業績

[編著]

池谷和信編

- 2017 『ビーズ——つなぐ・かざる・みせる』 大阪: 国立民族学博物館。
- 2017 『狩猟採集民からみた地球環境史——自然・隣人・文明との共生』 東京: 東京大学出版会。

Ikeya, K. and R. K. Hitchcock (eds.)

- 2016 *Hunter-Gatherers and their Neighbors in Asia, Africa, and South America* (Senri Ethnological Studies 94). Osaka: National Museum of Ethnology.

[論文]

池谷和信

- 2016 「近年における歴史生態学の展開——世界最大の熱帯林アマゾンと人」水島司編『環境に挑む歴史学』pp.43-54, 東京: 勉誠出版。
- 2017 「狩猟採集民からみた地球環境史」池谷和信編『狩猟採集民からみた地球環境史——自然・隣人・文明との共生』pp.1-21, 東京: 東京大学出版会。

- 2017 「地球の先住者から学ぶこと」『狩猟採集民からみた地球環境史——自然・隣人・文明との共生』 pp.297-302, 東京：東京大学出版会。
- 2017 「北東アジア地域研究の新しい地平——人やものの移動からみた自然・文化・文明」『民博通信』156：4-9, 大阪：国立民族学博物館。
- Ikeya, K.
- 2016 Interaction of the San, NGOs, Companies, and the State. In K. Ikeya and Robert K. Hitchcock (eds.) *Hunter-Gatherers and their Neighbors in Asia, Africa, and South America* (Senri Ethnological Studies 94), pp.255-267. Osaka: National Museum of Ethnology.
- 2016 Introduction. In K. Ikeya and Robert K. Hitchcock (eds.) *Hunter-Gatherers and their Neighbors in Asia, Africa, and South America* (Senri Ethnological Studies 94), pp.1-15. Osaka: National Museum of Ethnology.
- Ikeya, K. and S. Nakai
- 2016 Structure and Social Composition of Hunter-Gatherer Camps: Have the Mlabri Settled Permanently? In K. Ikeya and Robert K. Hitchcock (eds.) *Hunter-Gatherers and their Neighbors in Asia, Africa, and South America* (Senri Ethnological Studies 94), pp.123-138. Osaka: National Museum of Ethnology.
- Endo, H., N. Tsunekawa, K. Kudo, Y. Hayashi, K. Ikeya, N. T. Son and F. Akishinomiya
- 2017 Musculoskeletal System of Huge Tarsometatarsal Region in the Dong Tao Fowls from North Vietnam. *The Journal of Poultry Science* 54(1): 58-65.
- [その他]
- 池谷和信
- 2016 「人と家畜のエピソード49 カンボジアの牛車 その2」『JVM 獣医畜産新報』69(4)：245。
- 2016 「人と家畜のエピソード50 バングラデシュのガヤル」『JVM 獣医畜産新報』69(5)：325。
- 2016 「アフリカとグローバル・ヒストリー（3）アフリカの環境史とグローバル・ヒストリー——象牙、ダチョウの羽、キツネの毛皮」『日本アフリカ学会第53学術大会大会プログラム・研究発表要旨集』 p.135。
- 2016 「人と家畜のエピソード51 野生からペットへ——アマゾンで動物を飼う」『JVM 獣医畜産新報』69(6)：479。
- 2016 「考える舌41 バングラデシュの黒ブタ」『京都新聞』6月8日。
- 2016 「極北の民チュクチのふたつの顔」『月刊みんぱく』40(7)：9。
- 2016 「人と家畜のエピソード52 生き物文化と博物館」『JVM 獣医畜産新報』69(7)：559。
- 2016 「人と家畜のエピソード53 バングラデシュの丘陵地での豚飼育」『JVM 獣医畜産新報』69(8)：639。
- 2016 「はるかなる豚 豚のルーツと未来 第1回 イノシシから豚へ」『月刊養豚界』51(9)：42-45。
- 2016 「人と家畜のエピソード54 ライオンと人とのかわり——アフリカの獣害問題」『JVM 獣医畜産新報』69(9)：719。
- 2016 「はるかなる豚 豚のルーツと未来 第2回 世界の豚飼い——もう1つの養豚の形」『月刊養豚界』51(10)：37-40。
- 2016 「新たな民博の研究に向けて」(西尾哲夫・池谷和信・野林厚志)『民博通信』154：4-9。
- 2016 「スイカのふるさとカラハリ」『日本農業新聞』9月2日。
- 2016 「はるかなる豚 豚のルーツと未来 最終回 都市の豚」『月刊養豚界』51(11)：46-50。
- 2016 「人と家畜のエピソード55 見世物としてのゾウ」『JVM 獣医畜産新報』69(10)：799。
- 2016 「熱帯におけるイノシシ類と人——三大陸の比較から」『海外の森林と林業』97：25-29。
- 2016 「総合討論」『海外の森林と林業』97：32-37。
- 2016 「人と家畜のエピソード56 ワニと人とのかわり」『JVM 獣医畜産新報』69(11)：879。
- 2016 「人と家畜のエピソード57 ウミガメと人」『JVM 獣医畜産新報』69(12)：959。
- 2016 「生き物からみえる人の世界」『ビオストーリー』26：107。
- 2016 「History of Food Culture Exchanges in Eurasia Continent.」(Session Abstract)『The History of Japan-China Relations in respect to the Marine Resource: Abalones in Japan』(Abstract)『立命館大学×国立民族学博物館 学術交流協定締結記念第2回国際シンポジウム 第6回アジア食文化会議 食文化の交流——過去・現在・未来—— アジアにおける食文化のダイナミズムを交流という視

- 点から解明する』 pp.26-27, 大阪：国立民族学博物館。
- 2016 「先住民族を知ろう11 チュクチ」『朝日小学生新聞』12月11日。
- 2017 「人と家畜のエピソード58 鶏と人のかかわり」『JVM 獣医畜産新報』70(1)：79。
- 2017 「人と家畜のエピソード59 ボツワナの牛と人」『JVM 獣医畜産新報』70(2)：159。
- 2017 「世界はビーズでつながっている」『月刊みんぱく』41(3)：2-3。
- 2017 「人と家畜のエピソード60 生き物からつくられるビーズ」『JVM 獣医畜産新報』70(3)：239。
- 2017 「はじめに——世界はビーズでつながっている」『ビーズ——つなぐ・かざる・みせる』 pp.6-7, 大阪：国立民族学博物館。
- 2017 「ビーズとは何か」『ビーズ——つなぐ・かざる・みせる』 p.14, 大阪：国立民族学博物館。
- 2017 「色・形・大きさ」『ビーズ——つなぐ・かざる・みせる』 p.15, 大阪：国立民族学博物館。
- 2017 「多様な素材」『ビーズ——つなぐ・かざる・みせる』 pp.16-17, 大阪：国立民族学博物館。
- 2017 「人の歯」『ビーズ——つなぐ・かざる・みせる』 p.21, 大阪：国立民族学博物館。
- 2017 「ファイアンス」『ビーズ——つなぐ・かざる・みせる』 p.23, 大阪：国立民族学博物館。
- 2017 「ダチョウの卵殻」『ビーズ——つなぐ・かざる・みせる』 p.28, 大阪：国立民族学博物館。
- 2017 「鉄」『ビーズ——つなぐ・かざる・みせる』 p.30, 大阪：国立民族学博物館。
- 2017 「貝の道」『ビーズ——つなぐ・かざる・みせる』 pp.40-41, 大阪：国立民族学博物館。
- 2017 「琥珀の道」『ビーズ——つなぐ・かざる・みせる』 p.46, 大阪：国立民族学博物館。
- 2017 「ガラスの道——ヴェネチアのガラスビーズ」『ビーズ——つなぐ・かざる・みせる』 pp.47-49, 大阪：国立民族学博物館。
- 2017 「ビーズを身にまとった花嫁」『ビーズ——つなぐ・かざる・みせる』 pp.64-65, 大阪：国立民族学博物館。
- 2017 「ディンカのコレットは富の象徴」『ビーズ——つなぐ・かざる・みせる』 pp.66-67, 大阪：国立民族学博物館。
- 2017 「モノを飾る」『ビーズ——つなぐ・かざる・みせる』 p.84, 大阪：国立民族学博物館。
- 2017 「祈りとビーズ」『ビーズ——つなぐ・かざる・みせる』 p.85, 大阪：国立民族学博物館。
- 2017 「分業でつくるヨルバのビーズ人像」『ビーズ——つなぐ・かざる・みせる』 pp.86-87, 大阪：国立民族学博物館。
- 2017 「グローバル時代の多様な美意識」『ビーズ——つなぐ・かざる・みせる』 p.124, 大阪：国立民族学博物館。
- 2017 「スワロフスキー・クリスタル」『ビーズ——つなぐ・かざる・みせる』 p.129, 大阪：国立民族学博物館。
- 2017 「大阪から世界へ……マツノビーズ」『ビーズ——つなぐ・かざる・みせる』 p.130, 大阪：国立民族学博物館。
- 2017 「パキスタンから日本へ……ペーパービーズ」『ビーズ——つなぐ・かざる・みせる』 p.131, 大阪：国立民族学博物館。
- 2017 「あとがき」『ビーズ——つなぐ・かざる・みせる』 p.134, 大阪：国立民族学博物館。
- 2017 「I 先史狩猟採集民の定住化と自然資源利用 導入部」池谷和信編『狩猟採集民からみた地球環境史——自然・隣人・文明との共生』 pp.24-25, 東京：東京大学出版会。
- 2017 「II 農耕民との共生、農耕民・家畜飼養民への変化導入部」池谷和信編『狩猟採集民からみた地球環境史——自然・隣人・文明との共生』 pp.96-97, 東京：東京大学出版会。
- 2017 「III 王国・帝国・植民地と狩猟採集民導入部」池谷和信編『狩猟採集民からみた地球環境史——自然・隣人・文明との共生』 pp.176-177, 東京：東京大学出版会。
- 2017 「IV 近代化と狩猟採集民 導入部」池谷和信編『狩猟採集民からみた地球環境史——自然・隣人・文明との共生』 pp.224-225, 東京：東京大学出版会。
- 2017 「あとがき」池谷和信編『狩猟採集民からみた地球環境史——自然・隣人・文明との共生』 p.303, 東京：東京大学出版会。
- Nakai, S. and K. Ikeya
- 2016 Structure and Social Composition of Hunter-gatherer Camps: Have the Mlabri Settled Permanently? *Abstract of the eighth World Archaeological Congress (WAC8)*, Book of Abstracts, p.389. Kyoto: WAC-8 Kyoto Local Organizing Committee.

Ikeya, K.

- 2016 Reviews of Studies Examining Interaction between Hunter-gatherers and Farmers in Asia. *Abstract of the eighth World Archaeological Congress (WAC8)*, Book of Abstracts, p.389. Kyoto: WAC-8 Kyoto Local Organizing Committee.

◎映像音響メディアによる業績

・DVD

池谷和信

- 2017 「ラクダを飼う」「ラクダミルク」「ラクダの解体場」「ラクダ肉を美味しく食べる方法」解説、『ラクダと人のかかわり——飼う、売る、食べる』（みんぱく映像民族誌第25集、大阪：国立民族学博物館）。

・ラジオ

- 2016年7月16日 『久米宏・ラジオなんですけど』TBSラジオ放送
2017年3月3日 「世界はビーズでつながっている」『NHKラジオ深夜便』NHK大阪ラジオ第一
2017年3月9日 『関西ラジオワイド』NHK大阪ラジオ第一
2017年3月17日 「世界はビーズでつながっている」『NHKラジオ深夜便』NHK大阪ラジオ第一

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

- 2016年12月23日 「趣旨説明」『極北の自然とチュクチの人びと——民博展示場と映画『ツンドラブック』をつなぐ』人間文化研究機構・北東アジア地域研究推進事業国立民族学博物館拠点国際公開セミナー、国立民族学博物館
2017年2月18日 「趣旨説明」『モンスーンアジアにおける家畜と人』研究会 国立民族学博物館
2017年3月26日 「趣旨説明」特別研究シンポジウム「歴史生態学から見た人と生き物の関係」国立民族学博物館
2017年3月26日 「アフリカにおける環境史——象牙、ダチョウの羽、キツネの毛皮」特別研究シンポジウム「歴史生態学から見た人と生き物の関係」国立民族学博物館

・共同研究会

- 2016年10月10日 「ビーズをめぐる人類学的研究——『ビーズ学』の可能性を求めて」『世界のビーズをめぐる人類学的研究』
2016年12月11日 「趣旨説明」『世界のビーズをめぐる人類学的研究』

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2016年4月24日 「東北の狩猟文化について」AJJ会議、東北大学。
2016年5月6日 Nomadism and sedentism among contemporary African hunter-gatherers. Panel 324 Pastoralists and nomads today, クロアチア
2016年5月26日 「日本からみた北東アジア——クマと人との関係に注目して」北東アジア地域研究
2016年5月28日 「コメント」分科会（脱生業化時代における生業論の再検討にむけて）日本文化人類学会、南山大学
2016年6月5日 「アフリカの環境史とグローバル・ヒストリー——象牙、ダチョウの羽、キツネの毛皮」日本アフリカ学会、日本大学農学部
2016年6月19日 「熱帯のイノシシ類と人——3大陸の比較から」日本熱帯生態学会、筑波大学
2016年8月19日 'Human-Chicken multiple interactions from human science approaches.' Meeting of The Human-Chicken Multi-Relationships Research Project. Swissotel Nai Lert Park Hotel Bangkok
2016年8月29日 'Introduction: Reviews of Studies Examining Interaction between Hunter-gatherers and Farmers in Asia. Interactions between Prehistoric Hunter-Gatherers and Neighbors in Asia.' The eighth World Archaeological Congress (WAC8), Doshisha University, Imadegawa Campus, Kyoto
2016年8月29日 (S. Nakai and K. Ikeya) 'Structure and Social Composition of Hunter-gatherer Camps: Have the Mlabri Settled Permanently?' The eighth World Archaeological Congress (WAC8), Doshisha University, Imadegawa Campus, Kyoto
2016年9月2日 Risk and A Small-scale Community-Social, Economic, Ritual Adaptation and Resilience in

East Japan Great Earthquake. 総合地球環境学研究所

- 2016年10月19日 「コメント」現代中東地域研究 外来移入種ミスキート、秋田大学
- 2016年11月6日 「狩猟採集民と隣人との相互関係について Interaction between hunter-gatherers and their Neighbors」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究2016-2020：パレオアジア文化史学第1回研究大会』東京大学
- 2016年12月3日 「The History of Japan-China Relations in respect to the Marine Resource: Abalones in Japan」[Panel: History of Food Culture Exchanges in Eurasia Continent] 第6回アジア食文化会議『食文化の交流——過去・現在・未来』立命館大学草津キャンパス
- 2017年1月18日 Access and Management of Natural Resources in Northeast Asia: From Viewpoints of Non-Timber Forest Products (NTFP), 富山大学
- 2017年2月12日 「狩猟採集民と農耕民との相互関係の動態」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究2016-2020：パレオアジア文化史学第2回研究大会』（ポスター発表）名古屋大学野依記念学術交流館
- 2017年3月27日 「イノシシ、ブタの文化人類学的研究」在来家畜研究会・日本動物遺伝育種学会合同シンポジウム「アジアの在来家畜研究最前線——イノシシ・ブタを例にして、分子系統、古代DNA、文化人類学的視点から」神戸大学

・研究講演

- 2016年10月2日 「クマの生態と狩猟文化」結とびあ（有終会館）、福井県大野市
- 2016年10月13日 「世界のビーズをめぐる人類学的研究」平成28年度第4回来館者のニーズに応えるためのMMPステップアップ講座、国立民族学博物館
- 2016年11月10日 「野生と文化からみた生き物——栽培化や家畜化が変えた野生の風景」みんな公開講演会『私たち人類はどこへ行くのか？——スイカで踊る、クジラを祭る——生き物と人 共生の風景』日本経済新聞社ホール
- 2016年12月10日 「世界のビーズ——美しさに秘められた人類の知恵」金沢星稜大学人文学部開設記念講演、金沢星稜大学
- 2017年1月18日 「Access and Management of Natural Resources in Northeast Asia: From Points of View in the Non-Timber Forest Products (NTFP)」富山大学・研究推進機構・極東地域研究センター人間文化研究機構「北東アジア地域研究推進事業」北東アジアにおける資源の持続可能な利用、富山大学
- 2017年1月20日 「コメント」2016年度学術潮流サロン「人と動物——つながりとその変化」国立民族学博物館
- 2017年1月21日 「アジアの森から世界の台所に——鶏と人の文化誌」西宮自然保護協会・特別講演会、西宮市立中央公民館
- 2017年3月11日 「プレスレットをつくろう——植物ビーズの魅力」自然文化公園内・自然観察学習館
- 2017年3月18日 「人間にとってビーズとは何か？——特別展『ビーズ——つなぐ・かざる・みせる』から」第466回みんな公開ゼミナール、国立民族学博物館
- 2017年3月21日 「概要説明」みんな公開講演会『恵（めぐ）みの水、災（わざわ）いの水——川、湖、海』毎日新聞社オーバルホール
- 2017年3月25日 「趣旨説明」開館40周年記念特別展「ビーズ——つなぐ・かざる・みせる」関連公開研究会『北東アジアのガラス玉の道——アイヌのタマサイを中心に』国立民族学博物館

・展示活動

特別展「ビーズ——つなぐ・かざる・みせる」実行委員長（2017.3.9～2017.6.6）

・広報・社会連携活動

- 2016年4月15日 「総論およびアフリカの都市に暮らす」高齢者大学校
- 2016年5月20日 「ラクダの文化誌」阪神シニアカレッジ
- 2016年5月20日 「ブタの文化誌——ブタと人との絆」阪神シニアカレッジ
- 2016年6月8日 「人間にとってスイカとは何か——カラハリ狩猟民と考える」カレッジシアター「地球探求紀行」あべのハルカス近鉄本店
- 2016年9月10日 「人間にとってスイカとは何か——カラハリ狩猟民と考える」モンベル渋谷
- 2016年11月18日 「白熱教室——生き物と人がつくりだす現代文明」高齢者大学
- 2016年12月5日 「世界の飲食文化と日本」（ギャラリートーク）第6回アジア食文化会議 国立民族学博物館

2016年12月23日 「極北の自然とチュクチのくらしと——民博展示場と映画『ツンドラブック』をつなぐ——」（ギャラリートーク）人間文化研究機構・北東アジア地域研究推進事業 国立民族学博物館拠点国際公開セミナー 国立民族学博物館

2017年3月29日 「小さなビーズがつくりだす世界——アフリカ、アジア、そしてアメリカ」カレッジシアター「地球探究紀行」あべのハルカス近鉄本店

・ **みんなくウィークエンド・サロン**

2016年7月10日 「極北の民チュクチのくらし」第429回ウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎ **調査活動**

・ **国内調査**

2016年7月21日～7月24日—岩手県大船戸市・大槌町（アワビの生産と流通に関する研究）

2016年7月26日—岡山市オリエンタ美術館（ガラスビーズに関する研究）

2016年7月28日—神戸市（KOBE とんぼ玉ミュージアム）

2016年8月6日—札幌市（先住民運動に関する資料収集）

2016年8月10日—三重県鳥羽市（真珠の首飾りに関する研究）

2016年11月18日—神戸市（デザイン・クリエイティブセンター神戸）

2016年12月28日—大阪市平野区（ガラス玉に関する資料収集）

・ **海外調査**

2016年5月2日～5月10日—クロアチア、トルコ（国際人類学・民族学会議に参加及び生き物文化に関する資料収集）

2016年6月8日～6月15日—バングラディッシュ（熱帯の家畜飼育に関する調査研究）

2016年8月16日～8月22日—タイ（熱帯の狩猟採集民に関する資料収集）

2016年10月27日～11月1日—アメリカ（歴史生態学的研究に関する資料収集）

2017年1月6日～1月14日—ボツワナ共和国、南アフリカ共和国、エチオピア（熱帯の家畜利用に関する研究）

2017年3月11日～3月15日—ラオス（狩猟採集民と隣人との関係に関する調査）

◎ **大学院教育**

・ **指導教員**

主任指導教員（3人）、副指導教員（4人）

◎ **上記以外の研究活動**

・ 人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費助成事業（基盤研究（A））「熱帯地域における農民の家畜利用に関する環境史的研究」研究代表者、科学研究費助成事業（基盤研究（A））「森林生態資源の地域固有性とグローバルドメスティケーションに関する研究」（研究代表者：小林繁男）研究分担者、科学研究費助成事業（基盤研究（A））「乳文化の視座からの牧畜論考——全地球的な地域間比較による新しい牧畜論の創生」（研究代表者：平田昌弘）、科学研究費助成事業（基盤研究（B））「多起源的家畜化モデルの構築と学融合型資料収蔵システムの確立」（研究代表者：遠藤秀紀）研究分担者、科学研究費補助金（特定領域研究・新学術領域研究）「パレオアジア文化史（B01：人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築）研究分担者、家畜資源研究会（HCMR）研究分担者、牛車研究会（代表者：池内克史）研究分担者、味の素食の文化センター食のフォーラムメンバー

◎ **社会活動・館外活動**

・ **他機関から委嘱された委員など**

Nomadic Peoples 編集委員、Museum Anthropology (USA) 編集委員、Tribes and Tribals (India) 編集委員、日本アフリカ学会評議員、人文地理学会理事、生き物文化誌学会副会長、ヒトと動物の関係学会評議員、北海道立北方民族博物館研究協力員、家畜資源研究会理事、総合地球環境学研究所 運営会議員、ビオストーリー編集委員（編集長）

・ **非常勤講師**

広島大学大学院国際協力研究科「途上国農村地域研究」（集中講義）、東北大学大学院環境学研究科「環境文明論1」（集中講義）

1959年生。【学歴】早稲田大学第一文学部卒（1982）、神奈川大学大学院歴史民俗資料科学研究科博士課程前期修了（1995）、神奈川大学大学院歴史民俗資料科学研究科博士課程後期退学（1995）【職歴】相模原市立博物館学芸員（1982）、国立民族学博物館第1研究部助手（1996）、国立民族学博物館民族文化研究部助手（1998）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（2001）、総合研究大学院大学文化科学研究科兼任（2004）【学位】博士（歴史民俗資料学）（神奈川大学大学院歴史民俗資料科学研究科 2001）、修士（歴史民俗資料学）（神奈川大学大学院歴史民俗資料科学研究科 1995）【専攻・専門】民俗学、民俗芸能研究 1）日本の獅子舞の民俗学的研究、2）日本の民俗芸能の近代～現代における伝承の研究、3）民俗学における資料論【所属学会】日本民俗学会、民俗芸能学会、芸能史研究会

【主要業績】

[単著]

笹原亮二

2003 『三匹獅子舞の研究』京都：思文閣出版。

[編著]

笹原亮二編

2009 『口頭伝承と文字文化——文字の民俗学 声の歴史学』京都：思文閣出版。

[論文]

笹原亮二

2005 「用と美——柳田国男の民俗学と柳宗悦の民藝を巡って」熊倉切夫・吉田憲司編『柳宗悦と民藝運動』pp.273-294, 京都：思文閣出版。

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

日本の祭と民俗芸能における装飾性の諸相

・研究の目的、内容

我々の生活の場には、衣類や食器や家具など様々なモノが存在し、我々はそれらを所有し、用いて生活を営んできた。そうしたモノに対し、我々は道具としての利便性や実用性に関心を向けがちである。しかし、現実の生活の場には、道具としての利便性や実用性が必ずしも問題とされないモノも存在する。それは、祭や民俗芸能において見られる御幣・仮面・笠・曳山などの品々である。それらは、形態や色彩などに殊更に趣向が凝らされ、日々の生活の場のモノとは大いに趣を異にする。また、こうしたモノを使用して行う儀礼や芸能といった身体行為も、家庭内の日々の労働や生産業の際に実用的な道具類を用いて行う身体行為とは、大いに趣を異にしている。そうしたモノや身体行為の最たるものが、祭や年中行事の際に人々が趣向を凝らして作り、見物客の観覧に供する造形物、「造り物」であり、非日常的な身体技術を駆使して見物客を魅了する芸能、「軽業」や「曲芸」である。こうした各地の祭や民俗芸能における、モノと身体技術の両面で見られる装飾性に富んだ多種多様な趣向を、人々の願いや喜びや晴れがましさとといったハレの機会における闊達な精神活動の所産として捉え、実態の把握を試みる。そして、それを通じ、各地でさまざまな祭や民俗芸能を脈々と営んできた人びとの心性や感覚、即ち「ハレのころ」のありようやその歴史的な形成過程について、見世物興行を初めとした專業芸能者の影響に注目しつつ考える。

本研究の実施にあたっては、申請者が研究代表者の科学研究費（基盤研究（C））「本州とその周辺の島々及び多島海海域における民俗芸能の研究」も活用するほか、申請者が平成28年9月から開催を予定している特別展「見世物大博覧会」の準備及び開催と連携して進める。

・成果

装飾性が顕著なモノに関しては、江戸時代以来、寺社の祭が主要な興行の機会の1つとなっていた見世物の興行において人々の観覧に供された、籠細工・貝細工等の細工物、生人形・菊人形等の人形、人体模型・博物標本等の理化学的機器類等について、錦絵・墨摺等の印刷物や遺品等の様々な資料について調査を行った。こうした多種多様なモノを展覧に供した見世物の興行が、見世物が最も盛行した時代とされる江戸時代後期には、興行全体のほぼ半分を占めて人気を博したことは、装飾性に富んだモノが、祭の神賑として、参集した老若男女の祭ならではの興奮や昂揚感といったハレの気分の醸成に強く作用したことを示している。そして、そうし

たモノと人々のハレの気分との関係が、明治以降も、毎年多くの見世物小屋が立つことで評判の各地の社寺の祭や縁日で新奇な人体模型を初め理化学機器類の興行が行われ、話題になる場合があったようにある程度継続していたことは、明治以降、近代的な知識や技術を一般庶民がどのように受容したかを考える際にも示唆的である。

また、同種同類の器物のみを用いて意外性のある造形を作り上げる一式細工が、鳥根県出雲市平田町の平田天満宮祭の「一式飾」や鳥根県南部町法勝寺宿の春祭の一式飾として、生人形の系譜に繋がる山車人形が各地の祭の山車の装飾品として、からくり細工の系譜に繋がるからくり人形が中京地方を中心とした祭の山車の装飾品としてというように、細工見世物に由来する装飾性に富んだ様々なモノが各地の祭において現在も見られることは、そうしたモノと人々のハレの気分との結び付きが、相当程度広がりをもって持続してきたことの現れと考えることができ興味深い。

装飾性が顕著な身体技術に関しては、秋田県潟上市・男鹿市の蜘蛛舞、茨城県龍ケ崎市の撞舞、神奈川県川崎市の囃子曲持、愛媛県今治市の継ぎ獅子、岩手県大船渡市の梯子虎舞等、軽業・曲芸的な芸態が特徴的な民俗芸能について、映像資料や文献資料等を基に調査を行った。その結果、こうした民俗芸能は、今治市の継ぎ獅子や京都府京都市の六斎念仏の獅子、兵庫県南あわじ市の梯子獅子、岐阜県飛騨市の数河獅子等、獅子舞系統に多く見られることが判明した。これらは、二人立の獅子舞と、舞手の肩上にもう1人の舞手が立ち上がる軽業的な演目の「魁曲」を持ち芸とし、江戸時代に專業芸能者集団として全国を巡って各地の民俗芸能に多大な影響を及ぼした伊勢大神楽に由来すると考えられてきた。しかし、現行の各地の獅子舞の軽業・曲芸的な芸態は伊勢大神楽とは必ずしも共通せず、むしろ、同じく江戸時代に全国を巡って人気を博した角兵衛獅子との類似を感じさせるものも少なくない。角兵衛獅子と各地の軽業・曲芸的な芸態を有する獅子舞との関係について、改めて検討してみる必要があるのではないだろうか。

また、伊勢大神楽の本拠地に近い伊勢志摩地方には多くの獅子舞が伝来している。これらの獅子舞は、獅子頭の形態や芸態等への伊勢大神楽の影響がそれほど認められず、各地で行われる年頭の歩射等の予祝儀札や火祭、地域の当屋組織等との結び付きが顕著で、「御頭神事」と呼ばれるものも多く、全般的に芸態における装飾性は希薄である。軽業・曲芸を見せ場とする芸態として全国各地の獅子舞に多大な影響を及ぼした伊勢大神楽の影響が、この地方の獅子舞にそれほど認められないのはどういう理由によるものか、更なる資料の集積を行い、検討を加えることが望まれる。

軽業・曲芸的な芸態が特徴的な民俗芸能は、獅子舞系統にとどまらず、そうした芸態が最大の見所として見物客に人気を博した一方で、あくまでも地域の祭や年中行事の一環として行われていた。そのことは、それらの芸態が地域社会の人々に、単に、装飾性に富む身体技術に魅了され、その魅力によって地域社会に受容されたに止まらず、地域社会の信仰・社会生活の維持等、多様な意味合いを持つものとして受容されてきたことを示している。こうした装飾性を主たる眼目としつつも多義性を備えた身体技術が、各地の人々の生活の一部として埋め込まれるに至った経緯を、それぞれの地域社会の実態に即して考えてみる必要があろう。

以上の内容を初め、本研究の成果は、昨年9月から11月にかけて開催した民博の特別展「見世物大博覧会」の実施、『月刊みんぱく』の特別展の特集や同展図録等の出版物の刊行、民博ゼミナールや伊勢大神楽の公演等の特別展関連催し物の実施、映像番組「東湖八坂神社の統人行事——秋田県潟上市天王・男鹿市船越」「今治の継ぎ獅子——春祭りの獅子舞奉納」「龍ヶ崎の撞舞——茨城県龍ヶ崎市」「新城の囃子曲持——神奈川県川崎市中原区新城」「平組梯子虎舞——岩手県大船渡市末崎町」製作・公開等を通して公表した。

◎出版物による業績

[分担執筆]

笹原亮二

2016 「獅子の軽業」『特別展 見世物大博覧会』pp.188-189, 大阪：千里文化財団。

2016 「道心者」pp.138-139, 「六部」p.166, p.175, 「神道者」pp.170-171, 「チョンガレ語り」p.182, 「獅子舞い」p.207, 「越後獅子・角兵衛獅子」p.210, 小林淳一編『江戸時代人物画帳 シーボルトのお抱え絵師・川原慶賀の描いた庶民の姿』東京：朝日新聞出版局。

[その他]

笹原亮二

2016 「見世物と人びと」『月刊みんぱく』40(9)：2-3。

◎映像音響メディアによる業績

・国立民族学博物館映像音響資料の制作・監修

笹原亮二監修

- 2016 『平組梯子虎舞——岩手県大船渡市末崎町』
- 2016 『新城の囃子曲持——神奈川県川崎市中原区新城』
- 2017 『龍ヶ崎の撞舞——茨城県龍ヶ崎市』
- 2017 『東湖八坂神社の統人行事——秋田県潟上市天王・男鹿市船越』
- 2017 『今治の継ぎ獅子——春祭りの獅子舞奉納』

◎口頭発表・展示・その他の業績

・みんぱくゼミナール

2016年9月17日 「軽業の系譜と民俗芸能——特別展『見世物大博覧会』から」第460回みんぱくゼミナール

・広報・社会連携活動

2016年9月10日 みんぱく×MBSラジオ presents トークイベント「浜村淳がせまる！驚きと幻想の見世物大博覧会」国立民族学博物館

・みんぱくウィークエンド・サロン

2016年10月9日 「魅せるモノ・魅せられるモノ 見世物のおもしろさを巡って」第440回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

・展示

『特別展 見世物大博覧会』実行委員長

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

鳥根県古代文化センター資料評価委員・同客員研究員、鳥取県文化財保護審議会専門委員

・非常勤講師

関西学院大学文学部「地理学地域文化学特殊講義」

竹沢尚一郎 [たけざわ しょういちろう]——教授

1951年生。【学歴】東京大学文学部宗教学専攻卒（1976）、東京大学大学院人文科学研究科宗教学専攻修士課程修了（1978）、フランス社会科学高等研究院社会人類学専攻博士課程修了（1985）【職歴】日本学術振興会特別研究員（1985）、九州大学文学部助教授（1988）、国立民族学博物館併任助教授（1996）、九州大学大学院人間環境学研究院教授（1998）、国立民族学博物館民族学研究部教授（2001）、九州大学大学院併任教授（2001）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2002）、国立民族学博物館民族文化研究部教授（2004）、総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻長（2007）【学位】民族学博士（フランス社会科学高等研究院 1985）、文学修士（東京大学 1978）【専攻・専門】宗教人類学、アフリカ史、人類学学説史【所属学会】日本宗教学会、日本文化人類学会、日本アフリカ学会

【主要業績】

[単著]

竹沢尚一郎

- 2013 『被災後を生きる——吉里吉里・大槌・釜石奮闘記』東京：中央公論社。
- 2010 『社会とは何か——システムからプロセスへ』（中公新書）東京：中央公論社。
- 2007 『人類学的思考の歴史』京都：世界思想社。

【受賞歴】

1988 日本宗教学会賞

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

(1) アフリカ史研究

(2) 被災のコミュニティ研究

・研究の目的、内容

- ①考古学発掘を実施し、その成果を通じてアフリカ史を書き直すことをめざす。
- ②東日本大震災の被災地で、被災後何が起こったかを現地調査を踏まえて記録・分析する。

・成果

アフリカ史関係（日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（A）「世界の中のアフリカ史の再構築」平成25-29年）。

Shoichiro Takezawa et Mamadou Cissé, éd.,

2016 *Sur la trace des grands empires : Recherches archéologiques au Mali, Etudes maliennes, numero special*

Shoichiro Takezawa et Mamadou Cissé, éd.,

2017 *Sur la trace des grands empires : Recherches archéologiques au Mali, L'Harmattan.* (再版)

被災社会の研究（三井物産環境基金補助金、平成23-26年）

Shoichiro Takezawa, 2016, *The Aftermath of the East Japan Earthquake and Tsunami: Living among the Rubble*, Lexington Books.

Takezawa Shoichiro, 2016, « Par-dela du trauma: Iwate (Japon), après le 11 mars 2011 », *Techniques & Culture*, 65/66 : 48-59 (査読あり)

その他関連論文

竹沢尚一郎

2016 「真島一郎・川村伸秀編『山口昌男——人類学的思考の沃野』の書評」『アフリカ研究』89:73-76.

2017 「東日本大震災の経験に学ぶ」『月刊みんぱく』2月号

翻訳

スクリブナー思想史大事典翻訳編集委員会訳

2016 『スクリブナー思想史大事典』丸善出版（共同監訳）。

口頭発表

2016 「アフリカとグローバルヒストリー：アフリカとアジアの関係を歴史化する、10-11世紀のガオ（西アフリカ）で出土した中国製磁器」アフリカ学会、6月4日

2017 「津波を越えて生きる——大槌町の奮闘の記録」みんぱくゼミナール、2月18日

2017 「東日本大震災から学ぶ——豊かな暮らしのために——」みんぱく公開講演会「恵（めぐ）みの水、災（わざわ）いの水」毎日新聞社、3月21日

◎出版物による業績

[単著]

Takezawa, S.

2016 *The Aftermath of the East Japan Earthquake and Tsunami: Living among the Rubble*. Lanham: Lexington Books.

[編著]

Takezawa, S. et Mamadou Cissé (eds.)

2016 *Sur la trace des grands empires : Recherches archéologiques au Mali*. Etudes maliennes, numero special. [査読有]

2017 *Sur la trace des grands empires: Recherches archéologiques au Mali*. L'Harmattan.

[論文]

Takezawa, S.

2016 Par-dela du trauma: Iwate (Japon), après le 11 mars 2011. *Techniques & Culture* 65/66: 48-59. [査読有]

[その他]

竹沢尚一郎

2016 「真島一郎・川村伸秀編『山口昌男——人類学的思考の沃野』の書評」『アフリカ研究』89 : 73-76。

2017 「東日本大震災の経験に学ぶ」『月刊みんぱく』41(2) : 2-3。

[翻訳]

スクリブナー思想史大事典翻訳編集委員会訳

2016 『スクリブナー思想史大事典』東京：丸善出版（共同監訳）。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年6月5日 「アフリカとグローバルヒストリー——アフリカとアジアの関係を歴史化する、10-11世紀のガオ（西アフリカ）で出土した中国製磁器」日本アフリカ学会第53回学術大会、日本大学

・研究講演

2017年3月21日 「東日本大震災から学ぶ——豊かな暮らしのために」みんなく公開講演会『恵（めぐ）みの水、災（わざわ）いの水』毎日新聞社オーバルホール

・みんなくゼミナール

2017年2月18日 「津波を越えて生きる——大槌町の奮闘の記録」第465回みんなくゼミナール

◎調査活動

・海外調査

2016年6月27日～7月11日—フランス（トゥールーズ大学において開催されるアフリカ考古学会で発表、ボルドー大学アフリカ研究所において資料収集及びパリ大学アフリカ研究所において著書にかかる評価会に参加）

2016年12月10日～12月23日—フランス（パリ第1大学で講演と資料収集・社会科学高等研究院で講演と資料収集）

◎大学院教育

・論文審査

審査委員（1件）

・指導教員

主任指導教員（1名）、副指導教員（1名）

出口正之 [でぐち まさゆき]—————教授

1955年生。【学歴】大阪大学人間科学部人間科学科卒（1979）【職歴】ジョンズ・ホプキンス大学国際フィランソロピー研究員（1991）、財団法人サントリー文化財団事務局長（1992）、総合研究大学院大学教育研究交流センター教授（1995）、総合研究大学院大学学長補佐（2001）、国立民族学博物館民族学研究開発センター教授（2003）、国立民族学博物館文化資源研究センター教授（2004）、総合研究大学院大学文化科学研究科兼任（2004）、内閣府公益認定等委員会委員（2010）、国立民族学博物館民族文化研究部教授（2013）、総合研究大学院大学教授（2014）【専攻・専門】NPO、メセナ、フィランソロピー、ボランティア、言政学【所属学会】国際NPO・NGO学会（ISTR = International Society for Third Sector Research）、米国NPO学会（ARNOVA = The Association for Research on Nonprofit Organizations and Voluntary Action）、非営利法人研究学会、日本文化人類学会

【主要業績】

[著書]

出口正之

1993 『フィランソロピー』東京：丸善出版。

[共編著]

Vinken, H., Y. Nishimura, B. L. J. White, and M. Deguchi (eds.)

2010 Civic Engagement in Contemporary Japan Civic Engagement in Contemporary Japan. New York/Dordrecht/Heidelberg/London: Springer.

本間正明・出口正之編著

1996 『ボランティア革命』東京：東洋経済新報社。

[分担執筆]

Deguchi, M.

2001 The Distortion between Institutionalized and Noninstitutionalized NPO: New Policy Initiative and the Nonprofit Organizations in Japan. In H. K. Anheier, J. Kendall (eds.) *Third Sector Policy at the Crossroads: An International Nonprofit Analysis*, pp.277-301. London and New York: Routledge.

【受賞歴】

1988 東洋経済高橋亀吉賞最優秀賞

1988 日経産業新聞15周年記念論文最優秀賞

1995 ESP 大来佐武郎賞

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

公益法人その他の組織とフィランソロピーの総合的研究

・研究の目的、内容

科学研究費挑戦的萌芽研究「法・会計・文化融合型の公共政策国際比較研究 チャリティ制度を事例に」に基づき、公益認定等委員会制度及び 公益法人その他の民間非営利公益団体（＝チャリティ）の国際比較研究を実施する。また、みんぱく内の共同研究に研究代表者として（「会計学と人類学の融合」）を運営した。

・成果

雑誌論文・報告書等

- 2017 「法人形態から見た『チャリティ・公益法人制度』の国際比較：非営利の法人制度と会計を巡っての政策人類学的比較研究」非営利法人研究会誌
- 2016 「“クリーブ現象”としての収支相償論」非営利法人研究会誌、非営利法人研究会 Vol.18, pp.29-38（査読あり）
- 2016 GLOBALIZATION, GLOCALIZATION, AND GALÁPAGOS SYNDROME: PUBLIC INTEREST CORPORATIONS IN JAPAN. *International Journal of Not-for-Profit Law*, w / vol.18, no.1, May 2016 pp.5-14（査読あり）
- 2017 「代議員制と理事の定足数」『公益・一般法人』2017年3月1日号（936）pp.66-73（査読なし）
- 2017 「任意の役職・機関」『公益・一般法人』2017年2月1日号（934）pp.44-48（査読なし）
- 2017 「『自主公演』と『主催公演』の違いは？」『公益・一般法人』2017年1月1日号（932）pp.44-46
- 2016 「公正さの公表が求められる表彰・コンクール、競技会」『公益・一般法人』2016年12月1日号（930）pp.39-43（査読なし）
- 2016 「公募助成と非公募助成」『公益・一般法人』2016年11月1日号（928）pp.79-85（査読なし）
- 2016 「資金貸付の認定基準を巡る複雑な関係」『公益・一般法人』2016年10月1日号（926）pp.32-34（査読なし）
- 2016 「議論があった博物館等の展示と施設の貸与」『公益・一般法人』2016年9月1日号（924）pp.41-45（査読なし）
- 2016 「『内閣府研究会報告』が示す会計と制度を巡る課題」『公益・一般法』2016年8月1日号（922）pp.34-39（査読なし）
- 2016 「相談、調査、キャンペーンの公益性」『公益・一般法人』2016年8月1日号（922）pp.10-16（査読なし）
- 2016 「講座や体験活動の公益性判断」『公益・一般法人』2016年7月1日号（920）pp.40-44（査読なし）
- 2016 「公益性とは？公益目的事業のチェックポイント」『公益・一般法人』2016年6月1日号（918）pp.57-63（査読なし）
- 2016 「『公益目的事業財産』の意義」『公益・一般法人』（916）2016年5月1日号（査読なし）pp.80-89
- 2016 「シ・プレ原則と他の団体の意思決定に関与することができる財産」『公益・一般法人』（914）pp.58-62（査読なし）

口頭発表等

- 2016 Charity Regulation: Drivers for Differences and Similarities in Accountability and Transparency (Carolyn Cordery と共著) Presenting paper for the 12th ISTR International Conference Ersta Sköndal University College Stockholm, Sweden 28 June – 1 July 2016
- 2016 A Sectorial Labyrinth: Legal and Accounting Frameworks of the Third Sector Organizations in Japan for 120 Years presenting paper for the 12th ISTR International Conference Ersta Sköndal University College Stockholm, Sweden, 28 June – 1 July 2016
- 2016 「日本・英国・ニュージーランドの100年：法人格とチャリティ資格」非営利法人研究会関西部会、平成28年4月23日、京都市市民活動総合センター会議室
- 2016 「法人形態から見たチャリティ資格の国際比較：法人制度と会計を巡って 政策人類学的比較研究」

- 第20回非営利法人研究学会全国大会、平成28年9月16日～18日、成蹊大学
- 2016 共同研究会 会計学と人類学はどこで繋がるのか、平成28年10月29日
- 2016 「これからの公益活動と大阪の役割～「民」が主導する社会づくり～」大阪コミュニティ財団、平成28年11月7日
- 2016 「NPO法人を領域とした領域設定総合化法によるトラスフォーマティブ・リサーチ」非営利法人研究学会 NPO 法人部会
- 2017 Civil Society in Asia: International Conference in Melbourne、平成29年2月2日、メルボルン大学 philanthropy
- 2017 「非公募助成の多様な取り組みとその意義」助成財団フォーラム『アクティブな助成事業へのチャレンジ～公募によらない助成の意義と課題～』主催：公益財団法人助成財団センター、場所：大手町ファースト スクエア カンファレンス「イーストタワー」、2017年2月16日
- 2017 「『民間公益』の本質的視点とは何か？」安立研究室日本の非営利／米国の非営利レクター・サラモンの非営利セクター論を読み直す 研究会、平成29年2月19日
- 2017 「クレオ活動がつくるこれからの未来」北浜サロン 私学会館、平成29年2月22日

◎出版物による業績

〔論文〕

出口正之

- 2016 「シ・プレ原則と他の団体の意思決定に関与することができる財産」『公益・一般法人』914：58-63。
- 2016 「『公益目的事業財産』の意義」『公益・一般法人』916：80-89。
- 2016 「公益性とは？公益目的事業のチェックポイント」『公益・一般法人』918：57-63。
- 2016 「講座や体験活動の公益性判断」『公益・一般法人』920：40-45。
- 2016 「相談、調査、キャンペーンの公益性」『公益・一般法人』922：34-39。
- 2016 「“クリーブ現象”としての収支相償論」『非営利法人研究学会誌』18：29-38。[査読有]
- 2016 「最新版『内閣府研究会報告』が示す会計と制度を巡る課題」『公益・一般法人』922：10-17。
- 2016 「二つのフィランソロピー元年」『フィランソロピー』374：8-11。
- 2016 「議論があった博物館等の展示と施設の貸与」『公益・一般法人』924：41-45。
- 2016 「資金貸付の認定基準を巡る複雑な関係」『公益・一般法人』926：32-34。
- 2016 「公募助成と非公募助成」『公益・一般法人』928：79-85。
- 2016 「公正さの公表が求められる表彰・コンクール、競技会」『公益・一般法人』930：39-43。
- 2017 「『自主公演』と『主催公演』の違いは？」『公益・一般法人』932：44-46。
- 2017 「任意の役職・機関」『公益・一般法人』934：44-48。
- 2017 「代議員制と理事の定足数」『公益・一般法人』936：66-73。

Deguchi, M.

- 2016 GLOBALIZATION, GLOCALIZATION, AND GALÁPAGOS SYNDROME: PUBLIC INTEREST CORPORATIONS IN JAPAN. *International Journal of Not-for-Profit Law* 18(1): 5-14. [査読有]

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

- 2016年10月29日 「文化人類学と会計学はどこで繋がるのか」『会計学と人類学の融合』国立民族学博物館
- 2016年11月26日 「『会計』及び『会計基準』等の定義について」『会計学と人類学の融合』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2016年4月23日 「日本・英国・ニュージーランドの100年——法人格とチャリティ資格」非営利法人研究学会 関西部会、京都市市民活動総合センター
- 2016年6月28日～7月1日 ‘A Sectorial Labyrinth: Legal and Accounting Frameworks of the Third Sector Organizations in Japan for 120 Years’ The 12th International Society for Third Sector Research International Conference, Ersta Sköndal University College Stockholm, Sweden
- ‘Charity Regulation: Drivers for Differences and Similarities in Accountability and Transparency’ The 12th International Society for Third Sector Research International Conference, Ersta Sköndal University College Stockholm, Sweden
- 2016年9月18日 「法人格から見たチャリティ資格の国際比較」非営利法人研究学会第20回大会、成蹊大学

- 2016年10月22日 「英米における小規模チャリティの現金主義と比例原則」 非営利法人研究学会関西支部会、関西学院大学大阪梅田キャンパス K. G. ハブ スクエア大阪
- 2016年11月3日 「NPO 法人を領域とした領域設定総合化法によるトラスフォーマティブ・リサーチ」 非営利法人研究学会 NPO 法人部会、国立民族学博物館
- 2017年2月2日～2月3日 'Philanthropy' Civil Society in Asia: International Conference in Melbourne, University of Melbourne, Australia [招待講演]

◎調査活動

・海外調査

- 2016年6月27日～7月3日—スウェーデン（国際NPO・NGO学会に参加）
- 2016年12月12日～12月17日—ニュージーランド（ニュージーランドにおけるチャリティ制度の調査）
- 2017年1月30日～2月10日—オーストラリア（メルボルン大学での Asian Civil Society Conference 2017への招待出席及びオーストラリアにおけるチャリティ制度の科研費調査）

◎大学院教育

・担当授業

- 1年ゼミ（比較文化学基礎演習Ⅰ、Ⅱ、地域文化学基礎演習Ⅰ、Ⅱ）

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

- 公益財団法人助成財団センター評議員、茨木市文化振興施策推進委員会委員長、大阪府特別参与、大阪市特別参与、公益社団法人日本フィランソロピー協会まちかどのフィランソロピスト選考委員長、公益財団法人助成財団センター評議員

・非常勤講師

- 放送大学（集中講義）「ボランティアと社会」

◎学会の開催

- 2016年11月3日 非営利法人研究学会 NPO 法人部会、国立民族学博物館

寺田吉孝 [てらだ よしたか] ————— 教授

【学歴】ワシントン大学総合学部学士課程修了（1979）、ワシントン大学音楽部修士課程修了（1983）、ワシントン大学音楽部博士課程修了（1992）【職歴】ワシントン大学音楽部講師（1994）、ピッツバーグ大学船上大学プログラム講師（1995）、国立民族学博物館第2研究部助手（1996）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（1998）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1999）、国立民族学博物館民族文化研究部教授（2008）【学位】Ph. D.（ワシントン大学音楽部民族音楽学科 1992）、M. A.（ワシントン大学音楽部民族音楽学科 1983）【専攻・専門】民族音楽学【所属学会】東洋音楽学会、Society for Ethnomusicology、International Council for Traditional Music、British Forum for Ethnomusicology

【主要業績】

[編著]

- Terada, Y. (ed.)
2008 *Music and Society in South Asia: Perspectives from Japan* (Senri Ethnological Studies 71). Osaka: National Museum of Ethnology.
2001 *Transcending Boundaries: Asian Musics in North America* (Senri Ethnological Reports 22). Osaka: National Museum of Ethnology.

[論文]

- Terada, Y.
2000 T. N. Rajarattinam Pillai and Caste Rivalry in South Indian Classical Music. *Ethnomusicology* 44(3): 460-490.

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

音楽・芸能の伝承における映像音響メディアの活用

・研究の目的、内容

民博が映像音響メディアを用いて蓄積してきた音楽・芸能の情報は膨大な量に達しており、その資料的価値は高い。しかし、活発な収集・制作活動に比べ、映像音響資料の活用に関する議論はこれまで十分に行われておらず、館外での利用、特に取材対象国・地域においての利用は極めて限定的である。本研究は、これまでの番組作成と活用のプロセス（事前調査、取材、編集、上映など）を見直し、音楽・芸能の伝承に寄与することができる映像音響番組の制作方法を検討することを目的とする。特に今年度は、国際伝統音楽学会の「映像音響民族音楽学」研究グループの第1回シンポジウムに参加し、国際的なネットワークの強化を図りたい。

・成果

映像音響メディアが音楽・芸能の伝承や活性化に貢献しうる条件について考察を深めるために、複数のプロジェクトを並行して進めた。

1. スロヴェニア・リュブリャナ市で開催された国際伝統音楽学会の「映像音響民族音楽学」研究グループの第1回国際シンポジウムに参加して研究発表を行うとともに、民博製作の映像番組を上映したうえで制作に関する議論を行った。
2. 平成26年度にスペイン・ヴァリャドリッド市で開催された映像関連のシンポジウムの報告論集を共編で刊行した。
3. 平成27年度から開始した在日コリアンの音楽文化に関する映像取材を終了した。取材素材に基づく映像番組の制作を行うために平成29年度の情報プロジェクトを申請し、すでに実施が承認されている。
4. 民博が収集した映像音響資料の高次活用に関して、トルクメニスタンとインドにおいて研究発表を行った。
5. 平成27年度に開催した研究公演『時を超える南インドの踊り』にもとづくマルチメディア番組の編集を完了した。

◎出版物による業績

[共編書]

Terada, Y., L. D'Amico, E. Camara de Landa and M. Isolabella (eds.)

2016 *Ethnomusicology and Audiovisual Communication: Selected Papers from MusiCam 2014 Symposium*. Valladolid: Universidad de Valladolid.

[論文]

Terada, Y.

2016 On Making *Drumming out a Message*: Filmmaking and Marginalized Communities. In E. Camara de Landa, L. D'Amico, M. Isolabella and Y. Terada (eds.) *Ethnomusicology and Audiovisual Communication: Selected Papers from MusiCam 2014 Symposium*, pp.71-83. Valladolid: Universidad de Valladolid.

[その他]

寺田吉孝

2016 「民博スタイルの民族誌映画」『月刊みんぱく』40(12):6-7。

Terada, Y.

2017 Danny Kalanduyan was a Kind and Caring Friend. *International Examiner* 44(1):13.

◎映像音響メディアによる業績

・国立民族学博物館映像音響資料の制作・監修

[DVD]

南 真木人・寺田吉孝制作監修

2017 『ネパールの結婚式』（みんぱく映像民族誌 第22集）。

[マルチメディア番組]

寺田吉孝制作監修

2017 『時を超える南インドの踊り』（日本語版、英語版）。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2016年6月24日 'Beyond the Sulu Zone: Presenting gong music to an East Asian museum public.' AAS-in-ASIA Conference "Horizon of Hope" 同志社大学
- 2016年8月25日 'Practicing audiovisual ethnomusicology with marginalized communities.' 国際伝統音楽学会 (ICTM) 「映像音響民族音楽学」研究グループ 第1回国際大会、リュブリャナ市立博物館 (スロヴェニア、リュブリャナ)
- 2016年11月3日 'Safeguarding the shadow puppet theater of Cambodia.' 国際学術会議 The Role of the Gorogly Epos in the World Culture、国立トルクメニスタン博物館 (トルクメニスタン、アシガバート)
- 2016年12月26日 'Safeguarding Cambodian shadow puppet theater through audiovisual media.' マドラス音楽院 第90回音楽会議 (インド、チェンナイ)

・研究講演

- 2016年9月1日 'Audiovisual media and safeguarding endangered performing arts.' 民族学・フォークロア研究所、ザグレブ、クロアチア
- 2016年9月14日 「音楽からインド社会を知る——弟子と調査者のはざま」カレッジシアター「地球探求紀行」あべのハルカス近鉄本店スペース9
- 2016年9月24日 「音楽からインド社会を知る」NHK文化センター梅田教室
- 2017年1月2日 'Challenges for traditional art forms in changing times: A look at shadow puppetry in Cambodia.' Indian National Trust for Art and Cultural Heritage、チェンナイ、インド
- 2017年1月7日 「The making of Angry Drummers」マドラス大学「メディアと社会」セミナーシリーズ、マドラス大学、チェンナイ、インド

・みんなくウィークエンド・サロン

- 2016年12月11日 「民族音楽学の考え方」第447回みんなくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

・広報・社会連携活動

[映像番組上映]

- 2016年8月27日 *Samir Kurtov: A Zurna Player from Bulgaria* (英語、2008年制作) 国際伝統音楽学会 (ICTM) 「映像音響民族音楽学」研究グループ、第1回国際大会、リュブリャナ市立博物館 (スロヴェニア、リュブリャナ)
- 2016年11月13日 「怒——大阪浪速の太鼓集団」台湾文化光点計画上映会・シンポジウム『民族誌映画にみる文化への視点——台湾、日本、ノルウェー、エチオピア』国立民族学博物館
- 2016年11月24日 *Sbaek Thomm: The Large Shadow Puppet Theater of Cambodia* (英語版、2009年) 第6回ネパール国際民俗音楽映画祭 (ネパール、カトマンズ)
- 2016年12月26日 *Sbaek Thomm: The Large Shadow Puppet Theater of Cambodia* (英語版、2009年) マドラス音楽院 第90回音楽会議 (インド、チェンナイ)
- 2017年1月2日 *Sbaek Thomm: The Large Shadow Puppet Theater of Cambodia* (英語版、2009年) Indian National Trust for Arts and Cultural Heritage (インド、チェンナイ)

◎調査活動

・国内調査

- 2016年11月27日 大阪市中央区 (大槻能楽堂における公演の記録)
- 2016年12月9日 埼玉県桶川市 (李政美インタビュー記録)
- 2017年2月6日 大阪市生野区 (安聖民他インタビュー記録)
- 2017年3月23日 大阪市浪速区、生野区 (大阪人権博物館、コリア NGO センターでのインタビュー記録)

・海外調査

- 2016年8月22日～9月7日 イタリア、スロヴェニア、クロアチア (スロヴェニアにおいて国際伝統音楽学会「映像音響民族音楽学」研究グループの第1回国際シンポジウムに参加及びクロアチアにおいてチャルメラ系楽器の予備調査)
- 2016年10月31日～11月6日 トルクメニスタン (国際会議「叙情詩キョロールと世界文化における役割」の参加と発表)
- 2016年12月18日～2017年1月9日 インド (南インド古典音楽・舞踊における在外タミル人の活動に関する実

態調査)

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（1人）、副指導教員（1人）

特別共同利用研究員の研究指導教員（1人）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

人間文化研究機構地域研究推進事業「南アジア地域研究」国立民族学博物館拠点拠点副代表、科学研究費補助金（基盤研究（C））「スリランカ系タミル人によるインド舞踊の発展と再々構築化に関する全体関連的研究」（研究代表者：竹村嘉晃）研究分担者

◎社会活動・館外活動等

- ・他の機関から委嘱された委員など

国際伝統音楽学会 International Council for Traditional Music 理事、学会誌 *Yearbook for Tracitional Music* 映画・ビデオレビュー編集委員、「音楽とマイノリティ」研究グループ書記長、*Ethnomusicology Forum* 誌（イギリス）編集助言委員、*Asian Music* 誌（アメリカ合衆国）編集助言委員、国際民俗音楽映画祭（ネパール）国際運営委員、京都市立芸術大学博士論文審査委員

森 明子 [もり あきこ] ————— 教授

【学歴】筑波大学大学院博士課程歴史・人類学研究科単位取得退学（1989）【職歴】筑波大学歴史・人類学系文部技官（1989）、筑波大学歴史・人類学系助手（1990）、国立民族学博物館第3研究部助手（1990）、国立民族学博物館第3研究部助教授（1997）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1999）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2006）、国立民族学博物館研究戦略センター長（2009）、民族文化研究部教授（2011）【学位】文学博士（筑波大学大学院歴史・人類学研究科 1997）、文学修士（筑波大学大学院歴史・人類学研究科 1984）【専攻・専門】文化人類学 1）ヨーロッパ人類学、2）ドイツ、オーストリアの民族誌研究、3）民族学・民俗学の歴史的展開【所属学会】日本文化人類学会

【主要業績】

[単著]

森 明子

1999 『土地を読みかえる家族——オーストリア・ケルンテンの歴史民族誌』東京：新曜社。

[編著]

森 明子編

2014 『ヨーロッパ人類学の視座——ソーシャルなるものを問い直す』京都：世界思想社。

2004 『ヨーロッパ人類学——近代再編の現場（フィールド）から』東京：新曜社。

2002 『歴史叙述の現在——歴史学と人類学の対話』京都：人文書院。

Mori, A. (ed.)

2013 *The Anthropology of Europe as Seen from Japan: Considering Contemporary Forms and Meanings of the Social* (Senri Ethnological Studies 81). Osaka: National Museum of Ethnology.

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

人類学的比較の再考

・研究の目的、内容

比較は、文化人類学研究を、基底的に性格づけている。ポストモダン人類学は、比較のための単位を実体的・硬直的にとらえる文化の理解を批判したが、これに対して近年、超越的な比較ではない水平的な比較という議論が起こっている。全体を見通すのではない部分的なヴィジョンに着目して、人類学的な比較を説明しようとするものである。本研究は、こうした議論を参照しながら、ヨーロッパ人類学の実践において、民族誌記述と

人類学的比較が、いかに照射しあっているのか、検討するものである。

研究は、民族誌研究と、ディシプリンの方向性の検討との2方向から、以下に述べるように、複数のプロジェクトのもとにすすめる。第一の民族誌研究については、進行中の科研「ポスト福祉国家時代のケア・ネットワーク編成に関する人類学的研究」(研究代表者 森)を基盤として海外学術調査を継続し、科研メンバーとの共同研究と連動して進めていく。さらに、本館共同研究「家族と社会の境界面の編成に関する人類学的研究——保育と介護の制度化／脱制度化を中心に」(研究代表者 森)とも連動して、議論を深化させる。第二のディシプリンに焦点をあてる研究は、文化人類学をめぐる国内および海外の研究動向を明らかにしていくことから接近する。研究分担者として参加している科研「東アジア〈日常学としての民俗学〉の構築に向けて：日中韓と独との研究協業網の形成」(研究代表者 岩本-東京大学)において、ドイツと日中韓の民俗学・民族学の比較という見地から人類学的比較を再考し、また、神戸大学において本年度よりスタートする研究拠点形成事業「日欧亜におけるコミュニティの再生を目指す移住・多文化・福祉政策の研究拠点形成」において、学際的・国際的な共同研究のなかでディシプリンの研究方向を検討する。

・成果

- ① ケアをめぐる民族誌研究として、科研費研究「ポスト福祉国家時代のケア・ネットワーク編成に関する人類学的研究」(研究代表者・森明子)の資金によって、ベルリンにおいて調査研究を行った。さまざまな保育園を対象とし、保育をめぐるケアのあり方、歴史的展開、現在の実態について、関連する資料を収集し、保育士や父兄にインタビュー調査を行うとともに、参与観察を行った。また、ベルリンの研究者ネットワークの構築・強化・拡大をはかった。
- ② ケアをめぐる民族誌研究の一環として、共同研究「家族と社会の境界面の編成に関する人類学的研究——保育と介護の制度化／脱制度化を中心に」を主催した。この共同研究の拡大的展開として、科研費研究「ポスト福祉国家時代のケア・ネットワーク編成に関する人類学的研究」(研究代表者・森明子)の資金により、オーストリア・ウィーン大学とタイ・チェンマイ大学よりふたりの研究者を招聘し、コロッキウム(Colloquium “Thinking about care as social organization: A Discussion with T. Thelen and K. Bua-daeng” 2017年2月19日、於民博)を開催し、国内の共同研究者を招集して、英語による集中的な議論をおこなった。
- ③ ケアをめぐる民族誌研究の成果公開のひとつとして、日本文化人類学会研究大会(2016年5月29日、於南山大学)で口頭発表した。
- ④ 学術研究動向調査(受託研究)の資金により、ブリュッセル、アントワープ、ビーレフェルト、ケルンにおいて、学術研究動向を調査した。ヨーロッパでもっとも先進的な展示を展開している専門博物館と、大学研究所を訪問し、研究者にインタビュー調査した。また、ビーレフェルト大学の学際研究センターで合宿形式にて開催されている国際ワークショップ・シリーズのひとつに、ディスカッサントとして参加した。
- ⑤ ディシプリンの方向性の検討として、学術研究動向調査(受託研究)の一環として、欧米の主要な専門ジャーナルの掲載論文のキーワードについて、近年の傾向を分析した。

◎出版物による業績

[エッセイなど]

森 明子

2016 「シンセキのオバサンのような立ち位置」『月刊みんぱく』40(10):10-11。

2016 「そして、私たちは愛に帰る——ドイツとトルコを結ぶ第二世代の物語」小長谷有紀ほか編『ワールド・シネマ・スタディーズ』pp.23-30, 東京:勉誠出版。

2017 「季節の行事——お正月とクリスマス」野林厚志監修『日本と世界のくらし』pp.42-45, 東京:汐文社。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年5月28日～5月29日 「ケア概念の可能性——社会的なものの民族誌のために」日本文化人類学会第50回研究大会、南山大学

・共同研究会での報告

2016年5月14日 「幼少期への介入——ベルリン調査から考える」『家族と社会の境界面の編成に関する人類学的研究——保育と介護の制度化／脱制度化を中心に』国立民族学博物館

◎調査活動

・海外調査

2016年8月27日～9月2日—タイ（研究集会準備のための調査研究及びタイ・チェンマイにおける流民の社会的包摂に関する現地調査）

2016年10月12日～11月11日—ドイツ（ベルリンにおける保育・養育制度の編成に関する調査研究）

2017年3月15日～3月30日—ベルギー、ドイツ（ベルギー、ドイツにおける研究動向調査）

◎大学院教育

・大学院ゼミでの活動

ヨーロッパ文化研究演習Ⅰ（現代人類学とソーシャルなるものの意味）、論文ゼミで論文指導

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（基盤研究（A））「東アジア〈日常学としての民俗学〉の構築に向けて——日中韓と独との研究協業網の形成」（研究代表者：岩本通弥）研究分担者、日本学術振興会委託研究「文化人類学・民俗学分野に関する学術研究動向——文化人類学における理論的研究の新しい展開」

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

独立行政法人日本学術振興会学術システム研究センター専門研究員、独立行政法人大学改革支援・学位授与機構大学機関別認証評価委員会専門委員、京都大学人文科学研究所 共同利用・共同研究拠点共同研究委員会委員、日本民俗学会国際交流特別委員会委員、Wissenschaftlicher Beirat von Historische anthropologie: Kultur-Gesellschaft-Alltag (Köln, Weimar, Wien)（ドイツ・オーストリアで刊行されている学術雑誌の研究顧問）

◎学会・研究集会の開催

2017年2月19日 Colloquium “Thinking about care as social organization: A Discussion with T. Thelen and K. Buadaeng” National Museum of Ethnology, Osaka.

齋藤玲子 [さいとう れいこ] ————— 准教授

1966年生。【学歴】北海道大学文学部行動科学科卒（1989）【職歴】北海道教育委員会社会教育課学芸員（1989）、北海道立北方民族博物館学芸員（1990）、北海道立北方民族博物館主任学芸員（2005）、北海道立北方民族博物館学芸主幹（2010）、国立民族学博物館民族文化研究部助教（2011）【専攻・専門】文化人類学・アイヌの文化変容と表象、北アメリカ北西海岸先住民の美術工芸【所属学会】日本文化人類学会

【主要業績】

[編著]

齋藤玲子編

2015 『カナダ先住民芸術の歴史的展開と現代的課題——国立民族学博物館所蔵のイヌイットおよび北西海岸先住民の版画コレクションをとらえて』（国立民族学博物館調査報告131）大阪：国立民族学博物館。

齋藤玲子・大村敬一・岸上伸啓編

2010 『極北と森林の記憶——イヌイットと北西海岸インディアンの版画』京都：昭和堂。

[論文]

齋藤玲子

2012 「アイヌ工芸の200年——その歴史概観」山崎幸治・伊藤敦規編『世界のなかのアイヌ・アート（先住民アート・プロジェクト報告書）』pp.45-60, 札幌：北海道大学アイヌ・先住民研究センター。

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

アイヌ文化の継承と社会的背景の研究

・研究の目的、内容

アイヌ民族は、江戸時代中ごろから徐々に和人の支配下におかれ、明治・大正・昭和と時代を経るにつれて独

自の文化の継承は次第に困難になり、アイヌ文化は途絶えた、とまで言われるような状態になった。しかし、実際は形を変えながらも多くの文化要素が受け継がれている。こうしたアイヌ文化の継承と当時の社会状況との関係について、物質文化と芸能に注目し、研究を続けている。最終的に、物質文化や芸能が、記録の多く残る江戸時代後期からどう変化してきたかを明らかにし、現代のアイヌ文化の位置づけを示すことを目指す。

まず、前年度に終了した共同研究「明治から終戦までの北海道・樺太・千島における人類学・民族学研究と収集活動」の報告書をまとめるなかで、アイヌの物質文化の変化を示す。また、科学研究費補助金B「北方寒冷地域における織布技術と布の機能」（代表：佐々木史郎 H26～28）の研究分担者として、アイヌの織物の技術継承についても引き続き調査をすすめる。

・成果

アイヌ文化の継承に関しては、「民族文化の振興と工芸——北海道二風谷の木彫盆・イタから考える」飯田卓編『文明史のなかの文化遺産 下巻』に寄稿したほか、第464回みんなくゼミナール「アイヌ文化と観光」をはじめ、多数の講演等をおこなった。また、儀礼用のガラス玉製の首飾り（タマサイ）について、北東アジア地域研究拠点の例会での研究発表と特別展「ビーズ」図録への寄稿をした。

科研費「北方寒冷地域における織布技術と布の機能」に関しては、共著で「釧路市立博物館所蔵アイヌ木綿衣について」『釧路市立博物館紀要』第37輯 pp.17-28を寄稿した。

共同研究「明治から終戦までの北海道・樺太・千島における人類学・民族学研究と収集活動」の報告書は編集途中である。

◎出版物による業績

[論文]

佐々木史郎・吉本 忍・齋藤玲子・津田命子・日高真吾・和高智美・右代啓視・戸田恭司
2017 「釧路市立博物館所蔵アイヌ木綿衣について」『釧路市立博物館紀要』37：17-28。

[監修]

齋藤玲子
2016 「極北のフォークアート」（アイヌの部分）『季刊 TRANSIT』34：112-117。

[その他]

齋藤玲子
2016 「『アイヌ刺しゅう』の担い手たち」（手芸考）『月刊みんなく』40(8)：18-19。
2016 「国立民族学博物館の収蔵品① 二つの祭壇」『文部科学教育通信』395：2。
2016 「国立民族学博物館の収蔵品② 現代のアイヌ・アート」『文部科学教育通信』396：2。
2016 「先住民族を知ろう アイヌ」『朝日小学生新聞』10月2日。
2016 「伝統に基づくあらたな文化の創造」『月刊みんなく』40(11)：2-3。
2016 「伝統家屋『チセ』の再生」『月刊みんなく』40(11)：7。
2016 「新『アイヌの文化』展示への思い——同時代を生きる者として博物館で何ができるのか」（インタビュー記事）『国立民族学博物館友の会ニュース』235：1-2。
2016 「アイヌの世界観を人形劇で」『みんなく e-news』186：巻頭コラム。
2016 「アイヌ民族資料の活用のために」『民博通信』155：10-11。
2017 「北米先住民のビーズ装飾——ヤマアラシのとげからガラスビーズへ」『月刊みんなく』41(3)：6。
2017 「ガラスビーズ以前の装飾技術」池谷和信編『ビーズ——つなぐ かざる みせる』pp.62-63, 大阪：国立民族学博物館。
2017 「母から娘へ受け継がれるアイヌのタマサイ」池谷和信編『ビーズ——つなぐ かざる みせる』pp.80-81, 大阪：国立民族学博物館。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・人間文化研究機構のシンポジウムなどでの報告

2016年10月15日 「アイヌの食と交易」およびパネルディスカッション、第29回人文機構シンポジウム『和食文化の多様性——日本列島の食文化を考える』、味の素グループ高輪研修センター
2017年1月27日 「アイヌにとってのタマサイ（玉の首飾り）——物質文化研究の可能性」人間文化研究機構基幹研究プロジェクト地域研究推進事業「北東アジア地域研究拠点」第8回月例会
2017年3月25日 「北東アジアのガラス玉の道——アイヌのタマサイを中心に」オーガナイザー・司会、人間文化研究機構基幹研究プロジェクト地域研究推進事業「北東アジア地域研究拠点」第10回月例会（特別展「ビーズ」関連公開研究会）

・ **みんぱくゼミナール**

2016年12月17日 齋藤玲子・中川裕（千葉大学教授）「アイヌ語はどこから来たのか。そして、どこへ行くのか。」第463回みんぱくゼミナール

2017年1月21日 「アイヌ文化と観光」第464回みんぱくゼミナール

・ **研究公演**

2016年12月3日 司会・座談会、みんぱく公演「アイヌ民話人形劇 ふんだりけったりクマ神さま」（アイヌ展示チアシリカラ！——冬のみんぱくフォーラム2017関連）、国立民族学博物館

2017年1月29日 司会・解説、みんぱく公演「トンコリ×ウポポ——アイヌ音楽ライブ by OKI / MAREWREW」（アイヌ展示チアシリカラ！——冬のみんぱくフォーラム2017関連）、国立民族学博物館

・ **広報・社会連携活動**

2016年6月25日 「アイヌの工芸と観光」追手門学院大学地域創造学2年生向け講義、国立民族学博物館

2016年7月15日 「アイヌ文化と博物館①民族の歴史と文化」大阪府高齢者大学、大阪府社会福祉会館

2016年7月22日 「アイヌ文化と博物館②コレクションの成り立ち」大阪府高齢者大学、大阪府社会福祉会館

2016年7月27日 「アイヌ民族の歴史と文化」尼崎市立中央公民館講座（市民大学）

2016年9月14日 「アイヌの文化・新展示について」MMP ステップアップ講座、国立民族学博物館

2016年10月3日 「日本の先住民族アイヌ」JICA 博物館学コース、国立民族学博物館

2016年11月28日 「アイヌの文化展示のリニューアルについて」（電話出演）、ハニーFM「ハニー・モーニング・トレイン」

2016年12月1日 「ミンパク オッタ カムイノミ」司会・解説、国立民族学博物館

2016年12月8日 「展示キュレーションの誘惑 ——新しいアイヌの文化展示ができるまで」連続講座みんぱく×ナレッジキャピタル、グランフロント大阪北館1階「カフェラボ」

2017年1月7日 齋藤玲子・藤戸ひろ子「アイヌ文化を楽しく学ぶ 関西での活動を例に」第462回みんぱく友の会講演会、国立民族学博物館

2017年1月9日 齋藤玲子・小笠原小夜「『アイヌ・アート』をもっと身近に イラストレーションから踊りまで」第116回みんぱく友の会東京講演会、アイヌ文化交流センター

2017年2月7日 「アイヌ民族の歴史と文化」大阪聖母女学院高校1年生向け講義、国立民族学博物館

・ **みんぱくウィークエンド・サロン**

2017年2月5日 「アイヌの衣文化」第453回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

・ **展示**

『アイヌの文化』展示新構築プロジェクトリーダー

◎ **調査活動**

・ **国内調査**

2016年8月26～29日—釧路市（釧路アイヌ協会カムイノミ（第45回春採コタン祭）の参与調査ならびに新構築フォーラム関連行事の打ち合わせ）

2016年11月13日—松阪市（松浦武四郎収集のアイヌ民具調査およびアイヌ文化伝承者からの聞き取り）

2017年3月13日～3月15日—平取町・苫小牧市（アイヌの衣類ならびにアットゥシ織りの技術に関する調査）

2017年3月19日～3月20日—水戸市（茨城県立歴史館）（水戸藩ゆかりの蝦夷地関連資料の調査ならびに特別展「イカラカラ——アイヌ刺繍の世界」展の視察）

◎ **上記以外の研究活動**

・ **人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など**

科学研究費（基盤研究（B））「北方寒冷地域における織布技術と布の機能」（研究代表者：佐々木史郎）研究分担者、科学研究費（基盤研究（A））「ネットワーク型博物館学の創成」（研究代表者：須藤健一）連携研究者

◎ **社会活動・館外活動等**

北海道立北方民族博物館研究協力員、（公財）アイヌ文化振興・研究推進機構平成29年度アイヌ工芸品展企画委員

新免光比呂 [しんめん みつひろ] 准教授

1959年生。【学歴】早稲田大学政治経済学部政治学科卒（1983）、東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了（1986）、東京大学大学院人文科学研究科博士課程満期退学（1992）【職歴】東方研究会専任研究員（1992）、横浜国立大学非常勤講師（1992）、帝京大学非常勤講師（1992）、国立民族学博物館第3研究部助手（1993）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（2000）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2002）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（2004）【学位】文学修士（東京大学大学院人文科学研究科 1986）【専攻・専門】宗教学・東欧研究【所属学会】宗教学会

【主要業績】

[単著]

新免光比呂

2000 『祈りと祝祭の国——ルーマニアの宗教文化』京都：淡交社。

[共著]

新免光比呂・保坂俊司・頼住光子

1998 『比較宗教への途3 人間の文化と神秘主義』東京：北樹出版。

[論文]

新免光比呂

1999 「社会主義国家ルーマニアにおける民族と宗教——民族表象の操作と民衆」『国立民族学博物館研究報告』24(1)：1-42。

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

ルーマニアの社会主義体制下での知識人について

・研究の目的、内容

ルーマニアの社会主義体制下における知識人のありようを、その思想と体制との関わりのなかで考察する。

・成果

ルーマニアの社会主義体制は、戦間期の右翼急進主義運動（レジオナル運動）に関与した知識人を徹底的に迫害し、そのイデオロギーを抑圧することで体制に従順な新たな知識人集団を生み出した。しかし、周辺化させられながらもコンスタンティン・ノイカは、知識人としてソクラテス的な教育によって民主革命後のルーマニア社会をリードする知識人を生み出した。昨年度は、そうした知識人の形成をコンスタンティン・ノイカのテキストを読み解きながら考察した。また、民主革命後のルーマニア大衆音楽に対する知識人層の反応に関する考察をもとに、国際フォーラム「東欧演歌と東アジアのポップフォーク：ユーラシア両端の音楽的平行現象」International Forum “Pop-folk genres in East Europe and East Asia: Parallel Phenomena on Both Sides of Eurasia”に参加して「西欧化のジレンマとマネーレ——ゆらぐルーマニア人のアイデンティティ」というテーマで発表を行った。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年5月14日 「アルフォンス・ミュシャの生きた東欧世界——宗教と民族を中心として」堺市アルフォンス・ミュシャ館

2017年2月15日 「西欧化とマネーレ——ゆらぐルーマニアのアイデンティティ」国際フォーラム『東欧演歌と東アジアのポップフォーク』大阪大学21世紀懐徳堂スタジオ

・広報・社会連携活動

2016年6月8日 「人生は明るく楽しく——ルーマニアの食文化」ナレッジ・キャピタル超学校みんぱく×ナレッジ・キャピタル——世界の『台所』、グランフロント大阪

◎調査活動

・国内調査

2016年9月23日一岡山県立博物館（現在の岡山県域に中心があり、古代に繁栄した吉備国をはじめとした原始・古代からの文化遺産の収集・保存について実地調査）

- 2016年10月14日—オリエン特美術館（国内唯一の古代オリエントを専門とする公立美術館であると同時に西日本における研究拠点としても機能している美術館の展示見学）
- 2016年11月11日—兵庫県朝来（展示イベント「ハチユカル——アルメニアの十字架石碑をめぐる物語」において借用した資料の返却と展示の評価に関する討論）
- 2016年12月10日～12月11日—大川周明の碑・石原莞爾墓所（戦前の右翼思想家である大川周明の碑、大川家本家を訪問して、その意義を考察するための資料収集。戦前の国家主義者であった石原莞爾の墓所を訪れ、その意義を考察するための資料収集）
- 2017年1月10日～1月11日—林原美術館・大原美術館（企業が設立した美術館の展示と運営に関する調査）
- 2017年1月22日～1月23日—国学院大学（科研「ファシズム期の古代理解に関する総合的研究」研究会参加。シルヴィオ・ヴィータ教授（京都外国語大学）による発表「昭和前期イタリア人宣教師の『古事記』——マリオ・マレガ（1902-1978）のイタリア語訳とその背景」を踏まえ日本における古代理解の問題について討議）

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員（1人）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（基盤研究（B））「ファシズム期の古代理解に関する総合的研究」（研究代表者：平藤喜久子）
研究分担者、科学研究費助成事業（基盤研究（B））「旧東欧地域における「演歌型」大衆音楽の比較研究」（研究代表者：伊東信宏）研究分担者

◎社会活動・館外活動等

平成28年度 JICA 課題別研修「博物館とコミュニティ開発コース」委員長

鈴木 紀 [すざき もと] ————— 准教授

1959年生。【学歴】東京大学教養学部教養学科卒（1982）、東京大学大学院社会学研究科修士課程修了（1985）、東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得退学（1991）【職歴】ニューヨーク州立大学ビンガムトン校人類学科教務助手（1992）、千葉大学文学部助教授（1996）、国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授（2007）、国立民族学博物館民族文化研究部准教授（2013）【学位】社会学修士（東京大学大学院 1985）【専攻・専門】開発人類学・ラテンアメリカ文化論 1）開発援助プロジェクト評価、2）フェアトレード、3）マヤ・ユカテコ民族の社会変化、4）先住民族文化の比較展示学【所属学会】日本文化人類学会、国際開発学会、日本ラテンアメリカ学会、古代アメリカ学会、Society for Applied Anthropology、American Anthropological Association

【主要業績】

[編著]

鈴木 紀・滝村卓司編

2013 『国際開発と協働——NGO の役割とジェンダーの視点』（みんぱく実践人類学シリーズ8）東京：明石書店。

[論文]

鈴木 紀

2014 「開発」山下晋司編『公共人類学』pp.69-84, 東京：東京大学出版会。

2011 「開発人類学の展開」佐藤 寛・藤掛洋子編『開発援助と人類学：冷戦・蜜月・パートナーシップ』pp.45-66, 東京：明石書店。

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

国際開発のための実践人類学

・研究の目的、内容

本研究の目的は、社会問題の解決に寄与するための文化人類学である実践人類学を、国際開発活動の分野で推進することにある。とくに開発プロジェクトが、その対象社会で持続、発展していくための条件を、プロジェクトのインパクト（事前に予期された影響および予期されていなかった影響）に関する民族誌的調査を通じて明らかにしていく。

今年度は、メキシコの農村開発に関する研究成果の取りまとめ、およびフェアトレード研究を行う。後者では、フェアトレードのインパクトを調査するため、中央アメリカのカカオ栽培を事例に、カカオ栽培に起因する地域振興としての観光業の展開について現地調査をおこなう。この調査には、科学研究費基盤研究B「フェアトレードによるインパクトの地域間比較：徳の経済を念頭に」（研究代表：池上甲一）の資金を充当する。

・成果

以下の形で研究成果を発表した。

1) NGOによる国際支援活動に関する理論的研究

鈴木 紀、2017「グローバルな互酬を構想する」信田敏宏・白川千尋・宇田川妙子編『グローバル支援の人類学：変貌するNGO・市民活動の現場から』pp.61-77, 京都：昭和堂。

2) フェアトレードに関する研究発表

鈴木 紀「フェアトレードの拡大か卒業か：ベリーズのカカオ栽培の動向」オルタナティブ研究会、2016年7月2日、京都大学（科学研究費基盤研究B「フェアトレードによるインパクトの地域間比較：徳の経済を念頭に」（研究代表：池上甲一）の研究成果）

Suzuki, Motoi “Transformation of Ethical Sourcing and its impact on Producers: a Case of Cacao Production in Belize”, International Symposium on Impacts of Fair Trade, 4-5 February 2017, Campus Plaza Kyoto, Kyoto, Japan（科学研究費基盤研究B「フェアトレードによるインパクトの地域間比較：徳の経済を念頭に」（研究代表：池上甲一）の研究成果）

3) フェアトレードに関する研究論文

Suzuki, Motoi 2017 “Ethical Sourcing and its Impact on Decommodification: A Case of Cacao Production in Belize”, In Koichi Ikegami ed. *Impacts of Fair Trade: Considering Economy of Virtue*, pp.53-65, Nara: Faculty of Agriculture, Kindai University.（科学研究費補助金基盤研究B「フェアトレードによるインパクトの地域間比較：徳の経済を念頭に」（研究代表：池上甲一）の研究成果）

4) フェアトレードに関する新聞記事

鈴木 紀「フェアトレードタウン：イングランドの町から」毎日新聞 2016年6月9日夕刊

鈴木 紀「フェアトレードタウン：ガーナのカカオ栽培の町」毎日新聞 2016年6月16日夕刊

鈴木 紀「フェアトレードタウン：コーヒー協同組合の町」毎日新聞 2016年6月23日夕刊

鈴木 紀「フェアトレードタウン：熊本、そして名古屋」毎日新聞 2016年6月30日夕刊

◎出版物による業績

[編著]

小長谷有紀・鈴木 紀・旦 匡子編

2016 『ワールドシネマ・スタディーズ——世界の「いま」を映画から考えよう』東京：勉誠出版。[機関研究「支援の人類学：グローバルな互恵性の構築に向けて」の成果]

[論文]

鈴木 紀

2016 「互恵の美德と循環移民」小長谷有紀・鈴木 紀・旦 匡子編『ワールドシネマ・スタディーズ——世界の「いま」を映画から考えよう』pp.220-225, 東京：勉誠出版。[機関研究「支援の人類学：グローバルな互恵性の構築に向けて」の成果]

2017 「グローバルな互酬を構想する」信田敏宏・白川千尋・宇田川妙子編『グローバル支援の人類学——変貌するNGO・市民活動の現場から』pp.61-77, 京都：昭和堂。[共同研究「NGO活動の現場に関する人類学的研究——グローバル支援の時代における新たな関係性への視座」の成果]

Suzuki, M.

2017 Ethical Sourcing and Its Impact on Decommodification: a Case of Cacao Production in Belize. In K. Ikegami (ed.) *Impacts of Fair Trade: Considering Economy of Virtue*, pp.53-65. Nara: Faculty of Agriculture, Kinki University.

[その他]

鈴木 紀

- 2016 「フェアトレードタウン（1）イングランドの町から」『毎日新聞』6月9日夕刊。（共同研究「フェアトレードの思想と実践」の成果）
- 2016 「フェアトレードタウン（2）ガーナのカカオ栽培の町」『毎日新聞』6月16日夕刊。（共同研究「フェアトレードの思想と実践」の成果）
- 2016 「フェアトレードタウン（3）コーヒー共同組合の町」『毎日新聞』6月23日夕刊。（共同研究「フェアトレードの思想と実践」の成果）
- 2016 「フェアトレードタウン（4）熊本、そして名古屋」『毎日新聞』6月30日夕刊。（共同研究「フェアトレードの思想と実践」の成果）
- 2016 「みんぱくワールドシネマ」『社会科NAVI』13：14。
- 2016 「『国境の壁』に対峙する博物館——メキシコ」『みんぱく E-News』184。
- 2016 「先住民族を知ろう⑦マヤ」『朝日小学生新聞』11月13日。
- 2016 「コメント」上羽陽子・中牧弘允・中山京子・藤原孝章・森茂岳雄編『学校と博物館でつくる国際理解教育のワークショップ』（国立民族学博物館調査報告138）pp.67-68, 大阪：国立民族学博物館。
- 2017 「映画から読み解く『メキシコ国境の壁』」『読売オンライン深読みチャンネル』（1月8日公開）。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2016年5月28日 「分科会〈過去に学ぶ／過去を活かす：資源としてのメソアメリカ文明〉趣旨説明」日本文化人類学会第50回研究大会、南山大学
- 2016年5月28日 「美術館の中のメソアメリカ文明：展示の詩学と政治学」日本文化人類学会第50回研究大会、南山大学
- 2016年6月18日 「植民地時代から現代の中南米の先住民文化」科学研究費助成事業新学術領域研究（研究領域提案型）「古代アメリカの比較文明論」公開講演会「マヤ文明とアンデス文明の最新調査～過去から現代まで～」キャンパス・イノベーションセンター東京
- 2016年6月19日 「古代アメリカ文明の博物館展示の比較研究」科学研究費助成事業新学術領域研究（研究領域提案型）「古代アメリカの比較文明論」第3回研究者全体集会、キャンパス・イノベーションセンター東京
- 2016年7月2日 「フェアトレードの拡大か卒業か：ベリーズのカカオ栽培の動向」オルタナティブ研究会、京都大学
- 2016年10月30日 “Entre Arqueología y Etnografía: un Estudio Museográfico de la Representación de Mesoamérica en el Museo Nacional de Antropología, México”. Primer Congreso Internacional de Mesoamericanistas en Tokyo 2016, キャンパス・イノベーションセンター東京
- 2017年2月4日 “Transformation of Ethical Sourcing and its impact on Producers: a Case of Cacao Production in Belize”. International Symposium on Impacts of Fair Trade, キャンパスプラザ京都

・広報・社会連携活動

- 2016年4月22日 「マヤ文明を見る——メキシコ、グアテマラの博物館展示から」大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」、大阪府社会福祉会館
- 2016年5月6日 「マヤ文明を知る——メキシコ、グアテマラの博物館展示から」大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」、大阪府社会福祉会館
- 2016年5月22日 「グアテマラ先住民——スクリーンの中と外」映画『火の山のマリア』解説、元町映画館
- 2016年11月19日 「博物館の中の古代アメリカ文明」第462回みんぱくゼミナール、国立民族学博物館

◎調査活動

・国内調査

- 2017年3月9日～10日—東京（東京国立博物館で考古学と歴史学展示に関する資料収集）
- 2017年3月17日—東京（国文学資料館で古典文学展示に関する資料収集）

・海外調査

- 2016年7月17日～7月25日—メキシコ（アステカに関する博物館展示の比較研究）
- 2016年11月3日～11月10日—ドイツ、オーストリア、イギリス（倫理的貿易のマーケティング戦略に関する調査）

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員（1人）

・大学院ゼミでの活動

比較社会演習Ⅲ「社会と経済に関する人類学的アプローチ」担当

比較文化学基礎演習Ⅰ（1年生ゼミ）、比較文化学基礎演習Ⅱ（1年生ゼミ）担当

・博士論文予備審査委員（1件）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費助成事業・新学術領域（研究領域提案型）「古代アメリカの比較文明論」A04計画研究「植民地時代から現代の中南米の先住民文化」研究代表者、科学研究費助成事業・新学術領域（研究領域提案型）「古代アメリカの比較文明論」総括班、研究分担者、科学研究費助成事業・国際共同研究加速基金（国際活動支援班）「古代アメリカの比較文明論」研究分担者、科学研究費助成事業・基盤研究B「フェアトレードによるインパクトの地域間比較——徳の経済を念頭に」研究分担者

◎社会活動・館外活動等

・委嘱された委員

文化遺産国際協力コンソーシアム中南米分科会委員

廣瀬浩二郎 [ひろせ こうじろう] ————— 准教授

【学歴】 京都大学文学部国史学科卒（1991）、京都大学大学院文学研究科修士課程修了（1993）、カリフォルニア大学バークレイ校留学（1995）、京都大学大学院文学研究科博士課程指導認定退学（1997）**【職歴】** 京都大学文学部研修員（1997）、花園大学社会福祉学部非常勤講師（1999）、国立民族学博物館民族文化研究部助手（2001）、国立民族学博物館民族文化研究部准教授（2008）**【学位】** 文学博士（京都大学大学院文学研究科 2000）、文学修士（京都大学大学院文学研究科 1993）**【専攻・専門】** 日本宗教史、民俗学（日本の新宗教、民俗宗教と障害者文化、福祉の関わりについての歴史、人類学的研究）**【所属学会】** 日本史研究会、「宗教と社会」学会、日本武道学会、日本文化人類学会

【主要業績】

[単著]

廣瀬浩二郎

2009 『さわる文化への招待——触覚でみる手学問のすゝめ』京都：世界思想社。

2001 『人間解放の福祉論——出口王仁三郎と近代日本』大阪：解放出版社。

[学位論文]

廣瀬浩二郎

2000 「宗教に顕れる日本民衆の福祉意識に関する歴史的研究」京都大学大学院文学研究科。

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

「バリア・フリー」に関する人類学的研究

・研究の目的、内容

28年4月の「障害者差別解消法」の施行後、各方面で障害者に対する「合理的配慮」のあり方が模索されている。民博着任以来、私に取り組んできたユニバーサル・ミュージアムの実践的研究は、博物館における「合理的配慮」を考える上で重要な意義を有しているといえよう。今年度はユニバーサル・ミュージアムの理論を観光・まちづくり分野に応用する研究に力を入れたい。オリンピック・パラリンピックの東京開催に向けて、ユニバーサル・ツーリズムへの関心が高まっている。しかし、「誰もが楽しめる観光・まちづくり」といっても、障害者の移動手段の確保など、バリアフリー的な施策にとどまっているのが現状である。今年度は「被災地ツーリズムのユニバーサル化」に関する調査を福島県いわき市で行い、その成果を論文にまとめる。ユニバーサル・ミュージアム論に基づく観光プランを具体的に提案するのが、28年度の新たな目標である。

その他、教育現場、博物館などでの“さわる”体験プログラムは、内容を充実させつつ継続実施する。兵庫県立美術館の企画展「美術の中のかたち」（7月～11月）にも全面的に協力する予定である。

・成果

28年度は館内外での講演（研究会等における報告を含む）を43回、触覚をテーマとするワークショップを13回担当した。また展示関係で13回、著作関係で12回、点字や視覚障害関連の話題で4回、新聞（学会誌の書評を含む）に取り上げられた。テレビ、ラジオへの出演は4回である。このように、私が提唱する「ユニバーサル・ミュージアム」「触文化」が確実に各方面に広がっていく手応えを感じる一年となった。今年度の成果の中で特筆に値するのは、28年7月～11月の兵庫県立美術館の企画展「つなぐ×つつむ×つかむ」に、29年2月の奈良県文化会館の「さわって楽しむ体感展示」（国民文化祭、障害者芸術・文化祭のプレイベント）に、それぞれアドバイザーとして全面協力した経験である。これらの実績については、29年度以降の新たな展開に向けて取り組みを継続している。28年8月には拙編著『ひとが優しい博物館』（青弓社）も刊行された。本書は27年11月に民博で開催したシンポジウムの報告書である。さらに、点字の考案者ルイ・ブライユに関する2冊の書籍、すなわち学習まんが、ジュニア文庫（いずれも小学館）にストーリー協力、あるいは監修という形で関わり、教育現場との連携を深めることができたのも有意義だった。

◎出版物による業績

[監修]

山本徳造著・廣瀬浩二郎監修

2017 『ルイ・ブライユ』東京：小学館ジュニア文庫。

[編著]

廣瀬浩二郎編

2016 『ひとが優しい博物館』東京：青弓社。

[論文]

廣瀬浩二郎

2016 「触角人間になろう！」『教育美術』77(9)：46-49, 教育美術振興会。

2017 「『障害の宇宙モデル』の提案に向けて」『天文教育』29(1)：39-46, 天文教育普及研究会。

2017 「『触識』のすすめ」『シンポジウム「彫刻とエロス」報告書』pp.5-14, 神奈川：東海大学課程資格教育センター。

立岩真也・廣瀬浩二郎

2016 「障害と創造をめぐって」『REAR』38号, pp.6-23, 名古屋：リア制作室。

[その他]

新井隆広著・廣瀬浩二郎（ストーリー協力）・大内進監修

2016 『学習まんが人物館 ルイ・ブライユ』東京：小学館。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

2016年11月28日 「共同研究の意義と目標」『「障害」概念の再検討』

2017年2月12日 「身体でみる美術鑑賞法」『テクノロジー利用を伴う身体技法に関する学際的研究』

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年9月24日 「宇宙人の顔を作ろう」ユニバーサルデザイン天文教育研究会主催ワークショップ、国立天文台

2016年9月25日 「『障害の宇宙モデル』の提案に向けて」ユニバーサルデザイン天文教育研究会主催講演会、国立天文台

2016年12月3日 「触識のすすめ」東海大学主催シンポジウム「彫刻とエロス」、東海大学

・研究講演

2016年5月13日 「さわって楽しむ世界」都立八王子盲学校主催講演会、国立民族学博物館

2016年5月21日 「障害とは何か」京都大学ポケットゼミ、国立民族学博物館

2016年5月22日 「さわって楽しむ世界」わんぱく文庫主催ワークショップ、吹田市立山田駅前図書館

2016年6月7日 「触文化とは何か」兵庫県立大学主催特別講義、国立民族学博物館

2016年6月16日 「無視覚流コミュニケーション」キッズプラザ大阪主催研修会、キッズプラザ大阪

2016年6月18日 「触察展示の新たな可能性」国文学研究資料館主催講演会、千代田区立千代田図書館

2016年6月20日 「視覚障害者誘導法の新解釈」キッズプラザ大阪主催研修会、キッズプラザ大阪

2016年7月1日 「無視覚流鑑賞の意義」兵庫県立美術館主催研修会、兵庫県立美術館

- 2016年7月3日 「視覚障害者の文化と人権」 摂津市人権協会主催講演会、千里丘公民館
- 2016年7月8日 「視覚障害教育と触文化」 兵庫県立盲学校主催講演会、兵庫県立盲学校
- 2016年7月23日 「触角人間になろう！」 兵庫県立美術館主催ワークショップ、兵庫県立美術館
- 2016年8月4日 「無視覚流鑑賞の極意」 芦屋美術会主催講演会、兵庫県立美術館
- 2016年8月6日 「アタマでさわる、カラダがさわる、ココロにさわる」 兵庫県立美術館主催ワークショップ、兵庫県立美術館
- 2016年8月20日 「日本におけるユニバーサル・ミュージアムの現状と課題」 高雄市立歴史博物館主催講演会、台湾・高雄市立歴史博物館
- 2016年9月16日 「さわって楽しむ世界」 愛知県立名古屋盲学校主催講演会、国立民族学博物館
- 2016年9月18日 「盲人史研究と触文化」 同志社大学主催講演会、同志社大学
- 2016年9月19日 「人生の触り方」 兵庫県立美術館主催講演会、兵庫県立美術館
- 2016年9月27日 「点字と触文化」 大阪女学院中学部主催特別授業、大阪女学院
- 2016年9月28日 「ユニバーサル・ツーリズムの可能性」 近畿日本ツーリスト主催研修会、TKPガーデンシティ永田町
- 2016年9月30日 「視覚障害者の社会参加と点字の歴史」 大阪女学院中学部主催特別授業、大阪女学院
- 2016年10月15日 「さわって楽しむ考古学」 ひたちなか市主催「ふるさと考古学講座」、ひたちなか市埋蔵文化財調査センター
- 2016年10月19日 「触文化を通じて新たな気づきを！」 枚方市立中央図書館主催講演会、枚方市立中央図書館
- 2016年10月24日 「触文化を楽しもう」 豊中市立第七中学校主催講演会、豊中市立第七中学校
- 2016年10月27日 「情報保障と情報変換」 西宮市視覚障害者図書館主催講演会、国立民族学博物館
- 2016年10月29日 「瞽女文化とバリアフリー」 両国門天ホール主催講演会、両国門天ホール
- 2016年10月30日 「触る感動、動く触感」 両国門天ホール主催ワークショップ、両国門天ホール
- 2016年11月1日 「触文化とは何か」 京都府南丹教育局主催講演会、亀岡市立育親中学校
- 2016年11月2日 「視覚障害教育と触文化」 都立八王子盲学校主催講演会、八王子盲学校
- 2016年11月3日 「瞽女文化にさわる」 瞽女ミュージアム高田主催ワークショップ、新潟・瞽女ミュージアム高田
- 2016年11月8日 「博物館とバリアフリー」 平成28年度博物館学集中コース、国立民族学博物館
- 2016年11月10日 「博物館で異文化体験」 山陽女子高校主催講演会、国立民族学博物館
- 2016年11月12日 「和紙の触感を楽しもう」 わらべ館主催ワークショップ、鳥取・わらべ館
- 2016年11月15日 「視覚障害教育と博物館利用」 宮城県立盲学校主催講演会、国立民族学博物館
- 2016年11月17日 「無視覚流の極意を求めて」 大阪府立大手前高校主催講演会、大手前高校
- 2016年11月18日 「バリアフリー映画の魅力」 日本ライトハウス主催講演会、大阪・玉水記念館
- 2016年12月1日 「ひとが優しい博物館」 国立教育政策研究所主催「博物館学芸員専門講座」、社会教育実践研究センター
- 2016年12月5日 「ユニバーサル・ミュージアムとは何か」 芦屋美術会主催講演会、国立民族学博物館
- 2016年12月17日 「触文化を体験しよう」 関西ステューデント・ライブラリー主催ワークショップ、国立民族学博物館
- 2017年1月12日 「無視覚流鑑賞の極意」 九州産業大学主催「九州地区学芸員技術研修会」、宮崎県立美術館
- 2017年1月13日 「『障害』の意味を問い直す」 宮崎県立視覚障害者センター主催講演会、宮崎県立視覚障害者センター
- 2017年1月22日 「見立て涅槃図にチャレンジ！」 岡山県立美術館主催ワークショップ、岡山県立美術館
- 2017年2月5日 「くらやみ魔法使いになろう！」 キッズプラザ大阪主催ワークショップ、キッズプラザ大阪
- 2017年2月8日 「ユニバーサル・ミュージアムの理論と実践」 鳥取県ミュージアム・ネットワーク主催講演会、倉吉博物館
- 2017年2月19日 「さわる世界旅行」 江戸東京博物館主催ワークショップ、江戸東京博物館
- 2017年2月23日 「視覚障害教育と触文化」 和歌山県立盲学校主催講演会、和歌山県立盲学校
- 2017年3月3日 「さわる文化と視覚障害者の歴史」 大阪府視覚障害者協会主催講演会、大阪府視覚障害者協会
- 2017年3月11日 「触文化を体験しよう」 大阪府立中央図書館主催ワークショップ、大阪府立中央図書館
- 2017年3月26日 「さわって楽しむ博物館」 クラブツーリズム主催講演会、国立民族学博物館
- ・ 広報・社会連携活動
- 2016年4月24日 NHK テレビ「こころの時代」出演

- 2016年6月11日 NHK ラジオ「明日へのことば」出演
 2016年8月22日 ラジオ大阪「話の目薬ミュージックソン」出演
 2016年10月12日 「身体でみる異文化」カレッジシアター「地球探究紀行」あべのハルカス近鉄本店
 2016年12月23日 RCC ラジオ（中国放送）「おはようフォーカス」出演
 ・みんぱくウィークエンド・サロン
 2016年8月7日 「『無視覚流』の極意を求めて」みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎調査活動

・国内調査

- 2016年7月18日—東京都・東京藝術大学（「さわる絵画」に関する最新の動向調査、意見交換）
 2016年9月4日—静岡県・浜松市楽器博物館（ユニバーサル・ツーリズムに関する実地調査）
 2017年3月2日—東京都・ユニバーサルシアター「シネマ・チュプキ・タバタ」（映画上映のユニバーサル化に関する調査、意見交換）

◎社会活動・館外活動等

・他の機関から委嘱された委員など

吹田市立博物館協議会委員

・他大学の客員、非常勤講師

関西学院大学・非常勤講師「障害と人権」、筑波大学理療科教員養成施設・非常勤講師（集中）「視覚障害教育」、東海大学・非常勤講師（集中）「博物館実習」

山中由里子 [やまなか ゆりこ] ————— 准教授

1966年生。【学歴】カラマズー大学フランス語／美術専攻卒（1988）、東京大学大学院総合文化研究科修士課程修了（1991）、東京大学大学院総合文化研究科博士課程中退（1993）【職歴】日本学術振興会特別研究員（1992）、東京大学東洋文化研究所助手（1993）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助手（1998）、国立民族学博物館民族文化研究部助手（2004）、国立民族学博物館民族文化研究部准教授（2009）【学位】学術博士（東京大学 2007）、学術修士（東京大学 1991）【専攻・専門】比較文学比較文化 西アジアにおけるアレクサンドロス伝説の比較文学的研究、「驚異」の文化史【所属学会】日本比較文学会、日本中東学会、オリエント学会、日本比較文明学会、国際比較文学会、International Society for Iranian Studies

【主要業績】

[単著]

山中由里子

2009 『アレクサンドロス変相——古代から中世イスラームへ』名古屋：名古屋大学出版会。

[編著]

山中由里子

2015 『〈驚異〉の文化史——中東とヨーロッパを中心に』名古屋：名古屋大学出版会。

[共編]

Yamanaka, Y. and T. Nishio (eds.)

2006 *The Arabian Nights and Orientalism: Perspectives from the East and West*. London: I. B. Tauris.

【受賞歴】

- 2011 第7回日本学士院学術奨励賞
 2011 第7回日本学術振興会賞
 2010 第15回日本比較文学会賞
 2010 島田謹二記念学藝賞

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

中東およびヨーロッパにおける驚異譚の比較文学的研究

・研究の目的、内容

本研究が対象とする「驚異譚」とは、ラテン語で *mirabilia*、アラビア語・ペルシア語で *'ajā'ib* と呼ばれる、辺境・異界・太古の怪異な事物や生き物についての言説である。未知の世界の摩訶不思議を語るこのようなエピソードは、東西の歴史書、博物誌・地誌、物語、旅行記・見聞記などに登場するが、これらの多くは古代世界から中世・近世の中東およびヨーロッパに継承され、様々な文化圏で共有されてきた。本研究で明らかにしようとする問題点は、次の三つの主要な軸にまとめることができる。

- 1) ジャンルの枠組とモチーフの分類：驚異譚を比較研究することによって、実際にその言説の語り手（あるいは編纂者）によってどのように定義され、位置づけられてきたかを明らかにする。複数の文化圏に共通する主なモチーフや逸話を関連作品から抽出し、「異民族の驚異」、「異境の驚異」、「太古の驚異」といった分類を試みる。
- 2) 知識の伝播と世界観の変遷：権力の移行、人間の移動、書物・視覚イメージの普及など、知識の伝播や未踏の地の発見を促した歴史的文脈を把握した上で、博物学・人文地理学の発展の流れを明らかにする。さらに、世界地図や挿絵・装飾などの視覚的表象にも注目し、中東とヨーロッパにおける世界観の変遷と相互の影響関係を辿る。
- 3) 宗教・言語・文化的な特異性と超域的な包括性：上記1)と2)のような比較研究を通して、宗教・言語・文化による相違点を浮かびあがらせる一方、異なる文化圏の驚異譚の根底に共通して流れる想像の力と語りの力を明らかにする。

・成果

科学研究費新学術領域研究「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」（代表：野林厚志）の分担金を得て、下記の成果を発表した。

論文：

- ・山中由里子「捏造された人魚——イカサマ商売とその源泉をさぐる」稲賀繁美編、『海賊史観からみた世界史の再構築——公益と情報流通の現在を問い直す』京都：思文閣、2017、pp.170-195
- ・山中由里子「心の進化から驚異・怪異を捉える」『民博通信』156、2017、pp.20-21
- ・山中由里子「スエズの商人・南部憲一」橋本順光・鈴木禎宏編、『欧州航路の文化誌 寄港地を読み解く』東京：青弓社、2017、pp.139-158

口頭発表：

- ・Yuriko Yamanaka “At the Crossroads of Global Cultural History: from a ‘Far Eastern’ Perspective”, International Comparative Literature Association 2016, University of Vienna, Vienna, 2016. 7. 23
- ・Yuriko Yamanaka “Incredible India, the Land of Wonders in Persian ‘Ajā’ib Literature”, International Conference on Indo-Persian Studies at the Academy of Persian Language and Literature, Tehran, 2017. 2. 20
- ・「想像界の生物相：生態系と人間の想像力の相関関係の比較文化的研究」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究2016-2020：パレオアジア文化史学第1回研究大会』東京大学小柴ホール、2016.11.6

ポスター発表：

- ・山中由里子「想像界の生物相——マンティコーラにみる名付けと形象化」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究2016-2020：パレオアジア文化史学第2回研究大会』名古屋大学、2017.2.10-11

◎出版物による業績

[論文]

山中由里子

- 2016 「イスラームの世界史観——アレクサンドロスは『大王』か？」秋田 茂・永原陽子・羽田正・南塚信吾・三宅明正・桃木至朗編『「世界史」の世界史』pp.1-24、京都：ミネルヴァ書房。
- 2017 「スエズの商人・南部憲一」橋本順光・鈴木禎宏編『欧州航路の文化誌 寄港地を読み解く』pp.139-158、東京：青弓社。[書評：日経新聞2017年2月12日]
- 2017 「捏造された人魚——イカサマ商売とその源泉をさぐる」稲賀繁美編『海賊史観からみた世界史の再構築——公益と情報流通の現在を問い直す』pp.170-195、京都：思文閣。

[その他]

山中由里子

- 2016 「人魚のミイラ——『リアルなニセモノ』と対面する驚き」国立民族学博物館編『見世物大博覧会』pp.194-195、大阪：国立民族学博物館。

- 2016 「ドイツのポップカルチャー市場調査——1日目」『月刊みんぱく』40(11):10-11。
- 2016 「ドイツのポップカルチャー市場調査——2日目」『月刊みんぱく』40(12):10-11。
- 2016 「オフサイド・ガールズ したたかな異性装——イラン版『とりかへばや』物語」小長谷有紀・鈴木紀・旦匡子編『ワールドシネマ・スタディーズ世界の「いま」を映画から考えよう』pp.31-36, 東京:勉誠出版。
- 2016 「解説——大世界史の先駆者」平川祐弘著『西欧の衝撃と日本』(平川祐弘決定版著作集5) pp.393-396, 東京:勉誠出版。
- 2017 「みんぱく世界の旅 博物館の怪物たち (1) ——古代から人間に共通する『博物学的思考』」『毎日小学生新聞』1月14日。
- 2017 「みんぱく世界の旅 博物館の怪物たち (2) ——生物図鑑にのった怪物」『毎日小学生新聞』1月21日。
- 2017 「みんぱく世界の旅 博物館の怪物たち (3) ——日本産人魚のミイラ」『毎日小学生新聞』1月28日。
- 2017 「和菓子と洋菓子」野林厚志監修『日本と世界のくらしどころが同じ?どこがちがう? 食——教科書に出てくる「くらしの中の和と洋」』pp.38-41, 東京:汐文社。
- 2017 「障子とカーテン」日高真吾監修『日本と世界のくらしどころが同じ?どこがちがう? 住——教科書に出てくる「くらしの中の和と洋」』pp.18-21, 東京:汐文社。
- 2017 「『心の進化』から驚異・怪異を捉える」『民博通信』156:20-21。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2016年12月18日～12月19日 'Europe seen through Japanese Animation: A Case Study of the Reception of "Heidi, Girl of the Alps" in Iran.' The Global Flow of Cultural Knowledge and their Afterlives: Between Japan and the Middle East. 国立民族学博物館

・共同研究会での報告

2016年8月2日 「人魚のミイラ——驚異と怪異の接点」『驚異と怪異——想像界の比較研究』国立民族学博物館

2016年12月3日 「『心の進化』から驚異・怪異を考える人類の自然理解に関する認知科学的研究の紹介」『驚異と怪異——想像界の比較研究』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年7月23日 'At the Crossroads of Global Cultural History: from a "Far Eastern" Perspective.' 21st World Congress of the International Comparative Literature Association, University of Vienna

2016年11月5日～11月6日 「想像界の生物相——生態系と人間の想像力の相関関係の比較文化的研究」文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究2016-2020:パレオアジア文化史学第1回研究大会、東京大学小柴ホール

2017年2月12日 「想像界の生物相——マンティコラにみる名付けと形象化」文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究2016-2020:パレオアジア文化史学第2回研究大会、名古屋大学野依記念学術交流館

2017年2月19日 'Incredible India, the Land of Wonders in Persian 'Aja'ib Literature.' International Conference on Indo-Persian Studies, Academy of Persian Language and Literature, Tehran

・展示

『国立民族学博物館展示案内』編集長
特別展示「見世物大博覧会」実行委員

・広報・社会連携活動

2017年2月4日 「世界各地のイスラーム——みんぱくでその広がりを考える」第463回国立民族学博物館友の会講演会、国立民族学博物館

・みんぱくウィークエンド・サロン

2016年11月27日 「博物学と見世物——珍獣幻獣大集合」第446回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

・その他

みんぱくワークシート「みんぱく探検!イスラーム編」監修

◎調査活動

・海外調査

2016年4月8日～5月22日—ドイツ、イラン（ペルシア語博物学関連資料調査及び博物館調査）

2016年6月22日～6月28日—ドイツ（映像上映にかかる調査研究及びみんぱく「世界のイスラーム」関連調査）

2016年7月15日～8月15日—オーストリア、ドイツ（国際比較文学会大会、国際イラン学会大会参加、日本ポップカルチャー受容に関する調査）

2016年9月26日～10月19日—オランダ、ドイツ（博物学標本に関する調査）

2017年1月4日～1月11日—フランス、ドイツ（コーヒー・喫茶文化に関する調査）

2017年2月17日～2月28日—イラン（インド・ペルシア学会議参加・発表、ブーカーン調査）

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（1人）、副指導教員（1人）

・大学院ゼミでの活動

「西アジア文化研究特論」担当

論文ゼミ

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト現代中東地域研究拠点拠点構成員、科学研究費助成事業（新学術領域研究（研究領域提案型））「パレオアジア文化史学——アジア新人文化形成プロセスの総合的研究」（B01班：人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築）分担者、科学研究費助成事業（基盤研究（B））「日本現代文学・文化の世界展開の比較文学的研究——〈ポップ〉なテキストを中心に」（代表：平石典子）研究分担者

◎社会活動・館外活動

- ・他機関から委嘱された委員など

日本比較文学会国際活動委員会、Advisory Board *Persian Literary Studies Journal*、Academic Advisory Board *interlitteraria*

- ・他大学の客員、非常勤講師

東京大学「グローバル教養特別演習V」集中講義、関西学院大学総合A「あやかしの日本文化」（ゲスト講師、2016年7月5日）

藤本透子 [ふじもと とうこ] ————— 准教授

1975年生。【学歴】京都大学文学部史学科卒（1998）、京都大学大学院人間・環境学研究科文化・地域環境学専攻修了（2002）、京都大学大学院人間・環境学研究科環境関連研究専攻博士課程研究指導認定退学（2007）【職歴】日本学術振興会特別研究員（2006）、京都大学大学院人間・環境学研究科研修員（2008）、国立民族学博物館機関研究員（2010）、国立民族学博物館民族文化研究部助教（2012）立命館大学国際関係学部「ロシア・ユーラシア研究Ⅱ」非常勤講師（2015）【学位】博士（人間・環境学）（京都大学大学院人間・環境学研究科 2010）修士（人間・環境学）（京都大学大学院人間・環境学研究科 2002）【専攻・専門】文化人類学、中央アジア地域研究【所属学会】日本文化人類学会、日本中央アジア学会、日本中東学会、日本イスラーム協会

【主要業績】

[単著]

藤本透子

2011 『よみがえる死者儀礼——現代カザフのイスラーム復興』東京：風響社。

[編著]

藤本透子

2015 『現代アジアの宗教——社会主義を経た地域を読む』横浜：春風社。

[論文]

Fujimoto, T.

- 2011 Kazakh Memorial Services in the Post-Soviet Period: A Case Study of Northern Kazakhstan Villages. In T. Yamada and T. Irimoto (eds.) *Continuity, Symbiosis, and the Mind in Traditional Cultures of Modern Societies*, pp.117-132. Sapporo: Hokkaido University Press.

【受賞歴】

2013 人間文化研究奨励賞

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

中央アジアにおける移動と宗教動態に関する人類学的研究

・研究の目的、内容

本研究は、中央アジアのカザフスタンを中心に、昨年度から引き続き移動と宗教動態に着目して、社会再編に際して何が共同性の核となるのかを明らかにすることを第1の目的とする。具体的には、人間文化研究機構の北東アジア地域研究の一環として、在外カザフ人の移動に関する調査研究を行う。第2の目的として、科学研究費補助金基盤C「カザフスタンにおける伝統医療とイスラームの人類学的研究」に基づき、現代中央アジアにおける宗教・社会・身体関係を考察する。中央アジアでは、1990年代の体制移行に伴うイスラーム復興と社会変容のなかで伝統医療に携わる治療師が急増し、ある程度まで社会が安定し経済発展を遂げている現在も人々の関心をひきつけて存続している。地域社会の人々が身体を近代医療の対象としてのみ見ず、むしろ宗教的観念が作用する場と捉えてきたことをふまえて、治療師の活動が活発なカザフスタンを中心に、1) 中央アジアにおける伝統医療の歴史的背景、2) 伝統医療の再活性化メカニズム、3) 社会主義を経験した社会の近代医療と伝統医療の関係、4) イスラームおよびシャマニズムと伝統医療の布置を、今年度から5年間の研究において明らかにする。

・成果

1) 移動と共同性の再構築

在外カザフ人のカザフスタンへの移住に関して、論文”Migration to the “Historical Homeland.” Remaking Connectedness in Kazakh Society beyond National Borders” を執筆し、①中国・ロシア・モンゴル国境を跨いだカザフ社会形成の歴史的背景、②旧ソ連からカザフスタンが独立した後の在外カザフ人呼び寄せ政策と移動の実態、③カザフスタンへの移動後における共同性の再構築過程において宗教実践と祝祭の復興が重要な役割を担ったことを指摘した。また、この論文を含む論集 Migration and the Remaking of Ethnic/Micro-Regional Connectedness (Senri Ethnological Studies 93) を共編し、移動と共同性の再構築に関してアジアを中心にヨーロッパ、アメリカの事例と比較検討を行った。この論集は、科学研究費補助金 (JP24310181) の分担者としての成果の一部である。また、北東アジア地域研究プロジェクトの一環としてカザフ社会の形成と移動に関する調査を行い、同プロジェクト月例会で口頭発表した。

2) 伝統医療とイスラーム

カザフ社会のイスラーム動態について、「カザフスタンにおける喜捨の展開——アッラー・死者・生者の関係に着目して」(岸上伸啓編『贈与論再考——人間はなぜ他者に与えるのか』京都：臨川書店、pp.161-182.) を執筆した。本論文では、サダカと呼ばれる任意の喜捨が、アッラー・死者・生者の関係のもとで行われ、地域社会における通常の贈与の範囲を超えて共に生きる関係を確認する意義をもつことを指摘した。また、科学研究費補助金基盤C (JP16K02028) に基づき、カザフスタンのパヴロダル州バヤナウル地区とアルマトゥ市で伝統医療に関する調査を行い、治療者になる経緯、治療法などに関するデータを収集し分析した。

3) カザフ村落社会の形成と居住形態

7月以降、科学研究費補助金新学術領域 (16H06411) の分担者として、遊牧民の定住化にともなう村落形成と居住形態の変化に関して、カザフスタン及びモンゴルで現地調査を行った。その成果として、「中央アジアにおける遊牧民の定住化——居住形態の変化を中心に」(共同でのポスター発表)、「定住化にともなうカザフ村落社会の形成と変容」(単独でのポスター発表)を行い、報告書「集団間の接触にともなう居住形態の変化——中央アジアのカザフスタンの事例を中心に」を執筆した。これらの発表と報告書では、①前近代における定住化が遊牧民のオアシスへの移動によるものであったのに対し、19～20世紀における定住

化は農耕民の進出と遊牧民の草原への定住という特徴をもつこと、②定住化にともなって住居は天幕から、木造家屋、日干しレンガ作りの家屋へと変遷したこと、③住居としては使われなくなった天幕が、祝祭などで社会関係の結節点として象徴的な意味をもつことを指摘した。

◎出版物による業績

[編著]

Yamada, T. and T. Fujimoto (eds.)

2016 *Migration and the Remaking of Ethnic/Micro-Regional Connectedness* (Senri Ethnological Studies 93). Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]

[論文]

藤本透子

2016 「カザフスタンにおける喜捨の展開——アッラー・死者・生者の関係に着目して」岸上伸啓編『贈与論再考——人間はなぜ他者に与えるのか』pp.161-182, 京都：臨川書店。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2016年10月25日 「カザフ社会の再編と『祖先の土地』——北東アジア地域研究へ向けて」北東アジア地域研究月例会、国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年5月28日 「カザフスタンにおける喜捨の展開——神・死者・生者の関係に着目して」第50回日本文化人類学会研究大会、南山大学

2016年8月23日 'Qazaqstanda jürgizilgen ekspeditsiya boiınsha Japoniyada jasalghan etnografialik körme (Central Asian Exhibition in Japan)', Research Meeting of R. B. Suleimenov Institute of Oriental Studies, Ministry of Education and Sciences, Republic of Kazakhstan

2016年10月15日 'Ancestral Land and Networking in the Course of Privatization after Socialism: A Case Study in Kazakhstan', East Asian Anthropological Association 2016 Meeting, 北海道大学

2016年11月5日 「中央アジアにおける遊牧民の定住化——居住形態の変化を中心に」(吉田世津子との共同発表) パレオアジア文化史学第1回研究大会、東京大学

2017年2月11日 「定住化にともなうカザフ村落社会の形成と変容」パレオアジア文化史学第2回研究大会、名古屋大学

◎調査活動

・海外調査

2016年8月5日～8月27日—カザフスタン (カザフスタンにおける伝統医療とイスラームの人類学的研究に関わる調査)

2016年9月5日～9月19日—モンゴル (モンゴル国におけるカザフの宗教・社会動態に関する調査 (イスラームと伝統医療を中心に))

2017年1月23日～2月9日—モンゴル (イスラームと伝統医療に関する調査ならびにカザフの定住化に関する調査)

2017年2月28日～3月29日—カザフスタン (カザフの移動と定住化およびイスラームに関する調査)

◎社会活動・館外活動等

・他大学の客員、非常勤講師

立命館大学国際関係学部「ロシア・ユーラシア研究Ⅱ」非常勤講師 (2015年10月～2016年3月)。

名古屋大学大学院 PhD 博士課程教育リーディングプログラム「プロフェッショナル登龍門」の「イスラム文化論」(“Islam in Asia: An Anthropological Perspective”)を担当 (2016年1月18日)。

先端人類科学研究部

關 雄二 [せき ゆうじ] 部長（併）教授

1956年生。【学歴】東京大学教養学部教養学科文化人類学専攻卒（1979）、東京大学大学院社会学研究科修士課程修了（1982）、東京大学大学院社会学研究科博士課程中退（1983）【職歴】東京大学教養学部助手（1983）、東京大学総合研究資料館助手（1986）、天理大学国際文化学部助教授（1995）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（1999）、総合研究大学院大学文化科学研究科兼任（2001）、国立民族学博物館研究戦略センター助教授（2004）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2005）、国立民族学博物館先端人類科学研究部長（2007）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2009）国立民族学博物館民族社会研究部教授（2015）【学位】社会学修士（東京大学大学院 1982）【専攻・専門】アンデス考古学、文化人類学 1）古代アンデス文明の形成過程、2）現代ペルーの文化行政、3）考古学と国民国家形成、4）世界遺産と国別の文化遺産との相互関係【所属学会】日本文化人類学会、日本ラテンアメリカ学会、古代アメリカ学会、Society for American Archaeology、Institute of Andean Studies

【主要業績】

[単著]

關 雄二

2010 『アンデスの考古学 改訂版』東京：同成社。

2006 『古代アンデス——権力の考古学』京都：京都大学学術出版会。

[共編]

大貫良夫・加藤泰建・關 雄二編

2010 『古代アンデス——神殿から始まる文明』（朝日選書863）東京：朝日新聞出版。

【受賞歴】

2008 濱田青陵賞

2008 科学分野の功績に対する表彰（ペルー国立サン・マルコス大学）

2008 クントゥル・ワシ賞（ペルー文化庁カハマルカ支局）

2015 ペルー文化功労者表彰

2016 外務大臣表彰

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

古代アンデスにおける権力生成過程の研究

・研究の目的、内容

南米の太平洋沿岸部、とくに今日のペルー共和国を中心に成立した古代アンデス文明に焦点をあて、権力の形成について理論的な解釈を行う。具体的には、ペルー北部山中パコパンバ遺跡を調査し、文明の基礎が築かれた形成期（B.C.2500～紀元前後）における経済やイデオロギーの様相を検出する。なお上記の調査部分は、科学研究費補助金基盤研究（A）をあてた。

・成果

平成28（2016）年度から科学研究費補助金基盤研究（A）を取得し、フィールドワークを含め、研究を推進した。成果としては、『アンデス文明 神殿から読み取る権力の世界』（臨川書店）を編集し出版したほか、論文を6本出版した。このほか内外の国際学会、研究集会、シンポジウムにおいて8本の研究発表をおこなった。

◎出版物による業績

[編著]

關 雄二編

2017 『アンデス文明——神殿から読み取る権力の世界』京都：臨川書店。

古谷嘉章・關 雄二・佐々木重洋編

2017 『「物質性」の人類学——世界は物質の流れの中にある』東京：同成社。

[論文]

関 雄二

- 2017 「古代アンデス文明における酒の利用」『酒史研究』32：1-16。
- 2017 「アンデス文明における権力生成過程の探求」関 雄二編『アンデス文明——神殿から読み取る権力の世界』pp.1-23, 京都：臨川書店。
- 2017 「パコパンパ遺跡の埋葬からみた権力生成」関 雄二編『アンデス文明——神殿から読み取る権力の世界』pp.267-289, 京都：臨川書店。
- 2017 「アンデスの神殿に刻まれた人間とモノの関係」古屋嘉章・関 雄二・佐々木重洋編『「物質性」の人類学——世界は物質の流れの中にある』pp.35-58, 東京：同成社。
- 2017 「物質性の人類学の可能性」古屋嘉章・関 雄二・佐々木重洋編『「物質性」の人類学——世界は物質の流れの中にある』pp.237-242, 東京：同成社。

中川 渚・関 雄二・ダニエル モラーレス

- 2016 「補修される土器／補修されない土器——アンデス形成期パコパンパ遺跡、カピーヤ遺跡の事例」『古代アメリカ』19：63-75。

関 雄二・フアン パブロ・ビジャヌエバ デリアナ アレマン・マウロ オルドーニェス・ダニエル モラーレス

- 2017 「建築からみた権力形成」関 雄二編『アンデス文明——神殿から読み取る権力の世界』pp.27-52, 京都：臨川書店。

[その他]

関 雄二

- 2016 「『人類と家畜の世界史』ブライアン・フェイガン著 動物と共同で生み出した文明」(書評)『日本経済新聞』4月3日朝刊。
- 2016 「バーチャルな文化遺産」『チャスキ (アンデス文明研究会会報)』53：1, 東京：アムプロモーション。
- 2016 「巨大建造物は最初から巨大であったのか——アンデス・マヤ・西アジアからの視点」『歴博』197：15-17。
- 2016 「パチャママの贈り物の勝手な受け取り方」小長谷有紀・鈴木 紀・旦匡子編『ワールドシネマ・スタディーズ 世界の「いま」を映画から考えよう』pp.116-120, 東京：勉誠出版。
- 2016 「旅・いろいろ地球人 文化遺産のいま① 仮想世界を求めて」『毎日新聞』12月8日夕刊。
- 2016 「旅・いろいろ地球人 文化遺産のいま② 発掘の記憶」『毎日新聞』12月15日夕刊。
- 2016 「アンデス研究の先駆者、増田義郎先生を偲ぶ」『チャスキ (アンデス文明研究会会報)』54：1, 東京：アムプロモーション。
- 2016 「旅・いろいろ地球人 文化遺産のいま③ 負の記憶をめぐる葛藤」『毎日新聞』12月22日夕刊。
- 2017 「旅・いろいろ地球人 文化遺産のいま④ 二つのマチュ・ピチュ博物館」『毎日新聞』1月5日夕刊。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

- 2016年11月5日 「ペルーの小村における考古学的プロジェクトから発生した社会的記憶」『考古学の民族誌——考古学的知識の多様な形成・利用・変成過程の研究』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2016年4月6日～4月10日 'Sealing Ritual Spaces of a Formative Site by the Early Cajamarca Culture.' (Yuji Seki, Diana Alemán, Percy Santiago, Nagisa Nakagawa and Megumi Arata) "Society for American Archaeology 81st Annual Meeting", Orlando, Florida, USA
- 2016年8月8日 'Descubrimiento de la tumba (Sacerdotes de Serpiente-Jaguar) en Pacopampa 2015.' (Yuji Seki, Juan Pablo Villanueva y Daniel Morales Chocano) "II Simposio Internacional: Arqueología, Arquitectura y Museos", Auditorio del Colegio Nacional San José, Chiclayo, Perú
- 2016年9月16日 'La disposición arquitectónica como memoria social de los sitios arqueológicos formativos en la sierra norte del Perú: Una perspectiva de los estudios de Pacopampa y Kuntur Wasi.' (Yuji Seki) "III Congreso Nacional de Arqueología", Ministerio de Cultura del Perú, Lima, Perú

- 2016年9月25日 「コンソーシアムの課題と展望」文化遺産国際協力コンソーシアム設立10周年記念『文化遺産からつながる未来』、TKP ガーデンシティ品川
- 2016年12月3日 「パコパンバ遺跡カハマルカ期ミニチュア土器の分析」(中川 渚、関 雄二、ダニエル・モラーレス) 古代アメリカ学会第21回研究大会、国立民族学博物館
- 2016年12月3日 「ペルー、パコパンバ遺跡から出土した人骨の生物考古学的研究——2016年度調査報告」(長岡朋人、関 雄二、鶴澤和宏、フアン・パブロ・ビジャヌエバ、ダニエル・モラーレス) 古代アメリカ学会第21回研究大会、国立民族学博物館
- 2016年12月3日 「パコパンバ遺跡の儀礼的コンテクストから出土した動物骨資料：饗宴との関係を中心として」(鶴澤和宏、ディアナ・アレマン、フアン・パブロ・ビジャヌエバ、関 雄二) 古代アメリカ学会第21回研究大会、国立民族学博物館
- 2016年12月3日 「ペルー北部高地パコパンバ遺跡における形成期後期のC4資源利用」(瀧上 舞、関 雄二、長岡朋人、鶴澤和宏、ダニエル・モラーレス、米田 穰) 古代アメリカ学会第21回研究大会、国立民族学博物館
- 2016年12月16日 討論「2016エクアドル地震」による文化財被害状況報告会、東京国立博物館平成館小講堂
- 2017年1月29日 基調講演「アンデス文明の文化遺産の保護と活用」金沢大学・みんぱく共催シンポジウム「世界遺産と共に生きる 地域と人々の視点から」金沢市文化ホール・大会議室
- 2017年2月17日 「考古学からみた社会的差異の登場：アンデス文明を中心に」(関 雄二) 東北大学学際科学フロンティア研究所主催、社会動態セミナー「人類社会における不平等の生成と発達」東北大学川内北キャンパスマルチメディア教育棟6F大ホール
- 2017年3月18日 「パコパンバ遺跡とクントゥル・ワシ遺跡における埋葬の比較と考察」基盤研究(A)「アンデス文明における権力生成と社会的記憶の構築」基盤研究(B)「生物考古学資料にもとづく古代アンデス社会の複雑化過程の解明」2016年度合同研究会、国立民族学博物館

・ 広報・社会連携活動

- 2016年4月16日 「アンデス文明における“過去”の成立と利用」アンデス文明研究会
- 2016年7月15日 「南米マチュ・ピチュ発見物語」池田市中央公民館特別講座
- 2016年10月25日 「アンデスの文化遺産を活かす 考古学者と盗掘者の対話」カレッジシアター「地球探求紀行」あべのハルカス近鉄本店
- 2016年12月17日 「パコパンバ遺跡発掘速報2016」アンデス文明研究会
- 2016年12月23日 「インカ帝国からつづくアンデスの暮らし(南米・ペルー)」(京都で世界を旅しよう!2016 Winter school 地球たんけんたい5) 環境と平和の学びデザインマナラボ(京都府受託事業)同志社大学大学院総合政策科学研究科京町屋キャンパス「江湖館」
- 2017年2月5日 「日本人によるアンデス考古学調査——鳥居龍蔵の思いを受けて」徳島県立鳥居龍蔵記念博物館

◎調査活動

・ 海外調査

- 2016年7月27日～9月24日—ペルー(中央アンデス地帯における発掘調査及び研究集会に参加)
- 2017年3月1日～3月13日—ペルー(パコパンバ発掘調査出土遺物の分析および保存遺構のモニタリング)

◎大学院教育

・ 指導教員

主任指導教員(3人)

◎上記以外の研究活動

- ・ 人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など
- 科学研究費補助金基盤研究(A)「アンデス文明における権力生成と社会的記憶の構築」(16H02729)研究代表者、科学研究費補助金基盤研究(B)「生物考古学資料にもとづく古代アンデス社会の複雑化過程の解明」(16H05639)研究分担者

◎社会活動・館外活動

・ 他機関から委嘱された委員など

ペルー全国学長会議編集局理事、ペルーカトリカ大学PUCP編集委員、ペルー・チャビン・デ・ワントル国際研究センター・Chavin編集委員、ペルー国クントゥル・ワシ文化協会(NGO)クントゥル・ワシ博物館監査役、金沢大学国際文化資源学研究センターアドバイザー、東京外国語大学AA研海外学術調査専門委員、文化

遺産国際協力コンソーシアム副会長、文化遺産国際協力コンソーシアム中南米分科会委員、文化遺産国際協力コンソーシアム企画分科会委員、日本文化人類学会評議員、古代アメリカ学会会長、(公財)高梨学術奨励基金選考委員、アンデス文明研究会顧問

◎学会の開催

2016年12月3日～12月4日 第21回古代アメリカ学会研究大会・総会、国立民族学博物館。

齋藤 晃 [さいとう あきら] ————— 教授

【学歴】 京都大学文学部文学科フランス語学フランス文学専攻卒 (1988)、東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻修士課程修了 (1991)、東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻博士課程単位取得退学 (1994) **【職歴】** 国立民族学博物館第4研究部助手 (1996)、国立民族学博物館博物館民族学研究部助手 (1998)、国立民族学博物館博物館民族学研究部助教授 (2003)、国立民族学博物館先端人類科学研究部助教授 (2004)、総合研究大学院大学文化科学研究科併任 (2006)、国立民族学博物館先端人類科学研究部教授 (2014) **【学位】** 学術修士 (東京大学大学院総合文化研究科 1991) **【専攻・専門】** 文化人類学、ラテンアメリカ研究 **【所属学会】** 日本文化人類学会、日本ラテンアメリカ学会

【主要業績】

[単著]

齋藤 晃

1993 『魂の征服——アンデスにおける改宗の政治学』東京：平凡社。

[共著]

岡田裕成・齋藤 晃

2007 『南米キリスト教美術とコロニアリズム』名古屋：名古屋大学出版会。

[共編]

Saito, A. y C. Rosas Lauro (eds.)

2017 *Reducciones: la concentración forzada de las poblaciones indígenas en el Virreinato del Perú*. Lima: Fondo Editorial de la Pontificia Universidad Católica del Perú.

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

植民地期アンデスにおける副王トレドの総集住化の総合的研究

・研究の目的、内容

1570年代、スペイン統治下のアンデスにおいて、世界史上希有な社会工学実験が実施された。第5代ペルー副王フランシスコ・デ・トレドの命令により、かつてのインカ帝国の中核地域で約150万の先住民が基盤目状に整然と区画された1千以上の町に強制移住させられた。総集住化と呼ばれるこの政策は、在来の居住形態、社会組織、権力関係、アイデンティティを大きく変えたといわれているが、その内実には不明な点が多い。本研究では、地理情報システム等を活用して、副王トレドの総集住化の全体像の解明を目指す。なお、本研究は、科学研究費補助金基盤研究 (A) 「アンデスにおける植民地的近代——副王トレドの総集住化の総合的研究」 (平成27～31年度、代表者：齋藤晃) の一環として実施される。

・成果

平成28年12月9日から10日にかけて、南米ボリビアの首都ラパスにおいて、科研費による国際共同研究「アンデスにおける植民地的近代——副王トレドの総集住化の総合的研究」の一環として、『Las reducciones toledanas en perspectiva comparativa y multidisciplinaria』と題する国際シンポジウムを開催した。このシンポジウムでは、共同研究のメンバーがこれまでの研究の暫定的成果を発表した。齋藤はシンポの冒頭で趣旨説明をおこなったほか、地理情報システムを活用した史料分析の成果を提示した。

本年度はまた、民博の機関研究「近代ヒスパニック世界における国家・共同体・アイデンティティ——スペイン領アメリカの集住政策の研究」の最終成果として、教皇庁立ペルーカトリカ大学出版会から、スペイン語の論文集『Reducciones: la concentración forzada de las poblaciones indígenas en el Virreinato del Perú』を刊行した。この書物は、副王トレドの総集住化を含め、スペイン領南米各地の集住政策の実施形態、直接的帰

結、波及効果などを実証的に解明したものである。

◎出版物による業績

[共編]

Saito, A. y C. Rosas Lauro (eds.)

2017 *Reducciones: la concentración forzada de las poblaciones indígenas en el Virreinato del Perú*. Lima: Fondo Editorial de la Pontificia Universidad Católica del Perú. [査読有、機関研究成果]

[論文]

Saito, A. y C. Rosas Lauro

2017 Introducción. Reduciendo lo irreductible. En A. Saito y C. Rosas Lauro (eds.) *Reducciones: la concentración forzada de las poblaciones indígenas en el Virreinato del Perú*, pp.11-64. Lima: Fondo Editorial de la Pontificia Universidad Católica del Perú. [査読有、機関研究成果]

Saito, A.

2017 Consolidación y reproducción de las parcialidades tras la implantación de las reducciones en el Moxos jesuítico. En A. Saito y C. Rosas Lauro (eds.) *Reducciones: la concentración forzada de las poblaciones indígenas en el Virreinato del Perú*, pp.509-552. Lima: Fondo Editorial de la Pontificia Universidad Católica del Perú. [査読有、機関研究成果]

[その他]

齋藤 晃

2016 「宣教師の異文化適応を再考する」『民博通信』153：14-15。[共同研究成果]

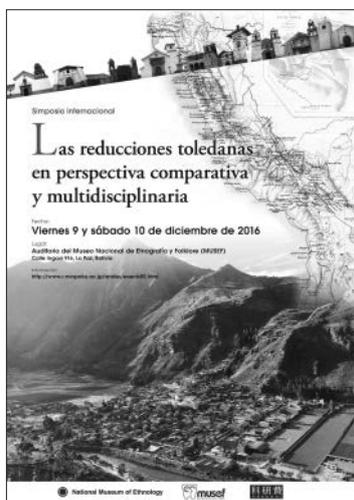
◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2016年12月9日～10日 Simposio internacional “Las reducciones toledanas en perspectiva comparativa y multidisciplinaria” (国際シンポジウムの実行委員長：C. López Beltránと共同). La Paz, Bolivia: Museo Nacional de Etnografía y Folklore

2016年12月9日 ‘La modernidad colonial en los Andes: un estudio comprensivo de la reducción general del virrey Toledo’ (趣旨説明). Simposio internacional “Las reducciones toledanas en perspectiva comparativa y multidisciplinaria” La Paz, Bolivia: Museo Nacional de Etnografía y Folklore

2016年12月9日 ‘Análisis preliminar de los datos de la tasa de Toledo sobre las reducciones’ (研究報告：Y. Kondo, N. Mizota, T. Koyamaと共同). Simposio internacional “Las reducciones toledanas en perspectiva comparativa y multidisciplinaria” La Paz, Bolivia: Museo Nacional de Etnografía y Folklore



・共同研究会での報告

2016年7月23日 「集住化と奴隷狩り——南米熱帯低地におけるイエズス会ミッションの建設」『近世カトリックの世界宣教と文化順応』国立民族学博物館

2017年2月18日 「宗教と適応」『近世カトリックの世界宣教と文化順応』国立民族学博物館

◎調査活動

・海外調査

2016年8月4日～9月8日—ペルー（植民地期アンデスの集住政策についての調査研究）

2016年12月5日～12月15日—ボリビア（1. 国際シンポジウム『トレドの集住化——学際的比較研究』の開催、
2. 今後の研究計画の策定）

2017年3月1日～3月9日—フランス（スペイン領アメリカの集住政策に関する研究打合せ）

相島葉月 [あいしま はつき] ————— 准教授

【学歴】 上智大学比較文化学部卒（2000）、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科一貫性博士課程修士号取得退学（2002）、オクスフォード大学大学院社会文化人類学研究科修士課程修了（2005）、オクスフォード大学大学院東洋学研究科博士課程修了（2011）**【職歴】** 有限会社美誠社（2002）、現代東洋学研究所客員研究員（2009）、現代東洋学研究所研究員及びベルリン自由大学ムスリム文化・社会研究科ポスドク研究員（2010）、国立民族学博物館研究戦略センター機関研究員（2011）、マンチェスター大学人文学部講師（2012）、国立民族学博物館准教授（2016）**【学位】** 博士（東洋学）（オクスフォード大学大学院東洋学研究科・セントアントニーズカレッジ 2011）、科学修士（社会人類学）（オクスフォード大学大学院社会文化人類学研究科・グリーンカレッジ 2005）、修士（地域研究）（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 2002）**【専攻・専門】** 社会人類学、イスラーム学、中東研究**【所属学会】** 日本中東学会、アメリカ人類学会、日本文化人類学会

【主要業績】

[単著]

Aishima, H.

2016 *Public Culture and Islam in Modern Egypt: Media, Intellectuals and Society*. London: IB Tauris.

[編著]

Aishima, H.

2016 Are We All Amr Khaled? Islam and the Facebook Generation of Egypt. In A. Masquelier and B. Soares (eds.) *Muslim Youth and the 9/11 Generation*, pp.105-122. Santa Fe: School for Advanced Research Press.

[論文]

Aishima, H.

2016 Between 'Public' Islam and 'Private' Sufism: Producing a National Icon though Mass Mediated Hagiography. *Die Welt des Islams* 56(1): 34-54.

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

現代エジプトにおける美と身体文化に関する社会人類学的研究

・研究の目的、内容

本研究の目的は、空手家コミュニティ（競技者、指導者、父兄）の事例より、現代エジプトの都市中流層的な倫理観と美的感覚の関係性を再考することにある。本研究の出発点は、なぜエジプト中流層の少年・少女にとって、空手道が「ハラール（イスラーム法的に合法、倫理的）」な習い事であるのに対し、同様の身体動作を行うクラシック・バレエが「ハラーム（イスラーム法的に違法、非倫理的）」なのかという問いにある。ハラール／ハラームと言ったイスラーム法的な語彙を援用しているとはいえ、エジプトの空手人気を支える言説を分析するに際し、中流層的な倫理観になぞられたモダニティとの関係性において論じる必要がある。空手道に取り組む意義を「目的」と「効果」で説明し、バレエを享乐的な行為と批判する言説は、国際政治経済の周縁に置かれたエジプトの中流層的な倫理観を如実に反映しているからである。近年、新自由主義経済の広がりにより、学歴や所得で中流層と下流層を差異化することがより困難になる中、「教養」の有無を指標とする新たな「階層観」が構築されつつある。この文脈において本研究は、空手道の稽古を、都市中流層的な倫理観と美的感覚が実践される場として考察する。

・成果

今年度は2016年5月にイギリスで出版された単著『エジプトにおける公共文化とイスラーム：知識人、メディアそして社会』を宣伝するためのBook Launchイベントをオクスフォード大学、カイロ・アメリカン大学およびオリエン特・インスティテュート・バイルート（ドイツ系研究機関）で行った。どの回も平日にも関わらず非常に盛況で、40名程度の参加者があった。場所によって聴衆のタイプは異なったものの、アブドゥルハリーム・マフムードに関するエジプト人教養層の関心の高さが明らかになった。オクスフォード大学はポッドキャスト、カイロ・アメリカン大学での発表はYouTubeで視聴できることから、研究成果を社会還元する上で非常に効果的であった。

昨年度終了した若手研究Bの成果発表のために民博とパリで開催された国際ワークショップで研究発表を行った。こちらは研究者向けの集会であった。民博では現代エジプトにおける「伝統」の定義の変遷と問題性、パリではスポーツ実践と社会階層について論じた。

（原稿の英文校閲料を科研費若手研究B「エジプトのオルタナティヴ・モダニティとしての空手実践に関する社会人類学的研究（研究代表者：相島葉月）」から捻出。オクスフォードへの出張費は、科研費基盤研究A「アラブ世界の都市中流層文化とアラビアンナイト——エジプト系伝承の謎を解く（研究代表者：西尾哲夫）」より捻出。カイロとパリへの出張費は人間文化機構地域研究推進事業現代中東地域研究拠点より捻出。）

研究発表

Aishima, Hatsuki, "Locating the Popular: Sporting and Social Class in Neoliberal Egypt." Colloque la culture populaire au moyen-orient: Approches franco-japonaises croisée, EHESS, Paris, France (March 27-28, 2017)

Aishima, Hatsuki, "Book Presentation: Public Culture and Islam in Modern Egypt." Orient-Institut Beirut Cairo Office, Egypt (February 20, 2017)

Aishima, Hatsuki, "Book Presentation: Public Culture and Islam in Modern Egypt." Kamal Adham Center for Television and Digital Journalism, the American University in Cairo, Egypt (February 8, 2017)

Aishima, Hatsuki, "A Salafi School of Karate? Debating Tradition/Modern in Post-2011 Egypt." Global Flow of Cultural Knowledge: Between Japan and the Middle East, the National Museum of Ethnology, Suita, Japan (December 17-18, 2016)

Aishima, Hatsuki, "Book Launch: Public Culture and Islam in Modern Egypt." St Antony's College, Oxford, UK (November 21, 2016)

その他

相島葉月「空手の先生をしてみました」『月刊みんぱく』41. 2, 2017, pp.10-11.

◎出版物による業績

[単著]

Aishima, H.

2016 *Public Culture and Islam in Modern Egypt: Media, Intellectuals and Society*. London: IB Tauris. [査読有]

[編著]

Aishima, H.

2016 Are We All Amr Khaled? Islam and the Facebook Generation of Egypt. In A. Masquelier and B. Soares (eds.) *Muslim Youth and the 9/11 Generation*, pp.105-122. Santa Fe: School for Advanced Research Press. [査読有]

[論文]

Aishima, H.

2016 Between 'Public' Islam and 'Private' Sufism: Producing a National Icon through Mass Mediated Hagiography. *Die Welt des Islams* 56(1): 34-54. [査読有]

[その他]

相島葉月

2016 「書評 Surak, Kristin, Making Tea, Making Japan: Cultural Nationalism in Practice, Stanford: Stanford University Press, 2013.」『文化人類学』81(3): 553-555。

2017 「空手の先生をしてみました」『月刊みんぱく』41(2): 10-11。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2016年12月17日～12月18日 「A Salafi School of Karate? Debating Tradition/Modern in Post-2011 Egypt」
現代中東地域研究国立民族学博物館拠点国際ワークショップ Global Flow of Cultural Knowledge: Between Japan and the Middle East, 国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年11月21日 'Book Launch: Public Culture and Islam in Modern Egypt.' St Antony's College, Oxford, UK

2017年2月8日 'Book Presentation: Public Culture and Islam in Modern Egypt.' Kamal Adham Center for Television and Digital Journalism, the American University in Cairo, Egypt

2017年2月20日 'Book Presentation: Public Culture and Islam in Modern Egypt.' Orient-Institut Beirut Cairo Office, Egypt

2017年3月27日～3月28日 'Locating the Popular: Sporting and Social Class in Neoliberal Egypt.' Colloque la culture populaire au moyen-orient: Approches franco-japonaises croisée, EHESS, Paris, France

・広報・社会連携活動

2016年11月5日 「エジプトにおける空手道の新地平——大衆文化に探る中東のいま」第460回国立民族学博物館友の会講演会、国立民族学博物館

2017年3月3日 「エジプトの大衆文化と空手道」けやきの森市民大学・国立民族学博物館提携講座、高槻市生涯学習センター

・みんぱくウィークエンド・サロン

2017年3月5日 「イスラームとムスリムの関係性」第457回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎調査活動

・海外調査

2016年11月19日～11月29日—イギリス（オクスフォード大学で開催される新刊紹介イベントにおける研究発表）

2017年1月15日～2月28日—エジプト、レバノン（空手家コミュニティに関する調査）

2017年3月25日～3月31日—フランス（現代中東地域研究民博拠点・EHESS等共催の国際シンポジウムでの発表および今後の研究計画の打合せ）

◎学会の開催

2016年12月17日～12月18日 人間文化研究機構基幹研究プロジェクト現代中東地域研究・国立民族学博物館拠点主催国際ワークショップ Global Flow of Cultural Knowledge: Between Japan and the Middle East, 国立民族学博物館

飯田 卓 [いいだ たく] ————— 准教授

1969年生。【学歴】北海道大学文学部行動科学科卒（1992）、京都大学大学院人間・環境学研究科人間・環境学専攻修士課程修了（1994）、京都大学大学院人間・環境学研究科人間・環境学専攻博士後期課程研究指導認定退学（1999）

【職歴】日本学術振興会特別研究員（DC1）（1994）、日本学術振興会特別研究員（PD）（1999）、国立民族学博物館民族文化研究部助手（2000）、国立民族学博物館研究戦略センター助手（2006）、国立民族学博物館文化資源研究センター准教授（2008）【学位】博士（人間・環境学）（京都大学 2000）、修士（人間・環境学）（京都大学 1994）【専攻・専門】生態人類学、視覚メディアの人類学、文化遺産の人類学【所属学会】生態人類学会、日本アフリカ学会、日本文化人類学会

【主要業績】

[単著]

飯田 卓

2008 『海を生きる技術と知識の民族誌——マダガスカル漁撈社会の生態人類学』京都：世界思想社。

2014 『身をもって知る技法——マダガスカルの漁師に学ぶ』京都：臨川書店。

[編著書]

飯田 卓・朝倉敏夫編

2017 『日本民族学協会附属民族学博物館（保谷民博）旧蔵資料の研究』（国立民族学博物館調査報告139）大阪：国立民族学博物館。

【受賞歴】

2010 日本アフリカ学会学術研究奨励賞

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

文化遺産の人類学に関する理論的研究

・研究の目的、内容

1990年代以降、日本では世界遺産が脚光を浴びて指定文化財の観光資源化が進んでいるが、いっぽうで、ユネスコが先導する国際文化行政の場では、担い手との結びつきを視野に入れたあらたな文化遺産概念がたち現れつつある。本研究は、これらの情勢に目を配りつつ、文化や文化財、文化資源、観光資源、国立公園、自然保護区、自然遺産などとの関連をふまえて、文化遺産概念の歴史的形成と現代的意義を考察する。

この研究は、平成25～27年度に民博の機関研究「マテリアリティの人間学」の一環としておこなわれたプロジェクト「文化遺産の人類学——グローバル・システムにおけるコミュニティとマテリアリティ」の延長として遂行する。外部資金に申請する予定はないが、3年間の成果出版を進める作業は研究の一環に位置づけられる。

・成果

日本語論文集2冊と英語論文集2冊の刊行を進めたが、年度内に刊行するには至らなかった。日本語論文集2冊については、商業出版のかたちで平成29年5月に刊行する目途が立っている。英語論文集2冊についても引き続き準備を進めていく予定である。

◎出版物による業績

[編著]

飯田 卓・朝倉敏夫編

2017 『日本民族学協会附属民族学博物館（保谷民博）旧蔵資料の研究』（国立民族学博物館調査報告139）大阪：国立民族学博物館。[査読有]

[論文]

飯田 卓

2016 「家屋の堅牢さと手軽さ——マダガスカルのくらし」藤木庸介編『住まいがたえる世界のくらし——今日の居住文化誌』pp.101-114, 京都：世界思想社。

2017 「本書の成立と保谷民博資料の来歴について」飯田 卓・朝倉敏夫編『日本民族学協会附属民族学博物館（保谷民博）旧蔵資料の研究』（国立民族学博物館調査報告139）pp.3-13, 大阪：国立民族学博物館。

2017 「戦後戦後期南西諸島における爆薬漁——八重山諸島の事例」『島嶼研究』18(1)：1-14。

[その他]

Iida, T.

2016 Authentic Change in the Transmission of Intangible Cultural Heritage. *Minpaku Anthropology Newsletter* 42: 1-3.

2016 「無形文化遺産の継承における『オーセンティックな変更・変容』」『民博通信』153：4-9。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

2016年7月4日 「日本民族学会の共同事業——博物館とエクスペディション」神奈川大学共同研究『日本常民文化研究所蔵史料からみるフィールド・サイエンスの史的展開』第1回研究会、神奈川大学、横浜

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年4月22日 Malagasy peasant fishermen's participation in coral reef management: Local life encounters global movement. A lecture for Yagi Nobuyuki Laboratory, University of Tokyo

- 2016年5月5日 Swinging between German Romanticism and French Enlightenment: Zafimaniry Cultural Heritage in Madagascar. *Inter-Congress of the International Union of Anthropological and Ethnological Sciences*. Hotel Dubrovnik Palace, Dubrovnik, Croatia
- 2016年5月28日 「担い手にとっての文化遺産の価値と、観光客にとっての文化遺産の価値——マダガスカル中央高地ザフィマニリの木彫り工芸と木造建築」日本文化人類学会第50回研究大会分科会『黒船としての文化遺産』南山大学、名古屋
- 2016年9月26日 「離島地域の漁業発展——マダガスカル島南西部の事例をふまえて」第172回鹿児島大学国際島嶼教育研究センター研究会、鹿児島大学
- 2016年12月11日 Traveling and In-Dwelling Knowledge: Learning and Technological Exchange among Vevo Fishers in Madagascar. *Conference "The World Multiple: Everyday Politics of Knowing and Generating"* National Museum of Ethnology, Suita, Japan

・広報・社会連携活動

- 2016年11月30日 「時間的文脈と空間的文脈——テキストとイメージの使いわけについて」第8回みんぱく若手研究者奨励セミナー『人類学的営みにおける映像』国立民族学博物館

◎調査活動

・国内調査

- 2016年7月21日～7月26日—北海道函館市（コンブ養殖およびコンブ採取についての調査）
- 2016年9月26日～10月1日—鹿児島県鹿児島市・奄美市・大島郡大和村（戦後の漁業についての聞きとり調査）
- 2016年10月10日～10月15日—鹿児島県大島郡知名町・大和村（戦後の漁業についての聞きとり調査）

・海外調査

- 2016年5月4日～5月11日—クロアチア、フランス（国際民族人類科学連合に参加及びフランス国立科学研究センターにおいて資料調査）
- 2016年8月16日～8月20日—韓国（韓国の水産資源利用についての調査）
- 2016年10月18日～11月26日—マダガスカル（マダガスカルの無形文化遺産に関する調査と研究打ち合わせ及びマダガスカル南西部における生業－信仰体系の調査）

◎大学院教育

・指導教員

- 主任指導教員（1人）、副指導教員（1人）
特別共同利用研究員（4人）

・大学院ゼミでの活動

論文ゼミ

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（基盤研究（C））「バイパス型私企業活動の活性化による、マダガスカル山間部の住民行動と地域構造の変容」（研究代表者：飯田卓）研究代表者、科学研究費補助金（基盤研究（A））「アフリカ漁民文化の比較研究——水域環境保全レジームの構築に向けて」（研究代表者：今井一郎）研究分担者、科学研究費補助金（基盤研究（A））「アフリカにおける文化遺産の継承と集団のアイデンティティ形成に関する人類学的研究」（研究代表者：吉田憲司）研究分担者、科学研究費補助金（基盤研究（B））「近代都市形成における多文化混住状況と出身地域社会への影響に関する研究」（研究代表者：岡田浩樹）研究分担者、科学研究費補助金（基盤研究（A））「「在来知」と「近代知」の比較研究——知識と技術の共有プロセスの民族誌的分析」（研究代表者：大村敬一）研究分担者、科学研究費補助金（新学術領域研究『学術研究支援基盤形成』）「地域研究に関する学術写真・動画資料情報の統合と高度化」（研究代表者：吉田憲司）研究支援分担者

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

京都大学地域研究情報統合センター共同研究課題選考委員、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所フィールドサイエンス・コロキウム運営委員、日本アフリカ学会評議員、文化遺産国際協力コンソーシアム委員、梅棹忠夫山と探検文学賞選考委員

1975年生。【学歴】立命館大学産業社会学部卒（1998）、立命館大学大学院 理工学研究科修士課程修了（2000）、総合研究大学院大学 文化科学研究科博士課程修了（2003）【職歴】日本学術振興会特別研究員（DC 1・2000）、日本学術振興会海外特別研究員（海外PD・2005）、中央民族大学民族学社会学学院訪問学者（2005-2010）、日本学術振興会 特別研究員（PD・2008）、東京大学日本・アジアに関する教育研究ネットワーク機構／東洋文化研究所汎アジア研究部門特任講師（2011）、国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授（2015）、総合研究大学院大学文化科学研究科准教授（2016）【学位】博士（文学）（総合研究大学院大学、2003）【専攻・専門】環境民俗学・東アジア地域研究【所属学会】日本民俗学会、文化人類学会、生態人類学会、The Society for Human Ecology (SHE)、生き物文化誌学会、日本現代中国学会

【主要業績】

[論文]

卯田宗平

- 2015 「ポスト「北方の三位一体」時代の中国エヴェンキ族の生業適応——大興安嶺におけるトナカイ飼養の事例」『アジアの生態危機と持続可能性——フィールドからのサステナビリティ論』（研究双書）616：73-108, 千葉：アジア経済研究所。

[単著]

- 2014 『鵜飼いと現代中国——人と動物、国家のエスノグラフィ』東京：東京大学出版会。

[編著]

卯田宗平編

- 2014 『アジアの環境研究入門——東京大学で学ぶ15講』（古田元夫監修）東京：東京大学出版会。

【受賞歴】

- 2010年 第5回日本文化人類学会奨励賞
1998年 学部長コース賞

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

鵜飼文化の比較研究

・研究の目的、内容

本研究は、日本列島と中国大陸の鵜飼文化を対象に、鵜飼に関わる技術や知識、鵜飼がなりわいとして成立する背景、観光産業とのかかわり、ウミウやカワウへの働きかけ、人工繁殖の技術などをフィールド調査と文献調査により明らかにする。なお、本研究は科学研究費・基盤研究（C）「ポスト家畜化時代の鵜飼文化とリバランス論——新たな人・動物関係論の構築と展開（代表・卯田宗平）」に基づいておこなう。

・成果

本年度は、まず日本の鵜飼で利用される野生ウミウの捕獲から馴化にいたる技術を明らかにした。そのうえで、人間からの介入を受けたウミウの反応にかかわる観察結果を手がかりに鵜飼い漁誕生の初期条件について検討した。具体的には、野生ウミウの捕獲技術に関して茨城県日立市十王町の事例を、ウミウの飼育と訓練に関して岐阜県長良川鵜飼の事例をまとめた。この結果、野生ウミウを飼い馴らす過程では、①捕獲直後のウミウを特定の姿勢にすることでおとなしくさせる、②ウミウに頻りに触れることで接近や接触をする人間を恐れない個体をつくる、③新たに捕獲したウミウをすでに飼育しているほかのウミウに馴れさせる、という三つの技術が重要であることを明らかにした。つぎに、人間からの介入を受けたウミウの反応を観察し、野生ウミウの行動特性に関して「新たに置かれた環境に対する若い個体の馴れやすさ」という特徴を指摘した。この特徴は人間が野生ウミウを漁の手段として利用できる条件のひとつであると結論づけた。これらの一連の研究成果は、卯田宗平（2016）「鵜飼い漁誕生の初期条件——野生ウミウを飼い馴らす技術の事例から」『日本民俗学』286号にまとめた。また、本年度は中国雲南省大理白族自治州における鵜飼を対象に、岐阜市との連携のもと、カワウの人工繁殖技術や観光事業とのかかわりに関する予備調査をおこなった。なお、以上の本研究は科学研究費・基盤研究（C）「ポスト家畜化時代の鵜飼文化とリバランス論——新たな人・動物関係論の構築と展開（代表・

卯田宗平)に基づいておこなった。

◎出版物による業績

[論文]

卯田宗平

2016 「鵜飼い漁誕生の初期条件——野生ウミウを飼い馴らす技術の事例から」『日本民俗学』286：35-65。
[査読有]

2016 「中国における環境史研究再考——鵜飼技術からみた自然と人間とのかかわり」水島司編『環境に挑む歴史学』pp.68-80, 東京：勉誠出版。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2016年12月1日 「去勢なき家畜飼育のこれから——中国大興安嶺のエヴェンキ族らとトナカイ」大学共同利用機関法人人間文化研究機構北東アジア地域研究国立民族学博物館拠点月例会、国立民族学博物館

・特別研究

2017年3月26日 「内水面漁場へのヒューマンインパクトと鵜飼い漁師たちの対応——中国江西省鄱陽湖の事例から」特別研究プレシンポジウム『歴史生態学から見た人と生き物の関係』国立民族学博物館

・共同研究会での報告

2016年12月17日 『もうひとつのドメスティケーション』にかかわる問題意識と趣旨説明『もうひとつのドメスティケーション——家畜化と栽培化に関する人類学的研究』国立民族学博物館

2017年1月28日 「ウミウ——『手段』としての動物と人とのかかわり」『もうひとつのドメスティケーション——家畜化と栽培化に関する人類学的研究』国立民族学博物館

・みんぱくゼミナール

2016年8月20日 「飛ばねえカワウはただのカワウだ——鵜飼研究の魅力を語る」第459回みんぱくゼミナール

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年5月28日 「トナカイ角の商品化と馴化技術の展開——中国大興安嶺のエヴェンキ族らの事例から」日本文化人類学会第50回研究大会、南山大学名古屋キャンパス、名古屋

2016年7月9日 「概念を規定し、事例を読みとく——鵜飼研究、中国から日本、そしてマケドニアへ」2016年度海外学術調査フォーラム・ワークショップ『フィールドサイエンスにおけるドキュメンテーション——あつめる・はかる・かぞえる』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、東京

2016年10月23日 『『手段』としての動物と人間とのかかわり』環境社会学会研究委員会、追手門学院大学梅田サテライト、大阪

2016年11月27日 「生業を裏打ちする文化を探る」大学共同利用機関主催大学共同利用機関シンポジウム2016『研究者に会いに行こう 大学共同利用機関博覧会』秋葉原UDX、東京

2016年12月4日 「リバランス論の射程——『手段』としての動物と人間とのかかわりの事例から」第54回環境社会学会大会シンポジウム『人と自然のインタラクション——動植物の共生から考える』環境社会学会、関西大学第三学舎1号棟、大阪

・広報・社会連携活動

2016年7月14日 「鵜飼の世界——日本・中国・ヨーロッパ」国立民族学博物館友の会第72回国内体験セミナー『長良川鵜飼漁見学——鳥と語らい、川とともに生きる』長良川うかいミュージアム、岐阜市

2016年9月3日 『『反馴化』という働きかけ——中国と日本の鵜飼い漁の事例から』総合研究「自然観」（前近代を中心とした琵琶湖周辺地域における自然および自然観の通時的変遷に関する研究）研究会、滋賀県立琵琶湖博物館会議室

2016年10月21日 「日本の鵜飼文化」大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」大阪府社会福祉会館

2016年10月28日 「中国の鵜飼文化」大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」大阪府社会福祉会館

・みんぱくウィークエンド・サロン

2017年1月15日 「日本の鵜飼文化を誰が守るのか」第451回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎調査活動

・海外調査

2017年2月12日～2月22日—中国（雲南省ジ海の鵜飼文化の地域間比較調査および大理市長と文化遺産登録に

向けた交渉)

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

人間文化研究機構基幹研究プロジェクト「北東アジア地域研究（民博拠点）」メンバー、人間文化研究機構基幹研究プロジェクト「北東アジア地域研究（東北大学拠点）」メンバー、科研・基盤研究（C）「ポスト家畜化時代の鵜飼文化とリバランス論——新たな人・動物関係論の構築と展開」（代表）

◎社会活動・館外活動等

- ・他機関から委嘱された委員など

岐阜県岐阜市 長良川鵜飼習俗総合調査専門委員会・委員、岐阜県関市 小瀬鵜飼習俗総合調査委員会委員・委員、日本文化人類学会 学会誌編集委員、生態人類学会 理事

- ・他大学の客員、非常勤講師

京都市立芸術大学「日本文化史」非常勤講師

菊澤律子 [きくさわ りつこ] ————— 准教授

1967年生。【学歴】東京大学文学部文科三類言語学専修課程卒（1990）、東京大学大学院人文科学研究科修士課程言語学専攻修了（1993）、東京大学大学院人文科学研究科博士課程中退（1995）【職歴】東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助手（1995）、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教授（2000）、国立民族学博物館先端人類科学研究部助教授（2005）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2006）【学位】Ph. D. (Linguistics)（ハワイ大学 2000）、文学修士（言語学）（東京大学 1993）【専攻・専門】言語学、比較（歴史）言語学、オーストロネシア諸語、記述言語学、オセアニア先史研究【所属学会】日本言語学会、日本オセアニア学会、Association of Linguistic Typology、Australian Linguistic Society、日本歴史言語学会、The Philological Society (UK)、日本展示学会、International Society for Historical Linguistics

【主要業績】

[単著]

Kikusawa, R.

2003 *Proto Central Pacific Ergativity: Its Reconstruction and Development in the Fijian, Rotuman and Polynesian Languages*. Canberra: Pacific Linguistics.

[編著]

Kikusawa, R. and L. A. Reid (eds.)

2013 *Historical Linguistics, 2011: Selected papers from the 20th International Conference on Historical Linguistics, Osaka, 25-30 July 2011* (Current Issues in Linguistic Theory 326). Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.

[論文]

Kikusawa, R. and K. A. Adelaar

2014 Malagasy Personal Pronouns: A Lexical History. *Oceanic Linguistics* 53(2): 480-516.

【受賞歴】

2015 2014年度学融合推進センター公開研究報告会学融合推進センター賞

2014 2013年度学融合推進センター公開研究報告会学融合推進センター賞

2009 ラルフ・チカト・ホンダ優秀奨学生賞

2008 第4回日本学術振興会賞

2005 第4回日本オセアニア学会賞

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

- ・研究課題

オーストロネシア諸語の比較形態統語論的研究——動詞の形態法の発達史を探る

・研究の目的、内容

昨年度に引き続き、オーストロネシア諸語の発達史における「名詞化接辞の動詞接辞化」の具体的なメカニズムと、その発達史の解明を目標に研究をすすめる。加えて、「格構造の変化に伴う主語のプロパティの分布の変化」に関するプロジェクト始動のための準備をすすめる。

オーストロネシア諸語においては、早い時期に分岐した言語ほど動詞の形態法が複雑であり、オーストロネシア祖語の動詞のシステムは、これをほぼ直接反映させて再建される傾向にある。これに対し菊澤は、これまで、形態統語論的な特徴の変遷はシステムの変遷として捉えるべきであり、音韻や語彙の再建におけるものは異なる視点および手法が必要であることを示した。

平成28年度は、これまでのマクロレベルでの研究内容をさらに発展させると同時に、ミクロレベルでの変化との関連を探る。具体的には、平成27年度にクラウドファンディングで得た菊澤律子研究奨学金により、南太平洋大学のポール・ギャラティ博士との共同研究としてフィジー語諸方言データのデジタル資料化を行い、研究資料の整理と手法の検討をすすめる。

・成果

平成27年度にクラウドファンディングで得た菊澤律子研究奨学金により、南太平洋大学のポール・ギャラティ博士との共同研究として、フィジー語諸方言データに関する研究資料を整理すると同時に、今後、これらを活かすための研究手法について検討した。1,000近い地点を網羅するフィジー語諸方言の貴重なデータをデジタル化したもので、来年度以降、研究分析をすすめ、活用してゆく予定である。なお、来年度から二年間、りそなアジア・オセアニア財団の助成金を得ることができたため、本資料のうち一部をGIS処理し、地図データ化を進めて公開する予定である。

◎出版物による業績

[論文]

Kikusawa, R., M. Okumoto, T. Kubo and L. Rodrigo

2016 Developing eLecture Materials for Hearing Impaired Students and Researchers: Designing Multiple-Video Programs and Usability Assessment. *Computers Helping People with Special Needs. ICCHP 2016. Lecture Notes in Computer Science*, volume 9759, pp.415-418. Springer.

[査読有]

[その他]

菊澤律子

2016 「評論・展望 手話言語学が拓くコトバの研究の未来」『民博通信』155：4-9。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年5月17日 ‘Taro Plants and Turmeric in the Pacific in the Past: Identifying the Relationship between People and Plants Based on Linguistic Data.’ Guest Lecture at the School of Language, Arts & Media, the University of the South Pacific. University of the South Pacific, Fiji

2017年1月7日～8日 「書評 松本克己著『世界言語の中の日本語——日本語系統論の新たな地平』(三省堂)」国際日本文化研究センター『日本語の起源はどのように論じられてきたか——日本語学史の光と影』第5回共同研究会、国際日本文化研究センター

2017年1月25日 ‘Conserving Linguists’ Fieldnotes: Why It Matters.’ Linguistics workshop / Minpaku Seminar “On the Digitization and Conservation of Field Data” 国立民族学博物館

2017年1月31日 ‘Minpaku’s Sign Language Linguistics Activities An update.’ Guest Lecture at the Centre for Sign Linguistics and Deaf Culture, Chinese University of Hong Kong 香港中文大学

◎調査活動

・海外調査

2016年5月3日～5月16日—フィジー (南太平洋大学においてフィジー語諸方言にかかるフィールドノートのデジタル化の調査研究)

2017年2月9日～2月20日—フィリピン (フィリピンにおけるイシナイ語辞書プロジェクトの視察)

2017年3月8日～3月18日—ハワイ (ハワイ大学における文献調査)

2017年3月30日～4月1日—香港 (香港中文大学手話言語学・ろう文化研究センターにおける研究打ち合わせ)

◎大学院教育

・大学院ゼミでの活動

テーマシリーズ講義「言語を科学する——コトバの調査とヒトの社会」

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

日本財団助成金「手話言語学研究部門の設置および手話言語学事業の推進」研究代表者、国立民族学博物館科研費研究分担者

・民間の奨学金および助成金からのプロジェクト

菊澤律子研究奨学資金

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

日本歴史言語学会副会長、Association for Linguistic Typology 評議員、国際オーストロネシア言語学会運営委員、Journal of Historical Syntax 編集顧問委員、Brill's Studies in Historical Linguistics 編集顧問委員、Journal of Historical Linguistics 編集顧問委員、2016年度東北大学全学教育リレー講義「手話の世界と世界の手話言語☆入門」コーディネーター、2016年度手話言語学講師派遣事業コーディネーター

◎学会の開催

2016年9月23日～9月25日 国際研究集会「The 5th Meeting of Signed and Spoken Language Linguistics (手話言語と音声言語に関する民博フェスタ2016)」国立民族学博物館

松尾瑞穂 [まつお みずほ] ————— 准教授

【学歴】 南山大学文学部人類学科卒業（1999）、名古屋大学大学院国際開発研究科国際協力専攻博士前期課程修了（2002）、総合研究大学院大学文化科学研究科比較文化学専攻博士後期課程単位取得退学（2007）【職歴】 日本学術振興会特別研究員（PD）（2007）、新潟国際情報大学情報文化学部情報文化学科講師（2010）、新潟国際情報大学情報文化学部情報文化学科准教授（2013）、国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授（2014）【学位】 文学博士（総合研究大学院大学文化科学研究科 2008）、学術修士（名古屋大学大学院国際開発研究科 2002）【専攻・専門】 文化人類学、ジェンダー医療人類学、南アジア研究【所属学会】 日本文化人類学会、日本南アジア学会、日本宗教学会

【主要業績】

[単著]

松尾瑞穂

2013 『ジェンダーとリプロダクションの人類学——インド農村社会の不妊を生きる女性たち』京都：昭和堂。

2013 『インドにおける代理出産の文化論——出産の商品化のゆくえ』東京：風響社。

[論文]

松尾瑞穂

2009 『「回復」を希求する——インド農村社会における不妊と「流産」経験』『文化人類学』74(3)：423-440。

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

インドにおけるつながりとサブスタンスに関する研究

・研究の目的、内容

インド社会における遺伝子というサブスタンスとそれに関わる諸実践を検討することを通して、ヒト、家族、親族、カーストといった自他のカテゴリーの生成や圍繞、他者とのつながり（relatedness）の様態の変容について明らかにする。特に、サブスタンス（身体構成要素）の共有がいかに個と集団のカテゴリーの同定や差異を形成するののかについて、血液、母乳、精液といった、南アジア社会における伝統的なサブスタンス概念と、卵子、精子のような配偶子や遺伝子といった新しいサブスタンス概念との比較に注目し、上述の課題にアプローチする。

1) 現地調査: 個からみるサブスタンスや親子・親族関係の変容——遺伝子を中心に

リプロダクションの変容をとくに生殖医療技術との関わりにおいて考察するうえで、南アジア地域におけるサブスタンスの概念は重要な出発点となる。ヒトの形成に関しては、南アジアの文脈でいえば、子どもの形成における種と大地という象徴的な民俗生殖理論がよく知られている。また、血液や体液のような身体部品や、食、環境の共有を通して身体が構成され、つながりが生み出されるということも議論されてきた。生殖医療がもたらす遺伝子のつながりと、身体のサブスタンスを介したつながりはどのように接合、あるいは断絶しているのか。今年度は、インドにおける遺伝と遺伝子に関する社会的認識を把握するため、医療人類学を主とする先行研究を検討するとともに、インド国内において、学校での科学教育と科学の教科書の検討、インド政府が進めるゲノムプロジェクトに関する聞き取りと資料収集、親子の遺伝に関する民俗生殖論の聞き取り調査を実施する。

2) 文献調査: 集団の同定と自他の区別について——アリア人説と優生学を中心に

サブスタンスは個から派生するつながりを越えた、より集合的な集団形成にも関わっている。インドでは20世紀初頭にインド=アリア人を標榜し、社会の浄化を求める優生学運動が、産児制限や社会改革との関わりのなかで繰り広げられてきた。植民地官僚やインド学の学者によって古代インドの輝かしい遺産(とそれの反転としての墮落したインド)として喧伝されたアリア人説は、インドのエリート層にとっては、植民地経験のなかで古代と近代的科学性が接合しながら、自他の区別と自己アイデンティティの確立に寄与する思想として受容された。19世紀末から20世紀にかけての優生学については、ヨーロッパ、アメリカ合衆国、日本に関しては膨大な蓄積があるが、インドを含む第三世界での波及と展開に関する研究は、きわめて限定的である。広大な領野である同分野に分け入るのは容易ではないが、今年度はその基礎的作業として、インドにおけるアリア人説と優生学の接合に関する先行研究の検討と分析、18世紀から近代にかけてのバラモン・カーストの社会形成とアリア人説(渡来人説)の検討を行う。

・成果

上記のテーマに関し、文献収集と文献読解、共同研究会の組織、運営、インドでの国際ワークショップ、インド現地調査を実施した。これらを通して、母乳がインド社会で有する文化的な特徴と、生殖医療(代理出産や配偶子提供など)による、卵子のような新たなサブスタンスの可視化、顕在化について検討するとともに、カーストや階層といった社会区分とサブスタンスとのかかわりについて、考察を深めた。今年度から科研費若手B「現代インドにおける遺伝子の社会的布置に関する人類学的研究」(松尾瑞穂代表)が採択されたため、本研究を本格的に実施することが可能となった。7月には同科研の予算でヨーロッパ社会人類学者学会(EASA)に参加し、ヨーロッパにおける親族研究の研究動向調査を行うとともに、研究交流を行った。また、エディンバラ大学のJacob Copeman准教授を2016年9月1日~12月28日の4か月間、民博の客員外国人研究員として受け入れ、インドにおける血液とサブスタンスに関する共同研究を実施した。

さらに、受託研究・日本学術振興会二国間交流事業に採択され、サヴィトリ・バーイー・フレール・ブネー大学(インド)南アジア研究センターおよび歴史学部をカウンターパートとして、「近代マハラシュトラにおけるカースト観の構築」(松尾瑞穂代表)を開始した。この事業の一環として国内会議を開催し、3月にブネー大学にて予備的な研究交流を目的としたワークショップ「Caste formation in Modern Maharashtra」を開催した。また、そのなかで「From Caste to Class: Formation of Social identity in Birth Control Movements in Modern Maharashtra」と題する研究報告を行った。

また、民博の共同研究会「グローバル化時代のサブスタンスの社会的布置の比較研究」を研究代表として組織し、複数回の研究会(うち1回は秋田大学での公開ワークショップ)を開催、運営、発表するとともに、そのほかの共同研究会のメンバー、および人間文化研究機構地域研究推進事業「現代南アジア地域研究」(MIN-DAS)の拠点構成員として、年間を通じた研究会の運営、参加、発表を行った。

研究成果公開としては、インド農村社会における不妊の治療選択肢の複ゲーム状況をジェンダーポリティクスの観点から分析した論文を、論集『ジェンダーと宗教のポリティクス』(川橋範子・小松加代子編、昭和堂)として刊行した。また、丸善出版『現代インド文化事典』の編集幹事として、第三章「家族とジェンダー」の編集を行うとともに、執筆および全体の取りまとめ作業を行った。成果は平成29年度中に刊行される予定である。そのほか、毎日子ども新聞の連載、エッセイ、小論を執筆、刊行するとともに、インドでの国際ワークショップ1回を含む、学会等での研究報告を9回、一般向け講演会を1回実施した。

◎出版物による業績

[論文]

松尾瑞穂

2016 「信じること、あてにすること——インドにおける不妊女性の宗教実践の選択」川橋範子・小松加代

子編『ジェンダーと宗教のポリティクス——フェミニスト人類学のまなざし』pp.159-190, 京都：昭和堂。[書評有：『週刊仏教タイムス』（2017年2月23日付）、『中外日報』（2017年1月27日付）、『文化人類学』（82(3)号、2017年12月）]

[その他]

松尾瑞穂

- 2016 「サブスタンスから個と集団の関係性と範疇化を考える」『民博通信』153：12-13。
- 2016 「みんなく世界の旅 インド (1)」『毎日小学生新聞』7月30日刊。
- 2016 「みんなく世界の旅 インド (2)」『毎日小学生新聞』8月6日刊。
- 2016 「みんなく世界の旅 インド (3)」『毎日小学生新聞』8月13日刊。
- 2016 「みんなく世界の旅 インド (4)」『毎日小学生新聞』8月20日刊。
- 2017 「資料と通信 第14回ヨーロッパ社会人類学会議 (EASA) に参加して」『文化人類学』41(4)：719-722。[査読有]

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機構の連携研究会

2016年7月30日 「インドのサブスタンスにみる個と集団のつながりの動態」現代南アジア地域研究2016年度第1回合同研究会、国立民族学博物館

・共同研究会

2016年6月4日 「文献解説 Janet Carsten 2001 “Substantivism, Antisubstantivism, and Anti-antisubstantivism” について」『グローバル化時代のサブスタンスの社会的布置に関する比較研究』（研究代表：松尾瑞穂）国立民族学博物館

2016年12月17日 「インドにおける血の隠喩——カーストと優生学の交差」『グローバル化時代のサブスタンスの社会的布置に関する比較研究』（研究代表：松尾瑞穂）秋田大学

2017年1月21日 「インド・マハーラーシュトラ州における反迷信邪術運動とその法制化」『呪術的实践=知の現代的位相——他の諸実践=知との関係性に着目して』（研究代表：川田牧人）国立民族学博物館

2017年2月18日 「ヒンドゥー聖地の資源——祖先祭祀の隆盛と在地社会の変容」『聖地の政治経済学——ユーラシア地域大国の比較研究』（研究代表：杉本良男）国立民族学博物館。

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年9月25日 「女学生、良妻賢母、『意義ある仕事』——高カースト女性にとっての家族と公的世界」日本南アジア学会第29回全国大会、神戸市外国語大学 [査読有]

2016年10月10日 「人の誕生をめぐる科学の社会文化論」人類学関連学会協議会第11回合同シンポジウム、NSG学生総合プラザSTEP、新潟

2017年1月28日 「チットパーヴァン・バラモンの始祖伝説とカースト団体」日本学術振興会・二国間交流事業『近代マハーラーシュトラにおける近代カースト観の形成』（研究代表：松尾瑞穂）国内研究会、金沢大学

2017年3月8日 'From Caste to Class: Formation of Social identity in Birth Control Movements in Modern Maharashtra' JSPS bilateral seminar on "Caste formation in Modern India", Sabitribai Phule Pune University, Pune, India

・研究講演

2016年12月3日 「インドにおける出産をめぐる信仰と産後ケア」第461回みんなく友の会講演会、国立民族学博物館

◎調査活動

・海外調査

2016年7月18日～7月25日—イタリア（ヨーロッパ社会人類学会（EASA）大会へ参加）

2016年8月6日～8月20日—インド（現代インドにおける遺伝子の社会的布置に関する人類学的研究にかかる現代インドのカーストとサブスタンス調査）

2017年2月28日～3月17日—インド（インド、サヴィトリバーイー・フレイ・プネ——大学との二国間交流事業にかかるワークショップ開催および科研プロジェクトにかかる資料調査）

◎大学院教育

・担当科目

共通科目 比較文化学特論Ⅱ「家族とつながりの人類学」担当

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費助成事業（若手B）「現代インドにおける遺伝子の社会的布置に関する人類学的研究」研究代表者、受託研究・日本学術振興会二国間交流事業「近代マハーラーシュトラにおけるカースト観の構築」研究代表者、科学研究費助成事業（挑戦的萌芽研究）「インド・マハーラーシュトラにおける集団意識とカースト・ダイナミクスの学際的研究」（代表者：足立享佑）研究分担者、人間文化研究機構地域研究推進事業「現代南アジア地域研究」（国立民族博物館拠点 MINDAS）拠点構成員

◎社会活動・館外活動

・非常勤講師

京都外国語大学「地域文化研究Ⅱ」、南山大学「地域の文化と歴史（南アジア）」（集中講義）、新潟国際情報大学「現代南アジア論」（集中講義）

丸川雄三 [まるかわ ゆうぞう] ————— 准教授

【学歴】 東京工業大学理学部応用物理学科卒（1996）、東京工業大学大学院理工学研究科地球惑星科学専攻修士課程修了（1998）、東京工業大学大学院情報理工学研究科計算工学専攻博士課程単位取得退学（2001）**【職歴】** 東京工業大学精密工学研究所助手（2001）、科学技術振興機構 CREST 研究員（国立情報学研究所高野明彦研究室）（2003）、国立情報学研究所高野明彦研究室特任助手（2004）、人間文化研究機構本部プロジェクト研究員（2006）、国立情報学研究所連想情報学研究開発センター特任助手（2006）、国立情報学研究所連想情報学研究開発センター特任准教授（2007）、国際日本文化研究センター文化資料情報企画室准教授（2012）、国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授（2013）**【学位】** 博士（工学）（東京工業大学大学院 2003）、修士（理学）（東京工業大学大学院 1998）**【専攻・専門】** 1）連想情報学、2）文化財情報発信**【所属学会】** アート・ドキュメンテーション学会

【主要業績】

[論文]

丸川雄三

2008 「文化財情報発信の実際——文化遺産オンラインの取り組みについて」『画像ラボ』19(4)：26-29。

水谷長志・川口雅子・丸川雄三

2014 「アジアからの美術書誌情報の発信——東京国立近代美術館・国立西洋美術館 OPAC の artlibraries.net における公開の経緯とその意義」『東京国立近代美術館研究紀要』18：6-31。

丸川雄三・阿辺川 武

2010 「横断的連想検索サービス『想-IMAGINE』——データベース連携が拓く新たな可能性」『情報管理』53(4)：198-204。

【受賞歴】

2011 文部科学大臣表彰科学技術賞（理解増進部門）

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

連想情報学に基づく文化財情報発信に関する研究

・研究の目的、内容

連想情報学とは、情報システムを、データと利用者を含む統合的な「場」として扱う考え方であり、発信対象の特性に応じた情報発信手法を主な研究対象としている。本研究課題においては、このうち文化財情報を対象に、データ処理技術および情報検索技術、ユーザインタフェースなどの研究開発を行う。

平成28年度は、近代日本の身装（身体と装い）関係資料を対象とする情報サービスの研究開発を実施する。

この研究は、これまで JSPS 科研費基盤 B「近代日本の身装画像デジタルアーカイブの構築——文化変容に視点を据えて」(代表：高橋晴子、平成24年度～平成26年度)の助成を受け実施されてきたものであるが、研究成果をふまえ今年度も継続して研究を進める。さらに美術情報分野を中心とする制作者データベースとその発信環境の研究開発を実施する。この研究は、JSPS 科研費基盤 B「ミュージアムと研究機関の協働による制作者情報の統合」(代表：丸川雄三、平成26年度～平成28年度)の助成を受けて実施するものである。

・成果

画像アーカイブズの活用研究として、近代日本の身装(身体と装い)を発信するウェブサイトの研究開発を実施した。明治から昭和期(1868～1945年)における身装に関する画像(身装画像デジタルアーカイブ)のデータベースの試験運用を行い、連想検索技術によって検索・閲覧が可能なウェブサイト「近代日本の身装文化」を5月25日に一般公開した。またこれまでの研究成果を平成28年6月に「アート・ドキュメンテーション研究大会2016」で発表した。この研究は、JSPS 科研費基盤 B「近代日本の身装画像デジタルアーカイブの構築——文化変容に視点を据えて」(代表：高橋晴子、平成24年度～平成26年度)の研究成果をふまえ実施されたものである。また、文化財情報の活用基盤の研究として、制作者典拠データベースの研究開発を実施した。平成28年度は、東京文化財研究所および国立美術館と協働で作家データの調査と収集を行うとともに、試作したデータベースと文化遺産オンラインとの連携実験を実施し、その成果の一部を平成28年11月に「アート・ドキュメンテーション学会秋季研究会」で発表した。この研究は、JSPS 科研費基盤 B「ミュージアムと研究機関の協働による制作者情報の統合」(代表：丸川雄三、平成26年度～平成28年度)の助成を受けて実施されたものである。

◎出版物による業績

[分担執筆]

丸川雄三

2017 「ものとの対話をもっと豊かに『キュッパのびじゅつかん・デジタル』『アート・コミュニケーション事業ドキュメント——「キュッパのびじゅつかん」展から』pp.142-145, 東京：東京都美術館。

[その他]

丸川雄三

2016 「展示におけるデジタルビューアの導入と活用」『季刊民族学』40(4)：77-80。

2016 「文化遺産オンラインにおける制作者情報の統合研究」『アート・ドキュメンテーション学会第9回秋季研究集会 予稿集』pp.14-15, アート・ドキュメンテーション学会。

2017 「連想技術によるデータベース間の関連性の発見と活用」『映画におけるデジタル保存と活用のためのシンポジウム 予稿集』p.71, 東京：東京国立近代美術館。

2017 「身装画像データベース『近代日本の身装文化』——研究資源データベースの発信と展開」『人間文化研究情報資源共有化研究会報告集』7：13-17。

高橋晴子・丸川雄三

2016 「身装画像データベース〈近代日本の身装文化〉——画像データの特性と検索システムの構築」『2016年度アート・ドキュメンテーション学会年次大会 予稿集』pp.49-52。

野林厚志・丸川雄三

2016 「生態資源獲得の道具と技巧の人類学的研究」『パレオアジア文化史学 第1回研究大会 予稿集』pp.86-87, 東京：東京大学総合研究博物館。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年6月11日 「身装画像データベース〈近代日本の身装文化〉——画像データの特性と検索システムの構築」『2016年度アート・ドキュメンテーション学会年次大会』奈良国立博物館

2016年11月3日 「文化遺産オンラインにおける制作者情報の統合研究」『アート・ドキュメンテーション学会第9回秋季研究集会』東京都写真美術館

2016年11月5日 「生態資源獲得の道具と技巧の人類学的研究」『パレオアジア文化史学 第1回研究大会』東京大学

2017年1月27日 「連想技術によるデータベース間の関連性の発見と活用」『映画におけるデジタル保存と活用のためのシンポジウム』東京国立近代美術館フィルムセンター

・研究講演

2017年1月11日 「連想による文化財デジタル・アーカイブズの活用」(招待講演)立命館大学大学院文学研究科・行動文化情報学専攻「情報人文学の最前線」立命館大学アート・リサーチセンター

2016年11月10日 「文化財情報におけるデジタル・アーカイブズの活用」立命館大学映像学部「デジタル・アーカイブ」立命館大学充光館（衣笠キャンパス）

2017年2月8日 「写真原板データベースの価値について——所蔵資料の情報化と活用」（招待講演）page2017「日本写真保存センター」セミナー、池袋サンシャイン文化会館

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（基盤研究（B））「ミュージアムと研究機関の協働による制作者情報の統合」研究代表者

◎社会活動・館外活動

- ・他の機関から委嘱された委員など

国立情報学研究所客員准教授、東京国立近代美術館客員研究員、東京文化財研究所「近現代美術資料の収集、整理、公開に関する調査研究」客員研究員、奈良国立博物館「仏教美術に関する共同調査研究」調査員、立命館大学アート・リサーチセンター「歌舞伎・浄瑠璃データベースの活用に関する研究」客員協力研究員

三尾 稔 [みお みのる] ————— 准教授

1962年生。【学歴】東京大学教養学部卒（1986）、東京大学大学院社会学研究科文化人類学専攻修士課程修了（1988）、東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻博士課程退学（1992）【職歴】東京大学教養学部助手（1992）、東洋英和女学院大学社会科学部専任講師（1995）、東洋英和女学院大学社会科学部助教授（1999）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助教授（2003）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（2004）、総合研究大学院大学文化科学研究科兼任（2004）、国立民族学博物館研究戦略センター准教授（2008）【学位】社会学修士（東京大学大学院社会学研究科 1988）【専攻・専門】社会人類学・インドの宗教と社会【所属学会】日本文化人類学会、日本南アジア学会

【主要業績】

[共編]

Mio, M., Bates, C. (eds.)

2015 *Cities in South Asia*. London: Routledge. [査読有・書評有・民博共同研究の成果] (http://choiceconnect.org/webclipping/194400/e0bubfitramyrf7jwbc8s12r_hb62uv6swnu3wbhxn7ct2md3o)

三尾 稔・杉本良男編

2015 『現代インド6 環流する文化と宗教』東京：東京大学出版会。

[論文]

三尾 稔

2017 「モノを通じた信仰——インド・メーワール地方の神霊信仰における身体美学的な宗教実践とその変容」『国立民族学博物館研究報告』41(3)：215-281, 大阪：国立民族学博物館。

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

- ・研究課題

インド西部における宗教と文化の変容に関する人類学的研究

- ・研究の目的、内容

世界市場への直接的な連結や情報テクノロジーの広範な浸透などを背景に、1990年代以降のインドの文化や宗教は地域外の動向と共振しつつ基層的な部分から大きな変容を遂げている。三尾が25年あまりにわたってフィールド調査を継続してきたインド西部の都市や村落においても、それは例外ではない。本年度は昨年度に引き続き、特に情報テクノロジーの浸透や宗教の政治化・商品化といった全インド規模で見られる宗教や文化の変容動向が、地方のサバルタンの宗教実践をどのように変容させているかという点に注目し、フィールド調査や文献調査をもとに、変容の諸相を実証的に解明し、これが政治・経済・社会の動向とどのように関連するのかを明らかにする。

人間文化研究機構地域研究推進事業の一環として継続してきた「現代インド地域研究」は、今年度から人間文化研究機構基幹研究プロジェクト「南アジア地域研究」としてさらに6年間継続実施されることとなった。三尾は、この研究プロジェクトにおいて国立民族学博物館拠点の拠点代表を引き続きつとめ、拠点構成員や研

究分担者とともに国際的な連携協力のもとでインド研究を推進する。各個研究のテーマは、この地域研究プロジェクトの内容に密接に関連するものであり、拠点予算も活用しつつ拠点の研究テーマのもとでの1つの実証的研究として各個研究を遂行する。

また、文化資源プロジェクトとして行ってきた『「沖守弘インド民族文化写真資料アーカイブ」のデータベース作成』プロジェクトでは、上記「現代インド地域研究」プロジェクト経費も活用して、昨年度中に館内公開を行ったが、今年度は一般公開を目指すとともに、英語での検索も可能となるように改良を加え、世界の研究者コミュニティや関心のある人びともにも活用してもらえるようにする。

・成果

インドの経済発展による中間層の増大やローカルな社会への情報テクノロジーの浸透が、人びとの伝統的な宗教実践にどのような影響を及ぼしつつあるのかという問題に関する調査・研究の成果は『国立民族学博物館研究報告』41巻3号に「モノを通じた信仰——インド・メーワール地方の神霊信仰における身体感応的な宗教実践とその変容」(215-281頁。査読つき)として発表した。

また、この問題に関して、人間文化研究機構基幹研究プロジェクト「南アジア地域研究」経費を活用して平成29年2月末から3月上旬にかけてインドに赴き、追加の現地調査を行った。

『「沖守弘インド民族文化写真資料アーカイブ」のデータベース作成』プロジェクトでは、上記「南アジア地域研究」プロジェクト経費も活用し、目標どおり平成28年4月に日本語版で「沖守弘インド写真データベース」として一般公開し、その後英語での検索も可能となるように改良を加えた英語版を平成29年3月末に公開した。

◎出版物による業績

[論文]

三尾 稔

2017 「モノを通じた信仰——インド・メーワール地方の神霊信仰における身体美学的な宗教実践とその変容」『国立民族学博物館研究報告』41(3)：215-281, 大阪：国立民族学博物館。[査読有]

◎映像音響メディアによる業績

・国立民族学博物館映像音響資料の制作・監修

[データベース]

三尾 稔制作・監修

2017 「沖守弘インド写真データベース」(国立民族学博物館データベース。一般公開用)

2017 「Database of Morihiro Oki's Photographs of India」(一般公開用)

◎調査活動

・海外調査

2017年2月28日～3月11日 インド(地域研究推進経費による現地調査及び文化資源研究プロジェクト経費による資料収集)

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

人間文化研究機構地域研究推進事業「現代インド地域研究」国立民族学博物館拠点 拠点代表

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

京都大学地域研究統合情報センター運営委員、日本南アジア学会理事

飯泉菜穂子 [いいずみ なおこ]——特任准教授

【学歴】早稲田大学法学部卒(1985)、お茶の水女子大学家政学研究所修士課程修了(1989)【職歴】日本アイビーエム株式会社入社(本社人事部)(1989)、NHK手話ニュースキャスター(1990)、フリーランス手話通訳、手話講師(1993)、学校法人大東学園・世田谷福祉専門学校手話通訳学科および手話通訳専攻学科学科長(2002)【学位】家政学修士(お茶の水女子大学、1989)【専攻・専門】手話通訳論、手話通訳養成【所属学会】、日本通訳翻訳学会、日本手話通訳士協会、全国手話通訳問題研究会

【主要業績】

[映像教材]

飯泉菜穂子

1995 『DVDで学ぶ手話入門講座』 <http://www.hj.sanno.ac.jp/ps/course/4092> (構成、テキスト・スクリプト執筆、演出、ナビゲーターとしての出演) 産業能率大学通信教育講座。

[共著]

小谷眞男・下城史江・飯泉菜穂子

2011 「新しいリベラルアーツとしての日本手話 お茶の水女子大学における『手話学入門』導入の経験から」『手話学研究』20: 19-38。

[著書]

飯泉菜穂子

2013 「手話通訳士専門養成機関(世田谷福祉専門学校)における養成について」『手話通訳士試験の在り方等に関する検討会』pp.64-72。

【2016年度の活動報告】

◎各個人研究

・研究課題

学術手話通訳者養成の実践とカリキュラムの検討および検証

・研究の目的、内容

昨年度まで客員教員として取り組んできた「学術手話通訳養成の実践とカリキュラムの検討および検証」を日本財団の助成によって設置された手話言語学研究部門の一員として、継続しつつ内容を拡大しながら進めている。拡大の一環として、高等教育機関・学術機関等に於ける学術手話通訳ニーズの調査と当事業からのパイロット派遣、言語学的な知識を一般の手話通訳者に提供する通訳クリニック、将来の学術通訳者となりうる候補者を発掘し養成につなげていく方法の模索等を計画している。

・成果

学術分野における日本手話通訳による情報保障環境を構築するために、スクリーニングにより選考した現役手話通訳者数名を対象とした、学術分野に特化した手話通訳研究(研修)事業を通年で(計7回・9日間)行った。研修内容としては、運営メンバーおよび外部講師による通訳実技検証・通訳者の事前学習についてのレクチャーと課題実践・一線で活躍中の日英(音声)学術通訳者からのレクチャー・日英同時通訳を介してのリレー通訳体験・民博主催の国際手話言語学フェスタにおける日英同時通訳を介した日本手話通訳OJTおよびその振り返り(検証)などを実施した。また、成果物として、今後(来年度以降)の研修時の教材として広く活用することが出来るリレー通訳時のタイムラグについてまとめた教材DVDを作成した。

研修2年目以降の協力者には、民博関連事業(『楽しい言語学を学ぶ会』)や部門ミーティング・言語関連メンバーミーティング・館内学術発表(研究懇談会等)での手話通訳OJTの機会を多数提供し、通訳終了後、毎回飯泉からの検証フィードバックを行った。

高等教育機関における手話通訳ニーズ調査プロセスの中で、大阪教育大学からの依頼を受け、当大学の『手話言語学特別講座』(2クール:各クール7回・計14回、各クール5名の講師によるリレー講座)の全体コーディネーターおよび講師を務めた。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2016年5月14日～8月6日 連続講座『楽しい言語学を学ぶ会(たのげん)』全体コーディネーター・手話通訳コーディネーター、国立民族学博物館

2016年10月22日～11月19日 連続講座『みんなくで手話言語学を学ぼう!』全体コーディネーター・手話通訳コーディネーター・講師『手話通訳者と手話言語学』、国立民族学博物館

・研究講演

2016年11月8日～2017年3月3日 大阪教育大学主催、連続講座『手話言語学特別講座』全体コーディネーター・講師(講義『実感・体感の手話言語案内』、実技講座『日本手話・日本語翻訳技術入門Ⅰ』『日本手話・日本語翻訳技術入門Ⅱ』)、大阪教育大学

2017年2月12日 シンポジスト、手話教師センター主催「ろう通訳シンポジウム」『ろう通訳の優位性を活かすために』、AP西新宿

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

NPO 法人シアターアクセシビリティネットワーク (TA-net) 「演劇・舞台における手話通訳養成カリキュラム研究会」委員 (公益財団法人セゾン文化財団助成事業)

◎社会活動・館外活動等

- ・他の機関から委嘱された委員など

名古屋市登録手話通訳者選考委員、社会福祉法人聴力障害者情報文化センター評議員、NPO 法人バリアフリー映画研究会理事、お茶の水女子大学リベラルアーツ科目「手話学入門」聴者ゲストスピーカー：『正しく知ろう、手話の世界』、関西学院大学「手話学入門」リレー講座非常勤講師：『手話通訳論』、地域聴覚障害者団体等での講演講師 (調布市聴覚障害者協会『手話通訳者の守秘義務について』、西宮市聴覚障害者協会『手話の魅力と出会い』、姫路市デフカフェ『手話との出会いで広がる世界』、東京都聴覚障害者連盟ろう通訳研究グループ『聴通訳からみたらう通訳』)、手話通訳者・士技術研修講師 (NPO 法人デフネットかごしま登録手話通訳者現任研修、手話通訳士協会鹿児島支部現任研修、徳島県登録手話通訳者スキルアップ研修、三重県四日市市登録手話通訳者現任研修)、その他講座講師 (NPO 法人手話教師センター：翻訳通訳講師養成講座／通訳理論講座『通訳に対する評価方法』、NPO 法人 TA-net：演劇・舞台における手話通訳養成講座『良い手話通訳とは?』)

相良啓子 [さがら けいこ] ————— 特任助教

【学歴】筑波大学大学院修士課程教育研究科障害児教育専攻修了 (1999)、英国セントラル・ランカシャー大学国際手話ろう文化学研究所大学院 MPhil 課程修了 (2014) 【職歴】株式会社 JTB 本社 IT 企画部 (1999)、株式会社 JTB 首都圏新橋支店営業三課バリアフリーツアー推進担当 (2002)、英国セントラル・ランカシャー大学国際手話ろう文化学研究所研究官 (2010)、国立民族学博物館プロジェクト研究員 (2014) 【学位】修士 (教育研究科障害児教育専攻) (筑波大学大学院 1999)、手話言語学修士 (M. Phil.) (セントラル・ランカシャー大学国際手話言語学・ろう者学研究所 (iSLanDS) 2014) 【専攻・専門】手話言語学類型論・聴覚障害児教育 【所属学会】日本手話学会、日本語学会、日本歴史言語学会、社会言語科学会

【主要業績】

[編著書]

Zeshan, Ulrike and Keiko Sagara (eds.)

2016 *Semantic Fields in Sign Languages: Colour, Kinship and Quantification*. Berlin: Mouton de Gruyter & Nijmegen: Ishara Press.

[論文]

Sagara, Keiko and Ulrike Zeshan

2016 A Comparative Typological Study. In U. Zeshan, and K. Sagara (eds.) *Semantic Fields in Sign Languages: Colour, Kinship and Quantification*, pp.3-37. Berlin: Mouton de Gruyter & Nijmegen: Ishara Press.

Nonaka, Angela, Kate Mesh, and Keiko Sagara

2015 Signed Names in Japanese Sign Language: Linguistic and Cultural Analyses, *Sign Languages Studies* 16(1): 57-85.

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

- ・研究課題

日本手話と台湾手話における歴史変化の解明：歴史社会言語学の方法論の確立に向けて

- ・研究の目的・内容

本研究の目的は、日本手話と台湾手話の歴史変遷の解明に取り組み、具体的な分析を通して、手話言語学においても科学的な比較研究を行うことである。本研究は、科研費による3年度計画の1年目である。まず、台北では東京の教師、台南では大阪の聾学校の教師により手話が普及したことが報告されているが、台湾手話はその後中国手話からの借用もなされるようになったため、こうした歴史的背景を含めて文献を収集する。次に、

日本国内におけるバリエーションの実態も把握し、台湾手話におけるバリエーションとの比較を行う。サンプリングは、社会言語学的調査にも適応できるようにするため年齢差・性差・地域差などバランスの取れたデータ収集を行うことを目指す。科研費が得られたため、秋頃に台湾で第一回目のフィールドワークを約一ヶ月間の予定で実施する。

・成果

本年は、日本手話と台湾手話の史的研究に必要な資料収集及び、国内と台湾で、フィールドワークを行った（科研費、16K13229）。松永（1937）の『聾啞会』の中で書かれた「聾啞手まね事典」（5回シリーズ）には、手話表現の説明文と、イラストによる手型が書かれてあり、これによりその当時に使用されていた手話を知ることができた。また、約80年前の表現と現在使用されている表現を比較することにより、言語学的観点から手話表現の変化をたどることができた。フィールドワークは、東京、台北、台南でそれぞれ20名ずつ、大阪では15名の情報提供者からデータを収集し、20代から80代までの幅広い年齢層からのデータが得られた。これらのデータの中で、特に数の表現においては、現在日本の多くのろう者が使用していない表現が、80才以上のろう者から確認され、また、その表現は聾啞会に掲載されているデータとも一致するため、資料と収集データの両方から実在した表現形であることが確認できた。同時に、台湾においては、日本で古くから使用されている表現がそのまま変化せず使用されている語彙が多いという印象を受けた。今後はこの点について実証的な研究を進めていく。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年12月3日～12月4日 「日本手話と台湾手話にみられる変種と言語変化——東京と大阪における数詞・色彩・親族・生活基本語彙を対象に」第42回日本手話学会、タワーホール船堀

2016年12月6日 「世界の手話における数のしくみ、日本手話系言語における数表現の変化」東北大学全学教育リレー講義「手話の世界と世界の手話言語☆入門」東北大学

2017年2月25日 「日本手話と台湾手話の比較を通して——数詞・色彩・親族・生活基本語彙を対象に」第16回手話研究セミナー、横浜ラポール

◎調査活動

・国内調査

2016年7月10日—大阪（大阪で使用される手話語彙の調査）

2016年7月17日—東京（東京で使用される手話語彙の調査）

2016年7月19日—大阪（大阪で使用される手話語彙の調査）

2016年9月9日—京都（京都で使用される手話語彙の調査）

2016年11月27日—東京（東京で使用される手話語彙の調査）

2017年2月27日—東京（東京で使用される手話語彙の調査）

・海外調査

2016年4月27日～4月30日—台湾（台湾手話の調査研究）

2016年10月16日～11月12日—台湾（台北、台南両地域における手話データ収集）

2017年1月2日～1月7日—台湾（台北、台南両地域における手話データ収集に関するフィールドワーク）

2017年3月8日～3月17日—韓国（韓国における手話データ収集に関するフィールドワーク）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費助成事業（基盤研究（B））海外学術調査「アジア太平洋諸国における手話の対照言語学的研究：外国手話事典の編集をめざして」（研究代表：加藤三保子）研究分担者

研究戦略センター

鈴木七美 [すずき ななみ] センター長 (併) 教授

【学歴】 東北大学薬学部薬学科卒 (1981)、お茶の水女子大学大学院人文科学研究科修士課程修了 (1992)、お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士課程修了 (1996) 【職歴】 財団法人仙台複素環化学研究所研究員 (1981)、中外製薬株式会社国際開発部 (1982)、財団法人相模中央化学研究所第4研究班研究員 (1983)、京都文教大学人間学部文化人類学科専任講師 (1997)、京都文教大学人間学部助教授 (2000)、京都文教大学大学院文化人類学研究科助教授 (2002)、マギル大学人類学部客員助教授 (2003)、放送大学文化人類学'04分担任協力講師 (2004)、京都文教大学人間学部文化人類学科専任教授 (2005)、京都文教大学大学院文化人類学研究科教授 (2005)、国立民族学博物館先端人類科学研究部教授 (2007)、放送大学客員教授 (2007)、総合研究大学院大学文化科学研究科兼任 (2009) 国立民族学博物館研究戦略センター教授 (2014) 【学位】 博士 (学術) (お茶の水女子大学 1996)、修士 (人文科学) (お茶の水女子大学 1992)、学士 (薬学) (東北大学1981) 【専攻・専門】 文化人類学、エイジング研究、医療社会史 【所属学会】 日本文化人類学会、アメリカ学会、Association for Anthropology and Gerontology (AAGE)、The International Union of Anthropological and Ethnological Sciences (IUAES)

【主要業績】

〔単著〕

鈴木七美

2002 『癒しの歴史人類学——ハーブと水のシンボリズムへ』 京都：世界思想社。

1997 『出産の歴史人類学——産婆世界の解体から自然出産運動へ』 東京：新曜社。

〔編著〕

Suzuki, N. (ed.)

2013 *The Anthropology of Aging and Well-being: Searching for the Space and Time to Cultivate Life Together* (Senri Ethnological Studies 80). Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]

【受賞歴】

1998 第13回女性史青山なを賞

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

多世代共生「エイジ・フレンドリー・コミュニティ」とコモンズ

・研究の目的、内容

高齢化する社会において、人々の生活の充実に関わる公助、共助、互助、自助などのバランスや設計が課題として注目されている。高齢者のニーズに応える環境形成はすべての世代の人々が暮らしやすい環境に繋がるという「エイジ・フレンドリー・コミュニティ」構想に関わる調査研究を進め、成果を公開する（外部資金 基盤研究B 特設分野研究「多世代共生『エイジ・フレンドリー・コミュニティ』構想と実践の国際共同研究」研究代表者：鈴木七美）。各地域の特徴を生かし、様々なアクターが参加し情報交換できるコモンズ（共有地）について検討する。また、多世代が参加し新たな活動を生み出すモノづくりに関わるコモンズについて、キルトの収集活動を通して考察を深める（平成28年度文化資源プロジェクト「現代アメリカのパッチワークキルトおよび関連資料の収集——アーミッシュキルトを中心に」）。

・成果

I 外部資金：基盤研究B 特設分野研究「多世代共生『エイジ・フレンドリー・コミュニティ』構想と実践の国際共同研究」（研究代表者：鈴木七美）に基づく成果公開として、以下を実施した。

- 1) 応用人類学会76回年次大会のラウンドテーブル「応用人類学とエイジング」(Roundtable: Applied Anthropology and Aging, SfAA 2016: Society for Applied Anthropology 76th Annual Meeting) において、Aging in Place in Japan: The Roles of Anthropologists and Caregivers (日本におけるエイジング・イン・プレイス——文化人類学者とケア者の役割) を発表し議論に参加した (2016年4月2日 The

- Westin Bayshore, Vancouver)。
- 2) 国際共同研究者とともに、国際メイキング・シティ・リヴァブル会議 (53rd IMCL: International Making Cities Livable Conference 2016) のプレナリー・シンポジウム The Age-Friendly Community Movement: Inclusion, Small Change, and the Right to The City (エイジフレンドリー・コミュニティ運動——包摂、小さな変化、そして都市における権利) を企画し、発表 Creating an Age-friendly Community in Japan: A Search for Enduring Ways to Nurture New Commons in a Depopulated Town (日本におけるエイジフレンドリー・コミュニティの創出——人口減少市町村にける新しいコモنزの持続的開発) を行い、欧州における高齢者が暮らす安全な住居と活動しやすい都市環境に関し情報を蓄積し、日本の現状と比較しつつ議論を深めた (2016年6月15日、The Pontifical Urbaniana University, Rome)。
 - 3) 科研の成果を、国立民族学博物館において研究者・一般参加者と共有する目的で、公開国際シンポジウム Exploring Age-friendly Communities: Diverse People Aging in Place (エイジフレンドリー・コミュニティ——変わりゆく人生を包み込むまち) を開催し、趣旨説明を行った (国立民族学博物館第4セミナー室 2017年2月25日)。
 - 4) 「高齢認知症者のエイジング・イン・プレイスに向けた包摂的活動——アメリカ合衆国における『ブリッジ』のメモリーケアを中心に」『国立民族学博物館研究報告』41-1: 79-101、国立民族学博物館 (2016.9) を出版した。
 - 5) 公開研究セミナーの内容について、「公開研究セミナー 高齢者たちと共に考えるウェルビーイング——宮城県の在宅高齢者生活支援の現場から」『民博通信』No.153, p.26 (2016年6月) に発表した。
- II 各地域の特徴を生かし、様々なアクターが参加し情報交換できるコモنز (共有地) が形成・活用されてきたケースに関する調査研究として下記を行った。
- 1) 外部資金：基盤研究C「スイスにおける高齢者のウェルビーイングと代替医療の適用に関する文化人類学研究」(研究代表者：鈴木七美) に基づく成果を、国際研究集会とウェブサイトなどを通して、広く医療従事者・研究者および一般に向けて発信した。
 - ・公開国際シンポジウム「エイジフレンドリー・コミュニティ——変わりゆく人生を包み込むまち」において発表 Age Friendly Communities in Switzerland: Focusing on the Narrative on the Rhythm of Life and Aging-in-place (ナラティブと生のリズム：スイスの多世代対象複合型生活施設におけるエイジフレンドリー・コミュニティ) を行った (国立民族学博物館第4セミナー室 2017年2月25日)。
 - ・「スイスの高齢者たちが親しんできた地域の癒し文化と養生思想」(みんぱくウィークエンドサロン 研究者と話そう) 国立民族学博物館 (2016年4月10日)。
 - ・「スイスにおける養生文化とエイジフレンドリー・コミュニティ」公益社団法人日本薬学会 (ウェブサイト <http://www.pharm.or.jp/highlight/index.shtml>) を発信した。
 - 2) 各地域の特徴を生かし、様々なアクターが参加し情報交換できるコモنز (共有地) が活用されてきた多様化する家族への支援に関し、共同研究「リプロダクションと家族のオルターナティブデザイン——文化と歴史の視点から」(研究代表者：松岡悦子) による研究成果を、「『新しい家族』を求めて——スイス・フランス・デンマークの国際養子縁組み」松岡悦子編『子どもを産む・家族をつくる人類学——オルターナティブへの誘い』pp.149-174、勉誠出版、2017年として出版した。
- III 平成28年度文化資源プロジェクト「現代アメリカのパッチワークキルトおよび関連資料の収集——アーミッシュキルトを中心に」を実施し、多世代が参加し新たな活動を生み出すモノづくりに関わるコモنزについて考察を深め、エイジ・フレンドリー・コミュニティに関する研究成果の一部として『アーミッシュたちの生き方——エイジ・フレンドリー・コミュニティの探求』(Senri Ethnological Report 141) として出版した (255頁 2017年3月30日)。

◎出版物による業績

[単著]

鈴木七美

2017 『アーミッシュたちの生き方——エイジ・フレンドリー・コミュニティの探求』(国立民族学博物館調査報告141) 大阪：国立民族学博物館。[査読有]

[論文]

鈴木七美

2016 「高齢認知症者のエイジング・イン・プレイスに向けた包摂的活動——アメリカ合衆国における『ブリッジ』のメモリーケアを中心に」『国立民族学博物館研究報告』41(1)：79-101。[査読有]

2017 「『新しい家族』を求めて——スイス・フランス・デンマークの国際養子縁組み」松岡悦子編『子どもを産む・家族をつくる人類学——オルタナティブへの誘い』pp.149-174, 東京: 勉誠出版。

[その他]

鈴木七美

2016 「スイスにおける養生文化とエイジフレンドリー・コミュニティ」公益社団法人日本薬学会ホームページ <http://www.pharm.or.jp/highlight/20160405.shtml>

Suzuki, N.

2017 Exploring Age-friendly Communities: Diverse People Aging in Place, International Symposium, February 25, 2017. *Minpaku Anthropology Newsletter* 44: 13-14.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2017年2月25日 「企画趣旨」および「ナラティブと生のリズム: スイスの多世代対象複合型生活施設におけるエイジフレンドリー・コミュニティ」国際シンポジウム『エイジフレンドリー・コミュニティ——変わりゆく人生を包みこむまち』科研(基盤B)(2014-2016) JP26310109 「多世代共生『エイジ・フレンドリー・コミュニティ』構想と実践の国際共同研究」(基盤B) [特設分野研究: ネオ・ジェロントロジー] (代表者: 鈴木七美) 成果公開、国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年4月2日 'Aging in Place in Japan: the Roles of Anthropologists and Caregivers' Roundtable: Applied Anthropology and Aging SfAA 2016: Society for Applied Anthropology 76th Annual Meeting, The Westin Bayshore, Vancouver Canada

2016年6月15日 'Creating an Age-friendly Community in Japan: A Search for Enduring Ways to Nurture New Commons in a Depopulated Town,' Plenary Symposium: The Age-friendly Community Movement: Inclusion, Small Change, and the Right to the City. 53rd IMCL: International Making Cities Livable Conference 2016, The Pontifical Urbaniana University, Rome Italy

・みんなくウィークエンド・サロン

2016年4月10日 「スイスの高齢者たちが親しんできた地域の癒し文化と養生思想」第420回みんなくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

・展示活動

平成28年度文化資源プロジェクト「現代アメリカのパッチワークキルトおよび関連資料の収集——アーミッシュキルトを中心に」

◎調査活動

・海外調査

2016年3月26日～4月5日—カナダ(「多世代共生『エイジ・フレンドリー・コミュニティ』構想と実践の国際共同研究」にかかる調査研究)

2016年6月10日～6月27日—イタリア、ドイツ(「多世代共生『エイジ・フレンドリー・コミュニティ』構想と実践の国際共同研究」にかかる研究集会に参加及び調査研究)

2016年7月29日～8月30日—アメリカ(多世代共生『エイジ・フレンドリー・コミュニティ』構想)

◎社会活動・館外活動等

・他の機関から委嘱された委員など

Editorial Advisory Board for Anthropology & Aging (A&A: The Official Publication of the Association for Anthropology and Gerontology (AAGE)、American Society on Aging (ASA) 2016 Aging in America Conference 発表の査読者(peer reviewer)、日本文化人類学会学会誌『文化人類学』編集委員会委員、地域研究コンソーシアム理事

樫永真佐夫 [かしなが まさお]————— 教授

1971年生。【学歴】早稲田大学第一文学部日本文学専修卒(1994)、東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻修士課程修了(1997)、東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻(文化人類学コース)博士課程単位取得退学(2001)【職歴】日本学術振興会特別研究員(1997)、国立民族学博物館民族社会研究部助手(2001)、国立民族

学博物館民族社会研究部准教授（2008）、国立民族学博物館研究戦略センター准教授（2010）、総合研究大学院大学准教授兼任（2012）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2016）、総合研究大学院大学教授兼任（2016）【学位】学術博士（東京大学 2006）、学術修士（東京大学 1997）【専攻・専門】文化人類学（東南アジアにおけるタイ系民族の民族誌的研究）【所属学会】日本文化人類学会

【主要業績】

[単著]

樫永真佐夫

2013 『黒タイ歌謡「ソン・チュー・ソン・サオ」——村のくらしと恋』東京：雄山閣。

2011 『黒タイ年代記——「タイ・プー・サック」』東京：雄山閣。

2009 『ベトナムの祖先祭祀——家霊簿と系譜認識をめぐる民族誌』東京：風響社。

【受賞歴】

2010 第6回日本学術振興会賞

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

ベトナムにおける黒タイ文字と文書／東南アジアにおけるボクシングの文化人類学

・研究の目的、内容

今年度も、ベトナム西北地方からラオス北部にかけて居住している盆地民、黒タイの伝統文化の継承に焦点を当てた現地調査と文献調査に基づく民族誌的研究を継続する。黒タイ文字の創成に関する近代史的考察と、および伝統歌謡テキストの分析に基づく黒タイの自文化イメージと自然観を考察する。

また昨年度に引き続き、ボクシングというスポーツの成立と発展の歴史について、日本と東南アジア（ベトナム、タイ、ラオスを中心とする）における展開を中心とした現地調査と文献調査を継続する。

・成果

ベトナムのマイチャウにおける白タイの移住開拓伝承を黒タイの年代記記述との比較から分析し、東南アジア大陸部における平地民と山地民の住み分けに関する研究成果を「第21回ゾミア研究会」（2017年2月3日、京都大学東南アジア研究所）で発表した。

黒タイの村のくらしに関する小論を『毎日小学生新聞』に4回連載した他、『世界の暦文化事典』（2017年11月、丸善より刊行予定）にベトナムの暦文化に関する記事を執筆した。

日本ボクシングの成立と発展に関する小論「『一石四鳥のスポーツ』の会」を『月刊みんぱく』誌上に発表した。

◎出版物による業績

[新聞]

樫永真佐夫

2016 「みんぱく世界の旅 ベトナム（1）アフリカ原産の魚——ベトナムのティラピア」『毎日小学生新聞』5月7日。

2016 「みんぱく世界の旅 ベトナム（2）力もちで働き者——黒タイの水牛」『毎日小学生新聞』5月14日。

2016 「みんぱく世界の旅 ベトナム（3）ネコとネズミの追いかけっこ」『毎日小学生新聞』5月21日。

2016 「みんぱく世界の旅 ベトナム（4）ニワトリがアヒルのお母さん!？」『毎日小学生新聞』5月28日。

[その他]

樫永真佐夫

2016 「『一石四鳥のスポーツ』の会」『月刊みんぱく』2016年4月号、8頁

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

2016年7月9日 「ベトナム、マイチャウにおけるターイの移住開拓伝承の資源化」『資源化される「歴史」——中国南部諸民族の分析から』（代表：長谷川清教授）、国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2017年2月3日 「ベトナム、ターイの始祖による盆地開拓の伝承」第21回『ゾミア研究会——ベトナム特集』京都大学東南アジア研究所

・広報・社会連携活動

- 2016年6月11日 「国立民族学博物館とは」 民ぱくミュージアムパートナーズ養成研修、国立民族学博物館
2016年7月18日 「(民博展示ツアー) 電気・ガス・水道のない台所——ベトナム、黒タイ族の村から」 連続講座『民ぱく×ナレッジキャピタル——世界の「台所」』国立民族学博物館
2016年12月17日 「民ぱくにおける来館者サービスの基本方針について」 民ぱくミュージアムパートナーズ研修、国立民族学博物館

・民ぱくウィークエンド・サロン

- 2016年10月2日 「ベトナムの民族観光——マイチャウの白タイ村落」 第439回民ぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎調査活動

・海外調査

- 2016年12月9日～12月14日—ベトナム（ベトナム、黒タイの暦に関する聞き取り）

◎社会活動・館外活動等

・他大学の客員、非常勤講師

- 2017年2月4日 「ベトナムの多様性について」 神戸親和女子大学共通教育科目「アジア文化研修（ベトナム）」 事前指導、国立民族学博物館

岸上伸啓 [きしがみ のぶひろ]——教授

1958年生。【学歴】早稲田大学第一文学部社会学科卒（1981）、早稲田大学大学院文学研究科社会学専修修士課程修了（1983）、マッギル大学人類学部博士課程中退（1989）【職歴】早稲田大学文学部助手（1989）、北海道教育大学教育学部函館校専任講師（1990）、北海道教育大学助教授（1992）、国立民族学博物館第1研究部助教授（1996）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1997）、国立民族学博物館先端民族学研究部助教授（1998）、国立民族学博物館先端人類科学研究部助教授（2004）、国立民族学博物館先端人類科学研究部教授（2005）、総合研究大学院大学文化科学研究科比較文化学専攻長（2006）、国立民族学博物館館長補佐（2008）、国立民族学博物館先端人類科学研究部長（2009）、国立民族学博物館研究戦略センター長（2012）、国立民族学博物館副館長（2013）【学位】博士（文学）（総合研究大学院大学文化科学研究科 2006）、文学修士（早稲田大学大学院文学研究科 1983）【専攻・専門】文化人類学 1）カナダ・イヌイットの社会変化、2）都市在住のイヌイットの民族誌的研究、3）先住民による海洋資源の利用と管理、4）アラスカ先住民イヌピアットの捕鯨【所属学会】日本文化人類学会、日本カナダ学会、国際極北社会科学学会、民族芸術学会

【主要業績】

[单著]

岸上伸啓

- 2007 『カナダ・イヌイットの食文化と社会変化』 京都：世界思想社。

[編著]

Kishigami, N., H. Hamaguchi, and J. M. Savelle (eds.)

- 2013 *Anthropological Studies of Whaling* (Senri Ethnological Studies 84). Osaka: National Museum of Ethnology.

[論文]

Kishigami, N.

- 2004 A New Typology of Food-Sharing Practices among Hunter-Gatherers, with a Special Focus on Inuit Examples. *Journal of Anthropological Research* 60: 341-358.

【受賞歴】

- 2007 第18回カナダ首相出版賞
1998 第9回カナダ首相出版賞（審査員特別賞）

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

カナダ東部地域および極北地域における諸先住民文化の変化と現状に関する人類学的研究

・研究の目的、内容

本研究の目的は、カナダ東部地域および極北地域における諸先住民文化の歴史的变化と現状について比較研究するとともに、同地域における先住民の文化資源資料に関する情報を吟味し、フォーラム型情報ミュージアムのコンテンツを作成することである。具体的には、下記のことを行う。

- (1) カナダ東部地域および極北地域における諸先住民文化の変化と現状について、既存の民族誌や学術論文などの渉猟および現地調査の成果に基づき、比較研究を行う。
- (2) カナダ歴史博物館やマギル大学人類学部サバール研究室、北海道立北方民族博物館ほかと連携しながら、国立民族学博物館や国内の他機関が収蔵している同地域の先住民の文化資源資料に関する情報を吟味し、資料情報の高度化を図る。
- (3) (1)と(2)の研究成果を統合し、フォーラム型情報ミュージアムのコンテンツを作成するとともに、成果の一部を論文で発表する。

なお、本研究は、国立民族学博物館の平成28年度「人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」プロジェクトおよび平成28年度基盤研究(A)(一般)「ネットワーク型博物館学の創成」(研究代表者:須藤健一)の一部として実施する。

・成果

平成28年度には、カナダ東部地域および極北地域における諸先住民文化の変化と現状についての現地調査を、平成28年度「人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」プロジェクト(研究代表者:岸上伸啓)および平成28年度基盤研究(A)(一般)「ネットワーク型博物館学の創成」(研究代表者:須藤健一)、平成28年度基盤研究(A)(海外調査)「グローバル時代の捕鯨文化に関する人類学的研究」の一部としてカナダで実施し、同地域の諸文化に関する民族誌情報を収集するとともに、カナダの8博物館と研究連携関係を構築した。また、研究成果を総合した研究論文の執筆準備を進めるとともに、国立民族学博物館が収蔵しているカナダ東部地域および極北地域の先住民の文化資源資料に関する情報を高度化し、精緻化・多言語化する調査と作業を進めた。研究成果を、平成29年度秋季企画展「カナダにおける先住民文化の過去、現在、未来」(9月7日~12月5日)として公開するとともに、平成29年末までにフォーラム型情報ミュージアムを媒体として発信するための準備を進めた。

◎出版物による業績

[著書]

岸上伸啓

2017 『文化人類学——人類を探求し、新たな人間観を創出する学問』札幌:風土デザイン研究所。

[編著]

岸上伸啓編

2016 『贈与論再考——人間はなぜ他者に与えるのか』京都:臨川書店。(共同研究「贈与論再考」の成果)
[査読有]

[論文]

岸上伸啓

- 2016 「『贈与論』再考——人類社会における贈与、分配、再分配、交換」岸上伸啓編『贈与論再考 人間はなぜ他者に与えるのか』pp.10-39, 京都:臨川書店。(共同研究「贈与論再考」の成果) [査読有]
- 2016 「国立民族学博物館におけるフォーラム型情報ミュージアム構想について」伊藤敦規編『伝統知、記憶、情報、イメージの再収集と共有——民族誌資料を用いた協働カタログ制作の課題と展望』(国立民族学博物館調査報告137) pp.15-23, 大阪:国立民族学博物館。(基幹研究「フォーラム型情報ミュージアム・プロジェクト」の成果) [査読有]
- 2017 「捕鯨と動物福祉」『人文論究』58:71-81。[査読有]

Kishigami, N.

2016 An Info-Forum Museum for Cultural Resources of the World: A new Development at the National Museum of Ethnology. In A. Ito (ed.) *Re-Collection and Sharing Traditional Knowledge, Memories, Information, and Images: Challenges and the Prospects on Creating Collaborative*

Catalog (Senri Ethnological Reports 137), pp.25-33. Osaka: National Museum of Ethnology. (基幹研究「フォーラム型情報ミュージアム・プロジェクト」の成果) [査読有]

[その他]

岸上伸啓

- 2016 「贈与論再考 人類社会における贈与・交換・分配・再分配の検討」日本文化人類学会第50回研究大会準備委員会編『日本文化人類学会 第50回研究大会発表要旨集』p.34, 名古屋：日本文化人類学会第50回研究大会準備委員会（南山大学）。
- 2016 「はじめに」岸上伸啓編『贈与論再考 人間はなぜ他者に与えるのか』pp.5-7, 京都：臨川書店。
- 2016 「おわりに」岸上伸啓編『贈与論再考 人間はなぜ他者に与えるのか』pp.313-314, 京都：臨川書店。
- 2016 「カナダ先住民の生活空間としての都市——ケベック州モンリオールを事例として」『日本カナダ学会第41回年次研究大会プログラム・報告要旨』p.11, 東京：日本カナダ学会第41回年次研究大会実行委員会。
- 2016 「トーテムポール——北西海岸先住民文化の象徴」阿部珠里編『アメリカ先住民を知るための62章』pp.236-240, 東京：明石書店。
- 2016 「ポトラッチ／ギヴ・アウエイ——寛容さの具現化」阿部珠里編『アメリカ先住民を知るための62章』pp.241-245, 東京：明石書店。
- 2016 「トリックスター——聖者か世紀の大ベテン師か」阿部珠里編『アメリカ先住民を知るための62章』pp.299-303, 東京：明石書店。
- 2016 「分配（シェアリング）に関する海外研究動向」『民博通信』154：24。
- 2016 「先住民族を知ろう（Ⅱ）イヌイト」『朝日小学生新聞』10月9日。
- 2016 「アイヌと海外の先住民」『月刊みんぱく』40(11)：8。
- 2016 「現代文明からみた生き物——クジラなどの野生動物の利用と保護をめぐる」『みんぱく公開講演会 スイカで踊る、クジラを祭る 生き物と人 共生の風景』pp.6-8, 大阪：国立民族学博物館。
- 2016 「国立民族学博物館の収蔵品（6）カナダ・イヌイトの石製彫刻品と版画」『文部科学教育通信』400号, 表紙裏。
- 2016 「コメント（北西海岸先住民の木箱づくり）」上羽陽子・中牧弘允・中山京子・藤原孝章・森茂岳雄編『学校と博物館でつくる国際理解教育のワークショップ』（国立民族学博物館調査報告138）p.124, 大阪：国立民族学博物館。
- 2016 「書評：浜口尚著『先住民生存捕鯨の文化人類学的研究——国際捕鯨委員会の議論とカリブ海ベクウエイ島の事例を中心に』東京：岩田書院、2016年、193頁、3000円（＋税）」『文化人類学』81(3)：539-542。
- 2017 「変貌をとげるカナダ・イヌイト社会」『みんぱく e-news』第187号。
- 2017 「人類社会における自然環境や異文化との共生・共存について——アラスカ先住民イヌピアットの捕鯨文化を事例として」I-URIC フロンティアコロキウム2016運営委員会編『I-URIC フロンティアコロキウム2016予稿集』p.6, 東京：自然科学研究機構。
- 2017 「北アメリカ・アラスカ地域における現代の先住民捕鯨と気候変動」池谷和信・岸上伸啓編『平成28年度国立民族学博物館特別研究シンポジウム「歴史生態学から見た人と生き物の関係」プログラム・要旨集』p.9, 大阪：国立民族学博物館。
- 2017 「民博収蔵の北米北方先住民民族資料の高度情報化と情報発信」『民博通信』156：10-11。

Kishigami, N.

- 2016 Sharing of Bowhead whale meat among the Inupiat in Barrow, Alaska, USA. In D.Friesen and Noa Levi (eds.) *Programme an Abstract of the International Conference "SHARING The Archaeology & Anthropology of Hunter-Gatherers"*, p.17. Cambridge, UK: McDonald Institute for Archaeological Research, University of Cambridge, UK.
- 2016 Book Review: A Tale of Three Villages: Indigenous-Colonial Interactions in Southwestern Alaska, 1740-1950. Liam Frink. Tucson: University of Arizona Press, 2016, 184PP. \$55.00, Cloth. ISBN 978-0-8165-3109-7. *Journal of Anthropological Research* 72(4): 566-567.
- 2016 Comments on "Relocation Redux: Labrador Inuit Population Movements and Inequalities in the Land Claims Era". *Current Anthropology* 57(6): 798.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・特別研究

2017年3月26日 「北アメリカ・アラスカ地域における現代の先住民捕鯨と気候変動」平成28年度国立民族学博物館特別研究シンポジウム『歴史生態学から見た人と生き物の関係』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年5月29日 「贈与論再考 人類社会における贈与・交換・分配・再分配の検討」日本文化人類学会第50回研究大会、南山大学S棟B会場 (S-23)

2016年5月29日 「マルセル・モースの贈与概念と狩猟採集民の分配 アラスカのイヌピアット社会を事例として」日本文化人類学会第50回研究大会、南山大学S棟B会場 (S-23)

2016年9月10日 「カナダ先住民の生活空間としての都市——ケベック州モンリオールを事例として」日本カナダ学会第41回年次研究大会、中央大学後楽園キャンパス5号館

2016年9月20日 'Sharing of Bowhead whale meat among the Inupiat in Barrow, Alaska, USA.' International Conference "SHARING The Archaeology & Anthropology of Hunter-Gatherers", McDonald Institute for Archaeological Research, University of Cambridge, UK

2017年3月2日 「基調講演 人類社会における自然環境や異文化との共生・共存について：アラスカ先住民イヌピアットの捕鯨文化を事例として」(招待講演) I-URIC フロンティアコロキウム2016、ホテルアソシア静岡

・研究講演

2016年12月20日 「アジア北方・極東地域の食文化——ロシア・カムチャツカ半島の先住民民族コリヤークを中心に」(招待講義)、浙江農林大学茶学院

2016年11月10日 「現代文明からみた生き物——クジラなどの野生動物の利用と保護をめぐる」みんぱく公開講演会『スイカで踊る、クジラを祭る 生き物と人 共生の風景』日経ホール、東京

・広報・社会連携イベント

2016年5月11日 「クジラとともに生きる——アラスカ先住民の現在」カレッジシアター「地球探求紀行」あべのハルカス近鉄本店

◎調査活動

・海外調査等

2016年6月26日～7月18日—カナダ (フォーラム型情報ミュージアム構築のためのカナダ西部地域先住民の民族資料に関する調査及びカナダ東部地域の博物館、大学、先住民団体との連携によるネットワーク型博物館学の創成に関する調査)

2016年9月18日～26日—イギリス (分配に関する学際的国際研究集会での研究発表及び調査)

2016年11月11日～29日—カナダ (カナダ・イヌイトによるシロイルカ猟およびホッキョククジラ猟に関する調査)

2016年12月19日～21日—中華人民共和国 (北東アジア地域の先住民社会の食文化に関する比較研究)

2017年3月4日～12日—カナダ (カナダ北西海岸先住民の捕鯨・鯨類利用に関する調査)

◎大学院教育 (館内専任教員のみ)

・指導教員

副指導教員 (2人)

・大学院ゼミでの活動

比較社会研究特論II (前期)、比較社会研究演習II (後期)、論文ゼミ

・博士論文審査

博士論文審査委員 (1件)、予備審査委員 (1件数) (総研大に限る)

◎社会活動・館外活動等

・他の機関から委嘱された委員など

日本学術会議連携会員 (地域研究)、日本カナダ学会理事、民族芸術学会理事、澁澤賞選考委員長、ArCS北極域研究推進プロジェクト評議会委員、北極域研究共同推進拠点運営委員会委員 (北海道大学北極域研究センター)

西尾哲夫 [にしお てつお] ————— 副館長 (研究・国際交流担当)、研究戦略センター教授

菅瀬晶子 [すがせ あきこ] ————— 准教授

【学歴】 東京外国語大学外国語学部アラビア語学科卒 (1995)、東京外国語大学大学院地域文化研究科博士前期課程 (アジア第三専攻) 修了 (1999)、総合研究大学院大学文化科学研究科博士後期課程 (地域文化学専攻) 修了 (2006)

【職歴】 日本女子大学文学部史学科非常勤講師 (2006)、総合研究大学院大学葉山高等研究センター上級研究員 (2006)、日本女子大学文学部史学科非常勤講師 (2008)、日本女子大学文学部史学科非常勤講師 (2009)、神奈川大学経営学部非常勤講師 (2010)、日本女子大学文学部史学科非常勤講師 (2010)、共立女子大学国際学部非常勤講師 (2010)、大阪大学外国語学部非常勤講師 (2010)、総合研究大学院大学学融合推進センター特別研究員 (2010)、国立民族学博物館民族社会研究部助教 (2011)、国立民族学博物館研究戦略センター助教 (2013) 【学位】 博士 (文学) (総合研究大学院大学 2006)、修士 (学術) (東京外国語大学大学院 1999) 【専攻・専門】 文化人類学・中東地域研究 (パレスチナ・イスラエルを中心とした、東地中海地域アラビア語圏) 【所属学会】 日本中東学会、日本文化人類学会、京都ユダヤ思想学会

【主要業績】

[単著]

菅瀬晶子

- 2012 『豊穡と共生への祈り——パレスチナ・イスラエルにおける聖者アル・ハディル崇敬』(民族紛争の背景に関する地政学的研究19) 大阪：大阪大学世界言語研究センター。
- 2010 『イスラームを知る6 新月の夜も十字架は輝く——中東のキリスト教徒』東京：山川出版社。
- 2009 『イスラエルのアラブ人キリスト教徒——その社会とアイデンティティ』広島：溪水社。

【受賞歴】

- 2006 長倉研究奨励賞、総研大研究賞

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

東地中海アラブ諸国における宗教的アイデンティティの表象

・研究の目的、内容

20世紀前半にガリラヤ地方で活躍したアラブ・ナショナリスト、ナジブ・ナッサーの活動について調査し、宗教をこえたナショナル・アイデンティティの創出の過程をあきらかにするとともに、キリスト教徒であった彼自身の宗教的アイデンティティが、彼の執筆活動に与えた影響をさぐる。

・成果

昨年度に引き続き、科研費基盤C「ガリラヤ地方とレバノンのキリスト教徒によるアラブ・ナショナリズムの再考」(課題番号15K01905)の一環として、ナジブ・ナッサーの著作の資料収集と読解を中心におこなった。その結果、判明したのは以下のとおりである。

イスラエル国内およびイギリス、ドイツの所蔵状態

イスラエル国内での調査では、おもにハイファ大学でのマイクロフィルムおよびマイクロフィッシュ、書籍を閲覧し、内容の精読を続行している。イスラエル国内に保存されていない年代のものを入手するため、イギリスのブリティッシュ・ライブラリーに事前に問い合わせ、直接出向いて調査もしたが、資料の老朽化のため閲覧可能リストから外され、現在はその所在すら不明であることが判明した。代わりに訪れたエクセター大学図書館、およびドイツ・ベルリンのベルリン自由大学図書館で、その一部を補うことができた。

1920年代中盤のナッサーの動向および執筆活動の内容

ナッサーはパレスチナがオスマン帝国の支配下にあった1900年代末より、すでにパレスチナ随一のジャーナリストとみなされており、1919年にイギリスの委任統治下に入った後も、著述活動によってパレスチナ・アラブ人市民に対する啓発を続けていた。現在は彼の執筆活動のうち、1908～1912年、1919～1930年に的を絞り、精読を続けている。現時点では、1920年代中盤にすでに彼自身は委任統治下の政治に直接関わることをせず、

ガリラヤ地方～ヨルダン川西岸・東岸各地を訪問し、現地の産業・教育の現状について詳細な記録を残していることがわかった。記述の内容には、ガリラヤ地方の精糖産業など、現在はすでにおこなわれていない産業についての言及も多い。また、女性の政治参加についても多大な関心を寄せているが、女性に対する啓蒙活動は妻のサーズィジュに一任し、カルメル紙上の「女性のページ」を自由に使わせている。むしろ彼女の情報発信のスタイルをまねて、ナッサール自身が「男性のページ」をもうけるというユーモアすらみせており、ナッサールの執筆活動研究には、妻サーズィジュの執筆内容をも精読する必要があることがわかった。現在も精読を続けているが、その内容は今年度中に論文を執筆予定である。

ナジブ・ナッサールに対する今日の評価・関心についての調査

残念ながら、ナッサールに対する関心は年々薄れており、現在高等教育を受ける世代からも忘れ去られているという現状を確認した。イギリスにおける資料の粗雑な扱いや、ここ数年第一次世界大戦開戦～イギリスによる委任統治開始から100周年という記念の年が続いているにもかかわらず、イスラエルおよびパレスチナ自治区で当時のアラブ・ナショナリストについての研究活動がまったくみられないことに、その事実は如実にあらわれている。しかしながら、彼の執筆活動からは、当時彼の主張がパレスチナ・アラブ人コミュニティに受け入れられていれば、委任統治記イスラエル建国に至るまでの歴史はかなり変わっていたであろうということが推測できる。

その他、発行された研究成果は、以下のとおりである。

菅瀬晶子「第3部 境界線を越えて 第2章 パレスチナ・イスラエルのアラブ人キリスト教徒にみられる食文化の特徴とその影響」、東京工業大学「ぐるなび」食の未来創成寄付講座監修・阿良田麻里子編『文化を食べる 文化を飲む——グローバル化する世界の食とビジネス』、267-278頁、ドメス出版、2017年。

菅瀬晶子「VI 多文化を生きる 030 もうひとりの息子——『ハイファに戻って』を越えて」、小長谷有紀・鈴木紀・且匡子編『ワールド・シネマ・スタディーズ——世界の「いま」を映画から考えよう』、245-254頁、勉誠出版、2016年。

菅瀬晶子「第4章 パレスチナ人は何を食べているのか——オスマン時代から続く伝統的食文化」「第5章 パレスチナのイエと社会——パレスチナ人のアイデンティティ」「第6章 キリスト教徒として生きる人々——多様な宗教文化」白杵陽・鈴木啓之編著『エリア・スタディーズ144 パレスチナを知るための60章』、32-36頁、39-43頁、46-50頁、明石書店、2016年。

◎出版物による業績

[論文]

菅瀬晶子

- 2016 「第4章 パレスチナ人は何を食べているのか」白杵陽・鈴木啓之編『エリア・スタディーズ144 パレスチナを知るための60章』 pp.32-36, 東京：山川出版社。
- 2016 「第5章 パレスチナのイエと社会」白杵陽・鈴木啓之編『エリア・スタディーズ144 パレスチナを知るための60章』 pp.39-43, 東京：山川出版社。
- 2016 「第6章キリスト教徒として生きる人々」白杵陽・鈴木啓之編『エリア・スタディーズ144 パレスチナを知るための60章』 pp.46-50, 東京：山川出版社。
- 2016 「VI多文化を生きる 030もうひとりの息子——『ハイファに戻って』を越えて」小長谷有紀・鈴木紀・且匡子編『ワールドシネマ・スタディーズ——世界の「いま」を映画から考えよう』 pp.245-252, 東京：勉誠出版。
- 2017 「第3部第2章 パレスチナ・イスラエルのアラブ人キリスト教徒にみられる食文化の特徴とその影響」東京工業大学「ぐるなび」食の未来創成寄付講座監修、阿良田麻里子編『文化を食べる 文化を飲む——グローバル化する世界の食とビジネス』 pp.267-278, 東京：ドメス出版。

◎調査活動

・海外調査

- 2016年8月17日～9月16日—イギリス、イスラエル、パレスチナ自治区（アラブ・ナショナリズム文献調査）
- 2016年10月31日～11月2日—中国（浙江農林大学での講義）
- 2017年3月1日～3月18日—イスラエル、パレスチナ自治区、ドイツ（アラブ・ナショナリズム文献調査のため）

◎社会活動・館外活動

・非常勤講師

滋賀県立大学「国際関係論」、神戸女子大学「多文化共生論」

【学歴】慶應義塾大学文学部卒（1996）、東京都立大学大学院社会科学研究科修士課程修了（1999）、東京都立大学大学院社会科学研究科博士課程単位修得満期退学（2005）【職歴】日本学術振興会特別研究員 PD・法政大学（2005）、法政大学社会学部兼任教員（2005）、首都大学東京非常勤講師（2006）、筑波大学非常勤講師（2007）、国立民族学博物館研究戦略センター助教（2008）、国立民族学博物館民族文化研究部准教授（2012）、国立民族学博物館研究戦略センター准教授（2013）【学位】博士（社会人類学）（東京都立大学 2006）、修士（社会人類学）（東京都立大学 1999）【専攻・専門】社会人類学、オセアニア地域研究【所属学会】日本文化人類学会、日本オセアニア学会、東京都立大学社会人類学会、早稲田文化人類学会、Association for Social Anthropology in Oceania、The International Union of Anthropological and Ethnological Sciences

【主要業績】

[単著]

丹羽典生

2009 『脱伝統としての開発——フィジー・ラミ運動の歴史人類学』東京：明石書店。

[編著]

丹羽典生編

2016 『〈紛争〉の比較民族誌——グローバル化におけるオセアニアの暴力・民族対立・政治的混乱』神奈川：春風社。

[共編著]

丹羽典生・石森大知編

2013 『現代オセアニアの〈紛争〉——脱植民地期以降のフィールドから』京都：昭和堂。

【受賞歴】

2010 第9回オセアニア学会賞

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

応援の人類学：政治・スポーツ・ファン文化からみた利他性の諸相

・研究の目的、内容

本研究は、〈応援〉という視角から人類の諸文化を通文化的に比較することを通じて、利他性という人間性の根源について文化人類学的に考察することを目的とする。〈応援〉の下位項目として、政治、スポーツ、ファン文化をさしあたり設定し、世界の事例を取り上げ検討する。日本の事例では、大学を中心とする応援団の諸活動を具体的な民族誌的研究の対象とする。調査の遂行に当たっては、科学研究費助成事業への応募も計画している。

・成果

東京、大阪にて聞き取り調査を行った。各種大学図書館や個人に収蔵されている応援団関係資料や新聞資料の収集閲覧とデータベースの作成を行った。成果公開としては、本館の共同研究「応援の人類学——政治・スポーツ・ファン文化からみた利他性の比較民族誌」を通じて研究会を4回開催した。また、神戸大学にて開催された The Second EAJIS Japan Conference で、パネル発表を行った。

◎出版物による業績

[論文]

丹羽典生

2016 「ヴァス論再考——フィジーにおけるある贈与関係の変遷」岸上伸啓編『贈与論再考——人間はなぜ他者に与えるのか』pp.143-160, 京都：臨川書店。

2017 「鯨歯を纏い、豚を屠る」風間計博編『交錯と共生の人類学——オセアニアにおけるマイノリティと主流社会』pp.35-54, 京都：ナカニシヤ出版。

[その他]

丹羽典生

2016 「コメント：パフォーマンスを通じた伝統知識の教授——フィジーの「天地創造」劇の活動から見た雑感」上羽陽子・中牧弘允・中山京子・藤原孝章・森茂岳雄編『学校と博物館でつくる 国際理解教育のワークショップ』（国立民族学博物館調査報告138）pp.100-101, 大阪：国立民族学博物館。

2017 「編集後記」『月刊みんぱく』41(2)：21。

2017 「編集後記」『月刊みんぱく』41(3)：21。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年5月29日 「贈与論再考」『日本文化人類学会第50回研究大会』南山大学

2016年9月24日 'Cultivating a self-disciplined, resourceful and respectable leader: how ritualistic behaviors among cheerleading groups in Japanese universities have changed.' "European Association for Japanese Studies Conference", Kobe University

2017年3月27日 「日本人探検家がみた戦前期のオセアニア像——朝枝利男資料のもつ可能性」『日本オセアニア学会』島根県松江市

・展示活動

2016 企画展「ワンロード：現代アポリジニ・アートの世界」実行委員長

◎調査活動

・海外調査

2016年8月19日～8月30日—ニュージーランド（「トランスナショナルな社会運動と政治参加の人類学：オセアニア大国の移民を事例に」に関する情報収集）

2016年12月12日～12月22日—イギリス（「トランスナショナルな社会運動と政治参加の人類学：オセアニア大国の移民を事例に」に関する情報収集）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（基盤研究（C））「トランスナショナルな社会運動と政治参加の人類学：オセアニア大国の移民を事例に」研究代表者

南 真木人 [みなみ まきと] ————— 准教授

1961年生。【学歴】弘前大学人文学部人文学科卒（1985）、筑波大学大学院修士課程環境科学研究科修了（1989）、筑波大学大学院博士課程歴史・人類学研究科中退（1991）【職歴】国立民族学博物館第3研究部助手（1991）、国立民族学博物館民族社会研究部助手（1998）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（2003）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2005）、国立民族学博物館研究戦略センター准教授（2007）、文化資源研究センター准教授（2011）、国立民族学博物館研究戦略センター准教授（2015）【学位】学術修士（筑波大学大学院修士課程環境科学研究科 1989）【専攻・専門】人類学、南アジア研究【所属学会】日本文化人類学会、日本南アジア学会、生態人類学会

【主要業績】

[共編]

南 真木人・石井 溥編

2015 『現代ネパールの政治と社会——民主化とマオイストの影響の拡大』（世界人権問題叢書92）東京：明石書店。

Yamashita, S., M. Minami, D. W. Haines and J. S. Eades (eds.)

2008 *Transnational Migration in East Asia: Japan in a Comparative Focus* (Senri Ethnological Reports 77), Osaka: National Museum of Ethnology.

[論文]

Minami, M.

2007 From Tika to Kata?: Ethnic Movements among the Magars in an Age of Globalization. In H. Ishii, D. N. Gellner and K. Nawa (eds.) *Social Dynamics in Northern South Asia* Vol.1: Nepalis Inside and

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

ネパール社会の30年間の変化に関する研究Ⅱ——バトゥレチョール村とガンダルバ・カーストを事例に

・研究の目的、内容

本研究の目的は、1982年にネパールにおいて民博が映像取材した家族やコミュニティを再訪し、約30年間に社会や生活、人々の生業、景観等がいかに変化したのかを明らかにすることである。文化資源プロジェクト「ネパール関連のビデオテーク番組の制作」により、昨年度、再び映像に収めたバトゥレチョール村の新旧が比較できる番組を制作する。また、補充の聞き取り調査を実施して村人の世帯更新を再構成し、社会の変化を把握する。

・成果

現地での補充調査を経て、1982年に藤井知昭民博名誉教授らが撮影したビデオテーク番組「ガイネ——ヒマラヤの吟遊詩人」等の映像を用いて導入とし、34年後の村の景観や社会、ガンダルバ（かつてはガイネ、現在は蔑称）の生業やアイデンティティの変容を表した研究用番組「ネパール 楽師の村 バトゥレチョールの現在」（製作年2017年、制作監修：南 真木人・寺田吉孝、91分31秒／撮影2016年）を制作した。また、1968～1982年に藤井名誉教授が録音した音源、撮影した写真などを同名誉教授の協力のもと整理し、ガンダルバの人々と共有化することを目指し、人間文化研究機構・南アジア地域研究民博拠点（MINDAS）の「環流する南アジア」ユニットとして「ネパール民族音楽資料の再資源化と共有化」を立ち上げ、2度の研究会を開催した。ポカラ市近郊に位置するバトゥレチョールの場合、80年代頃から清掃職の公務員等に就き、次世代の教育に投資することで、次第に音楽を生業とする生活から離れてきたことが明らかになった。他方、カトマンドゥやポカラの観光地で観光客向けに演奏するのは、他地域出身の別のガンダルバであり、異なる適応の姿が見てとれた。他にも、大学で楽器演奏を指導するなど、音楽家として身を立てるガンダルバも現れており、この30年でいくつかに分類できる、ガンダルバの分化が進んだことが明らかになった。成果の一部は毎日新聞に「映像が持つ力」「ガンダルバの30年」という小文で発表した。

◎出版物による業績

[分担執筆]

南 真木人

2016 「ネパールのパスポート」陳天璽・大西広之・小森宏美・佐々木てる編『パスポート学』pp.79-84, 札幌：北海道大学出版会。

2017 「移住労働が内包する社会的包摂」名和克郎編『体制転換期ネパールにおける「包摂」の諸相——言説政治・社会実践・生活世界』pp.451-483, 東京：三元社。

[その他]

南 真木人

2016 「自ら判断する個人の集合——山岳部」『月刊みんなく』40(4)：9。

2016 「みんなく」の食の民族誌 考える舌34 ネパールの『グンドゥルック』『京都新聞』4月6日。

2016 「先住民族を知ろう⑫——焼き畑・水田 森の恵みで農耕」『朝日小学生新聞』12月18日。

2017 「魔除けとしてのジー・ビーズ」池谷和信編『ビーズ——つなぐ かざる みせる』pp.72-73, 大阪：国立民族学博物館。

2017 「旅・いろいろ地球人 ネパールの今昔①——東京オリンピック」『毎日新聞』3月9日夕刊。

2017 「旅・いろいろ地球人 ネパールの今昔②——1934年の大地震」『毎日新聞』3月16日夕刊。

2017 「旅・いろいろ地球人 ネパールの今昔③——映像が持つ力」『毎日新聞』3月23日夕刊。

2017 「旅・いろいろ地球人 ネパールの今昔④——ガンダルバの30年」『毎日新聞』3月30日夕刊。

鈴木七美・信田敏宏・六車由実・南 真木人

2016 「討論」（みんなく公開講演会「育児の人類学、介護の民俗学」より）『季刊民族学』156：76-81, 大阪：千里文化財団。

◎映像音響メディアによる業績

[映像制作]

南 真木人・寺田吉孝 制作監修

2016 『ネパールの婚礼』58分07秒

2016 『ネパールの伝統音楽 パンチャイ・バージャ』16分02秒

2017 『ネパール 楽師の村 バトゥレチョールの現在』91分31秒

南 真木人・寺田吉孝 監修

2017 『みんぱく映像民族誌 第22集 ネパールの結婚式』91分

◎口頭発表・展示・その他の業績

・国立民族学博物館主催のシンポジウムなど

2016年11月30日、12月1日 「『人類学的営みにおける映像』趣旨説明』『みんぱく若手研究者奨励セミナー』国立民族学博物館第6セミナー室

・人間文化研究機構主催のシンポジウムなど

2016年7月22日 「バトゥレチョール村の30年」『MINDAS「ネパール民族音楽資料の再資源化と共有化」第1回研究打ち合わせ』国立民族学博物館第3演習室

2016年10月8日 「ネパールの社会変化とソーシャルモビリティ」『MINDAS第2回合同研究会』国立民族学博物館第4セミナー室

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年6月13日 「民博ネパール写真データベースとその後の展開」ワークショップ『写真が開く地域研究』科研費・地域研究画像デジタルライブラリ、京都大学稲盛財団記念館3階大会議室

・広報・社会連携活動

2016年5月25日 「閉じられた聖なる空間——ネパールの台所」『みんぱく×ナレッジ・キャピタル「世界の『台所』」第2回』グランフロント大阪 The CAFE The lab.

2016年6月17日 「ネパール社会の現在を捉える①」大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」、大阪府社会福祉会館

2016年6月24日 「ネパール社会の現在を捉える②」大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」、大阪府社会福祉会館

2016年9月3日 「ネパール、『市民社会』の再編を展望する」第458回国立民族学博物館友の会講演会、国立民族学博物館

2016年9月30日 「目と舌で知るネパール——映像鑑賞と国民食『ダル・バート』を手で食べる」第73回国立民族学博物館友の会体験セミナー、東京：インド・ネパール料理店「花菜 (Khana)」

2017年1月8日～1月15日 国立民族学博物館友の会・第88回民族学研修の旅・講師「多民族国家ネパールの生活文化にふれる旅——映像がつなぐ人びとを訪ねて」千里文化財団

・みんぱくウィークエンド・サロン

2016年5月16日 「ネパールの楽師ガンダルバ——1982年の映像を手がかりに」第426回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎調査活動

・海外調査

2017年1月28日～2月18日—ネパール（科研研究費補助金による現地調査）

2017年3月7日～3月16日—ネパール（ネパール地震後の社会再編に関する現地調査）

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（1名）、副指導教員（1名）

・大学院ゼミでの活動

テーマシリーズ講義「国際移民と移民の送り出しシステム」

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

人間文化研究機構地域研究推進事業「現代インド地域研究」国立民族学博物館拠点（代表者：三尾 稔）研究分担者、科学研究費補助金（特別研究促進費）「2015年ネパール地震と地震災害に関する総合調査」（代表：矢

田部龍一（愛媛大）研究分担者、科学研究費補助金（基盤研究（B））「2015年ネパール地震後の社会再編に関する災害民族誌的研究」研究代表者

河合洋尚 〔かわい ひろなお〕 ————— 准教授

1977年生。【学歴】関西学院大学社会学部卒業（2001）、東京都立大学大学院社会科学研究科（修士課程）修了（2003）、東京都立大学大学院社会科学研究科（博士課程）修了（2009）【職歴】嘉応大学客家研究院講師（2008）、中山大学社会学・人類学学院助理研究員（講師）（2010）、国立民族学博物館研究戦略センター機関研究員（2011）、国立民族学博物館研究戦略センター助教（2013）、国立民族学博物館研究戦略センター准教授（2016）【学位】博士（社会人類学）（東京都立大学 2009）、修士（社会人類学）（東京都立大学 2003）【専攻・専門】都市人類学、景観人類学、漢族研究【所属学会】日本文化人類学会、東京都立大学社会人類学会、日本華僑華人学会、中国広東民族学会

【主要業績】

〔単著〕

河合洋尚

2013 『景観人類学の課題——中国広州における都市環境の表象と再生』東京：風響社。

〔編著〕

河合洋尚編

2016 『景観人類学——身体・政治・マテリアリティ』東京：時潮社。

2013 『日本客家研究的視角与方法——百年的軌跡』北京：社会科学文献出版社。

【受賞歴】

2001 安田三郎賞

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

- 1) 中国客家地域の都市景観形成にまつわる人類学的研究
- 2) 環太平洋における客家の移動、文化再生、景観形成にまつわる越境民族誌
- 3) 中国の人類学的研究をめぐるレビューと再検討

・研究の目的、内容

- 1) 世界の客家華僑の故郷として知られる梅州市における文化的景観の創造について、景観人類学の視点と方法から整理する。
- 2) 客家（ンガイ人）の国境を超えた文化的ネットワークを明らかにする。また、これまで客家ではなかった人々が客家を名乗るようになる「新客家」の誕生と、そのメカニズムについて検討する。
- 3) 中国の人類学的研究をレビューする作業に着手する。今年度は、特に中国における人類学的フィールドワークについて再検討を加える。

・成果

今年度は主に以下の5つの研究成果を提示した。

- 1) 梅州市をめぐる景観人類学的研究の成果として、論文「景観の競合と相律——『客家の故郷』における一考察」を学会誌『文化人類学』（81巻1号）に掲載した。
- 2) 味覚と景観の間の関係を検討するためにフードスケープという領域に着手し、2016年12月3～5日にかけて立命館大学と主催した国際シンポジウム「食文化の交流——過去・現在・未来」で分科会を組織し、フードスケープに関する発表をおこなった。
- 3) 中国および台湾における歴史の資源化に関する調査と学会発表をおこなった。また、同テーマの論文集『中国における歴史の資源化』を塚田誠之教授と編集し、現在、SERに投稿中である。
- 4) フランス領ポリネシア（タヒチ）へと調査に行き、華人の移住、社会組織、年中行事から食文化まで広範囲に調査した。タヒチの華人は大半が客家であり、日本におけるタヒチおよびオセアニアの客家研究を開拓する契機をつくることができた。
- 5) 日本における中国の人類学的研究をレビューする一環として、中国における人類学的フィールドワークを

再検討した共編著『フィールドワーク——中国という現場、人類学という実践』（仮）を編集した。

◎出版物による業績

[論文]

河合洋尚

2016 「景観の競合と相律——『客家の故郷』における一考察」『文化人類学』（日本文化人類学会）81(1)：26-43。[査読有]

河合洋尚・稲澤 努・藤野陽平・田中孝枝

2016 「課題研究懇談会 東アジア公共人類学懇談会」『文化人類学』（日本文化人類学会）81(2)：338-343。[査読有]

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2016年12月4日 「作為視覚的飲食、作為味覚的飲食——広州西関飲食景観の権力性（Foods as Visual Sensation and Foods and Gustation: The Politics of Foodscape in Xiguan, Guangzhou）」第6回アジア食文化会議『食文化の交流——過去・現在・未来』立命館大学草津キャンパス

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年7月28日 「聖地言説と信仰実践——中国梅県の呂帝廟をめぐる『聖地』の複数性」スラブ・ユーラシア研究センタープロジェクト型共同研究、北海道大学

2016年7月30日 「現地適応型フィールドワーク——現代中国における調査実践と社会実践」国際会議『東アジアにおけるフィールドワークの実践と課題』北海道大学

2016年9月11日 「客家“聖地”景観与在地宗教実践——以客家原郷梅城為例」国際シンポジウム『第四届台湾客家研究国際研討会』台湾・交通大学客家研究院。

2016年11月8日 「四川成都城鎮化与客家文化資本」国際シンポジウム『第二届城市發展論壇 城市公共管——理念、組織、政策与实践』蘇州大学

2016年11月12日 「歴史記憶的資源化与文化遺産保護——以粵東的梅城公園建設為例」国際シンポジウム『2016台中客家文化學術研討会』台湾・中興大学

・研究講演

2016年7月23日 「客家研究の最前線——人類学の視点から」ユニティ中国研究会・神戸華僑華人研究会合同開催講演会、中華会館

2016年9月9日 「日本与客家——過去・現在・未来」台湾行政院客家委員会招待講演会、苗栗客家文化園區客家發展中心

2016年11月9日 「日本の客家研究——回顧与現状」中央大学客家文化学院特別講演会、中央大学

2016年11月13日 「日本客家——移民、社会团体、文化活動」桃園新楊梅社区大学特別講演会、新楊梅社区大学

2016年11月26日 「台湾客家の移住と文化——中国との関係より」大阪日台交流協会11月度例会、大阪倶楽部

・みんなくウィークエンド・サロン

2016年7月17日 「メルボルン中華街の春節」第460回みんなくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎調査活動

・海外調査

2016年8月6日～9月6日—中国（歴史の資源化に関する聞き取り調査及び資料収集）

2016年9月8日～9月13日—台湾（苗栗客家文化園區における公園及び国立交通大学におけるシンポジウムでの発表）

2016年11月5日～11月14日—中国、台湾（中国周縁部における歴史の資源化に関する学会への参加及び講演）

2017年2月11日～2月18日—タヒチ（基幹研究プロジェクト「アジアにおけるエコヘルス研究の展開」による調査）

◎大学院教育

・指導教員

特別共同利用研究員（1人）

◎社会活動・館外活動等

・他機関から委嘱された委員など

立命館大学博士論文副査

・非常勤講師

流通科学大学総合政策学部「民族文化誌」、大阪経済大学「民俗学」

◎学会の開催

2016年12月3日～12月4日 第6回アジア食文化会議「食文化の交流——過去・現在・未来」立命館大学草津キャンパス。

文化資源研究センター

野林厚志 [のばやし あつし]——センター長（併）教授

1967年生。【学歴】東京大学理学部生物学科卒（1992）、東京大学大学院理学系研究科修士課程修了（1994）、東京大学大学院理学系研究科博士課程中退（1996）【職歴】国立民族学博物館第3研究部助手（1996）、国立民族学博物館民族社会研究部助手（1998）、国立民族学博物館民族学研究開発センター助手（2000）、総合研究大学院大学先導科学研究科併任（2000）、国立民族学博物館民族学研究開発センター助教授（2003）、国立民族学博物館文化資源研究センター助教授（2004）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2004）【学位】博士（学術）（総合研究大学院大学 2003）、修士（理学）（東京大学大学院理学系研究科 1994）【専攻・専門】人類学、民族考古学 1）人間と動物との関係史、2）生業文化論【所属学会】日本台湾学会、日本文化人類学会

【主要業績】

[単著]

野林厚志

2008 『イノシシ狩猟の民族考古学——台湾原住民の生業文化』東京：御茶の水書房。

[編著]

日本順益台湾原住民研究会編（野林厚志主編）

2014 『台湾原住民研究の射程』台北：順益台湾原住民博物館。

[論文]

野林厚志

2010 「文化資源としての博物館資料——日本統治時代に収集された台湾原住民族の資料が有する現地社会での意義」『国立民族学博物館研究報告』34(4)：623-679。

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

台湾原住民族の工芸生産とエスニシティと関係に関わる人類学的研究

・研究の目的、内容

本研究の目的は、台湾のオーストロネシア系先住諸民族（「原住民族」）の現在のエスニシティの動態を工芸生産という営みをもって分析し、個人の民族への帰属意識と民族集団のエスニシティとの関係に関する人類学的モデルを引き出すことである。具体的には原住民族の人たちの工芸生産の目的、過程、それらがおよぼす社会的な影響を、現地調査を中心にして明らかにする。そのうえで、工芸生産がエスニシティの形成やそれを利用した諸行動とどのような関係にあるのかについて探究する。

本年度は、若い世代が工芸や原住民族文化の表象にどのように関わっているかについてのフィールド調査、博物館資料の調査を行う予定である。具体的には台湾東部地域のパイワン族のトンボ玉製作ならびに、順益台湾原住民博物館所蔵の「原住民族ポスター」資料を対象とし、それらが創り出される過程や創作したものが台湾社会や当事者にフィードバックしていく様相を明らかにしていく。

なお、本研究は科学研究費基盤研究B「台湾原住民族の分類とアイデンティティの可変性に関する人類学的研究」による外部資金を用いて実施する。

・成果

本年度は、当初の研究計画にしたがい、特にパイワン族のガラスビーズの製作ならびに、順益台湾原住民博物館所蔵の「原住民族ポスター」資料を対象として調査、研究を行った。

パイワン族のガラスビーズ製作については、台東県太麻里郷におけるビーズ製作の文化産業化の現状とその歴史的背景についてフィールド調査を実施した。1960年代における原住民族の生活改善運動とそれともなう伝統的文化の破棄、外部からの安価な工芸品の流入、それに抗するようなかたちで工芸品の再興、映画等のメディアの文化産業化への影響といった、ガラスビーズの製作に関わる歴史的背景の詳細に関する知見が得られた。

「原住民族ポスター」資料の分析では、作品の製作された時代的背景と個々の作品の内容との関連性について検討した。政治状況で個々の作品の作風が変化する仕組みはポスター公募のテーマ設定や、ポスターの製作過程で参照する材料（メディア上の情報等）による影響を受けやすいものであること、原住民族の知的財産に関する課題として議論が展開する可能性等が知見として得られた。

これらの成果は台湾で開催された国際ワークショップ等、日本学術振興会の科研費ニューズレター等で発表するとともに、民博の企画展、特別展を通して、一般社会への成果の発信を行っている。なお、本研究のもとになる調査、成果の公開は、科学研究費基盤研究（B・海外）科学研究費基盤研究B「台湾原住民族の分類とアイデンティティの可変性に関する人類学的研究」による助成を受けている。

◎出版物による業績

[論文]

Nobayashi, A.

2016 Rewiring Museum Information: Mobile and Cloud. In N. Sonoda (ed.) *New Horizons for Asian Museums and Museology*, pp.89-96. Singapore: Springer. [査読有]

野林厚志

2016 「原住民族をめぐるイメージ——順益台湾原住民博物館学生ポスター作品を事例として」『第9回台日原住民族研究論壇』pp.187-197。[査読有]

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機構の連携研究会での報告

2017年3月5日 「料理は人間を健康にしてきたのか」人間文化研究機構基幹研究プロジェクト「文明社会における食の布置」成果公開一般講演会、国立民族学博物館

・共同研究会での報告

2016年7月9日 「デザインされる原住民族イメージ——学生創作ポスター展を事例に」『表象のポリテック——グローバル世界における先住民／少数者を焦点に』

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年8月4日 「デジタル時代の原住民族イメージ——民博企画展をいとぐちに」順益台湾原住民研究会、国立民族学博物館

2016年11月5日～11月6日 「新人文化の形成——文化・行動変化の文化人類学的モデル」文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究『パレオアジア文化史学第1回研究大会』東京大学小柴ホール
「生態資源獲得の道具と技巧の人類学的研究」（野林厚志・丸川雄三）、文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究『パレオアジア文化史学第1回研究大会』東京大学小柴ホール

2016年11月26日 「台湾資訊跨國多語言交流平台」国際会議『台湾資訊跨國多語言交流平台』台湾屏東県原住民族委員會原住民族文化發展中心

2016年12月3日 「鹿野忠雄の学問の展開過程から学ぶ『移動』と帝国日本——台湾から東南アジアまで」国際会議『帝国日本における人とモノの移動と他者像——台湾・朝鮮・沖縄を基点に』東洋大学白山キャンパス

2016年12月3日 'Preference for Sweet Beverages and Changing Values of Health in Taiwan.' The 6th Asian Food Study Conference, 立命館大学草津キャンパス

2017年1月14日 「エスニシティという視点から動物の生命について考える——台湾における動物供犠と狩猟」[招待講演] 京都大学応用哲学・倫理学教育研究センター（CAPE）研究プロジェクト「人と動物の倫理研究会」第3回研究会、キャンパスプラザ京都

2017年2月10日 'Size of hunting area and the techniques of hunter-gatherer groups for hunting games using ethnographic data.' The 2nd Conference on Cultural History of PaleoAsia, Nagoya University

2017年3月21日 「台湾原住民族のビーズ—ビーズ展資料の解説」第2回順益台湾原住民研究会、国立民族学博物館

・展示

2016 企画展「順益台湾原住民博物館所蔵・学生創作ポスター展 台湾原住民をめぐるイメージ」

◎調査活動

・海外調査

2016年 5月26日～5月30日—台湾（台湾原住民族工芸をめぐる世代間交渉にかかる調査）

2016年 7月21日～7月23日—台湾（情報化時代における台湾原住民族イメージの表象に関する調査）

2016年 8月21日～9月1日—台湾（台湾における味覚と健康との関係に関する資料調査）

2016年10月25日～10月27日—台湾（展示資料の情報化に関する現地博物館との研究会合）

2016年11月24日～11月29日—台湾（フォーラム型情報ミュージアム（台湾関連資料）構築のために現地ワークショップの開催と博物館資料の情報化に関する調査）

2016年12月22日～12月24日—台湾（台湾における学術資料の情報共有化に関する調査）

2017年 3月15日～3月20日—シンガポール、台湾（「東・東南アジアにおけるフードスタディーズの展開」ワークショップ及びエコヘルス準備会合への参加、資料収集）

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（1人）、副指導教員（1人）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

フォーラム型情報ミュージアムプロジェクト「台湾および周辺島嶼生態環境における物質文化の生態学的適応」

代表者、広領域連携型基幹研究プロジェクト「文明社会における食の布置」代表者

科学研究費助成事業（新学術領域研究）「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」研究代表者、科学研究費助成事業（基盤研究B）「台湾原住民族の分類とアイデンティティの可変性に関する人類学的研究」研究代表者

- ・民間の奨学金および助成金からのプロジェクト

順益台湾原住民博物館研究賛助金「台湾原住民族の文化、社会、歴史に関する総合的研究」（研究責任者）

◎社会活動・館外活動等

- ・他機関から委嘱された委員など

奈良県文化財保存・活用会議委員、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所フィールド・サイエンス・コロキウム運営委員

信田敏宏 [のぶた としひろ]————— 教授

1968年生。【学歴】東京都立大学人文学部人文科学科社会学専攻卒（1992）、東京都立大学大学院社会科学研究科社会人類学専攻修士課程修了（1995）、東京都立大学大学院社会科学研究科社会人類学専攻博士課程単位取得退学（2000）【職歴】東京都立大学人文学部社会学科助手（2001）、国立民族学博物館民族学研究開発センター助手（2003）、国立民族学博物館研究戦略センター助手（2004）、国立民族学博物館研究戦略センター助教授（2006）、国立民族学博物館文化資源研究センター教授（2014）、総合研究大学院大学文化科学研究科教授兼任（2014）【学位】社会人類学博士（東京都立大学 2002）【専攻・専門】社会人類学、東南アジア研究【所属学会】日本文化人類学会、東南アジア学会、日本マレーシア学会、東京都立大学社会人類学会

【主要業績】

[単著]

信田敏宏

2013 『ドリアン王国探訪記——マレーシア先住民の生きる世界』（フィールドワーク選書1）京都：臨川書店。

2004 『周縁を生きる人びと——オラン・アスリの開発とイスラーム化』京都：京都大学学術出版会。

Nobuta, T.

2009 *Living on the Periphery: Development and Islamization among the Orang Asli in Malaysia*. Subang-Jaya, Malaysia: Center for Orang Asli Concerns.

【受賞歴】

2006 第4回東南アジア史学会賞

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

協力行動に関する人類学的研究

・研究の目的、内容

本研究は、助け合い、分かち合い、支援といった人間の協力行動について、人類史的観点からアプローチすることを目的とする。具体的には、マレーシアの先住民オラン・アスリに対する支援活動や、障がい者に対する支援活動等の具体的事例に注目しながら、文明化と人間、社会とマイノリティの関係性について考察を進める。

・成果

本年度は、オラン・アスリに対する支援活動を扱った論文（「序論 グローバル支援の人類学」信田敏宏・白川千尋・宇田川妙子編『グローバル支援の人類学——変貌するNGO・市民活動の現場から』京都：昭和堂、pp.1-14.）、障がい児の子育てや就学支援についての論考（「心に寄り添う子育てとは？——遊ぶと学びのすごろくワールド」『季刊民族学』156：62-68. および「親の立場から考える就学支援——インクルーシブ教育に対する提言」『発達障害研究』38(3)：292-301.）を発表した。また、みんぱくワールドシネマ「幸せのありか」での映画解説を機会に、障がい者の心についてのこれまでの私見をまとめ、発信することができた。その他、オラン・アスリを事例として、論文や新聞記事等を発表し、講演も実施した。

◎出版物による業績

[編著]

信田敏宏・白川千尋・宇田川妙子編

2017 『グローバル支援の人類学——変貌するNGO・市民活動の現場から』京都：昭和堂。

[論文]

信田敏宏

2016 「親の立場から考える就学支援——インクルーシブ教育に対する提言」『発達障害研究』38(3)：292-301。

2017 「人」山本信人監修・宮原暁編『東南アジア地域研究入門 2 社会』pp.123-140, 東京：慶應義塾大学出版会。

2017 「序論 グローバル支援の人類学」信田敏宏・白川千尋・宇田川妙子編『グローバル支援の人類学——変貌するNGO・市民活動の現場から』pp.1-14, 京都：昭和堂。

2017 「統治される森の民——マレー半島におけるオラン・アスリと隣人との関係史」池谷和信編『狩猟採集民からみた地球環境史——自然・隣人・文明との共生』pp.190-202, 東京：東京大学出版会。

[その他]

信田敏宏

2016 「心に寄り添う子育てとは？——遊びと学びのすごろくワールド」『季刊民族学』156：62-68。

2016 「みんぱく世界の旅 マレーシア（1）活気あふれる多民族国家」『毎日小学生新聞』10月22日。

2016 「みんぱく世界の旅 マレーシア（2）村に暮らす先住民の1日」『毎日小学生新聞』10月29日。

2016 「みんぱく世界の旅 マレーシア（3）『森の民』が平和に暮らせる理由」『毎日小学生新聞』11月5日。

2016 「みんぱく世界の旅 マレーシア（4）村びと総出で祝う結婚式」『毎日小学生新聞』11月12日。

2016 「先住民族を知ろう（10）オラン・アスリ 樹液ぬった吹き矢で獲物ゲット」『朝日小学生新聞』12月4日。

2016 「タレントタイム 多民族共生への道」小長谷有紀・鈴木紀・旦匡子編『ワールドシネマ・スタディーズ——世界の「いま」を映画から考えよう』pp.69-74, 東京：勉誠出版。

2017 「みんぱくワールドシネマ vol.15『幸せのありか』」『社会科NAVI』（日本文教出版）15：8-9。

2017 「障害者の心」（みんぱくワールドシネマ「幸せのありか」映画解説資料）。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・広報・社会連携活動

2016年11月30日 「ドリアン王国探訪記——マレーシア先住民の生きる世界」カレッジシアター「地球探究紀

行」あべのハルカス近鉄本店

2017年2月11日 「障害者の心」(映画解説) みんなくワールドシネマ『幸せのありか』国立民族学博物館

◎調査活動

・海外調査

2016年9月5日～9月16日—タイ、マレーシア(タイにおける金沢大学との共同調査への参加、及びマレーシアにおける「ネットワーク型博物館学の創成」に関わる調査と資料収集)

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員(1人)、副指導教員(1人)

特別共同利用研究員(1人)

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費助成事業(基盤研究(A))「ネットワーク型博物館学の創成」(研究代表:須藤健一)連携研究者

吉田憲司 [よしだ けんじ]————— 副館長(企画調整担当)、文化資源研究センター教授

伊藤敦規 [いとう あつのり]————— 准教授

1976年生。【学歴】東京都立大学人文学部卒(社会学学士)(2000)、東京都立大学大学院社会科学研究科修士課程修了(社会人類学修士)(2003)、国立民族学博物館平成19年度特別共同利用研究員修了(2008)、国立民族学博物館平成20年度特別共同利用研究員修了(2009)、東京都立大学大学院社会科学研究科博士課程単位取得満期退学(2009)【職歴】三重大学人文学部非常勤講師(2008)、北海道大学アイヌ・先住民研究センター研究員(2008)、A:shiwi A:wan Museum and Heritage Center Visiting Researcher(2009)、日本学術振興会特別研究員PD(2009)、立教大学兼任講師(2009)、北海道大学アイヌ・先住民研究センター客員研究員(2010)、国立民族学博物館平成22年度文化資源プロジェクト共同研究員(2010)、東北大学東北アジア研究センター共同研究員(2010)、国立民族学博物館文化資源研究センター助教(2011)、国立民族学博物館研究戦略センター助教(2012)、Museum of Northern Arizona Research Associate(2015)、国立民族学博物館研究戦略センター准教授(2016)【学位】博士(社会人類学)(東京都立大学2011)、修士(社会人類学)(東京都立大学2003)【専攻・専門】社会人類学・米国先住民研究、先住民の知的財産権問題、博物館人類学【所属学会】日本文化人類学会、東京都立大学社会人類学会、民族藝術学会、西洋史学会、アメリカ学会、日本知財学会、American Anthropological Association

【主要業績】

[編著]

伊藤敦規編

2017 『国立民族学博物館収蔵「ホピ製」木彫人形資料熟覧——ソースコミュニティと博物館資料との「再会」1』(国立民族学博物館調査報告140)。

[論文]

伊藤敦規

2016 「ホストとして関わる人類学——米国南西部先住民ホピと私のこれまでとこれから」(特集 人類学者の存在論)『社会人類学年報』42:67-90。

2015 「国立民族学博物館における研究公演の再定義——『ホピの踊りと音楽』の記録とフォーラムとしてのミュージアムの視点からの考察」『国立民族学博物館研究報告』39(3):397-458。

2011 「博物館標本資料の情報と知識の協働管理に向けて——米国南西部先住民ズニによる国立民族学博物館所蔵標本資料へのアプローチ」『国立民族学博物館研究報告』35(3):471-526。

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

日本国内博物館等所蔵アメリカ南西部先住民資料の協働管理に向けた調査研究

・研究の目的、内容

本研究は五年計画（2016～2020年度）で実施する。その目的は、第一に日本国内の博物館等が所蔵するアメリカ先住民資料の来歴、情報管理、保存状況を総合的に把握することである。第二の目的は日本国内での調査結果をソースコミュニティと共有し、将来的な管理に向けた要望等を聞き取り調査することである。第三の目的は、先住民コミュニティから寄せられる声を博物館等と共有することによって、今後の資料管理に反映されるだろう協働の制度的な枠組みを整理・検討することである。

初年度となる本年度は、調査対象機関を、松永はきもの資料館（広島）、柏木博物館（長野）、豊島みみずく資料館（東京）、猪熊源一郎現代美術館（香川）、野外民族博物館リトルワールド（愛知）、天理大学附属天理参考館（奈良）、国立民族学博物館（大阪）とする。また、資料調査対象とする民族集団は、ホピを中心とする。

2016年度の計画として、2014年度に採択された科研プロジェクト（若手A）および民博のフォーラム型情報ミュージアムの開発型プロジェクト、2015年度に採択された科研プロジェクト（国際共同研究強化）と連動させながら、日本国内での調査を進め、ソースコミュニティ（ホピの人びと）を招聘し、資料熟覧を継続して行う。また、米国南西部先住民の保留地に赴き、トライブ政府の文化行政担当者やコミュニティ成員などと調査成果の共有を図り、今後に向けた資料管理の要望などに関する聞き取り調査を実施する。4月と10月に予定している四度目、五度目のホピ招聘では松永はきもの資料館での熟覧と記録化を行う。

・成果

2016年度は、日本国内の博物館（松永はきもの資料館）に4月と10月にホピの人々を招聘し資料熟覧を行うとともに、資料の情報管理のあり方の傾向を把握した。研究出版物や口頭発表について数字にまとめると、招待講演や国際学会等での研究発表（一四本）、二カ国五機関での熟覧調査、三本の短文エッセイの執筆、三本の査読付き論文と編著の出版を行った。

特に二編の編著についてだが、前年度までに実施した民博所蔵ホピ製資料の熟覧コメントをモノグラフとしてまとめ、『SER』に投稿し、出版した（伊藤敦規編2017『国立民族学博物館収蔵「ホピ製」木彫人形資料熟覧——ソースコミュニティと博物館資料との「再会」1』（国立民族学博物館調査報告SER140号）、国立民族学博物館）。また、2013年度に民博で開催した国際ワークショップ（『伝統知、記憶、情報、イメージの再収集と共有——民族誌資料を用いた協働カタログ制作の課題と展望』）の成果をまとめ、『SER』に投稿し、出版した（伊藤敦規編2016『伝統知、記憶、情報、イメージの再収集と共有——民族誌資料を用いた協働カタログ制作の課題と展望』（国立民族学博物館調査報告137号）、国立民族学博物館）。

なお、本研究の実施にあたり、以下の四つの研究助成の一部を使用させて頂いた。①国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアム・プロジェクト、開発型プロジェクト（「北米先住民製民族誌資料の文化人類学的ドキュメンテーションと共有」、研究代表者：伊藤敦規）。②科学研究費助成事業（若手研究（A）「日本国内の民族学博物館資料を用いた知の共有と継承に関する文化人類学的研究（JSPS KAKENHI Grant Number-JP26704012）」、研究代表者：伊藤敦規）。③科学研究費助成事業（国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）「日本国内の民族学博物館資料を用いた知の共有と継承に関する文化人類学的研究（国際共同研究強化）（JSPS KAKENHI Grant Number JP15KK0069）」、研究代表者：伊藤敦規）。④国立民族学博物館共同研究（「米国本土先住民の民族誌資料を用いるソースコミュニティとの協働関係構築に関する研究」、研究代表者：伊藤敦規）

◎出版物による業績

[編著]

伊藤敦規編

2016 『伝統知、記憶、情報、イメージの再収集と共有——民族誌資料を用いた協働カタログ制作の課題と展望』（国立民族学博物館調査報告137号）。[査読有]

伊藤敦規編

2017 『国立民族学博物館収蔵「ホピ製」木彫人形資料熟覧——ソースコミュニティと博物館資料との「再会」1』（国立民族学博物館調査報告140号）。[査読有]

[論文]

伊藤敦規

2016 「はじめに」伊藤敦規編『伝統知、記憶、情報、イメージの再収集と共有——民族誌資料を用いた協

働カタログ制作の課題と展望』(国立民族学博物館調査報告137) pp.1-4, 大阪:国立民族学博物館。
[査読有]

2016 「おわりに」伊藤敦規編『伝統知、記憶、情報、イメージの再収集と共有——民族誌資料を用いた協働カタログ制作の課題と展望』(国立民族学博物館調査報告137) pp.131-132, 大阪:国立民族学博物館。[査読有]

2016 「ホストとして関わる人類学——米国南西部先住民ホピと私のこれまでとこれから」(特集 人類学者の存在論)『社会人類学年報』42:67-90。[査読有]

2017 「序」伊藤敦規編『国立民族学博物館収蔵「ホピ製」木彫人形資料熟覧——ソースコミュニティと博物館資料との「再会」1』(国立民族学博物館調査報告140) pp.1-3, 大阪:国立民族学博物館。[査読有]

2017 “Preface” 伊藤敦規編『国立民族学博物館収蔵「ホピ製」木彫人形資料熟覧——ソースコミュニティと博物館資料との「再会」1』(国立民族学博物館調査報告140) pp.4-7, 大阪:国立民族学博物館。[査読有]

[その他]

伊藤敦規

2016 「スネークダンス」阿部珠理編『アメリカ先住民を知るための62章』 pp.231-235, 東京:明石書店。

2016 「カチーナとカチーナ人形」阿部珠理編『アメリカ先住民を知るための62章』 pp.261-265, 東京:明石書店。

2016 「伝統工芸」阿部珠理編『アメリカ先住民を知るための62章』 pp.266-271, 東京:明石書店。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年5月22日 「博物館資料を文化的に蘇生させる——ソースコミュニティと共に行う博物館資料の熟覧調査」『リトルワールドカレッジマスターコース 2016、第二回講義』野外民族博物館リトルワールド

2016年7月2日 Robert Breunig, Atsunori Ito, Gerald Lomaventema, Kelley Hays-Gilpin “History of Hopi Overlay Jewelry: Origins and Continuity”, Museum of Northern Arizona 83rd Hopi Festival, Flagstaff, AZ, USA

2016年7月3日 Robert Breunig, Atsunori Ito, Gerald Lomaventema, Kelley Hays-Gilpin “History of Hopi Overlay Jewelry: Origins and Continuity”, Museum of Northern Arizona 83rd Hopi Festival, Flagstaff, AZ, USA

2016年8月6日 Gerald Lomaventema and Atsunori Ito “History of Traditional Overlay Jewelry”, Arizona State Parks Homolovi State Park Event “Suvoyuki Day”, Homolovi State Park, Winslow, AZ, USA

2016年8月29日 Kelley Hays-Gilpin and Atsunori Ito “Decolonizing museum catalogs? Collaborative catalogs and archaeological practice”, WAC8 (8th World Archaeology Congress, Kyoto, Japan: 世界考古学会議京都大会), Doshisha University, Kyoto [査読有]

2016年9月12日 “Hopi Collections Review in the US and Japan: Introduction of a Minpaku’s Info-Forum Museum Project”, History Colorado Center, Denver, CO, USA

2016年9月15日 “Hopi Collections Review in the US and Japan: Introduction of a Minpaku’s Info-Forum Museum Project”, Denver Museum of Nature & Science, Denver, CO, USA

2016年11月22日 「米国先住民墓地保護・返還法」『資料返還をめぐる先住民と博物館との新たな関係性の構築に関する文化人類学的研究(科学研究費補助金基盤B、出利葉浩司代表)』北海学園大学

2017年1月10日 “Reconnecting Source Community with Museum Collections: Hopi Collections Review in the US and Japan”, Hibben Center for Archaeology Research (HIBB) at University of New Mexico, Albuquerque, NM, USA

2017年1月11日 “Hopi Collections Review in the US and Japan: Introduction of a Minpaku’s Info-Forum Museum Project”, New Mexico State University Museum, Las Cruces, NM, USA

2017年1月16日 “Hopi Jewelry Collections Review: Minpaku’s Info-Forum Museum Project”, Lomaventema’s Workshop, Second Mesa, AZ, USA

・ 広報・社会連携活動

2016年5月13日 「アメリカ先住民ホピの文化」大阪府高齢者大学「世界の文化に親しむ科」大阪府社会福祉会館

2016年5月20日 「記憶や思い出を後世に伝える方法を考える——ソースコミュニティと共に行う博物館資料の熟覧調査」大阪府高齢者大学「世界の文化に親しむ科」大阪府社会福祉会館

・ みんぱくウィークエンド・サロン

2017年2月12日 「博物館資料をソースコミュニティと再会させる」第454回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎調査活動

・ 海外調査

2016年6月26日～8月12日—アメリカ（北米先住民製民族誌資料の文化人類学的ドキュメンテーションと共有に関する研究）

2016年9月10日～9月21日—アメリカ（デンバー自然科学博物館所蔵資料にかかる調査研究）

2017年1月6日～2月10日—アメリカ（ソースコミュニティとの協働資料熟覧の成果物に関する公開適正化調査等）

2017年3月10日～3月21日—アメリカ（ワシントン大学附属パーク博物館でのソースコミュニティとの協働資料熟覧）

◎上記以外の研究活動

・ 人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

国立民族学博物館共同研究会「米国土先住民の民族誌資料を用いるソースコミュニティとの協働関係構築に関する研究」研究代表者、国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアム・開発型プロジェクト『北米先住民製民族誌資料の文化人類学的ドキュメンテーションと共有』研究代表者、科学研究費助成事業（若手研究（A））『日本国内の民族学博物館資料を用いた知の共有と継承に関する文化人類学的研究』（研究課題番号：26704012）研究代表者、科学研究費助成事業（国際共同研究加速基金（国際共同研究強化））『日本国内の民族学博物館資料を用いた知の共有と継承に関する文化人類学的研究』（研究課題番号：15KK0069）研究代表者、北海道大学アイヌ・先住民研究センター共同研究「先住民アートプロジェクト」研究代表者：山崎幸治 共同研究者

上羽陽子 [うえば ようこ] ————— 准教授

1974年生。【学歴】大阪芸術大学芸術学部工芸学科染織コース卒（1997）、大阪芸術大学大学院芸術文化研究科博士課程前期修了（1999）、大阪芸術大学大学院芸術文化研究科博士課程後期修了（2002）【職歴】大阪芸術大学大学院芸術文化研究科研究員（2002）、大阪芸術大学通信教育部工芸学科ファイバーコース非常勤講師（2003）、大阪市立クラフトパーク織物工房非常勤指導員（2003）、京都精華大学非常勤講師（2007）、国立民族学博物館文化資源研究センター助教（2008）、総合研究大学院大学准教授併任（2014）【学位】博士（芸術文化学）（大阪芸術大学 2002）、修士（芸術文化学）（大阪芸術大学 1999）【専攻・専門】民族芸術学、染織研究、手工芸研究【所属学会】民族芸術学会、意匠学会、日本風俗史学会、日本南アジア学会、生き物文化誌学会

【主要業績】

[単著]

上羽陽子

2006 『インド・ラバーリー社会の染織と儀礼——ラクダとともに生きる人びと』京都：昭和堂。

2015 『インド染織の現場——つくり手たちに学ぶ』（フィールドワーク選書12）京都：臨川書店。

[論文]

上羽陽子

2012 「インド・グジャラート州アーメダバード市における女神儀礼用染色布の製作技術の現状」『国立民族学博物館研究報告』37(1)：1-51。

【受賞歴】

- 2010 意匠学会作品賞
- 2007 第4回木村重信民族藝術学会賞

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

現代インドの手工芸文化に関する民族芸術学的研究

・研究の目的、内容

急激に進む経済成長やグローバル化をうけ、現代インドの手仕事は急速に姿を変えている。本研究の目的は、現代インドにおける手工芸品のつくり手たちが、急速に変化する自然環境や社会環境にどのように対応しながら、伝統的な手工芸技術の生産形態を保持あるいは変容させつつ、現代的な要素をいかに選択しているかを明らかにすることである。

同時に、文化資源である現地の人びとのものづくりに関する知識を、どのように活用することができるか、さらに共同利用や社会還元への可能性を展示やワークショップを通じて実践的研究を行なう。

なお、本研究は、科学研究費（基盤（C）「現代インドにおける染織技術の戦略的継承法に関する民族芸術学的研究」、2014～2017年度）および（基盤（A）「アジア地域における布工芸品の生産・流通・消費をめぐる文化人類学的研究（代表：中谷文美）」、2014～2017年度）の課題として実施する。また、現在代表を務めている共同研究「現代「手芸」文化に関する研究」とも連動し、世界の手工芸文化における現代インドの特性についても考察を行う。

・成果

本年度は、2014～2017年度に研究代表として実施する科学研究費（基盤（C）「現代インドにおける染織技術の戦略的継承法に関する民族芸術学的研究」の研究活動の一部として、インド、アフマダバードの女神儀礼用染色布の生産現場の調査を実施した。現地では、コミュニティ内の製作に係る役割分担を明らかにするとともに、道具のイノベーションや新しい染料の導入など、生産から販売までの製作者のローカルとグローバルの市場に対する製作・販売戦略を明らかにすることができた。また、同科研にかかる調査として、大英図書館所蔵の文献渉猟を実施し、19世紀後半の女神儀礼に関する染織布の使用状況や制作状況など詳細な民族誌の情報を得ることができた。さらに、2014～2017年度に研究分担者として実施する基盤（A）「アジア地域における布工芸品の生産・流通・消費をめぐる文化人類学的研究」の研究活動の一部として、西チモール布生産現場にて調査を実施した。綴織やタテ緋、紋織など染織布の生産現場にて、木綿の手紡糸による制作工程と藍染や多色性染料について聞き取り調査をおこない、さまざまな観光客向け商品を生産するなかで、観光客の嗜好によって生産者が巧みに生産物を変え、価格設定していることが明らかとなった。

そして、本研究の成果の一部として『第58回意匠学会大会』にて研究発表をおこなった。さらに、文化資源である現地の人びとのものづくりに関する知識や文化背景を学校教育においてどのように活用することが可能であるかについて香川県立ミュージアム等でものづくりワークショップを実施し、手法開発を実践した。

◎出版物による業績

[編著]

上羽陽子・中牧弘允・中山京子・藤原孝章・森茂岳雄編

2016 『学校と博物館でつくる国際理解教育のワークショップ』（国立民族学博物館調査報告138）大阪：国立民族学博物館。

[論文]

上羽陽子

2016 「はじめに」上羽陽子・中牧弘允・中山京子・藤原孝章・森茂岳雄編『学校と博物館でつくる国際理解教育のワークショップ』（国立民族学博物館調査報告138号），pp.1-2，大阪：国立民族学博物館。

2016 「ガイダンス——第1部」上羽陽子・中牧弘允・中山京子・藤原孝章・森茂岳雄編『学校と博物館でつくる国際理解教育のワークショップ』（国立民族学博物館調査報告138），p.9，大阪：国立民族学博物館。

2016 「ガイダンス——第2部」上羽陽子・中牧弘允・中山京子・藤原孝章・森茂岳雄編『学校と博物館でつくる国際理解教育のワークショップ』（国立民族学博物館調査報告138），pp.57-58，大阪：国立民族学博物館。

- 2016 「『見方』を開発——インドの染織資料が見えてくる」上羽陽子・中牧弘允・中山京子・藤原孝章・森茂岳雄編『学校と博物館でつくる国際理解教育のワークショップ』（国立民族学博物館調査報告138），pp.69-76，大阪：国立民族学博物館。
- 2016 「身体的に自覚すること——自己と他者の理解に向けて」上羽陽子・中牧弘允・中山京子・藤原孝章・森茂岳雄編『学校と博物館でつくる国際理解教育のワークショップ』（国立民族学博物館調査報告138），pp.112-113，大阪：国立民族学博物館。
- 2016 「ガイダンス——第3部」上羽陽子・中牧弘允・中山京子・藤原孝章・森茂岳雄編『学校と博物館でつくる国際理解教育のワークショップ』（国立民族学博物館調査報告138号），p.161，大阪：国立民族学博物館。
- 2016 「おわりに」上羽陽子・中牧弘允・中山京子・藤原孝章・森茂岳雄編『学校と博物館でつくる国際理解教育のワークショップ』（国立民族学博物館調査報告138），pp.279-280，大阪：国立民族学博物館。

[その他]

上羽陽子

- 2016 「旅・いろいろ地球人 手仕事の今① インドの放牧用袋づくり」『毎日新聞』7月7日。
- 2016 「旅・いろいろ地球人 手仕事の今② ネパールの敷物づくり」『毎日新聞』7月14日。
- 2016 「旅・いろいろ地球人 手仕事の今③ 機械か、人か」『毎日新聞』7月21日。
- 2016 「旅・いろいろ地球人 手仕事の今④ つくる行為に意味がある」『毎日新聞』7月28日。
- 2016 「みんなく世界の旅 インドのラクダ1」『毎日小学生新聞』11月19日。
- 2016 「みんなく世界の旅 インドのラクダ2」『毎日小学生新聞』11月26日。
- 2016 「みんなく世界の旅 インドのラクダ3」『毎日小学生新聞』12月3日。
- 2016 「みんなく世界の旅 インドのラクダ4」『毎日小学生新聞』12月10日。
- 2017 「幼児を守るラバーリー社会のビーズワーク」池谷和信編『ビーズ つなぐ かざる みせる』pp.74-75，大阪：国立民族学博物館。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

- 2016年4月9日 「手仕事の省力化と余暇的・趣味的仕事——インド西部カシ・ラバーリーの衣装を事例に」科学研究費補助金基盤研究（A）『アジア地域における布工芸品の生産・流通・消費をめぐる文化人類学的研究』（代表：中谷文美）2016年度第1回研究会、岡山大学津島キャンパス
- 2016年10月31日 「南アジアにおける糸素材および織機の技術民族誌的研究」（金谷美和、中谷文美との共同発表）科学研究費補助金新学術領域研究（研究領域提案型）『人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築』（代表：野林厚志）パレオアジア文化史学 B01-B02班合同会議、国立民族学博物館
- 2016年11月5日～11月6日（パネル発表）「南アジアにおける糸素材および織機の技術民族誌的研究」（金谷美和、中谷文美との共同発表）科学研究費補助金新学術領域研究（研究領域提案型）『人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築』（代表：野林厚志）パレオアジア文化史学第1回研究大会、東京大学本郷キャンパス小柴ホール
- 2017年2月4日 「ラバーリーの刺繍と衣装——意匠からみる他者利用」『MINDAS 第4回合同研究会』国立民族学博物館
- 2017年2月12日 「紐と糸をめぐる技術民族誌的研究」（金谷美和、中谷文美との共同発表）科学研究費補助金新学術領域研究（研究領域提案型）『人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築』（代表：野林厚志）パレオアジア文化史学第2回研究大会、名古屋大学野依記念学術交流館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2016年5月14日 「アッサム州とグジャラート州カッチのラバーリーのラック染め」ラック研究会主催『第一回ラック勉強会「2016年1-2月のインドのラック生産と利用」』京都府立大学
- 2016年7月31日（パネル発表）「物質文化展示の新たな可能性について——国立民族学博物館南アジア展示場を事例に」『第58回意匠学会大会』京都精華大学

・広報・社会連携活動

- 2016年4月27日 「インド染織の現場 つくり手たちに学ぶ」カレッジシアター「地球探求紀行」あべのハルカ

ス近鉄本店

2017年1月27日、2月3日 「インドの染織文化を考える」大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」大阪府社会福祉会館

・ワークショップ

2016年5月31日、6月14日、6月28日 「模写実践と異文化理解——インド西部の刺繍布を読みとる」(主催：川島テキスタイルスクール)川島テキスタイルスクール [依頼有]

2016年6月22日 「手織り絨毯の織技術について」(主催：株式会社絨毯ギャラリー)クロス・ウェーブ梅田 [依頼有]

2016年10月23日 「キラキラ☆光の力 インド伝統のミラー刺繍にチャレンジ！」(アシスタント：安達昌代)特別展『イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる』関連ワークショップ(主催：香川県立ミュージアム、共催：国立民族学博物館友の会)香川県立ミュージアム [依頼有]

・国立民族学博物館映像音響資料の制作・監修

2016 「沖 守弘・インド民族文化資料アーカイブ(制作：三尾 稔)」制作協力

◎調査活動

・海外調査

2016年8月17日～9月2日—インドネシア(科研費(基盤(A))「アジア地域における布工芸品の生産・流通・消費をめぐる文化人類学的研究」にかかる調査研究)

2016年11月9日～12月2日—インド(科研費(基盤(C))「現代インドにおける染織技術の戦略的継承法に関する民族芸術学的研究」にかかる調査研究)

2017年1月10日～1月20日—イギリス(科研費(基盤(C))「現代インドにおける染織技術の戦略的継承法に関する民族芸術学的研究」にかかる調査研究)

2017年3月3日～2017年3月18日—インド(科研費(新学術領域)「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」にかかる調査研究)

◎社会活動・館外活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金(基盤研究(C))「現代インドにおける染織技術の戦略的継承法に関する民族芸術学的研究」研究代表者、科学研究費補助金(基盤研究(A))「アジア地域における布工芸品の生産・流通・消費をめぐる文化人類学的研究」(研究代表者：中谷文美)研究分担者、科学研究費補助金(新学術領域研究(研究領域提案型))「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」(代表：野林厚志)研究分担者

・他の機関から委嘱された委員など

民族芸術学会理事(研究例会担当)、意匠学会国際交流委員

・非常勤講師

京都精華大学「文様史1」、「クラフト1」

林 勲男 [はやし いさお]——— 准教授

【学歴】立教大学文学部史学科卒(1980)、立教大学大学院文学研究科地理学修士課程修了(1983)、一橋大学大学院社会学研究科地域社会研究専攻博士課程単位取得退学(1992)【職歴】シドニー大学人類学科客員研究員(1992)、国立民族学博物館第4研究部助手(1994)、国立民族学博物館民族社会研究部助手(1998)、国立民族学博物館民族社会研究部助教授(1999)、総合研究大学院大学文化科学研究科併任(2001)【学位】文学修士(立教大学大学院文学研究科1983)【専攻・専門】社会人類学 1)パプアニューギニアにおける社会組織と世界観に関する研究、2)オセアニア近代史の人類学的研究、3)自然災害への対応に関する人類学的研究【所属学会】日本文化人類学会、日本オセアニア学会、地域安全学会、日本災害復興学会、The International Union of Anthropology and Ethnological Sciences (IUAES)、Japan Anthropology Workshop (JAWS)

【主要業績】

[編著]

林 勲男編

2015 『アジア太平洋諸国の災害復興——人道支援／集落移転・防災と文化』東京：明石書店。

2010 『自然災害と復興支援』（みんぱく実践人類学シリーズ9）東京：明石書店。

[共編著]

林 勲男・橋本裕之編

2016 『災害文化の継承と創造』京都：臨川書店。

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

災害と記憶

・研究の目的、内容

人文社会科学の分野において、「記憶」を取り上げた論考が多くなっている。日本では、とりわけ東日本大震災とそれに続く福島第1原発事故によって、それまでの生活が一変した被災者・被害者の言説を扱う際に、当事者の主観性にアプローチする研究者のスタンスを同時に開示するものとして、「記憶」をキーワードとして前面に押し出した議論が少なからず見受けられる。しかしそれは、この概念の拡大の有効性への疑問も投げかけている。

災害遺構の保存か解体かをめぐっていくつかの行政判断がなされたことを踏まえて、発災以降の記憶だけでなく、ライフヒストリーの中の災害経験と、災害遺構にかかわる災害以前の記憶・思い出等についてのデータの収集と分析をおこなう。情報は公開可能な範囲で災害遺構データベースにアップする。

・成果

東日本大震災被災地における災害遺構の保存をめぐる諸問題に関して、被災地住民の記憶と当該の遺構との関係について考察した論考を、『民博研究報告』41巻4号にMaterializing Memories of Disasters: Individual Experiences in Conflict Concerning Disaster Remains in the Affected Regions of the Great East Japan Earthquake and Tsunamiのタイトルで掲載した。なおこの成果は、科研基盤S「減災の決め手となる行動防災学の構築」の分担者として実施した調査研究の一端を示すものである。

◎出版物による業績

[論文]

林 勲男・木村周平・鈴木佑記・高倉浩樹

2016 「課題研究懇談会活動報告『災害の人類学』」『文化人類学』81(2)：338-343。

Hayashi, I.

2017 Materializing Memories of Disasters : Individual Experiences in Conflict Concerning Disaster Remains in the Affected Regions of the Great East Japan Earthquake and Tsunami. *Bulletin of the National Museum of Ethnology* 42(1) : 337-391. [査読有]

[その他]

林 勲男

2016 「知識はデータを情報化し、適切な判断に導く？」『月刊みんぱく』40(6)：10-11。

2016 「出版物 アジア太平洋諸国の災害復興——人道支援・集落移転・防災と文化」『民博通信』154：22。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・研究講演

2016年11月11日 「災害文化と無形文化遺産の継承」『アジア太平洋地域における無形文化遺産と災害リスクマネジメント』セミナー、東京文化財研究所

・研究公演

2016年5月29日 「黒森神楽×雄勝法印神楽 in みんぱく公演」国立民族学博物館

・みんぱくウィークエンド・サロン

2016年9月4日 「民博所蔵『ジョージ・ブラウン・コレクション』の来歴をたどる」第437回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎調査活動

・国内調査

- 2016年5月15日～5月16日—宮城県（震災復興にかかわる市民活動についての調査）
2016年6月18日～6月20日—岩手県大船渡市・釜石市（復興支援現地公開フォーラム準備委員会出席）
2016年7月23日～7月25日—福井県（原子力発電所PR施設の視察調査）
2016年8月8日～8月9日—岩手県大船渡市（郷土芸能復興支援メッセ打ち合わせ）
2016年8月23日～8月25日—福島県双葉郡川内村・田村郡三春町・白河市（福島原発事故に関する展示の視察）
2016年12月4日～12月5日—岩手県立図書館（岩手県沿岸部を襲った過去の津波災害に関する歴史資料調査）
2016年12月24日～12月25日—宮城県仙台市（「震災と暮らし——震災遺産と人びとの記録からふりかえる」の見学とトークプログラムへの参加）
2017年1月20日～1月21日—東北大学災害科学国際研究所（東日本大震災アーカイブ国際シンポジウムへの参加）
2017年1月26日—千葉（国立歴史民俗博物館、国際展示「台湾と日本——震災史とともにたどる近現代」の視察）
2017年3月11日～3月14日—宮城県石巻市・南三陸町・仙台市（高台移転と津波避難サイン計画に関する調査）

◎大学院教育

・論文審査

博士論文審査委員（1件）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など
科学研究費補助金（基盤研究（S））「減災の決め手となる行動防災学の構築」（研究代表：京都大学・林春男）
研究分担者、課題設定による先導的人文学・社会科学推進事業「効果的・持続的な災害伝承を目的にした拠点構築手法のモデル化と実践的研究」（研究代表者：東北大学・佐藤翔輔）研究分担者

日高真吾 [ひだか しんご] ————— 准教授

1971年生。【学歴】東海大学文学部史学科日本史学専攻卒（1994）【職歴】財団法人元興寺文化財研究所研究員（1994）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助手（2002）、国立民族学博物館民族学研究開発センター助手（2003）、国立民族学博物館文化資源研究センター助手（2004）、国立民族学博物館文化資源研究センター准教授（2008）【学位】文学博士（東海大学 2005）【専攻・専門】保存科学、保存修復【所属学会】文化財保存修復学会、文化財科学会、日本民具学会、近畿民具学会

【主要業績】

[単著]

日高真吾

2015 『災害と文化財——ある文化財科学者の視点から』大阪：千里文化財団。

2008 『女乗物——その発生経緯と装飾性』神奈川：東海大学出版会。

[編著]

日高真吾編

2012 『記憶をつなぐ——津波被害と文化遺産』大阪：千里文化財団。

園田直子・日高真吾共編

2008 『博物館への挑戦——何がどこまでできたのか』東京：三好企画。

【受賞歴】

2016 文化財保存修復学会 業績賞

2009 日本文化財科学会第4回ポスター賞

2008 文化財保存修復学会第2回奨励賞

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築

・研究の目的、内容

本研究では、グローバル化や災害を原因として大きな変貌を遂げている地域社会において、どのような文化が継承され、新たな文化が構築されているのかについて調査・研究をおこなう。さらに、地域社会の動向に対して人間文化研究がいかに関与しうるかを考察することを研究の主眼とする。

この研究からは、①豊かな地域社会の創生に向け、災害時における地域文化の重要性の提示、②博物館を積極的に活用し、平常時に地域住民の意識が希薄となっている地域文化の大切さを節目で感じることができるプログラムの策定、③地域の文化を発掘し、その実践活動を検証する人間文化研究の新たなモデルの構築、④研究成果を地域において活用するための、地域と研究者の結節点の発見を目指す。

なお、本研究を進めるにあたっては、人間文化研究機構基幹プロジェクト「日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築」（代表 日高真吾）および、科学研究費補助金基盤B「東日本大震災で被災した民俗文化財の保存および活用に関する基礎研究」（代表 日高真吾 15H02954）の研究プロジェクトと関連付けながら実施する。

・成果

本研究では、人間文化研究機構基幹プロジェクト「日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築」（代表 日高真吾）および、科学研究費補助金基盤B「東日本大震災で被災した民俗文化財の保存および活用に関する基礎研究」（代表 日高真吾 15H02954）の研究プロジェクトと連携し、平成28年度は、大学教育と地域文化の再発見を連結させる活動として、京都造形芸術大学、別府大学の活動の調査をおこなった。また、地域主体の地域文化の活用について台湾、石川県穴水町、宮城県石巻市の活動、宮城資料ネットワークによる古文書調査の活動のフィールド調査をおこなった。また、枚方市旧田中家鋳物資料館および気仙沼市教育委員会、村上市教育委員会、京都市教育委員会所蔵の民俗資料を対象として、小学校の授業で使用可能な展示パックの制作に向けた調査、準備をおこなった。次に、大学間連携体制を整えるため、神戸大学との協定を結ぶとともに、次年度に京都造形芸術大学、東北大学、大妻女子大学との協定締結に向けた話し合いを進めた。社会への研究成果の公開としては、台北芸術大学と共催した国際研究フォーラム「地域文化の発見、保存、活用」を台湾桃園市で開催した。また、竹沢尚一郎教授とともに企画展「津波を越えて生きる；大槌町奮闘の記録」を実現させた。

◎出版物による業績

〔編著書〕

日高真吾監修

2017 『日本と世界の暮らし——どこが同じ？どこが違う？ 住』東京：汐文社。

〔論文〕

日高真吾

2016 「日本の文化展示場における資料情報の活用に向けて」『民博通信』15：12-13。

2017 「三陸は芸能の宝庫」『月刊みんぱく』41(2)：5-6。

2017 「日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築」小池淳一・木部陽子・日高真吾・渡辺浩一・窪田順平編『新しい地域文化の可能性を求めて』pp.22-31, 人間文化研究機構広領域連携型基幹研究「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」。

2017 「釧路市立博物館所蔵アイヌ木綿衣について」佐々木史郎・吉本忍・齋藤玲子・津田命子・日高真吾・和高智美・右代啓視・戸田恭司『釧路市立博物館紀要』37：17-18。

2017 「衣服の収納——和箆笥と洋箆笥」上羽陽子監修『日本と世界の暮らし——どこが同じ？どこが違う？ 衣』pp.18-21, 東京：汐文社。

2017 「床材——畳とカーペット」日高真吾監修『日本と世界の暮らし——どこが同じ？どこが違う？ 住』pp.10-13, 東京：汐文社。

2017 「木造の家と石造りの家」日高真吾監修『日本と世界の暮らし——どこが同じ？どこが違う？ 住』pp.6-9, 東京：汐文社。

日高真吾、橋本沙知

2017 「金属製作と権力」關 雄二編『アンデス文明——神殿から読み取る権力の世界』pp.191-221, 京

都：臨川書店。

Hidaka, S.

2016 Conservation Science Research at the Museum: Development of Carbon Dioxide Treatment for Museum Collection. In N. Sonoda(ed.) *New Horizons for Asian Museums and Museology*, pp.131-141. Singapore: Springer.

Sonoda, N. and S. Hidaka and K. Suemori

2016 Common challenges for ethnographic and modern art collections: Pest control for large and complex objects containing new materials. Saving the Now: Crossing Boundaries to Conserve Contemporary Works, The International Institute for Conservation of Historic and Artistic Works (IIC) 2016 Los Angeles Congress Preprints. *Studies in Conservation* 61(2): 329-331.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2016年11月25日 「石川県穴水町の文化遺産を保存する——保存修復の観点から」国際フォーラム『地域文化の発見、保存、活用』台湾大溪多目的文化体育館

・機構の連携研究会での報告

2017年1月31日 「国立民族学博物館におけるアイヌの文化展示場の失火対応について」国立歴史民俗博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年6月1日～6月2日 (ポスター発表)「狭帯域LED光源を用いた偏光撮影による彩色材料光学情報の可視化」(末森薫、園田直子、日高真吾、和高智美、河村友佳子、橋本沙知)『日本文化財科学会第33回大会』奈良大学

2016年6月25日 「二酸化炭素処理による発泡体の形状変化について」二俣賢(日本液炭)・日高真吾・末森薫(国立民族学博物館)・和高智美(文化創造工芸)・河村友佳子・橋本沙知(元興寺文化財研究所)・吉村健治(日本液炭)『文化財保存修復学会第38回大会研究発表要旨集』東海大学、神奈川県

2016年6月25日 「国立民族学博物館における展示証明のLED化——民俗資料の展示を想定した照明実験」園田直子・日高真吾・末森薫・村田忠繁・奥村泰之(国立民族学博物館)・河村友佳子・橋本沙知(元興寺文化財研究所)・和高智美(文化創造工芸)『文化財保存修復学会第38回大会研究発表要旨集』東海大学、神奈川県

2016年6月25日 「太陽光を利用した高温殺虫処理システム開発——殺虫処理条件を満たすための処理空間の創出を目指した試験について」日高真吾・園田直子・末森薫・西澤昌樹・松田万緒(国立民族学博物館)・河村友佳子・橋本沙知(元興寺文化財研究所)・和高智美(文化創造工芸)・木川りか(九州国立博物館)・川越和四(環境文化創造研究所)『文化財保存修復学会第38回大会研究発表要旨集』東海大学、神奈川県

2016年6月25日～6月26日 「災害対策調査部会日活動について——2015年度報告」日高真吾・中村晋也・米村祥央・和田浩・加藤和歳・田井東浩平・間渕創・内田俊秀『文化財保存修復学会第38回大会研究発表要旨集』東海大学、神奈川県

2016年9月13日～9月15日 “25 years of implementation and development of IPM at the National Museum of Ethnology, Japan”(Sonoda, K., S. HIDAKA and K. SUEMORI)IPM 2016, 3rd international IPM Conference in Museums, Archives, Libraries and Historic Buildings, Auditorium du Louvre, France

2016年9月12日～9月16日 “Common challenges for ethnographic and modern art collections: Pest control for large and complex objects containing new materials”(Sonoda, N., S. Hidaka and K. Suemori) International Institute for Conservation of Historic and Artistic Works (IIC), 2016 Los Angeles Congress(Saving the Now: Crossing Boundaries to Conserve Contemporary Works)Millennium Biltmore Hotel Los Angeles, USA

・みんなくゼミナール

2016年4月16日 「夷酋列像を考える」(右代啓視、内田順子と共同発表)第455回みんなくゼミナール

・研究講演

2016年5月21日 「東日本大震災と文化財レスキュー」北方民族博物館

- 2016年7月11日 「地域文化の見せ方、捉え方」追手門学院大学・国立民族学博物館共同研究『地域文化の継承と創造』追手門学院大学
- 2016年12月16日 「日本における文化財レスキューについて」国際コンソーシアムシンポジウム『エクアドル地震による文化財被害状況報告』東京国立博物館
- 2016年8月6日 「被災文化財の支援から考える 地域文化の保存と活用」『「記憶の劇場」大学博物館を活用する文化芸術ファシリテーター育成講座』国立民族学博物館
- 2017年2月1日 「国立民族学博物館の露出展示を支える展示手法の現状と課題」『みんなでまもる文化財みんなをまもるミュージアム』事業第2回研修会、熊本市現代美術館

・研究公演

- 2017年3月19日 研究公演「城山虎舞 in みんなく」国立民族学博物館

・展示

- 特別展「夷酋列像——蝦夷地イメージをめぐる人・物・世界」実行委員長
- 企画展「津波を越えて生きる——大槌町奮闘の記録」プロジェクトメンバー

・広報・社会連携活動

- 2016年12月21日 「展示キュレーションの誘惑——新しい日本の文化展示ができるまで」連続講座『みんなく×ナレッジキャピタル 展示キュレーションの誘惑——新しいみんなくの展示ができるまで』グランフロント大阪ナレッジキャピタル1階

◎調査活動

・国内調査

- 2016年5月26日～5月28日一大分県（地域文化を対象とした別府大学の教育プログラムに関する調査）
- 2016年6月3日—新潟県村上市（旧荃太小学校収蔵庫にて資料保管状況の調査および所蔵資料を活用した教育キットを用いた資料活用に関する資料調査）
- 2016年6月4日—新潟県（十日町市立博物館にて、藕糸織りの保存状態の観察と活用に関する打ち合わせおよび中越地震で被災した蕪木家文書の赤外線撮影を中心とした詳細調査）
- 2016年6月6日—北海道平取（萱野茂二風谷アイヌ資料館にてチセの建築技術を活用した民博所蔵のチセの葺き替えに関する調査）
- 2016年7月9日—徳島県徳島市（津波碑の所在調査）
- 2016年7月13日—宮城県気仙沼市（所蔵資料を活用した教育パックに関する打ち合わせ）
- 2016年7月22日—京都市左京区（所蔵資料を活用した教育パックに関する調査）
- 2016年7月26日—石川県（金沢美術工芸大学所蔵の百工比照の調査）
- 2016年7月27日—石川県（穴水町教育委員会による地域文化を活用したワークショップの調査）
- 2016年7月29日—新潟県村上市（村上市関連民俗資料を活用した教育キット「地域文化宝箱パック——村上」に関する研究会）および旧荃太小学校収蔵庫の環境調査）
- 2016年7月30日～7月31日—新潟県十日町市十日町情報館（中越地震で被災した蕪木家文書の赤外線撮影を中心とした詳細調査）
- 2016年8月16日—広島大学総合博物館・広島県広島市安佐北区（広島大学総合博物館の展示に関する調査及び2014年豪雨で被災した安佐地区の現状調査）
- 2016年9月23日—新潟県村上市（旧荃太小学校収蔵庫にて資料の虫害状況の調査）
- 2016年9月27日—大阪府枚方市（枚方市立旧田中家鋳物民俗資料館にて、枚方資料を活用した教育キット「地域文化宝箱パック——枚方」に関する調査）
- 2016年9月28日—岩手県大槌町（大槌町教育委員会にて、企画展「津波を越えて生きる——大槌町の奮闘の記録」に関する調査）
- 2016年10月16日—宮城県（宮城県せんだい3.11メモリアル交流館にて展示内容の調査）
- 2016年12月16日—宮城県東北歴史博物館（特別展「工芸継承」のキュレーションの状況の調査）
- 2017年3月4日～3月5日一大分県別府大学（別府大学における世界農業遺産支援の取り組みについての調査）

・海外調査

- 2016年6月9日～6月12日—台湾（基幹研究主催の国際シンポジウム及び周辺博物館の調査研究）
- 2016年9月10日～9月17日—アメリカ（国際文化財保存学会ロサンゼルス大会に参加及び保存科学の動向についての情報収集）
- 2016年11月23日～11月28日—台湾（国際フォーラム「地域文化の発見、保存と活用」の参加と発表）

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

人間文化研究機構災害時歴史文化資料保全システム検討チーム委員、文化財保存修復学会理事、文化遺産防災ネットワーク推進事業有識者会議委員、米原市曳山修理委員会委員

・他大学の客員、非常勤講師

関西学院大学「博物館資料保存論」非常勤講師（集中講義）

福岡正太 [ふくおか しょうた] ————— 准教授

1962年生。【学歴】東京藝術大学音楽学部楽理科卒（1986）、東京藝術大学大学院音楽研究科修士課程修了（1991）、東京藝術大学大学院博士課程単位取得退学（1994）【職歴】国立民族学博物館第2研究部助手（1994）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助手（1998）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助教授（2003）、国立民族学博物館文化資源研究センター助教授（2004）【学位】芸術学修士（東京藝術大学大学院 1991）【専攻・専門】民族音楽学、東南アジアとくにインドネシア西ジャワのスダ伝統音楽についての研究【所属学会】東洋音楽学会、日本音楽学会、日本ポピュラー音楽学会

【主要業績】

[論文]

福岡正太

2003 「音楽からみた『インドネシア民族』の形成」端 信行編『民族の二〇世紀』（二〇世紀における諸民族文化の伝統と変容9）pp.144-160, 東京：ドメス出版。

2003 「小泉文夫の日本伝統音楽研究——民族音楽学研究の出発点として」『国立民族学博物館研究報告』28(2)：257-295。

Fukuoka, S.

2003 Gamelan Degung: Traditional Music in Contemporary West Java. In S. Yamashita and J. S. Eades (eds.) *Globalization in Southeast Asia: Local, National, and Transnational Perspectives*, pp.95-110. New York and Oxford: Berghahn Books.

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

映像音響メディアが伝統的音楽芸能に与える影響に関する研究

・研究の目的、内容

音声および映像の記録技術は、学術的な記録および分析の手段として、音楽芸能研究において一定の役割を果たしてきた。民族音楽学の誕生と展開は、映像音響メディアの影響を抜きにして論じることができない。一方、20世紀を通じて、映像音響メディアは、人々が音楽芸能を楽しむ媒体として普及定着し、メディアの変化が音楽芸能の展開に大きな影響を及ぼすようになった。さらに、手軽なビデオ撮影機器の普及により、音楽芸能の伝承や創造、研究の過程において、関係者が自ら映像を作成して発表するようになり、映像は音楽芸能にかかわる活動に不可欠なものとして組み込まれつつある。こうした状況の中、研究機関等にとって、映像音響資料をいかに活用可能な形でアーカイブ化するかが大きな課題となってきている。本研究は、様々な位相における音楽芸能と映像音響メディアの結びつきについて明らかにすることを目的としている。

具体的には、①20世紀前半から半ばの日本とインドネシアにおいて、レコードやラジオなどのメディアの登場が音楽にもたらした変化を明らかにする研究に取り組む。②鹿児島県徳之島の芸能を例として、芸能の映像記録を音楽芸能の関係者と記録者との相互関係を築くメディアとして位置づけ、映像記録が音楽芸能の上演や伝承に与える影響について研究する。③楽器資料に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築を通じて、標本資料と映像音響資料のデータを効果的に結びつけ、資料に関わる多様な知識を交換し共有することを目指す。

・成果

①について、共同研究「東南アジアのポピュラーカルチャー——アイデンティティ、国家、グローバル化」（代表者：福岡まどか）の成果として刊行予定の論文集のための論文執筆を進めた。1930年代から40年代初頭のオランダ領東インドにおけるラジオ放送について、近年、研究が進みつつある。それらを参考としつつ、ラジオ

で放送された西ジャワの伝統音楽について検討した。現在「伝統音楽」とされる音楽も、西洋芸術音楽や流行音楽の影響を積極的に受け入れ「モダンな」レパートリーを生み出していたことが明らかになった。②について、フォーラム型情報ミュージアムの成果として、「徳之島の唄と踊り」を構築し、登録ユーザーへの公開をおこなった。今後、徳之島において公開をおこない、民俗芸能の伝承における映像資料の活用の可能性を実践的に明らかにすることが課題である。③について、ホルンボステル=ザックスによる楽器分類コードを付与した楽器資料のデータベースの構築を進めた。このシステムは、多くの研究者と楽器資料の情報を共有し、情報の充実をはかることを目的としている。このシステムを使用して楽器資料に情報を付与する実験として、2つの個人蔵楽器コレクションを取り上げてデータを作成していくこととし、その準備を進めた。これらの資料については、データ作成後、民博で寄贈受入をおこなう予定である。

◎出版物による業績

[論文]

福岡正太

- 2016 「書評：トマス・トゥリノ著、野澤豊一・西島千尋訳『ミュージック・アズ・ソーシャル・ライフ——歌い踊ることをめぐる政治』」『ポピュラー音楽研究』20：74-79。
- 2016 「民族誌的知見の形成と共有の場としてのフォーラム型情報ミュージアム（コメント）」伊藤敦規編『伝統知、記憶、情報、イメージの再収集と共有——民族誌資料を用いた協働カタログ制作の課題と展望』（国立民族学博物館調査報告137）pp.101-104、大阪：国立民族学博物館。
- 2016 「無形文化遺産としての音楽」徳丸吉彦監修・増野亜子編『民族音楽学12の視点』pp.74-84、東京：音楽之友社。
- 2016 「資料としての楽器」徳丸吉彦監修・増野亜子編『民族音楽学12の視点』pp.85-87、東京：音楽之友社。

[その他]

福岡正太

- 2017 「国立民族学博物館の収蔵品10 東南アジアにおけるゴング」『文部科学教育通信』404：2。

◎映像音響メディアによる業績

・マルチメディア番組

吉田ゆか子構成・制作監修、福岡正太制作監修

- 2017 『息づく仮面——バリ島の仮面舞踊劇トバンと音楽』大阪：国立民族学博物館。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年11月19日 「コミュニティを支える芸能」無形文化遺産国際シンポジウム『技と心を受け継ぐ』アジア太平洋無形文化遺産研究センター・堺市・文化庁主催、サンスクエア堺

・研究講演

2016年10月22日 「バンドゥンからの音便り」インドネシア・スンダ地方の伝統音楽レクチャー&コンサート『楽園から届いた音・懐かしさと癒しの時間——バンドゥンからの音便り』静岡文化芸術大学

・広報・社会連携活動

2016年9月1日 講義「フォーラム型情報ミュージアムによる映像記録の公開——徳之島の芸能を例に」東京芸術大学音楽学部楽理科研究旅行、国立民族学博物館

2016年9月2日 「世界のリズムの多様性（1）ジャワ島のガムラン——おしりで合わせるリズム」大阪府高齢者大学「世界の文化に親しむ科」大阪府社会福祉会館

2016年9月9日 「世界のリズムの多様性（2）足し算のリズム」大阪府高齢者大学「世界の文化に親しむ科」大阪府社会福祉会館

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員（1名）

・大学院ゼミでの活動

論文ゼミ

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

フォーラム型情報ミュージアムプロジェクト「楽器に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」代表者

◎社会活動・館外活動

・非常勤講師

大谷大学「民族誌講義」「社会学研究」、広島市立大学「音楽人類学Ⅰ」「音楽人類学Ⅱ」（集中講義）

山本泰則 [やまもと やすのり] ————— 准教授

【学歴】大阪大学基礎工学部生物工学科卒（1978）、大阪大学大学院基礎工学研究科博士前期課程修了（1980）、大阪大学大学院基礎工学研究科博士後期課程退学（1983）【職歴】国立民族学博物館第5研究部助手（1983）、国立民族学博物館民族学研究部助手（1998）、国立民族学博物館民族学研究部助教授（1998）、国立民族学博物館文化資源研究センター助教授（2004）【学位】工学修士（大阪大学大学院基礎工学研究科 1980）【専攻・専門】博物館情報学【所属学会】情報処理学会、電子情報通信学会、情報知識学会

【主要業績】

[論文]

山本泰則

2011 「国立国会図書館PORTAと人間文化研究機構 統合検索システムの連携について」『人間文化情報資源共有化研究会報告集』2：53-68。

Yamamoto, Y., F. Adachi and K. Hachimura

2013 Common Metadata to Search for Non-digital Cultural Resources in Heterogeneous Databases. *Proceedings of the International Conference on Culture and Computing 2013*, pp.225-224. IEEE Computer Society (CD-ROM) [査読有].

宇陀則彦・山田太造・村田良二・山本泰則

2012 「転写資料記述のための概念モデルの特徴と課題」『国立歴史民俗博物館研究報告』176：239-266。[査読有]

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

標本資料名と資料情報に関する研究

・研究の目的、内容

民博が所蔵する標本資料には、受入時になんらかの名称が付与される。しかし、民族誌資料には自然史標本の学名のような世界共通の命名ルールがあるわけではなく、また館内で用語を統制していないため命名は収集者や資料管理者に任されている。そのため資料名には、資料のもつ属性はもちろん、収集者の視点が色濃く反映されているはずである。本研究では、標本資料名を分析し、名称と標本資料の属性情報の関連性について研究を行う。

今年度は、民博が所蔵する台湾関連資料（旧文部省資料館資料、旧東大人類学教室資料、瀬川コレクション）を対象にし、資料名から見た各コレクションの構成、コレクション間の命名法の特徴、コレクションを越えた共通性などについて分析を行う。

・成果

上記の目的で用いられる統計処理手法をはじめとする各種分析手法について文献調査をおこなうとともに、データ処理環境をPC上に整備した。また、比較対照とするため、民博の所蔵標本資料全体について、基本的な分析をおこなった。標本資料目録データベースおよび標本資料詳細情報データベースに収録されている情報をコメタデータに変換することにより構造を共通化かつ単純化し、エレメントごとの値の分布、レコードごとのとりうる値の組合せを分析することにより、情報の特性に関する基本データを得た。

◎出版物による業績

[その他]

山本泰則

2016 「『ラフラン諸島』ってどこ？」『月刊みんぱく』40(12)：20。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・みんぱくウィークエンド・サロン

2016年11月6日 「アンケートが語るビデオトークとみんぱく電子ガイド」第444回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

川瀬 慈 [かわせ いつし]————— 助教

1977年生。【学歴】立命館大学文学部卒（2001）京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程修了（2010）【職歴】日本学術振興会PD（2007）、マンチェスター大学グラナダ映像人類学センター研究員（2010）、ベルギーSoundImageCulture 客員講師（2011）、国立民族学博物館文化資源研究センター助教（2012）、ハンブルグ大学アジア・アフリカ研究所Hiob Ludolf 客員教授（2013）、ブレーメン大学人類学・文化調査学部客員教授（2014）【学位】博士（地域研究）（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 2010）、修士（地域研究）（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究科 2007）【専攻・専門】アフリカ研究、映像人類学、民族誌映画制作【所属学会】英国王立人類学協会、日本映像民俗学の会、日本文化人類学会、日本アフリカ学会、日本ナイル・エチオピア学会

【主要業績】

[共編]

鈴木裕之・川瀬 慈編

2015 『アフリカン・ポップス！——文化人類学からみる魅惑の音楽世界』東京：明石書店。

[論文]

川瀬 慈

2016 「エチオピアの音楽職能集団アズマリの職能機能についての考察」『国立民族学博物館研究報告』41(1)：37-78。

2015 「コミュニケーションを媒介し生成する民族誌映画——エチオピアの音楽職能集団と子供たちを対象とした映画制作と公開の事例より」『文化人類学』80(1)：6-19。

【受賞歴】

2013 第19回日本ナイル・エチオピア学会高島賞

2008 最も革新的な映画賞 Premio per il film più innovative イタリア・サルデーニャ国際民族誌映画祭

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

コミュニケーションを媒介し生成する民族誌映画の研究

・研究の目的、内容

本研究の目的は、自身の映画制作や上映活動を事例に、コミュニケーションによって生成する人類学的な映像実践を示すことにある。報告者は、撮影者の存在や行動を前景化し、撮影の過程でかわされる撮影者・被写体間の議論を映像の中であえて開示し、撮影プロセスを明示する方法論を発展させてきた。民族誌映画においては、観察型、解説型の映画様式が重視され、制作中の撮影者・被写体間の相互作用や、映画を視聴する幅広いアクターの役割が軽視される傾向にあった。そのようななか本研究では、民族誌映画を固定的で完結した表象としてではなく、視聴する人々とのたえまない相互作用のなかに位置づける。さらにその相互作用が、研究の新たな展開を生成させる創発的な営みであることを自身の民族誌映画制作の実践や映画公開の活動を基軸に提示する。

・研究成果

平成28年度は、本研究課題の成果を、ブレーメン大学（6月）、ゲーテ大学フロベニウス研究所（7月）、さらに、中国、山東大学（12月）、エチオピア、メケレ大学（1月）、韓国、木浦大学（2月）、韓国外国語大学（2月）のセミナーや国際シンポジウムにおいて、報告者の研究映像の上映とともに行った。そこでは、撮影者・被写体間の相互作用を前提とする民族誌映画の制作方法論、さらに作品の公開をめぐる視聴者との議論を通して生まれる、研究者と調査対象の人々との関係性の変化についての考察を発表し各機関の研究者と議論を積み重ねた。11月には民博において開催された台湾文化光点計画上映会・シンポジウム『民族誌映画にみる文化へ

の視点——台湾、日本、ノルウェー、エチオピアの作品より』の企画にかかわり、台湾原住民やその他の人類学者とともに、被写体の社会との協働や、映像の公開を積み重ねることによって創出される研究者の新たな社会関係をテーマに議論を行うことができた。

科研費若手B『アフリカの無形文化保護における民族誌映画の活用』の研究のため、1月にエチオピア連邦民主共和国において調査を行った。本調査では、エチオピア北部の地域社会において音楽を担う職能集団の活動を対象に報告者が制作した民族誌映画を被写体と視聴するなかで、インフォーマントとともに、映像を通じた自文化表象の理想について議論を交わすことができた。以上の調査で得られたデータを整理し、今後まとめ、フロベニウス研究所が発行する学術雑誌 *Studien zur Kulturkunde* や映像人類学系の雑誌に発表する。

◎出版物による業績

[論文]

川瀬 慈

2016 「エチオピアの音楽職能集団アズマリの職能機能についての考察」『国立民族学博物館研究報告』41(1) : 37-78。

[共著]

坂本龍一・塚田健一・分藤大翼・川瀬 慈ほか

2016 『Tradition Music in Africa. Commons: Schola vol.11 (Kenichi Tsukada & Ryuichi Sakamoto Selections)』Commons Schola Kindle 版, 東京: エイベックス・ミュージック・クリエイティヴ。

◎映像音響メディアによる業績

・映像作品制作

川瀬 慈

2016 『僕らの時代は (エチオピアの音楽職能集団アズマリ)』(日本語)。

2017 『めばえる歌——民謡の伝承と創造』(日本語)。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年7月11日 ‘Ethnographic Filmmaking in Ethiopia.’ 国際会議 “Vortrag im Rahmen des Colloquiums von Professor Kohl und der Vorlesungsreihe ‘Frankfurter Südäthiopien Forschung- Eine Retrospektive.’” Frobenius-Institut der Johann Wolfgang Goethe-Universität, ドイツ

2016年6月24日～6月27日 ‘New Horizon of Anthropological Filmmaking in Japan.’ 国際会議 “2016 AAS-in-ASIA – Association for Asian Studies.” 同志社大学

2016年7月4日 ‘Current Trends in Japanese Anthropological Filmmaking.’ 国際会議 “Current Trends in Japanese Anthropological Filmmaking.” Institut für Ethnologie und Kulturwissenschaft, Uni Bremen, ドイツ

2016年12月14日 ‘The New Horizon of Anthropological Filmmaking in the Era of Sensory Turn.’ “The Visual Anthropology Seminar.” 山東大学、中国

2017年2月8日 「日本とエチオピアの門付芸能の映像人類学視点からの比較研究」『日・韓 多島海の島の人々の生活と民俗』木浦大学 木浦 CAMPUS、韓国

2017年2月9日 「Visual Anthropological Approaches to the Study of Africa —— Cases from Recent Ethnographic Films from Japan」韓国外国語大学アフリカ研究所セミナー、“韓国外国語大学アフリカ研究所 (IAS) Global (Yongin) Campus

◎調査活動

・海外調査

2016年6月29日～7月19日—ドイツ (ドイツの映像人類学研究の動向調査)

2017年1月4日～1月18日—エチオピア (エチオピア北部における音楽職能集団を対象にした映像人類学研究)

2017年2月7日～2月11日—韓国 (「朝鮮半島の文化」に関する映像資料の開発と製作: 韓国国立民俗博物館との交流事業 (映像資料収集))

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

プレーメン大学人類学・文化調査学部客員教授 (集中講義 “Theory and Practice of Visual Anthropology” 担当)、ゲーテ大学・フロベニウス研究所客員教授、山東大学哲学与社会発展学院人類学系客員教授 (集中講義 “Theory and Practice of Visual Anthropology” 担当)、メケレ大学社会科学・言語研究科・音楽ビジュアルア

ーツ専攻修士学位論文審査（集中講義担当 “The Art of Audiovisual Storytelling” 担当）

寺村裕史 [てらむら ひろふみ] 助教

1977年生。【学歴】岡山大学文学部歴史文化学科（考古学履修コース）卒（2000）、岡山大学大学院文学研究科歴史文化学専攻修了（2002）、岡山大学大学院文化科学研究科人間社会文化学専攻修了（2005）【職歴】同志社大学文化情報学部実習助手（2005）、総合地球環境学研究所研究部プロジェクト研究員（2007）、国際日本文化研究センター研究部機関研究員（2011）、国際日本文化研究センター文化資料研究企画室特任准教授（2013）、国立民族学博物館文化資源研究センター助教（2015）【学位】博士（文学）（岡山大学大学院 2005）、修士（文学）（岡山大学大学院 2002）【専攻・専門】情報考古学、文化情報学【所属学会】考古学研究会、地理情報システム学会、日本情報考古学会

【主要業績】

[単著]

寺村裕史

2014 『景観考古学の方法と実践』東京：同成社。

[論文]

寺村裕史

2009 「古墳のデジタル測量と空間データ処理——岡山市造山古墳のデジタル測量の成果から」『考古学研究』56(3)：92-101, 岡山：考古学研究会。

2006 「古墳築造場所の選択と眺望分析」宇野隆夫編著『実践 考古学 GIS ——先端技術で歴史空間を読む』pp.204-223, 東京：NTT 出版。

【受賞歴】

2007年 日本情報考古学会優秀賞（日本情報考古学会）

【2016年度の活動報告】

・研究課題

墳墓から見たインダス文明期の社会景観

・研究の目的、内容

本研究は、インダス文明期の社会構造理解を深化するために、インダス文明期の墓に焦点を当て、その形状・立地場所や埋葬形態などを、GIS（地理情報システム）を分析に援用しながら当時の社会構造と関連付けて解明することを目的とする。

今年度は、3年計画の最終年度にあたるため、インド・グジャラート州において昨年度までに実施してきた、墓地遺跡であるダネッティ遺跡での地中レーダー（GPR）探査結果の解析ならびに地形測量の成果をまとめるとともに、カーンメール遺跡での2年間（2シーズン）の発掘調査成果を、『発掘調査概要報告書』として、刊行する予定である。

また、上記成果の公開に向けてデータ分析を進めるとともに、結果の検証ならびに、学会誌への投稿の準備なども並行しておこなう。

なお、本研究は、科学研究費助成事業（一部基金）[基盤研究（B）・海外学術調査]、課題名：「墳墓からみたインダス文明期の社会景観」（研究代表者：寺村裕史、H.26-H.28）にともなう研究の一部である。

・成果

本年度は、科研費 [基盤研究（B）・「墳墓からみたインダス文明期の社会景観」] の研究活動の一部として、研究協力者であるアジットブラサード教授と共同発表という形で、7月にイギリスで開催された23rd EASAA [European Association for South Asian Archaeology and Art] Conference (2016, Cardiff, England) において、これまでのダネッティ遺跡での調査成果を中心に “Cenotaphs of Dhaneti, Kachchh, and their Cultural Context” という題目で研究発表をおこなった。

また、ダネッティ遺跡での地中レーダー（GPR）探査結果をもとに、アジットブラサード教授を中心とする M.S. University of Baroda のチームが、2017年1月～2月にかけてダネッティ遺跡の発掘調査を実施し、その調査に参加すると共に、土坑墓の3次元計測など出土遺構のデータ記録作業を実施した。

ダネッティ遺跡における墓の形態としては、当該時期のある程度一般的な特徴を持つといえるが、出土した

土器は、カッチ地方やグジャラート州北部で報告されている土器とは様相が異なる。そうした盛期ハラッパー文化期よりも少し古い時期の埋葬形態や副葬品としての土器に関する貴重な情報を得ることができたことは、本研究課題にとっても有用な成果であり、今後論文等にまとめ、発表していきたいと考えている。

なお、本研究は、科学研究費助成事業（一部基金）[基盤研究（B）・海外学術調査]、課題名：「墳墓からみたインダス文明期の社会景観」（研究代表者：寺村裕史、H.26-H.28）にともなう研究の一部として実施した。

◎出版物による業績

[論文]

寺村裕史

2016 「古墳の三次元計測におけるデータ処理方法とその課題」城倉正祥・平原信崇・渡邊玲編『3D考古学の挑戦——考古遺物・遺構の三次元計測における研究の現状と課題』pp.33-37, 東京：早稲田大学総合人文科学研究センター。

Begmatov, A., T. Uno, A. Berdimuradov, G. Bogomolov, H. Teramura and T. Usami

2016 Excavations of the Uzbek-Japanese Expedition on the Site of Kafirkala. *Archaeology of Uzbekistan during the years of the independence: Progress and Perspectives*, pp.116-118. Samarkand: Institute of Archaeology Academy of Sciences Republic of Uzbekistan.

[その他]

寺村裕史

2016 「オアシス都市の暮らし」『月刊みんぱく』40(7)：4。

2016 「ウズベキスタンの都市遺跡発掘現場より」『季刊民族学』158：61-74, 大阪：千里文化財団。

2017 「顔・手などを拭く——手ぬぐいとタオル」上羽陽子監修『教科書に出てくる「くらしの中の和と洋」[衣]』（日本と世界のくらし どこが同じ？どこがちがう？）pp.42-45, 東京：汐文社。

◎映像音響メディアによる業績

・電子ガイドの制作・監修

寺村裕史

2016 電子ガイドNo.552「ウズベキスタンの民家の台所」（「Kitchen from a Home in Uzbekistan」）（日本語・英語）

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2016年11月26日 「三次元データの将来」国際ワークショップ『台湾資訊跨國多語言交流平台（台湾資料の国際多言語交流プラットフォーム）』行政院台湾原住民文化發展中心、屏東、台湾

2017年3月26日 「インダス文明期の遺跡分布の時系列動態と環境変化」平成29年度特別研究シンポジウム『歴史生態学から見た人と生き物の関係』国立民族学博物館

・共同研究会での報告

2016年6月26日 「考古学とオープンサイエンス——フィールドで取得したデータをどのように扱うのか」『考古学の民族誌——考古学的知識の多様な形成・利用・変成過程の研究』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年7月9日 'Cenotaphs of Dhaneti, Kachchh, and their Cultural Context' (Potentavida Ajithprasad, Yadubirsingh Rawat, Hirofumi Teramura and Toru Kishida) "EASAA: European Association for South Asian Archaeology and Art, 23th biennial conference." Welsh School of Architecture, Cardiff University. Cardiff, Wales, UK.

2016年9月14日 'Excavations of the Uzbek-Japanese Expedition on the Site of Kafirkala' (Alisher Begmatov, Takao Uno, Tomomi Murakami, Amridin Berdimuradov, Gennadiy Bogomolov, Hirofumi Teramura and Tomoyuki Usami) "Archaeology of Uzbekistan during the years of the independence: Progress and Perspectives." Institute of Archaeology Academy of Sciences Republic of Uzbekistan, Samarkand.

2016年9月17日 'Cuneiform Documents in the National Museum of Iran - Application of 3D Modelling and Photographs to Cuneiform Sources.' (Wakaha Mori, Hirofumi Teramura and Shunsuke Watanabe) "Japan-Iran Symposium of Advanced Technology for Documentation of Cultural Heritage" National Museum of Iran, Tehran.

2016年10月16日 「古墳の三次元計測におけるデータ処理方法とその課題」2016年度「早稲田文化芸術週間シン

ポジウム』『3D考古学の挑戦——考古遺物・遺構の三次元計測における研究の現状と課題』
早稲田大学

・展示

2016年本館展示新構築「中央・北アジア」

2016 「トピックス 中央・北アジア『都市遺跡の発掘調査』『国立民族学博物館展示ガイド』

・広報・社会連携活動

2016年8月5日 「大阪フィールドワーク・夏休みの自由研究、探究活動の課題設定・解決にむけて」京都市立
堀川高等学校（依頼講義）、国立民族学博物館

2017年2月10日 「シルクロードの古代都市遺跡の発掘調査現場より」けやきの森市民大学・国立民族学博物館
提携講座、高槻市生涯学習センター

・みんぱくウィークエンド・サロン

2016年7月24日 「ウズベキスタンの人々の暮らしと食文化——遺跡の発掘調査から探る」第431回みんぱくウ
ィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎調査活動

・国内調査

2017年3月10日～3月12日—岡山県岡山市北区（佐古田山古墳・津倉古墳の三次元計測ならびに発掘調査）

・海外調査

2016年8月28日～9月17日—ウズベキスタン（都市遺跡における埋葬形態に関する比較調査研究、及び資料収
集）

2016年11月25日～11月29日—台湾（フォーラム型情報ミュージアム（台湾関連資料）構築のために現地ワーク
ショップの開催と博物館資料の情報化に関する調査）

2017年2月13日～2月25日—インド（インダス文明期の墓地遺跡における発掘調査、及び墳墓に関する情報・
資料の収集）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他
のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費助成事業（一部基金）（基盤研究（B）・海外学術調査）「墳墓からみたインダス文明期の社会景観」
研究代表者、科学研究費補助金（基盤研究（B））「前方後円墳の三次元計測とそれにもとづく設計原理の検討」
（研究代表者：新納泉）研究分担者

◎社会活動・館外活動等

・非常勤講師

奈良大学文学部文化財学科「文化財情報学Ⅱ」

国際学術交流室

西尾哲夫 [にしお てつお]————— 室長（併）、副館長（研究・国際交流担当）、研究戦略センター教授

印東道子 [いんとう みちこ]————— 兼：民族社会研究部教授

韓 敏 [ハン ミン]————— 兼：民族社会研究部教授

齋藤 晃 [さいとう あきら]————— 兼：先端人類学研究部教授

Matthews, Peter, Joseph [マシウス、ピーター・ジョセフ]————— 兼：民族社会研究部教授

山中由里子 [やまなか ゆりこ]————— 兼：民族文化研究部准教授

梅棹資料室

吉田憲司 [よしだ けんじ]————— 室長 (併)、副館長 (企画調整担当)、文化資源研究センター教授

機関研究員

内田吉哉 [うちだ よしや]————— 研究員

1971年生。【学歴】 関西大学文学部史学地理学科卒業 (1996)、関西大学大学院文学研究科史学専攻博士課程前期課程修了 (1999)、関西大学大学院文学研究科史学専攻博士課程後期課程修了 (2008) 【職歴】 関西大学第一高等学校非常勤講師 (1999-2001)、箕面市文化財総合調査団調査員 (2000-2002)、財団法人八尾市文化財調査研究会調査員 (2002)、吹田市立吹田南小学校教員補助員 (2003-2004)、上宮高等学校非常勤講師 (2004-2005)、関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センターリサーチ・アシスタント (2005-2008)、関西大学非常勤講師 (2008-現在)、関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター特別任用研究員 (2008-2010)、関西大学大阪都市遺産研究センター特別任用研究員 (2010-2015)、大阪商業大学非常勤講師 (2012-2014)、関西大学研究推進部非常勤研究員 (2015-2016)、京都市立堀川高等学校非常勤講師 (2015-2016)、国立民族学博物館機関研究員 (2016) 【学位】 修士 (文学) (関西大学1999)、博士 (文学) (関西大学2008) 【専攻・専門】 歴史学、文化遺産学、大阪地域研究、デジタル人文学 【所属学会】 情報処理学会 (人文科学とコンピュータ研究会)、日本民俗学会、大阪歴史学会、関西大学史学地理学会

【主要業績】

[著書]

内田吉哉

2015 『豊臣期大坂図屏風』の謎を解く』(大阪都市遺産研究叢書別集10) 大阪：関西大学大阪都市遺産研究センター。

林 武文・内田吉哉

2014 『牧村史陽氏旧蔵写真』目録』(大阪都市遺産研究叢書別集6) 大阪：関西大学大阪都市遺産研究センター。

高橋隆弘・イサベル 田中 ファン ダーレン・内田吉哉

2010 『新発見 豊臣期大坂図屏風』大阪：清文堂出版。

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

人文社会科学分野の学術コンテンツの作成と公開に関する実証的研究

・研究の目的、内容

本研究は、人文社会科学分野で活用される研究資料、とりわけ写真や絵画等の非文字資料について、そのデータ整理の手法および、非文字資料を用いた学術研究の成果を学校教育、社会教育に還元するためのコンテンツ手法を開発することを目的とする。

本研究の特徴は、非文字資料の中でも印画紙に焼き付けされた、いわゆる「紙焼き写真」を研究の対象とする点にある。ネガ・ポジ・スライドとして残された写真資料の場合とは異なり、紙焼き写真の取り扱い、これまでにあまり顧みられることがなかった。本研究では、紙焼き写真資料のデジタルアーカイブ化の手法および、原資料 (紙焼き写真) の保管手法、さらにデジタル化された写真資料を活用するためのデジタルコンテンツ手法についての実証的研究を行う。

・成果

2016年度は、大阪市史編纂所が所蔵する写真資料の調査およびデジタルアーカイブ化の実証的研究を行った。大阪市史編纂所には、昭和前期～中期の大阪の史跡・名所等を撮影した写真資料が保管されている。これらは、大阪地域の郷土史研究家が撮影したもので、すべて「紙焼き写真」として残されている。これらの写真資料について、以下の調査・研究成果を残した。

- 1) 資料目録の作成とデジタルアーカイブ化を実施した。紙焼き写真はネガ・ポジ・スライド等の形態の資料とは異なり、印画紙裏面にも研究情報が残されているケースが多い。そこで印画紙の表裏両面のデータをデジタルスキャンとして記録した。また今回の調査では、デジタルスキャンに際して、印画紙そのものを「モノ資料」と捉えることを新たに提唱し、印画紙の物理的な全容をスキャン範囲に含める手法を取った。これにより、スキャンされたデジタルデータを元に所蔵写真の印画紙サイズをPC上で精密に計測することが可能になった。これらの新たに獲得が可能になったデータは、資料目録に反映し、資料の所蔵者である大阪市史編纂所に提供することとなった。
- 2) 原資料（紙焼き写真）の整理および保管作業を実施した。紙焼き写真の保管手法については、かつて関西大学における写真資料の調査研究の際に確立した、市販の「工用アルバム」を活用する方法を用いた。この方法による利点として、接着剤等を使用せずにアルバム形式に固定することができるため原資料を損傷・劣化させることが少ないこと、市販の資材を用いて安価に整理が可能となること、散逸しやすい紙焼き写真を効率的に保管できることが挙げられる。資料の所蔵者である大阪市史編纂所において、これまで古文書等の文字資料の保管については体系化された手法が既に確立されていたが、写真資料の整理・保管は確立されておらず、今回の調査を通じて写真資料の保管手法に関する提言を行った。
- 3) 資料を活用するためのデジタルコンテンツを試作し、資料の所蔵者である大阪市史編纂所に提供した。写真等の画像資料では、資料点数が多い場合にはデータベースを構築することが望ましいが、今回の調査では、大阪市史編纂所に所蔵される写真資料の点数が120点程度と比較的少ないため、より一覧性に優れた方式として、HTML技術によるデジタルアルバム形式でのコンテンツ化を行った。この方式によるコンテンツ制作の利点として、データベースを構築する場合に比べて環境に依存せず汎用性が高いこと、資料所蔵者のインターネット環境によっては、そのままウェブ上で公開できるコンテンツとして転用できることが挙げられる。

これらの写真資料の調査・研究成果については、2017年度に大阪市史編纂所が刊行する出版物『大阪の歴史』に論文を投稿し、2018年度に掲載される予定となっている。

◎出版物による業績

[論文]

内田吉哉

2017 「寝具 布団とベッド」日高真吾監修『教科書に出てくる「くらしの中の和と洋」住編』（日本と世界のくらし どこが同じ？どこがちがう？）pp.26-29, 東京：汐文社。

[その他]

内田吉哉

2016 「土地に名を刻む」『月刊みんぱく』40(11)：20。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・民博研究懇談会

2016年8月10日 「写真資料のデジタル化とその地域研究における活用——昭和中期の大阪を撮影した写真資料による事例」第273回民博研究懇談会

・展示

2016年度文化資源計画事業 年末年始展示イベント「とり」展示監修、国立民族学博物館

・広報・社会連携活動

2016年6月19日 音楽の祭日 実行委員会メンバー、国立民族学博物館

◎調査活動

・国内調査

2016年8月9日～2017年1月31日—大阪（大阪市史編纂所が所蔵する写真資料の調査及びデジタルアーカイブ化）

◎社会活動・館外活動等

・他大学の客員、非常勤講師

関西大学非常勤講、「日本の文化と人間を考える」（全学共通教養科目）、大学コンソーシアム大阪センター科目「大阪の都市と文化」

1980年生。【学歴】国際基督教大学教養学部人文科学科卒業（2004）、筑波大学大学院芸術研究科世界遺産専攻修了（2006）、筑波大学大学院人間総合科学研究科世界文化遺産学専攻単位取得満期退学（2009）【職歴】東京文化財研究所客員研究員（2009-2010）、国際協力機構専門家（2010-2014）【学位】修士（学術）（筑波大学大学院 2006）【専攻・専門】文化財保存科学、中国仏教美術史、文化遺産学【所属学会】文化財保存修復学会、日本中国考古学会、日本文化財科学科、東アジア文化遺産保存学会、国際文化財保存学会（International Institute for Conservation of Historic and Artistic Works）

【主要業績】

[論文]

末森 薫

- 2016 「敦煌莫高窟早期窟千仏図の規則的描写法——第二五四窟の空間設計における千仏図の機能」佛教藝術学会編『佛教藝術』347：9-37，東京：毎日新聞出版。
- 2017 「敦煌莫高窟の西魏代における石窟空間構成——千仏図の描写設計を中心として」『国立民族学博物館研究報告』41(2)：127-193。

[共著]

麦積山石窟芸術研究所・筑波大学世界遺産専攻編

- 2011 『麦積山石窟環境と保護調査報告書』北京：文物出版社。

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

国立民族学博物館における文化資源の保存・管理システムの構築に関わる実証的研究

・研究の目的、内容

本研究では、国立民族学博物館に展示・収蔵される30万点以上の資料を安定的かつ長期的に保存・活用するための恒常的な管理システムを構築することを目的に、システム構築に係る基礎実験や各種の科学的手法を用いた調査により、資料の保存・管理に関する実証的な検証を行う。2016年度は主に下記4点について、調査・研究を実施した。

- 1) 環境管理や有害生物対策、収蔵改善等による博物館資料の恒久的保存システムの構築に係る実践的研究活動
- 2) 光学撮影法を応用した博物館資料等の調査
- 3) 各種分析機器を用いた博物館資料等の材質調査
- 4) 発光ダイオード（LED）光源による展示空間照明の検証調査

・成果

- 1) 国立民族学博物館が有する有形資料の恒久的な保存・管理システムの構築を目的として、展示場や収蔵庫における温湿度等の環境管理、博物館資料に損傷を与える虫やカビ等の有害生物のモニタリングおよび対策、博物館資料の収蔵改善の試み等に携わり、有形資料の保存・管理に必要となるデータを蓄積した。本研究成果の一部について、2017年9月にデンマーク・コペンハーゲンで開催された第18回国際博物館会議・保存国際委員会（ICOM-CC）にて共同で発表。
- 2) 偏光光源や近紫外・可視光・近赤外領域の狭域帯LED光源、受光の特性や波長域を制御する各種の光学フィルターを用いた光学撮影を応用し、民俗資料や民族資料、絵画資料を対象とした各種の調査を実施した。本研究成果について、2016年6月に東北芸術工科大学（山形県山形市）で開催された日本文化財科学会第34回大会、2016年7月に金沢歌劇座（石川県金沢市）で開催された文化財保存修復学会第39回大会、そして2017年8月に復旦大学（中国上海市）で開催された2017上海国際文化遺産シンポジウム（第6回東アジア文化遺産シンポジウム）にて発表。
- 3) 国立民族学博物館が所有する各種の分析機器（ガスクロマトグラフ質量分析計（GC/MS）、フーリエ変換赤外分光光度計（FR-IR）、蛍光X線分析装置（XRF）、分光測定器等）を用いて、資料や資料収蔵に用いる資材、資料に付着した未知物質等の材質分析を行い、物性の同定や推定を行った。本研究の成果の一部について、2016年7月に金沢歌劇座（石川県金沢市）で開催された文化財保存修復学会第39回大会にて

共同で発表。

- 4) 2015年度に国立民族学博物館の展示場に導入されたLED照明が、展示空間においてどのような特性を有するか検証することを目的として、照度分布図や画像として記録した。

◎出版物による業績

[論文]

末森 薫

- 2016 「敦煌莫高窟早期窟千仏図の規則的描写法——第二五四窟の空間設計における千仏図の機能」 佛教藝術学会編『佛教藝術』347:9-37, 東京:毎日新聞出版。[査読有]
- 2016 「敦煌莫高窟北朝前期における石窟造営の展開——千仏図の描写設計を中心として」日本中国考古学会編『中国考古学』16:279-301。[査読有]
- 2017 「敦煌莫高窟の西魏代における石窟空間構成——千仏図の描写設計を中心として」『国立民族学博物館研究報告』41(2):127-193。[査読有]

Sonoda, N., S. Hidaka and K. Suemori

- 2016 Common challenges for ethnographic and modern art collections: Pest control for large and complex objects containing new materials. *Saving the Now: Crossing Boundaries to Conserve Contemporary Works, The International Institute for Conservation of Historic and Artistic Works (IIC) 2016 Los Angeles Congress Preprints. Studies in Conservation* 61(2): 329-331. [査読有]

[その他]

末森 薫

- 2016 「敦煌莫高窟を彩る千仏壁画」『季刊民族学』158:50-60。
- 2016 「ほとけの名前」『月刊みんぱく』40(5):20。
- 2016 「考える舌36 ナツメヤシの果実」『京都新聞』4月20日。
- 2016 「カナダの博物館の事例にみる予防保存の実践的な活動と資料保存の課題」『文化財保存修復学会第38回大会研究発表要旨集』pp.74-75。
- 2017 「仏教美術にあらわされたビーズ装飾」『特別展「ビーズ」図録』p.54, 大阪:国立民族学博物館。

末森 薫・園田直子・日高真吾・和高智美・河村友佳子・橋本沙知

- 2016 「狭帯域LED光源を用いた偏光撮影による彩色材料光学情報の可視化」『日本文化財科学会第33回大会 研究発表要旨集』pp.290-291。

園田直子・日高真吾・末森 薫・村田忠繁・奥村泰之・河村友佳子・橋本沙知・和高智美

- 2016 「国立民族学博物館における展示照明のLED化——民族資料の展示を想定した照明実験」『文化財保存修復学会第38回大会研究発表要旨集』pp.114-115。

日高真吾・園田直子・末森 薫・西澤昌樹・松田万緒・河村友佳子・橋本沙知・和高智美・木川りか・川越和四・富岡康浩

- 2016 「太陽光を利用した高温処理システム開発——殺虫条件を満たすための処理空間の創出を目指した試験について」『文化財保存修復学会第38回大会研究発表要旨集』pp.134-135。

二俣 賢・日高真吾・末森 薫・和高智美・河村友佳子・橋本沙知・芳村健治

- 2016 「二酸化炭素処理による発泡体の形状変化について」『文化財保存修復学会第37回大会研究発表要旨集』pp.26-27。

松田泰典・原田 怜・末森 薫・山内和也

- 2016 大エジプト博物館保存修復センター(GEM-CC)における人材育成を目的とした国際協力プロジェクト——戦略的マネジメントプランの活用と技術移転効果の評価」『文化財保存修復学会第38回大会研究発表要旨集』pp.42-43。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

- 2016年11月25日 コメンテーター「セッション2 地域文化を保存する」国際フォーラム『地域文化の発見、保存、活用』台湾大溪多目的文化体育館

・共同研究会での報告

- 2016年10月10日 「中国仏教壁画に描かれたビーズ」共同研究一般「世界のビーズをめぐる人類学的研究」国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年6月4日～6月5日（ポスター発表）「狭帯域LED光源を用いた偏光撮影による彩色材料光学情報の可視化」日本文化財科学会第33回大会、奈良大学、奈良県

2016年6月25日「カナダの博物館の事例にみる予防保存の実践的な活動と資料保存の課題」文化財保存修復学会第38回大会、東海大学、神奈川県

2016年9月12日～9月16日“Common challenges for ethnographic and modern art collections: Pest control for large and complex objects containing new materials” 国際文化財保存学会（IIC）ロサンゼルス大会、ロサンゼルス

2016年9月13日～9月15日“25 years of implementation and development of IPM at the National Museum of Ethnology, Japan” 3rd international IPM Conference in Museums, Archives, Libraries and Historic Buildings, Auditorium du Louvre, France

・展示

文化資源プロジェクト2016年度年末年始展示イベント「とり」プロジェクトメンバー

◎調査活動

・国内調査

2016年5月20日～5月22日—北海道網走市（平成28年度・北海道立北方民族博物館講座「国際博物館の日」記念事業「東日本大震災と文化財レスキュー」への参加及び意見交換）

2016年7月12日～7月13日—宮城県気仙沼市（被災文化財一時保管場所の環境調査及び意見交換）

2016年7月28日～7月31日—新潟県村上市・十日町市（村上市における収蔵施設における生物生息調査および山村生産用具の活用に関する打ち合わせ、十日町市における中越地震で被災した古文書資料の状況調査）

2016年8月6日—京都府京都市（京都大学で開催された中国中世寫本研究2016 夏期大会への参加および情報収集）

2016年8月31日～9月3日—新潟県十日町市（中越地震で被災した古文書資料の調査結果の報告および同資料の追加調査）

2016年1月14日—東京都新宿区（平成28年度・東洋美術学校卒業研究発表会における紙資料保存関連の情報収集）

・海外調査

2016年8月10日～8月23日—中国（河西回廊沿いの石窟寺院等における調査研究）

2016年9月10日～9月17日—アメリカ（国際文化財保存学会ロサンゼルス大会に参加及び海外における保存修復・保存科学の研究動向についての情報収集）

2016年10月20日～10月28日—中国（麦積山石窟（甘肅省天水）における科研に係る調査）

2016年11月24日～11月27日—台湾（国際フォーラム「地域文化の発見、保存と活用」の参加と発表）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（若手研究（A））「中国甘肅仏教石窟壁画の制作技法に関する多面的研究」研究代表者、科学研究費補助金（基盤研究（B）（一般））「セルロース系ナノファイバーの紙資料保存への影響」（研究代表者：園田直子）研究分担者、科学研究費補助金（基盤研究（B）（一般））「東日本大震災で被災した民俗文化財の保存および活用に関する基礎研究」（研究代表者：日高真吾）研究分担者、人間文化研究機構基幹研究プロジェクト「日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築」（研究代表者：日高真吾）研究メンバー、国立民族学博物館共同研究一般「世界のビーズをめぐる人類学的研究」（研究代表者：池谷和信）研究メンバー、国立民族学博物館共同研究若手「高等教育機関を対象とした博物館資料の活用に関する研究」（研究代表者：呉屋淳子）研究メンバー

◎社会活動・館外活動等

・非常勤講師

筑波大学大学院「世界遺産論」講師（2016年5月25日）

・他の機関から委嘱された委員など

国際協力機構大エジプト博物館合同保存修復プロジェクト専門家

戸田美佳子 [とだ みかこ] ————— 研究員

【学歴】 神戸大学理学部物理学科卒（2006）、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科五年一貫制博士課程満期認定退学（2011）【職歴】 日本学術振興会 特別研究員（DC1）（2008）、京都大学アフリカ地域研究資料センター 特任研究員（産官学連携）（2011）、日本学術振興会 特別研究員（PD）（2012）、成安造形大学非常勤講師（2014）、国立民族学博物館文化資源研究センター機関研究員（2015）【学位】 修士（地域研究）（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科2010）、博士（地域研究）（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科2013）【専攻・専門】 生態人類学、アフリカ地域研究（中部アフリカ）【所属学会】 日本アフリカ学会、生態人類学会、日本文化人類学会、国際開発学会、障害学会

【主要業績】

[単著]

戸田美佳子

2015 『越境する障害者——アフリカ熱帯林に暮らす障害者の民族誌』東京：明石書店。

[論文]

戸田美佳子

2016 「国境をまたぐ障害者——コンゴ川の障害者ビジネスと国家」森壮也編『アフリカの「障害と開発」——SDGsに向けて』（研究双書No.622）pp.153-193, 千葉：日本貿易振興機構アジア経済研究所。

2014 Peoples and Social Organizations in Gribé, Southeastern Cameroon. *African Study Monographs Supplementary Issue* 49: 139-168, Kyoto: Research Committee for African Area Studies.

【受賞歴】

2016 生存学奨励賞「審査員特別賞」

【2016年の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

- 1) アフリカにおける障害者の生活基盤に関する地域研究
- 2) アフリカ熱帯雨林における森林資源の利用と住民組織に関する実践的研究

・研究の目的、内容

- 1) 本研究の目的は、サブサハラアフリカを対象に、異なる生活基盤のなかで生計を維持する障害者に焦点を当て、彼ら障害者に関わる資源を地図化することで、それがどのように地域的な広がりをもっているのか、もしくは変容しているのかを可視化し、その地域特性を描くことにある。調査は、科学研究費基金（若手研究（B））「アフリカ障害者の生活基盤に関する地域研究」（研究代表者：戸田美佳子）により実施する。
- 2) 果実や葉、樹皮、野生動物などの非木材森林産物（Non-Timber Forest Products, NTFPs）が近年、木材伐採に替わる森林資源の持続的利用法として森林保全の文脈で注目を集めている。とくに非木材森林産物は、カカオなどの商品作物を栽培していない狩猟採集民や農耕民女性にとって現金稼得の重要な機会となっており、地域住民の生活向上を目指す上でも期待が高まっている。本研究は、カメルーン熱帯雨林地域における非木材森林資源の利用に関する住民参加型の現地共同研究に参加しながら、住民の社会関係と在来の住民組織の働きから、森林資源の持続的利用を可能にする社会システムの構築を目指すことを目的としている。調査は、主にJST-JICA地球規模課題対応国際科学技術協力事業（SATREPS）プロジェクト「カメルーン熱帯雨林とその周辺地域における持続的生業戦略の確立と自然資源管理：地球規模課題と地域住民ニーズとの結合」（研究代表者：京都大学・荒木茂）により実施する。

・成果

- 1) 2016年度は、前年度のコンゴ共和国ブラザヴィル市およびコンゴ民主共和国キンシャサ市における現地調査で得られたデータや資料を検討し、国家の統制や規制の強化が進む両国のコンゴ川の国境ビジネスから、障害者と国家の関係について分析を加えた。また本年度は8月と12月に各2週間、コンゴ共和国の首都ブラザヴィル市とカメルーン共和国の首都ヤウンデ市においての現地調査を実施し、障害者の資源マッピングに必要なデータを収集した。また、日本アフリカ学会第53回学術大会においての口頭発表や論文などをおとして、研究成果を発信した。

2) 非木材森林産物 (NTFPs) の持続的利用のためには、資源採取をめぐる過度な競争をさけるとともに、NTFPs から得られる収入のバランスがとれていることが肝要である。そこでプロジェクト最終年度となる2016年度は、プロジェクトサイトのグリベ (Gribe) 村住人にとって生計・家計の両面から重要な資源である *Irvingia gabonensis* ナッツに注目し、狩猟採集民・農耕民・定住商人といったアクターで構成される協働組合を形成し、売上増加を試みた。その際、狩猟採集民の労働強化にならないような方策、ナッツの加工方法の改善による付加価値の増大、さらに労働量に見合った分業による「公平な」収入を目指した住民の組織化に配慮した。これらの研究成果は、SATREPS プロジェクト「カメルーン熱帯雨林とその周辺地域における持続的生業戦略の確立と自然資源管理：地球規模課題と地域住民ニーズとの結合」終了報告書としてまとめた。

◎出版物による業績

[論文]

戸田美佳子

2017 「作業療法を深める⑤ アフリカの障害者——カメルーン熱帯雨林に暮らす障害者からの学び」『作業療法ジャーナル』51(3)：231-234。

[その他]

戸田美佳子

2016 「考える舌37 アフリカン・マンゴー」『京都新聞』5月4日。

2016 「学界通信 狩猟採集民研究50年目の再注目——第11回国際狩猟採集社会会議 (2015年9月7日～11日、於：ウィーン大学) 参加報告」『アフリカ研究』89：47-49。

2016 「先住民族を知ろう⑥ ピグミー」『朝日小学生新聞』11月6日。

2016 「海外研究動向 障害研究の世界的展開」『民博通信』155：24。

2017 「書評リプライ 戸田美佳子著『越境する障害者——アフリカ熱帯林に暮らす障害者の民族誌』『障害学研究』12：174-183。

2017 「王国のビーズとピグミーのビーズ」『ビーズ——つなぐ・かざる・みせる』pp.70-71, 大阪：国立民族学博物館。[共同研究成果]

2017 「【活動 2-7】NTFPsの持続的利用にむけた社会システムの構築」『地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム (SATREPS) 「カメルーン熱帯雨林とその周辺地域における持続的生業戦略の確立と自然資源管理：地球規模課題と地域住民ニーズとの結合」終了報告書』pp.58-61。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

2016年5月15日 「相互行為としてのケアを描く——カメルーン熱帯林の障害者を例に」『家族と社会の境界面の編成に関する人類学的研究——保育と介護の制度化／脱制度化を中心に』

2016年12月11日 「狩猟採集民ジェマの一生——ケアの形成範囲への一考察」『家族と社会の境界面の編成に関する人類学的研究——保育と介護の制度化／脱制度化を中心に』

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年6月4日 「コンゴ川の国境ビジネスからみる障害者と国家の関係」フォーラム「アフリカの『障害と開発』」日本アフリカ学会第53回学術大会、日本大学、神奈川

2016年7月9日 (ポスター発表)「カメルーン熱帯雨林地域の森林保全と農業開発の融合モデル」(荒木茂・市川光雄・舟川晋也・塩谷暁代・Papa Saliou SARR・戸田美佳子・平井将公) 2016年度・海外学術調査フェスタ、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、東京

・展示解説

2016 「『サプール』世界一お洒落なコンゴの男たち」国立民族学博物館アフリカ展示『アフリカの今』セクション展示解説。

2016 「コンゴ発りサイクル・アート『ブベル』」国立民族学博物館アフリカ展示『アフリカの今』セクション展示解説。

2016 「3000kmを旅するウシの大群」国立民族学博物館アフリカ展示『アフリカの今』セクション展示解説。

2016 「カメルーンの健康食『ンドレ』」国立民族学博物館アフリカ展示『アフリカの料理』。

・展示

2016年度文化資源計画事業 年末年始展示イベント「とり」展示監修、国立民族学博物館

- ・ 広報・社会連携活動

2016年6月17日 音楽の祭日 実行委員会メンバー、国立民族学博物館

- ◎調査活動

- ・ 海外調査

2016年6月5日～6月16日—カメルーン共和国（アフリカ熱帯雨林における森林資源の利用と住民組織に関する実践的研究にかかる調査研究）

2016年12月16日～2017年1月9日—カメルーン共和国（カメルーン共和国における現地調査、および情報・資料の収集）

- ◎上記以外の研究活動

- ・ 人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（若手研究（B））「アフリカ障害者の生活基盤に関する地域研究」研究代表者、科学研究費（基盤研究B）『アフリカ熱帯雨林における在来知＝科学知融合型の狩猟動物モニタリング手法の確立』（研究代表者：京都大学・安岡宏和）・連携研究者、科学研究費・新学術領域研究（研究領域提案型）「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」（研究代表者：国立民族学博物館・野林厚志）研究協力者、科学研究費・基盤研究S『アフリカ潜在力』と現代世界の困難の克服——人類の未来を展望する総合的地域研究』（研究代表者：京都大学・松田素二）研究協力者、JST-JICA 地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム（SATREPS）「カメルーン熱帯雨林とその周辺地域における持続的生業戦略の確立と自然資源管理：地球規模課題と地域住民ニーズとの結合」（研究代表者：京都大学・荒木茂）研究協力者

- ◎社会活動・館外活動等

- ・ 他の機関から委嘱された委員など

障害学会第7期理事、NPO 法人アフリックアフリカ事務局

- ・ 非常勤講師

成安造形大学「文化人類学」（集中講義）、九州大学大学院芸術工学研究院「インクルーシブデザイン」ゲスト講師（2016年11月17日）、天理大学国際学部「アフリカ地域研究入門」および「4回生ゼミ」ゲスト講師（2016年7月7日）

永田貴聖 [ながた あつまさ] ————— 研究員

1974年生。【学歴】 京都学園大学法学部法学科卒業（1997）、立命館大学大学院文学研究科史学専攻地域文化領域博士前期課程修了（2004）、立命館大学大学院先端総合学術研究科先端総合学術専攻共生領域博士課程修了（2008）【職歴】 立命館大学第一号助手（2005-2006）、日本学術振興会特別研究員DC・立命館大学（2007-2008）、日本学術振興会PD・京都大学（2008-2009）、立命館大学衣笠総合研究機構ポスドクドクトラルフェロー・GCOE 生存学担当（2009-2010）、立命館大学先端総合学術研究科研究指導助手（2010-2012）、立命館大学衣笠総合研究機構専門研究員（2012-2015）、京都学園大学非常勤講師（2015）、国立民族学博物館先端人類科学研究部機関研究員（2015）【学位】 博士（学術）（立命館大学大学院、2008）【専攻・専門】 文化人類学・移民研究（日本・韓国におけるフィリピン人移民と他の移民グループとの社会関係形成に関する研究）【所属学会】 日本文化人類学会、日本移民学会、社会学研究会、関西社会学会

【主要業績】

[著書]

永田貴聖

2011 『トランスナショナル・フィリピン人の民族誌』 京都：ナカニシヤ出版。

[論文]

永田貴聖

2016 「日本・韓国のフィリピン人たちによる複数の国家・国民とかわる実践」黒木雅子・李恩子編『「国家」を超えるとは——民族・ジェンダー・宗教』 pp.151-199, 東京：新幹社。

2007 「フィリピン人は境界線を越える——トランスナショナル実践と国家権力の狭間で」『現代思想』35(7)：116-130。

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

日本・韓国におけるフィリピン人移民と他の移民グループの社会関係形成に関する研究

・研究目的・内容

本研究の目的は、世界有数の移民・移住労働者送り出し国であるフィリピンから移動してきた人びとが形成する社会関係、中でも結婚による女性の移住が多い東アジア（本研究では日本と韓国）に注目し、1）フィリピン人移住者がカトリック教会などを拠点として、自助・同国人グループを組織し、フィリピン人同士の関係を形成していること、2）フィリピン人同士の関係を媒介にして、日本人や他国出身の移住者たちとも強いつながりを構築すること、3）「フィリピン」が共通項となる空間を一時的につくりだし、そこに集まるさまざまな人びとと関係することを明らかにすることである。

・成果

2016年度は、主に、京都市にあるカトリック教会を拠点として活動するフィリピン人グループや活動その周囲の関係する人びとの活動、中でも、カトリック系の社会福祉法人が運営する京都市地域・多文化交流ネットワークサロンでの活動に注目してきた。この施設の周辺地域は在日コリアン住民の割合が多く、フィリピン人移住者たちがこの施設の利用を開始して以降、在日フィリピン人、在日コリアン、日本人住民の交流も拡大しつつある。永田はフィリピン人の側からこの3つの属性の関係形成を、主に、京都市地域・多文化交流ネットワークサロンの活動、フィリピン人移住者たちが在日コリアンの民族芸能文化を活用した地域活動である「マダン」に演奏者として参加することなどへの考察を行った。日本において複数の「エスニシティ・ナショナルイティ」集団が関係を形成する過程を記述している。これらの活動をもとにして、永田は研究代表として「京都市東九条における日本人・在日コリアン・フィリピン人の関係形成についての人類学」（日本学術振興会 科学研究費補助金 基盤研究C）を申請した。

◎出版物による業績

[その他]

永田貴聖

2016 「在日コリアンと在日フィリピン人たちが集う——京都」『みんなく e-NEWS』2016年5月1日号、
<http://www.minpaku.ac.jp/museum/enews/179>

2016 「イロイロ むくもりの記憶——シンガポールのフィリピン人家事労働者について」小長谷有紀・鈴木紀・旦匡子編『ワールドシネマ・スタディーズ——世界の「いま」を映画から考えよう』pp.271-278, 東京：勉誠出版。

2016 「日比10万人時代——二つのルーツを活かす」大野拓司・鈴木伸隆・日下渉編『フィリピンを知るための64章』pp.370-374, 東京：明石書店。

2017 「韓国・ソウル近郊に住むフィリピン人移住者たちの社会空間」立命館大学生存学研究センター監修・渡辺克典編『知のフロンティア——生存をめぐる研究の現場』pp.88-89, 東京：ハーベスト社。

◎調査活動

・海外調査

2016年10月20日～10月27日—韓国（済州島におけるフィリピン人移住者の社会関係に関するフィールド調査とソウル首都圏での関連情報収集）

2016年11月17日～11月21日—韓国（韓国・釜山市東西大東大学校における日本研究と日本植民地期の建物と記憶を活用した観光実践研究についての動向調査）

2017年2月8日～2月15日—韓国（韓国における在外韓人研究としての在日コリアン研究と韓国国立民俗博物館多文化パッケージ製作過程に関する研究動向調査）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

立命館大学生存学研究センター・研究プロジェクト現代社会エスノグラフィ研究会 課題「生の技法の人文社会学——『当事者』から多角的に広がる関係へ」（代表：渡辺克典 立命館大学生存学研究センター特別招聘准教授）分担者（実務担当）

◎社会活動・館外活動等

・他大学の客員、非常勤講師

大阪大学「東南アジア社会文化演習」、大阪国際大学「国際社会学」、京都学園大学「質的社会調査法」、立命館大学「文化人類学」、龍谷大学「人権論」、京都外国語大学「現代アジア地域事情」

深川宏樹 [ふかがわ ひろき] ————— 研究員

1981年生。【学歴】筑波大学第一学群人文学類卒業（2004）、筑波大学大学院人文社会科学研究科一貫制博士課程歴史・人類学専攻修了（2013）【職歴】筑波大学人文・文化学群非常勤講師（2013-2015）、京都大学大学院人間・環境学研究科研究員（2013-2015）、滋賀大学経済学部非常勤講師（2014）、京都大学国際高等教育院非常勤講師（2015）、京都大学大学院人間・環境学研究科研究員（2015-2016）、国立民族学博物館先端人類科学研究部機関研究員（2016）【学位】博士（文学）（筑波大学大学院人文社会科学研究科 2013）【専攻・専門】文化人類学、オセアニア地域研究【所属学会】日本文化人類学会、日本オセアニア学会、早稲田文化人類学会

【主要業績】

[論文]

深川宏樹

- 2016 「敵と結婚する社会——ニューギニア高地における紛争の拡大と収束の論理」丹羽典生編『〈紛争〉の比較民族誌——グローバル化におけるオセアニアの暴力・民族対立・政治的混乱』pp.137-170, 神奈川：春風社。
- 2016 「身体に内在する社会性と『人格の拡大』——ニューギニア高地エンガ州サカ谷における血縁者の死の重み」『文化人類学』81(1)：5-25。
- 2017 「狂気に突き動かされる社会——ニューギニア高地エンガ州における交換と『賭けられた生』」風間計博編『交錯と共生の人類学——オセアニアにおけるマイノリティと主流社会』pp.267-297, 京都：ナカニシヤ出版。

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

バプアニューギニアの紛争とその処理における感情の動態に関する研究

・研究の目的、内容

本研究の目的は、文化人類学の紛争論と感情論を交差させ、発展させることにある。従来の紛争研究では、いかに紛争で怒りが生じ、鎮静化するかを解明することは最も重大な課題とされてきたが、未だ研究が蓄積されていないのが現状である。近年、南アフリカ等で注目される真実和平委員会も、大規模紛争下で法が機能不全に陥った後に、過去の「真実」に折りあいをつけることで、鬱積した怨恨を緩和する試みと捉えられる。しかしながら、そこでの感情を体系的に分析する枠組みが用意されてきたとは言い難い。それに対して本研究は、バプアニューギニアの高地に位置するエンガ州村落の事例から、紛争処理を「感情の調停」という独自の視点から考察することで新たな理論を提示することを目的とする。また、これと並行して、文化人類学の古典と最新理論をつなぐ親族研究、贈与交換論、植民地主義とキリスト教研究、人間概念と社会概念の歴史的・文化的な多様性と普遍性の研究も行った。

・成果

深川宏樹

- 2016 「身体に内在する社会性と『人格の拡大』——ニューギニア高地エンガ州サカ谷における血縁者の死の重み」『文化人類学』81(1)：5-25。[査読有]
- 2017 「『母親』の声を耳にするとき、お前の胸は痛むだろう——ニューギニア高地における豚肉の贈与の拒絶と血縁関係」櫻田涼子・稲澤努・三浦哲也編『食をめぐる人類学——飲食実践が紡ぐ社会関係』pp.194-226, 京都：昭和堂。
- 2017 「狂気に突き動かされる社会——ニューギニア高地エンガ州における交換と『賭けられた生』」風間計博編『交錯と共生の人類学——オセアニアにおけるマイノリティと主流社会』pp.267-297, 京都：ナカニシヤ出版。

◎出版物による業績

[論文]

深川宏樹

- 2016 「身体に内在する社会性と『人格の拡大』——ニューギニア高地エンガ州サカ谷における血縁者の死の重み」『文化人類学』81(1)：5-25。[査読有]
- 2017 「『母親』の声を耳にすると、お前の胸は痛むだろう——ニューギニア高地における豚肉の贈与の拒絶と血縁関係」櫻田涼子・稲澤努・三浦哲也編『食をめぐる人類学——飲食実践が紡ぐ社会関係』pp.194-226, 京都：昭和堂。
- 2017 「狂気に突き動かされる社会——ニューギニア高地エンガ州における交換と『賭けられた生』」風間計博編『交錯と共生の人類学——オセアニアにおけるマイノリティと主流社会』pp.267-297, 京都：ナカニシヤ出版。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

2016年6月4日 「血が否定される時——ニューギニア高地におけるサブスタンス紐帯とその切断」『グローバル化時代のサブスタンスの社会的配置に関する比較研究』

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年7月9日 「『戦争の仮面』論再考——ニューギニア高地における敵対・同盟関係の前景化と後景化」大阪大学大学院人間科学研究科教育改革推進室・日本文化人類学会近畿地区研究懇談会共催公開シンポジウム『在来の紛争処理をめぐる比較民族誌——アフリカ・オセアニア・ラテンアメリカの事例から』大阪大学

2017年2月17日 「民族誌から生-誌へ——ニューギニア高地エンガ州における交換と狂気」、『『マイノリティと主流社会の共存』研究会』京都大学

◎調査活動

・海外調査

2017年2月6日～2月14日—アメリカ（オセアニア社会人類学会（Association for Social Anthropology in Oceania）の第50回研究大会に参加）

◎社会活動・館外活動等

・他大学の客員、非常勤講師

奈良県立大学地域創造学部「多文化コミュニティ論」、「女性と子供とコミュニティ」
筑波大学大学院人文社会科学研究科「文化人類学特講 IIIA」

八木百合子 [やぎ ゆりこ]————— 研究員

1977年生。【学歴】天理大学国際文化学部イスパニア学科卒（2001）、三重大学大学院人文社会科学研究科修了（2004）、総合研究大学院大学文化科学研究科単位取得満期退学（2011）【職歴】在ペルー日本国大使館専門調査員（2012-2014）、国立民族学博物館研究戦略センター機関研究員（2015）【学位】博士（文学）（総合研究大学院大学2012）、修士（人文科学）（三重大学2004）【専攻・専門】文化人類学、アンデス民族学、ラテンアメリカ地域研究【所属学会】日本文化人類学会、日本ラテンアメリカ学会

【主要業績】

[単著]

八木百合子

2015 『アンデスの聖人信仰——人の移動が織りなす文化のダイナミズム』京都：臨川書店。

[論文]

八木百合子

2012 「聖女に捧げられた大聖堂——近代ペルーの都市建設に埋め込まれたコンフリクト」染田秀藤・關 雄二・網野徹哉編『アンデス世界——交渉と創造の力学』pp.243-267, 京都：世界思想社。

2009 「サンタ・ロサ信仰の形成と発展——20世紀ペルー社会における展開を中心に」『総研大文化科学研究』5：5-28。

【2016年の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

モノを通してみる現代ペルーにおける聖人信仰の形成と発展に関する人類学的研究

・研究の目的・内容

本研究は、宗教的なモノの生産と流通に焦点をあて、現代ペルーにおける聖人信仰の発展について人類学的に追究するものである。その際、聖像というモノを分析の中心に据え、モノと人々が作り出す多様な実践を捉えることで、教会や宣教師の活動に力点をおく従来の見方を越え、宗教現象の新たな理解をはかることを目的とする。より具体的には、(1) 現代の聖像の生産がいかなる人々によりどのようにして行われ、(2) どのような人々の手を介して聖像が流通し、(3) それが各地の村落においてどのように受容され、聖性をもった存在となるかという点について明らかにしていく。なお、上記調査の遂行にあたっては科学研究費補助金（研究スタート支援）をあてる。

・成果

本年度はペルーにおける聖像の流通ネットワークの解明を目的に以下の調査研究をおこなった。

- (1) ペルーにおける聖像流通の一大拠点であるナサレナス教会（リマの旧市街地）周辺の聖具店街の成り立ちについて明らかにするために、主として18～19世紀の周辺の様子や市内で活動する職業集団に関する文献調査を行った。その結果、リマの職業集団や小売店の登記情報からは、聖像の販売や制作を担っていた店や職人がナサレナス教会周辺に出現するのは、19世紀末から20世紀初頭あたりからである点が判明した。また、古くから聖具店街周辺で商いを営んでいる人物への聞き取りからは、当時は多くが露天商で、その後の市政との関わりで露天商から店舗へと移った経緯も判明し、現在の聖具店街の形成過程を知るうえで重要な情報を得た。
- (2) リマの聖具店街の各店の成立時期や仕入先となる工房の情報を入手したほか、聖具店を訪れる客へのインタビュー調査からは、工房や店舗の関係者以外に聖像の流通に関わる複数のアクターの存在を把握した。これにより聖像をとりまく生産・流通の大枠を掴むことができた。
このほか、本課題にかかる成果の一部を国立民族学博物館の共同研究会において発表した。
今後は、これまでの調査結果をもとに、20世紀のペルーにおける聖像流通の発展と聖人信仰の展開との関連性について分析を行い、成果論文として発表を行う予定である。

◎出版物による業績

〔論文〕

八木百合子

- 2016 「ティティカカ湖の浮島の生活——アンデス高原地帯の暮らし」藤木庸介編『住まいがつかえる世界の暮らし——今日の居住文化誌』pp.133-145, 京都：世界思想社。

〔その他〕

八木百合子

- 2016 「アンデスのキヌア みんなく食の民族誌——考える舌」『京都新聞』5月11日。
2016 「海外研究動向——スペインにおける人類学研究の展開 地方主義を超えて」『民博通信』153：25。
2016 「著者による新刊書紹介」『ラテンアメリカ・カリブ研究』23：76-78。
2016 「モコピ族の神話」「ジェ族の神話」「終末」篠田知和基・丸山顯徳編『世界神話伝説大事典』pp.382-383, pp.383-384, pp.365-366, 東京：勉誠出版。
2016 「ペルー風ドーナツ ピカロン」『月刊みんなく』40(12)：14-15。
2017 「危機にさらされる世界遺産——登録30年が経過したクスコの今」『月刊みんなく』41(3)：16-17。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

- 2016年10月30日 「聖なるものの継承——聖像を通じてみる人・モノ・信仰」『演じる人・モノ・身体——芸能研究とマテリアリティの人類学の交差点』

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2016年7月9日 「ペルーの社会状況と南高地における人類学調査」平成28年度海外学術調査フォーラム、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究センター
2016年6月19日 「現代アンデスの聖母崇拝にみる古代文明の資源化——奉納品の分析を通じて」文部科学省科学研究費新学術領域研究「古代アメリカの比較文明論」第3回研究者全体集会、キャンパス・

イノベーションセンター東京.

・ 広報・社会連携活動

2017年1月25日 「アンデスの聖地をめぐる」カレッジシアター「地球探究紀行」産経新聞社あべのハルカス近鉄本店

◎調査活動

・ 海外調査

2016年8月9日～9月21日—ペルー（ペルーにおける聖像の生産・消費および奉納品に関する調査）

2017年2月2日～2月13日—メキシコ（メキシコにおけるカトリシズムに関する研究動向調査）

2017年2月18日～3月21日—ペルー（クスコ市の教会堂の奉納品の保存状況および聖像の所有に関する調査）

◎上記以外の研究活動

・ 人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（研究活動スタート支援）「モノを通してみる現代ペルーにおける聖人信仰の形成と発展に関する人類学的研究」研究代表者、科学研究費補助金（新学術領域研究）「古代アメリカの比較文明論」（研究代表：青山和夫）連携研究者

◎社会活動・館外活動等

・ 非常勤講師

神戸市外国語大学「中南米文化史1」、「中南米文化史2」、「ラテンアメリカ文化特殊講義1」、「ラテンアメリカ文化特殊講義2」

プロジェクト研究員

馬場幸栄 [ばば ゆきえ] ————— 研究員

【学歴】 国際基督教大学教養学部社会科学科卒（1994）、東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学専攻修士課程修了（2008）、お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科比較社会文化学専攻博士後期課程単位取得退学（2015）【職歴】 お茶の水女子大学グローバルリーダーシップ研究所特任講師（2015）、国立民族学博物館文化資源研究センタープロジェクト研究員（2016）、国立民族学博物館人類文明誌研究部プロジェクト研究員（2017）、一橋大学附属図書館研究開発室助教（2017）【学位】 修士（文学）（東京大学大学院人文社会系研究科 2008）【専攻・専門】 文化資源学、デジタルアーカイブ、書物史、科学史【所属学会】 全日本博物館学会、アート・ドキュメンテーション学会、日本アーカイブズ学会、日本科学史学会、日本天文学会、岩手民俗の会

【主要業績】

[論文]

馬場幸栄

2017 「臨時緯度観測所初代所長・木村栄と水沢宝生会——天文学者・木村栄による宝生流謡曲サークル創設の経緯と背景」『比較日本学教育研究センター研究年報』13：123-126。

Baba, Y. and T. Ishikawa

2016 Nearly 120 Years of Science History in Danger: The Collections in the National Astronomical Observatory of Japan, Mizusawa. *Astronomy Museums and Related Activities: Proceedings of the International Symposium on the NAOJ Museum*, pp.27-29. Tokyo: National Astronomical Observatory of Japan.

Baba, Y. and N. McLynn

2005 On Confession: A Cistercian Treatise in Keio University Library. *Essays on Western Manuscripts and Early Printed Books in Keio University Library*, pp.31-68. Tokyo: Keio University Press.

【受賞歴】

2016 図書館総合展ポスターセッション運営委員会特別賞

2009 グッドデザイン賞ネットワーク領域デジタルコンテンツ

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

緯度観測所の歴史と地域文化への影響

・研究の目的・内容

明治32年から昭和63年まで岩手県の水沢に存在した国立の研究機関「緯度観測所」は、創設以来水沢の市民らと密接な関係を築いて、水沢の地域文化に大きな影響を与えてきた。しかし、閉鎖から約30年経った現在では緯度観測所を直接に知る元所員たちの数も少なくなり、同観測所の歴史や地域文化への影響は水沢の人々たちのあいだでも忘れられつつある。本研究は、国立天文台水沢 VLBI 観測所が所蔵する未公開の緯度観測所関連資料の調査と水沢に暮らす元所員らへの聴き取り調査を通して、人々の記憶から失われつつある緯度観測所の歴史を再構築し、さらに、同観測所が水沢の地域文化に与えた影響を詳らかにしてゆくものである。

・成果

科研費基盤研究 (C) 「国立天文台水沢収蔵資料から読み解く緯度観測所120周年」(2016年度～2019年度)の研究代表者として、国立天文台水沢 VLBI 観測所が収蔵する緯度観測所関連資料を用いて (1) 緯度観測所所員の在職期間一覧の作成、(2) 明治大正期の敷地・建造物図面のデジタル化、(3) 一部ガラス乾板写真のデジタル化、(4) 緯度観測所元所員への聴き取り調査を実施した。

これらの調査により、緯度観測所は早い時期から水沢の高等小学校や高等女学校の出身者を積極的に雇用していたこと、緯度観測所初代所長・木村栄は水沢宝生会という謡曲同好会を創設して水沢の郷土たちと交流を深めていたこと、などが明らかになった。

また、明治大正期の緯度観測所における敷地・建造物の写真や図面を整理し、それらについての聴き取り調査を元所員らに行ったことで、明治大正期における各建造物の特徴・機能が明らかになった。その結果、現存する緯度観測所建造物を国の登録有形文化財として申請するための文化庁現地調査もスムーズに行われた。

これらの研究成果を国際日本学コンソーシアム、日本測地学会特別展示、奥州宇宙遊学館特別写真展、同館講演会、『国立天文台ニュース』などで発表したところ、水沢の市民やメディアから大きな反響があった。また、本研究の成果を知った元所員やそのご家族からは聴き取り調査への協力の申し出や個人収蔵の緯度観測所関連資料に関する情報提供が相次いでおり、現在その対応に追われている。今後は国立天文台収蔵資料だけでなく個人蔵の緯度観測所収蔵資料も調査対象として、本研究をいっそう発展させてゆく予定である。

◎出版物による業績

[論文]

馬場幸栄

2017 「臨時緯度観測所初代所長・木村栄と水沢宝生会——天文学者・木村栄による宝生流謡曲サークル創設の経緯と背景」『比較日本学教育研究センター研究年報』13: 123-126。

[その他]

馬場幸栄

2016 「緯度観測事業120周年に向けて——水沢における歴史資料の整理と公開」『国立天文台ニュース』281: 30。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年11月8日～11月10日 「小規模図書館でもできるガラス乾板写真の保存と活用」(共同発表 石川利昭) 第18回図書館総合展ポスターセッション、パシフィコ横浜

2016年12月13日 「緯度観測所初代所長・木村栄と水沢宝生会」第11回国際日本学コンソーシアム「はたらく／あそぶ」日本文化部会、お茶の水女子大学

・研究講演

2017年3月4日 「ガラス乾板写真とともに語り継ぐ 緯度観測所を支えた人々」科研費「国立天文台水沢収蔵資料から読み解く緯度観測所120周年」奥州宇宙遊学館

・展示

2016年10月19日～10月21日 「緯度観測所乾板写真展」日本測地学会、奥州市民文化会館

2017年3月4日～3月5日 「ガラス乾板写真とともに語り継ぐ 緯度観測所を支えた人々」科研費「国立天文台水沢収蔵資料から読み解く緯度観測所120周年」奥州宇宙遊学館

◎調査活動

・国内調査

- 2016年11月4日～11月7日—国立天文台水沢 VLBI 観測所（緯度観測所の資料調査）
- 2017年1月6日～1月9日—国立天文台水沢 VLBI 観測所（緯度観測所の資料撮影）
- 2017年2月28日～3月6日—国立天文台水沢 VLBI 観測所（緯度観測所の資料調査、聴き取り調査）
- 2017年3月17日～21日—国立天文台水沢 VLBI 観測所（緯度観測所の資料調査、聴き取り調査）
- 2017年3月30日～3月31日—京都大学宇宙物理学教室（緯度観測所関連資料の撮影）

・海外調査

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

自然科学研究機構国立天文台平成28年度客員研究員、お茶の水女子大学比較日本学教育研究センター平成28年度研究協力員

◎社会活動・館外活動等

・非常勤講師

白百合女子大学「キリスト教と英米文化」「グローバル文化研究J」

児玉茂昭 [こだま しげあき]————— 研究員

【学歴】 京都大学文学部卒（1994）、京都大学大学院文学研究科修士課程修了（1997）、東京大学大学院文学研究科博士課程単位取得（2000）【職歴】 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所非常勤研究員（2002）、日本学術振興会特別研究員（2003）、長岡技術科学大学産学官連携研究員（2006）、アジア太平洋無形文化遺産研究センターアソシエイトフェロー（2011）、国立民族学博物館外来研究員（2016）、同プロジェクト研究員（2016）【学位】 博士（文学）（京都大学2003）【専攻・専門】 言語学【所属学会】 日本言語学会、日本歴史言語学会

【主要業績】

[論文]

児玉茂昭

- 2006 「文字を持たない言語と計算機」塩原朝子・児玉茂昭編『表記の習慣のない言語の表記』pp.303-320, 東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。
- 2013 『『やさしい日本語』作成支援システムとコーパス検索システム』庵功雄ほか編『『やさしい日本語』は何を目指すか——多文化共生社会を実現するために』pp.157-175, 東京：ココ出版。

Kodama, S.

- 2013 Latin Metals. *Tokyo University Linguistics Papers (TULIP)* 33: 133-138.

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

「日本財団助成手話言語学研究部門（みんぱく手話部門）」を事例とした学術研究事業の運営手法の研究

・研究の目的・内容

本研究では、「日本財団助成手話言語学研究部門（みんぱく手話部門）」を事例とし、その中で、手話言語に対する研究者によるアプローチの変遷、手話言語研究への手話話者の関わり方の音声言語話者一般との類似点と相違点等を観察し、それによって、特に、手話を媒介とした文化の調査研究に従事するときに必要となる研究倫理や方法について考察することを目的とした。

このために、2016年9月に開催されたRA協議会第2回年次大会に参加して、研究コーディネート全般に関する最新の動向を収集するとともに、同月に開催された「手話言語と音声言語に関する民博フェスタ2016」の準備に携わり、また終了後は、2017年度に実施される同フェスタの準備と、これまでみんぱく手話部門で開催された諸会合の情報発信の準備を行った。

・成果

上記活動を通じて研究コーディネート全般についての認識を深めるとともに、みんぱく手話部門における研究

成果を広く発信するための準備を整えた。

彭 宇潔 [ほう うけつ] ————— 研究員

【**学歴**】北京外国語大学日本語学部卒業（2008）、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科アフリカ地域研究専攻5年一貫制博士課程修了（2016）【**職歴**】京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科研究員（2016-）、国立民族学博物館学術資源研究開発センタープロジェクト研究員（2017-）【**学位**】修士（地域研究）（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 2012）、博士（地域研究）（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 2016）【**専攻・専門**】文化人類学、狩猟採集民研究、アフリカ地域研究【**所属学会**】日本アフリカ学会、生態人類学会、日本文化人類学会、国際狩猟採集民学会、英国王立人類学協会、国際民族生物学会

【主要業績】

[単著]

彭 宇潔

2017 *Inscribing the Body: An Anthropological Study on the Tattoo Practice among the Baka Hunter-Gatherers in Southeastern Cameroon*. Kyoto: Shokado.

[著書]

彭 宇潔

2016 Transmission of Body Decoration among the Baka Hunter-Gatherers. In H. Terashima and Barry S. Hewlett (eds.) *Social Learning and Innovation in Contemporary Hunter-Gatherers: Evolutionary and Ethnographic Perspectives*, pp.83-93. Tokyo: Springer.

[論文]

彭 宇潔

2016 The Evidence of Proximity: Tattoo Practices of the Baka in Southeastern Cameroon. *Hunter Gatherer Research* 2(1): 63-95.

【受賞歴】

2012 英国王立人類学協会主催 Body Canvas Photography Competition [Runner-up 賞]

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

- 1) アフリカ熱帯雨林地域の狩猟採集民の身体装飾に関する相互行為論的分析
- 2) アフリカ狩猟採集民における道探索に関する人類学的研究

・研究の目的・内容

- 1) バカはアフリカのコンゴ盆地熱帯雨林に暮らすピグミー系狩猟採集集団の一つであり、非階層的な社会としてよく知られている。彼らの皮膚には数多くの傷跡が見られる。それらは伝統的な治療や日常的な怪我によって残された傷跡のほか、装飾のために残した刺青もある。本研究では、バカたちに見られる刺青実践に関する民族誌的な記述を提供して、施術の場面に見られるバカの相互行為を分析し、刺青実践がバカ社会における社会文化的意味を明らかにする。
- 2) 本研究において、バカにおいて彼らの生業活動にかかわる「森を歩くこと」に対する参与観察といった現地調査と並行して、文献資料の調査も実施する。アフリカ南部のカラハリ砂漠に暮らす狩猟採集民サンとも比較しながら、バカの「森を歩くこと」にまつわる環境の知覚と利用の特徴を、相互行為論的・行動学的な分析と歴史的なアプローチを通じて明らかにする。

・成果

- 1) 聞き取り調査やバカの人々との日常会話によると、彼らは常に、刺青はおしゃれのためのものだと主張し、さらにそれは「女性のファッション」だと説明する。しかし、彼らの行動を分析した結果、彼らが語る施術の動機と、施術（後）実践に見られる不一致は、刺青の象徴的な意味がバカの施術時の言動と必ずしも連関していないことを示している。したがって、バカ社会における刺青の施術は、結果としての刺青の模様の統一よりも、個々人の施術への参加が重要だと考えられる。そうした刺青の施術過程によって、身体

に刻み込まれた刺青は、バカ社会における個人間の親密性を反映する証拠となる。

- 2) カラハリ砂漠と比べて、カメルーン東南部は樹木や草などの障害物が多いため、バカ・ピグミーたちは森を歩くときに、坂や水場などの地形をランドマークとして利用していることがわかった。また、集団行動時に屢々個々人が分散して行動するが、互いの位置や状態を確認するために常に音声を利用していることが明らかになった。

◎出版物による業績

[単著]

彭 宇潔

2017 *Inscribing the Body: An Anthropological Study on the Tattoo Practice among the Baka Hunter-Gatherers in Southeastern Cameroon*. Kyoto: Shokado.

[著書]

彭 宇潔

2016 Transmission of Body Decoration among the Baka Hunter-Gatherers. In H. Terashima and Barry S. Hewlett (eds.) *Social Learning and Innovation in Contemporary Hunter-Gatherers: Evolutionary and Ethnographic Perspectives*, pp.83-93. Tokyo: Springer.

[論文]

彭 宇潔

2016 「Multimodal interaction among the African hunter-gatherers: the case of tattooing.」『電子情報通信学会技術研究報告（ヒューマンコミュニケーション基礎）』116(185)：1-5。

2016 The Evidence of Proximity: Tattoo Practices of the Baka in Southeastern Cameroon. *Hunter Gatherer Research* 2(1): 63-95. [査読有]

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年5月8日 「Body modification and indigenous discrimination: the case of Baka Pygmies in southeastern Cameroon」IUAES 2016 Inter-Congress, Dubrovnik, Croatia

2016年6月4日 「カメルーン東南部に暮らす狩猟採集民バカの刺青実践——施術場面に見られる相互行為に注目して」日本アフリカ学会第53回学術大会、日本大学、静岡

2016年8月2日 「The fashionable tattoo among the Baka hunter-gatherers」15th International Society of Ethnobiology, Makerere University, Kampala, Uganda

2016年8月19日 「Multimodal interaction among the African hunter-gatherers: the case of tattooing」ヒューマンコミュニケーション基礎研究会（HCS）、立命館大学朱雀キャンパス、京都

2016年11月14日 「バカ・ピグミーの集団採集活動にみられる音での相互行為」コミュニケーションの自然誌例会、京都大学、京都

・広報・社会連携活動

2016年11月22日 『遂夢他郷重慶人（Chongqing Flyers）』第359回、重慶市テレビ局

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

文部科学省科学研究費補助金基盤研究（A）「アフリカ狩猟採集民・農牧民のコンタクトゾーンにおける景観形成の自然誌」（研究代表：京都大学・高田明）研究協力者、文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究（研究領域提案型）「パレオアジア文化史学——アジア新人文化形成プロセスの総合的研究」（領域代表者：東京大学・西秋良宏）計画研究B01「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」（研究代表者：国立民族学博物館・野林厚志）研究協力者

拠点研究員

■人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター・「北東アジア地域研究」国立民族学博物館拠点

辛嶋博善 [からしま ひろよし] 研究員

1974年生。【学歴】慶應義塾大学文学部史学科民族学考古学専攻卒業（1998）、東京外国語大学大学院地域文化研究科博士前期課程アジア第一専攻地域研究コース修了（2001）、東京外国語大学大学院地域文化研究科博士後期課程単位取得退学（2008）【職歴】東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所ジュニア・フェロー（2008-2013）、北海道大学スラブ研究センター非常勤研究員（2013-2014）、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター非常勤研究員（2014-2015）、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター地域比較共同研究員（2015- ）【学位】博士（学術）（東京外国語大学 2011）【専攻・専門】文化人類学【所属学会】日本文化人類学会、日本モンゴル学会、生き物文化誌学会、IUAES（International Union of Anthropological and Ethnological Sciences）

【主要業績】

[博士論文]

辛嶋博善

2011 『衝突する未来——ポスト社会主義期におけるモンゴル国ヘンティール県ムルン郡の牧畜社会を事例として』東京外国語大学大学院地域文化研究科提出博士学位申請論文。

[論文]

辛嶋博善

2016 「拡張する柔軟性——モンゴル国現代牧畜社会における居住単位のサイズと構成の変遷」『文化人類学』81(1)：44-61。

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

モンゴル国における牧畜社会の変化に関する研究

・研究の目的、内容

本研究はモンゴル国の牧畜社会がどのように変化しているのかを明らかにすることが目的である。これまでの研究は特にモンゴルにおける社会主義体制の崩壊後の混乱、停滞から牧畜社会が市場経済と接合してきたかに着目してきたが、現在では特に世代交代のような長期的なサイクルによる変化を視野に入れて行っている。

・成果

成果として、①居住単位の変化に関する研究、②牧夫たちのステータスの変化に関する研究が挙げられる。

①モンゴル国の現代の牧畜社会において、居住単位が家畜の増加などによって分裂していくことはよく知られているが、個々の居住単位が縮小するとともに、世帯の構成員が減少した過程を観察するとともに、分裂した個々の居住単位の成員が相互の関係を維持して協業を行っていることを明らかにした。また、こうした協業が旧来の居住単位で行われていた隣家間の協業を少なくとも部分的に代替していると分析した。

②社会主義体制の崩壊後の市場経済への混乱期に、牧畜社会に流入した少年たちが牧夫として草原に流入し、やがて各自の家庭を持つに至った過程を、企業家論を援用しながら分析を行った。

◎出版物による業績

[論文]

辛嶋博善

2016 「拡張する柔軟性——モンゴル国現代牧畜社会における居住単位のサイズと構成の変遷」『文化人類学』81(1)：44-61。

[その他]

辛嶋博善

2016 「モンゴルの記憶の起点となる料理——ヤギのボードク」『月刊みんぱく』40(11)：14-15。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2016年6月27日 「モンゴル研究から北東アジア地域研究への『接合』——牧畜民社会の研究を軸として」第2回北東アジア地域研究会・国立民族学博物館拠点（月例会）、国立民族学博物館

2017年2月17日（趣旨説明）「モンゴル牧畜社会の持続可能性」人間文化研究機構北東アジア地域研究推進事業国立民族学博物館拠点 第2回国際公開セミナー、国立民族学博物館

2017年2月25日 「世界史の中のモンゴル牧畜民——カシミヤの生産と流通」第9回北東アジア地域研究会・国立民族学博物館拠点（月例会）、国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年8月16日 'Collision and "The point of compromise" in a Mongolian pastoralists' society.' The 11th International Congress of Mongolists, Ulaanbaatar, Mongolia.

2016年9月26日 'Collision and "The point of compromise" in a Mongolian pastoralists' society.' Around the Changbai mountains: A seminar on the narratives of the ethnic groups in Northeast Asia, Vladivostok, Russia.

2016年10月29日 「『遊』動する暮らし」平成28年度武庫川女子大学生活美学研究所第2回（通算156回）定例研究会、武庫川女子大学、兵庫

2017年2月16日（趣旨説明）'Mongol ba "entrepreneurship"'（『モンゴルとアントレプレナーシップ』）、『モンゴル国におけるアントレプレナーシップ』勉強会、国立民族学博物館

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

人間文化研究機構地域研究推進事業北東アジア地域研究国立民族学博物館拠点拠点構成員、科学研究費補助金（基盤研究（C））「ポスト社会主義国における経営主体のアントレプレナーシップに関する文化人類学的研究」（研究代表者：後藤正憲）研究分担者

◎社会活動・館外活動等

・非常勤講師

群馬大学非常勤講師、「文化人類学」、前橋工科大学非常勤講師、「文化人類学」

■人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター・「現代中東地域研究」国立民族学博物館拠点

黒田賢治 [くろだ けんじ]——— 研究員

1982年生。【学歴】北海道大学文学部人文科学科卒（2005）、北海道大学文学研究科退学（2006）、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科修了（2011）【職歴】日本学術振興会特別研究員（DC）（2008-2011）、京都大学科学研究員（2011-2012）、京都大学東南アジア研究所特別研究員（2011-2012）、カリフォルニア大学中近東研究所客員研究員（2011-2012）、日本学術振興会特別研究員（PD）（2012-2015）、広島大学総合科学研究科研究員（2015-2016）、人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター研究員（2016）【学位】博士（地域研究）（京都大学大学院 2011）【専攻・専門】中東地域研究、イスラーム研究【所属学会】宗教と社会学会、日本文化人類学会、日本中東学会、IUAES

【主要業績】

[単著]

黒田賢治

2015 『イランにおける宗教と国家——現代シーア派の実相』京都：ナカニシヤ出版。

[論文]

黒田賢治

2010 「ハーメネイー指導體制下における法学界支配の構造——ハウゼの運営組織改革と奨学金制度を中心に」『日本中東学会年報』26：75-97。

[学位論文]

黒田賢治

2011 『現代イランにおけるイスラーム国家と法学界の研究』京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科。

【2016年度の活動報告】

◎出版物による業績

[その他]

黒田賢治

2016 「ブックレビュー 小杉泰著『9.11以後のイスラーム政治』」『宗教と社会』22:157。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2016年11月27日 「中東・イスラームをめぐる人類学的研究と動向調査の課題」第1回「現代中東・イスラームの人類学」研究会、国立民族学博物館

2016年12月17日 'Praying to God and Playing Karate: A Study on Indigenization of Japanese Sports in Contemporary Iran.' Workshop "Global Flow of Cultural Knowledge and their Afterlives: Between Japan and the Middle East. National Museum of Ethnology

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年9月16日 'Towse'e-ye Ertebatāt-e Tārikhī beyn-e Īrān va Jāpon dar Avāy-e Dowre-ye Modern: Īrānshenāsī dar Jāpon.' Jalase-ye Mo'affal-e Elmī beyn al-Melali-ye Anjomān-e 'Elmī-ye Dāneshgāh-e Eşfahān, Dāneshgāh-e Eşfahān

2016年11月19日 「イランにおける殉教文化の新展開——聖地防衛としてのシリア紛争」『第2班「イスラーム中道派研究班」研究会「現代中東の地殻変動とその眺望：政治・社会・思想の動態的連関を考察する」』京都大学

◎調査活動

・海外調査

2016年9月9日～10月1日—イラン、イスラーム共和国（テヘラン市、エスファハーン市における空手とヨーガの調査及び文化資源研究プロジェクト経費による資料収集）

◎社会活動・館外活動

・非常勤講師

立命館大学国際関係学部非常勤講師「中東研究Ⅱ-R」

■人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター・「南アジア地域研究」国立民族学博物館拠点

竹村嘉晃 [たけむら よしあき]——— 研究員

【学歴】日本大学芸術学部演劇学科卒（1995）、沖縄県立芸術大学大学院音楽芸術研究科音楽学専攻修士課程修了（2001）、大阪大学大学院人間科学研究科人間科学専攻博士前期課程修了（2003）、大阪大学大学院人間科学研究科人間科学専攻博士後期課程修了（2012）【職歴】独立行政法人日本学術振興会特別研究員（DC2）（2005）、大阪大学国際企画推進本部特任研究員（2008）、和歌山県立医科大学保健看護学部非常勤講師（2009-2013）、国立民族学博物館外来研究員（2010-2014）、奈良大学社会学部非常勤講師（2011-2012）、国立民族学博物館共同研究員（2011-2014）、関西大学文学部非常勤講師（2012-）、人間文化研究機構地域研究推進センター・現代インド地域研究国立民族学博物館拠点研究員（2014）【学位】博士（人間科学）（大阪大学大学院 2012）、修士（人間科学）（大阪大学大学院 2003）、修士（音楽学）（沖縄県立芸術大学大学院2001）【専攻・専門】芸能人類学、南アジア地域研究【所属学会】日本文化人類学会、日本南アジア学会、舞踊学会、民族芸術学会、日本スポーツ人類学会、東洋音楽学会、The Congress on Research in Dance

【主要業績】

[単著]

竹村嘉晃

2015 『神霊を生きること、その世界——南インド・ケララ社会における「不可触民」の芸能民族誌』東京：

風響社。

[論文]

竹村嘉晃

- 2015 「踊る現代インド——グローバル化の中で躍動するインドの舞踊文化」三尾稔・杉本良男編『現代インド 6 環流するインドの文化と宗教』pp.159-179, 東京：東京大学出版会。
- 2014 「インド・ケーララ州出身者たちの神霊を介した故地とのつながり」細田尚美編『湾岸アラブ諸国における移民労働者——「多外国人国家」の出現と生活実態』pp.229-250, 東京：明石書店。

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

南インド社会における身体文化とその担い手たちの社会的世界の変容に関する研究及びダンス・エスノグラフィーに関する理論的研究

・研究の目的、内容

本研究の目的は、南インドのケーララ州北部に伝わるテイヤム祭儀を伝統的職業として担う不可触民の実践者たちを照射し、現代社会の動態や祭儀を取り巻く巨視的な位相と、彼らの生計活動や社会とのつながりといった微視的な要素がいかに実践レベルと関係し、影響を与えているのかを彼らの生活世界に足場をおく民族誌的記述から解明することにある。同時に人類学的視点と舞踊・芸能研究的観点を融合させた方法論のもとで、市場経済原理に対する実践者たちの適応戦略の実態を調査し、彼らが技芸や社会的形態を維持しながらもその実践を創発・変容させていく過程を実践レベルから捉える芸能民族誌の新たな方法論を提示することも試みる。また、舞踊関連の科目を有する欧米の高等教育機関において一定の地位を確立しているダンス・エスノグラフィー（舞踊民族誌）という方法論を対象に、近年の研究動向を整理しながらその有益性を検討し、南アジアの芸能に関する人類学及び芸能研究への援用の可能性を探る

・成果

シンガポールのインド系コミュニティにおいて、インドの音楽・芸能がどのような歴史的背景のもとで発展してきたのか、その動態に関する考察を文献研究と現地調査から進めた。とりわけ、シンガポールのインド系移民の子女たちの間で古典舞踊のバラタナーティヤムが受容されていく過程において、各種芸術団体や教育機関が果たした役割の把握と、シンガポールに流入したインド映画の受容動向とその影響について着目した。2度の現地調査をシンガポールで実施し、1960年代から70年代にかけて南インドのチェンナイで製作されたタミル語映画がシンガポールでも同時代的に上映公開されており、かつ70年代以降にはそれらの作品がテレビで再放送されていたことが明らかになった。また、インタビュー調査を通じて、こうした作品の中にみられた舞踊シーン（バラタナーティヤム）が当時のインド系移民の子女たちが舞踊を習うきっかけとして大きく影響を及ぼしていたことが明らかになった。

◎出版物による業績

[論文]

Takemura, Y.

- 2017 Good Life and Traditional Occupations: Gulf Money, Social Mobility, and ritual Practices in Kerala, South India. 2015 RINDAS International Conference, Rethinking Religion, Ethics and Political Economy in India and Sri Lanka: Critical Perspectives from Japan, pp.15-25.

[その他]

竹村嘉晃

- 2016 「コーヒーに恋し始めた『チャイの国インド』」『Vesta 食の文化誌』103：28-29。
- 2016 「フィールドとの距離——甥っ子の『晴れ舞台』と電子メディア（カンヌール）」『インド通信』454：1-2。
- 2016 「芸能のグローバルな伝播・発展に関する研究動向」『民博通信』155：25。
- 2017 「書評：吉田ゆか子『バリ島仮面舞踊劇の人類学——人とモノが織りなす芸能』」『舞踊学』39：29-31。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年8月6日 「神霊祭祀が具現化するインド民俗学の視座」現代民俗学会第32回研究会『フォーク・メディ

- アとフォーク・コミュニケーション——〈いくつもの民俗学〉と現代民俗学』神戸大学
 2016年12月10日 「テクノロジーと芸能——シンガポールのインド舞踊をめぐるメディア・技術・メディアと芸能」 科研 H28年度第2回研究会、京都市男女共同参画センター
 2017年1月25日 'The Transmission and Development of Indian Dance in Singapore in the 20th Century.' South Asian Studies Programme Seminar Series, Faculty of Arts & Social Sciences, National University of Singapore

◎社会活動・館外活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

人間文化研究機構地域研究推進事業 現代インド地域研究国立民族学博物館拠点 拠点構成員、国立民族学博物館、若手共同研究「演じる人・モノ・身体——芸能研究とマテリアリティの人類学の交差点」（代表者：吉田ゆか子）共同研究員、科学研究費補助金（基盤研究（B））「現代インドにおけるポスト開発：媒介と協同性のポリティクス」（研究代表者：池亀彩）研究分担者

◎社会活動・館外活動等

- ・非常勤講師

立命館大学産業社会学部非常勤講師、「スポーツ人類学」「スポーツ方法実習」、関西大学文学部非常勤講師、「南アジア・内陸アジア論1・2」

中川加奈子 [なかがわ かなこ]————— 研究員

【学歴】 関西学院大学社会学研究科博士課程修了（2007）【職歴】 外務省在ネパール日本国大使館 専門調査員（2007-2010）、京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科日本学術振興会特別研究員（2014-2016）、人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター国立民族学博物館南アジア研究拠点拠点研究員（2016）【学位】 博士（社会学）（関西学院大学）【専攻・専門】 文化人類学、南アジア地域研究、肉食の比較民族誌【所属学会】 日本文化人類学会、日本南アジア学会、日本社会学会、環境社会学会

【主要業績】

[単著]

中川加奈子

2016 『ネパールでカーストを生きぬく——供犠と肉売りを担う人びとの民族誌』 京都：世界思想社。

【2016年度の活動報告】

◎出版物による業績

[論文]

中川加奈子

2017 「国家的変動への下からの接続——カドギのカースト表象の展開から」（第3章分担執筆）名和克郎 編『体制転換期ネパールにおける「包摂」の諸相——言説政治、社会実践、生活世界』 pp.131-163, 東京：三元社。[査読有]

[その他]

中川加奈子

2016 「ネパールで水牛肉を加工し、売り、食する」『月刊みんぱく』40(9)：10-11。

◎口頭発表・展示・その他の業績

- ・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年5月28日 「アイデンティティの狭間からの『カースト』再創造——ネパールで肉売りを担う人びとをめぐる動態」日本文化人類学会第50回大会、南山大学名古屋キャンパス [査読有]。

2016年7月27日～7月29日 'Shifts in the Strategy of Caste-Representation: Links between Commercial Negotiations in the Meat Markets and Identity Politics', The 5th Annual Kathmandu Conference organized by Social Science Baha, Association for Nepal and Himalayan Studies, Britain-Nepal Academic Council, Centre for Himalayan Studies-CNRS & Nepal Academic Network (Japan), Hotel Shankar [査読有]

2016年10月8日 「食肉をめぐる価値の混交とソーシャルモビリティ——カトマンズの食肉加工業者を事例に」
MINDAS2016年度第2回合同研究会、国立民族学博物館

2017年2月3日 'The Social Mobility Mediated by Meat Market: Struggles of Caste Ordained Butchers in
Nepal' 2016年度RINDAS国際会議「南アジアにおけるダリト問題」(科研(B))「ローカル・
リーダーの登場と下層民の台頭からみる現代インド社会の変容」共催) 龍谷大学深草キャン
パス

◎社会活動・館外活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

人間文化研究機構地域研究推進事業南アジア地域研究国立民族学博物館拠点構成員

客員教員

■先端人類科学研究部・文化動態研究部門

Narum, Paul [ネルム、ポール]———准教授

【学歴】 プリンストン大学卒(1982)、東京大学卒(1985)、【職歴】 Newsweek Japan 編集顧問(1985)、横浜市立大学非常勤職員(1994)、東京工業大学非常勤職員(2009)、獨協大学非常勤職員(2010)、国立民族学博物館先端人類科学研究部客員准教授(2015) 【学位】 M. A.(東京大学 1985)

■先端人類科学研究部・日本財団助成手話言語学研究部門(附置)

原 大介 [はら だいすけ]———教授

1965年生。【学歴】 早稲田大学第一文学部卒業(1989)、国際基督教大学大学院教育学研究科修了(1991)、シカゴ大学大学院言語学科修了(2003) 【職歴】 愛知医科大学看護学部専任講師(2000)、愛知医科大学看護学部助教授(2004)、愛知医科大学看護学部教授(2007)、豊田工業大学工学部教授(2010) 【学位】 博士(言語学)(シカゴ大学大学院、2003) 【専攻・専門】 音韻論、形態論、手話言語学 【所属学会】 日本言語学会、日本手話学会、電子情報通信学会

【主要業績】

[論文]

Hara, D.

2016 An information-based approach to the syllable formation of Japanese Sign Language. In M. Minami (ed.) *Handbook of Japanese Applied Linguistics*, pp.457-482. Boston, MA: GRUYTER MOUTON.

原 大介

2010 「手話言語研究はどうあるべきか——捨象と抽象」『手話学研究』19: 29-41。

2009 「手話」中島平三監修・今井邦彦編『言語学の領域II(シリーズ朝倉「言語の可能性」2)』, pp.72-98, 東京: 朝倉書店。

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

手話言語における音節構造の成り立ちとその適格性条件に関する研究

・研究の目的、内容

日本手話では、「手型」、「手の位置」、「手の動き」の3つのカテゴリに属する要素とその他いくつかのマイナーな要素が音素として機能する。各カテゴリにはそれぞれ有限個の音素が存在するが、カテゴリ間の音素結合は自由ではなく数学的に可能な組み合わせの多くが不適格な音節と判定される。本研究では、どのような音素結

合が適格な日本手話音節形成を可能にするのか（すなわち日本手話の音素配列論）を研究することを目的とする。日本手話の音素配列を論じるには、日本手話において認可されている音素同士の結合であるにもかかわらず不適格であると判断される音節をできるだけ多く収集する必要がある。当該の研究期間中に、日本手話母語話者に研究協力を依頼し、不適格音節の収集を行い、それらを音節構成要素に分解した後、記号化して記録する（コーディング作業）ところまで行う計画である。

・成果

日本手話母語話者約20名に、全日本ろうあ連盟が出版する「わたしたちの手話 あたらしい手話」シリーズに掲載されている約2,500音節に関して適格性の判定を依頼した。その結果、約600音節が不適格音節候補としてリストアップされた。これらの音節を手型、位置、動き、掌の方向、接触位置等の構成要素に分解し、記号化してエクセルファイルに記録した（コーディング作業）。ついで、これらの音節の適格性／不適格性を確定させるため、日本手話母語話者1名の協力を得て動画撮影を行い、その動画を、日本手話母語話者10名に見てもらい、音節の適格性判定を行った。その結果、約200音節を不適格音節と認定した。

これらの研究の一部は以下の研究費の助成を受けている。

1. 文部科学省科学研究費（基盤研究（C））2015年度～2017年度（予定）「機械学習を援用した日本手話音節の適格性の解明」 研究代表者：原大介（課題番号：15K02536）
2. 財団法人大幸財団 第5回人文・社会科学系学術研究助成、2016年9月～2018年3月（予定）「日本手話音節の適格性条件の解明——言語学と言語情報処理からのアプローチ」 研究代表者：原大介
3. 豊田工業大学研究促進費 A 2016年7月～2017年3月「機械学習を援用した日本手話音節適格性解明の研究に用いるデータ収集およびデータの記号化」 研究代表者：原大介
4. 文部科学省科学研究費（基盤研究（B））2016年度～2018年度（予定）「学術手話通訳養成システムの開発——認知・言語的アセスメントに基づいたアプローチ」 研究代表者：中野聡子（課題番号：16H03813）
5. 文部科学省科学研究費（挑戦的萌芽研究）2015年度～2016年度「コミュニティ通訳者を対象とした学術手話通訳者養成プログラムの開発」 研究代表者：中野聡子（課題番号：15K13252）

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年7月8日～7月9日（八幡悟史・原大介・三輪誠）「能動学習による効率的な日本手話音節の適格性の解明」電子情報通信学会リアルタイムコミュニケーション言語（LARC）時限研究専門委員会第1回研究会、ホテルリゾーピア熱海

2016年9月17日～9月19日（中野聡子・原大介・金澤貴之ほか）「ろう通訳の訳出表現に関する予備的検討——国語の授業における聴覚特別支援学校教員の手話表現との比較」日本特殊教育学会第54回大会、新潟コンベンションセンター・新潟日報メディアシップ

2016年12月11日～12月12日「日本手話の語（音節）の適格性調査のためのデータ・コーディング方法について」電子情報通信学会リアルタイムコミュニケーション言語（LARC）時限研究専門委員会 第2回研究会、豊田工業大学

・広報・社会連携活動

2016年10月22日「手話言語学の始まり」《手話言語学関連》『手話通訳者のための「みんなくで手話言語学を学ぼう！』』国立民族学博物館

2016年10月29日「手話言語の音素とその組み合わせ」「手話言語の形態素とその組み合わせ」《手話言語学関連》『手話通訳者のための「みんなくで手話言語学を学ぼう！』』国立民族学博物館

2016年11月5日「手話言語の動詞の種類とその成り立ち」「手話言語の文のつくり&まとめ」《手話言語学関連》『手話通訳者のための「みんなくで手話言語学を学ぼう！』』国立民族学博物館

2016年12月22日「手話失語症」手話言語特別講座、大阪教育大学

2017年2月24日「手話失語症」手話言語特別講座、大阪教育大学

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費助成事業（基盤研究（C））「機械学習を援用した日本手話音節の適格性の解明」研究代表者、財団法人大幸財団第5回人文・社会科学系学術研究助成「日本手話音節の適格性条件の解明——言語学と言語情報処理からのアプローチ」研究代表者、科学研究費助成事業（基盤研究（B））「学術手話通訳養成システムの開発——認知・言語的アセスメントに基づいたアプローチ」（代表者：中野聡子）研究分担者、科学研究費助成事

業（挑戦的萌芽研究）「日本手話と台湾手話の歴史変化の解明——歴史社会言語学の方法論の確立に向けて」（代表者：相良啓子）研究分担者、科学研究費助成事業（挑戦的萌芽研究）「コミュニティ通訳者を対象とした学術手話通訳者養成プログラムの開発」（代表者：中野聡子）研究分担者

◎社会活動・館外活動等

・他大学の客員、非常勤講師

東京外国語大学「言語学特殊研究」（集中講義）、東北大学「手話の世界と世界の手話言語☆入門」（東北大学全学教育リレー講義）、関西学院大学「手話言語学基礎」、岐阜聖徳学園大学「日本手話」（集中講義）

■文化資源研究センター

宇陀則彦 [うだ のりひこ] ————— 准教授

【学歴】図書館情報大学図書館情報学部卒（1989）、図書館情報大学大学院図書館情報学研究科修士課程修了（1991）、筑波大学大学院博士後期課程工学研究科修了（1994）【職歴】図書館情報大学図書館情報学部助手（1994）、図書館情報大学総合情報処理センター講師（1999）、図書館情報大学図書館情報学部助教授（2001）、筑波大学図書館情報学系助教授（2002）、筑波大学図書館情報メディア系准教授（2011）【学位】博士（工学）（筑波大学 1994）【専攻・専門】図書館情報学・知識情報学【所属学会】情報処理学会、情報知識学会

【主要業績】

[共著]

宇陀則彦・三森弘

2015 「ワークプレイスとしてのラーニング・コモンズ」溝上智恵子編著『世界のラーニング・コモンズ 大学教育と「学び」の空間モデル』pp.39-57, 東京：樹村房。

[論文]

常川真央・松村敦・宇陀則彦

2013 「日本十進分類法を用いた類似読者発見手法」『情報メディア研究』12(1)：42-51。

宇陀則彦・山田太造・村田良二・山本泰則

2012 「転写資料記述のための概念モデルの特徴と課題」『国立歴史民俗博物館研究報告』176：239-265。

【受賞歴】

2007 情報知識学会論文賞

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

文化資源の人文社会情報学的研究——高度情報化とデータベースの連携

・研究の目的、内容

民博のもつファクトデータベースと研究成果としてのリポジトリならびに図書雑誌目録を有機的に統合した「みんなく探検システム」の設計を行う。また、健聴者、障害者、高齢者など、ターゲットを絞った「みんなく学習プログラム」の設計を行う。これらは人間文化研究機構内の情報資源の利用も視野に入れる。「みんなく探検システム」については、まずはデータベースの内容分析を行い、知識の連携可能性を探る。次に、メタデータレベルでデータの照合を行い、データベース全体の構造分析を行う。最後に図書館におけるディスカバリサービスの考え方をもとに、「みんなく探検システム」の機能設計を行う。「みんなく学習プログラム」については、筑波大学で実施している文献探索ゲームを博物館に应用することを考える。また、展示場を利用者視点でビデオ撮影し、そのビデオを様々な利用者層（若年、高齢者、障害者等）に見てもらうことで、展示の意図どおりに見えているどうかを検証する。

・成果

民博が公開しているデータベースについて分析を行い、関連する情報を Linked Open Data (LOD) で記述することによりデータベース間の知識連携が行える可能性を指摘した。また、平成23年度に民博で開発された広報用 PC アプリケーションソフト「みんなく標本コレクター」を参考に、「みんなく探検システム」と「みんなく

学習プログラム」を実空間に展開する提案を行った。具体的には、博物館資料と図書館資料の両方が充実している民博の特長を活かし、モノ中心の展示ではなく、ドキュメント中心に展示を行う新しい展示手法「ドキュメント展示」の確立である。ドキュメント展示とは、図書、雑誌、ポスター、パンフレット、図録、データベース等、モノに関して記述した様々なドキュメントをモノと組み合わせて展示することである。ドキュメント展示によって博物館資料への理解を深める効果が期待できるとともに、ドキュメント自体を展示物としてみならずという新しい視点を博物館と図書館の両方にもたらすことができる。

◎出版物による業績

[論文]

李 奎皇・三森 弘・宇陀則彦

2016 「グループ知的活動の生産性と満足度の評価——立位と座位の比較」『図書館情報メディア研究』13(2)：15-22。

[その他]

Uda, N.

2016 Development of a new information literacy education: A bibliographic search game. *2016 ALIIP Proceedings of the 7th International Conference on Asia-Pacific Library and Information Education and Practice*, pp.434-446.

鈴木啓史・松村敦・宇陀則彦

2016 「図書館における資料探索行動に着目したセレンディピティのある情報推薦システムの提案」『第8回 Web インテリジェンスとインタラクション研究会』pp.27-28。

青山優里彩・松村敦・宇陀則彦

2016 「メタ認知と感情に着目した対話による情報検索支援」『情報知識学会』26(2)：233-238。

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

人間文化研究機構基幹研究プロジェクト「総合資料学の創成と日本歴史文化に関する研究資源の共同利用基盤構築」連携研究員及び国立歴史民俗博物館共同研究員

特別客員教員

■先端人類科学研究部・社会環境研究部門

縄田浩志 [なわた ひろし] ————— 教授

【学歴】早稲田大学第一文学部史学科東洋史学専攻卒業（1992）、ハルトゥーム大学アフリカ・アジア研究所民俗学専攻ディプロマ課程修了（1994）、京都大学大学院人間・環境学研究科文化・地域環境学専攻修士課程修了（1997）、京都大学大学院人間・環境学研究科文化・地域環境学専攻博士課程修了（2003）【職歴】鳥取大学乾燥地研究センター講師（2004）、国立民族学博物館特別客員准教授（2007）、総合地球環境学研究所客員准教授（2007）、鳥取大学乾燥地研究センター准教授（2007）、総合地球環境学研究所准教授（2008）、秋田大学新学部創設準備担当教授（2013）、秋田大学国際資源学部教授（2014）、秋田大学大学院国際資源学研究科教授（2016）【学位】人間・環境学博士（京都大学 2003）【専攻・専門】資源管理学、文化人類学、社会生態学、地域研究（中東・アフリカ）、乾燥地研究、環境影響評価、村落開発、人間・家畜関係論【所属学会】日本沙漠学会、日本文化人類学会、日本アフリカ学会、日本中東学会、日本ナイル・エチオピア学会

【主要業績】

[共編著]

縄田浩志・篠田謙一

2014 『砂漠誌——人間・動物・植物が水を分かち合う知恵』神奈川：東海大学出版部。

[編著]

Nawata, H. (ed.)

2013 *Dryland Mangroves: Frontier Research and Conservation*. (Arab Subsistence Monograph Series 2) Kyoto: Shokado.

2015 *Human Resources and Engineering in the Post-oil Era: A Search for Viable Future Societies in Japan and Oil-rich Countries of the Middle East* (Arab Subsistence Monograph Series 3) Kyoto: Shokado.

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

中東における自然資源の管理と物質文化の変容に関する研究

・研究の目的、内容

本研究の目的は、アラビア半島の沙漠のオアシスでおよそ半世紀前に片倉もとこ（文化人類学者／地理学者、本館名誉教授）が実施・収集した（1968-2008）現地調査資料（写真・地図・スケッチを含む）のデータベース作成による学術情報基盤形成の作業を通じたデータの再検証を軸として、中東の5つの異なるオアシス（アラビア半島、サハラ沙漠、ナイル河岸、紅海沿岸、イラン）を比較検討することにより、自然資源の管理方法と物質文化の変容の動態を明らかにすることにある。

現代の土地利用、生業形態、水管理と比較しつつ、グローバル化後の生活空間の変動を具体的に追って行くことにより、特に中東地域においてドラスティックな現象として観察される生活様式や資源利用形態の「世代間ギャップ」を浮き彫りにしつつ、未来世代にとっての研究資料としての活用を地域住民との共同作業により行い、文化資源と知識資源の共有が可能となる。

なお、現地調査と共同研究、また研究成果の発信に関しては、以下の関連プロジェクトと連携しながら推進する。

- (1) 人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト地域研究「現代中東地域研究推進事業」(国立民族学博物館中心拠点代表者：西尾哲夫、秋田大学国際資源学部拠点研究代表者：縄田浩志、H28～H33（予定）)
- (2) 科学研究費助成事業基盤研究（B）（海外学術調査）「半世紀に及ぶアラビア半島とサハラ沙漠オアシスの社会的紐帯の変化に関する実証的研究」（研究代表者：縄田浩志、H28～H31（予定）)
- (3) 片倉もとこ記念沙漠文化財団「アラムコ・片倉沙漠文化協賛金」（評議委員会議長：片倉邦雄、H27～H31）
- (4) 国立民族学博物館共同研究「物質文化から見るアフロ・ユーラシア沙漠社会の移動戦略に関する比較研究」（申請者：縄田浩志、H28～H31（予定）)

・成果

①片倉もとこ記念沙漠文化財団所蔵資料を財団と協力してデータベース化を進め、最終的には民博の片倉もとこ収集資料データベースと統合し、現地社会や海外研究者との情報共有化を図るために、民博の所蔵品の実見を開始した。②H31年度における国立民族学博物館企画展ならびに巡回展の準備として、片倉もとこ記念沙漠文化財団また横浜ユーラシア文化館との共催の方向性を定めた。

また新たに以下の関連プロジェクトの連携を開始することができた。

- (1) 国立民族学博物館共同研究「物質文化から見るアフロ・ユーラシア沙漠社会の移動戦略に関する比較研究」（申請者：縄田浩志、H28～H31（予定）)
- (2) 【今年度継続申請予定】新学術領域研究（研究領域提案型）『学術研究支援基盤形成』研究基盤リソース支援プログラム「地域研究に関する学術写真・動画資料情報の統合と高度化」（課題番号16H06281、中核機関：国立民族学博物館）の支援による資料整理「地域研究画像デジタルライブラリ（略称 DiPLAS）」

◎出版物による業績

[論文]

Nawata, H.

2016 Indigenous beliefs and divine conceptions of Red Sea black coral: A case study of the traditional fishery, Sinai Peninsula, Egypt. *Proceedings of the 13th International Coral Reef Symposium*, pp.422-439. Honolulu: International Society for Reef Studies. [査読有]

Matsuo, N., R. Banjo, T. Teraminami, A. Afefe, A. El-Shaffai, A. Nakashima, H. Nawata and K. Yoshikawa.

2016 Branch Morphology of a Mangrove (*Avicennia marina* (Forsk.) Vierh) Growing in a Per-Arid

Area on the Egyptian Red Sea Coast Regulates Water Use of Its Leaves. *Journal of Arid Land Studies* 26(3): 91-94. [査読有]

◎口頭発表展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2016年11月25日 「紅海産黒サンゴのお数珠としての利用」国際シンポジウム『エジプト海辺の資源利用と物質文化——地中海沿岸と紅海沿岸の比較から』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年6月19日 'Indigenous Classification and Utilization of the Red Sea Black Coral.' 13th International Coral Reef Symposium, Honolulu, Hawaii USA.

2016年9月13日 「国際資源学としての教育研究の試み：地域研究、文化人類学、村落開発の立場から」2016資源・素材学会秋季大会、岩手大学

中生勝美 [なかお かつみ] ————— 教授

1956年生。【学歴】中央大学法学部法律学科卒（1979）、明治大学法学研究科博士前期課程修了（1981）、上智大学文学研究科博士後期課程満期退学（1989）【職歴】外務省嘱託専門調査員（在香港日本国総領事館）（1987）、日本学術振興会特別研究員（1989）、宮城学院女子大学・短期大学助教授（1992）、和光大学人間関係学部助教授（1995）、大阪市立大学文学研究科助教授（2002）、東洋英和女学院大学教授（2005）、桜美林大学教授（2007）、国立民族学博物館先端人類学研究部特別客員教員（2016）【学位】論文博士（京都大学人間・環境研究科 2014）【専攻・専門】社会人類学、中国地域研究【所属学会】日本文化人類学会、日本民俗学会、アジア政経学会、現代中国学会、比較家族史学会

【主要業績】

[単著]

中生勝美

2016 『近代日本の人類学史：帝国と植民地の記憶』東京：風響社。

1990 『中国村落の権力構造と社会変化』東京：アジア政経学会。

[編著]

中生勝美編

2000 『植民地人類学の展望』東京：風響社。

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

「民族学研究アーカイブズ」に基づく日本人類学史の研究

・研究の目的、内容

人類学史の研究のため、長年、年配の研究者からヒヤリングをおこない、必要に応じて個人的な文書やフィールドノートなどを見せてもらっていた。特に、梅棹忠夫初代館長からは、モンゴルのファイルとフィールドノートを見せてもらったが、梅棹館長の没後、アーカイブに整理されて公開された。国立民族学博物館には、研究者の貴重な個人文書が収蔵され、近年「民族学研究アーカイブズ」として公開された。そこで、梅棹文書をはじめとして、幅広く国立民族学博物館に収集されたアーカイブを活用しながら、日本の人類学史を研究したいと考えている。

・成果

本年度のアーカイブ調査は、鹿野忠雄、青木文教の全部と、泉靖一の戦前の調査の部分を終了し、コメントを付けた。また土方久功文書に関して、土方日記の編集にかかわった清水久夫（元世田谷美術館学芸員、土方久功展の責任者）からヒヤリングを行った。また篠田統の著作権者と民博の連絡の仲介を行った。

梅棹資料室の状況について現状調査を行った。以前閲覧したのは、梅棹館長が存命中に、個人的にみせてもらったのだが、その整理状況、公刊物、継続した資料収集の状況などを視察した。

◎出版物による業績

[論文]

Nakao, K.

2016 Clyde Kluckhohn: Political Position and His Tactics for Applied Anthropology in USA. In H. Ishikawa, J. Kreiner, K. Sasaki and T. Yoshimura (eds.) *Origins of Oka Masao's Anthropological Scholarship. (JapanArchiv Vol. 12)*, pp.125-141, Bonn: Bier'sche Verlagsanstalt.

中生勝美

2017 「戦時中のアメリカにおける対日戦略と日本研究——ミシガン大学ロバート・ホールを中心に」『桜美林論叢人文研究』7: 99-110。[査読有]

◎口頭発表展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年10月23日 「台湾離島の核廃棄物貯蔵場とタオ族の民族運動」第33回日本環境会議沖縄大会、沖縄国際大学

2016年10月28日 「戦中・占領期における日本民俗学の社会的役割——日独民俗学の戦争責任をめぐる比較」日本民俗学会・ドイツ民俗学会共催国際シンポジウム、ドイツ・ミュンヘン

2016年12月15日 「历史人类学的复权：Emmanuel Todd 的家族人类学与反全球化」跨世界、流動与区域社会 Circulation, network, and interregional social systems study 国際学術研討会、中央民族大学、北京

◎調査活動

・海外調査

2016年8月26日～9月4日一台湾台東県、蘭嶼島（「台湾南部の津波とセーフティネットの基礎研究」基盤研究（C）（一般））

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費助成事業（基盤研究（C）（一般））「台湾南部の津波とセーフティネットの基礎研究」研究代表者

◎社会活動・館外活動等

・他大学の客員、非常勤講師

広島大学国際協力研究科大学院「比較アジア文化」、国際日本研究センター客員教授

■先端人類科学研究部・文化動態研究部門

山田孝子 [やまだ たかこ] ————— 教授

【学歴】 京都大学理学部数学科卒（1970）、京都大学大学院理学研究科動物学専攻博士課程単位修得退学（1977）【職

歴】 京都大学総合人間学部助教授（1997）、京都大学大学院人間・環境学研究科教授（2003）、京都大学名誉教授（2012）、金沢星稜大学教養教育部特任教授（2015）、金沢星稜大学人文学部教授（2016）【学位】 博士（理学）（京都大学 1983）【専攻・専門】 文化人類学、認識人類学、シャマニズム研究【所属学会】 日本文化人類学会、日本人類学会、American Anthropological Association、International Association for Academic Shamanistic Research

【主要業績】

[単著]

山田孝子

2012 『南島の自然誌——変わりゆく人—植物関係』 京都：昭和堂。

2009 『ラダック——西チベットにおける病いと治療の民族誌』 京都：京都大学学術出版会。

1993 『アイヌの世界観——「ことば」から読む自然と宇宙』（講談社選書メチエ） 東京：講談社。

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

多文化空間におけるマイクロ・リージョナル共同性構築・維持

・研究の目的、内容

これまでの研究により、1990年代以降の社会状況は、文化的同質性をもたらすとされた近代化やグローバル化の予想に反し、ローカルな文化の価値の見直しと、それにもとづく共同性とコミュニティの再構築に特徴があるという知見を得てきた。これを踏まえ、本研究は、チベット難民をはじめとする故地を離れ越境した人々に焦点をあて、ホスト社会の多文化空間のなかで、どのように自分たちのコミュニティを作り出していくのか、共同性構築と維持の原理を解明することを目的とする。

今年度は、前年度と同様に、科学研究費助成事業（基盤研究（C）「在日チベット人におけるネットワーク形成と共同性の再構築・維持」、平成27年度～平成29年度、研究代表者：山田孝子）との連携により、在日チベット人における共同性の再構築も視野に入れながら比較の視点から調査を進め、マイクロ・リージョナルな共同性構築・維持の原理について、考察をさらに深化させる。

・成果

基盤研究（C）との連携により、在日チベット人コミュニティの共同性再構築を解明する上で重要な意味をもつ日－蔵関係の歴史的進展について、マス・メディアの報道をもとに分析した。その研究成果の一部を、2016年6月19-25日の日程でノルウェー、ベルゲン大学において開催された第14回国際チベット学会セミナー（International Association for Tibetan Studies, IATS, 14th Seminar June 2016）において、“Japanese mass media’s role in disseminating information on Tibetan issues and culture”の演題で研究発表した。2016年12月には、「日本のマス・メディアにみる1945-64年のチベット報道：チベット問題発生にいかに対処したのか」（『金沢星稜大学人文学研究』1(1)：11-40）という題目の論文にまとめた。

また、2016年8月には、共編著書 *Migration and the Remaking of Ethnic/ Micro-Regional Connectedness*, *Senri Ethnological Studies*, No.93 [Yamada, T. & T. Fujimoto (eds.)] として、平成26年12月に開催した国際ワークショップの成果を出版した。藤本透子と共著で「Introduction」（pp.1-11）を執筆するとともに、トロント在住チベット人の事例をもとに、多文化空間におけるマイクロ・リージョナル共同性構築・維持において、コミュニティ内におけるリーダーシップと共感性が重要となることを明らかにした（pp.241-273）。この出版をとおして、多文化空間における共同性再構築・維持にあたっては、歴史性、ネットワーク構築、教育や「伝統」の問題、文脈化、宗教、リーダーシップの存在、ホスト社会との緊密な連携などが重要なファクターとなることを明らかにした。

さらに、2016年10月15-16日の日程で北海道大学において開催された East Asian Anthropological Association 2016 Annual Meeting において、分科会「Creating a Trans-Boundary Network and Shared Communication in the Changing Landscape of Asian Societies」を組織し、基盤研究（C）の成果の一部を、“Creating Networks and Sharing Communications through Digital Media: A Survival Strategy of Tibetans in Japan”の演題で発表した。各地に分散して暮らす在日チベット人コミュニティの事例から、デジタル・メディアという近年のテクノロジーの活用という側面も多文化空間における共同性構築・維持における見逃せないファクターとなることを明らかにした。

◎出版物による業績

[編著書]

Yamada, T. and T. Fujimoto (eds.)

2016 *Migration and the Remaking of Ethnic/Micro-Regional Connectedness* (Senri Ethnological Studies 93) Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]

[論文]

Yamada, T.

2016 Introduction (by T. Yamada and T. Fujimoto). In T. Yamada and T. Fujimoto (eds.) *Migration and the Remaking of Ethnic/Micro-Regional Connectedness* (Senri Ethnological Studies 93) pp.1-11. Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]

2016 Leadership and Empathy in the Remaking of Communal Connectedness among Tibetans in Toronto. In T. Yamada and T. Fujimoto (eds.) *Migration and the Remaking of Ethnic/Micro-Regional Connectedness* (Senri Ethnological Studies 93) pp.241-273. Osaka: National Museum of

Ethnology. [査読有]

山田孝子

2016 「日本のマス・メディアにみる1945-64年のチベット報道——チベット問題発生にいかに対処したのか」『金沢星稜大学人文学研究』1(1):11-40。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年6月17日～6月27日 'Japanese mass media's role in disseminating information on Tibetan issues and culture: 14th Seminar of the IATS(International Association for Tibetan Studies), University of Bergen, Norway

2016年10月15日～10月16日 'Creating Networks and Sharing Communications through Digital Media: A Survival Strategy of Tibetans in Japan' East Asian Anthropological Association 2016 Annual Meeting, Hokkaido University
Panel Organizer: "Creating a Trans-Boundary Network and Shared Communication in the Changing Landscape of Asian Societies" East Asian Anthropological Association 2016 Annual Meeting, Hokkaido University

2016年11月17日～11月18日 コメンテーター「プロジェクト企画：ながたんフィールドサイエンス座談会」平成28年度富山大学学生によるCOC+地域連携研究「フィールドサイエンスと地域創成」大長谷ふるさとセンター

2017年1月27日～1月28日 「コミュニティ維持装置としての『寄り合い』とリーダーシップ——トロント在住チベット人コミュニティの事例から考える」琉球大学国際沖縄研究所共同研究「島嶼・中山地・農村地域の集落コミュニティ維持機能——アジア国際比較による地域研究対話」平成28年度地域研究対話集会、琉球大学国際沖縄研究所

陳 天璽 [チェン ティエンシ]————— 教授

1971年生。【学歴】筑波大学第三学群国際関係学類卒(1994)、香港中文大学国際交流計画学部修了(1995)、筑波大学大学院国際政治経済学研究科博士前期課程修了(1996)、筑波大学大学院国際政治経済学研究科博士後期課程修了(2000)【職歴】ハーバード大学フェアバンクセンター東アジア研究所客員研究員(1997)、筑波大学社会科学系日本学術振興会特別研究員(1999)、ハーバード大学法学部東アジア法律研究所客員研究員(1999)、東京大学総合文化研究科日本学術振興会特別研究員(2001)、杏林大学社会学科非常勤講師(2001)、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 共同研究員(2002-)、国立民族学博物館先端民族学研究部助教授(2003)、国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授(2004)、国立民族学博物館民族社会研究部准教授(2008)、同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科 嘱託講師(2009-)、国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授(2010)、早稲田大学国際学術院准教授(2013)、早稲田大学国際学術院教授(2016.4-)【学位】国際政治経済学博士(筑波大学大学院博士課程国際政治経済学研究科 2000)【専攻・専門】文化人類学、移民・移動者研究【所属学会】移民政策学会、日本華僑華人学会、American Anthropology Association、日本文化人類学会、アジア政経学会

【主要業績】

[単著]

陳 天璽

2011 『無国籍』(新潮文庫) 東京：新潮文庫。

[編著]

陳 天璽・大西広之・小森宏美・佐々木てる編

2016 『パスポート学』札幌：北海道大学出版会。

陳 天璽編

2010 『忘れられた人々——日本の「無国籍」者』東京：明石書店。

【受賞歴】

2002 第1回井植記念「アジア太平洋研究奨励賞」

【2016年度の活動報告】

◎各個人研究

・研究課題

アジアにおける移民と文化

・研究の目的、内容

本研究は主に、アジアにおける移民とディアスポラ、そして彼らの文化とアイデンティティに注目する。なかでも特に、華僑華人、そして日本におけるインドシナ難民やビルマ難民の2世に注目している。彼らの国籍、そして身分証明のあり方、アイデンティフィケーションとアイデンティティの齟齬について情報収集、インタビュー調査を行う。また、アジアにおける移民の子どもたちの国籍の推移、教育環境、アイデンティティについても情報収集、研究調査を行う。

・成果

個人の研究課題そして科研の調査として、日本におけるインドシナ難民やビルマ系難民の2世にインタビューを行った。特に東京・高田馬場に「リトルヤンゴン」と呼ばれるビルマコミュニティがあるが、そこを拠点に調査を進めた。また、2016年12月には、ミャンマー・ヤンゴンにて、かつて日本に留学した「今泉奨学生」を対象にインタビューを行った。2017年2月には、当該奨学金の創設者である今泉氏にもインタビューを行い、日緬間の人の移動、国籍、アイデンティティについて調査を行った。

また、民博での共同研究「国籍とパスポートの人類学」及び「人の移動と身分証明の人類学」の共同研究会メンバーと連絡を取り、両研究会の成果物として、『パスポート学』を北海道大学出版会から2016年11月に出版した。

他にも、本各個人研究に関連する以下の論文の出版、学会報告を行った。

陳 天璽 「華僑華人——マルチ・エスニック・ジャパニへの希望の芽」『マルチ・エスニック・ジャパニーズ——〇〇系日本人の変革力』移民ディアスポラ研究5、明石書店、2016年5月。

陳 天璽 「無国籍の人はナニジンですか」『国際社会学入門』ナカニシヤ出版、2017年3月。
(学会報告)

陳 天璽 「国籍・パスポート・人間」日本平和学会、明星大学、2016年10月23日。

CHEN TIENSHI Trans-Border and Interdisciplinary Collaboration on Statelessness in Japan and Thailand, Association for Asian Studies, Tronto, March 17, 2017.

◎出版物による業績

[著書]

陳 天璽

2016 『無国籍——我、和那些被國家遺忘的人們』馮秋玉譯，台北：八旗文化出版社。

[編著]

陳 天璽・大西広之・小森宏美・佐々木てる編

2016 『パスポート学』札幌：北海道大学出版会。

[論文]

陳 天璽

2016 「華僑華人——マルチ・エスニック・ジャパニへの希望の芽」駒井洋監修・佐々木てる編『マルチ・エスニック・ジャパニーズ——〇〇系日本人の変革力』（移民ディアスポラ研究5）pp.130-149，東京：明石書店。

2016 「『パスポート学』が解き明かす国家と個人の関係」『読売オンライン「深読みチャンネル」』11月26日。<http://www.yomiuri.co.jp/fukayomi/ichiran/20161122-OYT8T50036.html>

2017 「無国籍の人はナニジンですか——国境を越える人、国の枠組みを越えられない権利」『国際社会学入門』pp.33-42，京都：ナカニシヤ出版。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年10月23日 「国籍・パスポート・人間」日本平和学会、明星大学

2017年3月17日 “Trans-Border and Interdisciplinary Collaboration on Statelessness in Japan and Thailand”, Association for Asian Studies, Tronto

・研究講演

2016年8月31日 “Human Rights of Stateless People and the Rule of Law,” 国連グローバルセミナー、かな

がわ国際交流財団、湘南国際村センター

- 2016年9月13日 “Statelessness in Japan and the Network to support Stateless people,” Thammasat University, Thailand
<http://www.thaiforrefugees.org/core-program/statelessness-program/>
- 2016年9月21日 「無国籍——ワタシの国はどこですか」国際基督教大学平和研究所
- 2016年10月1日 「グローバルに生きるということ」『グローバルキャリア講座』玉川学園
<http://sgh.tamagawa.ed.jp/1842>
- 2016年10月10日 「無国籍——ワタシの国はどこですか」『11th UNHCR 難民映画祭 2016』国連難民高等弁務官駐日事務所／国連 UNHCR 協会、イタリア会館
<http://unhcr.refugeefilm.org/2016/stateless/>
- 2016年10月26日 「無国籍——ワタシの国はどこですか」『スーパーグローバル・ハイスクール・プロジェクト (SGH)』玉川学園
<http://sgh.tamagawa.ed.jp/category/event/page/2>
- 2016年11月1日 「“無国籍者” どの国にも属さない人たちを支援するために」品川区主催「人権啓発・社会同和教育講座 I 心のバリアフリーをめざして」品川中小企業センター
- 2016年12月17日 「無国籍と生きる」シンポジウム『移民・難民・無国籍とつくる多文化共生社会』大東文化大学外国語学部
- 2017年3月8日 「無国籍者と日本社会」シンポジウム『多文化共生社会の実現に向けて——大学と地域の連携を考える』横浜国立大学

[ラジオ]

- 2017年3月3日 「JAM THE WORLD」、J-WAVE (81.3MHz) 生放送、ナビゲーター 青木理 (ジャーナリスト) と対談、番組 HP … <http://www.j-wave.co.jp/original/jamtheworld/>

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など
- ・社会活動・館外活動等
移民／難民のシティズンシップ——国家からの包摂と排除をめぐる制度と実践 (東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究科)、NPO 法人無国籍ネットワーク代表、APPRN (アジア太平洋難民権利ネットワーク) 無国籍ワーキンググループ代表、日本華僑華人学会理事、移民政策学会理事

北原次郎太 [きたはら じろうた] ————— 准教授

【学歴】 千葉大学修士課程ユーラシア言語文化論講座修了 (2002)、千葉大学博士課程社会文化科学研究科修了 (2007) **【職歴】** 財団法人アイヌ民族博物館 (2005)、北海道大学アイヌ・先住民研究センター准教授 (2010) **【学位】** 学術博士 (千葉大学) **【専攻・専門】** アイヌ民族の宗教文化、物質文化、口承文学 **【所属学会】** 文化人類学会、口承文芸学会

【主要業績】

[著書]

北原次郎太・今石みぎわ

2015 『花とイナウ——世界の中のアイヌ文化』札幌：北海道大学アイヌ・先住民研究センター。

北原次郎太

2014 『アイヌの祭具 イナウの研究』札幌：北海道大学出版会。

[論文]

北原次郎太

2017 「アイヌ口承文芸に見るシャマン儀礼の再検討」『口承文芸研究』40：36-49。

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

アイヌ文化と日本およびその周辺諸文化の比較研究

・研究の目的、内容

アイヌ民族の文化と、日本国および周辺諸国の文化、とくに宗教文化と音楽文化について比較研究を行う。民博に蓄積された資料を元に、これらの文化における祭具類・楽器類の製作技法および使用法の比較を通じ、アジアにおけるアイヌ文化の位置付けを検討し、当該文化の形成過程や周囲との類似性・独自性について考察する。

・成果

民博が所蔵するアイヌ民族の儀礼具のうち、特にイクパスイ（捧酒具）、イナウ、墓標やシャマンの太鼓などを調査し、その形態的特徴について詳細に検討した。それらの成果も踏まえつつ、民博のアイヌ民族展示のリニューアルに協力し、助言をした。また、その際の考察を「精神文化・儀礼を展示すること」という短文にまとめ、月刊みんぱく2016年11月号に寄稿した。また、民博の第455回ウィークエンド・サロン「アイヌの信仰・儀礼」において一般来場者に解説した。

◎出版物による業績

[論文]

北原次郎太

2017 「アイヌ口承文芸に見るシャマン儀礼の再検討」『口承文芸研究』40：36-49。[査読有]

◎映像音響メディアによる業績

・TV・ラジオ番組などの制作・監修

北原次郎太 監修・出演

2016 「今よみがえるアイヌの言霊——100枚のレコードに込められた思い」(NHK ETV特集) NHK、2016年12月17日放送。

■先端人類科学研究部・応用民族学部門

関本照夫 [せきもと てるお] 教授

1947年生。【学歴】東京大学大学院社会学研究科博士課程中退（1976）【職歴】国立民族学博物館第五研究部助手（1976）、一橋大学社会学部講師（1981）、同学部助教授（1983）、東京大学東洋文化研究所助教授（1987）、同研究所教授（1991）、同研究所長（2006-2009）、東京大学を定年退職（2010）、国立民族学博物館先端人類科学研究部特任教授（2010-2013）、国立民族学博物館先端人類学研究部特別客員教員（2013）【学位】社会学修士（東京大学 1974）【専攻・専門】仕事の人類学、布、工芸、物質文化、東南アジア研究【所属学会】日本文化人類学会、東南アジア学会、日本マレーシア学会、Association for Asian Studies

【主要業績】

[編著]

Sekimoto, T. (ed.)

2000 *Handicrafts and Industrial Development in Southeast Asia* (Toyota Foundation Research Grant Report). Tokyo: Institute of Oriental Culture, University of Tokyo.

[共編著]

関本照夫・船曳建夫編

1994 『国民文化が生れる時——アジア・太平洋の現代とその伝統』東京：リポポート。

Sekimoto, T., Semiarto Aji Purwanto and Hanantiwi Adityasari (eds.)

2003 *Handicrafts in the Age of Global Economy: Indonesia and Japan*. Depok: Center for Japanese Studies, University of Indonesia.

【受賞歴】

1983 第14回澁澤賞

【2016年度の活動報告】

◎各研究

・研究課題

布と人間の人類学的研究

・研究の目的、内容

- 1) 2011年1月～2013年3月の間に実施した機関研究・マテリアリティの人間学のプロジェクト「布と人間の人類学的研究」成果刊行のため、必要な作業を行う。
- 2) インドネシアのパティック染物業の研究を軸に、物質性の人類学、布と人間の人類学について研究。

・成果

作業を継続している。

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

財団法人東洋文庫研究員、国立大学法人教育研究評価委員会委員

林 史樹 [はやし ふみき] ————— 教授

1968年生。【学歴】同志社大学文学部社会学科卒業（1992）、東京外国語大学大学院地域文化研究科博士前期課程修了（1997）、総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻博士後期課程修了（2001）【職歴】神田外語大学外国語学部専任講師（2003）、神田外語大学外国語学部准教授（2007）、神田外語大学外国語学部教授（2013）【学位】博士（文学）（総合研究大学院大学 2001）【専攻・専門】文化人類学、韓国研究、移動研究【所属学会】日本文化人類学会、韓国・朝鮮文化研究会、社会学研究会

【主要業績】

[単著]

林 史樹

2007 『韓国サーカスの生活誌——移動の人類学への招待』東京：風響社。

2004 『韓国のある葉草商人のライフヒストリー——「移動」に生きる人々からみた社会変化』東京：御茶の水書房。

[共著]

朝倉敏夫・林 史樹・守屋亜記子

2015 『韓国食文化読本』大阪：国立民族学博物館。

【受賞歴】

2006 旅の文化研究奨励賞

【2016年度の活動報告】

◎各研究

・研究課題

韓国食文化の人類学的研究

・研究の目的、内容

戦前・戦後にかけてみられる人の移動に伴う食の伝播に関する研究である。日本統治時代は朝鮮半島にとって負の歴史と語られるばかりか、東アジア全般に侵略の時代として記憶される。負の側面は負として調査を通じて記録されるべきであるが、人々の移動という視点から眺めたとき、そこに多くの文化が往来し、生活が多様化していった痕跡がみられる。食に限ってみれば、大きなことは和食、中華、洋食の導入であった。中華は粉食を中心に、洋食は日本式洋食の伝播、植民地化は肯定されるべきではないが、負の側面だけで捉えられがちな時代にも今日の豊かな生活につながる文化・食文化の変容を明らかにした。

・成果

今年度は、これまでの研究の1つの成果発表の場として12月3日に東洋大学白山キャンパスで開かれた国際シンポジウム「帝国日本における人とモノの移動と他者像」と、12月4日に立命館大学びわこキャンパスで開かれた国際シンポジウム「第6回アジア食文化会議（亜州食学論壇）」において、それぞれ異なる研究成果を公表

した。国外（韓国）においては朝鮮半島に流入にした洋食に関する調査を行っている。

本研究と関連して提出した成果は以下の通りである。

2016.4 「朝鮮半島における“薬食同源”」『Vesta 食とからだ・こころ』102, pp.30-33。

2016.5 「大韓民国」神田外語大学編『環太平洋の言語と文化』神田外語大学出版局, pp.132-141。

口頭発表

2016.12a 「戦前・戦後期にみられた東アジアにおける‘中華’の拡散：日韓両地域での粉食定着を中心に」『帝国日本における人とモノの移動と他者像——台湾・朝鮮・沖縄を基点に』東洋大学（東京）。

2016.12b 「日本統治下の朝鮮における洋食の導入と普及に関する一考察」『第6回アジア食文化会議（亜州食学論壇）』立命館大学（草津）。

◎出版物による業績

[その他]

林 史樹

2016 「朝鮮半島における“薬食同源”」『Vesta 食とからだ・こころ』102：30-33。

2016 「大韓民国」神田外語大学編『環太平洋の言語と文化』pp.132-141, 千葉：神田外語大学出版局。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年12月3日 「戦前・戦後期にみられた東アジアにおける‘中華’の拡散——日韓両地域での粉食定着を中心に」国際シンポジウム『帝国日本における人とモノの移動と他者像——台湾・朝鮮・沖縄を基点に』東洋大学、東京

2016年12月4日 「日本統治下の朝鮮における洋食の導入と普及に関する一考察」国際シンポジウム『第6回アジア食文化会議（亜州食学論壇）』立命館大学（草津）、滋賀

◎調査活動

・海外調査

2016年10月12日～10月16日—韓国（西洋料理に関する資料購入とソウル、仁川、光州、大田にて洋食店に対するインタビュー）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機関や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（基盤研究A）「帝国日本のモノと人の移動に関する人類学的研究——台湾・朝鮮・沖縄の他者像とその現在」（代表：植野弘子）研究協力者

高城 玲 [たかぎ りょう]—————教授

1969年生。【学歴】東京外国語大学外国語学部卒（1992）、東京外国語大学大学院地域文化研究科博士前期課程修了（1994）、総合研究大学院大学文化科学研究科博士後期課程単位取得退学（2000）【職歴】日本学術振興会特別研究員（PD）（2000）、国立民族学博物館機関研究員（2006）、神奈川大学経営学部助教（2007）、神奈川大学経営学部准教授（2009）、神奈川大学日本常民文化研究所所員（2009）、神奈川大学アジア研究センター所員（2013）神奈川大学経営学部教授（2016）【学位】博士（文学）（総合研究大学院大学 2006）、修士（国際学）（東京外国語大学 1994）【専攻・専門】文化人類学、東南アジア（タイ）研究【所属学会】日本文化人類学会、東南アジア学会

【主要業績】

[単著]

高城 玲

2014 『秩序のミクロロジー——タイ農村における相互行為の民族誌』横浜：神奈川大学出版会。

[共編著]

宮本瑞夫・佐野賢治・北村皆雄・原田健一・岡田一男・内田順子・高城 玲共編

2016 『DVDブック 甦る民俗映像——渋沢敬三と宮本馨太郎が撮った1930年代の日本・アジア』東京：岩波書店。

[論文]

高城 玲

2012 「国家統治の過程とコミュニティ——タイの国王誕生日と村民スカウト研修の相互行為」平井京之介編『実践としてのコミュニティ——移動・国家・運動』pp.187-217, 京都：京都大学学術出版会。

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

タイにおける社会運動の相互行為に関する人類学的研究

・研究の目的、内容

本研究は、現在変動の中にあるタイ社会の動態を、主に社会運動に着目し、鳥瞰図的なマクロな視点のみではなく、人々が不断に繰り返りひろげる相互行為の過程というミクロな視点から人類学的に記述し探求することを目的とする。特に、タイ北部チェンマイ県や中部ナコンサワン県、バンコクなどにおいて、都市部と農村部双方での政治・社会運動に関する現地調査と資料収集を行い、分析を進める。

・成果

平成28年度は、タイ北部チェンマイ県やバンコクなどにおける都市部と農村部双方での政治・社会運動に関する現地調査・資料収集を継続するとともにその分析をすすめた。特に、2016（平成28）年8月にタイで行われた新憲法草案への国民投票や10月の国王の死去など、政治社会的な環境が変動する中で、政治・社会的運動がどのような状況に置かれているのかに関して、相互行為や言説などのミクロな視点に着目した現地調査と資料収集を継続し、それらの分析を進めた。

また、神奈川大学の共同研究奨励助成によって開催されたフィリピン大学アジア研究センターとの共同シンポジウムにおいてこれまでの成果の一部を口頭で発表したほか、東南アジア大陸部におけるコミュニティ運動を主題とする英語論文集の書評を学会誌に掲載した。

◎出版物による業績

[編著書]

高城 玲

2017 『大学生のための異文化・国際理解——差異と多様性への誘い』東京：丸善出版。（高城玲「異文化・国際理解への招待」pp.2-16、高城玲「表象／消費される異文化——日本のメディアで生みだされる東南アジアへのまなざし」pp.89-99を収録）

[その他]

高城 玲

2016 「書評：Shigeharu Tanabe (ed.) *Communities of Potential: Social Assemblages in Thailand and Beyond*, Chiang Mai, Silkworm Books, 2016」『文化人類学』81(3)：550-553。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年11月23日 “Discursive Space of Political/Social Movement in Thailand: Some Background to the Conflict” presented at Joint Symposium: Kanagawa University and the University of the Philippines “*Empire and Nationalism: Comparative Analysis on Asia*”, Asian Center, University of the Philippines.

◎調査活動

・海外調査

2017年3月4日～3月14日—タイ王国チェンマイ県およびバンコク（タイ農村部と都市部における社会運動にかかわる現地調査）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機関や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

神奈川大学共同研究「帝国とナショナリズムの言説空間——国際比較と相互連携の総合的研究」共同研究者
神奈川大学日本常民文化研究所共同研究「日本常民文化研究所所蔵資料からみるフィールド・サイエンスの史的展開」共同研究者
神奈川大学アジア研究センター共同研究「アジアの水に関する総合的研究」共同研究者

高野明彦 [たかの あきひこ] 教授

1956年生【**学歴**】東京大学理学部数学科卒（1980）【**職歴**】（株）日立製作所入社（1980）、東京大学大学院理学系研究科非常勤講師（1996）、国立情報学研究所ソフトウェア研究系教授（2001）、東京大学大学院情報理工学系研究科教授（2002-）、国立情報学研究所情報学資源研究センター長（2005）、特定非営利活動法人連想出版理事長（2005-）、国立情報学研究所コンテンツ科学研究系教授（2006-）、国立情報学研究所連想情報学研究開発センター長（2006）、立命館大学アトリサーチセンター客員教授（2012-2016）、（株）出版デジタル機構最高技術顧問（2012-2014）、（一社）タイムマップ理事（2015-）【**学位**】博士（理学）（東京大学大学院理学系研究科2000）【**専攻・専門**】連想情報学、関数プログラミング、プログラム変換【**所属学会**】ACM、デジタルアーカイブ学会、日本ソフトウェア科学会、情報処理学会、言語処理学会

【**主要業績**】 主要業績

[監修・共著]

高野明彦

2015 『検索の新地平』（角川インターネット講座第8巻）（監修・共著）カドカワ。

高野明彦・吉見俊哉・三浦伸也

2012 『311情報学——メディアは何をどう伝えたか』東京：岩波書店。

高野明彦・太田光・田中裕二

2008 『検索エンジンは脳の夢を見る——連想情報学』東京：講談社。

【**受賞歴**】

2011 科学技術分野の文部科学大臣表彰科学技術賞（理解増進部門）「連想情報技術による自発的学びのための情報理解増進」

2013 岩瀬弥助記念書物文化賞「デジタル技術による書物文化の開発」

【**2016年度の活動報告**】

◎各研究

・研究課題

フォーラム型情報ミュージアムにおける情報の統合と発信に関する研究

・研究の目的、内容

フォーラム型情報ミュージアムの実現へ向けて、収蔵資料に関する情報を研究者からだけでなく、他のミュージアムやソースコミュニティからも収集して、多様な視点からの分析を可能にする情報システムが備えるべき基本機能について検討する。

・成果

北米や欧州における民族学博物館とソースコミュニティの熟覧による情報の獲得と得られた知識のオンライン発信システムの構築について、基本情報の構成法について検討した。また、「地域研究画像デジタルライブラリ」プラットフォーム委員会に参加して、研究コミュニティにとって有意義で持続性のあるデジタルライブラリの構築法について検討した。

◎出版物による業績

[論文]

矢野桂司・今村 聡・高野明彦・阿辺川武

2017 「『平安京オーバーレイマップ』の開発と拡張に関する一考察」『立命館文学』649：196-208。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年6月26日 「文化遺産オンラインと国立国会図書館サーチとの連携が意味するところ」全国美術館会議情報・資料研究部会研究集会『収蔵品デジタルアーカイブの最新動向——文化遺産オンラインと国立国会図書館サーチの連携は美術館に何をもたらすのか——そして、著作権法はどのように展開するのか』国立西洋美術館

2016年11月10日 「文化遺産オンラインの現状と今後の展望」第18回図書館総合展フォーラム『我が国におけるデジタルアーカイブ連携の未来』

2016年11月12日～13日 「吉田財団新アーカイブスの内容と活動事例」第53回消費者行動研究コンファレンス、
専修大学

・ホームページ

2017年2月 「日本アニメーション映画クラシックス (<https://animation.filmarchives.jp/>)」公開

◎社会活動・館外活動等

・他機関から委嘱された委員など

内閣官房知的財産戦略本部デジタルアーカイブの連携に関する実務者協議会委員（座長）、観光庁・文化庁文化財の英語解説のあり方に関する有識者会議委員（座長）、内閣府大規模災害情報の収集・保存・活用方策に関する検討会（座長：御厨貴）委員、東京文化資源会議文化資源連携ビジョン策定委員会委員

飯高伸五 [いいたか しんご] ————— 准教授

1974年生。【学歴】慶應義塾大学文学部卒（1998）、東京都立大学大学院社会科学研究科修士課程修了（2001）、東京都立大学大学院社会科学研究科博士課程単位取得退学（2008）【職歴】神奈川県立平塚看護専門学校非常勤講師（2005-2008）、専修大学法学部兼任講師（2007-2008）、日本学術振興会特別研究員PD（筑波大学）（2008-2011）、ハワイ大学マノア校訪問研究員（2010）、高知県立大学文化学部講師（2011）、首都大学東京非常勤講師（2011）、国立民族学博物館客員教員（2014）高知県立大学文化学部准教授（2016）【学位】博士（社会人類学）（東京都立大学、2009）、修士（社会人類学）（東京都立大学、2001）【専攻・専門】社会人類学、オセアニア研究【所属学会】日本文化人類学会、日本オセアニア学会、東京都立大学社会人類学会、Association for Social Anthropology in Oceania

【主要業績】

[論文]

Itaka, S.

2015 Remembering Nanyō from Okinawa: Deconstructing the Former Empire of Japan through Memorial Practices. *History and Memory* 27(2): 126-151.

飯高伸五

2016 「『ニッケイ』の包摂と排除——ある日本出自パラオ人の埋葬をめぐる論争から」『文化人類学』81(2): 228-246。

2017 「帝国の記憶を通じた共生——ミクロネシアにおける沖縄人の慰霊活動から」風間計博編『交錯と共生の人類学——オセアニアにおけるマイノリティと主流社会』pp.241-265, 京都：ナカニシヤ出版。

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

アジア・太平洋地域における日本統治の記憶と記録に関する歴史人類学的研究

・研究の目的、内容

本研究の目的は、研究従事者が旧南洋群島（ミクロネシア）のパラオで収集してきた、現地人の日本統治経験に関する民族誌的データとともに、国立民族学博物館の民族学アーカイブズの史資料を精査することによって、日本統治経験の記録と記憶を歴史人類学的に検討していくことである。具体的には（1）日本の民族学者がパラオ社会に対して向けたまなざしを検討しつつ、かれらが記録した当該社会の変動を検討すること、（2）ポスト植民地期のパラオ社会における植民地期の史資料の活用可能性や日本統治期の記憶のありようを検討することである。事例の検討によって、アジア・太平洋地域における日本統治の記憶と記録の比較研究に向けた基盤を提供することも視野に入れている。

本研究はアーカイブズとフィールドを往復しながら実施するが、パラオでの現地調査は、科研費基盤研究（C）ミクロネシアの太平洋戦争戦跡のレジャー化とヘリテージ化に関する観光人類学的研究（2015年4月1日～2018年3月31日（予定）、課題番号15K03049）の研究代表者として実施する。

（1）民族学アーカイブズの精査を通じた旧南洋群島の社会変動の検討

民族学アーカイブズのうち、とりわけ土方久功アーカイブと杉浦健一アーカイブを重点的に精査する。資料、手記、ノートなどの原資料を精査することで、当時の民族学者が旧南洋群島に向けた視線、当時のミクロネシアの社会変化の実態を、研究従事者のフィールドデータも随時参照しながら検討していく。土方

久功著作集や国立民族学博物館調査報告（Senri Ethnological Reports）などに原資料の一部が所収されているが、本研究ではノート類など他の資料との関連性に留意し、改めて原資料を精査する。

アーカイブズを検討する際には、(a) 土方久功が自身の民族学的記述から捨象した当時のパラオの社会変化——とりわけ都市部における日本人移住者と現地社会とのコンタクト——に関する記述の検討、(b) 杉浦健一がパラオ及びボナベを対象に行った伝統的土地権の調査およびその民族誌的記述が生産されたコンテキストの検討を中心に検討する。

(2) 現地社会における日本統治期の史資料の意義に関する検討

ポスト植民地期および独立国家形成期のミクロネシア地域では、変化の只中にある当該社会の歴史や文化を再構成するうえで、19世紀末以降のドイツ、日本、アメリカによる継続的統治下で残された行政文書や民族誌的記述の重要性が再認識されている。植民地期の記録は、統治者による記録としての限界はあるものの、同地域の過去を知るための重要な情報源となり、現地の博物館展示などにも重用されている。アメリカ信託統治期ミクロネシアの文書を扱ってきたアーキビストは、アーカイブ化は「現地社会に歴史を返す」試みであると位置づけ、植民地文書の利活用の可能性を検討している。

本研究では、民族学アーカイブズが現在の現地社会にとって持つ意味を念頭におき、研究を進める。土方はパラオ芸術の発展に寄与した著名な芸術家として現在でもよく知られている。また、土地を巡る訴訟の頻発が深刻な社会問題となっている現地社会において、杉浦が実施した土地権に関する人類学的研究の意味は改めて検討するに値する。これらの諸点に留意し、現地社会の関連各機関とも連携をとりながら、日本統治期の史資料の意義や活用可能性を検討していく。

・成果

本年度は民族学アーカイブズの検討は十分にできなかったが、国際学会への参加、パラオでの現地調査の実施、学術誌や専門書への寄稿を中心に研究活動を実施した。現地調査の実施および国際学会への参加は、科研費基盤研究(C)「ミクロネシアの太平洋戦争戦跡のレジャー化とヘリテージ化に関する観光人類学的研究」(2015年4月1日～2018年3月31日(予定)、課題番号15K03049)の一環として実施した。

2016年5月には第22回太平洋史学会(22nd Pacific History Association Biennial Conference 2016, May 21, 2016)に参加して“Conflicting Legacies of the Pacific War: Misinterpretation between Japanese Ireidan (Spirit-Consoling Tour Group) and Local Micronesians”の演題で口頭発表を行い、ポスト日本統治期のミクロネシア地域において、旧移住者および現地人の間でいかに戦争の記憶が想起されているかを検討した。国内では2016年9月と2017年3月にこれに関連した口頭発表「パラオ諸島における鉱山採掘と村落景観の再創造」(2016年度第2回景観史研究会、慶應義塾大学、2016年9月19日)および「パラオにおける戦跡観光の展開」(日本オセアニア学会第34回研究大会、すてんかく、島根、2017年3月27日)を実施した。

2017年2月には、パラオ共和国のペリリュー島およびバベルダオブ島において太平洋戦争の戦跡観光の現状に関する現地調査を実施し、近年のペリリュー戦跡観光への参加者数の増大、現地関係機関による戦跡の積極的活用などの現状を一部把握することができた。また、慶應義塾大学東アジア研究所「歴史生態学と歴史人類学の節合による景観史研究の拡張——アジア太平洋のフィールドワークから発想する」(代表=山口徹)の分担者として、同研究所で実施された研究会に参加し、他地域との比較や歴史人類学的視点からパラオの景観史を検討した。

パラオにおける日本統治期の記憶や現地に誕生した「混血」をめぐる問題に関する研究成果は「『ニッケイ』の包摂と排除——ある日本出自パラオ人の埋葬をめぐる論争から」『文化人類学』81(2):228-246、日本文化人類学会、2016年9月)、「パラオ・サクラカイ——『ニッケイ』と親日言説に関する考察」(三尾裕子・遠藤央・植野弘子(編)『帝国日本の記憶——台湾・旧南洋群島における外来政権の重層化と脱植民地化』pp.213-232、慶應義塾大学出版会、2016年10月)、「帝国後の『混血』のゆくえ——日本出自のパラオ人の越境経験」(『文化人類学研究』17:8-25、2016年12月)、「帝国の記憶を通じた共生——ミクロネシアにおける沖縄人の慰霊活動から」(風間計博(編)『交錯と共生の人類学——オセアニアにおけるマイノリティと主流社会』pp.241-265、ナカニシヤ出版、2017年3月)を通じて発表した。

◎出版物による業績

[論文]

飯高伸五

2016 「『ニッケイ』の包摂と排除——ある日本出自パラオ人の埋葬をめぐる論争から」『文化人類学』81(2):228-246。[査読有]

2016 「パラオ・サクラカイ——『ニッケイ』と親日言説に関する考察」三尾裕子・遠藤 央・植野弘子編

『帝国日本の記憶——台湾・旧南洋群島における外来政権の重層化と脱植民地化』 pp.213-232, 東京：慶應義塾大学出版会。

2016 「帝国後の『混血』のゆくえ——日本出自のパラオ人の越境経験」『文化人類学研究』17：8-25。[査読有]

2017 「帝国の記憶を通じた共生——ミクロネシアにおける沖縄人の慰霊活動から」風間計博編『交錯と共生の人類学——オセアニアにおけるマイノリティと主流社会』 pp.241-265, 京都：ナカニシヤ出版。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年5月21日 “Conflicting Legacies of the Pacific War: Misinterpretation between Japanese Ireidan (Spirit-Consoling Tour Group) and Local Micronesians.” 22nd Pacific History Association Biennial Conference 2016, Hyatt Regency Guam, Tumon, Guam

2016年9月19日 「パラオ諸島における鉱山採掘と村落景観の再創造」2016年度第2回景観史研究会、慶應義塾大学三田キャンパス

2017年3月27日 「パラオにおける戦跡観光の展開」日本オセアニア学会第34回研究大会、すいてんかく、島根

◎調査活動

・国内調査

2016年9月～2017年3月—高知県土佐郡大川村（村史編纂のための現地調査）

・海外調査

2016年5月22日～5月23日—グアム（太平洋戦争戦跡のレジャー化とヘリテージ化に関する調査および資料収集）

2017年2月12日～2月18日—パラオ（太平洋戦争戦跡のレジャー化とヘリテージ化に関する調査および資料収集）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機関や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費助成事業（基盤研究（C）「ミクロネシアの太平洋戦争戦跡のレジャー化とヘリテージ化に関する観光人類学的研究」研究代表者、慶應義塾大学東アジア研究所2015年度プロジェクト「歴史生態学と歴史人類学の節合による景観史研究の拡張——アジア太平洋のフィールドワークから発想する」（研究代表者：山口徹）研究分担者

◎社会活動・館外活動等

・他の機関から委嘱された委員など

日本オセアニア学会理事・評議員、NPO 法人地域文化資源ネットワーク理事、高知県土佐郡大川村村史編纂アドバイザー

・他大学の客員、非常勤講師

高知大学「文化人類学入門」、土佐リハビリテーションカレッジ「人間科学概論」

田森雅一 [たもり まさかず] ————— 准教授

1958年生。【学歴】 東京大学大学院総合文化研究科後期博士課程・単位取得満了（2005）【職歴】 東洋英和女学院大学非常勤講師（1999）、埼玉大学非常勤講師（2000）、慶應義塾大学非常勤講師（2012-2015）、千葉大学非常勤講師（2012-2014）、東洋大学非常勤講師（2014）、埼玉学園大学非常勤講師（2014）、東京外国語大学非常勤講師（2015）、東京大学大学院総合文化研究科・学術研究員（2012）、国立民族学博物館特別客員准教授（2016）【学位】 博士（学術）（東京大学大学院総合文化研究科 2011）【専攻・専門】 社会人類学・比較文化論・南アジア研究【所属学会】 日本文化人類学会、日本南アジア学会、日本口承文藝学会、東洋音楽学会

【主要業績】

[単著]

田森雅一

2015 『近代インドにおける古典音楽の社会的世界とその変容——“音楽すること”の人類学的研究』東京：三元社。

[論文]

田森雅一

- 2008 The Transformation of Sarod *Gharānā*: Transmitting Musical Property in Hindustani Music. In Y. Terada (ed.) *Music and Society in South Asia: Perspectives from Japan* (Senri Ethnological Studies 71), pp.169-202. Osaka: National Museum of Ethnology.
- 1998 「都市ヒンドゥー命名儀礼における主体構築と命名慣習の変容」『民族學研究』63(3) : 302-325。

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

グローバル化と南アジア音楽文化の変容に関する人類学的研究

・研究の目的、内容

本研究の目的は、グローバル化された“地続きの世界”における南アジアと欧米・日本という、より拡大された空間における「音楽・文化と宗教・社会」の動態について検討することにある。より具体的には、ヒンドゥーとイスラームが共生する南アジア社会、特にインドとパキスタンの国境の砂漠地帯で、「ジプシー」の発祥地としても注目を集めるラージャスターンをルーツとする音楽芸能カーストのローカルな社会組織と音楽家たちのトランス・ローカルな活動・ネットワーク形成を調査・検討することで、近代における伝統音楽の再生産とグローバル化のあり方について明らかにしてみたい。

・成果

ラージャスターン地方の村落に生活の基盤を置き、支配カーストの人生儀礼や村落の祭礼において音楽演奏を生業としてきた世襲音楽家たちは、インド独立にともなう藩王制度の廃止とともにパトロンとの間に築き上げてきた持続的な関係を失った。彼らの多くは演奏機会を求めて都市に移住し、その技芸を存続させてきたが、音楽教師やラジオ局付音楽家といった職業のポストは限られ、一回限りのコンサートやホテルでの観光客相手のイベントへの出演で安定した生計を立てるのは困難であった。そのような状況が変化したのは、1980年代からのインドの経済開放というグローバル化の流れのなか、個人的なネットワークを頼って海外に演奏機会を求める者たちが増加してからである。

本研究ではこのような実態をとらえるために、ラージャスターン州の州都ジャイプルからフランスに渡って成功をおさめた一族をインフォーマントとして調査を行った。本調査は、「南アジア地域研究・国立民族学博物館拠点」の資金援助によって行なわれた2014年からの一連のもので、複数のインフォーマントへのインタビューにより、インドのグローバル化の流れの中で、彼らがどのようなネットワークを築き上げ、音楽演奏の機会を見いだしてインドとヨーロッパを往来して今日に至っているのかという、マクロ（社会の動向）とミクロ（個人の動向）との関係の一端を明らかにすることができた。本研究の成果の一部は、『日本南アジア学会第29回全国大会』の個人発表において「“再帰的グローカル化”と適応戦略——ラージャスターンにおける世襲音楽家一族の近代」（於：神戸市外国語大学、2016年9月25日）として発表した。また、世襲音楽家の特に若い世代は、新たな演奏機会と自らの認知度を向上させるため、『インディアン・アイドル』など、衛星放送の音楽オーディション番組に出演するようになって来ている。このようなインドにおける新たなメディア状況と新世代の生存戦略ともいえる動向について、「インドにおける衛星放送のグローカル化——音楽リアリティ番組の新世代音楽家へのインパクト」と題した論文（『埼玉大学紀要』25(1) : 151-162, 2016）にまとめた。

〈論文〉

田森雅一（単著）「インドにおける衛星放送のグローカル化——音楽リアリティ番組の新世代音楽家へのインパクト」『埼玉大学紀要』25(1) : 151-162, 2016

〈学会発表〉

田森雅一『日本南アジア学会第29回全国大会』個人発表

「“再帰的グローカル化”と適応戦略——ラージャスターンにおける世襲音楽家一族の近代」

（於：神戸市外国語大学、2016年9月25日）

〈海外調査〉

調査テーマ：「フランスにおけるインド音楽の動向、およびラージャスターン出身インド音楽家の活動と社会関係・グローバル・ネットワークに関する追跡調査

調査地域：フランス・パリ市、調査期間：2016年9月9日～18日

調査資金：南アジア地域研究・国立民族学博物館拠点（MINDAS 拠点代表：三尾稔）

◎出版物による業績

[論文]

田森雅一

2016 「インドにおける衛星放送のグローバル化——音楽リアリティ番組の新世代世襲音楽家へのインパクト」『埼玉大学教養学部紀要』52(1)：139-150。

2016 「インド音楽のグローバル化と21世紀」『現代インドフォーラム』28：17-24、公益社団法人日印協会。[査読有]

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年9月25日 「“再帰的グローバル化”と音楽伝統の再生産——インド・ラージャスターンにおける世襲音楽家一族の100年」日本南アジア学会・第29回研究大会、神戸市外国語大学

◎調査活動

・海外調査

2016年9月9日～9月18日—フランス（フランスに滞在するインド系世襲音楽家の動態とネットワークに関する現地調査）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

南アジア地域研究・国立民族学博物館拠点（MINDAS）共同研究員、国立民族学博物館文化資源プロジェクト「インドの古典音楽楽器と民俗絵画カリガートの購入」共同研究員

◎社会活動・館外活動等

・非常勤講師

東京外国語大学言語文化部「総合文化研究」、東洋大学文学部「東洋芸術文化特講」、埼玉大学教育機構「宗教と出会う」、東洋英和女学院大学「宗教音楽論（集中）」「フィールドワーク・芸術分野（集中）」、埼玉学園大学人間学部「宗教学」

■先端人類科学研究部・日本財団助成手話言語学研究部門（附置）

市田泰弘 [いちだ やすひろ]————— 教授

1962年生。【学歴】立教大学文学部教育学科卒（1986）、立教大学大学院文学研究科博士課程前期課程修了（1989）

【職歴】名古屋文化学園言語訓練専門職員養成学校専任教員（1989）、国立身体障害者リハビリテーションセンター更生訓練所生活訓練専門職（1991）、国立身体障害者リハビリテーションセンター学院手話通訳学科教官（1996）、国立障害者リハビリテーションセンター学院手話通訳学科主任教官（2010）【学位】文学修士（立教大学 1989）【専攻・専門】手話言語学【所属学会】日本言語学会、日本手話学会、日本認知言語学会、日本通訳翻訳学会

【主要業績】

[共著]

木村晴美・市田泰弘

2014 『改訂新版・はじめての手話』東京：生活書院。

[論文]

Ichida, Y.

2010 Introduction to Japanese Sign Language: Iconicity in Language. *Studies in Language Sciences* 9: 9-32. Sakai, K., Y. Tatsuno, K. Suzuki, H. Kimura, and Y. Ichida

2005 Sign and Speech: Amodal Commonality in Left Hemisphere Dominance for Comprehension of Sentences. *Brain* 128(6): 1407-1417.

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

日本手話の特徴をふまえた手話言語学教授法に関する研究

・研究の目的、内容

現在、大学および大学院レベルで手話言語学の講義を行うための日本語による教科書は存在しない。また、国内の大学において手話言語学を導入するにあたっては、日本手話の言語事実を取り込むのが適当であると考え、その教授法はまだ確立していない。近年の手話言語学に対する関心の高まりなどから、各単年度の講義の教授法を踏まえたシラバスの内容の検討が急務となっている。本研究では、複数の大学において実施する手話言語学の講義を通して、シラバス案の策定とその実効性の検証を行い、その結果を長期的には、日本語による手話言語学講義のための教科書執筆という形に反映させることを目的とする。具体的な内容としては、シラバスの検討においては受講学生の一般言語学の基礎知識の程度に合わせた内容および用例の選択を中心に、実効性の検証については主として受講学生の評価の集計によって行う。

・成果

東京大学にて外国語科目「日本手話 (1)」「日本手話 (2)」の講義の一部を担当、シラバス案を策定し実践した。社会言語学的背景について扱う導入は従来通りだが、言語学に関するメインの部分では昨年度までの反省をふまえ、手話言語と音声言語の共通性を十分に強調した上で、手話言語特有の媒体的特徴である「頭の動き」「顔の表情」「身体・手指・空間」が、日本手話の文法的システムに与える影響について特に取り上げる形で進めた。その理解にあたって言語学的知識が前提となる側面はあえて強調せず、取り上げる文法項目についても学習文法レベルで実技習得に直接役立つものを選択するよう心がけた。受講学生からの評価はおおむね好評であった。この成果を大学外国語科目における手話言語学教授用の教科書執筆につなげたい。

そのほか、大学・大学院のための手話言語学出張講義で、東北大学全学教育リレー講義「手話の世界と世界の手話言語☆入門」と、大阪教育大学「手話言語特別講座」の文法に関する概論部分を担当し、ダイジェスト版の授業計画を作成し実践した。受講学生のアンケートによればこちらもおおむね好評であった。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・手話言語学出張講義

2016年通年講義 「日本手話 (1)、(2)」、東京大学

2016年10月11日 「手話言語学入門：音声言語と手話言語、日本語と日本手話」東北大学全学教育リレー講義
「手話の世界と世界の手話言語☆入門」東北大学

2016年11月25日、2月3日 「手話言語特別講座」全学特別講座、大阪教育大学

■文化資源研究センター

平井康之 [ひらい やすゆき] ————— 教授

1961年生。【学歴】京都市立芸術大学デザインコース卒（1983）、英国王立芸術大学院修士課程修了（1992）【職歴】コクヨ株式会社本社設計部（1983）、コクヨ株式会社家具事業本部オフィス家具部商品開発課（1988）、コクヨ株式会社人事部人材開発課付（1990）、コクヨ株式会社オフィス家具事業本部商品開発部商品開発室主任（1992）、コクヨ株式会社オフィス家具事業本部商品開発部商品戦略グループ課長補佐（1995）、コクヨ株式会社オフィス家具事業本部商品開発部商品戦略グループ課長（1997）、IDEO Product Development Senior Designer（1997）、IDEO Product Development Grand Rapids Studio（米国）Senior Designer（1998）、九州芸術工科大学芸術工学部助教授（2000）、九州大学大学院芸術工学研究院助教授（2003）、九州大学大学院芸術工学研究院准教授（2007）【学位】修士（英国王立芸術大学院 1992）、博士（芸術工学）（九州大学 2016）【専攻・専門】デザイン専攻【所属学会】日本インテリア学会、日本デザイン学会、芸術工学会

【主要業績】

[共著]

ジュリア・カセム・平井康之・塩瀬隆之・森下静香・水野大二郎・小島清樹・荒井利春・岡崎智美・梅田亜由美・小池 禎・田邊友香・木下洋二郎・家成俊勝・桑原あきら

2014 『インクルーシブデザイン』京都：学芸出版社。

平井康之・藤 智亮・野林厚志・真鍋 徹・川窪伸光・三島美佐子

2014 『知覚を刺激するミュージアム——見て、触って、感じる博物館のつくりかた』東京：学芸出版社。

朝廣和夫・尾方義人・古賀 徹・近藤加代子・谷 正和・田上健一・富板 崇・平井康之

2012 『デザイン教育のススメ——体験・実践型コミュニケーションを学ぶ』東京：花書院。

【受賞歴】

- 2014 2014年度グッドデザイン賞（研究活動・研究手法カテゴリー）
- 2014 第8回キッズデザイン賞（子ども視点の安全安心デザイン 子ども部門）
- 2013 「ユニバーサル都市・福岡賞 みんなにやさしい部門」最優秀賞（こども×くすり×デザイン実行委員会）
- 2013 The Include Asia Conference Awards「Champion of Inclusive Design」賞
- 2013 IAUD アワード2013 入賞「みんなの美術的プロジェクト」
- 2010 第4回キッズデザイン賞（ソーシャルキッズサポート部門）
- 2009 2009年度グッドデザイン賞（パブリックコミュニケーションデザイン部門）
- 2009 第3回キッズデザイン賞（コミュニケーションデザイン部門）
- 2008 2008年度グッドデザイン賞（子どもの服薬に関するデザイン研究、こども＋くすり＋デザイン）
- 2008 第2回キッズデザイン賞（リサーチ部門、子どもの服薬に関するデザイン研究、こども＋くすり＋デザイン）
- 2003 三菱オスラム LED デザインコンテスト審査員奨励賞
- 2002 富山プロダクトデザインコンペティション入選
- 2002 2002年度国際デザイン年鑑（英国）掲載（審査付、Full Metal Jacket Chair）
- 1996 1996年度グッドデザイン賞（シナジアシリーズ）
- 1996 海南デザインコンペティション大賞（健康器具バンボレオ）
- 1996 1996年度レッド・ドット賞〈ドイツ・エッセンデザインセンター〉（インタープレイスシリーズ）
- 1994 1994年度グッドデザイン賞（インタープレイスシリーズ）
- 1993 第2回旭川国際家具デザインコンペティション入選（インタープレイスシリーズ）
- 1993 コクヨ株式会社功労賞（インタープレイスシリーズ）
- 1992 1992年度国際デザイン年鑑（英国）掲載（審査付、Perch Chair, Stacking Table）
- 1991 1991 Office Design Competition, EIMU, Milano, Italy 入選

【2016年度の活動報告】

◎各研究

・研究課題

ユニバーサルミュージアム構築の理論と実践

・研究の目的、内容

本研究では、民博が目指すユニバーサルミュージアム構築にむけて、障がい者をはじめ、外国人や高齢者、その他鑑賞が難しい多様な来館者を対象に、サイン計画をはじめとする展示空間のアクセスに関わる情報計画の実践的研究を行う。また、昨年度に開発した展示空間における知覚鑑賞を可能にする展示デザイン評価項目を用いた実践的研究も継続し行うこととする。

・成果

展示空間のアクセスに関わる情報計画の実践的研究を行った。サイン計画については、展示空間までのパブリックスペースにおけるサイン計画へのアドバイスをを行い、三月末に実際のサインが設置された。また展示空間では、展示デザイン評価項目研究の項目をまとめたところまで研究が進んだ。さらに昨年度から継続のiBeaconを用いたアクセス研究については試作を製作し、三月に被験者4人による評価実験を行った。

◎上記以外の研究活動

・民間の奨学金および助成金からのプロジェクト

九州大学グローバルイノベーション人材育成エコシステム形成事業（EDGEプログラム）、共同研究『デザイン思考を用いたサイエンスコミュニケーションに関する共同研究』、共同研究『介護施設における人材育成、及び入居者とのコミュニケーション』、共同研究『商業施設における居心地の良い空間に関する共同研究』、受託研究『イノベーションスタジオ福岡プロジェクト4の企画及び運営等の業務委託』、社会連携『福岡市動物園 い

のちの大切さをコミュニケーションする社会プロジェクト』、社会連携『ユニバーサル都市 福岡デザインワークショップ2016』

◎社会活動・館外活動等

- ・他の機関から委嘱された委員など
福岡市地下鉄デザイン委員会委員
- ・他大学の客員、非常勤講師
明石工業高等専門学校「インクルーシブデザイン概論」

下道基行 [したみち もとゆき] 准教授

【学歴】武蔵野美術大学造形学部油絵科卒業（2001）、東京総合写真専門学校研究科（2003）【職歴】テレビ番組制作リサーチ会社オフィス HIT（2001-2007）、美術研究所アトリエフラン裸婦絵画コース／陶芸コース講師（2001-2005）、東北芸術東北芸術工科大学ゲスト講師（2012-2016）【学位】学士【専攻・専門】写真映像、平面表現、現代美術

【受賞】

- 2015年 さがみはら写真新人奨励賞
- 2014年 第1回鉄犬ヘテロトピア文学賞
- 2013年 第6回岡山県新進美術家育成『I氏賞』大賞
- 2012年 韓国・光州ビエンナーレ2012 NOON 芸術賞（新人賞）

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

写真、動画資料の創造的な活用とアーカイブに関する研究

・研究の目的、内容

本館が所蔵するスチール写真や動画資料、さらに、それらのアーカイブにおける管理の在り方や活用の現状に関して調査を行う。それを踏まえ、本館における写真、動画資料の創造的な活用、さらに本館が目指す、情報生成型のマルチメディア・データベース構築にむけて美術家／写真家の立場から、本館の研究者と意見交換を重ね、具体的な協働の在り方を検討する。

・成果

本館教員とともに研究課題に関わる研究会やセミナーを企画し、本館教員、並びに総研大学院生や関西を拠点にする文化人類学者たちと研究交流を積み重ねた。例えば、6月7日には本館教員の廣瀬准教授や川瀬助教とともに現代美術と人類学のフィールドワークの比較をテーマにした研究会をコーディネートした。本会では廣瀬、川瀬による研究発表のほか、4名の現代美術作家（田村友一郎、宮永亮、佐々木愛、オル太）による口頭発表が行われた。また、12月18日には、川瀬助教とともに、映像人類学研究会 Anthro-film Lab を企画し、芸術人類学者で映画監督の Lisa Spilliaert 氏（ベルギー）や映像作家でサウンドアーティストのオクノマモル氏（オランダ、日本）を招へいし、両者の制作過程の記録映画のブラッシュアップをめぐる議論を行った。さらに、川瀬助教が制作する、みんぱく映像民族誌『めばえる歌——民謡の伝承と創造——』（平成29年度後半に館内の映画会で発表予定）の編集過程における、静止画資料やテレビ番組（四国放送）からの抜粋動画の使用、活用に関して複数の段階において提言し、作品のブラッシュアップに協力した。

以上より、写真や動画資料を用いる人類学研究の調査法と現代美術の技法の比較検討を通し、本館の研究者を含む、人類学者との研究課題に関する建設的な対話を積み重ねることができた。今後、さらにこの流れをすすめる、館内の写真、動画資料を活用したワークショップの積極的な提案や本館展示への協力をおこなっていく予定である。

◎出版物による業績

[カタログ]

下道基行

2017 『風景に耳を澄ますこと』（個展カタログ）、愛知：Michi Laboratory。

[新聞など]

下道基行

2016 「14歳と世界と境」『山陽新聞』連載全10回。

2016 「みんなの路地裏探訪」『月刊みんな』40(10)：5-6。

◎口頭発表展示・その他の業績

・ワークショップ

2016年10月29日 ワークショップ「見えない風景——葉山編」神奈川県立美術館

2016年8月21日 ワークショップ「太古の風景に耳をすますこと」黒部市美術館

2016年7月 ワークショップ「14歳と世界と堺」岡山市立富山中学校

2017年1月 ワークショップ「14歳と世界と堺」マレーシアクアラルンプール市内の中学校

・研究講演

2017年1月28日 「現代美術館におけるアーカイブ」国立新美術館開館10周年記念シンポジウム『「アーカイブ」再考——現代美術と美術館の新たな動向』国立晋美術館

・展示

2016年8月 個展「風景に耳をすますこと」黒部市美術館、富山

2016年9月 企画展「アッセンブリッジ・ナゴヤ 2016」港まちポットラックビル、愛知

2016年9月 《新しい骨董》企画展「さいたまトリエンナーレ2016」

2016年10月 企画展「岡山芸術交流2016」後楽館高校跡、岡山

2016年11月 企画展「美つくりの里・旅するアート2016」津山文化センター、岡山

2016年 企画展「Soil and Stones, Souls and Songs」Museum of Contemporary Art、フィリピン

2017年2月 企画展「ESCAPE from the SEA」マレーシア国立美術館、マレーシア

◎調査活動

・国内調査

宮古島八重山諸島のフィールドワークによる「津波石」調査と撮影記録

外国人研究員 客員

■研究戦略センター・超領域研究部門

BUCHOWSKI, Michał [ブホフスキ ミハル]——教授

任期：2016年12月1日～2017年9月30日

研究課題：日本の関西地方における移民に関する文化人類学的研究

1955年生。【学歴】 アダム・ミツケヴィチ大学（AMU Poznań）修士課程（民族学）修了（1979）、アダム・ミツケヴィチ大学（AMU Poznań）博士課程（人類学）修了（1983）、アダム・ミツケヴィチ大学（AMU Poznań）Doctorus Habilitatus（社会学・哲学）取得（1990）【学位】 修士（アダム・ミツケヴィチ大学 1979）、博士（アダム・ミツケヴィチ大学 1983）、Doctorus Habilitatus（アダム・ミツケヴィチ大学 1990）【専攻・専門】 移民、差別、移動の社会人類学、ヨーロッパ地域研究【所属学会】 ヨーロッパ社会人類学会、ポーランド人類学会

【主要業績】

[単著]

Buchowski, M.

2001 *Rethinking Transformation: An Anthropological Perspective on Postsocialism*. Poznań: Humaniora.

2004 *Zrozumieć Innego. Antropologia racjonalności* (To understand the Other: an anthropology of rationality). Kraków: Jagiellonian University Press.

2012 *Etnologia polska. Dzieje i powinowactwa* (Polish ethnology: history and intellectual relationships). Poznań: Nauka i Innowacje 2012.

【受賞歴】

1994 ブロンズクロス賞（ポーランド大統領賞）

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

日本の関西地方における移民に関する文化人類学的研究

・研究の目的、内容

経済のグローバル化と世界各地の紛争の影響で、多数の人びとが移民や難民として欧米諸国などに移動しつつある。ヨーロッパや日本において、移民問題は、特に受け入れ国にとって政治的、経済的、社会的、文化的な問題となっている。ヨーロッパにおける移民研究を行ってきたが、本プロジェクトでは日本の関西地域における移民の実態に関して調査研究を行い、移民に関する比較研究を行いたい。

民博滞在中に、次の3つの互いに関連するテーマの研究を行う予定である。

a) 移民に対する国家政策と政府の姿勢

国家の移民政策については、政府の公式文書やプレスリリースの調査および政府関係者へのインタビュー調査を実施し、データを収集する。

b) 日本国民の移民への意見や態度

関西地区在住の日本国民が、移民について、また社会における移民の存在と役割をどのように考え、移民に対してどのような態度や行動をとっているかについて、インタビュー調査や参与観察調査を行う。

c) 日本での移民の生活状況と生活

移民が日本においてどのような生活を送っているかについて、インタビューと参与観察調査を行う。また、日本社会の「もてなしのこころ」について、移民がどう認識しているかについても調査を行う。

以上の調査を踏まえて、ヨーロッパの移民との比較研究を行う。

◎出版物による業績

[論文]

Buchowski, M.

2016 Tolerancja po polsku. Etnologiczna rozprawa z mitem (Tolerance, Polish-style. An ethnological tussle with the myth). In A. Gulczyński (ed.), *Uniwersyteckie Wykłady na Zamku: Uniwersalne wartości w uniwersyteckim dyskursie*, pp.51-67. Poznań: Adam Mickiewicz University Press. (in Polish)

2016 Nauka jako pole (samo)kolonizacji. Przykład antropologii społeczno-kulturowej (Science as a field of self-colonisation). In w: red. Jan Kieniewicz (ed.), *Perspektywy postkolonializmu w Polsce, Polska w perspektywie postkolonialnej*, pp.21-37. Warszawa: Wydział „Artes Liberales” Uniwersytetu Warszawskiego. (in Polish)

2016 Making anthropology matter in the heyday of islamophobia and the ‘refugee crisis’: The case of Poland, *Český lid: etnologický časopis* 103(1): 51-67. (in English)

2016 Význam antropologie v době vzestupu islamofobie a ‘uprchlické krize’: případ Polska. *Český lid: etnologický časopis* 103(1): 69-84. (in Czech)

2016 Mutual encounters. *Lud* 100: 47-60. (in English)

2017 Antropologia kultury a antropologia kulturowa. Kilka refleksji na marginesie książki Grzegorza Godlewskiego. *Filo-sofija* 36: 213-228. (in Polish)

2017 Moieties, lineages and clans in Polish Anthropology before and after 1989. In A. Barrera, M. Heintz and A. Horolets (eds.), *European Anthropologies*, pp.187-210. Oxford-New York: Berghahn Publishers. (in English)

[書評]

Buchowski, M.

2016 *Nowa Huta: Generations of Change in a Model Socialist Town* by Kinga Pozniak, Pittsburgh: University of Pittsburgh Press, 2014, 240 pp. *American Anthropologist* 118(3): 688-689 (DOI 10.1111/aman.12614) [review].

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年4月7日

Nieobecni “Obcy”: o tzw. kryzysie uchodźczym i islamofobii oraz polskiej (nie-)tolerancji (Absent Others): Ośrodek Teatralny Kana, Szczecin (Poland).

- 2016年 4月 2日～ 4月 14日 *Romowie- wyzwania dla Europy* (Roma- a challenge to Europe), panel chair, 26th „Days of French Culture: Roma’s France”; Poznań (Poland).
- 2016年 4月 20日 *Migranci w Poznaniu – nowe możliwości czy problemy* (Migrants in Poznań), with Agata Kochaniewicz, Poznań (Poland).
- 2016年 5月 8日 *Postsocialist anthropology from within*. IUAES Intercongress“World Anthropologies and privatisation of knowledge: engaging anthropology in public”, Dubrovnik (Croatia).
- 2016年 5月 4日～ 5月 8日 *Anthropology and anthropologists in Poland*. “World Council of Anthropological Associations Panel Stream: Global Survey of Anthropological Practice”IUAES Intercongress – World Anthropologies and privatisation of knowledge: engaging anthropology in public; Dubrovnik (Croatia).
- 2016年 7月 12日～ 7月 15日 *The Invention of Refugee Studies*, panel discussion. Conference: “Rethinking Forced Migration and Displacement: Theory, Policy and Praxis”. International Association for the Study of Forced Migration (IASFM), Poznań (Poland).
- 2016年 7月 20日～ 7月 23日 *“Refugee crisis”, European reactions and the role of anthropology* – panel co-organizer. Conference: “Anthropological Legacies and Human Futures”, European Association of Social Anthropologists Biannual Conference, Milan (Italy).
- 2016年 7月 20日～ 7月 23日 *What was postsocialism? At least for anthropology*. Conference: “Anthropological Legacies and Human Futures”. European Association of Social Anthropologists Biannual Conference, Milan (Italy), 20-23.07.2016.
- 2016年 9月 14日～ 9月 17日 *Dialektyka świeckiego i sakralnego w kulturze a quasi-religijne hierarchizowanie ludzi* (Dialectics of profane and sacred). 16th Nationwide Sociological Congress. Polish Sociological Society, Gdańsk (Poland).
- 2016年 9月 22日～ 9月 23日 *Nietolerancja jako zaprzeczenie europejskości* (Intolerance as a denial of Europeaness). Conference: „Jaka refleksja o kulturze jest dzisiaj potrzebna Europie?” (What reflexion on culture is needed in Europe). Polish Ethnological Society Annual Conference, Wrocław (Poland).
- 2016年 9月 26日～ 9月 28日 *Migrantofobia a sekurytyzacja: wprowadzenie do tematu* (Migrant-phobia and securitisation). Conference: „Europa w obliczu wielkich migracji” (Europe facing big migrations). Poznań (Poland).
- 2016年 10月 16日 *CieŜar pamięci: Polacy - Niemcy - Żydzi*, panel discussion (Burden of memory: Poles – Jews – Germans). National Museum in Poznań (Poland).
- 2016年 10月 23日～ 10月 24日 *Phantom Islamophobia in Poland: Anthropological Interpretation of Hate Against an Absent Other*. Conference“Islamophobia in the East of the European Union”. University of Toronto & Czech Academy of Sciences; Prague (Czech Republic).
- 2016年 6月 10日～ 6月 11日 *What spaces for political anthropology?* panel member. Conference: “Spaces of the political”. Institute of Ethnology and Cultural Anthropology, University of Warsaw, Poland.
- 2016年 10月 4日 *From quasi-religious communism to post-communist religious fundamentalism to refugees-phobia in Central Europe*. Series: Professorial Lectures Series; Faculty of Social and Economic Sciences, Komensky University, Bratislava (Slovakia).
- 2016年 11月 16日 *New European Orientalism* – panel discussant. Institut für die Wissenschaften dem Menschen. Wien (Austria).

蔡 志祥 [チョイ チーチョン] 教授

任期：2016年8月1日～2017年7月27日

研究課題：東南アジア華人における集団祭祀の変遷

【学歴】 国立台湾大学卒（1978）、香港中文大学大学院歴史学専攻碩士課程修了（1981）、東京大学大学院人文科学研究科博士課程修了（1989）【職歴】 香港中文大学人類学系助手（1979）、香港歴史博物館研究助理（1984）、香港政府档案局助理档案主任（1988）、マカオ東亜大学社会科学院助教授（1989）、マカオ大学社会科学院助教授（1990）、香港科技大学人文学系講師（1991）、香港科技大学人文学系准教授（1997）、香港中文大学歴史学系教授（2006）【学位】 文学博士【専攻・専門】 社会史学、商業史、華僑史、歴史人類学【所属学会】 皇家亞洲學會香港分會、華南研究會

【主要業績】

[編著]

蔡志祥・黄永豪・謝曉輝編

2017 『邊陲社會與國家建構』臺北：稻鄉出版社（中国語）。

蔡志祥・韋錦新編

2014 『延續與變遷——香港社區建醮傳統的民族志』香港：香港中文大学出版社（中国語）。

[単著]

蔡志祥

2000 『打醮——香港的節日與地域社會』香港：三聯書店（中国語）。

[論文]

CHOI, Chi-cheung

2014 Rice, treaty ports and the Chaozhou Chinese Lianhao Associate companies: construction of a South China-Hong Kong-Southeast Asia commodity network 1850s-1930s. In Y. Lin and M. Zelin (eds.) *Merchant Communities in Asia, 1600-1980*, pp.53-77. London: Pickering & Chatto Publishers Ltd.

CHOI, Chi-cheung

2010 Stepping out? Women in the Chaoshan Emigrant Communities, 1850-1950. In H. F. Siu (ed.) *Merchants' Daughters: Women, Commerce, and Regional Culture in South China*.

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

東南アジア華人における集団祭祀の変遷

・研究の目的、内容

神戸の華人の盆行事（救贖儀礼）の変遷について研究を進めると同時に、東南アジア地域の華人が1941-45年の日本占領期に救贖儀礼などの集団祭祀をいかに行っていたかを、日本に収蔵されている歴史資料を入手して進める。占領期の研究は従来、ほとんど解明されていないが、系統だった調査をすれば、必要な史料を入手し得る可能性が、シンガポールでの同じテーマの調査の経験から示唆される。

また、お盆行事に関して、これまで各地の華人に関して研究してきた成果をまとめて、シンポジウムで発表するとともに、植民地政府の文化的・宗教的政策、戦中および戦後に日本にいた中国人が、如何に死と祖先に相対していたかについても調査研究を進める。

・成果

神戸の華人の盆行事（救贖儀礼）ならびに東南アジアの華人の救贖儀礼については、2017年3月4日ならびに5日に国立民族学博物館で開催された国際シンポジウム「現代アジアにおけるお盆・中元節・七月の祭り——あの世とこの世をめぐる儀礼」にて研究報告をおこなった。その成果は論文として執筆し、中国語ならびに日本語で刊行するために、編集作業を進めている。

◎出版物による業績

[編著]

蔡志祥・黄永豪・謝曉輝編

2017 『邊陲社會與國家建構』臺北：稻鄉出版社（中国語）。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウム

2016年10月22日 「総合討論コメント」国際シンポジウム「中国における歴史の資源化——その現状と課題に関する人類学的分析」国立民族学博物館

2017年3月4日 「鎮魂劇から歌舞台へ——中元普渡の娯楽、パフォーマンス、儀礼」国際シンポジウム「現代アジアにおけるお盆・中元節・七月の祭り——あの世とこの世をめぐる儀礼」国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年12月16日 「歴史人類学におけるフィールドワーク教育と推進——香港の経験」山口県立大学

2017年2月18日 “On Religion and Transnational Identity”, Plenary speech, Asian Diasporas: Transnational & Regional Cultural Heritages, organized by Culture Academy, Ministry of Culture Community and Youth, Singapore, at Ngee Ann Auditorium, Asian Civilizations Museum, Singapore (in English)

COPEMAN, Jacob [コープマン、ジェイコブ]——准教授

任期：2016年9月1日～12月28日

研究課題：南アジアにおける献血運動とグル（宗教リーダー）に関する人類学的研究

【学歴】 ランカスター大学英文学部卒（2001）、ケンブリッジ大学修士課程社会人類学修士号（トート・ディグリー）（2002）、ケンブリッジ大学修士課程社会人類学修士号（リサーチ・ディグリー）（2003）、ケンブリッジ大学博士課程社会人類学博士号取得（2008）**【職歴】** ケンブリッジ大学ジーザスカレッジジュニア・リサーチ・フェロー（2006）、エディンバラ大学政治社会学研究科社会人類学分野シニア・レクチャラー（2009）**【学位】** 博士（社会人類学）（ケンブリッジ大学 2008）**【専攻・専門】** 社会人類学

【主要業績】

[単著]

Copeman, J.

2009 *Veins of Devotion: Blood Donation and Religious Experience in North India*. Rutgers University Press.

[編著書]

Copeman, J. and A. Ikegame (eds.)

2012 *The Guru in South Asia: New Interdisciplinary Perspectives*. Oxon: Routledge.

[論文]

Copeman, J.

2015 ‘Secularism’s Names: Commitment to Confusion and the Pedagogy of the Name.’ *South Asia Multi-disciplinary Academic Journal (SAMAJ)* 12: 2-22.

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

南アジアにおける献血運動とグル（宗教リーダー）に関する人類学的研究

・研究の目的

民博はエディンバラ大学と Memorandum of Understanding を交わしており、学生・教員の積極的な交流が期待されている。コープマン准教授は、この協定をさらに進展させ、現代南アジア地域研究センター（MINDS）とエディンバラ大学南アジア研究センターのネットワーク構築にむけて活動を行う。研究課題である、南アジアにおけるグル（宗教リーダー）による献血運動は、受け入れ教員である松尾准教授が行っているサブスタンス研究に直接関連する研究であり、共同研究を行う。特に定期的な輸血を必要とするセラセミア（先天性の溶血性貧血）に着目した研究を行い、共同研究の成果論集に貢献する。

・成果

民博の教員との連携と将来の研究計画の推進を主に行った。11月に現代南アジア地域研究・民博拠点（MINDAS）のセミナーで、‘Anti-sacrifice: Blood Donation and the “Philanthropic Share” と題する講演を行った。この講

演会を通じ、研究者や学生との交流をさらに推進し民博の教員とエディンバラ大学南アジア研究センターの関係がより強固になるよう議論した。

また、エディンバラ大学社会人類学分野と密接な関係にあるスコットランド博物館と民博の専門性を活用し、サブスタンスをテーマとした連携展示を将来行う計画を受け入れ教員の松尾瑞穂准教授と共に考案した。さらに、松尾准教授が代表を務める身体サブスタンスの共同研究の成果論集に寄稿した。民博とエディンバラ大学の更なる連携強化のため、松尾瑞穂准教授の研究プロジェクトの最終年度にエディンバラ大学のワークショップ計画を共同で作成した。

他の研究発表としては、民博の研究懇談会で“The Social Life of Blood Donation in India: Devotion, Asceticism and the Guru”（インドにおける献血運動に関する社会生活：信仰心、禁欲主義とグル）、および、東京大学東洋文化研究所において“Ungiven: Bodily Philanthropy as Partonomic Critique”と題する講演を実施した。また、神戸で開催された日本南アジア学会の全国大会にも参加を行っている。

以上の活動を通じて、日本の南アジア専門の研究者と将来性あるネットワークを構築し、民博とエディンバラ大学の学術交流を進展させた。さらに、近刊予定の単著である献血とグルに関する研究を勧め、中心にあたる3章半を執筆した。

◎出版物による業績

[その他]

Copeman, J. and Madeleine Reeves

2016 Tod Hartman, 1978-2016 Obituaries. (<http://www.therai.org.uk/archives-and-manuscripts/obituaries/tod-hartman>) Royal Anthropological Institute.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2016年11月21日 「Bodily Philanthropy as Partonomic Critique」MINDAS第1回セミナー、国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年11月25日 「Anti-sacrifice: Blood Donation and the 'Philanthropic Share」東文研セミナー／日本南アジア学会第68回月例懇話会、東京大学

2017年3月1日 'Names in the scene of instruction', Centre for Political Studies, Jawaharlal Nehru University, New Delhi, India

・民博研究懇談会

2016年10月26日 「The Social Life of Blood Donation in India: Devotion, Asceticism and the Guru」第275回民博研究懇談会、国立民族学博物館

ENGBERG-PEDERSEN, Elisabeth [エンゲベルグ・ペデルセン、エリザベト]——— 教授

任期：2016年7月19日～2017年1月30日

研究課題：日本手話とデンマーク手話におけるモダリティ表現（特に認識様態モダリティと証拠性）の記述と音声言語との比較に基づく分析

1952年生。【学歴・学位】BA in Danish, University of Copenhagen (1971)、BA in linguistics, University of Copenhagen (1976)、MA in linguistics, University of Copenhagen (1979)、PhD with a thesis on Danish Sign Language, University of Copenhagen (1993) 【職歴】Research assistant, University of Copenhagen, and teaching and research positions at The Centre for Sign Language, Copenhagen (1980-1982)、Research grant, Department of Applied and Mathematical Linguistics, University of Copenhagen (1982-1985)、Assistant professor of the psychology of language, Department of General and Applied Linguistics, University of Copenhagen (not tenure-tracked) (1985-1989)、Research coordinator, The Centre for Sign Language, Copenhagen (1989-1992)、Post-doc position, Department of General and Applied Linguistics, University of Copenhagen (1992-1993)、Associate professor of linguistics, Department of Nordic Studies and Linguistics, University of Copenhagen (1994-2009)、Professor of applied linguistics, Department of Nordic Studies and Linguistics, University of Copenhagen (2009-) 【専攻・専門】The syntax and semantics of sign languages, Language and autism, Functional-cognitive grammar 【所属学会】Lingvistikredsen i København (The Linguistic Circle of Copenhagen), Scandinavian Association for Language & Cognition, International Cognitive Linguistics Association

【主要業績】

[単著]

ENGBERG-PEDERSEN, E.

1993 *Space in Danish Sign Language: the semantics and morphosyntax of the use of space in a visual language*. Hamburg, Germany: Signum Press.

[論文]

ENGBERG-PEDERSEN, E.

2015 Perspective in signed discourse: the privileged status of the signer's locus and gaze. *Open Linguistics 1*, pp.411-431.

ENGBERG-PEDERSEN, E., and R. V. Christensen

2017 Mental states and activities in Danish narratives: children with autism and children with language impairment. *Journal of Child Language*, 44(5): 1192-1217.

【受賞歴】

2017 The Deaf Foundation, The Augustinus Foundation

2016 Oticon Foundation

2011 Language and Cognition – Perspectives from Impairment, Independent Research Fund Denmark

2011 Elected member of the Royal Danish Academy of Sciences and Letters

2002 Lundbeck Foundation, grant for technical equipment

1994 The Castberg prize

1992 Danish Research Council for the Humanities and Lillian and Dan Fink's Foundation, support for the publication

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

日本手話とデンマーク手話におけるモダリティ表現（特に認識様態モダリティと証拠性）の記述と音声言語との比較に基づく分析

Describing modality expressions in Danish Sign Language and Japanese Sign Language with a special focus on epistemic modality and evidentiality) and a comparison with spoken languages

◎出版物による業績

[論文]

ENGBERG-PEDERSEN, E. and Ditte Boeg Thomsen

2016 The socio-cognitive foundation of Danish perspective-mixing dialogue particles. In B. Dancygier, W.-I. Lu, and A. Verhagen (eds.) *Linguistic manifestations of mixed points of view in narratives*, pp.125-142. Berlin, Germany: de Gruyter Mouton.

Boye, Kasper and E. Engberg-Pedersen

2016 Substance and structure in linguistics: Workshop at the University of Copenhagen, February 27-28, 2015. *Acta Linguistica Hafniensia* 48(1): 5-6.

ENGBERG-PEDERSEN, E. and Rikke Vang Christensen

2017 Mental states and activities in Danish narratives: children with autism and children with language impairment. *Journal of Child Language* 44: 1192-1217.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年11月8日 'Why do languages sound or look the way they do?' University of Tohoku, Sendai

2017年3月30日～3月31日 'The open hand supine as an expression of modality in Danish Sign Language.' Workshop: Connecting discourse in speech and gesture. Lund University, Sweden.

・研究講演

2016年12月12日 'Deaf children in Denmark 2016', Meisei Gakuen.

・民博研究懇談会

2017年1月25日 「手話言語における（不）確実性表現」第276回民博研究懇談会

ORBELYAN, Gevorg [オルベイアン、ゲヴォルグ] 准教授

任期：2015年12月14日～2016年11月24日

研究課題：博物館とコミュニティのあり方に関する博物館人類学的研究

【学歴】 エレヴァン国立教育大学卒・エレヴァン国立教育大学大学院修士課程一貫修了（2005）【職歴】 エレヴァン歴史博物館古代中世部上級専門官（2005）、モスクワ LUDING 株式会社 ウェブサイト専任翻訳者兼通訳者（2006）、エレヴァン歴史博物館古代中世部上級専門官（2007）、エレヴァン歴史博物館展示デザイン部門長（2008）、エレヴァン市観光開発投資部門、観光促進プログラム（2011）、エレヴァン市立博物館副館長（2012-）【学位】 修士（エレヴァン国立教育大学文化学部大学院修士課程）【専攻・専門】 文化学

【主要業績】

[著書]

Orbelyan, G.

2011 *Welcome to Yerevan*. Yerevan: Yerevan History Museum.

[論文]

Orbelyan, G.

2011 Tourism Development Perspectives and Current Status In Yerevan, *Museum* 3: 266-70.2011 Exhibition Making in Museums, *Museum* 2: 207-15.

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

博物館とコミュニティのあり方に関する博物館人類学的研究

これまで博物館活動の現場で実績を挙げたかわら、「18世紀のエレヴァンを訪れた外国人」に関する歴史的研究、「エレヴァンの博物館を訪れる人々の実態についての研究」、「エレヴァン市における広場と公園の歴史」、「博物館における展示作成の実務」について考察、「エレヴァンにおける観光開発の展望と現状」、「世代間の対話フォーラムとしての博物館と展示」の役割に関する構想など、理論面でも研究を重ねてきたが、今年度は、これらの研究を発展させると同時に、日本における各種博物館の展示と公共空間の利用法及びコミュニティとの連携などの比較研究を行った。

・成果

今年度は、本館客員准教授として、①国立民族学博物館の機関研究「文化遺産の人類学」、②機構本部基幹研究「日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築にかかる事前調査」、③追手門学院大学との協定に基づく共同研究「地域文化の継承と創造」などに参加して、国内の博物館と地域コミュニティについての実地調査を行うとともに研究会などで報告発表を行った。また来日日程が今年度の国際研修「博物館学コース」の期間に少し重なるため、その期間中に研修に積極的に関与すると同時に、研修後のコース改良についても助言を行った。

◎出版物による業績

[その他]

Orbelyan, G.

2016 Armenia: The Holly Land. *Kikan Minzokugaku* (『季刊民族学』) No.157, pp.61-92, 大阪：千里文化財団。2016 Yerevan: the oldest city which is 2800 years old. *Kikan Minzokugaku* (『季刊民族学』) No.158, pp.26-35, 大阪：千里文化財団。2016 Armenian traditional Weddings in the city life. *Kikan Minzokugaku* (『季刊民族学』) No.158, pp.36-48, 大阪：千里文化財団。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年4月24日～4月26日 'Localization process indicators of sustainable tourism development of rural

areas in Armenia.' International Symposium "Gathering to Share Hiroshima's Desire for Peace", Hiroshima

2016年7月3日～7月9日 'Marketplace of Exhibitions and Ideas.' The second International Conference "Museums and Cultural Landscape: Communicating, Connecting and Innovating with Style", Milan, Italy

・ 広報・社会連携活動

2016年5月7日 「Yerevan: the garden city」吹田市博物館ギャラリートーク

2016年10月9日 「ハチュカル——拓本づくりでまなぶアルメニア十字架 Making Taku-Hon through Armenian Khachkar」ワークショップ、国立民族学博物館

アルメニア：

<https://armenpress.am/arm/news/862052/tchaponiayum-hayastani-ankakhutyan-25-amyakin-nvirvats-cucah-andes.html>

<http://yhm.am/archives/8500>

・ 展示

2016年10月11日～10月29日 イベント企画「ハチュカル——アルメニアの十字架石碑をめぐる物語」

・ 民博研究懇談会

2016年9月14日 「博物館の活性化 Animating Museums」第274回民博研究懇談会

・ その他

2016年12月15日 エレヴァン歴史博物館職員への特別講義（JICA 普及プログラム）「国立民族学博物館（日本）における経験と研究活動について」

2016年9月26日～11月24日（研修は12月17日までだが招聘終了により帰国） JICA 課題別研修コース「博物館とコミュニティ開発 Museums and communities」へのオブザーバー参加

SAM, Sam-Ang [サム サムアン]————— 教授

任期：2015年8月3日～2016年7月29日

研究課題：無形文化遺産保護における学術的映像資料の活用についての研究

【学歴】カンボジア王立芸術大学ディプロム・エス・アール修了（1970）、カンボジア王立芸術大学バカロレア・エス・アール修了（1973）フィリピン大学音楽院作曲科卒（1977）コネチカット大学卒（1983）コネチカット大学修士課程修了（1985）ウェスリヤン大学博士課程修了（1988）【職歴】コネチカット大学講師（1980）、コーニッシュ芸術大学音楽部講師（1988）、ワシントン大学音楽部講師（1989）、カンボジア・ネットワーク評議会（アメリカ合衆国）ディレクター（1992）、カンボジア王立芸術大学教授（1992）、ザルツブルグ研究所（ドイツ）客員教授（1999）、国立民族学博物館外国人研究員（2001）、クメール文化協会（アメリカ合衆国）会長（2003）、パンニャシャストラ大学（カンボジア）教授・学部長（2004-）、パンニャシャストラ・インターナショナルスクール（カンボジア）校長（2005）、カンボジア共和国文化芸術省顧問（2008-）、国立民族学博物館外国人研究員（2009）【学位】博士（ウェスリヤン大学 1988）、修士（コネチカット大学 1985）【専攻・専門】民族音楽学

【主要業績】

Pich Tum Kravel and Sam-Ang Sam

2014 *History of Khmer Kings*. Phnom Penh: Pich Tum Kravel & Sam-Ang Sam.

Sam, Sam-Ang

2010 *Music in the Lives of the Indigenous Ethnic Groups in Northeast Cambodia*. Phnom Penh: PUC University Press.

2002 *Musical Instruments of Cambodia*. Osaka: National Museum of Ethnology.

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・ 研究課題

無形文化遺産保護における学術的映像資料の活用についての研究

・研究の目的、内容

ユネスコの無形文化遺産保護条約等により、各国の文化政策において無形文化遺産の保護が占める位置が大きくなってきている。サム教授は、長年、研究者および演奏家として、カンボジアの伝統芸能に携わる一方、近年は文化芸術省の顧問としてカンボジアの文化政策にも深くかかわっている。また、民博は、サム教授の協力により、1999年度にカンボジアの古典芸能の諸ジャンル、および、2005年度に北東部少数民族のゴング音楽を映像で記録した。特に、1999年度の映像取材においては、後にユネスコ無形文化遺産代表リストに記載された古典舞踊と影絵芝居スバエク・トムの映像記録もおこなっている。そこでこれらの映像を事例として取り上げ、無形文化遺産保護において民博製作の映像資料を活用する方法とその問題点について研究を進める。

・成果

第1の成果として、スバエク・トム全7エピソードの英語字幕版の映像が完成した。これにより、より広く記録映像を活用する可能性が生まれた。一方、民博が記録した約14時間に及ぶスバエク・トムの全レパートリーの詳細な学術的記録映像は貴重な資料であるが、30分程度の紹介映像に比べ、目に見える活用が進まないのも事実である。これは、文字資料と異なり、任意の箇所をピンポイントで参照しにくい映像の特質を反映していると考えられる。この研究では、さらに関連する文字資料等の充実をはかり、相互に対照できる資料群を形成して、長時間に及ぶ記録映像の参照性を高めることをめざした。その成果として、スバエク・トムの全レパートリーのテキストを中心とした書籍の草稿をほぼ完成させた。この草稿は、SESとして出版することを目指し、出版委員会に提出する予定である。

これらの成果により、民博が制作したスバエク・トムの映像記録の活用をさらに高めることができると考えられる。今後、サム教授との協力関係をさらに発展させ、カンボジアにおける映像上映会の開催、文化芸術省映像局や映画監督リテイ・パン氏が設立したボバナ映像音響資料センター等、しかるべき機関における映像の公開などをおこない、カンボジアの無形文化遺産保護において映像記録が果たしうる役割について、さらに共同研究を進めたい。

◎映像音響メディアによる業績

・国立民族学博物館映像音響資料の制作・監修

Terada Yoshitaka, Fukuoka Shota, Samang Sam (Supervision)

2016 *Sbaek Thomm Episode 1: Preah Ream Constructing the Causeway*. (英語版、142分13秒), National Museum of Ethnology.

Terada Yoshitaka, Fukuoka Shota, Samang Sam (Supervision)

2016 *Sbaek Thomm Episode 2: Bunhakay*. (英語版、136分12秒), National Museum of Ethnology.

Terada Yoshitaka, Fukuoka Shota, Samang Sam (Supervision)

2016 *Sbaek Thomm Episode 3: Sar Neakabah: Magically Produced Naga Arrows*. (英語版、107分42秒), National Museum of Ethnology.

Terada Yoshitaka, Fukuoka Shota, Samang Sam (Supervision)

2016 *Sbaek Thomm Episode 4: Battle of Kampann and Hanuman*. (英語版、100分21秒), National Museum of Ethnology.

Terada Yoshitaka, Fukuoka Shota, Samang Sam (Supervision)

2016 *Sbaek Thomm Episode 6: Will of Sukkachar*. (英語版、160分8秒), National Museum of Ethnology.

Terada Yoshitaka, Fukuoka Shota, Samang Sam (Supervision)

2016 *Sbaek Thomm Episode 7: Will of Inthochitt*. (英語版、178分16秒), National Museum of Ethnology.

蔡 素娟 [ツァイ ジューン・スーチュアン] ————— 教授

任期：2016年4月13日～7月12日

研究課題：台湾手話と日本手話の語彙におけるバリエーションを歴史的観点から分析する

【学歴・学位】 B.A. Chinese Literature, National Taiwan University, Taiwan, R.O.C (1975)、Ph.D. in Linguistics, University of Arizona, Tucson, USA (1994) 【職歴】 Postdoctoral Research Fellow, Departments of Psychology, Linguistics, and Communicative Disorders and Sciences, State University of New York at Buffalo, USA (1993-1995)、Associate Professor, Graduate Institute of Linguistics National Chung Cheng University, Taiwan, R.O.C. (1995-2004)、Director, Graduate Institute of Linguistics National Chung Cheng University, Taiwan, R.O.C. (2001-2007)、Professor, Graduate Institute of Linguistics National Chung Cheng University, Taiwan, R.O.C.

(2004-), Acting Dean, College of Humanities National Chung Cheng University, Taiwan, R.O.C. (2005), Acting Dean, College of Humanities National Chung Cheng University, Taiwan, R.O.C. (2009), Dean, College of Humanities National Chung Cheng University, Taiwan, R.O.C. (2010-2016) 【専攻・専門】 Theoretical Phonology, Laboratory Phonology, Experimental Phonetics, Child Language Acquisition, Child Language Corpus, Corpus Linguistics, Chinese Dialectology, Sign Language Linguistics

【主要業績】

[論文]

TSAY, J.

2014 A Phonological Corpus of L1 Acquisition of Taiwan Southern Min. In J. Durand (ed.), *the Oxford Handbook of Corpus Phonology*, pp.576-587. UK: Oxford University Press.

TAI, J. H.-Y. and J. Tsay

2015 Taiwan Sign Language. In J. B. Jepsen, G. de Clerck, S. L. Kiingi and W. B. McGregor (eds.), *Sign Languages of The World*, pp.771-809. Germany: De Gruyter Mouton.

[共著]

TSAY, J., J. H.-Y. Tai and Y. Chen

2015 *Taiwan Sign Language Online Dictionary. 3rd Edition*. Institute of Linguistics, National Chung Cheng University, Taiwan. <http://tsl.ccu.edu.tw/> (electronic publication)

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

Dialectal Variation in the Lexicon of Japanese Sign Language and Taiwan Sign Language: A Historical Perspective

・研究の目的、内容

Taiwan Sign Language (TSL) and Japanese Sign Language (JSL) are historically related. During the Japanese occupation of Taiwan (1895-1945), Japanese deaf educators brought JSL to Taiwan and JSL became the official sign language used in deaf schools in Taiwan. It has been reported that, roughly speaking, deaf educators from the Osaka area went to the south area of Taiwan, and deaf educators from the Tokyo area went to the north. Therefore, some lexical items in TSL show dialectal variations between the south and the north. After Japanese teachers left Taiwan in 1945, TSL has developed independently (except for the language contact with Chinese Sign Language after Chinese deaf educators started to come to Taiwan after 1949). The goal of this study is to find the JSL origin of TSL words with reference to dialectal differences when relevant. During the three months (April 13 to July 12, 2016) when I was at Minpaku, videos of JSL signers from the Osaka area were collected using two wordlists. Each word was analyzed in four phonological features (handshape, location, movement, orientation) and was compared with the south and north varieties of TSL. The Osaka JSL data were also compared with the Tokyo JSL data which I had collected before I came to Minpaku.

・成果

There were two wordlists used for the comparison of TSL and JSL. List 1 contains 50 words which show dialectal (North-TSL vs. South-TSL) variations. List 2 is a subset of the 207-word Swadesh list (words for basic concepts for historical-comparative linguistics). Based on the 741 tokens from Word List 1 and 241 tokens from Word List 2, the preliminary results show that: (1) There were more variations than we expected among the six JSL signers (3 recorded in Tokyo and 3 recorded in Osaka). For example, the word ENOUGH had 10 variants. This might lead to yet another line of research with the focus of JSL dialectal distribution. (2) Among the 50 words on List 1, 21 words were either same or similar between TSL and JSL, while 29 were different. (3) Among the 45 words in List 2, 21 were either same or similar between TSL and JSL, while 24 were different. (4) The same/similar words might have their JSL origin, but they don't necessarily match the North TSL-Tokyo JSL vs. South TSL-Osaka JSL as generally assumed based on the early history of TSL. (5) The overlapping in the lexicon between TSL and JSL

might not be as large as we anticipated. This could be due to the language contact with Chinese Sign Language (CSL) which was brought to Taiwan by deaf educators from Nanjing and Shanghai, China, since 1949. This is another historical stratum of TSL that will be explored in future research. (6) After taking iconicity into consideration, there should be a more precise picture about TSL lexicon with respect to their JSL origin. (7) After the more detailed analysis is completed based on the current data, there should be interesting implications for various issues in historical linguistics. The support from Minpaku is highly appreciated. Minpaku will be acknowledged whenever the data collected during this period of time are used or cited.

◎出版物による業績

[論文]

TAI, J. H.-Y. and J. Tsay

2017 Sign Languages: Taiwan. In R. Sybesma, W. Behr, Y. Gu, Z. Handel, C.-T. J. Huang and J. Myers (eds.) *Encyclopedia of Chinese Language and Linguistics IV*, pp.92-99. Leiden & Boston: Brill Academic Publishers.

TSAY, J.

2017 Acquisition of Taiwanese, L1. In R. Sybesma, W. Behr, Y. Gu, Z. Handel, C.-T. J. Huang and J. Myers (eds.) *Encyclopedia of Chinese Language and Linguistics I*, pp.82-86. Leiden & Boston: Brill Academic Publishers.

2017 Acquisition of Tone, L1. In R. Sybesma, W. Behr, Y. Gu, Z. Handel, C.-T. J. Huang and J. Myers (eds.) *Encyclopedia of Chinese Language and Linguistics I*, pp.86-92. Leiden & Boston: Brill Academic Publishers.

◎映像音響メディアによる業績

[オンライン辞書]

TSAY, J., J. H.-Y. Tai and R.-H. Hwang

2016 *Taiwan Sign Language Online Dictionary App*. Institute of Linguistics, National Chung Cheng University, Taiwan.

◎口頭発表・展示・その他の業績

- ・国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2016年9月25日 'Communicative Efficiency in Sign and Speech: A Longitudinal Study.' The 5th Meeting of Signed and Spoken Language Linguistics. National Museum of Ethnology, Japan.

- ・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2017年3月10日～3月12日 'The Role of Markedness in Hearing L2 Users of Taiwan Sign Language.' (Paper presented) The International Conference on Theoretical East Asian Psycholinguistics. The Chinese University of Hong Kong, Hong Kong.

- ・民博研究懇談会

2016年6月29日 「止まるべきか止まらざるべきか——音声言語と手話言語の韻律的特徴の比較」第272回民博研究懇談会

◎調査活動

- ・国内調査

2016年4月13日～7月12日—大阪 (Field work in the Osaka area on lexical comparison of Japanese Sign Language and Taiwan Sign Language. Taking videos of JSL signers signing testing wordlists)

VUCINIC-NESKOVIC, Vesna [ヴチニッチ-ネスコヴィッチ、ヴェスナ]—————教授

【学歴】ベオグラード大学哲学大学院 (1994) 【職歴】ベオグラード大学教授 【学位】人類学博士 (ベオグラード大学哲学大学院 1994) 【専攻・専門】文化人類学 【所属学会】国際人類学東南ヨーロッパ学会 (InASEA)、人類学会世界協議会 (WCAA)

【主要業績】

[単著]

V. Вучинић Нешковић (Vucinic- Neskovic Vesna)

- 1999 *Просторно понашање у Дубровнику: антрополошка студија града са ортогоналном структуром* [*Spatial Behavior in Dubrovnik: An Anthropological Study of a City with Orthogonal Structure*]. Одељење за етнологију и антропологију Филозофског факултета Универзитета у Београду, Београд. [Dept. of Ethnology and Anthropology, School of Philosophy of University of Belgrade, Belgrade].
- 2008 *Божић у Боки Которској: антрополошки есеји о јавном налагању бадњака у доба постсоцијализма* [*Christmas in the Bay of Kotor: Anthropological Essays on the Public Burning of Yule Logs in the Time of Postsocialism*]. Филозофски факултет Универзитета у Београду и Чигоја штампа, Београд. [School of Philosophy of University of Belgrade, Belgrade and Cigoja Press, Belgrade].
- 2013 *Методологија теренског истраживања у антропологији: од нормативног до искуственог* [*Methodology of Anthropological Fieldwork: From the Normative to the Experiential*]. Српски генеалогски центар и Филозофски факултет Универзитета у Београду, Београд. [Serbian Genealogical Centre and School of Philosophy of University of Belgrade, Belgrade].

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

中国都市の公共的空間における日常生活——日本との比較

・研究の目的、内容

中国の都市部の公共的空間における多様な利用に関するこれまでの研究の延長として、公園、広場および街角の利用に関する市民が果たす役割を研究すると同時に、日本の都市空間における市民の日常的活動と比較することで両者のそれぞれの特徴を明らかにする。その目的は、二つがある。まず、中国の公共空間は、東南ヨーロッパ都市の公共的空間のように、社会表象になるかそれとも個人々の自己表象になるのかを検証するところにある。もうひとつの目的は、都市住民のジェンダー、年齢、婚姻状況、民族、国籍などの要素が、公共的空間における行為の規則性に影響するかどうかを検証する。

・成果

英語を中心とした関連文献を収集し、日本と中国などの世界他の地域の公共的空間における市民の日常的活動について、教員や院生の中で聞き取り調査を行い、また、大阪、京都、奈良、神戸と東京で参与観察も行った。これまでに東南ヨーロッパの都市部の公共的空間の研究で使用された諸概念：露天的公共空間、イベント・儀礼空間、社会活動の空間を日本の研究に導入した結果、日本の公共的空間で観察された多様な活動は、ヨーロッパや他の東アジア諸国（中国など）には見られないほど、実に賑やか多様であることがわかった。今後、上記の本館滞在中で得られたデータを分析し、さらなる考察と資料を加えた上で論文を執筆する予定である。地域と民族を超えた本研究の成果は、新しくできた超域フィールド科学研究部の研究活動の模索と展開に重要な示唆を与えたと言える。また、JASCAの活動や国際人類学・民族学の国際組織（IUAES）（WCAA）とのつながりを生かし、本館の教員や日本文化人類学会の先生との交流を行ったことにより、国際的研究ネットワークの拡大に重要な契機になった。

王向華 [ウォン ヒョンワ]

教授

任期：2016年1月13日～2017年1月11日

研究課題：台湾における文化政策とナショナル・アイデンティティ

【学歴】香港中文大学社会科学部人類学科卒業（1986）、オックスフォード大学社会科学部人類学科修了（1997）【職

歴】香港大学日本研究学部リサーチアシスタント（1995）、香港大学日本研究学部講師（1995）、香港大学日本研究学部助教授（1996）、香港大学日本研究学部准教授（1999）、国立民族学博物館客員准教授（2001）、香港大学文学部アソシエイト学群長（2006）、香港大学現代言語・現代文化代理学部長（2006）、香港大学現代言語・現代文化学部長（2008）、日本大学経済学部客員教授（2008）、同志社大学社会学部・大学院社会学研究科客員教授（2012）、香港大学現代言語・現代文化学部長グローバルクリエイティブ産業プログラム主任（2012）【学位】人類学博士（オックスフォード大学 1997年）

【主要業績】

[単著]

王向華

2004 『友情と私利——香港一日系スーパーの人類学的研究』(Friendship and Self Interests: An Anthropological Study of a Japanese Supermarket in Hong Kong) 東京：風響社。

Wong, H. W.

1999 *Japanese Bosses, Chinese Workers: Power and Control in a Hong Kong Megastore*. London: Curzon Press & Hawaii, USA: The University of Hawaii Press.

[編著]

Wong, H. W.

2015 *Dang riben A-pian yushang huaren yuwang: xingbie, xingxiang, seqingpin de wenhua lilun* (『當日本A片遇上華人慾望：性別、性相、色情品的文化理論』)(When Japanese Adult Videos Meet the Chinese Sexual Desires: the cultural theories of gender, sexuality and pornography). Taipei: Airiti Press (in Chinese).

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

台湾における文化政策とナショナル・アイデンティティ

・研究の目的、内容

民博に滞在した1年間、以下の調査活動をおこなった。

- A) 日本台湾総督府の文化政策について日本語の資料を包括的にレビューした。
- B) 日本台湾総督府の文化政策が現代台湾のアイデンティティ形成に及ぼした影響について包括的にレビューした。
- C) 台湾のマイノリティ集団がいかに日本総督府の文化政策に応じてきたのか、また、そうした反応がいかに現代台湾の台湾アイデンティティの形成に関係してきたのかを知るために、植民地期台湾の教育、ジェンダー、社会運動、知識人についての日本語文献に着目した。
- D) 明治期の政治サークルの間でなされた植民地政策に関する議論をレビューし、こうした議論が台湾の植民地統治にどのように影響したのかを調べた。
- E) 明治時代の日本の近代化、日本の家制度、および日本の植民地政策と関連する他の制度についての日本語文献を包括的にレビューした。
- F) 日本の学者がいかに台湾を学んできた／でいるのかを理解するために、私がおこなっているテーマについて日本の学者と洞察に満ちた議論をおこなった。

・成果

- 1) 台湾と香港における文化／植民地政策を比較研究した本を執筆した。この原稿は、2017年の半ばにRoutledge社から出版される。
- 2) 『再ナショナリズム化する台湾、脱政治化する香港』(仮題目)という日本語の本を2017年に東京の旭書店から出版する。
- 3) 香港のファミリー・ビジネスに関する中国語の本を2016年冬に刊行した。
- 4) 香港における中国人商人の企業に関する英語の本を、2017年の半ばにRoutledge社から出版する。
- 5) 日本の文化産業についての英語の本を2017年の半ばにRoutledge社から出版する。
- 6) 香港アイデンティティと大衆文化の形成についての英語の本を2017年後半にRoutledge社から出版する。
- 7) 大陸中国における日本のスーパーマーケットについての英語の本を2017年末にRoutledge社から出版する。
- 8) 人類学と管理科学の創造的結合についての英語の本を2017年にBerghahn Booksより出版する。
- 9) 中国の家族、エスニシティ、国家についての編著(韓敏教授、河合准教授との共編)を2017年前半にBridge21社から出版する。
- 10) 浙江大学出版社より刊行している中国語の学術雑誌『人類学研究』にて企業人類学についての特集を掲載する。
- 11) その他、民博の河合が組織していた日本文化人類学会課題研究懇談会「東アジア公共人類学懇談会」でディスカッサントとして貢献した。

任期：2017年1月10日～6月30日

研究課題：過去と現在の捕鯨文化に関する人類学的研究

1950年生。【学歴】オタワ大学地質学部（1973）、オタワ大学大学院地質学部修士課程（1976）、アーカンソー大学大学院人類学部修士課程（1979）、アルバータ大学大学院人類学部博士課程（1985）【職歴】ケンブリッジ大学（ウルフソン・カレッジとスコット・ポラー研究所）客員研究員（1985）、マニトバ大学人類学部助教授（1987）、マッギル大学人類学部助教授（1988）、マッギル大学人類学部准教授（1994）【学位】Ph.D.（アルバータ大学 1986）、修士（人類学）（アーカンソー大学 1981）、修士（地質学）（オタワ大学 1979）【専攻・専門】民族考古学【所属学会】アメリカ考古学会、カナダ考古学会

【主要業績】

[単著]

Savelle, J. M.

1987 *Collectors and Foragers: Subsistence -Settlement System Change in the Central Canadian Arctic, AD 1000-1960*. London: British Archaeological Reports.

[編著]

Savelle, J. M., N. Kishigami and H. Hamaguchi (eds.)

2013 *Anthropological Studies of Whaling*. (Senri Ethnological Studies 84). Osaka: National Museum of Ethnology, Japan.

[論文]

Savelle, J. M. and A. S. Dyke

2014 Paleoeskimo occupation history of Foxe Basin: Implications for the core-area model and for Dorset origins. *American Antiquity* 79(2): 249-276.

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

過去と現在の捕鯨文化に関する人類学的研究

・研究の目的

これまでカナダ極北高緯度地域における捕鯨文化について動物考古学的研究を行い、カナダ地域でのイヌイト文化の形成と拡散、変化において捕鯨がもっとも重要な要因であることを実証してきた。現在は、これまでに現地調査を行った500年～800年前のチューレ文化イヌイトの捕鯨跡から出土した遺物（6千点）と動物遺存体（5万点）を分析し、外部から流入してきた物質の分布やセトルメントパターン、社会組織の復元、情報ネットワーク、クジラに関する儀礼等についての研究を進めてきた。この研究を継続するとともに、次の2つのプロジェクトを実施する。

国立民族学博物館には、小谷凱宣が収集したアラスカ考古学資料およびビルケット・スミスが岡正雄と交換したグリーンランド考古学資料が所蔵されている。資料情報によるとこれらは捕鯨文化の担い手であるチューレ・イヌイトの製作・使用物と考えられているが、これまで十分な調査や分析がされていない。このため第1に、これらの標本資料について岸上伸啓らと共同研究し、考古学的情報を付加したい。その成果は、現在、実施中のフォーラム型情報ミュージアム・プロジェクト「北米北方先住民の文化資源に関するデータベースの構築に関する研究——民博コレクションを中心に」（代表者：岸上伸啓、平成28年1月～平成29年8月）に追加する。

第2は、捕鯨文化に関するSESの編集・出版およびテキストの執筆である。これまで岸上伸啓や浜口尚らと進めてきた共同研究・CHAGS11シンポジウムの成果を出版するための編集作業を協働しながら進める。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会もしくは館外のシンポジウムでの発表

2016年8月28日～9月2日 Subsistence Resiliency and Climate Change: The Development and Collapse of Canadian Arctic Thule Whaling Societies. Paper presented at the 8th World Archaeology Congress, Kyoto, Japan.

- 2016年9月 Development and Collapse of Canadian Arctic Thule Whaling Societies. Paper presented at a workshop entitled 'Long-term Sustainability through Place-Based, Small-scale Economies: Approaches from Historical Ecology.', Research Institute for Humanities and Nature, Kyoto, Japan.
- 2016年5月15日～5月19日 (M.H. Julian, T.C.A. Royale, P. Szpak, J.M. Savelle and D.Y. Yang) Assessing the impacts of historic whaling on beluga whales (*Delphinapterus leucas*) in the Canadian Arctic through ancient DNA analysis. Paper presented at the Canadian Archaeological Association 46th Annual Meeting, Whitehorse, Yukon, Canada.
- 2017年3月29日～4月2日 Prehistoric Thule Whaling in the Canadian Arctic: Ritual, Symbolism and Ideology. Paper presented at the Society for American Archaeology, 82nd Annual Meeting, Vancouver, Canada.
- 2017年3月29日～4月2日 (K. Kotar, J.M. Savelle and A.S. Dyke) Preliminary Results of New Excavations on Jens Munk Island, Foxe Basin, Arctic Canada. Paper presented at the Society for American Archaeology, 82nd Annual Meeting, Vancouver, Canada.
- ・特別研究
- 2017年3月26日 'Of Inuit and Whales in Canadian Arctic Prehistory'. Paper presented at the Symposium 'Human Relationships with Animals and Plants: Perspectives from Historical Ecology' National Museum of Ethnology, Osaka.
- ・研究懇談会
- 2017年2月22日 「Paleoeskimo Demographic History (ca. 4800-800 B.P.) in the Canadian Arctic and its Relationship to Mid-Late Holocene Climate Variability」第277回民博研究懇談会

SMIDT, Wolbert G. C. [シユミット ヴォルバート G C] ————— 准教授

任期：2017年1月24日～5月16日

研究課題：写真・動画資料の分析と活用を通じたエチオピア近代史の研究

【学歴】 ベルリン自由大学法律学科・哲学科卒（1992）、ベルリン自由大学歴史人文学科修士課程修了（1998）、ハンブルグ大学社会科学科博士課程修了（2005）【職歴】 ハンブルグ大学アジア・アフリカ研究所研究員、メケレ大学歴史文化学部准教授【学位】 博士（ハンブルグ大学）【専攻・専門】 歴史人類学

【主要業績】

[単著]

SMIDT, Wolbert G. C.

2015 *Photos as Historical Witnesses: The First Ethiopians in Germany and the First Germans in Ethiopia, the History of a Complex Relationship*. Münster: Lit-Verlag (Afrika Visuell).

[編著]

SMIDT, Wolbert G. C., and S. Thubauville (eds.)

2015 *Cultural Research in Northeastern Africa, German Histories and Stories*. Frankfurt/Main: Frobenius-Institut-Goethe-Institut-Mekelle University (Publication of the Frobenius Institute).

FICQUET, É., Wolbert G. C. Smidt (eds.)

2014 *The Life and Times of Lij Iyasu of Ethiopia: New Insights* (Northeast African History, Orality and Heritage 3). Münster: Lit-Verlag.

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

写真・動画資料の分析と活用を通じたエチオピア近代史の研究

・成果

Smidt氏は、国内の学術大会やシンポジウムに参加し、エチオピア近代史研究の観点から積極的に研究発表を

行い、数多くの研究者と交流を行った。民博においては、受け入れ教官の川瀬がエチオピア北部地域で収集した映像音響資料の分析を、計画通り進めると同時に、川瀬とともにエチオピア近代史や、アーカイブ写真・動画の創造的な活用をテーマにしたセミナーを定期的に開催した。第278回民博研究懇談会においては当時民博で開催中であった特別展「ビーズ——つなぐ・かざる・みせる」に関連する研究報告『The cowrie in Ethiopia and Eritrea: an ethnohistorical study of a traditional protective charm and object of value and beauty』を行った。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2017年4月15日 「Hidden and Official “Traditional Rituals” in Tigray, Ethiopia」日本ナイルエチオピア学会第26回学術大会、富山大学

2017年4月24日 「Conflict Management and Resolution: Case of Ethio-Eritrean Conflict」国際シンポジウム『Resource Management and Conflict Resolution: Cases from Muslim Societies in North-east Africa』秋田大学

・民博研究懇談会

2017年5月17日 「The cowrie in Ethiopia and Eritrea: an ethnohistorical study of a traditional protective charm and object of value and beauty」第278回民博研究懇談会

2 研究および共同利用

概観

本館の研究は2004年度の法人化以降、「特別研究（2016年度まで「機関研究）」」「共同研究」「各個研究」という3種類の研究を柱としている。

「機関研究」は近年の研究動向や問題の所在を調査した上で、研究テーマを設定し、本館が全館規模で取り組む研究活動である。2010年4月より法人化第2期を迎えるにあたり、2009年10月から新たな研究領域「包摂と自律の人間学」と「マテリアリティの人間学」を設定し、研究プロジェクトを開始した。2016年度においては、第3期中期目標期間を通して、大学共同利用機関としての特徴を活かした研究の推進を進めるため、「機関研究」の枠組みを改め、「特別研究」として、研究プロジェクトの発展的改組を行った。

「共同研究」は、ある共通の研究テーマの下に複数の研究者が集まって研究会などを開催し、共同で研究をおこなう活動で、本館の研究活動の柱の1つであるとともに、大学共同利用機関としての「共同利用」の一環でもある。機関研究が研究テーマの設定やプロジェクトの選定から、その運営、成果の公表まで本館主導でおこなうのに対して、共同研究は研究テーマと組織について、館員のみならず、本館を共同利用する研究者の自主的な提案に基づく。すなわち、館員（客員教員を含む）を対象とした館内募集に加えて、公募もおこなっている。応募された共同研究の提案は、館内募集、公募の区別なく共同利用委員会で審査され、選定される。また、2010年度から「若手研究者による共同研究」が制度化され、一般の共同研究と同様に公募している。さらに、2004年度以来、共同研究会のメンバーだけではなく、研究者、学生、一般への研究会の公開を推進している。

「各個研究」は、館員（客員教員を含む）が自主的にテーマを設定して、個人で実施する研究であるが、館の公的な研究活動の一環に組み入れられている。

館の研究活動である「特別研究」や個々の研究者による「各個研究」を資金面でサポートするのが、館長リーダーシップ経費と科学研究費助成事業などの外部資金である。前者では「研究成果公開プログラム」という枠組みがあり、特別研究プロジェクト以外の大規模なシンポジウムの実施をはじめ、共同研究や各個研究の成果を公開するための研究フォーラムや国外の学会、研究集会での発表を支援するものである。

しかし、特別研究プロジェクト、37件の共同研究、客員教員や外国人研究員、機関研究員などを含めると100を超える各個研究の研究資金を運営費交付金だけから捻出することは到底できない。さらに研究に客観性を担保していく上でも、科学研究費助成事業などの競争的外部資金の導入を積極的に行っている。そのほか、日本学術振興会以外の独立行政法人が募集する助成金や民間の助成団体等による奨学寄付金なども積極的に受け入れている。これら外部資金に付随する間接経費は貴重な研究支援経費となっており、それらを使用した館内の研究環境整備事業が実施されている。なお、館長リーダーシップ経費の「事業・調査経費」という枠組みも同じ目的で使われる。

本館における研究成果公開の主軸のひとつである刊行物に関しては、2016年度には『国立民族学博物館研究報告』41巻1号～4号が刊行されるとともに、SES (Senri Ethnological Studies)、SER (『国立民族学博物館調査報告』または Senri Ethnological Reports)、『国立民族学博物館論集』、『民博通信』、『研究年報2015』が刊行され、外部出版制度を利用した成果公開も行った。さらに、研究成果を広く市民に公開するための学術講演会を、東京と大阪で開催している。

2014年度に共同利用に関してその強化を目的とする改革をおこなった結果、本館の共同利用では共同研究の公募、公開の推進と資料・設備の共同利用の促進を強調するようになった。なお、従来から、共同利用を積極的に推進するために、「外来研究員」「特別共同利用研究員」といった研究員制度を設けており、若手研究者の育成支援もおこなっている。

本館は開設以来40余年にわたり世界の民族と文化、社会を研究し、多様な有形・無形の民族資料とそれらに関連する情報を集積してきた。本館では、それらの資料と情報を「人類の文化資源」と位置づけ、同時代の人々と共有し、かつ後世に伝えるため、国際共同研究を組織し、国内外の複数の研究機関、大学、博物館、現地社会と連携しながら研究を推進している。この実現のため、グローバルな共同利用デジタル・データバンクとして「フォーラム型情報ミュージアム」を創出し、人類の文化資源に関する情報の発信、交換、生成、共有化を図る「人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」プロジェクトを立ち上げた。このプロジェクトによって、研究者コミュニティのみならず、文化資源を作り出した現地社会との双方向的な交流も実現したいと考えている。初年度となる2014年度は、北米先住民や韓国の文化資源等に関する4件の研究プロジェクトの活動やシステムの基本設計を開始した。2015年度は、台湾原住民や北米北方先住民に関する2件のプロジェクトが加わり、合わせて6件のプロジェクトを実施するとともに、パイロット版のデータベースを作成した。3年目となる2016年度は、6件の新規プロジェクトが加わり、開発型プロジェクト3件、強化型プロジェクト6件、合計9件のプロジェクトを実施。「台湾および周辺島嶼生態環境における物質文化の生態学的適応」プロジェクト（開発型）にて現地台湾で開催した

国際ワークショップ「台湾資訊跨國多語言交流平台（台湾資料の国際多言語交流プラットフォーム）」のように、各プロジェクトが標本資料のソースコミュニティなどと協業してデジタル博物館の構築を促進する取り組みを実施したことによりデータベース・コンテンツの格納件数が、当初計画7,000件（140,000レコード）を上回る8,990件（150,812レコード）となった。

本館の資料は2004年度より標本資料、映像音響資料、文献図書資料、民族学研究アーカイブズ資料に大きく4分類されている。それぞれの整備および利用状況を見ると、まず標本資料は海外直接収集資料としてアメリカのキルト資料、国内購入資料としてインドの楽器資料を収蔵した。また、標交紀コーヒーコレクション等を寄贈受入した。

第1収蔵庫は、大規模な改修工事に伴い、収蔵庫の「見える化」の一環として収蔵庫内部を見学できる窓を取り付けたことで、大学のゼミや授業での収蔵庫見学希望を受け入れることができるようになった。

文献図書資料に関しては、継続的な事業として国立情報学研究所NACSISCAT（全国規模の総合目録データベース）への登録作業を推進している。2016年度は図書等約1,700冊、雑誌174タイトル、マイクロ資料約5,570点（北米学位論文約5,000点、新聞雑誌86タイトル570点）を登録した。遡及入力事業で登録された所蔵情報は、本館の図書システムの蔵書データベースとして、Internetを介して広く公開・利用されており、2016年度は本館所蔵図書資料の相互利用での貸出受付が659件、文献複写受付は1,451件と、大学間の共同利用に大きく貢献していることがわかる。また、館外者への貸出冊数も、延べ2,054冊と好評である。

2006年度に「民族学資料共同利用窓口」を設置し、利用に関する多様な問い合わせを1つの窓口で対応することにより、利用者に対するサービス向上を図っている。2016年度には277件の問い合わせに対応し、利用促進に寄与した。

また、蔵書点検5年計画の4年目として、書庫5層および書庫4層の一部、探究ひろばなどの別置図書も含め、234,915冊の蔵書の点検をおこなった。

2007年度より民族学研究アーカイブズの共同利用を促進するため、ホームページを開設し、各アーカイブの目録等を公開してきた。2016年度は、昨年度に引き続き資料の整理作業を行い、沖守弘・インド民族文化資料アーカイブの目録をWeb公開した。また、資料の受入れの流れについて現状に合うように整理検討を行った。

2-1 みんなの研究

特別研究

●特別研究の意義

特別研究は、2016年度から始まった第3期中期目標期間の6年間を通じて、「現代文明と人類の未来——環境・文化・人間」を新しい統一テーマとして掲げ、現代文明が直面する喫緊の諸課題に対して解決志向型のアプローチにより実施する国際共同研究である。

近現代のヨーロッパに発する西欧文明および科学・技術の発展は、人類の生活と社会を豊かにすると信じられてきた一方で、人口増加、環境破壊、戦争、資源枯渇、水不足、大気汚染など、大きな負の代償を人類社会にもたらしているとも言える。特に環境問題と人口増加は、解決を要する大きな課題であり、これらの課題は人間生活のあらゆる面に影響を及ぼし、多くの問題をもたらしている。このような状況において、文明に対応してきた現地社会の「知」から現代文明を問い直すために、特別研究を現代の人類社会が直面する諸課題の分析と解決を志向する研究として位置づけ、環境問題や人口をめぐる地球規模の変動について直接的・間接的に起因する対立軸となる文化現象を設定する。グローバル空間・地域空間・社会空間が構成する多層的生活空間における現代の問題系としてアプローチすることで、旧来の（伝統的な）価値から、いかに多元的価値の共存を保障する社会を創成することができるかを解明し、人類社会にとって選択可能な問題解決を志向する未来ビジョンを提出することをめざす。

2016年度は、特別研究運営会議を立ち上げ、プロジェクト「生物・文化的多様性の歴史生態学——少動物・稀少植物の利用と保護を中心に」を開始した。特別研究プレ国際シンポジウムとして、「歴史生態学から見た人と生き物の関係」を2017年3月に開催した。

2016年度特別研究一覧

テーマ区分	研究課題	プロジェクトリーダー	研究年度
1 環境問題と生物多様性	生物・文化的多様性の歴史生態学——稀少動物・稀少植物の利用と保護を中心に	池谷和信 岸上伸啓	2016～2018

●特別研究テーマ区分とプロジェクト

先史から現在までの人間・環境関係の歴史生態学的アプローチを軸にして、稀少動物・稀少植物の利用や絶滅、保護の変遷およびそこでの問題を把握することを通して現代文明と環境との関係を考えること、また、寒冷地（極北）、島嶼・海洋（オセアニア）、砂漠（アフリカ）、森林（アマゾン、熱帯アジア、日本）、内水面（中国）などの世界各地の環境特性へのヒューマンインパクトの歴史を把握することから、地球、大陸、地域レベルでの動物・植物と人間社会との相互関係について考えることが主要な研究テーマとなる。

「手生物・文化的多様性の歴史生態学——稀少動物・稀少植物の利用と保護を中心に」

代表者：池谷和信／岸上伸啓 2016～2018

研究目的

本プロジェクトの目的は、先史から現在までの人間・環境関係の歴史生態学的アプローチを軸にして、稀少動物・稀少植物の利用や絶滅、保護の変遷およびそこでの問題を把握することを通して現代文明と環境との関係を考えることである。また、本研究は、寒冷地（極北）、島嶼・海洋（オセアニア）、砂漠（アフリカ）、森林（アマゾン、熱帯アジア、日本）、内水面（中国）などの世界各地の環境特性へのヒューマンインパクトの歴史を把握することから、地球、大陸、地域レベルでの動物・植物と人間社会との相互関係について考える試みでもある。

実施状況

特別研究プレシンポジウム「歴史生態学から見た人と生き物の関係」

Human Relationships with Animals and Plants: Perspectives of Historical Ecology

日時：2017年3月26日 10時～17時

場所：国立民族学博物館 第4セミナー室

発表者およびタイトル（同時通訳付）

「趣旨説明」池谷和信（国立民族学博物館教授）

「生物多様性の問題をアンデスで考える——ジャガイモを例として」

山本紀夫（国立民族学博物館名誉教授）

「なぜタロイモは『孤児作物』であるのか？——認識差に着目した説明を中心に」

ピーター・マシウス（国立民族学博物館教授）

「バナナと人間——東南アジア大陸部における山地農民の自然資源利用」

中井信介（佐賀大学准教授）

「先史時代のカナダ北極圏イヌイットとクジラ——儀式とシンボリズムと価値体系」

ジェイムズ・サベール（マッギル大学准教授／国立民族学博物館研究員）

「北アメリカアラスカ地域における現代の先住民捕鯨と気候変動」

岸上伸啓（国立民族学博物館教授）

「ラッコと人間——千島列島におけるラッコ利用の歴史」

手塚薫（北海学園大学教授）

「内水面漁場へのヒューマンインパクトと鵜飼漁師たちの生業戦略」

卯田宗平（国立民族学博物館准教授）

「インダス文明期の遺跡分布の時系列動態と環境変化」

寺村裕史（国立民族学博物館助教）

「アフリカにおける環境史——象牙、ダチョウの羽、キツネの毛皮」

池谷和信（国立民族学博物館教授）

総合討論

参加人数 31名（発表者含む）

1. 研究成果の概要

環境と文明にかかわるシンポジウムを開催し、各発表者の研究報告を通して研究内容の共有と本シンポジウムの大枠の検討が行われた。

2. 機関研究に関連した成果

○出版

池谷和信「近年における歴史生態学の展開——世界最大の熱帯林アマゾンと人」水島司編『環境に挑む歴史学』43-54頁、勉誠出版（2016.10.11）

池谷和信「北東アジア地域研究の新しい地平——人やものの移動からみた自然・文化・文明」『民博通信』156号4-9頁（2017.3.26）

池谷和信 2017「狩猟採集民からみた地球環境史」池谷和信編『狩猟採集民からみた地球環境史——自然・隣人・文明との共生』1-21頁、東京大学出版会（2017.3.21）

○公開シンポジウム

- ・特別研究シンポジウム「歴史生態学から見た人と生き物の関係」、国立民族学博物館（2017.3.26）
- ・みんなく公開講演会「恵（めぐ）みの水、災（わざわ）いの水——川、湖、海」、オーバルホール（2017.3.21）
- ・岸上伸啓「現代文明からみた生き物——クジラなどの野生動物の利用と保護をめぐって」みんなく公開講演会「スイカで踊る、クジラを祭る 生き物と人 共生の風景」、日経ホール（2016.11.10）
- ・池谷和信「野生と文化からみた生き物——栽培化や家畜化が変えた野生の風景」みんなく公開講演会「スイカで踊る、クジラを祭る 生き物と人 共生の風景」、日経ホール（2016.11.10）
- ・池谷和信「アフリカとグローバル・ヒストリー（3）アフリカの環境史とグローバル・ヒストリー——象牙、ダチョウの羽、キツネの毛皮」『日本アフリカ学会第53学術大会 大会プログラム・研究発表要旨集』、135頁（2016.5.31）

人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築

2014年度から、本館が所蔵する様々な人類の文化資源をもとに国際共同研究を実施し、情報生成型で多方向的なマルチメディア・データベースの構築を行う、「人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」を行っている。初年度は、プロジェクトに係る基盤構築として、フォーラム型情報ミュージアム委員会のもとにシステム開発WGを置き、資料データ整備やデータベース間の総合連携、公開方法等について検討を進めた。併せて、ウェブサイト公開のため、既存紙ベース『月刊みんなく』378冊について、写真のデータ化及びPDF化を実施した。

また、「北米先住民製民族誌資料の文化人類学的ドキュメンテーションと共有」、「『朝鮮半島の文化』に関するフォーラム型情報ミュージアムの基盤構築」、「徳之島の民俗芸能に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」及び「民博所蔵『ジョージ・ブラウン・コレクション』の総合的データベースの構築」の4つの研究プロジェクトを開始し、ソースコミュニティとの共同作業、北アリゾナ博物館（米国）、アシウィ・アワン博物館・遺産センター（米国）及び国立民俗博物館（韓国）との国際学術協定に基づく国際共同研究等を通じて、情報の多層化、多言語化を推進した。

2016年度は、新たに「民博が所蔵するアイヌ民族資料の形成と記録の再検討」、「中国地域の文化展示のフォーラム型情報ミュージアムの構築」、「日本民族学会附属民族学博物館（保谷民博）資料の履歴に関する研究」、「楽器に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」、「日本の文化展示場関連資料の情報公開プロジェクト」、および「民族所蔵『ジョージ・ブラウン・コレクション』の総合的データベースの構築（フェーズⅡ）」の6つの研究プロジェクトを加え、合わせて9件のプロジェクトを実施した。また共同研究の実施のため、新たに、カナダのブリティッシュコロンビア大学人類学博物館と学術研究交流に関する協定書を2017年3月に締結した。

「人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」研究プロジェクト

代表者*	プロジェクト課題名	区分	期間**
伊藤敦規	北米先住民製民族誌資料の文化人類学的ドキュメンテーションと共有	開発型	2014年6月～2018年3月
野林厚志	台湾および周辺島嶼生態環境における物質文化の生態学的適応	開発型	2015年4月～2019年3月
岸上伸啓	北米北方先住民の文化資源に関するデータベースの構築に関する研究——民博コレクションを中心に	強化型	2016年1月～2017年12月
齋藤玲子	民博が所蔵するアイヌ民族資料の形成と記録の再検討	開発型	2016年4月～2020年3月
横山廣子	中国地域の文化展示のフォーラム型情報ミュージアムの構築	強化型	2016年4月～2018年3月
飯田 卓	日本民族学会附属民族学博物館（保谷民博）資料の履歴に関する研究と成果公開	強化型	2016年4月～2018年3月
福岡正太	楽器に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築	強化型	2016年4月～2018年3月
日高真吾	日本の文化展示場関連資料の情報公開プロジェクト	強化型	2016年4月～2018年3月
林 勲男	民族所蔵「ジョージ・ブラウン・コレクション」の総合的データベースの構築（フェーズⅡ）	強化型	2016年12月～2017年3月

* 2016年度実施分

**開発型は4年以内、強化型は2年以内

「北米先住民製民族誌資料の文化人類学的ドキュメンテーションと共有」

代表者：伊藤敦規 2014年6月～2018年3月

実施状況

本年度もほぼ計画通りに研究を実施した。主な実施内容は、専門的知識を有する宗教指導者やアーティストの日本の博物館への派遣、そこでの資料調査、連携機関での進捗発表、報告書の執筆と査読付き雑誌への投稿、資料写真撮影調査、動画データの整理等からなる。

以下、時系列に則して実施内容を解説する。

4月に、米国アリゾナ州から3名のホビを広島県福山市松永はきもの資料館に派遣し、約2週間にわたり資料熟覧を行い、収蔵資料の約半数の162点の熟覧調査を映像記録した。

5月に、昨年度（2015年11月）に資料熟覧調査を実施した愛知県犬山市の野外民族博物館リトルワールドにて、プロジェクトの進捗について公開講演会を開催した。

6月までにシステム開発班と打ち合わせを重ね、フォーラム型情報ミュージアムの航海用データベースのイメージを具体的に検討した。

6月から8月までの約40日間に渡米し、2014年度に国立民族学博物館（民博）と学術協定を締結した北アリゾナ博物館を訪問し、プロジェクトの進捗を報告するパネルを開催し、約80名の聴衆が参集した。また滞在中にこれまで日本に招聘した熟覧者達とデータ整理を行い、データベース公開に向けた作業を進めた。8月29日に、第8回世界考古学会議京都大会（WAC8）にて、学術協定の締結機関であり本プロジェクトの連携機関である北アリゾナ博物館の主任学芸員である Kelley Hays-Gilpin とともに “Decolonizing museum catalogs? Collaborative catalogs and archaeological practice” と題した発表を行った。なお、WAC8には1,600名を超える考古学者が世界中から参加した。

9月に科研費（国際共同研究強化）で渡米し、コロラド州歴史協会、デンバー美術館、デンバー自然科学博物館の3館で、資料調査と合計約110点のホビ製宝飾品資料のスチール撮影を行った。今後この機会に撮影した資料写真を用いてホビ保留地などで熟覧調査を行い（デジタル熟覧調査）、そこで得られたデータをフォーラム型情報ミュージアムのデータベースに掲載する予定である。

10月には米国アリゾナ州から1名のホビを広島県福山市松永はきもの資料館に派遣し、約2週間にわたり資料熟覧を行い、4月に未実施だった収蔵資料の約半数の162点の熟覧調査を映像記録した。また、春の熟覧調査の動画については文字起こししたものについては熟覧者と確認し、カルチャル・センシティビティに該当する部分などの削

除を行った。

11月には、『国立民族学博物館調査報告 (SER)』に投稿していたフォーラム型情報ミュージアムプロジェクトの成果である国立民族学博物館収蔵ホピ製木彫人形資料調査報告 (約94万字) の採択が決まり、校正作業を進めている。また、国際協力事業団 (JICA) が主宰し、民博が中心となって実施している「博物館とコミュニティ開発」コースにて、世界中から集まった12名の研修生に対して、民族学博物館が収蔵する著作物的なものへの配慮の必要性について、本プロジェクトで注目しているカルチャル・センシティブティへの配慮と比較しながら紹介した。

2017年3月の館内公開に向け、12月には民博が収蔵する「ホピ製」木彫人形資料272点の熟覧調査の動画の書出などあらゆるデータを整理する予定である。

1月から2月にかけて米国アリゾナ州のホピ保留地などを訪問し、これまでに熟覧調査のために招聘したホピの宗教指導者と引き続きデータ整理を行う。また、最終年度に向け、公開されるデータベースの利用など、近未来の具体的な展開も視野に入れながら検討する予定である。さらに2014年10月と2016年2月に民博で開催した本プロジェクトに関連する2つのワークショップについて文字にまとめ、『Senri Ethnological Studies (SES)』として出版を目指すために投稿する予定である。

3月中には成果の一部について、館内公開を行う予定である。

成果

3年目となる2016年度は、学術協定に基づく国際共同研究を実施しながら、11月末日までに招待講演や国際学会等での研究発表 (10本)、2カ国4機関での熟覧調査、5本の短文エッセイの執筆、4本の査読付き編著の出版 (一つが出版済み。一つは校正中。二つは年度内に投稿予定) を行った。さらに、フォーラム型情報ミュージアムの本プロジェクトに関するデータを館内公開する予定のため、そのシステムデザインの監修やデータ整理を行っている。

成果の公表実績

編著

- 伊藤敦規編 2016 『伝統知、記憶、情報、イメージの再収集と共有——民族誌資料を用いた協働カタログ制作の課題と展望』 (国立民族学博物館調査報告) 137。
- 伊藤敦規編 2017 『ソースコミュニティと博物館資料との「再会」I 国立民族学博物館収蔵「ホピ製」木彫人形資料の熟覧解説』 (国立民族学博物館調査報告) 140。

論文等

- 伊藤敦規 2016 「ホストとして関わる人類学——米国南西部先住民ホピと私のこれまでとこれから」 (特集 人類学者の存在論) 『社会人類学年報』42: 67-90、東京都立大学・首都大学東京社会人類学会、弘文堂。
- 伊藤敦規 2016 「おわりに」、伊藤敦規編『伝統知、記憶、情報、イメージの再収集と共有——民族誌資料を用いた協働カタログ制作の課題と展望』 (国立民族学博物館調査報告) 137: 131-132。
- 伊藤敦規 2016 「はじめに」、伊藤敦規編『伝統知、記憶、情報、イメージの再収集と共有——民族誌資料を用いた協働カタログ制作の課題と展望』 (国立民族学博物館調査報告) 137: 1-4。
- 伊藤敦規 2016 「伝統工芸」、阿部珠理編『アメリカ先住民を知るための62章』、明石書店、pp.266-271。
- 伊藤敦規 2016 「カチーナとカチーナ人形」、阿部珠理編『アメリカ先住民を知るための62章』、明石書店、pp.261-265。
- 伊藤敦規 2016 「スネークダンス」、阿部珠理編『アメリカ先住民を知るための62章』、明石書店、pp.231-235。

学会発表や招待講演など

- 伊藤敦規 2016 「米国先住民墓地保護・返還法」『資料返還をめぐる先住民と博物館との新たな関係性の構築に関する文化人類学的研究 (科学研究費補助金基盤B、出利葉浩司代表)』、北海学園大学。(2016.11.22)
- Atsunori Ito 2016 “Hopi Collections Review in the US and Japan: Introduction of a Minpaku’s Info-Forum Museum Project”, Denver Museum of Nature & Science. (2016. 9. 15)
- Atsunori Ito 2016 “Hopi Collections Review in the US and Japan: Introduction of a Minpaku’s Info-Forum Museum Project”, History Colorado Center. (2016. 9. 12)
- Kelley Hays-Gilpin and Atsunori Ito 2016 “Decolonizing museum catalogs? Collaborative catalogs and archaeological practice”, WAC8 (8th World Archaeology Congress, Kyoto, Japan: 世界考古

学会議京都大会), Doshisha University. (2016. 8. 29)

Gerald Lomaventema and Atsunori Ito 2016 "History of Traditional Overlay Jewelry", Arizona State Parks Homolovi State Park Event "Suvoyuki Day", Homolovi State Park. (2016. 8. 6)

Robert Breunig, Atsunori Ito, Gerald Lomaventema, Kelley Hays-Gilpin 2016 "History of Hopi Overlay Jewelry: Origins and Continuity", Museum of Northern Arizona 83rd Hopi Festival, Easton Collections Center. (2016. 7. 3)

Robert Breunig, Atsunori Ito, Gerald Lomaventema, Kelley Hays-Gilpin 2016 "History of Hopi Overlay Jewelry: Origins and Continuity", Museum of Northern Arizona 83rd Hopi Festival, Easton Collections Center. (2016. 7. 2)

伊藤敦規 2016 「博物館資料を文化的に蘇生させる——ソースコミュニティと共に行う博物館資料の熟覧調査」『リトルワールドカレッジマスターコース 2016、第二回講義』、野外民族博物館リトルワールド。(2016.5.22)

伊藤敦規 2016 「記憶や思い出を後世に伝える方法を考える——ソースコミュニティと共に行う博物館資料の熟覧調査」大阪府高齢者大学『世界の文化に親しむ科』、大阪市社会福祉会館。(2016.5.20)

伊藤敦規 2016 「アメリカ先住民ホピの文化」大阪府高齢者大学『世界の文化に親しむ科』、大阪市社会福祉会館。(2016.5.13)

映像作品など

伊藤敦規、鈴木紀監修 2016 『みんぱく映像民族誌 第18集——米国南西部先住民の宝飾品』、国立民族学博物館。新聞・テレビなど

「福山の資料館収蔵品に脚光——米先住民ホピのカチナ人形」『中國新聞 朝刊社会面27面』(2016.4.17)

データベースの整備実績

標本件数：281件

レコード件数：53,835レコード

基本項目：6,182レコード (281件×以下の11項目×2言語)

VR：40,745レコード (145画像×281件)

熟覧動画：800レコード (200熟覧×2種類の撮影方法×2種類の公開方法)

自己紹介動画：5レコード (1撮影×5人)

描き込みなど参考画像：約1,605レコード (281件×5人=1,405レコード + 約50件×4人=200レコード)

熟覧要約：400レコード (200熟覧×2言語)

熟覧コメント：2,000レコード (200熟覧×2言語×5人)

自己紹介文：10レコード (5人×2言語)

用語集：2,088レコード (522単語×3言語+1種類)

「台湾および周辺島嶼生態環境における物質文化の生態学的適応」

代表者：野林厚志 2015年6月～2019年3月

実施状況

台湾資料に関する基本情報を整理したうえで、日本語、中国語、英語による資料台帳の作成を完了した。さらに、これらの資料の海外博物館における収蔵状況の予備調査をインターネット、文献資料を活用して行い、収蔵館による標本名称の相違等に関する状況の概要を把握した。

これらの基盤データを基本コンテンツとする双方向型のデータベースプラットフォームを日本語、中国語、英語で設計し試行運用を館内で開始した。大きな問題点等がなかったことから、このプラットフォームの実用化のための検証実験もかねて、台湾において国際ワークショップ「台湾資訊跨國多語言交流平台（台湾資料の国際多言語交流プラットフォーム）」を2016年11月26日に、台湾屏東県「原住民族委員會原住民族文化發展中心」において実施した。これは、当初、予定していたビレッジ・ミーティングを拡張するものであり、ソースコミュニティのメンバーだけでなく、地域の資料館の標本管理担当者を含めた国内外の複数の研究分野（人類学、博物館学、情報学、博物学）の研究者ならびにソースコミュニティの当事者と多言語化した資料データベースを共同利用し、インターフェイスの検証と知識の共有の実践的手法について考えた。

年度末には年度活動の報告と次年度の計画立案をプロジェクトメンバー間で共有する全体会合を開催する。

成果

本年度は研究計画にしたがい、1) 台湾資料に関する情報収集のための現地調査、2) 蓄積されてきた台湾関係の資料情報の整理ならびにそれらの多言語化（日中英）、3) 双方向型多言語DBの試作ならびに試験的運用と設計に関連した国際ワークショップの実施については目的を十分達している。琉球列島関連資料については、台湾資料のプラットフォームの運用状況に応じた整理の方法を検討しており、台湾資料についてプラットフォームのモデルを構築したうえで、来年度に順次計画を進める予定である。

成果の公表実績

研究展示「台湾原住民族をめぐるイメージ」2016年8月4日～10月4日 日本館企画展示場
国際ワークショップ「台湾資訊跨國多語言交流平台（台湾資料の国際多言語交流プラットフォーム）」2016年11月26日 台湾屏東県「原住民族委員會原住民族文化發展中心」

データベースの整備実績

標本件数：5,671件
レコード件数：73,723件

「北米北方先住民の文化資源に関するデータベースの構築に関する研究」

代表者：岸上伸啓 2016年1月～2017年12月

実施状況

申請時の予定をほぼ完了し、次年度には公開できる段階になった。本年度の研究実施状況は次の通りである。

- 民博北米資料約3,000点（北西海岸先住民版画資料697点、イヌイット版画405点、それ以外の標本資料1,936点）の基本情報（標本名、現地名、使用民族、使用地・年代、用途・使用方法、製作民族、文献情報など15項目）および写真を確認し、エクセル上に標本資料の情報の修正と付加するとともに、標本資料154点の追加撮影を実施した。
- 文化領域および民族集団ごとの民族誌情報等を収集し、データベースに盛り込む準備を進めた。
- グレンボー博物館、マニトバ博物館、ロイヤル・サスカチュワン博物館、カナダ歴史博物館、マッコード博物館、ケベック州立文明博物館、ルームズ博物館、ケンブリッジ大学考古・民族学博物館、大英博物館、北海道立北方民族博物館を訪問し、標本資料情報の確認を行なうと共に、現地語化の協力要請を実施した。
- 基本情報の英語化および現地語化を行なった。
- オンライン上で発信するための準備を情報科学の専門家と協議しながら進めた。

成果

本年度は、約3,000点の北米北方先住民資料の基本情報および画像情報を精査し、修正や不足部分の情報追加、および画像情報のない資料154点について写真撮影を実施した。また、国内外10博物館を訪問調査し、連携ネットワークを構築するとともに、標本資料の英語化・現地語化や標本資料情報の高度化を行なった。とくに、カナダのプリティッシュコロンビア大学人類学博物館とは学術協定締結のための交渉を行なった。以上の成果に基づいて、エクセルを利用してデータベースの基本形を構築し、公開のための準備を進めた。

成果の公表実績

出版

岸上伸啓（2016）「国立民族学博物館におけるフォーラム型情報ミュージアム構想について」伊藤敦規編『伝統知、記憶、情報、イメージの再収集と共有——民族誌資料を用いた協働カタログ制作の課題と展望』（SER135号）pp.15-23, 大阪：国立民族学博物館。

Kishigami, Nobuhiro (2016) "An Info-Forum Museum for Cultural Resources of the World: A New Development at the National Museum of Ethnology" Ito, Atsunori (ed.) *Re-Collection and Sharing Traditional Knowledge, Memories, Information, and Images: Challenges and the Prospects on Creating Collaborative Catalog* (SER 137), pp.25-33, Osaka: National Museum of Ethnology.

岸上伸啓（2017）「プロジェクト 民博收藏の北米北方先住民民族資料の高度情報化と情報発信」『民博通信』157：

データベースの整備実績

標本件数：3,038件

レコード件数：45,570件（15項目×3,038件）

「民博が所蔵するアイヌ民族資料の形成と記録の再検討」

代表者：齋藤玲子 2016年4月～2020年3月

実施状況

データベースの基礎情報として、民博が所蔵しているアイヌ資料のすべてについて、既存の標本資料詳細データベース（館内版）の情報をもとに、旧蔵者の台帳、購入時の書類・関連文献等とつきあわせ、データの入力・修正作業を進めた。その際、旧蔵者の台帳、購入時の書類、関連文献などで、データ化されていないものをスキニングした。また、情報がほとんど付されていなかった平取町二風谷の故貝澤守幸氏旧蔵資料約200点について、遺族を民博に招聘して資料を実見しながら調査をおこなった。

関連文献のなかでは、東京大学理学部人類学教室の資料1,000点（アイヌのみではなく、世界各地の資料）を掲載した『内外土俗品図集』（長谷部言人監修・東京人類学会編纂／寶雲舎 1938-39年発行）に、標本資料詳細データベース（館内版）に入力されていない詳細な情報が掲載されていることから、テキスト化をおこなった。

加えて、英訳の準備として、関連文献から資料の英名を拾い出す作業をおこなった。

また、館外の大学、博物館、アイヌ関係団体等の研究者・職員を共同研究員として、有用なデータベースにするための議論をおこなった。

成果

上記のとおり、本年度はデータベース構築のための準備作業として、基礎情報の収集や既存のデータベースの修正・追加入力を進めた。標本資料について書かれた文献を収集しつつ、スキニングもおこなった。

また、平取町二風谷の故貝澤守幸氏旧蔵資料約200点については、情報がほとんど付されていなかったが、遺族（守幸氏の妻と子たち）を民博に招聘して資料を実見しながら調査をおこない、製作者や製作・収集時の年代・状況などの情報が得られた。

初年度として予定していた準備作業は、ほぼ実施することができた。

成果の公表実績

「アイヌ民族資料の活用のために」『民博通信』155：10-11。

データベースの整備実績

東京大学理学部人類学教室旧蔵「土俗品目録」のうち北海道・千島・樺太資料のデータ

標本件数：916件

レコード件数：30,633件

「中国地域の文化展示のフォーラム型情報ミュージアムの構築」

代表者：横山廣子 2016年4月～2018年3月

実施状況

新構築後の中国地域の文化展示場での展示をウェブ公開できる情報ミュージアムのシステムを構築することが本プロジェクトの目的である。ウェブ公開により、博物館まで来ることができない一般の方々に、広く展示を見ていただくことが可能になる。同時に、国外の研究者やソースコミュニティの人々などとの間での双方向的な情報交換をおこない、それを通じて標本資料に関する情報の充実もはかる。

今年度の最初の作業として、本プロジェクトで対象とする展示資料の範囲を定め、展示場とは異なるウェブ公開の特質を考慮してウェブ用の展示単位を検討し、確定する作業を実施した。さらに本情報ミュージアム・システムの全体デザインの検討も行なった。その結果、当初、目指して中国語および日本語での公開に加え、日本語、中国語、英語の3言語で公開する方針を定めた。中国語は字体の異なる簡体字、繁体字があり、その両方の字体で

の公開をするため、合計4種類の文字によるウェブ公開用のデータベースを作成した。

具体的には、展示単位ごとのセクション、サブセクション、コーナーなどの解説文、写真および描画パネルのキャプション、展示資料のキャプションについて、3言語、4フォントでの文字データを揃えるための、翻訳および整理作業をおこなった。

また、展示単位ごとのウェブ公開用の写真の構成を検討し、システムにアップするためにフォルダ別に写真映像データを整理した。展示場の限られたスペースに比べ、ウェブ上では必要に応じて、展示場よりも多くの写真を掲載することが可能である。実物そのものを直接見ることができないという情報ミュージアムに弱点を、写真を中心とする展示情報を付加することで補うことができた。

成果

対象とする展示資料の確定ならびに展示単位確定作業を通じて、合計784の展示単位を確定した。中国地域の文化展示場で展示されている標本資料数は、1,070件近くある。標本登録上の標本資料単位数に比べて、展示単位数が少ないのは、一つのセットとしてウェブ上で公開したほうが効果的な場合、複数の標本資料を一つの展示単位としてまとめることにしたためである。また、標本資料の展示がなく、写真のみによって情報を伝えている展示もあり、その場合は、写真資料を一つの展示単位とした。

展示をウェブ上の情報ミュージアムとして提示する場合、展示場内のレイアウトとは異なる配慮が必要であり、プロジェクト・チームで協議を重ねて、ウェブ公開に適合した提示方法を編み出した。

当初は、展示資料のソース・コミュニティの主たる言語である中国語と日本語での情報発信を想定していたが、作業の進展に沿って検討した結果、中国語、英語と日本語の3言語での公開が可能であり、目指すべき目標であると判明した。3言語の文字情報の整理ならびに翻訳作業を完了し、次年度にウェブ・システムのデザインを検討し、システムを構築して公開する準備が整った。

データベースの整備実績

標本件数：標本資料数 1,068件（784展示単位）

レコード件数：5,500件

「日本民族学会附属民族学博物館（保谷民博）資料の履歴に関する研究と成果公開」

代表者：飯田 卓 2016年4月～2018年3月

実施状況

4月17日（日）、7月17日（日）、12月3日（土）の3回にわたって研究会を開催し、1975年に民博が国文学研究資料館史料館（旧文部省史料館）から受け入れた保谷民博資料のデータベースを充実し公開していく手順を話しあった。その結果、現行の標本資料詳細情報データベースを更新していくことのほか、資料収集の状況がわかるよう収集者や寄贈者の人名データベースを別途構築・公開していくことが必要だという合意を得た。

研究会では、人名データベースと資料データベースのそれぞれについて、仕様や項目立て、運用方針などを話しあった。いずれのデータベースも2016年度中に運用を開始し、メンバーがコメントを書きこむというかたちで公開にむけての準備をおこない、2017年度にはコメントを参照しながら公開対象となるレコードを取捨選択する方針を決定した。

成果

上記の研究会での話しあいにもとづいてシステム構築をおこない、まずはメンバー間でデータベースのひな型を共有して、それぞれが持つ情報をコメントとしてデータベースに書きこめるようにした。人名データベースはすでに2016年12月に運用を開始し、コメントが蓄積されつつある。ここに書きこまれたコメントは、2018年3月頃におこなうデータベース更新において反映される予定である。また、資料データベースは2017年3月に運用を開始する予定である。

成果の公表実績

飯田卓・朝倉敏夫（編）『日本民族学会附属民族学博物館（保谷民博）旧蔵資料の研究』（国立民族学博物館調査報告として刊行予定）

データベースの整備実績

標本件数：14,088件

レコード件数：標本データベース：約2万件

人名データベース：648件

「楽器に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」

代表者：福岡正太 2016年4月～2018年3月

実施状況

楽器資料についてのデータを研究機関間で共有し、共同でデータの付与や修正をおこなえるようにすることを目指し、以下の作業を進めた。

- (1) データ共有と共同でデータの付与や修正をおこなうシステムの開発
ウェブ上でデータを共有し、登録ユーザー間で情報の交換をできるシステムの開発を進めている。2016年度内に開発できる予定である。
- (2) 民博所蔵楽器のデータ作成
民博が所蔵する楽器資料の約5,400点について、以前作成した楽器データベースから楽器分類コードのデータを移行し、さらに楽器学上の名称（日・英）を付与する作業を進めている。また、まだ楽器分類コードが付与されていない楽器資料約800点について、コードの付与を進める。2016年度内に終了する予定である。
- (3) 関係研究機関等との連携
データの共有と共同でのデータ付与・修正のため、浜松市楽器博物館と協力関係を築いた。2019年9月に開催予定の世界博物館大会において、成果を発表することを目標として、さらに関係機関に協力を呼びかけていくこととした。
- (4) 寄贈受入予定の楽器資料の調査および運搬
神戸市の立田雅彦氏所有の楽器コレクション等を、関係機関間で情報を共有しながらデータ付与を進めるモデルケースとするため、寄贈受入を目標として話し合いおよび楽器の調査をおこなった。大量のコレクションであるため、民博に楽器を運搬し、フォーラム型情報ミュージアムのシステムを利用して、リスト化、データ付与等をおこなうこととした。

成果

楽器データの共有と共同でのデータ付与については、その実現を目指したシステムの開発を進めており、年度内に核となるシステムが開発できる予定である。共有を目標とするデータのうち民博所蔵楽器資料については、順調にデータ作成を進めている。他機関等の楽器データの共有については、楽器資料データベースを作成公開している機関が少ないこともあり、今後の課題として残っている。引き続き、情報収集、協力呼びかけをおこなっていく。共同でのデータ付与については、モデルとする楽器コレクションが当初の見込み以上に大量であるため、2年度に分けて運搬し、基本システムの稼働後2年度目の当初から着手する予定である。特定のテーマに沿って楽器データのコレクションを作成し、映像音響資料等を関連づけるシステムについては、2年度目に開発をおこなう予定である。ただし、前述の楽器コレクションの受け入れとデータ作成に、当初想定した以上の資源を割くことが必要であるため、計画の変更をおこなう可能性もある。

データベースの整備実績

標本件数：5,400件

レコード件数：16,200件

「日本の文化展示場関連資料の情報公開プロジェクト」

代表者：日高真吾 2016年4月～2018年3月

実施状況

本プロジェクトでは、日本の文化展示場で展示している資料について、既存の標本資料目録情報よりも、より詳細な研究情報をデータベースで公開することを目指すものである。また、日本の文化展示場に関連する書籍等についても調査し、それらを参考文献リストとして公開し、大学生、あるいは大学院生が展示から文化人類学、民俗学

を学ぶ上で、有益な情報を得ることのできるシステムを整えることも到達目標のひとつとするものである。

本年の研究では、WEB上で展開されている地方博物館のDBの現状について調査をおこなった。その結果、現状の地域博物館においては、まだDBを公開できる環境にないことが明らかになった。その理由として、日進月歩で開発の進むWEBサービスに対応できるPCの更新が追いついていないことが大きな要因となっていることが明らかになり、地方博物館所蔵の日本関連資料のDBの相互乗り入れは厳しい環境であることが明らかになるとともに、民博で展開しようとしている本DBの検索項目についての注目の高さについて改めて認識した次第である。また、本プロジェクトでは動画の導入も視野に入れ、フォーラム型情報ミュージアム事務局と検討を重ねたが、本格的な動画を導入するにあたっての肖像権の問題、サーバーへの負荷などを考慮し、今回のプロジェクトでは一旦中断し、次の課題として取り扱うことを確認した。

以上の結果、今年度はDBで示す資料情報の項目について再整理し、各項目についての入力活動を中心におこなった。

成果

今年度の研究成果としては、WEB上で展開されている地方博物館のDBの現状について調査をおこなった。その結果、地域博物館においては、現状、WEB上でDBを公開できる環境にないことが明らかになった。その理由として、日進月歩で開発の進むWEBサービスに対応できるPCの更新が追いついていないことが大きな要因となっていることが明らかになった。この点は、想定するユーザー側のPCの動作環境等についても併せておこなっていく必要があることを示していると考えられる。

次に、本DBで掲載する情報項目について、外部団体として協力いただいている国立歴史民俗博物館、東北歴史博物館、東北学院大学、枚方市旧田中家鋳物資料館のメンバーと改めて、検索項目について意見交換をおこなった。その結果、DBで掲載する基本情報として、「展示資料名」、「標本資料名」「標本番号」、資料の収集地や製作地を示す「地域」（現在の都道府県市町村まで）、資料の幅（W）×奥行（D）×高さ（H）と重量を示す「寸法・重量」、資料を民博に受け入れた西暦年度の「受け入れ年度」、資料の写真情報を示し、さらに研究詳細DBに記述されている研究情報、これまで論文等で紹介された場合の書誌情報について紹介することとした。さらに、本プロジェクトでは、文化庁文化財保護部監修、祝宮静・関敬吾・宮本馨太郎編集の『日本民俗資料事典』（1969年刊行）が提示している民俗資料の大分類項目に準じながら、資料分類をおこない、基本的な分類項目とすることを確認した。

また、本DBに関連するDBとして、サブセクション東北地方のくらしのなかの、東日本大震災コーナーで展開する津波の記憶DBを先行的に完成させ、来年度から公開する準備を整えた。

成果の公表実績

2016 日高真吾 「日本の文化展示場における資料情報の活用に向けて」『民博通信No.155』pp.12-13 2016年12月26日 国立民族学博物館

データベースの整備実績

標本件数：2,022件

レコード件数：2,022×33=66,726件

「民博所蔵『ジョージ・ブラウン・コレクション』の総合的データベースの構築（フェーズⅡ）」

代表者：林 勲男 2016年12月～2017年3月

実施状況

G. B. コレクションを構成する約3,000点の民族誌資料は、パプアニューギニア1,532点（トロブリアンド諸島287点、ビスマルク諸島615点を含む）、ソロモン諸島652点、フィジー138点、サモア240点が主なものであり、これらだけで2,564点を数える。

2014年度と2015年度の2年間に、フィジーの物質文化研究者、パプアニューギニアの植物研究者、サモア研究者が資料の熟覧をおこない、データベース情報の修正・加筆をおこなったのに続いて、本年度は、予算の追加措置により、これまでの熟覧者から提供された新たな情報を日英両言語で利用できるようにした。

また、パプアニューギニアに続いて点数の多いソロモン諸島の資料652点に関して、同地域を専門とする考古学者による熟覧、情報提供を依頼した（2017年3月21日から24日に来館予定）。

第1期に実施した大英博物館、セインズベリー・センター、ディスカバリー博物館、ボウズ博物館での調査で得

たデータをデジタル化し、プロジェクトメンバーで共同作業ができる体制を作った。

さらに、第1期の英国での調査にて収集した、コレクションの購入・売却、展示、他の博物館との間でおこなわれた資料の交換等に関するデータのデジタル化とその分析、公開に向けての英国の所有者（個人・組織含む）との検討作業をおこなった。

成果

データベース内のフィールドとして、コアデータ・フィールド、プロジェクトメンバーおよび協力者による追加データ・フィールド、インデックス・フィールドを設け、データを整理した。また、それぞれのフィールドのデータを日英両言語で利用できるようにした。将来的にはインデックスの自動化を考えている。

データベースの一般公開に向けて、研究協力者からの提供データに関しては、アクセス制限や、引用等のデータ使用の規定の掲載など、検討はしているが結論に至っていない。

英国やニュージーランドの博物館等が所蔵する資料に関するデータの参照についても、先方と検討中である。

成果の公表実績

Matthews, Peter (2017) Integrating local plant knowledge into wider knowledge systems: an example of work-in-progress for the George Brown Collection Info-forum Project, paper presented on 14th Feb, for Environmental Knowledge and Material Culture

データベースの整備実績

標本件数：2,999件

レコード件数：32,989件

共同研究

2016年度の応募・採択状況

課題1：文化人類学・民族学および関連諸分野を含む幅広い研究

課題2：本館の所蔵する資料に関する研究

研究会の区分		2016年度				
研究代表者	課題区分	申請	採択	継続	合計	
一般	館内	課題1	4	4	7	14
		課題2	1	1	2	
	客員	課題1	0	0	0	1
		課題2	1	1	0	
	公募	課題1	4	2	15	18
		課題2	0	0	1	
若手	課題1	4	2	1	4	
	課題2	0	0	1		
計		14	10	27	37	

共同研究課題一覧

○印は公募による実施課題、●印は若手による実施課題

研究課題	研究代表者	課題区分	研究年度
聖地の政治経済学——ユーラシア地域大国における比較研究	杉本良男	1	2013-2016
米国本土先住民の民族誌資料を用いるソースコミュニティとの協働関係構築に関する研究	伊藤敦規	2	2013-2016
○ 表象のポリティックス——グローバル世界における先住民／少数者を焦点に	窪田幸子	1	2013-2016
○ エージェンシーの定立と作用——コミュニケーションから構想する次世代人類学の展望	杉島敬志	1	2013-2016
○ 宗教人類学の再創造——滲出する宗教性と現代世界	長谷千代子	1	2013-2016
○ 東南アジアのポピュラーカルチャー——アイデンティティ、国家、グローバル化	福岡まどか	1	2013-2016
○ 近代ヒスパニック世界における文書ネットワーク・システムの成立と展開	吉江貴文	1	2013-2016
現代「手芸」文化に関する研究	上羽陽子	1	2014-2017
近世カトリックの世界宣教と文化順応	齋藤 晃	1	2014-2017
家族と社会の境界面の編成に関する人類学的研究——保育と介護の制度化／脱制度化を中心に	森 明子	1	2014-2017
○ 政治的分類——被支配者の視点からエスニシティ・人種を再考する	太田好信	1	2014-2017
○ 生活用品から見たライフスタイルの近代化とその国別差異の研究	鏡味治也	1	2014-2016
○ 呪術的实践=知の現代的位相——他の諸実践=知との関係性に着目して	川田牧人	1	2014-2017
○ 資源化される「歴史」——中国南部諸民族の分析から	長谷川清	1	2014-2017
○ モノにみる近代日本の子どもの文化と社会の総合的研究——国立民族学博物館所蔵多田コレクションを中心に	是澤博昭	2	2014-2017

● 演じる人・モノ・身体——芸能研究とマテリアリティの人類学の交差点	吉田ゆか子	1	2014-2016
チベット仏教古派及びボン教の護符に関する記述研究	長野泰彦	2	2015-2018
グローバル化時代のサブスタンスの社会的布置に関する比較研究	松尾瑞穂	1	2015-2018
驚異と怪異——想像界の比較研究	山中由里子	1	2015-2018
応援の人類学——政治・スポーツ・ファン文化からみた利他性の比較民族誌	丹羽典生	1	2015-2018
○ 考古学の民族誌——考古学的知識の多様な形成・利用・変成過程の研究	ERTL, John	1	2015-2018
○ 宇宙開発に関する文化人類学からの接近	岡田浩樹	1	2015-2018
○ 放射線影響をめぐる「当事者性」に関する学際的研究	中原聖乃	1	2015-2018
○ 医療者向け医療人類学教育の検討——保健医療福祉専門職との協働	飯田淳子	1	2015-2018
○ 個——世界論——中東から広がる移動と遭遇のダイナミズム	齋藤 剛	1	2015-2018
○ 確率的事象と不確実性の人類学——「リスク社会」化に抗する世界像の描出	市野澤潤平	1	2015-2018
● 高等教育機関を対象にした博物館資料の活用に関する研究	呉屋淳子	2	2015-2017
捕鯨と環境倫理	岸上伸啓	1	2016-2019
世界のピースをめぐる人類学的研究	池谷和信	2	2016-2017
もうひとつのドメスティケーション——家畜化と栽培化に関する人類学的研究	卯田宗平	1	2016-2018
会計学と人類学の融合	出口正之	1	2016-2018
「障害」概念の再検討——触文化論に基づく「合理的配慮」の提案に向けて	廣瀬浩二郎	1	2016-2018
物質文化から見るアフロ・ユーラシア沙漠社会の移動戦略に関する比較研究	縄田浩志	2	2016-2019
○ 音楽する身体間の相互作用を捉える——ミュージッキングの学際的研究	野澤豊一	1	2016-2019
○ 現代日本における「看取り文化」の再構築に関する人類学的研究	浮ヶ谷幸代	1	2016-2019
○● 消費からみた狩猟研究の新展開——野生獣肉の流通と食文化をめぐる応用人類学的研究	大石高典	1	2016-2018
○● テクノロジー利用を伴う身体技法に関する学際的研究	平田晶子	1	2016-2017

「聖地の政治経済学——ユーラシア地域大国における比較研究」

本研究は、聖地の現代的意義について、その多様性と共通性を明らかにするための比較研究である。そのさい、聖性の定義に関しては基本的に社会学的・社会人類学的視点に立ち、比較の対象をインド、中国、ロシアに限定し、当該地域における聖地の現代的意義とその歴史的背景について比較検討しようとするものである。西欧近代世界において、宗教伝統は再定義され、それが自己意識化、実体化され、輓近のポスト・モダン状況のもとでさらに再々定義され、イデオロギーとして固定化、原理主義化される事態となっている。こうした現代的状況のなかで聖地は、実体化・イデオロギー化された「伝統宗教」の金城湯池であり、また遺産化・商品化された「消費宗教」の花園である。本研究では、いわゆるユーラシア地域大国、ロシア、中国、インド、における聖地の政治経済学的研究を通じて、宗教の現代的意義を問い直すとともに、西欧主導の聖俗論、宗教論を根本的に再考することが主要な目的である。

研究代表者 杉本良男

班員 (館内) 韓 敏 河合洋尚 松尾瑞穂

(館外) 川口幸大 後藤正憲 小林宏至 桜間 瑛 高橋沙奈美 前島訓子 望月哲男

研究会

2016年6月26日

櫻間 暎（東京大学）「創られるイスラーム聖地——ボルガル遺跡の復興とタタルスタン共和国」

杉本良男（国立民族学博物館）「聖人化されるガンディー」

井田克征（金沢大学）「聖地と物語——現代インドにおけるマハースバーブ派の事例から」

2016年7月28日 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター

井上岳彦「聖地創造の夢——誰が寺院や仏塔を建てているのか」

河合洋尚（国立民族学博物館）「聖地言説と信仰実践——中国梅県の呂帝廟をめぐる『聖地』の複数性」

小林宏至（山口大学）「神様の里帰り——客家地域における閩南文化」

井田克征（金沢大学）「聖地研究における語りの重層性について」

2017年2月18日

松尾瑞穂（国立民族学博物館）「ヒンドゥー聖地の資源——祖先祭祀の隆盛と在地社会の変容」

前島訓子（名古屋大学）「インド『仏教聖地』のヒンドゥー社会」

後藤正憲（北海道大学）「聖なるものはどこにある？」

杉本良男（国立民族学博物館）「総括——聖なるものの行方」

成果

本年度は共同研究の最終年度にあたり、研究成果のとりまとめに向けて都合3回の研究会を実施した。また、本共同研究に関連して、おもに今後の研究の進展を目指した共同研究プロジェクト「ユーラシア地域大国における聖地の比較研究」においても2017年1月に研究会を、3月には北大プロジェクトの総括の小シンポジウムをいずれも北海道大学で開催した。本年度の各研究会は、成果のとりまとめを目途として、とくにユーラシア地域大国（ロシア、中国、インド）における各地域の事例研究から相互の比較に向けた展開の可能性と、各地域を横断した「場所と空間」、「語りと現実」、「地域と国家」などの基本概念の整理とを意識して、全体のとりまとめに向けた議論が行われた。その結果、硬軟取り混ぜながらも「社会主義体制」を経験した各地域における、宗教、聖・聖性などの基本概念そのものの歴史性、地域性や、グローバル経済化の影響による聖地化、観光化などの実相とそこに惹起される様ざまな問題点が浮かび上がった。

「米国本土先住民の民族誌資料を用いるソースコミュニティとの協働関係構築に関する研究」

近年のITおよび交通網の整備により、世界の「秘境」は急激に消滅しつつある。現在ではかつての「秘境」に暮らす人々は、研究者に直接問い合わせをすることが可能で、民族学系の博物館にその民族集団に関連する資料情報の提供を求めたり、熟覧や適切な管理を依頼することもある。その意味で、現在、民族学系の博物館や研究者は、対象として設定するユーザー（来館者・資料等の利用者や研究成果の読者）を、来館圏居住者や学界だけではなく、資料を製作したソースコミュニティの人々にも拡大していく必要性に迫られており、それを実施するための協働のあり方を模索することが緊急の課題となっている。本研究の目的は、「調査者・被調査者（米国先住民）との関係」、「知的財産管理」、「所蔵先機関と研究者との協働」を柱として、博物館資料をきっかけとするソースコミュニティの人々と研究者や所蔵先機関との新たな関係性構築のあり方を模索することにある。そのために、米国本土先住民資料を所蔵する日本国内のいくつかの民族学系の博物館を事例として、資料情報のソースコミュニティの人々との共有のための協働に関する思想を、社会学、博物館学、歴史学、社会心理学、文化人類学などを専門とする研究者と所蔵先機関とで検討・考察する。

研究代表者 伊藤敦規

班員（館内）岸上伸啓

（館外）阿部珠理 大野あずさ 川浦佐知子 佐藤 円 谷本和子 玉山ともよ 野口久美子
水谷裕佳 宮里孝生 山崎幸治

研究会

2017年2月25日

梅谷昭範（天理大学附属天理参考館）「天理参考館が収蔵する北米先住民資料の沿革と今後の活用について」

渡辺浩平（立教大学大学院）「『美』を織る——ナバホ・ラグをめぐる関係の複数性と展示展開の可能性」

全 員 成果論文集の読み合わせ

成果

3年半の共同研究会のあいだに、合計12回の研究会を開催し、19名による発表を行った。

理論や米国全土を対象とした事例は本共同研究のメンバーの報告を元に議論し、同時並行的に実施してきた民博のフォーラム型情報ミュージアムプロジェクト（「北米先住民製民族誌資料の文化人類学的ドキュメンテーションと共有」と連動させることで、共同研究での議論を参考にしながら後述する民博等の収蔵する資料熟覧調査という形で実践に移すことができた。

直接的な研究成果としては、共同研究会の参加メンバー11名による原稿を現在集めている最中で、それを伊藤敦規（編）『(仮題)先住民との「協働」研究』としてまとめる予定である。本書を通じて、先住民と博物館、先住民とアカデミアという枠組みの中でどのような議論や展示を含めた実践が行われているかについて、研究倫理や協働といった視覚に経って見取り図を描くことを試みる。

それ以外にも、本研究会と関係する国際ワークショップを4回開催した。一つは2014年1月28日と29日に民博で開催した「伝統知、記憶、情報、イメージの再収集と共有——民族誌資料を用いた協働カタログ制作の課題と展望」で、その成果は伊藤敦規（編）2016『国立民族学博物館調査報告（SER）』137号として出版した。二つ目は2014年10月5日から10日まで六日間にわたって民博で開催した「資料熟覧——方法論および博物館とソースコミュニティにとっての有効活用を探る」およびその後の10月17日まで継続して行った資料熟覧調査である。三つ目は2015年4月16日と17日に民博で開催した「資料熟覧——資料熟覧のためのソースコミュニティ招聘プロセスと人類学的ドキュメンテーションの検討」、四つ目は2016年2月11日と12日に民博で開催した「フォーラム型情報ミュージアムのシステム構築に向けて——オンライン協働環境作りのための理念と技術的側面の検討」である。つまり、共同研究の二年度目から、実際に米国本土先住民を民博やリトルワールドなどの日本の民族学博物館に招聘し、収蔵資料を対象とした熟覧調査を協働で行うことができた。

ここでいう協働とは、先住民コミュニティと資料を収蔵する博物館の双方が、その行為をすることによっていかなる恩恵を得ることができるかを具体的に設定できるかどうかが鍵となる。資料情報の高度化や資料収集担当者以外の博物館職員に教育といった博物館側にとってのメリットと、ソースコミュニティ側にとっては自文化に関する自己表象の実現と情報管理への主体的参加（カルチャル・センシティブティへの配慮の指摘）などがこれまでにない両者の利点として理解・認識されたために、協働が実現した。ただし、研究者の所属（例えば大学勤務か博物館職員か）や、学問分野と研究手法（歴史学や考古学、人類学や心理学や社会学では対象とする人々との接し方や媒体が異なる）によっては必ずしも協働が実現されないこと、同じ範疇に属す民族学博物館であっても専門知識を有する学芸員スタッフの過去と現在の在籍の有無なども協働を成立させるための鍵となることも明らかになった。さらに、協働が実現するためには学問的関心以外の政治関係や予算といった要素も大きく関わることが他の民族集団や実践事例から報告されたので、そうした面にも配慮する必要性が明らかになった。

「表象のポリティックス——グローバル世界における先住民／少数者を焦点に」

本研究では、先住民／少数者集団が、彼らを包摂する主流社会において様々に表象されている場面に注目する。彼らが絵画や工芸品、布、衣装などを製作し、それらが市場にのり、時には国際的な注目をあつめる。こうしたモノによって表象されることで、少数者には経済的恩恵がもたらされ、地位の向上につながることもある一方で、彼らを本質化する圧力ともなり、また商品化によって表象が希薄化される場面もある。このような表象のポリティックスの違いは、少数者集団に対する各主流社会の対応と国際社会を背景にしていると同時に、グローバリゼーション、ネオリベラルの動きなど多層的な社会的状況の絡み合いの中でおきている。この共同研究では、このような動態の現場に注目することによって、先住民／少数者の生のリアリティに迫り、主流社会と少数者の関係の諸相を具体的な形で明らかにすることをめざす。

研究代表者 窪田幸子

班員（館内）	上羽陽子	齋藤玲子	竹沢尚一郎	野林厚志			
（館外）	青木恵理子	池本幸生	大村敬一	川崎和也	新本万里子	田村うらら	中谷文美
	中村香子	名和克郎	深井晃子	松井 健	丸山淳子	宮脇千絵	吉田ゆか子
	渡辺 文						

研究会

2016年7月9日

窪田幸子（神戸大学）「ワンロード展のアボリジニ表象を考える」

展示視察

質疑応答、討議

野林厚志（国立民族学博物館）「デザインされる原住民族イメージ——台湾の学生創作ポスター展を事例に」

質疑応答、討議

2016年10月23日

これまでの成果とこれからの進め方

宮脇千絵（南山大学）論文の概要

コメント1 & 2

渡辺 文（同志社大学）論文の概要

コメント1 & 2

川崎和也（神戸学院大学）論文の概要

コメント1 & 2

2016年11月26日

これまでの成果とこれからの進め方

深井晃子（京都服飾文化研究財団）論文の概要

コメント1 & 2

吉田ゆか子（東京外国語大学）論文の概要

コメント1 & 2

新本真理子（広島大学）論文の概要

コメント1 & 2

2017年2月13日

これまでの成果とこれからの進め方

松井 健 論文の概要

コメント1 & 2

中谷文美（岡山大学）論文の概要

コメント1 & 2

中村香子 論文の概要

コメント1 & 2

成果

本年度は、共同研究のとりまとめを目指して、それぞれの共同研究者のこの研究にかかわる論文を完成してもらうことを目指した。全体で4回の研究会を持ったが、それぞれの回で、2から3本ずつの論文を全員であらかじめ回覧し、それぞれの論文を担当するコメンテーターを依頼し、議論を行った。まだ全員の論文の完成にはいっていないが、およそ8割がたの論文が出そろった状況になってきている。各研究会でのコメントを踏まえて、7月までに完成稿を提出してもらう予定である。これを取りまとめ、共同研究の出版につなげる予定である。

「エージェンシーの定立と作用——コミュニケーションから構想する次世代人類学の展望」

人間が営む生活の諸局面は、特定の具体的な権威者を中心とするコミュニケーションとして成立しており、そこでは、規範や信念への随順やその異端的解釈の抑制が図られるとともに、生々しい実在感をもち、対他的に作用する非——人間存在を含むエージェンシーが定立され、作用する。現代世界において、精霊は呪医を権威者とするコミュニケーションでは人に病気をもたらすエージェンシーとして働くかもしれないが、近代医療関係者はそうした病因を否定するだろう。同様に、米国の銃規制運動において銃は「人を殺す」エージェンシーとされるが、全米ライフル協会はそうしたエージェンシーの定立に強く異議をとる。

本共同研究では、こうしたエージェンシーとコミュニケーションとの等根源性に留意しながら民族誌研究をおこなうなかで、エージェンシーの定立と作用について適切に語るための一群の概念を開発する。そうすることで、個別におこなわれる傾向にあったモノ、技術、身体、動物に関する近年の研究と、親族、交換、儀礼、信仰、医療、土地制度などに関わるこれまでの研究を架橋する、通地域的・通研究对象的であると同時に、民族誌的データを豊かに内包する次世代人類学の理論基盤を整備する。

研究代表者 杉島敬志

班員（館内）飯田 卓

（館外）東賢太郎

小川さやか

片岡 樹

金子守恵

桑原牧子

里見龍樹

高田 明

津村文彦

中村 潔

馬場 淳

森田敦郎

研究会

2016年12月17日

津村文彦（名城大学）「開かれたコミュニケーションの交差するところ——東北タイの病ビットクラブーン」

里見龍樹（一橋大学）「『育つ岩』——コミュニケーション／エージェンシーの限界をめぐる試論」

杉島敬志（京都大学）「コミュニケーションとエージェンシーの定立と作用に関する諸考察」

総合討論

2017年1月7日

飯田 卓（国立民族学博物館）「知識を共有するとはどのようなことか——マダガスカルの漁撈からコミュニケーションを考察する」

高田 明（京都大学）「遊びと複ゲーム状況——サンにおける養育者——子ども間相互行為の分析から」

森田敦郎（大阪大学）“Multispecies Infrastructure: Infrastructural Inversion and Involutionary Entanglements in the Chao Phraya Delta, Thailand”

2017年1月29日

中村 潔（新潟大学）「バリにおけるムラ（慣習村）の概念について」

桑原牧子（金城学院大学）「彫られたティキをめぐる——タヒチの偶像崇拜と否定神学」

金子守恵（京都大学）「捨てられない『もの』と『ゴミ』のあいだ——エチオピア西南部における使い終えた授業ノートをめぐる人びとのやりとり」

馬場 淳（和光大学）「パプアニューギニアにおける書類の意味と力——エージェンシーの定立と作用に関する研究報告」

総合討論

成果

2016年12月から2017年1月にかけて3回の研究会を開催し、毎回ごとに共同研究のメンバー3～4名が研究発表をおこない、発表内容と関連する議論をおこなった。それぞれの発表は、共同研究の成果報告論集のために執筆する論文の構想を示し、コメントを得る目的で用意されたものであり、発表につづく議論と総合討論では、成果報告論集の大まかな方向性を自覚し、これから執筆する論文間のコンシステンシーを高めるために必要で有益な意見交換をおこなうことができた。こうした意見交換は、今後もオンラインストレージサービスや情報共有サイトの運営をとおして継続する。また、2016年1月30日に開催した最終回の研究会では、成果報告論集の執筆と編集のスケジュールを話しあい、共同研究メンバーの合意をえるとともに、本共同研究に関心をおもちいただいている出版社の編集者にご参加いただき、成果報告論集の編集と出版を円滑にするためのアドバイスを得るとともに、若干の意見交換をおこなった。

「宗教人類学の再創造——滲出する宗教性と現代世界」

合理化を推進する近代主義の影響のもと、これまで多くの地域において、人々は「宗教」を政治・社会制度から排除しようとしてきた。しかし近年、宗教原理主義や公共宗教論の盛行、宗教伝統の復興や再評価などに見られるとおり、いったん隔離したはずの「宗教」がわれわれの社会へと滲み出し、新たな姿を見せつつある。その場合の「宗教」はかつての伝統的な姿のままとは限らず、環境思想のような新たな倫理・道徳の底流に見え隠れしたり、観光資源として人目を驚かせたりしている。

このように、伝統宗教のみならず、従来の「宗教」イメージとは異なりながらどこか宗教性を感じさせる新たな現象をも視野に取り込み、現代世界の「宗教」状況をよりよく理解することが、本研究の目的である。また、その研究実践を通じて、個々の宗教的世界観の研究に特化した感のある日本の「宗教人類学」を、上記のようなグローバルな潮流に対応したものへと鍛えなおしたい。

研究代表者 長谷千代子

班員（館内）藤本透子

(館外) 岡本亮輔 加藤敦典 門田岳久 川口幸大 川田牧人 神原ゆうこ 國弘暁子
内藤順子 西村 明 藤野陽平 別所裕介 溝口大助 宮本万里 矢野秀武

研究会

2016年 6月18日

長谷千代子 諸々のお知らせ

島田裕巳(東京女子大学)「宗教消滅 世俗化する世界のこれから」

西村 明(東京大学)「政教分離フィルター濾過後の残留宗教性について——戦後の公的慰霊再考」

2016年 6月19日

神原ゆうこ(北九州市立大学)「コミュニティ再生という希望——スロヴァキア地方都市における NGO と宗教団体の社会貢献活動にみる『社会的なるもの』について」

矢野秀武(駒澤大学)「道徳心理学研究と宗教(概念)論」

2016年11月19日

長谷千代子(九州大学)今後についてのお知らせ

長谷千代子(九州大学)「滲出する宗教性と現代世界を考える」

藤本透子(国立民族学博物館)「聖者(アウリエ)となった学者——カザフスタンにおける聖者崇敬とマシュフル・ジュスプの墓廟の変遷」

2016年11月20日

宮本万里(慶應義塾大学)「南アジアの肉食と宗教性——神格化される牛と周縁化される牧畜民」

河西瑛里子(大阪物療大学)「ネオペイガニズムにおける死者との関わり方から滲み出す宗教性」

川田牧人(成城大学)「民間信仰・民俗宗教・民俗信仰」

総合討論

成果

研究会最終年度は、まず成果論集の作成に向けて、「宗教」「宗教性」などの概念の使い方やそれが「滲出する」という表現でもっとも捉えるべきは具体的にどういう現象かといったことについて議論した。全員が完全に納得のいくところまでは議論を尽くせなかったが、宗教という言葉を各フィールドにおける近代的な概念と制度に限定して使い、最近の社会・政治状況の変化によってそこからずれてきたものを「滲出する宗教(性)」と捉えること、少なくとも「宗教性」を人間に具わった本能的なもののように捉えないことを方針とした。個人研究発表では、「宗教」は消滅するという議論(島田氏)、もしくは今後「宗教」より「道徳」がキーワードとなりうる可能性についての議論など(神原氏、矢野氏)に接し、その可能性と問題点について議論した。また、既存の「宗教」の枠組がその時代の政治状況に合わせて変形する事例(藤本氏)や、慰霊の儀礼から宗派性を取り去った後になにが現われるかについての考察(西村氏)なども紹介された。このほか、今まで在外研究のため発表機会のなかった宮本氏や、本研究会のテーマに共鳴して論集の執筆者に参加することとなった河西氏にも発表していただいた。

「東南アジアのポピュラーカルチャー——アイデンティティ、国家、グローバル化」

この研究は東南アジアの様々なポピュラーカルチャーを対象としている。研究の目的はグローバル化する現代社会における文化表現や身体表象の考察を通して、ジェンダー、エスニシティ、言語、宗教、階級などの差異が表現され、アイデンティティが生み出されるプロセスを明らかにすることである。対象地域の東南アジアは、その多くが20世紀後半に植民地支配からの独立を果たした国民国家であり、多様な民族文化を擁する国家としてのアイデンティティが模索されてきた。一方でポストコロニアル時代の国民国家は、民族や宗教の違い、地域間の格差、社会階級やジェンダーの格差などの様々な違いを抱えてきた。グローバル化する現代社会の中で、文化的表現の多くは「脱中心化」、「脱地域化」、「商品化」、「断片化」という状況を経験し、それらはしばしば既存の文化的境界を越えて流通し読み替えられている。この研究では、現代東南アジア社会における音楽、芸能、文学、映画、美術、ファッションなどの各分野におけるポピュラーカルチャー産業や各種メディアを研究対象としてとりあげ、文化的表現の生産と消費の場における人々の実践を通して現代東南アジア社会における自己意識形成の過程をとらえていきたい。

研究代表者 福岡まどか

班員(館内) 寺田吉孝 福岡正太

(館外) 井上さゆり 小池 誠 坂川直也 竹下 愛 津村文彦 馬場雄司 平松秀樹

研究会

2016年8月6日

福岡まどか（大阪大学）「成果発表に向けて 序論：東南アジアのポピュラーカルチャー 構想発表（2）」
各メンバーによる執筆論文の構想発表（2）
見市 建（岩手県立大学）「インドネシアにおける大衆文化 イスラームと地方首長の『キャラ立ち』」
総合討論

2017年2月26日

福岡まどか（大阪大学）「成果発表に向けて 序論：東南アジアのポピュラーカルチャー」
各メンバーによる執筆論文の内容発表
池田茂樹（スタイルノート）「東南アジアのポピュラーカルチャー研究に関する芸術・音楽の側面からの考察」
総合討論

成果

2016年度は2回の研究会を行った。外部講師の見市氏による発表と討論においては、インドネシアにおける宗教、政治、大衆文化の相互の密接な関わりが提示された。イスラームの宗教的な規範が文化を規定する主たる要因となっているインドネシアの独自性について、また政治的活動の中で大衆文化が果たす役割について、などのさまざまな議論が展開された。池田氏による発表と討論においては、東南アジアのポピュラーカルチャーというテーマを芸術特に音楽に焦点を当てて研究しその成果を書物の形で社会に広く還元していく際のさまざまな課題や可能性が示された。

また2回の研究会を通して行った成果発表に向けた序論の内容に関する検討においては、東南アジアの多くの地域で文化表現に関わる多様な価値観に関わる議論が、国民国家建設の言説へ向かっていた時代を経て、より多様な方向性に向かいつつある現状にあるという知見を得た。こうした状況の変化をふまえた上で、序論の内容を組み立てていく方針について討論を行った。また各メンバーによる論考に関する議論の中ではそれぞれの論考の全体における位置づけと、相互の関連性について検討を行った。特に第2回の研究会では、実際の草稿を持ち寄って議論を行い、編集者であるスタイルノートの池田氏によるコメントをはじめ、細部にわたる検討を相互に行った。

「近代ヒスパニック世界における文書ネットワーク・システムの成立と展開」

本研究は、15世紀末以降、スペインが世界規模で拡張した帝国統治のメカニズムについて、行政・司法・財政・宗教・軍事の諸分野を交差して領域横断的に張り巡らされた文書ネットワーク・システムの展開に焦点を当てながら解明を目指すものである。

近代初期、アジアからアメリカに至る広大な領域を支配下に治めたスペインの統治原理は、文書主義の優越というイデオロギーに支えられており、帝国内の統治機構においては、マドリッド中枢から植民地最末端の先住民までをカバーする広域的な文書ネットワークが張り巡らされていた。その網の目に沿って、植民地経営の実務を支えるヒトやモノ、情報の流れが構造化され、領域の隅々にまで拡張されることで、近代ヨーロッパ史上、類をみない規模の世界帝国を支えた統治機構の礎が整備されていったのである。

本研究では、スペインおよびラテンアメリカ、アジア各地の文書館における実地調査を通して史料分析の研鑽を積み、文化人類学、歴史人類学、識字・リテラシー研究、史料論、エスノヒストリー、文書管理論、アーカイブズ学などの方法論に精通したエキスパートたちの知見を結集することにより、スペイン帝国の礎となった文書ネットワークの成り立ちと植民地社会における展開について総合的に究明を試みるものである。

研究代表者 吉江貴文

班員（館内）齋藤 晃

（館外）足立 孝 網野徹哉 井上幸孝 小原 正 坂本 宏 清水有子 菅谷成子
武田和久 中村雄祐 伏見岳志 溝田のぞみ 安村直己 横山和加子

研究会

2016年10月22日

共同研究員全員 これまでの研究活動の内容総括と議論のとりまとめ

共同研究員全員 共同研究成果論集の刊行にむけた企画検討
共同研究員全員 次回の研究会（2月予定）について

2017年2月20日

共同研究員全員 共同研究成果論集の全体構成についてのディスカッション
共同研究員全員 論文草稿に基づいた論集内容の具体的な検討
共同研究員全員 今後の作業スケジュールの確認

成果

最終年度となる本年度は2回の研究会を実施した。10月に開いた第1回研究会では、これまでの議論のとりまとめを行い、スペイン帝国の構成原理の解明に文書メディアという新たな視点を導入することにより、帝国史研究の領域に新たな可能性を切り開く端緒に本研究会がなりえたこと、また、アジア、アメリカからヨーロッパにいたる豊富な事例を比較検討することにより、スペイン帝国の文書ネットワークを取り巻く諸問題（モノとしての文書の特質、文書循環サイクルの在り方、植民地周辺社会の役割等）の現状についてメンバー間の共通理解が深められたこと、などが全体の成果として挙げられた。つづく第2回研究会では、そうした議論の内容を踏まえた上で、本共同研究の最終的な成果を単行本（論集）として取りまとめ、2017年度内を目処に出版準備を進めることで合意し、論集の構成や執筆担当、題目等について出席者全員による具体的な検討を行った。

「現代『手芸』文化に関する研究」

本研究は、日本の手芸に相当する余暇的・趣味的仕事とその造形物の現代的展開を明らかにする。手芸とは、主に女性を担い手とする家庭内での商業化されていない趣味的な制作を意味する概念として明治期に形成された。そのため手芸の領域は、美的に評価された美術や利潤を生み出す工芸に比べて二重に周辺化されてきたといえる。しかし、現在、世界各地で、従来の日本の手芸概念ではとらえられない余暇的・趣味的仕事が多様な展開をみせている。それらは、男性も担い手に含み、アート、フェアトレード商品、エスニック雑貨などとして美術や市場の領域にも進出している。また、趣味を通じた人的ネットワークの形成や、それらの災害後におけるケアとしての機能などが注目を集めている。こうした従来の手芸概念ではとらえきれない新たな領域を「手芸」として捉え返し、その現代的展開を民族誌的に分析し、新たな「手芸」概念の創出を目指すものである。

研究代表者 上羽陽子

班員（館内） 齋藤玲子 南 真木人

（館外） 蘆田裕史 五十嵐理奈 金谷美和 木田拓也 坂田博美 新本万里子 杉本星子
中谷文美 野田涼美 平芳裕子 ひろいのおこ 宮脇千絵 村松美賀子 山崎明子

研究会

2016年6月4日

上羽陽子（国立民族学博物館）「前回までの研究会の論点の整理」
金谷美和（国立民族学博物館）「被災地の手芸——『暇つぶし』、『供養』、『ギフト』と『仕事』」
杉本星子（京都文教大学）「『つぐらぬ』がつなぐ——被災地で『手芸』を考える」
石井康子（特別講師）「現代日本の手芸の諸相——手芸家の視点から」（聞き手：山崎明子）
出席者全員「今後の研究会の進め方と打ち合わせ」

2016年10月16日

上羽陽子（国立民族学博物館）「手芸が生まれる土壌を考える」
出席者全員「これまでの議論の整理と理論的方向性についての全体討論」

2016年12月4日

山崎明子（奈良女子大学）「『つくる×技術』概説」
中谷文美（岡山大学）・金谷美和（国立民族学博物館）・上羽陽子（国立民族学博物館）「『つくる×技術』諸相」
出席者全員「全体討論」

2017年2月26日「ひころの里シルク館」および「さとうみファーム」

「ひころの里シルク館」における手仕事講座の活動体験および観察
石本めぐみ（NPO法人ウィメンズアイ代表理事）「女性支援活動を通して見えてきたこと——被災地と手仕事」
出席者全員「全体討論」

2017年2月27日

「さとうみファーム」における手仕事講座の活動体験および観察

金谷美和（国立民族学博物館）「『つながる×社会・空間』概説」

石本めぐみ（NPO法人ウィメンズアイ代表理事）、杉本星子（京都文教大学）、上羽陽子（国立民族学博物館）
「『つながる×社会・空間』諸相」

出席者全員「全体討論」

成果

本年度は、狭い手芸概念の枠組みを超えた、現代の余暇的・趣味的仕事を捉える上で、被災後、多くの手芸活動がおこなわれた東日本大震災の被災地に焦点をあてた。これに関する具体的な事例をもとにした発表によって、被災地における手芸活動が、自己の癒やしや交流のツールとなり、復興における重要な役割を担っていることが明らかとなった。一方、被災地では、癒やしや交流の機能をもつ「手づくり品」と、被災者がつくり手となって商品化された「手しごと品」とが混在していることが発表を通じて浮き彫りとなった。被災地での手芸活動を「つくり手」、「価格設定」、「造形動機」、「購入者」の視点から議論を深化させる必要性がみえてきた。

今後は、このような論点を加味し、数名ずつのトークセッションをおこない、包括的なアプローチを可能にする基礎的概念の創出を目指したいと考えている。

「近世カトリックの世界宣教と文化順応」

本研究は、16～18世紀のアジアとアメリカにおけるカトリック教会の宣教、とりわけ「順応」と呼ばれる政策に焦点を当て、ローカルな事例の比較とヨーロッパの世界観・人間観の検討を通じて、その歴史的意義を明らかにする。順応とは、宣教師が現地の規範や慣習を学ぶことで地元社会に溶け込み、現地人の改宗を促す政策である。言語、衣食住、礼儀作法、法律、学問など、現地文化の幅広い側面が対象となる。事例としては、アレッサンドロ・ヴァリニャーノの日本宣教方針やマテオ・リッチの中国古典研究など、アジアのイエズス会の政策が有名である。特に中国での政策は「典礼論争」というカトリック教会を二分する論争を引き起こした。

近世カトリックの宣教師の順応はしばしば今日の文化相対主義の先駆けとみなされるが、この評価は正しいのだろうか。両者の共通点と相違点はなんだろうか。今日の相対主義的文化概念が近世カトリックの世界宣教に負うものがあるとするならば、それはなにか。これらの問いに答えるため、本研究は、宣教師の順応をローカルなコンテクストに位置づけ、通文化的実践としてのその特徴を探る。同時に、宣教師が順応に与えた理論的根拠を世界の諸文化の多様性についてのヨーロッパの思索の流れに位置づけ、その思想史的意義を解明する。

研究代表者 齋藤 晃

班員（館外） 網野徹哉 井川義次 王寺賢太 岡 美穂子 岡田裕成 折井善果 小谷訓子
鈴木広光 中砂明德 新居洋子 真下裕之

研究会

2016年5月14日

研究成果の出版に関する全体会議

2016年7月23日

岡美穂子（東京大学）「『新仏教』としてのキリスト教受容説は成立可能か（試論）」

岡田裕成（大阪大学）「適応／収奪／交渉——征服後メキシコにおける羽根モザイク聖画・聖具の制作と活用」

齋藤 晃（国立民族学博物館）「集住化と奴隷狩り——南米熱帯低地におけるイエズス会ミッションの建設」

2016年10月1日

新居洋子（東京大学）「中国における科学宣教と清朝側の意図」

井川義次（筑波大学）「中国哲学情報のヨーロッパ啓蒙主義への流入——シュピツェル『中国文芸論』(De re litteraria Sinensium commentarius)を中心に」

鈴木広光（奈良女子大学）「言語政策と言語普遍」

2016年12月18日

小谷訓子（大阪芸術大学）「キリシタン美術におけるヴァナキュラー——日本イエズス会の「現地への適応」プロジェクトとセミナリオの絵画制作」

真下裕之（神戸大学）「ムガル帝国におけるペルシア語キリスト教典籍とその周辺」

中砂明德（京都大学）「明朝末年における受難のナラティブ」

網野徹哉（東京大学）「適応に抗した宣教者たち」

2017年2月18日

折井善果（慶應義塾大学）「イエズス会宣教師における「理性」概念の形成と日本」

王寺賢太（京都大学）「『文明化』の方向転換——イエズス会パラグアイ布教区をめぐる18世紀フランスの論争の一断面」

齋藤 晃（国立民族学博物館）「宗教と適応」

成果

昨年度は宣教師の異文化適応に関する重要な先行研究をピックアップし、4回の合評会を開催した。これらの合評会を通じて、アジアとアメリカの各地で展開された適応の特色、およびその地域を越えた共通性を浮き彫りにすることができた。本年度は、昨年度の成果を踏まえて、メンバー各人にそれぞれの専門に基づく研究報告をしてもらった。報告のテーマは、在来社会の再編成、在来宗教への対応、現地語の辞書・文法書の作成、キリスト教文献の翻訳、科学的知識の生産、美術品の制作、ヨーロッパ啓蒙思想への影響など、実にさまざまだった。従来の研究では、適応は一部の開明的な宣教師が主導した特殊な宣教方針として扱われがちだった。しかし、本年度の諸報告は、適応が近世カトリックの宣教実践のうちに広く、深く浸透していたことを示してくれた。それらの報告はまた、現地文化に適応しようとする宣教師の試みが、ヨーロッパ文化を自文化の亜種として扱おうとする現地人の試みとわがちがたく結びついており、結果として、適応の成果が両義的にならざるをえなかったこともあきらかにしてくれた。

「家族と社会の境界面の編成に関する人類学的研究——保育と介護の制度化／脱制度化を中心に」

本研究は、保育や介護をめぐるケアを、家族と社会の境界面でやりとりされるサービスととらえ、その制度化／脱制度化のありようを、比較研究するものである。この分析を通して、人間社会は、社会と家族のインターフェースをどのように編成してきたのか、それは今後どうありうるのか展望する。

子供の保育や老人・病人の介護などのケアと呼ばれるサービスは、その一部を家族の外部で、家族外の担い手によって行うことが可能であり、制度化もされている。このサービスを公的な支援として行うのが福祉であるが、今日、その制度は見直されつつある。福祉国家で脱制度化の動きがみられる一方で、行政の施策が未発達な地域で、ネットワークを駆使した独自の制度があらわれている。『家族に介入する社会』を著したジャック・ドンズロの視点も参照しながら、個別のローカルな状況のもとにある保育や介護の、制度化／脱制度化をとらえて比較検討する。背景には、現代世界の社会像はどのように構想されるのか、という問題関心がある。

研究代表者 森 明子

班員（館内）戸田美佳子

（館外）天田城介 岩佐光広 岡部真由美 加賀谷真梨 加藤敦典 木村周平 工藤由美
 沢山美果子 高田 実 高橋絵里香 土屋 敦 内藤直樹 中野智世 西 真如
 浜田明範 速水洋子 モハーチ ゲルゲイ

研究会

2016年5月14日

速水洋子（京都大学）「タイにおける高齢者とそのケアをめぐる家族と共同性のひろがり」

森 明子（国立民族学博物館）「幼少期への介入——ベルリン調査から考える」

全体討論

2016年5月15日

戸田美佳子（国立民族学博物館）「相互行為としてのケアを描く——カメルーン熱帯林の障害者を例に」

全員「中間段階における討論」

研究打ち合わせ

2016年6月25日

岡部真由美（中京大学）「出家からみた家族・ケア・ネットワーク——北タイ都市部を生きるシャン人越境労働者の事例より」

西 真如（京都大学）「身体と家族の境界面——昭和ゲイネスの世代とケア」

木村周平（筑波大学）「誰がケアするのか——津波のあとに残される人と物」

討 論

2016年6月26日

内藤直樹（徳島大学）「ねだりが生み出す『社会』——東アフリカ牧畜社会における『ねだり』と『ケア』」

浜田明範（関西大学）「表の抛出と裏の抛出——ガーナ南部における葬式と社会的なもの」

沢山美果子（岡山大学）「近世日本の乳を呑む子どもたちと乳をめぐるネットワークの形成」

討 論

2016年10月8日

岩佐光広（高知大学）「『普通』に死ぬということ——ラオス低地農村部における看取りの空間と時間」

モハーチ ゲルゲイ（大阪大学）「実験としてのケア 2 地域と代謝がつながるとき——東京下町における患者支援活動の事例をめぐって」

討 論

2016年10月9日

中野智世（成城大学）「カトリック・ミリューとケアのネットワーク——占領下ドイツにおける（1945-49）カリタスの事例から」

高橋絵里香（千葉大学）「規模と境界：フィンランドの自治体再編と社会福祉改革から再考する人類学的全体論」

加賀谷真梨（新潟大学）「小規模多機能型居宅介護事業の開始に伴う家族と社会の領域の再編」

討 論

2016年12月10日

速水洋子（京都大学）「重荷から力へ——タイにおける高齢者ケアをめぐるネットワークと社会の新展開」

森 明子（国立民族学博物館）「ネイバーフッドについての考察——ベルリン街区のメイキング・プレイスとケア」

土屋 敦（徳島大学）「日本の児童養護における家族とケアの境界面の地殻変動——1960年代後半から1980年代初頭における児童養護運動の軌跡から」

討 論

2016年12月11日

戸田美佳子（国立民族学博物館）「相互行為としてのケア」

加藤敦典（東京外国語大学）「コミュニティの制度化と脱制度化——地域社会の高齢者福祉に関する日越交流プロジェクトを通して」

工藤由美（国立民族学博物館）「先住民保健政策下のマプーチェ医療について——代替補完医療・非マプーチェ患者」

討 論

成果

メンバーの研究発表は2巡目の終盤まで済み、個別の議論をふまえて、それぞれの研究が相互にどのように位置づけられるかをめぐって検討を重ねた。本共同研究が、家族と社会の境界面の編成をケアという観点からとらえ、描き出していこうとすることについて、その意味や問題のひろがりについて、あらためて議論した。そして、他者とともに生きる社会をいかに構想するか、という問題関心を核として議論を展開していくうえで、1) ケアの回路・編成を考える方向と、2) ケアが発動する場の構成を考える方向の、ふたつの方向性を導き出した。

さらに、本共同研究と平行して展開する科学研究費補助金によって開催したコロキウム Thinking about care as social organization: A Discussion with T. Thelen and K. Buadaeng（2月19日、国立民族学博物館）に、本共同研究メンバーの大半が参加し、海外のふたりの研究者とともに、社会編成をケアからとらえることに関する集中的な議論をおこない、理論的な考察を深めた。

「政治的分類——被支配者の視点からエスニシティと人種を再考する」

21世紀になり、エスニシティ（文化的実践による社会的分類）や人種（肌の色による社会的分類）が構造化された社会に住み不利益を受けている人々は、カラーブラインド主義や逆差別というリベラリズムの変奏が世界規模で支持を得ている中で、不利益の是正を求める根拠すら失いかねない状況に直面している。本共同研究は、歴史的・民族誌的資料に基づいて、被支配者側からの政治的抵抗の基礎となる分類の編成を解明し、リベラル民主主義の陥穽を批判的に乗り越える契機とする研究視座の確立を目指す。より具体的には、これまでコロニアリズムの歴史に

において不可視だった支配者側のエスニシティや人種（たとえば、アイヌ民族のいう「和人（シャモ）」、沖縄の人々が発する「ナイチャー（ヤマトンチュ）」、カナカ・マオリが用いる「ハオレ」、グアテマラ・マヤ人が口にする「カシラン」）を可視化する視点として政治的分類という考え方を提示する。

研究代表者 太田好信

班員（館内） 關 雄二 竹沢尚一郎 寺田吉孝
（館外） 青木恵理子 池田光穂 石垣 直 川橋範子 慶田勝彦 辻 康夫 深山直子
細川弘明 松田素二 山崎幸治 山本真鳥 横田耕一

研究会

2016年 5月14日

事務連絡

青木恵理子「国家的他者への呪詛と追従——フローレス島山岳民にとってのオランダ・日本・インドネシア」

質疑応答と討論

太田好信「アイデンティティの政治のアフターライフ——政治的分類と歴史の中での相対（あいたい）する倫理に向けて」

2016年 5月15日

総合討論（前日の発表に関する質疑応答と合評の継続）

2016年 6月25日

事務連絡

松田素二（京都大学）「植民地支配の暴力装置と『異人性』——西ケニアの植民地経験と KAR の事例から」

質疑応答と討論

竹沢尚一郎（国立民族学博物館）「Racism の考古学」

質疑応答と討論

2016年 6月26日

総合討論（前日の発表に関する質疑応答）

2016年10月29日

特別招聘講演者の紹介（辻康夫）と共同研究会メンバーの自己紹介（参加者全員）

James Tully（カナダ・ヴィクトリア大学名誉教授）「Decolonizing Political Theory and Anthropology」

討論1（参加者全員）

討論2（参加者全員）

2016年10月30日

成果報告の形態、編集本の方向性などに関する具体的検討

2017年 1月21日

事務連絡と今後の成果報告に関する予定確認

辻康夫（北海道大学）「多文化主義における『歴史』の問題」

質疑と討論

池田光穂（大阪大学）「『支配的存在』を名指し、可視化する試みについて」

質疑と討論

2017年 1月22日

松田素二（京都大学）「『文化人類学とアイデンティティの政治をめぐるアフターライフ』をめぐるメモ」

質疑と討論

成果

2016年度は合計4回の共同研究会を開催した。その方向性として、これまでどおり、第1回目と第2回目は共同研究テーマに関する参加者からの個別発表である。第3回目は先住民研究（indigenous studies）という視点から共同研究テーマを問題化する試みとなった。第4回目は、成果報告の作成に向け具体的取組を開始し、2017年度の2回開催予定である共同研究会の針路を示した。ここで特記すべきは、第3回目 James Tully（カナダ・ヴィクトリア大学名誉教授）氏の講演を通し、本共同研究のテーマにとり重要な論点も浮上したことである。一方において、文化人類学は文化間の差異を強調してきたが、他方において、カナダ先住民研究の領域では先住民的視点が重視され

てから、19世紀以降のコロニアリズムの経験をグローバル化の経験と捉え直し、文化間のつながりを重視するようになったという点である。入植者植民地主義研究 (settler colonialism studies) である本研究会の方向性にも関わる歴史観の提示であり、本年度においても議論される指摘である。

「生活用品から見たライフスタイルの近代化とその国別差異の研究」

本研究は、世界各地の衣食住にかかわる生活必需品の調査を通じて、その変化が伝統的生活様式から近代的生活様式への変化にいかに関連し、またその近代的生活様式が世界的な共通性を示しつつ、なお国ごとの差異をどのような面で保持しているかを検証し、近代化の一般性と国ごとの個別性およびその要因を考察することを目的とする。国家制度や生業経済の近代化は、住民生活のレベルでは生活様式の変化として経験される。生活様式の近代化は、衣類や台所用品、また家具や部屋の間取りの刷新と連動している。そうした生活用品の変化という物質文化研究を切り口に、生活様式が近代化に伴っていかに変化したかをあぶりだそうとするのが本研究の狙いである。生活の近代化には世界規模での画一性が認められる一方、衣食住の伝統慣行に由来する国ごとの差異も予測され、近代化の過程に文化的差異が関与していることを示唆している。本研究ではそうした「近代化」の一般理論についても物質文化の観点から検討を加える。

研究代表者 鏡味治也

班員 (館内) 宇田川妙子 笹原亮二 關 雄二 野林厚志
(館外) 阿良田麻里子 金子正徳 田村うらら 中谷純江 西本陽一 古谷嘉章 松村恵里

研究会

2016年5月7日

古谷嘉章 (九州大学) 「生活用品の物質性」
鏡味治也 (金沢大学) 「生活用品調査で目指すこと」
出席者全員・全体討論

2016年11月5日

笹原亮二 (国立民族学博物館) 「量の可能性・再々説——民博所蔵大村しげコレクションを中心に」
特別展見学
出席者全員・全体討論

2016年12月11日

加賀谷真梨 (特別講師・新潟大学) 「波照間島における台所用品」
質 疑
野林厚志 (国立民族学博物館) 「同化の手段としての近代化——台湾における「山胞」の生活改善の施策」
質疑・全体討論

成果

本年度第1回研究会では、前年度までの世界各地での予備的調査を踏まえ、生活用品研究の位置づけと目的を再検討した。第2回研究会では生活用具についてすでに蓄積のある日本の事例の中でも個性的な大村しげコレクションを素材に、その生活用品の示すものを検討した。第3回研究会では前年度に引き続き沖縄と台湾の事例を紹介し、とくにその変化の方向性とそれが意味するものについて検討した。最終年度としての総括の機会とはとくに設けず、生活用品調査をきっかけとして種々の議論が展開できる可能性を確認し、本格的なデータ収集の構想を練りながらその機会を待つことで共同研究会を終えた。

「呪術的实践=知の現代的位相——他の諸実践=知との関係性に着目して」

現代世界を構成するさまざまな実践=知 (本研究では、感覚を含む行為と知識・信念の双方にわたる概念として、便宜的に「実践=知」という語を用いる) のなかで、呪術的实践=知はいかなる位置をしめ、またそれ以外の諸実践=知といかなる関係性をもつのか。本研究では、呪術的实践=知とそれ以外の諸実践=知 (すなわち科学、宗教、病院医療、学校教育、メディア表象など) との関係性を明らかにすることによって、現代世界における呪術の個別性 (特殊性) と普遍性 (他の諸実践=知との共通性) をうきぼりにすることをめざす。

本研究は、先立つ民博共同研究「知識と行為の相互関係からみる呪術的諸実践」(2007~2009年度、代表:白川千尋)とその成果論集『呪術の人類学』(2012年、白川・川田編、人文書院)をふまえて、その基本的枠組みであっ

た「言葉／行為」を、宗教・世界観や制度との関わり、また世界とのインターフェースとしての感覚などの観点を組み込むことによって、「信じる／知る／行なう／感じる」の各理論的次元へ継承的に発展させる。それを通じて呪術論の観点から、現代世界における実践論や知識論を刷新することをこころざす。

研究代表者 川田牧人

班員（館内）飯田 卓 藤本透子 松尾瑞穂

（館外）飯田淳子 梅屋 潔 片岡 樹 黒川正剛 近藤英俊 島藺洋介 白川千尋

田中正隆 中川 敏 中村 潔

研究会

2016年 6月25日

飯田 卓（国立民族学博物館）「マダガスカル南西部の祖霊と憑依霊」

飯田淳子（川崎医療福祉大学）「感性と力 2人の呪者の肖像」

全体討論：「他の諸実践＝知」について

2016年 7月24日

片岡 樹（京都大学）「タイ山地民ラフの呪術と妖術」

島藺洋介（大阪大学）「『呪術的』実践と自己への配慮と——フィリピンにおける生体肝移植患者の身体的経験と実践に関する省察」

全体討論：呪術のリアリティと他の諸実践＝知のリアリティ

2016年11月27日

田中正隆（高千穂大学）「ベナンにおける宗教とメディア——在来信仰ブドゥのメディア利用」

中村 潔（新潟大学）「WITCHCRAFT_BAZAAR」

最終年度へむけての計画、ならびに事務連絡

2017年 1月21日

松尾瑞穂（国立民族学博物館）「インド・マハーラーシュトラ州における反迷信邪術運動とその法制化」

藤本透子（国立民族学博物館）「カザフスタンにおけるエムシ（治療者）の活動と伝統医療の展開」

最終年度へむけての計画、ならびに事務連絡

成果

本年度は研究会を4回開催し、共同研究員の個別発表を一巡させた。上記「研究目的」にあげた本研究のねらいに対して、本年度はとくに、制度化やメディア化の側面と、宗教的体系化もしくは内面化などとの対比について検討された。その展開として、隣接するさまざまな知識実践に吸収されず、他の知識実践では代替できない呪術の実践＝知の、他の概念へパラフレーズしたり還元論の説明にとどまったりするのではない側面に関する議論が重ねられた。もう一点、「信じる・知る・行なう・感じる」という四つの動詞に関しては、必ずしも均等なウエイトをおいた議論展開ではなく、むしろ当初予想していた「触知性」「物質性」などについての集中的な議論が展開した。これは、現代世界における知識実践としての呪術の基本的性格にかかわる展開であり、「感覚」と「マテリアリティ」という新たな鍵概念へと問題意識を拡張させ、最終年度における総括の手がかりを得ることができた。

「資源化される『歴史』——中国南部諸民族の分析から」

「歴史」を表象、叙述、再編成し資源化する現象は人類社会では普遍的に見られる。近年、中国のインパクトが強まり、日本や世界に多大な影響を及ぼしており、中国に関する関心が高まり、その研究が緊急の課題になっている。また、中国では「中華民族」の一体性が政治的に強調される傾向が顕著である。さまざまな「歴史」の細片をハイブリッドな形で縫合して構築し、それを実利に結びつくものとして「資源化」しがちな傾向が見られる。「歴史」を「資源化」する主体は、各級政府、研究者、知識人、マスメディア、一般民等、複数あり、それらが互いに対立、交渉、妥協しあいながら、資源化の潮流を作り出している。同時に、「歴史」は「資源化」される際に、実用価値的な側面だけでなく、様々な認識主体が自分たちの正当性とアイデンティティの維持を担保しようとして構築される側面をも有する。本研究では、いかなる「歴史」が多様な主体によって、実利の獲得やアイデンティティの維持のため、どのように「資源化」されているのか、エスノ・ローカルな政治社会空間を舞台として批判的・分析的に明らかにする。

研究代表者 長谷川清

班員 (館内) 樫永真佐夫 河合洋尚 韓 敏 塚田誠之
(館外) 稲村 務 上野稔弘 兼重 努 瀬川昌久 曾 士才 孫 潔 高山陽子
長谷千代子 長沼さやか 野本 敬 松岡正子 吉野 晃

研究会

2016年7月9日

樫永真佐夫 (国立民族学博物館) 「ベトナム、マイチャウにおけるタイの移住伝承の資源化」
上野稔弘 (東北大学) 「中国の非漢民族無形文化遺産をめぐるポリティクス——『少数民族非遺藍皮書』を読み解く」

質疑応答

2016年10月22日

国際シンポジウム「中国における歴史の資源化——その現状と課題に関する人類学的分析」共催

寺田吉孝 (国立民族学博物館) 館長補佐挨拶

塚田誠之 (国立民族学博物館) 主旨説明

韓 敏 (国立民族学博物館) 「岳飛の社会記憶とその資源化——杭州岳廟を中心に」

コメント 長谷川清 (文教大学)、兼重努 (滋賀医科大学)

高山陽子 (亜細亜大学) 「烈士陵园の景観——南部と北部の記念碑の比較から」

コメント 松岡正子 (愛知大学)、長谷千代子 (九州大学)

稲村 務 (琉球大学) 「ハニ=アカ族の記憶と記録」

コメント 上野稔弘 (東北大学)

総合討論コメンテーター 曾士才 (法政大学)

2017年1月7日

高山陽子 (亜細亜大学) 「革命の記憶の資源化——中国の記念碑の事例から」

長谷川清 (文教大学) 「問題点の整理と検討」

総合討論

成果

今年度は3回の共同研究会を実施した。第1回はベトナムのタイ族の移住伝説の資源化、中国の非物質文化遺産の認定作業における文化伝統の継承・保存をめぐるポリティクスについての事例分析が報告された。第2回は科学研究費補助金基盤研究プロジェクト「中国周縁部における歴史の資源化に関する人類学的研究」(2015-2017、研究代表: 塚田誠之教授)との連携により、国際シンポジウム「中国における歴史の資源化——その現状と課題に関する人類学的分析」を開催した。中国南部地域からの事例として、岳飛の社会記憶とその資源化、烈士陵园の景観の地域間比較、ハニ=アカ族の記憶と記録に関する研究報告が班員3名によってなされたほか、総合的な討論を行った。第3回は中国革命の歴史的記憶とモニュメントの事例分析が報告されたほか、これまでの事例分析の成果を総括するとともに、理論的な枠組みを構築するために必要な論点の整理を行った。以上の研究活動を通じて、中国南部諸地域の歴史・記憶の資源化のダイナミクス、資源化に関わる各主体の表象行為や実践のバリエーション、中華ナショナリズムとの相互補完的關係などについて、人類学的観点から解明していくことの意義や課題について展望を得ることができた。

「モノにみる近代日本の子どもの文化と社会の総合的研究——国立民族学博物館所蔵多田コレクションを中心に」

国立民族学博物館に所蔵される多田コレクション (通称「時代玩具」) は、江戸時代から戦後にかけての玩具を中心とした子どもに関わる様々なモノから構成される、総数5万数千点に及ぶ膨大な資料群である。玩具を初めとした子どもに関する多種多様なモノの数々は、それぞれの時代の子どもの対する人々や社会の意識を克明に映し出している。しかし、近代以降、それらは消費を前提として商品化されたこともあって、遺存は少なく実態は明らかではない。多田コレクションは、そうした子どもに関する品々が網羅的に収集・保存されている希有な例として価値が高い。

本研究は、児童学・美術史・玩具学・歴史学・民俗学・文化地理学・保存科学といった様々な専門分野の研究者が一堂に会し、コレクションの資料に対して多角的・総合的に検討し、分析を加えることで、コレクションの全体像を正確に把握することを試みる。それと共に、従来漠然としたイメージでしか理解されてこなかった近代日本の

子どもの文化や社会の実態を、モノを資料として活用することで具体的かつ精緻に解明する。そして、その成果に基づき、近代以降の子ども観に代わる時代に即した新たな子ども観の見通しを提示し、展示会の開催を通じて広く社会に問うことを目的とする。

研究代表者 是澤博昭

班員（館内） 笹原亮二 日高真吾

（館外） 稲葉千容 内田幸彦 香川雅信 亀川泰照 小山みずえ 是澤優子 神野由紀
滝口正哉 濱田琢司 森下みさ子 山田慎也

研究会

2016年5月28日

高見俊樹（諏訪 高島城）「諏訪市博物館所蔵「玩具店・一〇高見商店」資料の紹介」
民博所蔵資料の熟覧（北陸の露天商所持の玩具資料）
共同討議「縁日と駄菓子屋の玩具をめぐる」

2016年5月29日

森下みさ子（百合女子大学）「シールから知る『子ども文化』——子ども消費者と『近代』なるもの」
是澤優子（東京家政大学）「明治大正期の玩具分類について」

2016年10月8日

滝口正哉（徳川林政史研究所）「近代における江戸文化の懐古と捉え直しについて」
笹原亮二（国立民族学博物館）「生活文化と博物館展示を巡る実践的課題」

2016年10月9日

野尻かおる（荒川ふるさと文化館）「画家小松崎茂の表現背景と子どもの文化」
共同討議：昭和の少年文化を中心にして

2016年12月17日

中島透（諏訪市博物館学芸員）「高見商店営業期の諏訪市上諏訪の状況」
高見商店資料の熟覧
小林純子（諏訪市博物館館長）「高見商店資料の背景」

2016年12月18日

亀川泰照（荒川ふるさと文化館）「明治の縁日・駄菓子屋空間と『おもちゃ』について」
小山みずえ（武蔵野短期大学）「戦前の幼稚園と幼児向け教材の開発——『手技』用教材を中心に」

成果

子どもの社会や子どもを取り巻く社会全体との関係を解明し、近代日本の子ども観の形成過程を実証的に提示するという視点にたち、本年度は、これまでの調査研究成果をもとに各共同研究員が、それぞれの専門分野と研究テーマに基づき研究発表を行った。

さらに前年度に続き（田中本家博物館・兵庫県立歴史博物館所蔵資料）民博資料と同等の内容を有する諏訪市博物館所蔵高見商店資料（長野県諏訪市）について、研究会及び現地調査を実施した。同資料の内容や現地の研究者との議論等を通じて、それらの実態の把握を試みるとともに、一個人の観点から形成された民博資料との関連性を検証した。また少年文化に関する希少性の高い資料を所蔵し、展示会を開催した実績のある博物館関係者を招聘し、主に展示という側面から研究会を開催した。

以上のことにより共同研究の成果をもとに展示会を開催するための準備に大きな進展がみられた。

「演じる人・モノ・身体——芸能研究とマテリアリティの人類学の交差点」

1980年代以降の人類学は、モノが人間に使われたり、意味や価値を付与される側面だけでなく、モノの側からの人間への働きかけや、モノと人の相互的作用によって出来事が生成されるプロセスに着目している。また、そこに物質性がいかに関わるのかという問いも重要性を帯びている。本研究は、こうした「マテリアリティの人類学」の関心を芸能研究に差し入れ、新たな芸能研究の視座を探求する。この芸能にはいわゆる「民俗芸能」からコンテンポラリーまでを含む。また本研究の関心は、身体や上演を取り囲む環境にも向けられる。本研究の第一の目的は、芸能を人とモノの織りなす営みと捉え直し、表現や伝承にモノがどのように関与するのかを考察する事である。

芸能に特徴的な、人とモノ（例えば仮面や楽器や他者の身体）が「一つになる」相互浸透的な在り方や、モノに

触発され想像力や創造性が刺激されるプロセスにも注目する。動きや音や物語の中で展開する人とモノの関係性の特性を考察し、人類学を進展させることが本研究の第二の目的である。

研究代表者 吉田ゆか子

班員（館内）八木百合子

（館外）佐本英規 大門 碧 田中みわ子 辻本香子 丹羽朋子 増野亜子 松嶋 健
柳沢英輔 山口未花子 竹村嘉晃

研究会

2016年10月29日

吉田ゆか子（東京外国語大学）前回のまとめ、事務連絡

辻本香子（日本学術振興会（大阪大学））「『本番を乗り切る』という活動——香港の龍舞チームにおける人とモノから生じる葛藤と妥協」

イリナ・グリゴレ（東京大学）「実験的展示——人類学とアートをめぐる身体、映像、踊り」

2016年10月30日

八木百合子（国立民族学博物館）「『聖なるもの』の継承——聖像を通じてみる人・モノ・信仰」

吉田ゆか子（東京外国語大学）「バリ島の曖昧な仮面たち——アブダクションの不一致をめぐる」

全 員 今後の予定など

2017年1月21日

丹羽朋子（人間文化研究機構）「窓花から窓花展へ——上演の再現メディアとしての中国剪纸と民族誌展示」

山口未花子（岐阜大学）「動物になるとき——北米狩猟民と動物のつながりを生成するモノとしての動物の身体」
全体討論（1）

2017年1月22日

田中みわ子（東日本国際大学）「プロテーゼとしての車椅子——『隠喩』と『機能』を超えて」

松嶋健（広島大学）「ミケランジェロの方法をめぐる——引き算としての彫刻と演劇」

全体討論（2）

成果

計4回の研究会を開催し、東京大学のイリナ・グリゴレさんを含む8人が研究発表を行った。そこでは仮面舞踊、演劇、車椅子ダンスなどの芸能を専門に研究してきたメンバーに加え、狩猟、聖像信仰、切り紙といった芸能そのものではないが、人とモノの多様な関わり方に焦点化して研究してきたメンバーも研究発表を行った。民族誌的展示の活動を題材とした研究報告も二つ含まれる。今年度の特徴は、仮面を被る演者や、車椅子を自在に操る踊り手の事例など、モノが人と一つになる局面について意見が交わされたことである。人がモノを自由に操れるようになるという面だけをみるのでは十分でなく、人がモノによって作り変えられる、異なる身体感覚や使い方が生じるという側面への着目や、モノの物質性もたらす種の抵抗とせめぎ合ったり、モノが要求する身体性とはあえて距離をとるところに生まれる創造性への着目も有意義ではないかということが議論された。またモノを展示することあるいはモノを制作することと、パフォーマンスすることの類似点あるいは連続性についても議論がなされた。

「チベット仏教古派及びボン教の護符に関する記述研究」

1979年に国立民族学博物館は「チベット仏画コレクション」を購入した。その内容は実は仏画ではなく、千点を超すチベット仏教古派及びボン教の護符とそれを刷るための版木である。チベット仏教とボン教は独自の教義・哲学・論理体系を作り上げ、東洋人の思惟方法を語る上で主要な柱の一つになっている一方で、民間信仰をも貪欲に受け入れ、独特の「行」を発展させてきた。チベットの精神文化基層においては、超越的な原理と世俗的な経済原理とが絡み合っており、その二つを有機的に結びつけるための仕掛けとして「呪力観ないし呪物」が働いていると思われる。仏教やボン教の大蔵経論部の一定のポジションが「呪法」や「脱呪法」に割かれているのはそのことと密接な関連がある。護符はそこに機能する呪物の身近なモノの一つである。

我々は、チベットに広く行われている護符に注目し、一般の人々の目線に立って、それらの内容・意味・用途の記述、文献学的裏付け、護符の加持・聖化（パワーの付与）に関する儀礼、その経済的仕組み、チベット人でない人々を含む民衆の間での現代的意味などを様々な角度から調査研究し、護符というモノを通じてチベットの宗教実践の有り様と宗教文化基層の一端を明らかにすることを目標としているが、本共同研究ではその第一歩として民博

が蔵する護符の図像とそこに書かれるマントラを含む文を記述・解析することを試みたい。

研究代表者 長野泰彦

班員 (館内) 三尾 稔

(館外) 大川謙作 大羽恵美 小西賢吾 小松和彦 武内紹人 立川武藏 津曲真一
那須真裕美 別所裕介 三宅伸一郎 村上大輔 森 雅秀 脇嶋孝彦

研究会

2016年 5月21日

護符の同定・記述作業

2016年 7月13日

護符の同定・記述作業

2016年 8月24日

護符の同定・記述作業

2016年12月 3日

護符の同定・記述作業

2017年 1月29日

護符の同定・記述作業

2017年 2月 9日

研究内容「ボン教護符の記述作業」

成果

- ①護符の記述作業及びその大蔵経論部などとの同定作業を、仏教文献班とボン教班に分けて引き続き行った。
- ②ボン教関係の護符については、他の財源による調査の機会を利用して、カトマンズのボン教寺院において、本資料の原収集地サムリン出身のラマについてフィールド調査を行った。

「グローバル化時代のサブスタンスの社会的配置に関する比較研究」

人類学においてサブスタンス（身体構成物質）に関する研究は、主に親族研究のなかで行われてきた。特に、生殖の観念の文化的多様性に関する民俗生殖理論や、生物学的生殖に限定されない人の関係性についての議論は、自然／文化、生物学的／社会的次元の二元論を前提とする親族（研究）を批判的に乗り越えようとするものである。ところが、今日、サブスタンスは、科学技術や医学の発展、グローバルな経済市場やトランスナショナルな移動の増加という現象の最前線で、資源として取引され、流通されるようになっており、従来の親族研究の射程を超えた新たな重要性を帯びるに至っている。遺伝子やゲノムといった新たなサブスタンスが、個や家族、集団のアイデンティティ形成や社会化のあり方に影響を及ぼすさまは、医療人類学を中心に生社会性（biosociality）という点から議論されている。

本研究の目的は、オセアニア、アジア、ヨーロッパにおけるサブスタンスの社会的配置に関する比較研究を通して、グローバル化時代のサブスタンスをめぐる社会動態の包括的な理解をはかるとともに、親族研究と医療人類学で二極化されているサブスタンス研究を架橋するアプローチを提示することである。

研究代表者 松尾瑞穂

班員 (館内) 宇田川妙子 深川宏樹

(館外) 澤田佳世 島藺洋介 白川千尋 新ヶ江章友 田所聖志
深田淳太郎 洪 賢秀 松岡悦子 松嶋 健 山崎浩平

研究会

2016年 6月 4日

松尾瑞穂（国立民族学博物館）「文献解読 Janet Carsten 2001 “Substantivism, Antisubstantivism, and Anti-antisubstantivism”」

栗田博之（東京外国語大学）「「赤ちゃんはどこから来るの？」とのその後」

深川宏樹（国立民族学博物館）「血が否定される時——ニューギニア高地におけるサブスタンス紐帯とその切断」

全員 ディスカッション

2016年12月17日

松尾瑞穂（国立民族学博物館）「趣旨説明」「インドにおける血の隠喩——カーストと優生学の交差」

深田淳太郎（三重大学）「戦没者と生者のあいだ——遺骨（サブスタンス）による有／無縁化」秋田大学鉱業博物館 展示解説、資料熟覧

田所聖志（秋田大学）「地下の油と食べ物の脂を結びつける語りについて——パプアニューギニアの天然ガス開発地での調査から」

宇田川妙子（国立民族学博物館）「サブスタンスのリアリティ」

ディスカッション、質疑応答

深川宏樹（国立民族学博物館）「文献解説 Mary Weismantel 著 Making Kin: Kinship Theory and Zumbagua Adoptions」

全員 今後の打ち合わせ

成果

本年度は研究会を2回開催した。第一回目は、外部講師として栗田博之教授を招へいし、親族論の立場からのサブスタンス研究の知見をメンバーで共有、議論をして共通理解を深めるとともに、メンバーの研究報告も実施した。また、サブスタンス研究の近年の基本文献の読解を行い、シュナイダーからカーステンに至る研究動向を把握した。第二回目は、秋田大学にて、日本文化人類学会東北地区研究会および科研「現代インドにおける遺伝子の社会的布置に関する人類学的研究」（松尾瑞穂代表）との共催で、公開ワークショップとして開催した。メンバー4名が研究報告を行い、南アジア、オセアニア、ヨーロッパにおけるサブスタンスをカギ概念とした研究枠組みとその方向性について、隣接分野の研究者らと討議を行った。また、第一回目同様、講読文献も継続した。二年目に当たる本年度は、これらの活動を通して、研究会としての共通理解を深めるとともに、個別の研究報告を積み重ねることで、地域横断的な多様なサブスタンスの様態が徐々に姿を現すとともに、分析に際してのパースペクティブをいくつかの段階に分けて設定することが可能となった。

「驚異と怪異——想像界の比較研究」

ツヴェタン・トドロフが『幻想文学論序説』（1970）で定義したように、「驚異」marvelous や「怪異」uncanny は、自然界には存在しえない現象を描いた幻想文学、いわゆるファンタジーの部類に入るとみなされる。近代的な理性の発展とともに、科学的に証明のできない「超常現象」や「未確認生物」はオカルトの範疇に閉じ込められてきた。しかし近世以前、ヨーロッパや中東においては、犬頭人、一角獣といった不可思議ではあるがこの世のどこかに実際に存在するかもしれない「驚異」は、空想として否定されるべきではない自然誌の知識の一部として語られた。また、東アジアにおいては、実際に体験された奇怪な現象や異様な物体を説明しようとする心の動きが、「怪異」を生み出した。

本研究会では「驚異」と「怪異」をキーワードに、異境・異界をめぐる人間の心理と想像力の働き、言説と視覚表象物の関係、心象地理の変遷などを比較検討する。その成果は、当館における特別展示のかたちで公開することを予定している。

研究代表者 山中由里子

班員（館内）菅瀬晶子 吉田憲司

（館外）榎村寛之 大沼由布 香川雅信 金沢百枝 黒川正剛 小林一枝 小松和彦

小宮正安 佐々木聡 寺田鮎美 林 則仁 松浦史子 松田隆美 宮下 遼

安井眞奈美

研究会

2016年8月27日

佐々木聡（大阪府立大学）「中国の〈人魚〉をめぐる怪異表象——祥瑞災異思想の観点から」

山中由里子（国立民族学博物館）「驚異と怪異の接点としての人魚」

総合討論

2016年8月28日

特別展「立体妖怪図鑑——妖怪天国ニッポン part II」資料閲覧

れきはくアカデミー「妖怪としての人形」（香川雅信）講演聴講
ディスカッション

2016年12月3日

木場貴俊（神戸女学院大学）「近世日本の『怪異』の見方——自然観との関わりから」

山中由里子（国立民族学博物館）「『心の進化』から驚異・怪異を考える——人類の自然理解に関する認知科学的
研究の紹介」

総合討論

2016年12月4日

みんぱくの幻獣探訪（本館展示場において幻獣資料を各自調査）

小林一枝（早稲田大学）「イスラーム美術における星座と蝕の表象——その形成に関する一考察」

松浦史子（二松学舎大学）「東アジアに於ける異形の表象と政治・文化——獣頭の鳳凰について」代読：佐々木
聡（大阪府立大学）

金沢百枝（東海大学）「ヨーロッパの海獣イメージと想像力——なぜ海獣は海図に描かれたのか 人魚とケート
スを例に挙げて」

総合討論

成果

木場の発表「近世日本の『怪異』の見方——自然観との関わりから」を通して、分析概念としての「自然」とい
う用語と、近世日本の文献に登場する「自然」という語を混同してはならないという共通認識を得た。また、山中
は「『心の進化』から驚異・怪異を考える——人類の自然理解に関する認知科学研究の紹介」において、認知考古
学や進化心理学の研究を参照しつつ、驚異や怪異に関する文化相対主義的な研究を、より普遍主義的な認知科学の
成果に照らし合わせて捉えなおすことによって、人類に共通の行動や表象のパターンを見出す可能性を示唆した。
小林、松浦、金沢の発表で、天・地・海の驚異・怪異のモチーフを比較した。

怪異現象や異界との交信の非物質的な部分は、絵画やモノなどの静的な視覚資料ではその本質を表すことは難し
く、伝承においてはそれが「異音」として登場することも多い。異界と人間界をつなぐものとして「音」に注目す
るというアイデアが、本共同研究における議論の中から生まれ、『『怪異の音』の映像音響資料収集』という情報
プロジェクトの企画申請につながった。

「応援の人類学——政治・スポーツ・ファン文化からみた利他性の比較民族誌」

本研究は、応援という切り口から、人類学的研究領域の拡大を図り、人間文化の特質の一端を解き明かすことを
目的としている。実践的な関心とも関係する開発援助から福祉やケアサービスなど「支援」に関する研究や、アニ
メなど現代風俗のファン文化に関する研究は、人類学のみならずさまざまな学問分野において近年数多くなされて
いる。本共同研究会では、こうした個別研究を横断的に架橋して、政治やスポーツにおける応援まで含めたいうえて、
人間にとっての利他性の特質にも迫りたい。応援（support）という行為一般を対象とするが、さしあたり政治・ス
ポーツ・ファン文化の下位領域に分けて焦点を当て、民族誌的データをもとに比較分析を行う。

研究代表者 丹羽典生

班員（館内） 笹原亮二 三尾 稔

（館外） 岩谷洋史 梅屋 潔 小河久志 風間計博 亀井好恵 木村裕樹 熊田陽子

瀬戸邦弘 高野宏康 高橋豪仁 立川陽仁 椿原敦子 難波功士 前川真裕子

山田 亨 山本真鳥 吉田佳世

研究会

2016年6月11日

吉田佳世（神戸大学）「変転する女性像——日本の大学応援団における女子団員の参入とその変遷」

質疑応答

木村裕樹（龍谷大学）「『団史』のなかの応援団——『応援歌』をめぐる予備的考察」

質疑応答

総合討論

2016年10月1日

高橋豪仁（奈良教育大学）「スタジアム空間の統治——統制される観客と管理される私設応援団」

質疑応答

瀬戸邦弘（鳥取大学）「応援団という空間とその世界観」

質疑応答

全体討論

2016年12月10日

山田 徹（筑波大学）「参加型スポーツにおける応援——トライアスロンイベントを事例として」

質疑応答

高野宏康（小樽商科大学）「近代日本における政治演説と雄弁家——永井柳田郎を中心に」

質疑応答

全体討論

2017年2月25日

椿原敦子（龍谷大学）「デモと応援——A. オングの vicarious 概念を手がかりに」

質疑応答

前川真裕子（神戸大学）「オーストラリアの反捕鯨キャンペーンにみる応援の政治学」

質疑応答

全体討論

成果

今年度は、4回の共同研究会を開催した。これまでは応援という現象を考える上で比較的理解しやすいスポーツの領域の事例を中心に取上げてきた。今年も引き続き大学の応援団の事例が取り扱われ、バンカラなイメージを代表する応援団が現在では女性の参入が必要不可欠となっている現状とそれに至る歴史的経緯について検討された。また応援団にはつきものの各種の歌（応援歌、学生歌、寮歌）について、幅広く資料を取りそろえた研究発表が行われた。

スポーツも学生スポーツの枠に留まらず、プロスポーツ（野球など）やアマスポーツ（トライアスロンなど）の現場における応援についても対象として取り上げ、議論がなされた。さらに今年度の後半にはいと、政治という文脈における応援の現象の特徴にも着目する研究発表が行われた。それらのスポーツの領域との違いについて、日本、オーストラリア、アメリカなどの事例紹介を通じて検討した。

「考古学の民族誌——考古学的知識の多様な形成・利用・変成過程の研究」

考古学は一般に過去についての科学的な研究と捉えられている。しかし同時に、考古学的知識や出土品が、時に観光資源として利用され、国家・民族をめぐる政治と結びつくように、現代を形作る実践的な学問でもある。この「科学としての考古学」と「社会実践としての考古学」の間の緊張関係をめぐって、考古学者も、植民地主義やナショナリズムの歴史との関わり等、考古学の倫理について内省的な検討を始めているが、それらはまだ考古学内部にとどまっている。本共同研究では、考古学的知識が作られ、消費される、その多様なあり方を検証することによって、考古学がどのように社会関係や人々の世界観を形成し、変化させ、新たな景観をも作り出しているのかについての広範な理解を目指す。そのために、次の3つの視点から複数フィールドにおける考古学的実践の民族誌・歴史的研究を行う。(1) 考古学的知識・技術習得のプロセスは、どのように個人のものの見方、コミュニケーション、行為に影響を与えているのか。(2) 発掘現場やラボで、出土品などのモノはどのように考古学的データに変換されるのか。(3) 考古学は遺跡観光、国家・民族の歴史の修正、社会運動にどのような影響を与えているのか。

研究代表者 ERTL, John (アートル、ジョン)

班員 (館内) 關 雄二 寺村裕史 ピーター, J. マシウス 野林厚志
(館外) 石村 智 市川 彰 岡村勝行 サウセド セガミ ダニエル ダンテ 渋谷綾子
寺田鮎美 中村 大 松田 陽 溝口孝司 村野正景 山藤正敏 吉田泰幸
米田 穰

研究会

2016年6月25日

開会 趣旨説明 (John Ertl, 渋谷綾子)

ゲストスピーカーによる講演1 藤尾慎一郎 (国立歴史民俗博物館) 「歴史になった縄文・弥生時代の展示——
相対年代から数値年代へ」 質疑応答ゲストスピーカーによる講演2 後藤 真 (国立歴史民俗博物館) 「人文情報学と総合資料学——情報技術は人
文学の方法論とどのような関係を持つようとしているのか」 質疑応答話題提供1: 中村大 (立命館グローバル・イノベーション研究機構) 「GISと縄文時代研究——北東北の後・晩
期の事例を中心に」

ディスカッション

2016年6月26日

事例紹介: 寺田鮎美 (東京大学総合研究博物館インターメディアテク研究部門) 「サイエンスをどう展示するか」

話題提供2: 渋谷綾子 (国立歴史民俗博物館) 「微細植物遺体分析におけるデータ生成と解釈、誤解」

話題提供3: 寺村裕史 (国立民族学博物館) 「考古学とオープンサイエンス——フィールドで取得したデータを
どのように扱うのか」

質疑応答

文献解題 (司会: 渋谷, Ertl)

ディスカッション

今後の研究会の進め方、次回の研究会について

連絡事項

閉 会

2016年11月5日

趣旨説明 (ジョン・アートル、ダニエル・セガミ、山藤正敏)

基調講義: 關 雄二 (国立民族学博物館) 「ペルーの小村における考古学的プロジェクトから発生した社会的記憶」

事例紹介1: 市川彰 (名古屋大学) 「メソアメリカ考古学と日本人研究者」

事例紹介2: ダニエル・セガミ (国立民族学博物館) 「日本における外国考古学者の苦難」

事例紹介3: 村野正景 (京都文化博物館) 「『アートと考古学』の導入と展開について——日本と中米の事例から」
討 論

2016年11月6日

事例紹介4: 山藤正敏 (奈良文化財研究所) 「西アジアでの考古学: 日本隊の60年」

講 義: 溝口孝司 (九州大学) 「世界の中の日本考古学」

総合討論: 溝口孝司 “A Future of Archaeology” (2015) を題材に

次回共同研究会について

2017年1月28日

アートル ジョン (金沢大学)、松田陽 (東京大学)、岡村勝行 (大阪文化財研究所) 「開会 趣旨説明」

岡村勝行 (大阪文化財研究所) 「この共同研究はいかに日本、世界の現代考古学に資するのか?」

ピーター J. マシウス (国立民族学博物館) 「Building a house without walls and roof: archaeological
reconstruction from the perspective of plant domestication and crop history」

松田陽 (東京大学) 「なぜ (一部の) 人々は遺跡を復元するのか」

アートル ジョン (金沢大学) 「Aims and Outline of Joint Research Publication 1: “Archaeological Data
Making” (tentative title)」

吉田泰幸 (金沢大学) 「出版物の目的と概要2: ふくげん——考古学的想像力がかたちづくるものがたり」

Discussion

成果

共同研究会第三回は「考古学におけるデータの多様性」をテーマとし、放射性炭素年代測定 (ゲストスピーカー・藤尾慎一郎)、GISとデータベース作成 (中村大、寺村裕史、国立歴史民俗博物館・後藤真)、微細植物遺体分析 (渋谷綾子)、科学展示 (寺田鮎美) の実践者の講演の後、データベースに関する重要文献をもとに議論を行った。共同研究会第四回は「日本人考古学者の外国における考古学的実践/海外からみた日本の考古学的実践」をテーマとし、この視点からの中南米 (關雄二、市川彰、村野正景)、西アジア (山藤正敏)、日本 (ダニエル・セガミ) における

ケーススタディと、それを包括しうる溝口孝司による理論考古学の文献をもとに、議論を行った。共同研究回第五回は「本共同研究会の意義とその成果の発表方法」について、岡村勝行の問題提起をもとに改めて議論を行い、大きくは考古学的データの生成（具体例をピーター・マシウス、ジョン・アートルが発表）と復元（具体例を松田陽、吉田泰幸が発表）を軸にすることを確認した。

「宇宙開発に関する文化人類学からの接近」

本研究の目的は、宇宙開発を対象にした人類学的研究の可能性を探り「先端科学技術」の人類学という新しいテーマに接近するための方法論的検討をおこなうことにある。20世紀後半から宇宙開発に関わる科学技術の進展、宇宙空間の利用が本格化し、宇宙は単に科学技術の研究対象に留まるだけではなく、国際的に展開する政治的かつ経済的な背景やローカルな社会文化的な基盤や生活文化とも密接に関わる問題領域となりつつある。本プロジェクトは、(1) 想定される宇宙に関する具体的なトピック（宇宙産業、ツーリズム、人間の身体的かつ認知的変容など）に対する従来の概念の有効性や方法論を検討する。(2) は、科研費によるJAXAとの共同調査プロジェクトと併行して行われ、宇宙開発技術者に対するインタビュー調査データの検討・解釈作業を進める。本研究は最終的に近代科学技術の検討を射程に入れた「宇宙人類学」という総合的な主題を設定した研究領域の確立を目指す。

研究代表者 岡田浩樹

班員（館内） 飯田 卓 上羽陽子

（館外） 磯部洋明 岩田陽子 岩谷洋史 大村敬一 川村清志 木村大治 佐藤知久
篠原正典

研究会

2016年6月25日

長谷川義幸（JAXA）「日本の有人宇宙開発」

2016年6月26日

水谷裕佳（上智大学）「宇宙研究と北米先住民社会のかかわり」

成果出版、および今後の活動方向の打ち合わせ

2016年12月3日

宮嶋宏行（国際医療福祉大学）「宇宙居住や生命維持システムに関する研究」

意見交換

2016年12月4日

成果出版、および今後の活動方向の打ち合わせ

2017年2月18日

鳴沢真也（兵庫県立大学）「地球外知的生命探査論」

2017年2月19日

成果出版、および今後の活動方向の打ち合わせ

菅 浩二（國學院大學）「冥王星と宇宙葬」

成果

本年度は、主に科学系分野を中心とした他分野の外部講師を招き、宇宙開発に関する様々なトピックについて、人類学的接近の可能性を探り、議論を深めることができた。まず、宇宙関連施設と地域住民の関係については、「科学人類学」「技術人類学」の課題として重要なフィールドであることが明らかになった。すなわち、現代の最先端科学技術の知識と科学的世界観、論理が一般市民、地域住民や先住民に受容され、理解されているかの問題であり、同時に、開発と地域社会、先住民との関係という古典的テーマが交錯するフィールドである。次に、閉鎖実験棟における生命維持システムの問題は、住環境や環境認識、さらには文化としての居住空間という人類学的問題と接続することが明らかになった。そして地球外生命体との交信の問題（NASAのSETI Project）は、異文明、異文化とのコンタクトの問題やコミュニケーションの問題という重要な議論に展開しうる。宇宙開発技術者に関するインタビューデータについては、日本の有人宇宙開発の中心的役割を担ったJAXAの長谷川氏の講演および質疑応答を通して、今後の研究方針を明確にすることができた。

「放射線影響をめぐる『当事者性』に関する学際的研究」

核実験や原発事故による放射線影響を受けた社会については、人体や自然環境への影響に関する自然科学分野の研究、加害責任を明らかにする歴史学研究、放射線影響の基準を決定する政策学的研究、社会的影響を明らかにする社会学および人類学的研究などが蓄積されてきた。

しかしながら実際には、遺伝的疾患や食料に対する不安を訴える当事者の発言は「感情論」として切り捨てられる傾向にある。これまでの放射線影響に関する研究により、その不確実性が科学的に明らかにされてきたにも関わらず、実社会における被害対応や予防では、放射線影響の不確実性を生きる「生活者の視点」からの被害の理解は十分ではない。

そこで、本共同研究では、被害者の「当事者」としての「生きること」や「生活」の視点からの被害観の解明を目的とする。これまで個別に研究してきた人類学を中心として、医学、政治学、歴史学の学問分野と連携し、米国、マーシャル諸島、日本、太平洋を調査対象としたこれまで個別に行われてきた研究を統合・深化させる。

研究代表者 中原聖乃

班員（館内）林 勲男

（館外）市田真理 猪瀬浩平 岡村幸宣 越智郁乃 間間 元 桑原牧子 小杉 世
島 明美 関 礼子 西 佳代 根本雅也 三田 貴 吉村健司

研究会

2016年6月11日

成果報告について、他の研究プロジェクトとの連携、新メンバーの自己紹介

桑原牧子（金城学院大学）「フランス領ポリネシアの核実験被ばく問題へのキリスト教的支援についての研究計画」

小杉世（大阪大学）「ニュージーランドから見た太平洋核実験——キリバス、仏領ポリネシアを中心に」

2016年10月29日（丸木美術館 埼玉県）

壺井明展ギャラリートーク参加 被ばく放射能汚染に関する芸術について学ぶ

丸木美術館館内にて作品鑑賞

2016年10月30日（丸木美術館 埼玉県）

放射線影響に関する基礎知識を学ぶワークショップ（小沢 洋一）

2017年2月4日

今後の研究計画および成果報告のための話し合い

特別講師による研究会

菅野利行（福島県富岡町職員）「富岡町の役割と復興への軌跡」

2017年2月5日

関 礼子（立教大学）「原発事故と当事者性の社会学」

島 明美（ふくみみラボ）「福島原発事故における情報リテラシー——当事者から見た6年間～ジャーナリズムの役割り」

根本雅也（一橋大学）「科学・制度・経験——原爆被爆者の視点から考える放射線の影響」

成果

本年度は、3回の研究会を開催した。初回は、フレンチポリネシアにおける核実験とキリバスにおける核実験に関する現代的情報を共有することを目的とした。第3回目は、大規模な放射線被害の原点である広島原爆投下の被害者をめぐる状況について、また最も新たな放射線被害である福島原発事故を事例として取り上げながら、社会学による「当事者性」の分類について情報を共有した。同じく3回目には、富岡町の行政職員の方のお話を伺い、国と市民の間で重大な決断を迫られる現場を垣間見た。放射線被害の構造的なありようを確認できた。また、第2回目は、芸術が放射線被害をどう捉えられているのかを知るために、メンバーの所属先である埼玉県丸木美術館で開催された壺井明特別展『無主物』を、ギャラリートークとともに見学し、アートが制度によって認められえない放射線被害をあぶりだす手段となっている点を確認した。これまでの研究会で、放射線被害の世界的な広がりの中でとらえるとともに、それぞれの放射線影響に関する歴史的な文脈および社会的状況を知ることができた。

「医療者向け医療人類学教育の検討——保健医療福祉専門職との協働」

少子高齢化、医療の高度・専門分化、患者の権利意識の変化等に伴い、保健医療福祉の現場では、医療者とクラ

イアントあるいは多職種の間でのコミュニケーション不全の問題等、医療福祉系の個別の学問では対応しきれない複雑な課題が生まれている。これらの課題に日々直面する保健医療福祉専門職（以下、「医療者」）にとって、事象をその社会的文化的文脈の中で理解する視点、他者理解や自己相対化の視点を提供する医療人類学の知見の有用性は高く、医療者教育の現場でもその潜在的需要がある。また、医学教育では国際的な教育の質保証のため、今後5年程度の間には全国80大学が認証評価を受審するという動きがあり、その評価基準のなかで医療人類学も言及されている。こうしたなか、現代の日本の医療者を対象とした医療人類学教育のあり方を検討することは喫緊の課題である。そこで本共同研究では、複数の職種の医療者との協働により、医療者を対象とした医療人類学教育のあり方を検討し、その教材を開発することを目的とする。

研究代表者 飯田淳子

班員（館内） 鈴木七美 松尾瑞穂

（館外） 伊藤泰信 梅田夕奈 大谷かがり 工藤由美 辻内琢也 照山絢子 錦織 宏

濱 雄亮 浜田明範 星野 晋 堀口佐知子 宮地純一郎 吉田尚史

研究会

2016年7月3日

吉田尚史（東京福祉大学）「医療人類学の受容の系譜について——医療現場の要請から考える」

梅田夕奈（東京都立松沢病院）「医学を身に刻む——医学教育の内在的理解の試み」

参加者全員・総合討論

2016年11月12日

小田原悦子（聖隷クリストファー大学）「日本の作業療法教育と医療人類学への期待」

沖田一彦（県立広島大学）「語りに基づく医療と理学療法教育——理学療法士の卒前・卒後教育を実施して感じた課題」

参加者全員・総合討論

2017年2月5日

錦織 宏（京都大学）「日本の医学教育における社会医学、行動科学、社会科学、そして医療人類学」

宮地純一郎（浅井東診療所）「人類学者・医療者共同での症例検討会を通じた医療人類学教育——家庭医療学の視点から」

参加者全員・総合討論（医学教育モデル・コア・カリキュラム改訂に向けて）

成果

臨床医でもあり人類学者でもある2人の共同研究員による発表をはじめ、理学療法士・作業療法士の教育に関わる専門家、そして臨床医・医学教育研究者の発表をもとに、医療者教育において人類学が提供できる可能性のあることについての検討をおこなった。医療者の発表によれば、臨床現場では患者を社会的存在として見る見方、社会的・文化的文脈における行為や経験の意味の理解が必要とされる。また、近年は臨床家の間で「ナラティブに基づいた医療（NBM）」の重要性が指摘され、それに関する教育をすべきと言われていた。医療者は人類学者が思うほど実用や問題解決のみを求めている人ばかりではなく、対象や現象を理解するための視点やそれを表現する言葉を求めている人も多いということも指摘された。以上のことは必ずしも人類学の先端的な潮流とは合致しない面もあるが、医療者からの要望や期待に応え、医療専門職と人類学者が協働し、臨床と関連付けた形での医療者向け人類学教育をおこなっていくことの重要性が明らかになった。

「個—世界論——中東から広がる移動と遭遇のダイナミズム」

中東は、古来より多様な人々が民族、宗教、言語の違いを超えて離合集散と交渉を繰り返してきた巨大な交流圏の一つである。この圏域では人名、地名、出来事で満たされたりフラと呼ばれる旅行記が精力的に産出されてきたが、固有名への強い関心は日常生活・会話の中でも広く見受けられ、人々の生活を基礎づける重要な関心の持ち方であると想定される。このような関心の広がりや、中東を基点として広がる世界において、生身の個人という存在と移動という経験、未知なる人・場・情報との遭遇こそが、世界を形成・構想するうえでの根幹と見なされてきたことを示唆する。

本研究は、中東を一つの基点として活躍する具体的個人に焦点を定めて、彼らの人・場・情報との出会い・交渉・関係の形成はいかにして実現されているのか、超地域的な人・物・知の交流とミクロな生活の場の形成とがどのよ

うに関連しているのかを探求することを通じて、個人が織りなす世界の特徴を解明しようとするものである。

研究代表者 齋藤 剛

班員（館内）西尾哲夫

（館外）池田昭光 宇野昌樹 大坪玲子 奥野克己 小田淳一 荻谷康太 佐藤健太郎
椿原敦子 鳥山純子 堀内正樹 水野信男 嶺崎寛子

研究会

2016年6月4日

齋藤剛（神戸大学）「これまでの研究会の論点の整理」

奥野克己（京都文教大学）「ムスリム墓からみる個と社会」

2016年6月5日

鳥山純子（桜美林大学）「能動的な状況定義の考察に向けて——エジプトの学校教員にみる〈シャクセイヤ（shakhsiyya）〉とは何か」

2016年10月29日

小田淳一（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）「ラモン・リュイは『プリコルール』か？」

2016年10月30日

嶺崎寛子（愛知教育大学）「質問者と法学者の間——2000年代エジプトのファトワー相談電話を事例に」

2017年1月28日

池田昭光（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）「レバノンで民衆文化を考えること——相互行為的事例を用いた試み」

西尾哲夫（国立民族学博物館）、椿原敦子（龍谷大学）、鳥山純子（桜美林大学）「中東における〈民衆文化〉を巡って」

2017年1月29日

水野信男（兵庫教育大学）「アラブ音楽会議1932再考」

全員「本年度の共同研究の総括」

成果

本年度は、2016年6月、10月、2017年1月の都合3回、共同研究会を開催した。6月には齋藤が前年度の研究会を総括しつつ、そこで明らかになった検討課題を提示した。その後の研究会が取り扱った対象は多岐にわたるものであり、墓、調査者をも巻き込んだ日常的相互行為、キリスト教とイスラームの影響が交錯する中世西地中海を中心として活躍したキリスト教知識人ラモン・リュイの生涯と彼が編み出した世界解釈の理論の再検討、イスラーム法学者のファトワー相談電話、1932年に開催されたアラブ音楽会議の再検討などである。これらの事例を通じて浮かび上がって来た点の一つは、複数の文化、宗教、民族が交錯する中で、それらの文化、宗教、民族、さらには当該社会の規範と関わりながらも、同時に個人が規範、文化をいかにして組み替えているのかを明らかにしようとしている点である。

本共同研究では、こうした成果とあわせて、民衆、民衆文化の再検討を進め、2017年3月にはパリで開催された国際シンポジウム「La culture populaire au Moyen—Orient: Approches franco—japonaises croisées」を組織し、研究成果を発表した。

「確率的事象と不確実性の人類学——『リスク社会』化に抗する世界像の描出」

不確実な未来に人間がどう向き合うのかは、伝統社会を対象に、近代的・科学的な形式知では説明がつかない様々な生活実践を扱ってきた人類学において、重要な関心領域を形成してきた。一方で、社会学で台頭してきた「リスク社会」の議論は、学問分野の枠を超えて、人類学にも大きな影響力を与えている。近年の人類学では、「リスク社会」論をもとに、確率的事象を数量的に捉えて管理の対象とする「リスク」と、リスク計算による管理が困難な「不確実性」とを区別し、今日の社会・経済・政治的諸制度が後者の領域をも制御しようとする営為を、新たな考察対象としている。

しかし、上記の二分法的な不確実性の理解は、確率的事象の二面性を把握し切れていないと、本研究は考える。すなわち、集会的・統計的には計算可能で制御の対象とし得るが、一回限りの生起においては根源的な制御不可能性が露わになる。本研究はその両面に目を向けて、リスク管理の技術に依拠した諸制度の設計や人間の取扱いと、

個人の認識や実践との間に生じる深刻なずれを、考察の主題にする。その上で、人類学的「不確実性」研究の考察視角を拡張することにより、既存の「リスク社会」論の俎上に載らない「リスク社会」の姿を描き出す。

研究代表者 市野澤 潤平

班員 (館内) 飯田 卓

(館外) 東賢太郎 阿由葉大生 碓 陽子 井口 暁 磯野真穂 牛山美穂 近藤英俊

土井清美 松田素二 吉直佳奈子 渡邊日日

研究会

2016年7月2日 (東京大学駒場キャンパス)

牛山美穂 (日本学術振興会) 「医療人類学における不確実性にかんする研究サーベイ」

碓 陽子 (金沢大学) 「文化人類学における不確実性にかんする研究サーベイ」

2016年7月3日 (東京大学駒場キャンパス)

東賢太郎 (名古屋大学) 「呪術・災因論および周辺領域における不確実性にかんする研究サーベイ」

全 員「研究会の理論的方向性の検討」

2017年1月7日

磯野真穂 (国際医療福祉大学) 「心房細動の抗血栓療法における不確実性」

土井清美 (青山学院女子短期大学) 「ツーリズム研究における『不確実性』の問題の射程」

2017年1月8日

吉井千周 (都城工業高等専門学校) 「『負の遺産』の処理と不確実性——廃炉作業人材育成と山地民」

全 員「不確実性概念にかかわる理論的検討」

成果

2016年度は、2回の研究会を開催した。本年度の研究会は、「不確実性」という研究視角の拡がりを押さえることを主眼とし、人類学における複数の研究領域において不確実性がいかにして議論されてきたのかをサーベイした (牛山美穂、碓陽子、東賢太郎、土井清美)。加えて、まさに現在、社会の着目を集める現象を二つ取り上げて、「不確実性の現在」にかかわる事例報告を行った (磯野真穂、吉井千周)。広範囲な理論的サーベイ/検討と、事例を深く掘り下げての分析を平行して実施していくことにより、不確実性への新たなアプローチへの示唆が数多く得られている。不確実性研究の新たな可能性への期待がふくらむが、その一方で、あまりに多岐にわたる関心を含むテーマであるために、議論を厳密にするための領域確定が、容易ではない。本研究会としては、新たな論点を見いだすことを最重視して、なるべく限定をかけずに視野を広げ、そこから重要なポイントを絞り込んでいく作業を、2017年度以降も継続する。

「高等教育機関を対象にした博物館資料の活用に関する研究」

近年、日本の高等教育機関では、大学教員の教育能力の向上が推進されており、個々の大学で大学教育の改革 (Faculty Development、以下、FD) が行われている。特に、大学教員を対象としたワークショップでは、学生主体の学びの開発が重視されていることから、学習教材の一つとしてモノ資料が見直されつつある。しかしながら、大学教員による博物館の利用は、展示見学にとどまっており、モノ資料による思考のあり方を検討するまでには至っていない。

そこで、本共同研究では、大学教員が博物館という「場」に足を運ぶ機会を提供し、モノ資料に触れ、それを活用した教育実践を、博物館関係者を交えて議論し、高等教育機関と博物館の連携による、より創造的な教育の可能性について検討を試みる。このような取り組みを通して、モノ資料を用いたFDの発展的貢献を図るとともに、大学と博物館とのアクセス回路の構築および高等教育機関における博物館資料の積極的な活用を目的としている。

研究代表者 呉屋淳子

班員 (館内) 河合洋尚

吉岡 乾 末森 薫 永田貴聖

(館外) 稲澤 努 金田純平 黒田賢治 五月女賢司 坂本 昇 時任隼平 如法寺慶大

横山佐紀 吉田早悠里

研究会

2016年4月23日

呉屋淳子（山形大学）成果物に関する打ち合わせ
 呉屋淳子（山形大学）「ミュージアムが内包する高等教育の可能性」
 総合討論
 発表の計画概要（参加者全員）

2016年12月17日

河合洋尚（国立民族学博物館）「民族教育の〈場〉としての博物館——中国、オーストラリアにおける華人系資料の活用」
 稲澤努（尚絅学院大学）「大学教育における博物館資源の活用——みんぱくを事例として」

2016年12月18日

石倉敏明（秋田公立美術大学）「メソコスムとしてのミュージアム体験」
 時任隼平（関西学院大学）「教科『情報』におけるみんぱくを使った情報収集能力育成に関する実践」
 如法寺慶大（南山大学）「博物館に『参加』する——博物館作業の経験から得る学びの一事例 アルバイトから得る学びについて考える」
 出席者全員「これまでの議論の整理と来年度の出版計画について」

成果

2016年度は、4回の会合を持った。今年度は、おもに、博物館・美術館における「教育的経験」に着目し、発表者の専門分野や教育実践に基づいた発表を通して、博物館・美術館の資源の活用とその可能性について検討した。まず、本研究の軸となる、呉屋の近年の高等教育機関におけるFD（Faculty Development）の状況とその可能性について確認し、博物館・美術館と高等教育機関が連携することによる新たな教育の場の生成について検討した。これらを踏襲して稲澤は、博物館資料の活用事例を初等・中等教育に比べ、より柔軟性のある高等教育の教育環境について検討した。

また、空間としての博物館・美術館と高等教育機関がどのように関わっていくのかについて事例をもとに検討を行った。時任は、中等教育における「情報」の科目における教育実践の事例を通して、インターネットからの情報と、モノ資料から読み取る情報を併せた情報収集の方法の検討を行い、モノ資料を用いた新たな授業改善の可能性について指摘した。如法寺は、自身の博物館教育における「経験」を通して、学芸員としての知識をどのように身につけ、それを実際の博物館業務の中でどのように活かされているかを、過去から現在までの経験と併せた実体験から指摘した。河合は、中国の民族教育の場としてのミュージアムの検討から、公共空間としてのミュージアムに求められる役割について問題提起を行なった、ゲストスピーカーとして参加した石倉からは、「メソコスムとしてのミュージアムの経験」の事例を通して、「世界を分類する場所」から「世界の価値を見出す場所」としての博物館・美術館の可能性について指摘した。今年度は、ディシプリンを超えて、活発な議論を行うことができた。

「捕鯨と環境倫理」

人類は5000年以上にわたり鯨類を食料や原材料として持続的に利用してきたが、1982年に国際捕鯨委員会（IWC）において大型鯨類13種の商業捕鯨の一時的な捕獲禁止が決定された。その後、現在に至るまで同捕鯨は再開できないままである。この捕鯨をめぐる動きは、動物福祉・動物愛護・環境保護団体による反捕鯨運動と連動し、反捕鯨を支持する人びとや政府が増加し、世界各地の捕鯨や捕鯨文化は存続の危機に直面している。

反捕鯨運動の背後には、世界各地におけるクジラと人間の関係やクジラ観、環境観の歴史的変化が存在している。この共同研究では、世界各地の捕鯨の現状および欧米に端を発する反捕鯨運動について把握したうえで、世界各地の反捕鯨運動とその背後にあるクジラ観や環境・動物倫理がどのように形成され、世界各地に広がり、世界各地の捕鯨文化にいかなる影響を及ぼしているかについて検討を加える。より具体的には、アラスカやカナダ、グリーンランド、カリブ海地域等の先住民等による捕鯨、日本の調査捕鯨と小型沿岸捕鯨、ノルウェーとアイスランドの商業捕鯨等の現状と、動物福祉・動物愛護・環境保護団体による国際的な反捕鯨運動およびその諸影響について比較するとともに、その背後にあるクジラ観や環境観、捕鯨政策を学際的に検討する。

研究代表者 岸上伸啓

班員（館内） 出口正之

（館外） 赤嶺 淳 李 善愛 生田博子 石井 敦 石川 創 伊勢田哲治 白田乃里子

河島基弘 倉澤七生 佐久間淳子 真田康弘 高橋美野梨 浜口 尚 本多俊和
吉村健司 若松文貴

研究会

2016年11月5日

岸上伸啓（国立民族学博物館）共同研究「捕鯨と環境倫理」の全体計画について
共同研究における各自の研究テーマについての検討（全員）

2017年1月22日

趣旨説明（岸上伸啓）

「グリーンランド捕鯨の歴史、現状と国際関係」

本多俊和（放送大学）「文化人類学の視点から」

高橋美野梨（北海道大学）「国際政治学の視点から」

浜口 尚（園田学園女子大学短期大学部）「カリブ海ベクウェイ島におけるザトウクジラ捕鯨——歴史、現状および課題」

岸上伸啓（国立民族学博物館）「北アメリカにおける先住民による捕鯨の歴史と現状——アラスカのホッキョククジラ鯨を中心に」

総合討論

成果

本年度は、共同研究の初年度にあたるため、第1回研究会では、問題の共有を行った後に、研究計画について検討し、今後の方針を決めた。

第2回研究会では、国際捕鯨委員会の管轄下にある先住民生存捕鯨（Aboriginal Subsistence Whaling）の事例としてグリーンランドの捕鯨、ベクウェイ島におけるザトウクジラ捕鯨、アラスカ先住民イヌピアットのホッキョククジラ鯨について報告し、検討を加えた。その結果、次のことが明らかになった。

- (1) デンマークが構成国のひとつである EU（欧州連合）は、鯨類保護を政策のひとつとしており、デンマーク領グリーンランドにおける捕鯨に反対している。これに対し、デンマーク政府は、グリーンランド人の意思の尊重と、干渉しないという政治的立場に基づいて、グリーンランドの捕鯨を認めている。
- (2) グリーンランドでは鯨肉や脂皮が公設市場などで販売されているため、商業的ではないかと、反捕鯨団体から批判されている。また、現代のグリーンランド人の中には鯨肉よりも牛肉や羊肉を好む傾向がある。さらに、グリーンランドの捕鯨には脱儀礼化が顕著に認められる。
- (3) ベクウェイ島ではザトウクジラ捕鯨が実施されているが、近年、環境 NGO が捕鯨をホエール・ワッチング業に転向させるための活動をしている。しかし、ザトウクジラは2月から5月にかけて同島の近くを通過するだけなので、ホエール・ワッチングを事業とすることは困難である可能性が高い。
- (4) アラスカのホッキョククジラ鯨は先住民の生活や世界観、アイデンティティと深く関連している。しかし、その実施には現金が必要であることや、温暖化の悪影響、環境団体や動物福祉団体の反捕鯨運動、捕鯨に反対する国家の増加等のために、ホッキョククジラ鯨は存続の危機に直面している。

以上から、世界各地で実施されている先住民生存捕鯨の将来は明るくないということが分かった。

「世界のビーズをめぐる人類学的研究」

本研究は、本館の所蔵する標本資料の一つであるビーズ（トンボ玉や勾玉を含む）を主な対象にして、人類の生活にとってのビーズの役割とは何かを明らかにすることを研究目的とする。まずビーズとは、何らかの素材を紐で通したものとして定義する。その素材は、木の実、植物の種、動物の歯や骨、貝殻、ダチョウの卵殻、石や金や琥珀のような鉱物、鉄、ガラス、粘土、プラスチックなど多様である。また、ビーズ細工には首飾りのような線状のものから、バッグのような面状のものまで形もさまざまである。さらに、それは単なる美しさを求める装身具としてのみならず、富の象徴や社会的威信、および集団のアイデンティティなどを示すなど社会的役割を持っている。本研究では、本館のビーズ資料そのものの分析に加えて、主として歴史考古資料や民族誌のなかでビーズの技術的・社会経済的意味について考察することから、人類にとって美を追求することには普遍性があるのかを論議する。

研究代表者 池谷和信

班員（館内）印東道子 齋藤玲子 野林厚志 末森 薫 戸田美佳子

(館外) 遠藤 仁 落合雪野 門脇誠二 川口幸也 河村好光 木下尚子 後藤 明
佐藤廉也 田村朋美 中村香子 谷澤亜里 山花京子 山本直人

研究会

2016年10月10日

池谷和信(国立民族学博物館) 研究会の趣旨「ビーズをめぐる人類学的研究——「ビーズ学」の可能性を求めて」
門脇誠二(名古屋大学) 「ホモ・サピエンスの出現・拡散とビーズに関する考古記録」
山本直人(名古屋大学) 「贈り物としての縄文時代の翡翠ビーズ」
河村好光(石川考古学研究会) 「日本諸島の石製ビーズ概観」
谷澤亜里(九州大学) 「弥生——古墳移行期の社会とビーズ」
田村朋美(奈良文化財研究所) 「製作技法と化学組成からみたガラスビーズの交易ルート」
末森 薫(国立民族学博物館) 「中国仏教壁画に描かれたビーズ」
木下尚子(熊本大学) 「琉球列島の貝玉文化」
後藤 明(南山大学) 「ソロモン諸島のビーズ製貝貨について——ニューアイルランドの貝貨幣とトロブリアン
ドのクラの財宝(ビーズ製首飾り)との比較」
印東道子(国立民族学博物館) 「オセアニアのガラスビーズの歴史性」
齋藤玲子(国立民族学博物館) 「アイヌのタマサイ——首飾りに使われるガラス玉を中心に」
野林厚志(国立民族学博物館) 「台湾原住民族のビーズの歴史と現在」
落合雪野(龍谷大学) 「東南アジア大陸部、ジュズダマ属植物の種子ビーズをめぐる文化」
中村真里絵(国立民族学博物館) 「焼物からネックレスへ——土製ビーズの誕生」
遠藤 仁(秋田大学) 「南アジアにおける準貴石製ビーズの過去と現在——紅玉髓を中心として」
戸田美佳子(国立民族学博物館) 「カメルーンの身体装飾とビーズ」
佐藤廉也(大阪大学) 「ビーズ着用の様相と変容」
中村香子(京都大学) 「『伝統衣装』の変容と維持——ケニア牧畜民のビーズ装飾を事例に」
出席者全員「全体討論」

2016年12月11日

◇第1部：研究紹介

山花京子(東海大学) 「ビーズの文化とチェーンの文化——古代エジプトと古代東地中海世界との対比」
川口幸也(立教大学) 「アフリカアートとビーズ」

◇第2部：交易とビーズ

池谷和信(国立民族学博物館) 「趣旨説明」
後藤 明(南山大学) 「交易の理論とオセアニアの貝ビーズ」
遠藤 仁(秋田大学) 「インダス文明期における準貴石製装身具の製作技術と流通」
田村朋美(奈良文化財研究所) 「ガラスビーズから見た東西交易——日本出土『西のガラス』の考古科学的研究」
中村香子(京都大学) 「東アフリカとチェコのガラスビーズ」
総合討論

成果

本研究会は、民族学・考古学・地理学など学際的な視点から世界のビーズの歴史の変遷と現状を把握することを目的とした。第1回目では、研究会のメンバーがほぼ全員みずから研究を報告することによって十万年にわたるビーズの歴史および地球のすみずみまでに広がった多様なビーズの現在について明らかにされた。そこではガラスビーズのみならず草の実や木の実、貝殻、卵の殻、動物の歯や骨、石などの多様な素材が使われており、世界的に見ると地域文化におけるビーズの特性が明らかになった。第2回目においては、「ビーズと交易」というテーマのもとでエジプト文明およびインダス文明、古代日本そしてオセアニアの貝殻や東アフリカの牧畜民のガラスビーズと交易の関係が明らかにされた。

以上のことからビーズを対象にした人類学的研究においては、多様な素材、素材と交易とのかかわり方、素材そのものの変化などを考慮することによってビーズの歴史的な変遷および地域間比較が可能になるとまとめられる。

「もうひとつのドメスティケーション——家畜化と栽培化に関する人類学的研究」

本研究の目的は、人類による家畜化や栽培化にかかわる新たな事例を比較検討することで、それらの現象を整理

し、概念枠組みを明確にすることである。ここでいう新たな事例とは、野生性の保持や野生種の利用、反馴化というように、家畜動物特有の性質（非攻撃的性格や馴れやすさなど）を獲得させない動物飼育の事例や栽培化症候群（脱粒性の喪失や無毒化など）を起こさない植物栽培の事例のことである。本研究では、こうした事例を「もうひとつのドメスティケーション」という言葉で表現する。

具体的には、本研究では(1)「もうひとつ」の動植物利用にかかわる民族誌的事実の報告をおこない、(2)複数の事例を比較検討することで、動植物に対する人間の働きかけを類型化する。これにより、対象とする生き物の利用形態の普遍性と特異性を導きだすことができるであろう。そのうえで、(3)従来のドメスティケーションの議論を踏まえながら、本研究の独自性と概念枠組みを明確にする。なお、本研究ではまず生業活動のなかで「手段」として利用される動植物を取りあげる。これは、鶉飼や鷹狩、狩猟、魚毒漁などで利用される動植物には上述の事例が多くみられるからである。その後、ほかの動植物利用の事例に研究対象を拡大する。

研究代表者 卯田宗平

班員（館内）池谷和信 野林厚志
（館外）梅崎昌裕 小谷真吾 小坂康之 齋藤暖生 篠原 徹 須田一弘 竹川大介
那須浩郎 広田 勲 藤村美穂 古澤拓郎 安岡宏和 山本宗立

研究会

2016年12月17日

卯田宗平（国立民族学博物館）「共同研究会の趣旨説明と問題意識の共有」

共同研究会メンバーの自己紹介と研究展望

須田一弘（北海学園大学）「野生のジャコウネコ利用について」

藤村美穂（佐賀大学）「宮崎県の山村における狩猟犬の飼育について」

竹川大介（北九州市立大学）「山師がもつ自然に対する考え方や態度について」

小谷真吾（千葉大学）「パプアニューギニアにおける狩猟犬と人とのかかわりについて」

梅崎昌裕（東京大学）「腸内細菌とドメスティケーションについて」

安岡宏和（京都大学）「pigミーの農耕化と野生ヤムの利用について」

小坂康之（京都大学）「外来植物のドメスティケーションについて」

野林厚志（国立民族学博物館）「人類社会における排泄物の利用について」

山本宗立（鹿児島大学）「鹿児島の花岡胡椒の栽培化と遺伝的な変化について」

山本紀夫（国立民族学博物館）「奇形に対する考え方と多様な品種保全とのかかわりについて」

齋藤暖生（東京大学）「ハビタットの改変について」

篠原徹（滋賀県立琵琶湖博物館）「カブの品種保全について」

質疑応答

相馬拓也（早稲田大学）「イヌワシ——モンゴル西部アルタイ山脈における鷹司とイヌワシとのかかわり」

質疑応答

2017年1月28日

卯田宗平（国立民族学博物館）「前回の共同研究会での指摘を踏まえて」

広田勲（岐阜大学）「自己紹介と展望」

那須浩郎（総合研究大学院大学）「植物考古学からの視点」

質疑応答

竹川大介（北九州市立大学）・南香菜子「人はどのように鷹を理解するのか——鷹狩の調教における『慣れ』と『狩り』のプロセス」

質疑応答

卯田宗平（国立民族学博物館）「ウミウ——『手段』としての動物と鶉匠とのかかわり」

質疑応答

成果

2016年度は計2回の研究会を開催した。第1回目の研究会では代表者である卯田が「もうひとつのドメスティケーション」に関わる問題意識と今後の研究方針を示した。具体的には、動物の家畜化や植物の栽培化の過程で獲得される Domestication syndrome（家畜化・栽培化症候群）について、植物の生理生態の変化や動物の行動上の変化

を整理し、研究会メンバーと共有した。その後、相馬拓也氏（早稲田大学）によるモンゴル西部アルタイ山脈における鷹狩研究の成果報告をおこなった。この結果、鷹匠たちは調教の過程でイヌワシに目隠し帽を被らせたり、睡眠制限をしたりすることでイヌワシを服従させる一方、食事制限をすることで狩りへの闘争本能を忘れさせないようにするという働きかけもおこなっている事実が明らかになった。この研究報告を踏まえて、第2回目の研究会ではさらに日本の鷹狩と鶺鴒の事例に焦点をあて、動物利用の共通性を検討した。この結果、鷹匠や鶺鴒匠たちの働きかけのなかにも調教の過程で「狩り」と「慣れ」という相反する二つの志向性が内在していることが明らかになった。こうした研究成果を踏まえ、研究会では今後も引き続き「手段」としての動物に着目し、そこにみられる共通した動物利用の論理をさらに検討していく必要があるという結論にいたった。

「会計学と人類学の融合」

地中海時代のイタリアに端を発する近代会計学は、口別計算から期間損益計算、現金主義から発生主義へという進化主義的発想を明確に持つディシプリンの一つであるといえる。また、企業会計を中心に発展してきたことから、企業のグローバル化に伴い、必然的に会計基準のグローバル化を求めるようになっていった。その結果、各国の企業会計の違いを超えたグローバル・スタンダードとしてのIFRS（国際財務報告基準）が策定されて、会計関係者の間ではIFRS適用問題が大きな関心事となっている。

他方で文化人類学者は進化主義思考やグローバリゼーションに対してクリティカルに見る方法を駆使してきた。市場主義的かつ自己規律的な Audit Cultures (Shore&Wright 1999, Strathern2000) についても批判を加えている。しかしながら、Audit Cultures の中核に位置するともいえる会計学者にその声が届いているとはとても思えない現状もある。

本研究会はこうした状況をかながみて、両者が議論しやすい課題として会計基準の中でもガラパゴス化した非営利会計基準（平成20年公益法人会計基準、平成23年学校法人会計基準、平成27年社会福祉法人会計基準など。これらは実は全く異なっている）に焦点を当てる。これらは、各法人制度の文化的側面を色濃く残し、また、いずれもごく最近になって改訂が加えられたという特徴を持つ。接点が難しい会計学と文化人類学の中で、会計と文化、普遍化と個別化の問題を両学問からアプローチするのに最も適したテーマであると考え、本申請はこれらを中心に会計学と人類学の学際研究を試みようとするものである。

研究代表者 出口正之

班員（館内）宇田川妙子

（館外）石津寿恵 大貫 一 尾上選哉 金セツピョル 西村祐子 早川真悠 深田淳太郎
藤井秀樹 古市雄一朗

研究会

2016年10月29日

出口正之（国立民族学博物館）「文化人類学と会計学はどこで繋がるのか」

共同研究員全員 討論

博物館内見学

尾上選哉（大原大学院大学）「公益法人会計基準の変遷：アカウントビリティ・コンセプトの観点から」

質疑（共同研究員全員）

共同研究員全員「研究会の進め方とアウトプットのイメージ」（進行：出口）

2016年11月26日

出口正之（国立民族学博物館）「『会計』及び『会計基準』等の定義について」

藤井秀樹（京都大学）「会計システムの比較制度分析」

討論

早川真悠（摂南大学）「ジンバブエのハイパーインフレーション」

討論

2017年1月21日

出口正之（国立民族学博物館）「本日の研究会の趣旨」

岸上伸啓（国立民族学博物館）「文化人類学における贈与論」

討論

石津寿恵（明治大学）「病院の財務情報開示——日米の制度比較を踏まえて」

討 論

次年度の研究会の進め方

成果

研究会の「会計」の作業定義を定めることができ、会計学者と文化人類学者の「トランスフォーマティブ・リサーチ」としての共同研究の基礎固めを行った。

【本研究会における「会計」の作業定義 2017.1版】

「会計」は、ある主体の「贈与としての事業」及び「非贈与取引としての事業」の成果を表す「言語」である。ここで、「言語」とは、数量的及び記述的表現を含むものである。

ここで、括弧付きの「贈与」を強調したのは、企業会計は商取引だけを見るので、現実的に、寄付やボランティアは考慮されない。それに対して、非営利組織では、カネやモノの寄付、ボランティアなどは、当たり前のように存在する。こうした点で人類学者との接点を切り開こうとするためである。また、同じく括弧付きの「言語」をいれたのは、「会計は事業の言語」(伊藤邦雄2014)という会計学者もいるので、ここでの「言語」は、他者を前提にした伝達という相互行為の手段としての意味を含むものとして使用している。

さらに「数量的及び記述的表現を含む」とは、会計は、貨幣経済を前提としない、より普遍的な社会にも存在するものと仮定して理解する。例えば、「腕輪と首飾りの交換をした」という表現上の記述は「会計」の定義に含まれるものとした。また、英国の「チャリティ」(「公益の組織として認められた団体」を示す法律用語)の報告書で、「会計実務勧告書」と会計学者に訳されているSORP (Statement of Recommended Practice) (注:「チャリティ」が活動の内容を社会や政府に報告するときの推奨される書類)には、チャリティの活動がどのように公益を増進させたかを記述することなどが求められている。そこで、このような記述的報告内容も含んで「会計」と定義している。(伊藤邦雄 『新・現代会計入門』東京:日本経済新聞出版社。2014)

また、非営利法人会計と企業会計の相違を考えたときに、非営利法人会計には、寄付やボランティアといった「贈与」が入り込んでいることから、まず切り口として、「贈与論」との関係を整理した。

『「障害」概念の再検討——触文化論に基づく『合理的配慮』の提案に向けて』

2016年4月、障害者差別解消法が施行された。現在、さまざまな分野で障害者に対する「合理的配慮」のあり方について議論が始まっている。米国のADA(アメリカ障害者法)は1990年に制定され、その理念が社会に定着するまで20年以上かかった。日本でも今後、差別解消法に基づく諸システムを構築していくために、「障害」に関する幅広い研究が求められているといえよう。

一方、2020年のオリンピック・パラリンピックの東京開催に向けて、ユニバーサル・ツーリズム(誰もが楽しめる観光・まちづくり)の必要性が各方面で強調されている。旅行業界では、障害者対象のツアーを企画・実施するケースも増えた。パラリンピック効果による障害者への関心の高まりを一過性のブームで終わらせないためにも、娯楽・余暇における「合理的配慮」の形態を文化人類学的に研究する試みが不可欠だろう。

本共同研究の目的は、2012~14年度に実施した「触文化に関する人類学的研究」を継承し、「ユニバーサル・ミュージアム」「手学問」などの理論を駆使して、「障害」概念を再検討することである。公共施設(とくに博物館)での「合理的配慮」の具体像を探究し、広く社会に発信したい。

研究代表者 廣瀬浩二郎

班員(館外) 石塚裕子 大石 徹 大高 幸 岡本裕子 黒澤 浩 小山修三 篠原 聡
鈴木康二 原 礼子 藤村 俊 堀江典子 真下弥生 宮本ルリ子 山本清龍

研究会

2016年11月27日

廣瀬浩二郎(国立民族学博物館)「新規共同研究プロジェクトの意義と目標」

小山修三(国立民族学博物館)「ユニバーサル・ミュージアム研究の回顧と展望」

ハイディ・ラーム(早稲田大学東アジア太平洋研究科)「『歴史』を体感する作法と手法——日光江戸村・太秦映画村のフィールドワークから考える」

さかいひろこ(イラストレーター)「わかりやすい触知図とは何か——手探りと手作りの現場から」

石塚裕子(大阪大学未来戦略機構)「ユニバーサル・ツーリズムの実践的研究——いわきの過去・現在・未来を感じるツアーの立案」

2017年3月5日（国際基督教大学博物館）

増子 正（青森県立盲学校）「視覚障害教育と博物館利用」

山田菜月（北海道教育大学岩見沢校）「ユニバーサル・ミュージアム研究の展望——私の卒業論文から」

岡本裕子（岡山県立美術館）「美術館事業の幅を広げる『合理的配慮』——“美術館ワークショップ”について考えてみる」

篠原 聡（東海大学）「美術鑑賞の新たな可能性——触常者と創る美学研究の未来」

原 礼子（国際基督教大学博物館）「触察展示の意義——博物館における『合理的配慮』の検討に向けて」

成果

障害者差別解消法の施行をきっかけとして、各地の大学、図書館では「合理的配慮」に基づく環境整備が始まった。一方、博物館における「合理的配慮」に関しては、取り組みが遅れている。そういった現状を踏まえ、11月の研究会では、本共同研究が果たすべき役割、目標を確認した。初回研究会では、幅広い視点で「合理的配慮」をとらえるために、観光・まちづくりと博物館の比較を試みた。

2016年8月に、前回の共同研究「触文化に関する人類学的研究」（2012～14年度）の成果として、廣瀬編『ひとが優しい博物館』が刊行された。博物館での「合理的配慮」を考える場合、本書が議論の出発点となるのは間違いのない。3月の研究会では、拙編著の刊行後のユニバーサル・ミュージアムの最新動向について実践報告があった。今年度、廣瀬は兵庫県立美術館の企画展（7月～11月）、奈良県国民文化祭イベントの体感展示（2月）にアドバイザーとして参加・協力した。今後も共同研究の成果を活用しつつ、展示やワークショップ企画に取り組んでいきたい。

「物質文化から見るアフロ・ユーラシア沙漠社会の移動戦略に関する比較研究」

本研究では、アフロ・ユーラシア乾燥地全域を対象としつつ、とりわけサハラ沙漠、ナイル河岸、紅海沿岸、アラビア半島、イランに位置する5つの異なるオアシスにおける生活の持続と変容について、物質文化に焦点をあてて検証することにより、沙漠社会の移動戦略の比較研究を推進する。注目する物質文化は、(1)ラクダと船に関わるモノ（陸域と海域の連続性）、(2)飲料と食料に関わるモノ（食品保存と運搬性）、(3)衣装と住居に関わるモノ（熱帯と温帯・寒帯の対称性）である。これらの物質文化の検討をもとに、人類の進化と適応、社会組織の可変性と開放性、物質加工の技術と担い手の交流という3つの観点から沙漠社会の移動戦略を解明する。並行して、片倉もとこ（文化人類学者／地理学者）によるアラビア半島に関する現地調査資料（1968-2008）、小堀巖（地理学者）によるアルジェリア・サハラ沙漠に関する現地調査資料（1968-2010）といったおよそ半世紀前に記録・収集された学術資料を活用して、生活空間・物質文化・移動戦略の関係性とその変化についても検証していく。

研究代表者 縄田浩志

班員（館内）西尾哲夫

（館外）石山 俊 遠藤 仁 片倉邦雄 河田尚子 郡司みさお 児玉香菜子 坂田 隆
真道洋子 中村 亮 西本真一 原 隆一 藤本悠子 古澤 文 渡邊三津子

研究会

2016年10月7日

縄田浩志（秋田大学）「みんなく資料概要説明」
展示準備室にて片倉もとこ収集資料200点の実見

2016年10月8日

縄田浩志（秋田大学）「研究会の目的」
中村 亮（国立民族学博物館）「ダウ船からわかること」
研究会メンバー自己紹介とこれからの研究会について議論

2016年11月25日

縄田浩志（秋田大学）開催趣旨説明
ムハンマド・アフマド・ムハンマド・スリマーン（エジプト考古省近代遺跡局長）「イスラーム時代アレクサンドリアの水システム（621-1952）」
縄田浩志（秋田大学）「紅海産黒サンゴのお数珠としての利用」
深見奈緒子（日本学術振興会カイロ研究連絡センター長）コメント

総合討論

2016年11月26日

片倉邦雄、藤本悠子、古澤文（片倉もところ記念沙漠文化財団）「文化人類学者・片倉もところが遺したモノ」

河田尚子（片倉もところ記念沙漠文化財団）「文化人類学者・片倉もところが著した世界」

郡司みさお（早稲田大学国際情報通信研究センター）「サウジアラビアの女性の生活と物質文化」

総合討論

成果

本共同研究初年度の2016年度には、物質文化の中でも沙漠に接する海域に関わるモノとして船と黒サングソして水の利用に焦点をあてた。また、国立民族学博物館の標本資料目録にある所蔵品を本館バックヤードで研究メンバー全員で実見しながら、片倉もところによるアラビア半島の現地調査資料の活用について議論した。

例えば「H0100191/ 漁船/アラブ首長国連邦/1982年」に注目した。片倉もところ記念沙漠文化財団に残されている漁船収集当時のアラブ首長国連邦のシャルジャの造船場での現場写真、購入経緯がわかる通関書類、その社会的背景に関する資料と照合した。残念ながら2013年3月には漁船本体は廃棄処理がなされていたことがわかったが、廃棄前に撮影された写真、解体した際の観察等の資料調査記録を参照することができたため、船体の形状や特徴から20世紀後半アラビア湾にて使用されていた木造漁船としての学術的価値を確認できた。アラビア湾で20世紀後半に使用されていた木造漁船の構造を「インド洋海域世界」で比較研究することで、物質文化の視点から海上ネットワークをつうじた沙漠社会の交流史と移動戦略を再検証していく視点を獲得できた。

「音楽する身体間の相互作用を捉える——ミュージッキングの学際的研究」

音楽の人類学的研究は半世紀ほどの歴史をもつが、従来の研究の多くは、音楽の意味を音（テキスト）に求める「音楽学」寄りの研究と、音の文化的背景（コンテクスト）に音楽の存在意義を求める「人類学」寄りの研究とに分かれる傾向にあった。また、両者の学術的対話の困難さもこれまで指摘されてきた。

他方で近年では、人類学と音楽学とを架橋する研究者らが、人間の音楽的な営みを“音楽すること musicking”として理解することを提唱している。music の動名詞型にあたる「ミュージッキング」には、歌い・奏し・踊ることだけでなく、手拍子や聴取といった行為までも含まれる。これは、音楽の実践における身体性に着目することで、“音楽”という近代的かつ抽象的な概念を根本から再考するために提案された鍵概念である。

本研究は、記述・分析の対象を「音楽」から「ミュージッキング」へとずらし、パフォーマンスのさなかにある身体同士のやりとりを音楽的出来事に不可欠な一部分として語るための方法論を確立することを目的とする。

研究代表者 野澤豊一

班員（館内）川瀬 慈

（館外）青木 深 井手口彰典 岡崎 彰 梶丸 岳 大門 碧 武田俊輔 谷口文和
西島千尋 伏木香織 増野亜子 松平勇二 矢野原佑史 輪島裕介

研究会

2016年10月15日

野澤豊一（富山大学）「趣旨説明 音楽する身体間の相互作用を捉える」

全 員 メンバー自己紹介および今後の計画についての打ち合わせ

2016年10月16日

武田俊輔（滋賀県立大学）「『民謡』生成の『場』を読む思考——柳田國男の民謡論」

梶丸 岳（京都市立芸術大学）「掛唄大会という場——民謡のエスノメソドロジー」

全 員 総合討論

2016年12月17日

野澤豊一（富山大学）「サウンドによる seamlessness と感情の共有——米国黒人ペンテコステ派キリスト教会のミュージッキング」

川瀬 慈（国立民族学博物館）「『精霊の馬』上映——ザール憑依儀礼の映像記録・表現をめぐる」

全 員 総合討論

成果

初年度（2016年度）は2回（のべ3日間）の共同研究会を実施した。初回では研究代表者の野澤が趣旨説明を行い、本研究会のねらいや問題意識、今後の方針について述べた。つづいて、出席したメンバー全員の調査地域や研究テーマを紹介し合い、各々が本研究会にどのように貢献するかを話し合った。その後の研究会の発表内容は次の通りである。理論面では、野澤が musicking や participatory music という概念と本研究とのかかわりを報告し、武田は柳田國男が民謡の歌われる場をダイナミックな相互行為が起こる場として把握する必要性を説いていたことを報告した。事例研究では、梶丸が秋田県横手市の金澤八幡宮で行われている掛唄大会や直会の場における歌唱による相互行為について、野澤が米国の黒人キリスト教会における音とダンスのかかわりについて、川瀬がエチオピアにおけるザール憑依儀礼の動態を映像作品の上映によって、それぞれ報告した。なお、当初予定していた「ミュージッキングの場を当事者として経験すること」をテーマにした発表および討論は、主要な発表者が長期の海外滞在中であったため、次年度に開催することにした。

「現代日本における『看取り文化』の再構築に関する人類学的研究」

本研究は、現代日本の超高齢社会における地域包括ケアシステムとそこに通底する死生観や人格観、家族観を明らかにしながら、「医療の生活化」という概念を手掛かりに、地域社会での「看取り文化」を新たに構想することを目指す。

日本は世界に類を見ないスピードで高齢多死社会に突入しつつある。病院死がおよそ80%占める一方、「終活」の展開や葬儀の多様化が進み、「その人らしい死」「死の自己決定」という死の文化的、社会的変容が起こっている。また「独居老人」や「孤独死」という言葉に見られるように家族観の変容と地域社会の変貌が指摘されている。近年、厚生労働省は高齢多死社会を見据えて病院医療から在宅医療への転換を打ち出し、終末期医療の再検討を始めた。これにより日本各地で在宅（施設を含む）での「看取り」のあり方が模索され始めている。今日、在宅の「看取り」には医療福祉制度の充実や多職種連携は不可欠であるが、そこには実践的課題と学術的課題がある。前者は、既存の地域包括ケアシステムが抱える問題、公的介護と家族介護とのバランスという課題である。後者は、死の医療化論、死生観と家族観の変容、死の個人化を促す地域社会の再検討という理論的課題である。本研究では、国外の「看取り」実践を参照点とし、上記の二つの課題を横断的に捉えつつ、現代日本における「看取り文化」の再構築への道筋を提示する。

研究代表者 浮ヶ谷幸代

班員（館内）鈴木七美

（館外）相澤 出 渥美一弥 鈴木勝己 田代志門 田中大介 松繁卓哉 山田慎也

研究会

第1回共同研究会

2016年10月22日

共同研究員の自己紹介と共同研究における役割分担

浮ヶ谷幸代（相模女子大学）「現代日本における『看取り文化』の再構築に関する人類学的研究」についての趣旨説明と問題提起

田代志門（国立研究開発法人国立がん研究センター）「『死の社会学』の系譜」

2016年10月23日

松繁卓哉（国立保健医療科学院）「地域包括ケアシステムの中で構想されている『看取り』」

第2回共同研究会

2016年12月10日

田中大介（桜の聖母短期大学）「『死の人類学』の系譜」

総合ディスカッション「『看取り文化』の再構築のための学術研究の方向性——第1回の田代報告と松繁報告を踏まえて」

2016年12月11日

相澤 出（医療法人社団爽秋会岡部医院研究所）「看取りをめぐる体験との向き合い方——在宅緩和ケアのケア提供者側に焦点をあてて」

成果

本共同研究では、古い、就活、ターミナルケア、死、葬儀、墓に至るまでのプロセスを視野に入れ、広義の「看取り文化」の再構築を目指すことを確認した。理論的枠組みとして「医療の生活化」論と「ケア論、コミュニティ論、地域論」を整理した。次に、二つの課題のうち、学術的課題として「死の社会学」の系譜から、認識論的研究（死のタブー化、死の自己決定権批判）と実証的研究（ホスピス等の遺族研究、悲嘆研究）の流れを近代化の中に位置づけ、これまで欠落していた「死に逝く人の経験」の研究を課題として示した。また、「死の人類学」研究では、葬制・儀礼研究からデス・スタディの周辺と医療人類学や民俗学の領域へとシフトしていることを示した。他方、実践的課題として「終末期医療」「医療ニーズ」「医療的介入」「規範」「地域で看取る」という観点から、日本の地域包括ケアシステムがはらむ問題を提起した。次年度以降の事例研究の導入として、宮城県の緩和ケアホスピスにおけるケア提供者と遺族のお迎え体験に関する意識調査の結果を報告した。

「消費からみた狩猟研究の新展開——野生獣肉の流通と食文化をめぐる応用人類学的研究」

本研究は、現代の日本を含む世界各地における狩猟を、消費の視点からとらえることを目的とする。狩猟は、文化人類学や日本民俗学では、これまで伝統的な生業として捉えられることが多かった。しかし、ブッシュミート交易など農山村地域から都市圏への獣肉供給の需要増大に伴う商業狩猟に加えて、その延長上に国際的な市場流通を視野に入れた産業狩猟も見られるようになってきている。そこで、(1) 近年、とくに国内で獣害対策の観点から見直されている狩猟と野生獣肉（ジビエ）の活用をめぐる現場の取り組みを民族誌的な一次データをもとに検討するとともに、(2) 世界各地における野生獣肉の流通・消費の事例と比較することで、日本における野生獣肉消費をめぐる動向をグローバルな状況のなかに位置づける。とくに、消費者による野生獣肉の消費のありかたの変化が、解体や分配の方法、狩猟法（狩猟道具や動物の殺し方）、精肉方法とその背景にある衛生概念、流通にかかわる組織の編成、食物や環境に関する人々の意識を変容させている可能性に着目し、海外の関連事例との比較を試みることで、国内における取り組みの独自性と潜在的な問題点について考察を深める。

研究代表者 大石高典

班員（館内）野林厚志 戸田美佳子

（館外）小林 舞 近藤祉秋 高橋美野梨 濱田信吾 比嘉理麻 兵田大和 安井大輔

安田章人 山口未花子

研究会

2016年10月15日

大石高典（東京外国語大学）「共同研究の趣旨説明——目的・方法・ねらい」

全 員「自己紹介と共同研究への期待・提案など」

全 員「今後の計画についての討議」

2016年10月16日

安田章人（九州大学）「猟師としての実践研究からみた日本における狩猟と獣肉消費」

比嘉理麻（沖縄国際大学）「ブタとの関わりと断絶——沖縄における豚肉の大量消費と養豚場排斥運動」

総合討議：消費からみた狩猟研究の理論と方法

2017年1月28日

「総合地球環境学研究所持続可能な食の消費と生産を実現するライフワールドの構築（FEAST）プロジェクト」
共催

大石高典（東京外国語大学）「趣旨説明と獣肉に関する研究の動向」

田村典江、小林舞（総合地球環境学研究所）「ローカルフードシステムの視点から考える狩猟肉利用」

高柳敦（京都大学）「野生動物の価値と野生動物利用——野生動物文化の形成へ」

William Kamgaing TOWA（京都大学）「Evaluation of Mammal abundance and Bushmeat Hunting patterns to Enhance Sustainability in Central Africa: A comparative analysis from two Communities in Southeast Cameroon」

討 論：野生動物管理と持続可能な獣肉利用

2017年1月29日

「総合地球環境学研究所持続可能な食の消費と生産を実現するライフワールドの構築（FEAST）プロジェクト」
共催

大石高典（東京外国語大学）「1日目の論点整理と2日目への導入」

兵田大和（同志社大学）「京都近郊における獣害管理と都市住民による狩猟の可能性と問題点」

総合討論：現代日本における獣肉利用の新しい担い手との協働と課題

成果

初年度は、2回の研究会を実施した。初回は、まず共同研究全体の枠組みについて代表者が説明を行った後、メンバー全員の顔合わせと獣肉の流通・消費に関わる問題意識について洗い出す作業を行った。そのうえで安田氏から自身の狩猟経験や九州大学における「狩り部」の活動について、また比嘉氏から沖縄の豚肉の生産・流通・消費について報告をいただき、獣肉研究を進めていく上での手がかりを探った。第二回目の研究会では、メンバーの専門分野でカバーしきれていない野生動物保護管理の分野に焦点を当て、京都大学の高柳氏、カムゲン氏、地球研の田村氏の3人の特別講師を招いて獣肉の持続的な消費をめぐる学際研究の課題と可能性について検討を行った。兵田氏からは、獣害が深刻化する中での狩猟の新たな担い手としての都市住民による狩猟の可能性と課題について報告があった。今年度は、本共同研究を特徴づける二つの点である①応用人類学的／アクションリサーチ的視点と②超学際的アプローチに関連して研究会を進めることができた。今後に向けて、メンバー間で一定の共通認識が得られたと考える。

「テクノロジー利用を伴う身体技法に関する学際的研究」

ICT (Information and Communication Technology) の活用が我々の生活のさまざまな側面に浸透し、直接対面的なコミュニケーションが減少している現代社会において、今改めて身体的相互行為の価値が問われている。本共同研究では、身体技法の伝承・表象・実践にテクノロジー（ここではコンピューター技術の活用を意識したICTを指す）やデジタル技術の導入が、人の記憶やイメージにどのような作用を及ぼし、それにより身体技法がいかに変化し再構築されているか、地域ごとの事例に基づいて比較検討を行う。

身体化することが求められる芸芸や知識等は、従来、口伝や観察に基づき自得されてきたが、近年ではデジタル技術の発展に伴い芸芸をデータ化する傾向が顕著である。それによりメディアやネットなどを通じてより拡大された社会関係のなかで身体技法の共有が可能になっている。しかし、身体技法の伝承の過程で導入されているデジタル技術の役割についてはこれまで十分な検討が為されてこなかった。事実、人間の動作、発声、表情、体温などを可視化・言語化・定量化できるが、間や旋律、リズムなどの身体知は、科学的に測りきれない。そこで身体技法の伝承におけるテクノロジー利用の役割に着目した本研究は、身体論や相互行為をめぐる議論、さらにはコミュニケーション論に関する理論的貢献を目指す。

研究代表者 平田晶子

班員（館内）廣瀬浩二郎

（館外）伊藤 悟 岩瀬裕子 宇津木安来 久保明教 CAITLIN COKER 紺屋あかり
柴田香奈子 谷岡優子 柳沢英輔

研究会

2016年11月26日

平田晶子 共同研究の趣旨説明

参加者の自己紹介および共同研究内での役割や問題意識を発表

2016年11月27日

特別講師（1）八村広三郎（立命館大学）「無形文化財のデジタルアーカイブ」

質疑応答

特別講師（2）阪田真己子（同志社大学）「オモシロイを科学する——いかにして現象をハカルか」

質疑応答

全体討議

次回に向けて他

2017年2月12日

問題意識の共有

廣瀬浩二郎（国立民族学博物館）自己紹介の続き

特別講師（1）吉川侑輝（慶応義塾大学大学院）「テクノロジー利用を伴う身体技法の分析可能性——音楽の

CSCW/HCI 研究を補助線として」

特別講師 (2) 阪田真己子 (同志社大学) 「ハカれるものとハカれないもの——日本舞踊界の事例から」

質疑応答

総合討論、次回に向けて

成果

今年度は、共同研究メンバー間でデジタル技術や身体技法論における先行研究成果の検討や研究発表に対するディスカッションを通して問題設定などを共有し、今後の基盤を築くために2回の研究会を実施した。第1回の研究会では代表者である平田がデジタル技術を伴う身体技法に関する学際的研究の問題提起をし、二人の特別講師を招いて最先端のデジタルアーカイブ化の実態からデジタル技術が身体技法の記録、保存にどのように活用されているかを検討した。また定量化が難しいとされていた現象をハカルことの可能性や限界についても議論した (八村、阪田)。第2回の研究会では、①従来、触れない物を触れる物に変換する人間の創意工夫の積み重ねから生まれた「触覚」のみで鑑賞する世界とそこに経ちあがる代替可能性と一回性、②エスノメソドロジー研究と身体技法との関わりについて考察した (廣瀬、吉川、阪田)。

研究成果公開プログラムによる館のシンポジウム、研究フォーラム、国際研究集会への派遣

●館のシンポジウム

国際シンポジウム「中国における歴史の資源化——その現状と課題に関する人類学的分析」

2016年10月22日 国立民族学博物館

代表者：塚田誠之

現在の中国では歴史がさかんに資源化されている。政治目的に活用されたり、実利の獲得、アイデンティティの構築など多様な目的と形態で進行している。たとえば、政府が「民族英雄」を創出し活用することで民族の統合に役立て、中華民族の一体性の構築に活用し、また史跡を愛国主義教育の基地にしている。さらに、政府や企業が歴史的建造物や史跡を観光開発などの実利に結びつけ、知識人や一般民が自らの正当性とアイデンティティの維持のため歴史を再構築する場合が見られる。書かれた記録や口頭伝承も資源化の対象となり得る。本シンポジウムは、中国において歴史が誰によってどのように資源化されているのかについて、民族英雄、史跡・景観・文物、記録・記憶・伝承といった問題領域に分けて、政府・知識人・企業・民衆など諸主体の関与のありよう、諸民族の文化との関わりに留意しながら、人類学的立場からその現状を明らかにし、残された課題について展望を得る。なお、本シンポジウムは国立民族学博物館共同研究「資源化される歴史——中国南部諸民族の分析」(代表者：長谷川清)、科学研究費補助金(基盤A)「中国周縁部における歴史の資源化に関する人類学的研究」(代表者：塚田誠之)と合同で開催する。

中国は、広大な国土に多様な民族集団が居住し、長い歴史を持ち膨大な史料と文化資源を有するが、その歴史の資源化はこれまで研究が少なかった。本シンポジウムは新しい研究領域の開拓を目指すものである。また、政府、知識人、企業、民衆など立場によって資源化に対する関わり方が異なることが予測されるが、そうした実態を解明することによって政府や知識人などの歴史に関するスタンス、ひいては中国人の歴史観のあり方について展望を得て中国文化を理解する鍵となることが期待される。また、シンポジウム終了後は参加者によるプロシーディングスを取りまとめて国立民族学博物館調査報告(SER)で公表をする予定であり、その点でも学問的な意義が大きい。

実施状況

現在の中国では歴史がさかんに資源化されている。中華民族の一体性の構築をはじめとする政治目的に活用されたり、観光資源開発による実利の獲得、アイデンティティの構築に利用されたりと、多様な目的と形態で進行している。本シンポジウムでは、中国において歴史がいかに資源化されているのかについて、民族英雄、史跡・景観・文物、記録・記憶・伝承といった問題領域に分けて、政府・知識人・民衆等の諸主体の役割、諸民族の文化との関わりに留意しながら掘り下げた検討を行った。

館長挨拶(寺田吉孝館長補佐が代読)、責任者の塚田誠之による主旨説明の後、3つのセッションで6名が報告をし、6名がコメントを行い、報告者との間で質疑応答を行った。第4セッションは総合討論である。全体の議論の要点は次の通りである。第一に、歴史の資源化をめぐる諸主体の関与のあり方が明らかにされたが、状況は多様・複雑で、民族・国家・宗教・地域性等の諸方面の違いに関連している。この点について韓敏・松本ますみ・高山陽

子・廖国一・権香淑の諸氏が報告を行った。第二に、歴史のもつ属性は多様であるが、記録され政治的な意味合いを持つ歴史と、民衆の間で伝承される歴史とがある。この点について稲村務氏が報告を行った。歴史は異なる時点において異なる価値観を持つ人々によって選択され構築され続けてきた。それゆえ時代や人の価値観に左右されるのである。こうした歴史の属性に関連する指摘は韓敏・松本報告においてもなされた。さらに中国の南北での相違や中国の枠組みを越える事例も指摘がなされた。漢族のほか回族・ハニ族・朝鮮族の事例が取り上げられた。

以上の論点を踏まえて、総合討論において、塚田が全体の報告と議論の整理をした後に、大野旭・横山廣子・廖国一・曾士才・蔡志祥の諸氏がそれぞれの視点から総合的なコメントを行った。

本シンポジウムによって、中国における歴史とその資源化の現状について、研究の最前線から最新の事例に基づいて議論を行い、解明を試みるとともに、今後に残された課題を確認した。

成果

成果の概要を国立民族学博物館ホームページおよび『民博通信』155号「研究成果の公開」欄に公表する。

国際シンポジウム「現代アジアにおけるお盆・中元節・七月の祭り——あの世とこの世をめぐる儀礼」

2017年3月4日～3月5日 国立民族学博物館

代表者：横山廣子

東アジア地域に広く見られる7月の死者儀礼は、日本では現在も全国的に行われており、最も身近な毎年の行事の一つである。アジア地域に広がる同様の儀礼を見渡すと、起源やその内容に関して軌を一にし、類似する側面もあるが、各地で独自の展開もある。

この時期は「中元」といった暦の上での位置づけと同時に、台風や洪水、猛暑などによる災害や病気が発生しやすい、人びとが乗り越えねばならない危機を伴う時節ともいえる。この時期に各地で行われてきた活動には、祖先祭祀や無縁の死者の供養といった宗教儀礼以外に、盆踊りやさまざまな芸能活動としての展開など、多様な内容が見られる。

本シンポジウムは、この7月の儀礼をアジア地域の広範な視野において比較検討し、それぞれを位置づけ、その歴史、当該社会とかかわる展開の状況、現在までそれが継続されている意味などについて、新たな理解を得ることを目的とする。多数の若手研究者による報告を特に重視し、その育成にも貢献する企画である。

これまで、本テーマで、東アジアの広い領域において研究された成果を集めて議論をおこなったシンポジウムは開催されたことがなく、今回の報告ならびにその議論の成果を整理し、日本語および中国語によって刊行する。それぞれの論文を日本語と中国語の両方で刊行することにより、東アジアを研究する多数の研究者に対して、多くの貴重な学術成果を公開することになる。

実施状況

本国際シンポジウム「現代アジアにおけるお盆・中元節・七月の祭り——あの世とこの世をめぐる儀礼」は、本館と香港中文大学歴史系との主催により、香港、台湾、中国本土の海外から11名、日本国内から11名を招聘し、本館の4名の研究者とあわせて総勢26名の研究者が報告、コメント、座長を担当して、一般公開の形で開催した。研究報告の対象地域は、朝鮮半島、日本、中国本土、香港、台湾、東南アジアに及び、本シンポジウムの目的は、この東アジア地域の各地で7月におこなわれてきた死者儀礼を核として展開してきた儀礼や祝祭活動を、さまざまな異なる観点から研究した結果を一堂に会することで、各地の活動を位置づけ、その歴史、当該社会とかかわる展開の状況、現在までそれが継続されている意味などについて、新たな理解を得ることであった。多数の若手研究者による報告を特に重視し、その育成や、今後の学術交流の拡大にも貢献することを目指した。

元来、この地域に広く普及した太陽太陰暦において、中元節や盂蘭盆会という名称で7月15日に刻印された祭祀活動が各地に伝播し、それぞれの地域の元来の宗教的・文化的土壌や生態学的環境などを背景に、長い歴史の中でさまざまな発展を見せていることが明らかになった。異なる様態を見せる要因としては、政治経済学的力関係や、当該地域における集団間の関係やアイデンティティ、農事暦、文化政策、儀礼行為や芸能のもつ意味合いの幅の広さなどが挙げられ、学術的に洞察を深めることができた。また、広範な領域に広がる各地の事例を理解することを通して、たとえば、現状では7月の死者儀礼あるいは祖先祭祀がないといえる韓国社会について、従来とは異なる視点からの理解の可能性が確認できた。日本における盆行事は一部では廃れてきているとはいえ、現在も全国的に見られ、最も身近な毎年の行事の一つである。公開で実施した本シンポジウムには、50名の申し込み参加者が集まり、学術的な内容の豊富さと密度の濃さに対して、研究者以外の方々からも関心と一定の評価を得ることができた。

成果

日本語と中国語の2種類の成果を刊行する予定である。シンポジウムの議論を経て、シンポジウム用に提出された各報告者の草稿に加筆修正をおこない、それぞれ元の言語に加えて、日本語あるいは中国語で翻訳を作成する。蔡志祥と横山廣子が最終的に翻訳文を監修し、刊行する。日本語版は国立民族学博物館論集の1冊としての刊行を、中国語版は香港の中華書店（予定）より出版することを考えている。

またシンポジウム実施報告として、今回の全ての報告の要旨を日本語と中国語で作成したもの、会議の状況写真や若干の会議情報をホームページに掲載する。また、*Minpaku Anthropology News Letter* に英語でシンポジウムの総括を掲載する。

●館のシンポジウム

第6回国際食アジア会議「食文化の交流——過去・現在・未来」

2016年12月3日～12月5日 国立民族学博物館

代表者：河合洋尚

2016年12月3日から5日にかけて、国立民族学博物館の学術交流協定先である立命館大学と、第6回国際食アジア会議「食文化の交流——過去・現在・未来」を開催する。本国際集会は、立命館大学草津キャンパスで主に開催されるが、国立民族学博物館も共催機関として運営に参与する。具体的には、国立民族学博物館は、3つの分科会を組織し、海外からの招へい、連絡、要旨や原稿の整理などの任務を引き受ける。3つの分科会は、①歴史、②身体性、③制度・表象をテーマとしており、それぞれ池谷、野林、河合が担当する。それぞれの分科会では1人ずつ欧米から主要な講演者を招へいするとともに、その他の渡航者とも連絡をとり、研究成果を整理する。それにより、それぞれのテーマにおける食文化研究の現状を再検討し、新たなアプローチを導き出すための議論をおこなう。分科会では、総合研究大学院大学の特別共同利用研究員や博士課程院生を含める若手研究者をメンバーとすることで、若手研究者の育成にも力を注ぐ。

本国際集会は、アジア食文化論壇として中国を中心に開催されてきたものであり、第6回目である今回は初の日本開催となる。今大会は、従来の方式を尊重しながらも日本や欧米の食文化研究者にも広く公募をし、東アジアにおける食文化研究の議論の場をつくる方針を掲げている。そのなかで国立民族学博物館は、分科会を3つ形成し、それぞれのテーマをめぐって国内外の研究者と学術交流をおこなうことで、特に人類学・民族分野における食文化研究の発展に寄与することが期待できる。他方で、各分科会は、会議終了後に成果をまとめ、個別に書籍や雑誌などの形式で文字として発表する予定である。特に国立民族学博物館刊行の紙媒体で分科会の成果を発表することで、国立民族学博物館における食文化研究を継承・発展することを目指している。

実施状況

2016年12月3日から5日にかけて、立命館大学との共催で国際シンポジウム「食文化の交流——過去・現在・未来」を開催した。3日から4日にかけてのシンポジウムでは、日本、中国、台湾、韓国、マレーシア、アメリカ、フランスなどの国から100名を超す研究者が集まり、研究発表をした。国立民族学博物館は、当経費により共催の準備をただけでなく、池谷、野林、河合がそれぞれ分科会を組織し、司会・趣旨説明・研究発表などをおこなった。また、5日は海外から招へいした研究者の大半を国立民族学博物館に招へいし、池谷、野林、河合がそれぞれグループを組んで展示の案内をし、さらに展示や今後の研究などについての意見交換をおこなった。なお、シンポジウム要旨集の編集作業も当経費により実施した。

成果

池谷、野林、河合が主催した3つの分科会に関する研究成果は、それぞれを論文集としてまとめ、*Senri Ethnological Studies* もしくは『国立民族学博物館調査報告』に投稿する予定である。

国際シンポジウムの開催状況や成果については、*Minpaku Anthropology Newsletter* にて英語で書き、国際発信する予定である。なお、河合の学会発表内容については、中国の学術雑誌『南寧職業技術学院学报』にて独占インタビューの形で整理され、まもなく写真付カラーで刊行される予定である。

●国際研究集会への派遣

第23回アフリカ考古学会での発表

2016年6月26日～7月2日 フランス・トゥールーズ大学

竹沢尚一郎

アフリカ考古学会は2年に一度開催される、同種の学会としては最も権威のある組織である。今回の第23回大会は、フランスのトゥールーズ大学で6月27日から7月1日にかけておこなわれる。その学会大会の分科会、「African Kingdoms」のチェアであるブリュッセル自由大学のピエール・デ・マレ教授から発表を依頼されたため、発表を実施し、他の分科会でもコメントをする予定である。学会は一週間と長い、連日発表がくまれており、申請者の成果を他の研究者に知らせ、他の研究者の最新の成果を理解するには一週間の滞在が必要である。

申請者は1999年より西アフリカマリ共和国で考古学発掘調査を実施しており、世界的に見てきわめてユニークな成果を上げている。この間の成果をまとめた仏文報告書を、マリの研究機関である人文科学研究所の機関誌『Etudes maliennes』の増刊号として出版する予定であり、初校校正まで終えている。ところが、出版社の資金難などにより印刷が停滞したので、科学研究費助成事業により2016年5月に出版の予定である。これまでに私たちが外国の研究誌『Cahiers d'études africaines』等で出版した論文等は高く評価されてきたので、本報告書もそれと同等以上の評価を受けることが予想される。その評価を学会大会で確認することと、トゥールーズ大学出版会を初めとする出版社と出版の可能性を探ることが目的である。

実施状況

フランス・トゥールーズ大学で開催された第31回アフリカ考古学研究会に出席し、分科会「African Kingdoms」で研究発表を行った。発表題目は「The first Kingdom of Gao and its relations with the Aian Civilizations」であった。また学会開催時に、Pierre De Maretブリュッセル大学前学長、Jean Poletパリ第一大学名誉教授、Susan McIntoshライス大学教授、Kevin MacDonaldユニヴァーシティ・カレッジ・オブ・ロンドン教授、Thomas Vernetパリ第1大学准教授に、本年6月に刊行された*Sur les traces des Grands Empires*を贈呈し、書評や引用をしてもらえるよう依頼した。Thomas Vernet氏は、パリ第1大学で出しているアフリカ史研究のウェブ雑誌 *afriques.revues.org* に書評を書いてくれることを承諾してくれた。また、第三世界関係のL'Harmattan出版社や考古学専門のArcheopress出版社に印刷物を渡し、出版を検討してもらっている（4～8週間以内に返答するとのこと）。

成果

本年6月に出版した科研報告書*Sur les traces des Grands Empires*を国外の著名なアフリカ考古学者に贈呈し、書評や引用を依頼した。パリ第一大学アフリカ学科が公開しているウェブ雑誌 <http://afriques.revues.org> に書評を掲載してくれることが決まった。

International Institute for Conservation of Historic and Artistic Works (IIC: 国際文化財保存学会) 2016 Los Angelesでの発表

2016年9月10日～9月17日 アメリカ・ロサンゼルス

末森 薫

国際文化財保存学会 (IIC) は、二年に一回開催される文化財の保存に関する国際的な学会である。2016年大会は、9月12～16日の日程でアメリカ・ロサンゼルスにて「現代美術の保存修復」をテーマに開催される。みんなくが収蔵する民族資料は、現代美術の作品と同じく、多様な材質から構成され、大きさも様々であることから、その有害生物対策は大きな課題となっている。みんなくでは、これまで有害生物に対する様々な研究・活動に取り組むとともに、恒常的な対策を実施していく上での体制を整えてきた。本大会では、園田・日高・末森の連名で、みんなくがこれまで行ってきた化学薬剤を用いない殺虫処理法の開発に関する研究成果について、実践例を示しながら発表する。発表は既に査読審査を経ており、題目はIICのホームページにも掲載されている。今回の学会では、若手の育成に鑑み末森が日高准教授と共同で発表を行うことを予定している（日高准教授の旅費については別経費から支出する予定である（調整中））。なお、学会前日の9月11日に、発表会場の下見、発表準備・打ち合わせを実施する予定である。

今回の発表題目は、国内外の多くの博物館が抱える課題であり、みんなくが行ってきた研究成果を発信することの意義は大きい。またIICは、国際博物館会議国際保存委員会 (ICOM-CC) と並ぶ、文化財の保存修復に関する二

大国際学会であり、各国の研究者が一同に会する数少ない機会でもある。共通の課題に取り組む各国の研究者との交流を通して、課題への対策に向けて、新たな展開が生まれることが期待される。また、みんぱくが行う研究成果を国際的な場で発信することにより、みんぱくの国際的な認知度を高めることにも繋がると考えられる。本大会での発表内容は、IICが発行する国際学会誌 *Studies in Conservation* に査読付英語論文として、掲載される予定である。

実施状況

2年に一回開催される国際文化財保存学会（IIC）2016年大会が、9月12～16日の日程でアメリカ・ロサンゼルスにて「近現代アートの保存修復（“Saving the Now –Crossing Boundaries to Conserve Contemporary Works”）」をテーマに開催され、本プログラムの助成を受けて参加した。みんぱくが収蔵する民族資料は、近現代アートと同じく、多様な材質から構成され、大きさも様々であることから、その有害生物対策は大きな課題となっている。本大会では、園田・日高・末森の連名で、みんぱくがこれまで行ってきた化学薬剤を用いない殺虫処理法の開発に関する研究成果（大型船資料の二酸化炭素処理の事例、および展示場における展示品の低酸素処理の事例）について、ポスター発表をおこなった（題名：“Common challenges for ethnographic and modern art collections: Pest control in complex and large objects containing new materials”）。大会当日のポスター解説は、若手の育成を鑑み、本プログラムの助成を受けた末森が、日高真吾准教授（科学研究費補助金での参加）と共同で担当した。

大会の各セッションでは、世界各国における近現代アートの保存修復事例、保存修復に関する取り組みが報告された。本大会が「近現代アート」に焦点をあてたものであり、保存科学者の参加が限定的であったこともあったためであろうか、有害生物対策に関する発表は少なかったが、事例発表を通して近現代アートにおいても生物被害は大きな課題であることを改めて認識することができた。また、当方のポスター発表を通じて、近現代アートを専門とする世界各国の保存修復家や研究者に、みんぱくが実施する有害生物対策の考え方・方法を発信する良い機会になったと考える。さらに、現代アートの保存においては、存命の作者の意向などを考慮した上で、保存修復者がどこまで保存修復に介入するべきかという大きな課題があることを知る機会となった。同様の課題は、先住民との関連が課題となる民族資料の保存・管理・活用とも通じるテーマであり、みんぱくにおける今後の資料保存・管理を考えていく上で有用な情報を得ることができたと考える。

成果

本プログラムで参加した学会の内容・様子について、IIC-Japanが発刊する「ニュースレター」、文化財保存修復学会が発刊する「通信」にそれぞれ寄稿を予定している。

研究発表を文章化したものが、“Studies in Conservation, Supplement 2 2016 - Saving the Now; Crossing Boundaries to Conserve Contemporary Works (IIC 2016 Los Angeles Congress Preprints)”（2016年9月発行）に掲載された（査読付き）。オンラインでも部分閲覧およびダウンロード可能である。

<http://www.tandfonline.com/doi/abs/10.1080/00393630.2016.1188255?journalCode=ysic20>

館長リーダーシップ経費による事業・調査

みんぱく研究公演「黒森神楽×雄勝法印神楽 in みんぱく公演」

国立民族学博物館では、東日本大震災以降、被災地の有形・無形の民俗文化財への支援を継続しており、これまで4年間にわたって無形民俗文化財である芸能団体を招聘し、研究公演を実施してきた。現在、被災地では復興に向け日常生活に戻る動きもあり、芸能団体もその活動が落ち着きつつあるが、その一方で、日常が意識されるほど、震災に対する記憶の風化が懸念されるとともに、震災以前の地域文化の記憶をどのように伝えるのかという課題が浮かび上がってきた。

そこで、2016年度の震災支援プロジェクトの企画として、岩手県、宮城県を代表する神楽で、国の無形民俗文化財に指定されている黒森神楽、雄勝法印神楽を招聘した。また、本公演において、震災以前、震災後、そして現在と両神楽の調査をおこなってきた研究者と2つの神楽の神楽師によるパネルディスカッションを実施し、地域における神楽の存在のみならず、地域文化の重要性を議論した。

東日本大震災から5年という節目の年におこなった本公演は、改めて被災地の地域文化遺産としての芸能を見つめなおし、これからの復興のあり方を考える機会となった。招聘した2つの神楽は震災以前から地域のアイデンティティとして認識され、震災後は復興の象徴的な役割を担い、地域の再生に大きく寄与してきたが、その一方で、震災からの復興事業のなかで、地域そのものが大きく変貌し、これらの神楽もその在りように適していくべく、幾

つかの変化が生じるとともに、変化しない本質的な部分が視覚化されている。本公演では、こうした地域の文化遺産の変貌について、その動態を明らかにしつつ、地域文化の継承の重要性について、主にパネルディスカッションで明らかにすることができた。このことによって、より実践的な人間文化研究のあり方について、広く社会に提示することができたと考える。

東日本大震災等大規模災害に関わる人間文化研究

本研究は、連携研究「文化遺産の復興に向けたミュージアムの活用のための基礎的研究——大学共同利用機関の視点から」を引き継ぐものである。2016年度は「被災地における無形の文化遺産の保護活動」の継続実施と「災害の記録・記憶の継承」を目的として開発中の「記憶をつなぐDB」の一般公開を図った。

「被災地における無形の文化遺産の保護活動」では、これまで継続調査をおこなってきた岩手県三陸沿岸部の芸能の実態調査を引き続きおこない、これまでの成果として、大船渡市で一般公開の研究集会「文化遺産の継承と発展 郷土芸能復興支援メッセ」を開催し、これまでの活動で得た知見を研究対象としていた地域に還元した。また、「記憶をつなぐDB」については、最終データの修正をおこない、国立民族学博物館のサーバーへの移行を完了し、2017年度にWEB上での一般公開を実施することができるようになった。さらに、本件は現在進めているフォーラム型情報ミュージアム「日本の文化展示場関連資料の情報公開プロジェクト」とも関連させ、東日本大震災コーナーでも展示が可能となるようにシステム改修を行った。

みんなく映画会「みんなくワールドシネマ」

「みんなくワールドシネマ」は、映像に描かれる〈包摂と自律〉というテーマのもと2009年秋から2015年度末までに継続して33回実施されており、国立民族学博物館の一般向け催しとして人気、知名度ともに高い。この事業の意義は、広報活動に大いに貢献しつつ、劇映画という親しみやすいメディアを活用しながら、来館者に世界の諸民族の文化を学ぶ機会を提供できる点にある。

機関研究「包摂と自律の人間学」終了に伴い、2016年度はテーマを〈出会いと創造〉に刷新し、諸民族の出会いとそこから生じる文化的な創造性が描かれた劇映画を上映した。

第34回～36回を次のように実施し、3本の映画を通じて、異質な他者との遭遇から何が生まれるかという問いかけを試みた。第34回では、イスラム原理主義者と一般のイスラム教徒との関係、第35回ではゲイ＝レズビアンなどの性的少数者と炭鉱労働運動の出会い、第36回は障がい者と健常者のコミュニケーションの問題に焦点をあてた。映画上映後、専門家の解説と質疑応答を行った。

第34回：2016年9月22日（木・祝）

上映作品＝「禁じられた歌声」（フランス＝モリタニア合作）

解説＝竹沢尚一郎（国立民族学博物館 民族文化研究部・教授）

参加人数＝378人

第35回：2016年12月4日（日）

上映作品＝「パレードへようこそ」（イギリス）

解説＝吉田俊実（東京工科大学 教養学環・教授）

参加人数＝203人

第36回：2017年2月11日（土・祝）

上映作品＝「幸せのありか」（ポーランド）

解説＝信田敏宏（国立民族学博物館 文化資源研究センター・教授）

参加人数＝296人

新中央・北アジア展示フォーラムの開催

2016年6月16日にオープンした新中央・北アジア展示を広報するため、2016年6月から8月までの約3か月間、「中央・北アジアを駆けめぐる——夏のみんぱくフォーラム2016」と題して、展示の内容に関連したさまざまなイベントを企画・運営し、その一環として、①コンサート「音楽でつなぐ中央・北アジア」と、②映画会シリーズ「映画で知る中央・北アジア」を行った。

①に関しては、シベリアの「サハの口琴」のコンサートを7月17日に、中央アジアのカザフの弦楽器による「カザフ草原の調べ」のコンサートを7月31日に実施し、研究者による司会のもと、現地出身者と日本人の演奏家による演奏と解説を行った。②に関しては、6月12日にイベントとして「デルスー・ウザーラ」（シベリア）、6月25日に「モンゴル」、7月9日に「山嶺の女王クルマンジャン」（ケルグズスタン）、7月18日に「クルミの木」（カ

ザフスタン)の4本の映画を上映し、研究者による解説を行った(うち1作品は日本初公開)。映画会上映前には、新しくなった展示場で研究者によるミニレクチャーも実施した。また、③ゼミナールに関しても、午前中に展示場で研究者による展示場案内を行った。

これらのイベントを通して、中央・北アジアの社会と文化に関する理解を深める機会を提供することができた。①②の参加者の合計は1,901名であり、新展示の広報にも貢献した。

新アイヌの文化展示フォーラムの開催

2016年にオープンする新アイヌの文化展示を広報するため、2016年12月から2017年2月まで、展示の内容に関連したさまざまなイベントを企画・運営し、その一環として、①アイヌ民話人形劇「ふんだりけったりクマ神さま」と②「トンコリ×ウポポ——アイヌ音楽ライブ by OKI / MAREWREW」、③「アイヌ・アートにふれる日～木彫の可能性～」として新展示で取り上げた木彫家による実演と解説、および館外研究者を招聘したゼミナールを実施した。

①はアイヌの人形劇を阿寒からアイヌの方々を招聘して行い、子どもから大人までアイヌの世界観と造形などを楽しみながら理解していただけた(594名参加)。②はムックリ(口琴)やトンコリといったアイヌの楽器によるコンサートで、申込者多数のため2回公演とし、演奏と合間の解説および客席との一体感が好評であった(739名参加)。

①～③は、新展示のコンセプトでフォーラムの趣旨とした「伝統を継承しつつ、新たな文化を創造する人びとの姿をイベントを通して紹介する」を実現でき、アイヌ語をテーマにしたゼミナールも326名参加と盛況だった。いずれのイベント時も展示場での解説をおこない、多数の参加者を得て、アイヌ文化への理解を深める機会を提供でき、広報にも貢献した。

研究公演「時を超える南インドの踊り」に基づいたマルチメディア番組の製作

2015年11月22日に開催した研究公演「時を超える南インドの踊り」の映像記録素材を編集し、日本語、英語対応のマルチメディア番組を制作した。これは、研究公演でおこなわれた質の高い演奏を番組化し、館内外で広く利用できるようにすることを目的とする。

本公演で上演されたバラタナーティヤムは、南インドのヒンドゥー寺院で行われた奉納舞踊を起源とし、1930年代に舞台芸術として再生した舞踊ジャンルである。現在、インドを代表する古典舞踊ジャンルの一つとして、インド国内はもとより、世界各地の南アジア系移民コミュニティでも盛んに実践されている。しかし、舞台芸術化の過程で、寺院舞踊伝統の大部分が失われ、一舞踊学校で作り上げられたスタイルが舞踊界の主流となった。本番組は、寺院舞踊に基づく伝統を継承してきた舞踊家の一人、ナルタキ・ナタラージ氏の舞踊公演を番組化することで、寺院舞踊の伝統を記録し、今後の比較研究の資料とすることができた。

収録映像には、前奏曲、舞踊演目他に、館長挨拶、報告者による口頭の解説が含まれ、文字情報として、演目および出演者の紹介と用語一覧を付した。また、全演目のうち歌詞のある6曲に字幕をつけ、踊りの所作と歌詞の関連がわかるようにした。なお、歌詞の言語の内訳は、タミル語4曲、サンスクリット語2曲で、翻訳にあたってはナルタキ・ナタラージ氏の全面的協力を得た。

研究公演「息づく仮面——バリ島の仮面舞踊劇トベンと音楽」に基づいたマルチメディア番組の製作

2015年12月6日に国立民族学博物館講堂で開催した研究公演「息づく仮面——バリ島の仮面舞踊劇トベンと音楽」の映像記録を、前日に開催したワークショップの映像および吉田ゆか子氏提供の現地映像とあわせて編集し、マルチメディア番組を制作した。これは、研究公演およびワークショップの映像記録を中心とし、若干の現地での上演の映像を加えた番組により、展示を補完し、東南アジア文化への理解を深める基礎資料となすことを目的とする。なお、東南アジア展示の「芸能と娯楽」セクションでは、バリ島の仮面舞踊劇に使用する仮面を展示している。

また、研究公演では、バリの舞踊家2名が、日本で活躍するガムラングループ及び踊り手と共演した。本番組は、東南アジア芸能の日本や世界への広がりについても紹介し、芸能がグローバルな文脈において活性化されたり、新たな意味を付与されたりしていることも示す資料ともなる。

みんぱく研究公演「城山虎舞 in みんぱく公演」

国立民族学博物館では、東日本大震災以降、被災地の有形・無形の民俗文化財への支援を継続しており、これまで4年間にわたって無形の民俗文化財である郷土芸能を継承する団体を招聘し、研究公演を実施してきた。現在、被災地では復興に向け日常生活に戻る動きもあり、芸能団体の活動も落ち着きつつあるが、その一方で、日常が

意識されるほど、震災に対する記憶の風化が懸念され、震災以前の地域文化の記憶をどのように伝えるのかという課題が浮かび上がってきた。

そこで、2016年度の震災支援プロジェクトの企画として、岩手県の三陸沿岸部で広く分布する芸能である虎舞のなかでも、同時期に開催している企画展「津波を越えて生きる——大槌町の奮闘の記録」で協力いただいた城山虎舞を招聘した。

本公演では、城山虎舞の演舞の他、岩手の芸能支援に尽力した研究者と協力者及び保存会代表とともに、芸能の支援と協同、そして継承のあり方をテーマとした「郷土芸能の保存科学——支援から協働へ」のパネルディスカッションをおこなった。ここでは、釜石の虎舞の影響を受けた城山虎舞の発足の経緯を起点に、郷土芸能の広がり、伝播、保存することの意義とその在りようについて討論し、次の世代に継承するということの意味と、更なる拡がりの可能性を模索する大阪への虎舞移植プロジェクトといった多岐にわたる内容の討論となった。これらによって地域文化の重要性について考える場を創出することができ、また、企画展と有機的に結ぶ公演ともなった。

(その他館の運営などに関するもの6件)

民博研究懇談会

第272回 2016年6月29日

ジェーン・ツァイ 「止まるべきか止まらざるべきか——音声言語と手話言語の韻律的特徴の比較」

第273回 2016年8月3日

内田吉哉 「写真資料のデジタル化とその地域研究における活用——昭和中期の大阪を撮影した写真資料による事例」

第274回 2016年9月14日

ゲヴォルグ オルベイアン 「博物館の活性化」

第275回 2016年10月26日

コープマン・ジェイコブ 「インドにおける献血運動に関する社会生活——信仰心、禁欲主義とグル」

第276回 2017年1月25日

Elisabeth Engberg-Pedersen 「手話言語における（不）確実性表現」

第277回 2017年2月22日

ジェイムズ・M・サバール 「カナダ極北地域におけるパレオエスキモーの人口史（4800年前～800年前）およびその中後期完新世の気候変動との関係」

2-2 人間文化研究機構 基幹研究プロジェクト

人間文化研究機構 基幹研究プロジェクト

人間文化研究機構総合人間文化研究推進センターは、2016年度より6年にわたり、国内外の大学等研究機関や地域社会等と組織的に連携し、現代的諸課題の解明に資する「基幹研究プロジェクト」を推進し、人間文化の新たな価値体系の創出を目指している。基幹研究プロジェクトは、(Ⅰ) 機関拠点型、(Ⅱ) 広領域連携型、(Ⅲ) ネットワーク型（地域研究および、日本関連在外資料調査研究・活用）の、3類型から構成され、その研究成果については、出版、データベース、映像および展示の制作等を通じて、学界や社会に広く発信するとともに、大学における新たな教育プログラムとして活用をはかる計画である。

本館が担当しているプロジェクトは以下のとおりである。

●広領域連携型

日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築

みんばくユニット「日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築」

代表者：日高真吾

概要

日本列島は、南北に長く、海岸部から平野部、そして中山間部に居住地が広がり、それぞれの環境に適応させた多様な地域文化を育んできた。一方で、これらの地域文化は、グローバル化する社会変容のなかで、地域特有の文化が見えにくくなり、表面的には日本社会全体で画一化されたような印象を私たちに感じさせている。また、多発する大規模災害からの復興で、コミュニティの再編を余儀なくされた地域は、それまで受け継がれてきた地域文化を再構築せざるを得ない状況になることもしばしば見られる現状がある。

そこで、本研究では、地域文化に着目し、さまざまな地域でどのような文化が継承され、新たな文化が構築されているのかの実情を明らかにする。また、これらの動向に人間文化研究がいかに関与しうるのかを考察し、現在（いま）への社会貢献、未来への社会貢献を視野に入れた研究成果を目指す。

具体的には、「地域文化の再発見」、「地域文化の保存」、「地域文化の活用」という三つの視点から研究を展開する。その上で、平常時において埋没している地域文化を再発見し、その文化をそこに住まう地域住民と外部社会の双方にとって地域文化を有意義な形で表象するためのシステムを構築する。

調査研究活動

- 2016年5月26日～5月28日 別府大学において地域文化を対象とした別府大学の教育プログラムに関する意見交換をおこなった。（日高真吾、飯沼賢治、段上達夫、渡辺智恵美）
- 2016年6月3日～6月4日 新潟県村上市旧荃太小学校収蔵庫の資料保管状況の調査および教育キットを用いた資料活用に関する打ち合わせをおこない、十日町市立博物館所蔵糸織りの保存状態の観察と活用に関する打ち合わせ、中越地震で被災した蕪木家文書の赤外線撮影を中心とした詳細調査をおこなった。（日高真吾、末森薫、小谷竜介、加藤謙一）
- 2016年6月6日 平取町二風谷に伝わるチセの建築技術を活用した民博所蔵のチセの葺き替えに関する意見交換を萱野茂二風谷アイヌ資料館でおこなった。（日高真吾）
- 2016年6月9日～6月12日 11月に台湾で開催予定の国際フォーラムに関する打ち合わせを台北市内でおこなった（日高真吾、黄貞燕）
- 2016年6月18日～6月19日 第1回全体会議を国立民族学博物館でおこなった。（日高真吾、平井京之介、寺村裕史、政岡伸洋、小谷竜介、川村清志、伊達仁美、加藤謙一、武知邦博）
- 2016年7月4日 「神戸大学との協定事業に伴う本研究会との連携に関する打ち合わせを大阪市梅田でおこなった。（日高真吾、奥村弘）
- 2016年7月9日 徳島県内の津波碑に関する所在調査をおこなった。（日高真吾）
- 2016年7月13日 地域文化の概念についての意見交換会を東北学院大学でおこなった。（日高真吾、政岡洋、小谷竜介、川村清志）
- 2016年7月26日 金沢美術工芸大学所蔵の百工比照の調査及び展示活用の可能性についての打ち合わせを金沢美術工芸大学でおこなった。（日高真吾、加藤謙一）
- 2016年7月27日 穴水町教育委員会による地域文化を活用したワークショップの調査を能登中居鋳物館でおこなった。（日高真吾）
- 2016年7月30日～7月31日 中越地震で被災した蕪木家文書の赤外線撮影を中心とした詳細調査を十日町情報館でおこなった。（末森薫）
- 2016年8月18日 広島大学総合博物館の展示に関する調査及び2014年豪雨で被災した安佐地区の現状調査を広島大学、広島市内でおこなった。（日高真吾）
- 2016年9月23日 村上市旧荃太小学校収蔵庫の虫害被害の実態調査をおこなった。（日高真吾）
- 2016年9月28日 「企画展『津波を越えて生きる——大槌町の奮闘の記録』に関する打ち合わせを大槌町役場でおこなった。（日高真吾）
- 2016年10月12日 「郷土芸能復興支援メッセ 文化遺産の継承と発展」に関する打ち合わせを陸前高田市博物館でおこなった。
- 2016年10月13日～10月15日 「企画展『津波を越えて生きる——大槌町の奮闘の記録』展示資料の借用と打ち合わせを大槌町役場でおこなった。（日高真吾）
- 2016年10月16日 「せんだい3.11メモリアル交流館」における展示内容の調査をおこなった。（日高真吾）
- 2016年12月6日 国立民族学博物館において、現在作成中の津波の記憶DB、日本の文化展示場DB、国立民族学博物館国内調査委員会調査結果DBの内容について意見交換をおこなった。（日高、寺村、川村、政岡）
- 2016年12月8日～12月9日 「企画展『津波を越えて生きる——大槌町の奮闘の記録』展示資料の借用をおこなっ

た。(日高真吾)

- 2016年12月10日 東北歴史博物館で2017年1月14日から開催予定の特別展「工芸継承」のキュレーションの状況と、2018年度の巡回展の可能性について意見交換をおこなった。(日高、小谷)
- 2017年2月2日～2月4日 東北歴史博物館において国際研究ワークショップ「地域文化の発見を考える」を開催する。ここでは、台湾国立台北芸術大学の黄准教授を招へいし、国立民族学博物館で開催の企画展「津波を越えて生きる——大槌町の奮闘の記録」、東北歴史博物館で開催する特別展「工芸継承」、川村清監督作品「明日に向かって曳け！」をテーマに地域文化の再発見における民俗学の新たな試みと可能性について議論する。
- 2016年3月 別府大学において、別府大学における世界農業遺産支援の取り組みをテーマとした研究会を実施予定。

研究成果

(1) シンポジウム・予稿集

- 2016年11月12日 人間文化研究機構、国立民族学博物館、国立歴史民俗博物館の協定事業の一つとして開催した「地域歴史文化大学フォーラム」にコメンテーターとして参加した。(日高真吾)
- 2016年11月13日 大船渡市立三陸公民館大ホールにおいて、国立民族学博物館主催による「郷土芸能復興支援メッセ「文化遺産の継承と発展」を開催した。(日高真吾)
- 2016年11月25日～11月26日 国際フォーラム「地域文化の発見、保存と活用」を国立民族学博物館(日本)、国立台北芸術大学(台湾)で主催し、台湾桃園市大溪で開催した。なお、本国際フォーラムは、国立民族学博物館と国立台北芸術大学の協定事業の一環としても位置付けられるものである。(日高真吾、政岡伸洋、小谷竜介、末森薫、伊達仁美、平井京之助)

(2) 教育プログラム等

小学校の授業で利用できる教育キット「地域文化宝箱シリーズ」の作成に向け、気仙沼市旧月立中学校資料、村上市旧荃田小学校収蔵庫資料、枚方市立田中家鋳物民俗資料館資料、京都市左京区久多収蔵庫資料を対象に開発を進めている。また、地域文化宝箱バックシリーズの作成に当たっては、全体デザイン、設計を上マリコオフィス、資料保存の対策について文化創造巧芸より助言を受けている。開発のための準備研究会は以下の通り。

- 2016年7月12日 「気仙沼資料を活用した教育キット『地域文化宝箱バック——気仙沼』に関する研究会」
- 2016年7月22日 「京都市左京区久多資料を活用した教育キット『地域文化宝箱バック——久多』に関する研究会」
- 2016年7月29日 「村上資料を活用した教育キット『地域文化宝箱バック——村上』に関する研究会」
- 2016年9月27日 「枚方資料を活用した教育キット『地域文化宝箱バック——枚方』に関する研究会」

(3) 展示等

- 2017年1月19日～2017年4月11日 企画展『津波を越えて生きる——大槌町の奮闘の記録』を本館企画展示場で開催。

研究プロセスの国内外に向けた情報発信

- 2016年7月11日 追手門大学との協定事業における研究会において、「地域文化の見せ方、捉え方——国立民族学博物館の展示をめぐる」を追手門学院大学で発表した。(日高真吾)
- 2016年8月6日 国立民族学博物館で開催された『「記憶の劇場」大学博物館を活用する文化芸術ファシリテーター育成講座』において、「被災文化財の支援から考える 地域文化の保存と活用」を発表した。
- 2016年12月21日 大阪市梅田のグランフロントのナレッジキャピタルにおいて、「展示キュレーションの誘惑——新しい日本の文化展示ができるまで」の発表をおこなう。
- 2017年3月19日 国立民族学博物館研究公演「城山虎舞 in みんなく」を開催する。(日高)

若手研究者の人材育成の取組み

- 30代の若手研究者(末森薫・国立民族学博物館)は、台湾でおこなった国際フォーラム「地域文化の発見、保存、活用」において、コメンテーターとして登壇した。また、現在、中越地震で被災した古文書の保存科学調査を実施し、2017年度の文化財保存修復学会、2018年度開催予定の国際シンポジウム「地域文化の保存」(仮称)で発表する予定である。
- 30代の若手研究者(寺村裕文・国立民族学博物館)は、DB関連の開発を担い、現在、津波の記憶DBの今年度の公開、2017年度公開予定の日本の文化展示場DB、2018年度公開予定の国立民族学博物館国内調査委員会調査結果DBの公開の準備を進めている。また、DBの技術的なサポートをセカンドブレンよりいただいている。これらの成果は、2019年度開催予定の国際シンポジウム「地域文化の活用」(仮称)で発表する予定である。

- 30代若手研究者（天野真志・東北大学）は、来年度から本格的に大学の授業で利用できる被災古文書および被災民具のレスキューパックの開発を進める準備をおこなっている。これらの研究の成果は、2018年度の文化財保存修復学会及び2019年度開催予定の国際シンポジウム「地域文化の保存」（仮称）で発表する予定である。また、地域文化宝箱パックシリーズの作成に当たっては、全体デザイン、設計を上マリコオフィス、資料保存の対策について文化創造巧芸より助言を受けている。

●広領域連携型

アジアにおける「エコヘルス」研究の新展開

みんぱくユニット「文明社会における食の布置」

代表者：野林厚志

概要

本研究の目的は、食の概念とその体系的な実践とを、文明社会を支える文化装置としてとらえ、食の社会的機能や歴史動態を解明し、食をめぐる社会的共存や衝突の原理を探究することである。

食は個体の生命を維持するための基本的な営みであると同時に、文化や経済と深く関わる行為としてとらえられてきた。一方で食糧資源の大量生産、大量廃棄、地球規模の人口増加と数億人にもおよぶ飢餓人口は、生態学的適応に乖離した現代社会の食の実態を物語っている。

こうした現代社会の食に関わる諸問題を超域的な視点で連結させるとともに、異なる視点をもつ研究分野の協働として、人類史の視点からの文明の盛衰と食との関係、生態学的アプローチからの食の機能等を議論に組み込み、文明社会の中における食の健全なありかたを探究していくことも本研究の狙いである。

なお、本研究プロジェクトは総合地球環境学研究所が中心となり推進する「アジアにおける『エコヘルス』の新展開」の一つのユニット研究として実施する。「エコヘルス」は、医療や疾病研究の視点で捉えられてきた「健康」を、社会変容と環境変化が急速に進む近現代における、暮らしや生態環境、生業、食生活等との関わりから探究しようとする新たな研究の視座である。

調査研究活動

- (1) 研究会合の実施：ユニット内の研究会合を4回実施。

年度はじめの研究会合において、研究代表者より、環境、身体、制度・文化の3つの大きな枠組で研究を進めていくことを提案し、環境を中井信介佐賀大学准教授、身体を梅崎昌弘東京大学准教授、制度・文化を野林ユニット代表に中心に進めていく方針を決定した。

第2回目の研究会合は、サントリーグローバルイノベーションセンターで実施し、産学協働の研究についての意見交換を実施した。

第3回目の研究会合では、身体グループで実施したフィールド調査の報告を行い、結果についての討議と今後の方向性についての意見交換を実施した。

第4回目の研究会合は本年度の研究成果の報告と次年度における研究内容についての議論を実施。

また、環境グループでも独自の研究会合を実施し、ユニット代表とともに時間軸の異なる生態環境の利用についての研究を進めていくことを相互確認した。

- (2) フィールド調査の実施：環境グループでは、日本、タイにおける環境利用の変動に関する調査を実施した。

身体グループでは若手研究者を中心にした食事調査の基礎的フィールド調査をインドネシア、タイで実施した。制度・文化グループでは、フードスケープ、社会運動、味覚とメディア等に関する課題についての調査を、オーストラリア、イタリア、シンガポール、台湾で実施。

- (3) 第6回国際アジア食論壇において、「食の交流史」「政治環境と食」「味覚と健康」を具体的テーマとした分科会を組織した。

- (4) 研究成果を一般社会に還元するための公開講演会を実施。

研究成果

- (1) シンポジウム・予稿集

2016年12月 The 6th Asian Food Study Conference

- (2) 教育プログラム等

各研究会合において意見交換を実施

研究プロセスの国内外に向けた情報発信

総合地球環境研究所のHPに研究の内容等のコンテンツを提供

若手研究者の人材育成の取組み

身体班では、梅崎グループリーダーの指導のもとで、若手助教ならびに大学院生（修士課程）のフィールド調査を実施し基礎データの収集を实践させた。

●ネットワーク型：北東アジア地域研究

北東アジアにおける地域構造の変容——越境から考察する共生への道

中心拠点「自然環境と文化・文明の構造」

代表者：池谷和信

概要

国立民族学博物館北東アジア地域研究拠点は、民博館内の文化人類学・民族学およびその隣接分野の研究者、および連携機関である国立歴史民俗博物館の考古学の研究者を中心に構成され、北東アジアを対象に、人とモノの移動と交流、政治及び経済のシステムの導入と影響に着目して、先史時代から現代に至るまでの長期的な時間幅の中で、自然環境と文化、文明の構造と変容の解明を目指している。

ここでの北東アジア地域とは、国・地域で言えばロシアのシベリア及び極東地域、モンゴル、韓国、北朝鮮、中国、日本に広がる空間を対象としている。従来は国家の枠組みにおいて研究が行われてきたが、これらの国・地域を横断的に捉える新たな試みである。

なお本拠点は、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター、東北大学東北アジア研究センター、富山大学極東地域研究センター、島根県立大学北東アジア地域研究センター、早稲田大学総合研究機構現代中国研究所の各拠点とともに、中心拠点として本プロジェクトを推進している。

調査研究活動

- (1) 北東アジア地域研究会・民博拠点（以下、「月例会」）を5月以降原則として毎月（2016年5月26日、6月27日、7月24日、9月29日、10月25日、12月1日、12月22日、および1、2、3月予定）開催し、拠点構成員が発表、議論を行い、共通課題を見いだしつつある。これは北東アジア地域研究への学術的貢献への足がかりを形成するものとなる。
- (2) 拠点構成員各人が調査（モンゴル、カザフスタン、中国、日本）、研究発表（ロシア、英国）、資料整理を行っている、またはその予定である。これらは今後の研究の質的、量的両面の礎になるものである。
- (3) 2016年8月28日～9月2日 京都で開催された第8回世界考古会議京都大会（WAC-8）において、本拠点リーダーの池谷が連携拠点の構成員である藤尾とともにパネルを組織した。これは世界レベルで研究成果を示すものである。
- (4) 連携機関である国立歴史民俗博物館においては、6月、12月に調査を行い、資料所蔵機関である東亜細亜文化財研究院と成果報告に向けた検討を行っている。これは学術的な貢献とともに、韓国との研究体制の国際的協業による成果としても重要なものとなる。

研究成果

- (1) 報告書・成果論集、シンポジウム、データベース等

「シンポジウム」

- ① 連携機関である国立歴史民俗博物館と合同で2017年2月25日にシンポジウムを行う予定である。これは研究成果の質量の向上とともに、研究推進のための体制を整えることに貢献するものである。

「その他」

- ① 2016年12月23日に第1回国際公開セミナーを開催する。ロシア極北チュクチを対象とした映画「ツンドラブック」を上映し、映画監督アレクセイ・ヴァフルシェフ氏を招聘し、拠点リーダーの池谷の他、呉人徳司（東京外国語大学アジア・アフリカ文化言語文化研究所准教授）、山田孝子（京都大学名誉教授）によるコメント、討論を行う。このセミナーは日本でほとんど知られていないチュクチに関して高い水準での議論を行い、また研究成果の普及に貢献する。
- ② 2017年2月に第2回国際公開セミナーを開催する予定である。モンゴル人研究者を招聘してモンゴル国の農

村の持続可能性について、北東アジア内の共通性と特殊性に焦点を当てるもので、北東アジア地域の理解に寄与するものである。

(2) 教育プログラム等

先述の月例会において、総合研究大学院大学の大学院生、民博外来研究員も出席し、議論に積極的に参加しており、若手の人材育成につながっている。

(3) 展示等

2016年6月16日にリニューアルオープンした常設展示「中央・北アジア／アイヌの展示」に、北東アジア地域研究・民博拠点の構成員が展示、および関連するイベント16件に協力した。これは研究成果の還元として社会に貢献するものである。

研究プロセスの国内外に向けた情報発信

北東アジア地域研究みんぱく拠点のオフィシャルウェブサイトを4月より運用し、事業の概要、所属メンバーの紹介の他、ニュース、イベント、活動報告、研究成果、出版物の項目を設け、随時更新を行っている (<http://www.minpaku.ac.jp/nihu/cnaas/index.html>)。また、年度内に一部英語による対訳を付す予定である。これにより研究プロセスを国内外に提示している。

若手研究者の人材育成の取組み

国立民族学博物館拠点では推進センター研究員の辛嶋博善に、先述の月例会（第2回）、IIASでの発表の他、調査（モンゴル国）への派遣の機会を与えることにより、若手研究者の育成を図っている。

連携機関である国立歴史民俗博物館においては特任助教の箱崎真隆氏を調査に同伴し、サンプリングや測定・分析という一連の調査を担当させ、韓国側との共同研究のやり方などを修得させている。

その他

2016年11月19日に秋田大学で開催された「中東と南アジアの外来移入種メスキート問題——砂漠化対処から水・エネルギー・食料の資源ネクススへ——」において本拠点リーダーがコメントを行った。これは人間文化研究機構「現代中東地域研究」秋田大学拠点、「南アジア地域研究」京都大学拠点の共催に本拠点が協力して行ったものであり、コメントにより研究水準の向上に寄与するとともに、他の地域研究事業との共同によって研究体制の強化につながっている。

●ネットワーク型：現代中東地域研究

地球規模の変動下における中東の人間と文化——多元的価値共創社会をめざして

中心拠点「中東地域における文化資源の現代的変容と個人空間の再世界化」

代表者：西尾哲夫

概要

現代中東地域研究では、国立民族学博物館拠点を中心拠点とし、その他国内の四拠点と共同で研究活動を進めている。端的に述べると現代中東地域研究とは、中東地域における「個」と社会（共同体）のあり方の現代的動態に基づき、グローバル化と地域をめぐる双方向の複眼的な分析ベクトルをもって、人類や人間文化という普遍的な価値を視野に入れた研究である。

本拠点では、現代的諸問題を解決するための基盤形成のために中東地域における社会構築のプロセスを、文化知識の資源化プロセスに着目して研究している。中東地域を基点として広がる空間においては、世界を形成・構想するうえで、生身の個人が経験する未知なる人・場・情報との遭遇が重要な役割を担っている。流動する諸個人が暫定的に構築してゆく場の継起・累積から社会を構想する方法を、文化知識の資源化という側面から検討することで、個人が織りなす世界の特質を解明することが可能となる。そこで（1）「個」から世界への視点による他者観と、（2）社会的心性としての世界観にかかるサブプロジェクトを連携させた活動を実施している。

調査研究活動

個から世界への視点による他者観にかかる研究班と、社会的心性としての世界観にかかる研究班の連携によって、中東地域の人びとの世界の構築方法に関する研究を開始した。また本年度においては、現代中東地域研究のプロジェクト内の機関との連携を図るために共催の研究会・ワークショップを実施した。またフランス社会科学高等研究

をはじめ国外の研究機関、また国内外の他の外部資金で研究を実施する研究グループとも積極的にコンタクトをとり、共益的な協力体制の構築を進めた。

研究成果

(1) 報告書・成果論集、シンポジウム、データベース等

- ① グローバルな知識の環流という観点から現代中東世界と日本との文化的関係について検討する国際ワークショップを東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所拠点と共同で開催した。同ワークショップは、これまでの中東地域研究においては十分に検討されてこなかった一方で、日本において中東地域研究を実施していく上で不可欠な相互の関係性の理解という新たな研究テーマに取り組んだという研究上の意義がある。また中東地域研究として十分に研究協力が進んでこなかったイスラエルを対象とした研究、またイスラエル国内の研究者とも協力したという研究体制上の意義もある。
- ② 国立民族学博物館共同研究事業「個－世界論——中東から広がる移動と遭遇のダイナミズム」（代表・齋藤剛）と連携し国内で研究会を重ねるとともに、現代中東の民衆文化に焦点をあて、個から世界への他者観が社会的心性としての世界観との間でどのような相互作用と相互変容を迎えてきたのかをテーマに、フランス社会科学高等研究院との学術協定に基づく共同事業としてパリで国際シンポジウムを開催した。
- ③ 中東地域内外の博物館等における文化表象に関する動向調査ならびに関連データベース構築にむけて、パレスチナ、イラン、トルコ共和国、また仏語圏を中心に博物館の所在および収蔵物の内容、さらにはGoogle Mapを利用した位置情報などのデータ整理を進めた。本データベースの作成は、国内の研究者に対する情報発信であるだけでなく、観光業など中東地域関連した事業を展開する一般の企業、旅行者に対する情報発信という二重の目的をもっている。
- ④ 国立民族学博物館の共同研究「物質文化から見るアフロ・ユーラシアの沙漠社会の移動戦略に関する比較研究」（代表・縄田浩志）と連携し、民博や国内大学所蔵の中東民族資料に関する調査を始めるとともに、秋田大学拠点と国立民族学博物館拠点の研究連携として国際ワークショップを開催した。
- ⑤ 「中東民衆文化研究資料」シリーズとして、今なお絶大な人気をもつエジプト人歌手ウム・クルスムについて日本の研究者だけでなく国外の研究者による中東地域における民衆文化の音楽的側面からの研究を推進するため、世界で初めて全楽曲を含む英訳歌詞資料集を出版した。
- ⑥ 2016年3月開催のプレシンポの成果も盛り込んだ論文集『中東世界の音楽文化』を刊行した。

(2) 教育プログラム等

- ① 中東地域の教育用プログラムとしてイスラーム世界の現代的多様性をテーマとした教材開発「世界のイスラームばっく」作成のための資料収集と資料情報の整理を行うとともに、教育プログラムの開発の準備を行った。
- ② 拠点の研究成果目標を達成する上で必要不可欠な中東地域をめぐる最新の研究動向について、海外の第一線で活躍する中堅・若手研究者によるレクチャー・シリーズを2017年1月以降順次実施し、大学機関における教育へのフィードバックを期待しながら日本国内の大学等研究機関に所属する研究者に対する教育活動を推進した。

(3) 展示等

- ① 2019年度に開催予定の秋田大学拠点との共催による企画展示のために、国立民族学博物館ならびに東京大学博物館等が所蔵する中東民族資料の悉皆調査を開始した。
- ② 次年度以降に企業関連の博物館との連携した展示を行うために資料整理を実施した。

研究プロセスの国内外に向けた情報発信

- ① 国内外に向け研究活動と研究成果の情報発信を目的に拠点のウェブサイトを作成するとともに、Facebookを拠点のウェブサイトと連携して利用することで、迅速な情報発信を進めてきた。Facebookを利用することで迅速な情報発信が可能となっただけでなく、Facebookでは添付できないPDFファイルなどについてDocs.comなどのアプリを連動させることでワークショップのプログラムなどの印刷物についても迅速に情報発信が可能となり、積極的な広報を実施してきた。
- ② 研究動向に関する情報交換のフォーラムとしてレクチャー・シリーズを企画し、海外から若手・中堅クラスの第一線の研究者を招へいし、あわせて今後の協力体制についても意見交換をした。

若手研究者の人材育成の取組み

- ① 研究会でのおよそ40歳未満の若手研究者に発表の機会を与える試みとして、拠点研究員による発案で現代中

東地域研究を推進するための中東地域をめぐる人類学的研究の理論的整理を行う研究会を実施した。

- ② 中東地域研究において必要不可欠な中東地域の言語習得を促進し、2016年8月26日～9月1日にかけてアラビア語集中講座合宿を研究分担者である鷺見朗子と共同で企画し、実践的教育プログラムの開発のための養成プログラムを実施した。

その他

- ① 国立民族学博物館友の会に協力して、現代中東地域研究推進事業設置関連の講演会を大阪と東京で計4回実施した。
- ② 競争的外部資金として科学研究費の基盤研究(B)(特設分野)「中東地域における民衆文化の資源化と公共的コミュニケーション空間の再グローバル化」(代表・西尾哲夫)を獲得し研究の活性化を図るとともに、若手の研究分担者にも競争的外部資金の申請を促した。
- ③ 研究分担者の森千香子(一橋大学法学研究科・准教授)の中東地域とグローバル化という本プロジェクト全体にも深く関係する内容の著書『排除と抵抗の郊外——フランス〈移民〉集住地域の形成と変容』東京大学出版会(2016年3月出版)が、第16回大佛次郎論壇賞および2016年度第33回渋沢・クローデル賞特別賞を受賞した。

●ネットワーク型：南アジア地域研究

グローバル化する南アジアの構造変動——持続的・包摂的・平和的發展のための総合的地域研究

中心拠点「南アジアの文化と社会」

代表者：三尾 稔

概要

急速な経済発展とともに社会文化も大きく変わりつつある南アジア地域の現状は、わが国にとっても到底無視できるものではない。本事業は、人文・社会諸科学を中心に自然科学分野とも協働して、地域的一体性の強い南アジア全体の総合的・俯瞰的な理解を深める研究プログラムを推進している。このプロジェクトには、副中心拠点である国立民族学博物館をはじめ、京都大学(中心拠点)、東京大学、広島大学、東京外国語大学、龍谷大学の6拠点が参加し、ネットワーク型の共同研究事業を行っている。

民族学博物館拠点では、南アジア発の人や文化・価値の環流状況の解明や社会変化の中でも維持される南アジア的な社会結合の特性の解明を通じ、地域固有の社会的レジリエンスの特徴を抽出し、グローバル化の中で生ずる社会的リスクへの対応という問題解決に貢献する。また、国際シンポジウムの開催、研究成果の英文叢書の刊行、国際学術協定の拡大、国際研究センター・コンソーシアムの構築など、拠点事業全体の国際化の推進を担っている。

調査研究活動

南アジア(インド4名、パキスタン1名、ネパール1名)をはじめ海外の各地(フランス、カナダ、マレーシア各1名)に若手や他大学在籍者を含むメンバーを派遣し、グローバル化時代における南アジア発の社会・文化変容に関する現地滞在調査を行った。これにより、若手研究者の研究能力育成や他大学との連携体制の強化はもちろん、グローバル化の中での南アジアの社会と文化の動態の最新動向を把握することができた。

また、ユニット別の研究会を3回(予定を含む)、テーマ別の2ユニット合同研究会を計4回(予定を含む)実施し、メンバー間での知見の共有や議論を通じた研究水準の向上を図るほか、2020年度に刊行予定の本拠点独自の成果論文集の出版に向けた議論を開始した。

研究交流協定を結んでいるエジンバラ大学との研究協同を推進するため、インドの医療人類学を専門とする若手研究者を招聘し、本拠点が主催して若手研究者や院生に向けた公開の国際研究セミナーを開催した。これを通して、欧米の医療人類学に関する最新動向を把握することが可能となり、議論を通して参加者間で研究の視野を広げ今後の研究の展開に示唆を得ることとなった。

デリー大学との共同で行う予定であったシンポジウムは先方の資金不足や会場確保の困難から今年度の開催は見送らざるを得なかったが、来年度以降の開催のため協議を続けている。

国際的な南アジア研究センター間の連携やネットワーク化を目指し、東アジア・東南アジア諸国(韓国、シンガポール、タイ、ベトナム)の主要な南アジア研究センターの代表研究者を招聘し、2016年12月に「アジア・太平洋地域南アジア研究センター・コンソーシアム」設立準備会合を開催した。会合では、2017年度以降の協同的研究事業として、国際学会の共催やメーリングリスト作成など具体的な方針についての議論を進めた。これらの協同的研究事業体制を整備することで、研究の国際水準での向上や国際発進力の向上が大いに期待される。

研究成果

(1) 報告書・成果論集、シンポジウム、データベース等

報告書・成果論集に関して、2015年12月に国立民族学博物館で開催した国際シンポジウム“Transformation in Globalizing South Asia: Comprehensive Area Studies for Sustainable, Inclusive, and Peaceful Development”の成果論集の編集をすすめ、現在研究出版委員会による査読の行程にある。これにより、ここまでの主要な研究成果の国内外への発信が達成される見込みである。

写真家沖守弘氏の撮影した約2万点のインドの祭礼・工芸・芸能等に関する写真のデータベースを作成し、国立民族学博物館のホームページ上で「沖守弘インド写真データベース」として公開し、貴重な研究資料の一般への普及を達成した。

(2) 教育プログラム等

拠点研究員の竹村嘉晃が関西大学文学部で担当する「南アジア・内陸アジア論」の授業の一環として、国立民族学博物館で学外演習を実施し、南アジア展示の見学と南アジアに関するビデオトークの鑑賞およびグループワークを行い、学生たちに物や映像を通して南アジア世界への理解を深めさせた。また、同館図書館を訪れ、卒業論文などの資料収集に向けた活用方法について解説した。また、拠点構成員である上羽陽子が大阪芸術大学工芸学科で担当する「学外授業」と「博物館実習」にて、及び京都精華大学ポピュラー・カルチャー学部で担当する「クラフトI」と同芸術学部「文様史I」にて、それぞれ南アジアの展示案内を中心とした国立民族学博物館の活用方法について解説した。いずれも、国立民族学博物館と大学の連携や、同館の教育的活用に貢献する内容となっている。

(3) 展示等

国立民族学博物館の事業と連携して、一般の来館者が南アジア展示により親しみやすくなるよう、同館の南アジア展示場の展示改修や新しい展示ガイドの制作に協力した。

また将来の研究展示の展開に向けて、インドの織機や楽器の収集を支援した。インドの織機は、国立民族学博物館はもとより、国内の研究機関や博物館にもほとんど収蔵されておらず、南アジアの手仕事の伝統を具体的な「モノ」を通じて理解・紹介する上で貴重な資料である。一方、インドの楽器はインド東部ベンガル地方の名家であるタゴール家で100年以上前から所有されてきたものであり、インドの音楽発展史の研究に大きく貢献する資料である。

研究プロセスの国内外に向けた情報発信

「現代インド地域研究」プロジェクト期に構築したホームページを活用して情報の一般社会への発信に努めた。特に今年度は英文情報ページを充実させて研究情報の海外への発信を強化した。これにより、日本だけでなく南アジアを含む海外からの読者に向け研究の最新動向を発信することが可能となった。

若手研究者の人材育成の取組み

PDや若手助教・講師レベルの研究者の海外調査（計6名、予定を含む）、研究会での発表（計6名、予定を含む）を促し、これらを通じて若手の研究能力の育成に取り組んだ。対象となった若手研究者の大半は他大学に所属しており、調査や発表の機会を提供することを通じて、若手の横のネットワーク形成を促し、そこでの議論をフィードバックさせることにより当該所属大学における南アジア研究の更なる発展にも貢献した。

その他特記事項

当拠点に配置されている拠点研究員のうち、2016年12月に竹村嘉晃が拠点での研究を含む研究活動に対して舞踊学会奨励賞を受賞した。同賞は、南アジアのドリットたちの生を捉える視角に、舞踊論という新たな分析軸を導入し、グローバル化時代を生きぬく人びとの実践を活写したことを高く評価されたものである。また同じく拠点研究員の中川加奈子は2017年4月1日付けで追手門学院大学社会学部でのテニュアトラックの准教授職への就職が決定した。これは同氏による食肉を切り口としたネパールのカースト社会に関するこれまでの研究を評価されてのことであり、今後は同大学での教育活動を通して「食」を介した南アジア社会理解に関する教育支援が期待される。

南アジア地域研究プロジェクトの国際化を担う副中心拠点として、「アジア・太平洋地域南アジア研究センター・コンソーシアム」の構想と具体化を推進した。その一環として、2016年12月に東アジア・東南アジアの主要国の南アジア研究センターの代表を招聘し、コンソーシアム設立準備会合を開催し、2017年度以降の国際協同的研究事業を国際セミナーの共同開催などのかたちで展開することで合意した。

2-3 外部資金による研究

科学研究費助成事業による研究プロジェクト

2016年度科学研究費補助金 採択課題一覧

区分	研究種目	研究課題	氏名	研究年度
新	新学術領域研究 (研究領域提案型)	人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築	野林厚志	2016 ～2020
	新学術領域研究 『学術研究支援基盤形成』	地域研究に関する学術写真・動画資料情報の統合と高度化	吉田憲司	2016 ～2018
	基盤研究 (A) 海外	チベット・ビルマ語族の繋聯言語の記述とその古態析出に関する国際共同調査研究	長野康彦	2016 ～2019
	基盤研究 (A) 海外	アンデス文明における権力生成と社会的記憶の構築	關 雄二	2016 ～2019
	基盤研究 (B) 海外	2015年ネパール地震後の社会再編に関する災害民族誌的研究	南 真木人	2016 ～2018
	基盤研究 (B) 特設分野研究	中東地域における民衆文化の資源化と公共的コミュニケーション空間の再グローバル化	西尾哲夫	2016 ～2020
	基盤研究 (C) 一般	ポスト家畜化時代の鵜飼文化とリバランス論 ——新たな人・動物関係論の構築と展開	卯田宗平	2016 ～2019
	基盤研究 (C) 一般	カザフスタンにおける伝統医療とイスラームの人類学的研究	藤本透子	2016 ～2020
	基盤研究 (C) 一般	スリランカ系タミル人によるインド舞踊の発展と再々構築化に関する全体関連的研究	竹村嘉晃	2016 ～2018
	基盤研究 (C) 一般	国立天文台水沢収蔵資料から読み解く緯度観測所120周年	馬場幸栄	2016 ～2019
規	若手研究 (A)	中国甘肃仏教石窟壁画の制作技法に関する多面的研究	末森 薫	2016 ～2018
	若手研究 (B)	現代インドにおける遺伝子の社会的布置に関する人類学的研究	松尾瑞穂	2016 ～2018
	若手研究 (B)	社会をつくる芸術： 「ソーシャリー・エンゲイジド・アート」の人類学的研究	登久希子	2016 ～2018
	挑戦的萌芽研究	日本手話と台湾手話の歴史変化の解明： 歴史社会言語学の方法論の確立に向けて	相良啓子	2016 ～2018
	研究活動スタート 支援	南アジアの都市における食肉をめぐる社会関係の文化人類学的研究	中川加奈子	2016 ～2017
	特別研究員奨励費	ネパールにおける教育の市場化と生活世界の変容 ——貧困層の親族・移動・暴力に着目して	安念真衣子	2016 ～2017
	特別研究員奨励費	現代ペルーにおける文化遺産の活用に関する文化人類学研究	關 雄二 SAUCEDO SEGAMI Daniel Dante	2016 ～2018
継 続	新学術領域研究 (研究領域提案型)	植民地時代から現代の中南米の先住民文化	鈴木 紀	2014 ～2018
	国際共同研究加速基金 (国際共同研究強化)	日本国内の民族学博物館資料を用いた知の共有と継承に関する文化人類学的研究 (国際共同研究強化)	伊藤敦規	2015 ～2018
	基盤研究 (A) 一般	アラブ世界の都市部中流層文化とアラビアンナイト ——エジプト系伝承形成の謎を解く	西尾哲夫	2012 ～2016
	基盤研究 (A) 海外	熱帯の牧畜における生産と流通に関する政治生態学的研究	池谷和信	2014 ～2017
	基盤研究 (A) 一般	ネットワーク型博物館学の創成	須藤健一	2015 ～2019
基盤研究 (A) 一般	アフリカにおける文化遺産の継承と集団のアイデンティティ形成に関する人類学的研究	吉田憲司	2015 ～2019	

	基盤研究 (A) 一般	アンデスにおける植民地的近代 ——副王トレドの総集住化の総合的研究	齋藤 晃	2015 ～2019
	基盤研究 (A) 海外	中国周縁部における歴史の資源化に関する人類学的研究	塚田誠之	2015 ～2017
	基盤研究 (A) 海外	グローバル化時代の捕鯨文化に関する人類学的研究 ——伝統継承と反捕鯨運動の相克	岸上伸啓	2015 ～2018
	基盤研究 (B) 一般	ミュージアムと研究機関の協働による制作者情報の統合	丸川雄三	2014 ～2016
	基盤研究 (B) 海外	墳墓からみたインダス文明期の社会景観	寺村裕史	2014 ～2016
	基盤研究 (B) 海外	台湾原住民族の分類とアイデンティティの可変性に関する人類学的研究	野林厚志	2014 ～2017
	基盤研究 (B) 特設分野研究	多世代共生「エイジ・フレンドリー・コミュニティ」構想と実践の国際共同研究	鈴木七美	2014 ～2016
	基盤研究 (B) 一般	セルロース系ナノファイバーの紙資料保存への応用	園田直子	2015 ～2017
	基盤研究 (B) 一般	東日本大震災で被災した民俗文化財の保存および活用に関する基礎研究	日高真吾	2015 ～2017
	基盤研究 (B) 一般	映像人類学とアーカイブズ実践 ——活用と保存の新展開	大森康宏	2015 ～2017
	基盤研究 (B) 海外	ポスト福祉国家時代のケア・ネットワーク編成に関する人類学的研究	森 明子	2015 ～2017
継	基盤研究 (C) 一般	トランスナショナルな社会運動と政治参加の人類学： オセアニア大国の移民を事例に	丹羽典生	2013 ～2016
	基盤研究 (C) 一般	インド災害後のローカル文化再編におけるコミュニティ資源としての「手工芸」の意義	金谷美和	2014 ～2017
	基盤研究 (C) 一般	現代インドにおける染織技術の戦略的継承法に関する民族芸術学的研究	上羽陽子	2014 ～2017
	基盤研究 (C) 一般	現代イタリア社会におけるローカリティに関する文化人類学的研究	宇田川妙子	2014 ～2017
	基盤研究 (C) 一般	ガリラヤ地方とレバノンのキリスト教徒によるアラブ・ナショナリズムの再考	菅瀬晶子	2015 ～2017
続	基盤研究 (C) 一般	本州とその周辺の島々及び多島海海域における民俗芸能の研究	笹原亮二	2015 ～2019
	若手研究 (A)	日本国内の民族学博物館資料を用いた知の共有と継承に関する文化人類学的研究	伊藤敦規	2014 ～2017
	若手研究 (A)	北パキスタン諸言語の記述言語学的研究	吉岡 乾	2015 ～2018
	若手研究 (B)	言語多様性の記述を通して見る中国雲南省チベット語の方言形成の研究	鈴木博之	2013 ～2016
	若手研究 (B)	アフリカの無形文化保護における民族誌映画の活用	川瀬 慈	2013 ～2016
	若手研究 (B)	博物館展示の再編過程の国際比較による「真正な文化」の生成メカニズムの解明	太田心平	2013 ～2016
	若手研究 (B)	『千一夜物語』仏語訳者マルドリユス再考 ——〈遺贈コレクション〉の分析を中心に	岡本尚子	2014 ～2016
	若手研究 (B)	滞日ネパール人の生活実践と労働動態の研究	森田剛光	2014 ～2016
	若手研究 (B)	植民地インドにおける商業カーストの邸宅建築に関する基礎的研究	豊山亜希	2014 ～2016
	若手研究 (B)	現代イランにおける東洋的身体技法の実践とイスラーム的転回をめぐる人類学的研究	黒田賢治	2014 ～2017
	若手研究 (B)	笑い話に注目した日本語ナラティブの「型」と「技」の地域比較	金田純平	2015 ～2017

継 続	若手研究 (B)	世界文化遺産バンチェン遺跡と地域社会： 住民の生活史の視点から	中村真里絵	2015 ～2017
	若手研究 (B)	アフリカ障害者の生活基盤に関する地域研究	戸田美佳子	2015 ～2017
	挑戦的萌芽研究	法・会計・文化融合型の公共政策国際比較研究 チャリティ制度を事例に	出口正之	2015 ～2016
	研究活動スタート 支援	モノを通してみる現代バレーにおける聖人信仰の形成と発展に 関する人類学的研究	八木百合子	2015 ～2016
	研究成果公開促進費 データベース	梅棹忠夫資料のデジタルアーカイブズ	久保正敏	2013 ～2016
	研究成果公開促進費 データベース	服装・身装文化デジタルアーカイブ	高橋晴子	2014 ～2018
	特別研究員奨励費	花街の担い手コミュニティの日常実践に関する歴史人類学的 研究	松田有紀子	2015 ～2017
特別研究員奨励費	シヨナ音楽文化と憑依儀礼の政治・宗教人類学的研究	松平勇二	2015 ～2017	

受託事業

『日本財団助成手話言語学研究部門』の設置および手話言語学事業の推進

委 託 者：公益財団法人 日本財団

担当教員：菊澤律子

実施期間：2016年4月1日～2017年3月31日

目的と概要

先端人類科学研究部下に「日本財団助成手話言語学研究部門」を五年間設置し、常勤研究員二名、併任研究員一名、客員研究員一名を配置する。五年先を見据えた学術研究の推進を基盤とし、当該分野のアウトリーチおよび通訳養成研究等を効果的に推進する。具体的には以下の通り。

- 手話言語学のアウトリーチにおいては、以下の事業展開により、研究者の輩出および社会における手話言語の認知をはかる。
 - 共同研究会形式による研究の推進、
 - 年一回の国際学会形式の研究会開催による国内での言語学の最新動向の報告および議論の場の提供、
 - 大学院生および一般研究者を対象とした夏期もしくは冬期講習の実施（今年度は実施に関する検討）、
 - 話者情報収集等研究基盤の整備、
 - 諸大学における手話言語学の授業および講演開催のための講師派遣、
 - 大学院生および音声言語研究者への手話言語研究のための研究費の支給。
- 学術手話通訳者養成事業においては、以下のような事業を展開することで、関西地区を中心とした学術通訳者養成および手話通訳ニーズのある大学への派遣につなげる。
 - 学術手話通訳研究事業（スクリーニングにより対象者4～6名を専攻）、
 - 大学でのニーズの発掘と派遣事業（今年度は基礎調査とパイロット派遣）、
 - 言語学的知識に基づく通訳クリニックの開講（一般通訳者の参加を広く募集し、学術通訳候補者等の発掘につなげる）、
 - 将来的な高等教育機関における養成につなげる方法の模索。
- 言語学講座の開講や自主勉強会のサポートを行い、社会還元につなげる。

実施状況

予定通り、先端人類科学研究部（研究部改組のため2017年度より「人類基礎科学研究部」）下に「日本財団助成手話言語学研究部門」を新たに設置、常勤研究員二名、併任研究員一名、客員研究員一名を配置した。

1. アウトリーチ関連の達成状況

(1) 共同研究会形式による研究の推進

共同研究という形はとらなかったが、所属研究員間で共同研究をすすめ、それぞれの研究成果に反映させた。具体的には、Engberg-Pedersen・池田による研究報告、相良・菊澤による歴史言語学研究の推進等がある。

げられ、その成果は順次、国際学会や論文の形で公開予定である。

<http://www.r.minpaku.ac.jp/shuwa/sillr03.html>

- (2a) 年一回の国際学会形式の研究会開催による国内での言語学の最新動向の報告および議論の場の提供
昨年度まで開催していたフェスタの継続事業として SSL2016 を開催、終了した。

<http://www.r.minpaku.ac.jp/ritsuko/ssl2016/index.html>

- (2b) 大学院生および一般研究者を対象とした夏期もしくは冬期講習の実施（今年度は実施に関する検討）
検討の結果、2017年度より学術通訳に関する集中講座を実施することにした。

- (3) 話者情報収集等研究基盤の整備

研究者および話者のニーズおよび対応に関する情報収集のためのアンケート作成の段階まで行った。

- (4) 諸大学における手話言語学の授業および講演開催のための講師派遣

先行事業に引き続き、目標通り行った。

<http://www.r.minpaku.ac.jp/shuwa/2013-2015/103.html>

(2016年度内容を <http://www.r.minpaku.ac.jp/shuwa/sillr011.html> に移行中。)

- (5) 大学院生および音声言語研究者への手話言語研究のための研究費の支給

研究費を直接支給するのは現在の民博の規程下では難しいということになり、研究部門事業に直接かかわっていただく形での研究支援に形を変える必要があることがわかった。年度内に切り替えて実施するのは難しいため、今年度は大阪教育大学学生二名の通訳およびコーディネータ業務見習い雇用とし、2017年度に具体化を検討することとした。

2. 学術手話通訳者養成事業関連の実施状況。

- (1) 学術手話通訳研究事業（スクリーニングにより対象者 4～6 名を専攻）

計画通り行った。

<http://www.r.minpaku.ac.jp/shuwa/sillr02.html>

- (2) 大学でのニーズの発掘と派遣事業（今年度は基礎調査とパイロット派遣）

大阪教育大学支援室、大阪大学支援室と協力し、大阪府の方針確認等を含む基礎調査を進めた。

- (3) 言語学的知識に基づく通訳クリニックの開講（一般通訳者の参加を広く募集し、学術通訳候補者等の発掘につなげる）

予定通り行った。

<http://www.r.minpaku.ac.jp/shuwa/2013-2015/102.html>

- (4) 将来的な高等教育機関における養成につなげる方法の模索。

上記 (2) 参照。

3. 言語学講座の開講や自主勉強会のサポートを行い、社会還元につなげる。

ELAN 講習会、たのしい言語学を学ぶ会等を行った。

<http://www.r.minpaku.ac.jp/shuwa/2013-2015/104.html>

以下、それぞれ具体的な事業内容を申請書の事業計画に従って記す。

事業内容 1. 新規職員採用

以下の通り、採用人事を行い、採用した。

飯泉菜穂子（特任准教授、終年度まで継続して雇用予定）

相良啓子（ろう者、特任助教、終年度まで継続して雇用予定）

池田ますみ（ろう者、事務補佐員（研究支援）、終年度まで継続して雇用予定）

磯部大吾（ろう者、事務補佐員（研究支援）、終年度まで継続して雇用予定）

石原和（事務補佐員、2017年度からプロジェクト研究員として雇用）

原大介（客員研究員、規程上限の2021年3月まで雇用予定）

その他

宮谷祐史（事務補佐員、大阪教育大学大学院生、2016年度のみ）

鎌綾香（事務補佐員、大阪教育大学学生、2016年度のみ）

児玉茂昭（プロジェクト研究員、2016年度のみ）

事業内容 2. 学術手話通訳研修事業

実施済みの事業

- (1) 期 間：2016年5月～2016年10月
- (2) 場 所：大阪・国立民族学博物館
- (3) 対象者：関西在住を中心とする通訳者の中で一定の通訳技能を持つもの（スクリーニングにより選考）
- (4) 内 容：関西における学術通訳チーム養成
- (5) 参加者数：通訳者4名
- (6) 受け入れ研究者：非該当
- (7) 使用言語：日本語、日本手話、英語

学術通訳に必要な知識を身につけ、技量を伸ばすことができるよう、月一回、通訳者養成の専門家を招待してのミーティングや評価等を行った。カリキュラム作成および運営業務は飯泉菜穂子が担当。

通訳者

川鶴和子、山崎晋、隅田伸子（継続）、月東渉（新規）

運営メンバー

飯泉菜穂子（国立民族学博物館）
市田泰弘（国立障害者リハビリテーションセンター学院／国立民族学博物館）
野口岳史（国立障害者リハビリテーションセンター学院）
岡森結子（通訳コーディネーター）
菊澤律子（国立民族学博物館）

講 師

木村晴美（国立障害者リハビリテーションセンター学院）
吉川あゆみ（世田谷福祉専門学校）
西村雅子（日英通訳者）
甲斐更紗（九州大学）
（ウェブサイト <http://www.r.minpaku.ac.jp/shuwa/sillr02.html>）

事業内容 3. 公開講座の開講

以下の通り、公開講座を開講した。

1. 講 師：吉岡乾（国立民族学博物館）
場 所：国立民族学博物館
日 程：2016年4月より8月まで全6回
内 容：「たのしい言語学を学ぶ会」
聴講者数：35名程度（一般ろう・聴）
コーディネーター：飯泉菜穂子
使用言語：日本語・日本手話（学術手話通訳研修事業 OJT による手話通訳）
<http://www.r.minpaku.ac.jp/shuwa/2013-2015/102.html>
2. 期 間：2016年10月～2016年11月、全10講座
場 所：大阪・国立民族学博物館
対 象 者：通訳者および通訳者を目指す方
内 容：手話通訳者のための「みんぱくで手話言語学を学ぼう！」
参加者数：各回20～30名
コーディネーター：飯泉菜穂子
使用言語：日本語、日本手話（「NPO 法人日本手話教師センター」の協力によるろう通訳OJT）
講 師：飯泉菜穂子（国立民族学博物館）、原大介（豊田工業大学／国立民族学博物館）、武居渡（金沢大学）
<http://www.r.minpaku.ac.jp/shuwa/2013-2015/102.html>

事業内容 4. 手話言語学の専門家の諸大学への派遣

以下の通り、諸大学および研究機関に手話言語学の専門家を派遣し、講義もしくは講演を行った。

1. 講 師：池田ますみ

- 派遣先：関西学院大学
 日程：2016年10月26日（講義）
 内容：「香港中文大学の手話言語学プログラムでの経験」
 聴講者数：30名程度（学生、教員）
 受け入れ研究者：関西手話研究会（関西学院大学）
 使用言語：日本手話（日本語への通訳付き）
2. 講師：全15名によるリレー講義（コーディネーター 菊澤律子）
 派遣先：東北大学
 日程：2016年後期（開講三年度目）
 内容：全学教育授業「手話の世界と世界の手話言語☆入門」
 聴講者数：80人
 受け入れ研究者：小泉政利（東北大学大学院 文学研究科・文学部 言語学研究科）
 実施言語：日本語、日本手話、英語。
 日本手話による講義については原則として通訳を派遣。
http://www.r.minpaku.ac.jp/shuwa/2013-2015/103_2016d01.html
3. 講師：市田泰弘
 派遣先：東京大学
 日程：2016年通年講義のうち、半年間（15日間）
 内容：言語学概論（大学院および学部）
 聴講者数：確認中
 受け入れ研究者：非該当
 実施言語：日本語
 ※昨年に引き続き、本事業開始以前から開講されていた講義の継続。制度面での整備による協力。
4. 講師：全5名によるリレー講義（コーディネーター 飯泉菜穂子）
 市田泰弘（国立障害者リハビリテーションセンター学院／国立民族学博物館）
 木村晴美（国立障害者リハビリテーションセンター学院）
 中野聡子（大阪大学）
 原大介（豊田工業大学・国立民族学博物館）
 飯泉菜穂子
 派遣先：大阪教育大学
 日程：2016年後期（11月から3月）
 内容：手話通訳、手話言語学に関する講義
 聴講者数：30～70人（見込み）
 受け入れ研究者：池谷航介（大阪教育大学）
 実施言語：日本語・日本手話
http://www.r.minpaku.ac.jp/shuwa/2013-2015/103_2016d02.html

事業内容 5. 研究基盤データベース作成

担当者（原大介）により、ニーズ調査票および質問項目を作成した。2017年6月上旬までに研究者およびろう者への予備調査を行い、データベースシステムの作成にとりかかる。

事業内容 6. 国際研究集会の開催

以下の通り開催した。

- 時期：2016年9月23日（通訳と発表者打ち合わせ）
 2016年9月24-25日（国際会議）
 場所：大阪・国立民族学博物館
 対象者：国内外の大学生、大学院生、および研究者（一般の聴講可）

内 容：招待講演二件および一般からの公募・採択による手話言語学研究発表14件

参加者数：270名

受け入れ研究者：非該当

使用言語：英語、アメリカ手話、日本語、日本手話（一部、国際手話付き発表あり）

インターネット配信つき（アクセス数9月23日283名、9月24日186名）

二日目に関しては、民博館側の施設の不備で配信が不能になった時間があったため、視聴率が下がったと思われる。来年度以降に向けて改善に努めたい。

詳 細：<http://www.r.minpaku.ac.jp/ritsuko/ssl2016/index.html>

事業内容. その他

以下の通り、「手話による ELAN 講座」（コーディネーター：相良啓子）を開催した。

時 期：2017年2月3-4日（土、日）

場 所：大阪・国立民族学博物館

対 象 者：国内外の大学生、大学院生、および研究者

内 容：ELANによる手話映像処理の入門講座

参加者数：15名

講 師：菊地浩平（総合研究大学院大学・学融合推進センター・助教）、アシスタント 牧野遼作（国立情報学研究所・特任研究員）

使用言語：日本語（日本手話通訳付き）

詳 細：<http://www.r.minpaku.ac.jp/shuwa/2013-2015/104.html>

また、関西学院大学手話言語研究センターでの開講講座の企画計画への協力（原大介、菊澤律子）、および講師として協力（原大介、飯泉菜穂子、菊澤律子）した。その他にも、手話言語学関連の依頼の内容に応じて、各研究員および事務補佐員が協力・講演・対応を行った。

成果

手話言語学研究部門という民博の公的な研究部門を設立したことで、名実ともに、民博の館の事業として研究事業を進めることができるようになった。時限付きとはいえ、まとまった年数でスタッフを確保できるようになり、それぞれが長期的な目標を見据えて研究や事業の運営に取り組むようになった。また部門設立により、継続および新規いずれの事業においても、これまで民博と直接関わりのなかった研究機関や研究者からの関心や協力を得ることができるようになった。来年度以降、国内の関連機関との連携、アジアの他の関連機関との連携も視野に入れて事業を進めてゆくための基盤ができたと考えている。

事業成果物：

- 事業広報のための研究部門ウェブサイトを新規に作成した。

<http://www.r.minpaku.ac.jp/shuwa/index.html>

（報告書提出時点で英文サイトは翻訳済み、アップ待ち状態。）

- 国際研究集会（SSL2016）ウェブサイト

<http://www.r.minpaku.ac.jp/ritsuko/ssl2016/index.html>

- 国際研究集会（SSL2016）写真（CDにて提出）

<https://www.dropbox.com/sh/9kw9tcl8sc6wg1o/AADWMec2iCTqvscyUQMn4qfWa?dl=0>

- 国際研究集会（SSL2016）内容のビデオ記録（DVDにて提出）

- 国際研究集会（SSL2016）論文集準備中

- リレー講義資料および学生アンケート（印刷物の形で提出）

「台湾文化光点事業計画——民族誌映画にみる文化への視点 台湾、日本、ノルウェー、エチオピアの作品より」

委託者：The Ministry of culture, ROC (Taiwan) CHU WEN CHING

担当教員：川瀬 慈

実施期間：2016年6月14日～11月30日

目的と概要

1. 概要

2016年11月12、13日に国立民族学博物館において台湾文化光点計画上映会・シンポジウム『民族誌映画にみる文化への視点——台湾、日本、ノルウェー、エチオピアの作品より』を開催した。本会では、台湾原住民の映像作家が、自らの文化や社会の変容をテーマに制作した民族誌映画の上映を行い、さらに台湾との比較の見地から、ノルウェーの先住民や、日本、エチオピアのマイノリティの文化をテーマにした民族誌映画の上映を行った。本会では、全5作品の制作責任者である映画監督全員が上映・議論に参加した。台湾からは『虹の物語』を監督したタイヤル族の比令亞布氏、『靈山』を監督した、タロコ族の血をひく蘇弘恩氏と同作プロデューサーの李桂玲氏が、またノルウェー、トロンソ大学博物館より、『受け継ぐ人々』を監督したロセラ・ラガッチ准教授が参加した。本館からは『僕らの時代は』を監督した川瀬、そして『怒 大阪浪速の太鼓集団』監修の寺田吉孝教授が参加し上映、発表を行った。台湾原住民による作品を世界の他の国々の研究者の作品と並べて上映することによって、台湾文化の独自性や創造力、各作り手の映像に対する価値観や思考を浮き彫りにすることをねらった。2日目の午後には、シンポジウムを開催し、各作品の制作責任者と、台湾研究の専門家である民博の野林厚志教授が発表、討論を行った。台湾作品、そしてノルウェーの作品については、本邦初公開であり、それらの作品の上映と監督本人による作品解説や来場者との議論を行うことができ、貴重な機会となった。

2. 内容

本会では、下記5本の映画の上映と解説、ならびに作品監督の発表を中心とするシンポジウムを行った。各映画の上映直後に作品の監督が登場し、川瀬との対話形式で、作品制作のきっかけや、作品の方法論、対象となった民族や集団についての解説を行った。その後、フロアの観客も交えて、作品に関する質疑応答を行った。さらに、会場である講堂外のロビー（ホワイエ）へ監督が移動し、通訳を交えて観客と触れ合う機会を設けた。ロビーでは、台湾文化の研究者をはじめ映像人類学研究者、ドキュメンタリー映画や商業映画の制作者が、各監督と密に接し、意見交換を行った。以下に上映作品の紹介を行う。

実施状況

上映作品

作品1.

『虹の物語』（彩虹的故事 58分 1998年 比令亞布監督 タイヤル語（日本語字幕））

タイヤル族の老人によれば、タイヤル族の者が亡くなると、死者の魂は虹を通してタイヤル族の天国に行くという。ただし、虹を通過する際、祖霊によって、死者の顔に刺青がほどこされているかどうか、厳しいチェックが入るのだという。もし、その顔に刺青がない場合、魂は天国に到達することができなくなるそうだ。私（監督）自身、タイヤル族の出自を持つ。本作は、タイヤル族の老人たちへの聞き取りを中心に、刺青と虹にまつわる物語について描いた。タイヤル族の伝統的な刺青文化が次第に消失していく過程をとらえつつ、伝統文化の復興という課題について考えたい。

作品2.

『靈山』（靈山61分 2015年 蘇弘恩監督 タロコ語、中国語（日本語字幕））

例えば過去400年を振り返ると、台湾は数々の政治体制の元に置かれてきたことがわかる。オランダ、スペイン、日本、そして中華民国、それぞれの国が、この島に大きな足跡を残してきたといえよう。これらの政治体制の変化に最も強く影響を受けてきたのが台湾の原住民だ。様々な統治者のもとで、原住民の分類のありかたや原住民であることの意識も変化してきた。本作の主人公はタロコ族の老人である。本作では、この老人のライフコースから、台湾原住民と原住民の権利回復運動の歴史を照射する。

作品3.

『受け継ぐ人々』

（Firekeepers 57分2007年 Rossella Ragazzi 監督 サーミ語、ノルウェー語、英語（日本語字幕））

若いサーミ先住民であるローラとサラはサーミの伝統的な歌唱法ヨイクの伝統の継承と革新にとりくんでいる。ヨイクは長い間、シャーマニックな実践として位置づけられ、キリスト教の教会からは、“邪悪な表現”というレッテルをはられてきた。また、二人の先祖たちは、ノルウェー政府による先住民文化の抑圧や同化政策のなかで苦しんできた。

本作では二人が率いるロックバンド Adjågas の活動を追いかけ、自らのコミュニティとの対話を大切にしつつも、グローバルな世界や音楽産業とのつながりのなかで、ヨイクの継承と革新をめざす主人公たちの葛藤を描き出す。

作品 4.

『僕らの時代は』(Kids Got a Song to Sing 45分 2006年(2016年再編集)川瀬慈監督アズマリ隠語、アムハラ語(日本語字幕))

弦楽器マシニコを弾き語るアズマリは、エチオピア北部の地域社会において古くから音楽をなりわいにしてきた職能集団である。本作は、アズマリの少年少女が歩む人生の道程を、映像によって数年ごとに記録してゆくプロジェクトである。本作では、思春期の少年二人、タガブとイタイアに焦点をあてた。音楽職能を生きる二人の日々の営みや葛藤とともに、アズマリ集団内部における彼らと大人たちとのなわばり争い等を、ナレーションや解説字幕を極力廃し、撮影者と二人の対話を中心に描いた。

作品 5.

『怒 大阪浪速の太鼓集団』

(Angry Drummers: A Taiko Group from Osaka, Japan 85分 2010年 寺田吉孝監督)

この映像番組は、大阪市浪速区の被差別部落に活動の拠点をおく太鼓集団「怒」のドキュメンタリーである。同地区は、300年以上の太鼓づくりの伝統をもつが、太鼓職人たちは皮革業に対する不浄観などから差別や偏見に晒される時期が長く続いた。「怒」は、あらゆる差別をなくすことをスローガンにして活動を続けている太鼓集団であるが、彼らの活動は、最初から差別の経験と直線的に結びついていたわけではない。番組では、メンバーたちが、個人的な楽しみで始めた太鼓演奏が、地元の支援を受けるにつれて、その支援の背景となっている差別の歴史を理解するようになり、太鼓演奏のなかに人権啓発の手段としての可能性を見出していくプロセスが描かれる。また、グループの活動に対するメンバーの意識や関わり方は一様ではなく、彼らが活動の拠点としている部落解放同盟浪速支部の運動形態・実践とも、一定の距離を置いている点が示される。

シンポジウム

前5作品の上映を終えた2日目午後には、各作品の監督に、本館の野林を加え、シンポジウムを行った。

各監督が、どのような目的を持って、映画制作を行ってきたかそれぞれふりかえり、今回の上映会で発表された作品が各監督の作品制作履歴の中でどのような位置付け、重要性があるのか、あるいは、方法論的な特徴があるのかについて詳細に解説した。

作品1の比令亞布監督は、自らの映画制作の実践が先住民文化の保存と、失われつつある先住民文化の復興を喚起するためにある点を指摘した。また、映画制作が、先住民文化の、いわばネガティブな報道に対抗する、オルタナティブな表象を実現させる実践であることを強調した。作品2の蘇弘恩監督は、比令亞布監督の指摘した、文化を保存し、復興させるデバイスとしての映画の可能性を認めつつも、次世代の先住民作家の役割として、先住民の部落内部の利害関係をはじめとする複雑なポリティックスをも注視して記録する必要性を説いた。このように本シンポジウムでは、台湾先住民の監督であっても世代間(比令亞布監督と蘇弘恩監督の年齢には20年の隔りがある)による記録への意識の差を浮き彫りにすることになった。作品3のラガッチ監督は、先住民文化のマニフェストとしての映画の役割について述べ、自文化を映し出す鏡あるいは、自己のアイデンティティの認識、自覚のために先住民に使用してもらうためのツールとしての映画制作について、自身の経験に基づき報告した。

また、野林は、20世紀の先住民やマイノリティの権利に関するグローバルなレベルでの運動の盛り上がりや踏まえつつ、台湾の先住民が社会運動としての先住民運動を起こし、自分たちの文化を表象、発信してきた点を指摘した。台湾の先住民が、世界の状況をうまく取り入れながら、自文化の発信を戦略的に進め、そのようななか、台湾の憲法が多元文化を認めるにいたったいきさつについて解説した。

成果

これまで人類学者によって研究され、表象される側にあった、先住民/先住民あるいはマイノリティたちが、自

らの文化を自らの手で撮影・記録し、発信していこうという運動が世界各地の先住民／原住民の作家、活動家、学者のあいだで高まっている。世界各地の先住民／原住民が、映画制作をはじめ、テレビ局やラジオ局の開設、絵画や工芸等の芸術活動を通して、時には、ラディカルに自らのアイデンティティを広く社会にアピールしている。学界は、こうした動きに対して、少し距離を置き、先住民／原住民のメディア実践を客体化してとらえ、分析する姿勢が一般的であった。そのようななか本会では、映画制作という共通のプラットフォームの上で、台湾の原住民映画監督、ノルウェーと日本の研究者が親密に議論したことで、原住民、研究者のそれぞれの記録のアプローチ、記録への態度が浮き彫りになった。台湾の原住民族の権利回復運動をはじめ、多様な原住民の文化に対する政治的なまなごしの変遷等、映像を通して台湾の原住民文化をめぐる社会状況を学ぶことができたと同時に、先住民／原住民、マイノリティによるメディア実践と自文化の表象における世界各地の事例との比較から意見交換ができた点は大きな意義がある。

さらには、映画制作方法論、たとえば参加型、観察型のアプローチの狙いやその効果をめぐって等、映画制作者ならではの具体的な建設的な意見交換が行われ、記録映画の制作を志す者にとっては刺激的な場となった。

2日間を通して、台湾文化に興味を持つ一般の観客をはじめ、人類学の研究者や学生、ドキュメンタリー映画の関係者等が、招聘された各監督と密に交流を行う機会となった。本会をきっかけに、映像を通して台湾文化を学び議論する新たな企画が生まれ育っていくであろう。

参加人数

11月12日 国立民族学博物館講堂 148名

11月13日 国立民族学博物館講堂 69名

掲載紙情報

『万博記念公園だより』11月号

『サンケイリビング新聞』北摂中央版10月29日

『サンケイリビング新聞』北摂西版10月29日

『市報すいた』11月号

学術研究動向調査「文化人類学・民俗学分野に関する学術研究動向

——文化人類学における理論的研究の新しい展開——

委 託 者：日本学術振興会

担当教員：森 明子

実施期間：2016年4月1日～2017年3月31日

目的と概要

現代世界の文化人類学研究は、隣接分野と重なりながら展開していて、その輪郭はとらえにくい。本調査は、この状況で行われている研究のテーマやキーワードの傾向を明らかにし、また、学際研究がどのような体制で行われているのか、明らかにすることを目的とした。

○テーマ、キーワードの傾向

近年の科研、共同研究、学会口頭発表のデータを整理した結果、テーマとしては、宗教・儀礼、移民・難民、生態、ネオリベラリズム・グローバル化が上位を占め、医療、開発、災害、モノ、ケア、身体が、これにつづいた。USAのレビュー誌でも、ほぼ同じ傾向がみられた。ただし、日本で多い宗教・儀礼はUSAで少なく、UKのジャーナルでは多い。最近年の傾向としては、USAの論文キーワードに、倫理、イスラム、ネオリベラリズム、国家、官僚制、公共、メディアが急増している。ここから、全体として移民、生態、開発など地球規模の現象がテーマ化する中で、政治、国家、公共を問い直す方向と、身体、倫理、モラルを問い直す方向があらわれていると考えられる。

○学際研究に関する訪問調査

- ・ビーレフェルト大学学際研究センター（ZiF）：2016/17年度は人類学と歴史学の学際プロジェクト「親族と政治」が展開している。5名のコアメンバーが1年間センターに常駐し、世界中から社会学や政治学を含む研究者を招聘して、ワークショップを連続開催している。ワークショップを通して、学際研究者ネットワークがつけられ、家族・親族研究の新しい展開もおこりつつある。
- ・ケルン大学グローバル・サウス研究センター（GSSC）：「南」の視点から、学際的、国際的なプロジェクトを推進するセンターで、現在、人類学者がリーダーをつとめるプロジェクトは、アフリカからアラブ首長国連合や中国

への移民現象を、学生の教育とリンクしながら研究している。

- ヨーロッパの民族誌博物館に、移民や異文化理解をテーマ化した、新しい動きが起きている。

民間などの研究助成金などによる研究活動

• 寄附金

順益台湾原住民博物館研究賛助金 ————— 順益台湾原住民博物館

総合的な「食文化データベース」構築へ向けた基礎的研究（三島海雲記念財団学術研究奨励金）

————— 公益財団法人 三島海雲記念財団

国立民族学博物館活動助成金 ————— 佐々木史郎

2-4 研究成果の公開

刊行物

●国立民族学博物館研究報告

41巻1号（2016年8月31日発行）

• 論文

レプリカの天女様のゆくえ——バリ島天女の舞トパン・レゴンにおける仮面の複製 ————— 吉田ゆか子

• 研究ノート

エチオピアの音楽職能集団アズマリの職能機能についての考察 ————— 川瀬 慈

• 資料

高齢認知症者のエイジング・イン・プレイスに向けた包摂的活動——アメリカ合衆国における「ブリッジ」のメモリーケアを中心に ————— 鈴木七美

41巻2号（2016年3月10日発行）

• 論文

Nominal Echo-Formations in Northern Pakistan ————— Noboru Yoshioka

• 研究ノート

敦煌莫高窟の西魏代における石窟空間構成——千仏図の描写設計を中心として ————— 末森 薫

• 資料

Temporary Exhibition of Khachkars: The Story of Armenian Cross Stones ————— Gevorg Orbelyan

41巻3号（2016年3月21日発行）

• 論文

モノを通じた信仰——インド・メーワール地方の神霊信仰における身体感応的な宗教実践とその変容

————— 三尾 稔

• 研究ノート

資本主義批判としてのアート——オアハカ州のASAROを事例として ————— 山越英嗣

• 資料

Reconsidering of the Meaning of “Children Are Reared by Society as a Whole”:

Focusing on the Practices of Two Villages in Twentieth Century Japan ————— Yoko Taniguchi

41巻4号（2016年3月30日発行）

• 研究ノート

Materializing Memories of Disasters: Individual Experiences in Conflict Concerning Disaster Remains in the Affected Regions of the Great East Japan Earthquake and Tsunami ————— Isao Hayashi

本館展示の新構築とその心——40年ぶりの改変をおえて ————— 須藤健一

● Senri Ethnological Studies

No.93 (2016年8月31日発行)

Takako Yamada, Toko Fujimoto (eds.) *Migration and the Remaking of Ethnic/Micro-Regional Connectedness*.

No.94 (2016年12月7日発行)

Kazunobu Ikeya, Robert K. Hitchcock (eds.) *Hunter-Gatherers and their Neighbors in Asia, Africa, and South America*

● Senri Ethnological Reports (国立民族学博物館調査報告)

No.137 (2016年9月20日発行)

伊藤敦規編『伝統知、記憶、情報、イメージの再収集と共有——民族誌資料を用いた協働カタログ制作の課題と展望』

No.138 (2016年12月16日発行)

上羽陽子・中牧弘允・中山京子・藤原孝章・森茂岳雄編『学校と博物館でつくる国際理解教育のワークショップ』

No.139 (2017年2月22日発行)

飯田卓・朝倉敏夫編『財団法人日本民族学協会 附属民族学博物館 (保谷民博) 旧蔵資料の研究』

No.140 (2017年3月13日発行)

伊藤敦規編『国立民族学博物館収蔵「ホビ製」木彫人形資料熟覧——ソースコミュニティと博物館資料との「再会」1』

No.141 (2017年3月30日発行)

鈴木七美編『アーミッシュたちの生き方——エイジ・フレンドリー・コミュニティの探求』

● 民博通信

No.153 (2016年6月30日発行)

評論・展望 無形文化遺産の継承における「オーセンティックな変更・変容」 飯田 卓

No.154 (2016年9月30日発行)

評論・展望 新たな民博の研究に向けて 西尾哲夫・池谷和信・野林厚志

No.155 (2016年12月26日発行)

評論・展望 手話言語学が拓くコトバの研究の未来 菊澤律子

No.156 (2017年3月25日発行)

評論・展望 北東アジア地域研究の新しい地平——人やものの移動からみた自然・文化・文明 池谷和信

● 研究年報2015 (2017年2月15日発行)

● 外部出版

Naoko Sonoda (ed.) *New Horizons for Asian Museums and Museology*. Springer Singapore (2016年7月21日刊行)

岸上伸啓編『贈与論再考——人間はなぜ他者に与えるのか』臨川書店 (2016年7月31日刊行)

西尾哲夫・水野信男変『中東世界の音楽文化——うまれかわる伝統』スタイルノート (2016年9月28日刊行)

Akira Saito y Claudia Rosas Lauro (eds.) *Reducciones: la concentración forzada de las poblaciones indígenas en el Virreinato del Perú*. 教皇庁立ペルーカトリカ大学出版会 (2017年2月28日刊行)

池谷和信編『狩猟採集民からみた地球環境史——自然・隣人・文明との共生』東京大学出版会 (2017年3月21日刊行)

信田敏宏・宇田川妙子・白川千尋編『グローバル支援の人類学——変貌するNGO・市民活動の現場から』昭和堂
(2017年3月31日刊行)

●共同研究の成果

廣瀬浩二郎編著『ひとが優しい博物館——ユニバーサル・ミュージアムの新展開』青弓社、2016年。

*共同研究「触文化に関する人類学的研究——博物館を活用した“手学問”理論の構築」(2012～2014年度)

池谷和信編『狩猟採集民からみた地球環境史——自然・隣人・文明との共生』東京大学出版会、2017年。

*共同研究「熱帯の『狩猟採集民』に関する環境史的研究——アジア・アフリカ・南アメリカの比較から」(2012～2014年度)

古谷嘉章・關 雄二・佐々木重洋編『物質性の人類学——世界は物質の流れの中にある』同成社、2017年。

*共同研究「物質性の人類学(物性・感覚性・存在論を焦点として)」(2011～2014年度)

信田敏宏・宇田川妙子・白川千尋編『グローバル支援の人類学——変貌するNGO・市民活動の現場から』昭和堂、2017年。

*共同研究「NGO活動の現場に関する人類学的研究——グローバル支援の時代における新たな関係性への視座」(2011～2014年度)

国立民族学博物館学術情報リポジトリ

「みんぱくりポジトリ」は、一般公開後7年が経過し、リポジトリシステムをJAIRO Cloud(共用リポジトリサービス)に移行後1年以上たったが、順調に登録・公開を進めている。

2017年3月末時点で公開コンテンツ数は4,458件である。2016年度に新しく公開したコンテンツ数は253件であった。月平均ダウンロード数は17,691回と広く利用に供されている。

2016年7月に「国立民族学博物館学術情報リポジトリ運用指針」を見直し、研究成果の出版として館内出版物の『民博通信』を2017年度から恒常的に登録すること、職員は館内出版物に関して著作物利用許諾書を一度提出するのみとする包括同意を行うことを決定した。また、英文による論文検索を充実させるため、既にリポジトリに登録されている『国立民族学博物館研究報告』掲載の論文について「タイトル」「著者名」等に英語表記をつける作業を行う計画を立てている。

学術講演会

●みんぱく公開講演会

「私たち人類はどこへ行くのか? スイカで踊る、クジラを祭る——生き物と人 共生の風景」

実施日 2016年11月10日

場 所 日経ホール(東京)

共 催 日本経済新聞社

参加者 402人

講演1 「生き物の地球から人間中心の世界へ」

講 師 遠藤秀紀(東京大学総合研究博物館教授、作家)

内 容 地球の歴史にとある時間感覚を持ち込もう。大ざっぱに言って過去5億年が多様な生き物たちの生きてきた時間だ。他方で、人類は二本足で歩き出して500万年。ホモ・サピエンスは20万年。家畜を手にして1万年。文明などたかだか5000年である。一瞬にして傲慢なまでに支配者面を振る舞うに至ったこの生き物の正体は何か、考えてみた。

講演2 「現代文明からみた生き物——クジラなどの野生動物の利用と保護をめぐる」

講 師 岸上伸啓

内 容 人類は地球環境の中で生き抜くために、クジラやアザラシなど野生生物を食料や道具の原材料として利用してきた。ところが21世紀以降の文明社会では人類と野生生物の関係が、利用から保護へと大きく変わりつつある。クジラやアザラシなど野生生物の利用と保護の事例に基づいて人類と生き物の共生のあ

り方について考えた。

講演3 「野生と文化からみた生き物——栽培化や家畜化が変えた野生の風景」

講師 池谷和信

内容 野生スイカは、数千年前にアフリカで栽培化されてその後世界中に広まった。そして現在、育種が進められ種が産業化され文明のスイカになった。一方で現在、アフリカスイカのアミノ酸（シトルリン）が健康のために注目されている。野生、文化、文明と展開する人類の社会進化の考え方は正しいのか。家畜や栽培植物の利用と保護に焦点を当てて考えた。

パネルディスカッション

遠藤秀紀×岸上伸啓×池谷和信

司会 野林厚志

内容 1980年代以降、地球温暖化や生物多様性の喪失など、世界的に環境問題が注目されてきた。一方で私たちは、文明のなかにどっぷりとつかって経済中心の生活を送り、自然との関係の破綻、食糧の供給不足、心の問題などがかかえている。ここでは、生き物と人との新しいかかわり方を紹介することとおして、21世紀に直面している生き物・人関係をめぐる諸課題の現況とその未来について議論した。生き物の多様性は必要であるのか否か、保護と開発の両方の実現は可能であるのか、生き物と人の共生について考えた。

「恵みの水、^{めぐ}災いの水——川、湖、海」

実施日 2017年3月21日

場所 オーバルホール（大阪）

共催 毎日新聞社

参加者 238人

講演1 「東日本大震災から学ぶ——豊かな暮らしのために」

講師 竹沢尚一郎

内容 東日本大震災は三陸各地に甚大な被害をもたらしたが、この地域の人びとが生活の糧としてきたのは海の恵みであった。沿岸の縄文式遺跡の多くが津波の被害を受けていないという事実は、海のもたらす恵みと破壊が古くから理解されていたことを物語っている。海と共に生きるすべをどのように再発見していくか、さまざまな事例から考えた。

講演2 「『遠い水』『近い水』——琵琶湖から生存可能な関西を構想する」

講師 嘉田由紀子（びわこ成蹊スポーツ大学 学長）

内容 「水と人間のかかわり」を、琵琶湖を中心に、アメリカの五大湖周辺、ヨーロッパのレマン湖、アフリカのマラウイ湖などと比較研究。わかった事はかかわりの構図には三つの層：「自然」「文化」「文明」が重層化しているということだ。日本の自然・文化的に「近い水」が、文明的な「遠い水」になった今、改めて関西での「近い水」の再生を訴え、災害多発日本の生存可能性を提案した。

パネルディスカッション

竹沢尚一郎×嘉田由紀子

司会 池谷和信

内容 最近、異常気象などのために日本列島では、これまでにない地域での水害が多発している。同時に、夏場になると都市での水不足が生じることが多くなっている。私たちの暮らしのなかで、水とのかかわりは最も重要な課題の一つである。今回の会では、津波、水害、干ばつなどの水にかかわる災害への人の対応を研究および政策実践されてこられた講演者が、恵（めぐ）みの水、災（わざわ）いの水という視点から、人と水との多様なかかわりかたとこれからの課題を論じた。私たちにあって「本当の豊かな暮らしとは何か」について考える機会になったら幸いである。

2-5 学会開催

学会開催

2016年11月3日 非営利法人研究学会 NPO 法人部会

開催場所：国立民族学博物館

2016年12月3日～12月4日 第21回古代アメリカ学会研究大会・総会

開催場所：国立民族学博物館

2016年12月4日 第6回アジア食文化会議「食文化の交流——過去・現在・未来」

開催場所：立命館大学草津キャンパス

2017年2月19日 Colloquium “Thinking about care as social organization: A Discussion with T. Thelen and K. Buadaeng”

開催場所：国立民族学博物館

2-6 研究員制度

外来研究員

AH KEN ETEUATI Ailini (ア ケン エトゥアティ アイリニ) サモア 教育・スポーツ・文化省博物館上級スタッフ
研究課題：「博物館とコミュニティ開発」コース

ALFARAJAT Rami Mohammed Akeela (アルファラド ラミ モハメド アキーラ) ヨルダン ペトラ開発観光局 (PDTRA) 観光部広報担当

研究課題：「博物館とコミュニティ開発」コース

ARCE TORRES Emma Susana (アチェ トレス エマ スサナ) ペルー 文化省イカ州博物館館長

研究課題：「博物館とコミュニティ開発」コース

CARRILLO HERRERIAS Magdalena Sofia (カリリョ エレリアス マグダレナ ソフィア) メキシコ エクス・テレーザ国立現代美術センター副センター長

研究課題：「博物館とコミュニティ開発」コース

DAHL SHAYNE (ドール シェーン) カナダ トロント大学大学院人類学部博士課程

研究課題：東日本大震災発生以降の山岳宗教と巡礼——山形県出羽三山信仰をめぐって

ERTL, John (アートル ジョン) 米国 金沢大学外国語教育研究センター／国際文化資源学研究センター准教授

研究課題：考古学の民族誌——考古学的知識の多様な形成・利用・変成過程の研究

HASSANZADEH Yousef (ハッサンザデ ユセフ) イラン イラン国立博物館出版部部長

研究課題：「博物館とコミュニティ開発」コース

HEO MOON KYUNG 許 文卿 (ホ ムンキョン) 韓国 全州大学校文化観光研究所研究教授

研究課題：食と観光に関する研究——朝鮮半島を中心として

IBRAHIM Mariem Danial-boktor (イブラヒム マリエム ダニエルボクトール) エジプト エジプト考古庁コプト博物館教育部キュレイター

研究課題：「博物館とコミュニティ開発」コース

KIM Satbyul 金 セッピョル (キム セッピョル) 韓国 総合研究大学院大学文化科学研究科 博士後期課程単位修得退学/蘭田学園女子大学非常勤講師/関西大学非常勤講師/宮崎公立大学非常勤講師

研究課題：韓国における国家主導型の自然葬の形成に関する人類学的研究

KIM, Wolduk 金 月徳 (キム ウォルドク) 韓国 全北大学校人文大学国語国文学科非常勤講師

研究課題：民俗文化の解釈と変容についての談論の検討

KOBELYAN Khachatur (コベリアン ハチャトゥール) アルメニア セルゲイ・パラジャーノフ博物館展示普及部部長

研究課題：「博物館とコミュニティ開発」コース

KUNIK, Damien Benoit (クニク デミアン ベヌア) スイス ジュネーブ大学文学部東洋学科 専任助教

研究課題：日本とフランス文化圏における物質文化研究の比較史——過去・現在・未来

MANSOUR Mohammed (マンスール モハメド) パレスチナ 観光遺跡庁博物館部キュレーター

研究課題：「博物館とコミュニティ開発」コース

MARZEC AGNIESZKA (マジェッツ アグネシカ) ポーランド

研究課題：異文化接触場面におけるコミュニケーション・ストラテジー——在日外国人を中心に

MOSCO JAIMES Alejandra (モスコ ジェイムス アレハンドラ) メキシコ 国立保存・修復・博物館学学校博物館学大学院プログラム研究教授

研究課題：「博物館とコミュニティ開発」コース

RJOOB Jaber A. J. (ルジューブ ジャベル エイ ジェイ) パレスチナ 観光遺跡庁遺産保護部調査官 (Al Badd Museum 担当)

研究課題：「博物館とコミュニティ開発」コース

SAUCEDO SEGAMI Daniel Dante (サウセド セガミ ダニエル ダンテ) ペルー 日本学術振興会外国人特別研究員 (一般)

研究課題：現代ペルーにおける文化遺産の活用に関する文化人類学研究

SCHROEDER, Anja (シュローダー アニヤ) ドイツ カイザースラウテルン大学戦略マネジメント学科PD/日本学術振興会外国人特別研究員 (欧米短期)

研究課題：巨大災害の経験を生かしたリスク管理における空間マネジメント

SIHACHAK Vilayvanh (シハチャク ヴィライヴァン) ラオス ラオス情報文化観光省ラオス国立博物館副館長

研究課題：「博物館とコミュニティ開発」コース

SOLIMAN Fatma Ahmed (ソリマン ファトマ アハメド) エジプト エジプト考古庁大エジプト博物館 (GEM) 教育センター・子供博物館キュレーター/ツタンカーメン王展示担当メンバー

研究課題：「博物館とコミュニティ開発」コース

SU RI NA 苏日娜 (ソリナー) 中国 中央民族大学蒙古语言文学系博士後期課程

研究課題：内モンゴル草原遊牧文化の変遷とその背景分析——梅棹忠夫の調査から見る内モンゴル遊牧文化の70年

SUN NA 孫 娜 (ソン ナ) 中国 厦門大学人文学院人類学と民族学科博士後期課程

研究課題：中日漢語の対照研究と歴史研究

TANG SHAOLING 湯 紹玲 (トウ ショウレイ) 中国

研究課題：日本の盆行事と中国の中元節の比較研究

Wu Tianyue 吳 天躍 (ゴ テンヤク) 中国 中国中央美术学院人文学院博士院生

研究課題：仏教的文化遺産保護に関する日中比較研究——景観人類学の視点から

YAMADA, Naomi 山田 ナオミ (やまだ なおみ) 米国 中央大学総合政策学部非常勤講師

研究課題：中国の教育現場における民族起源の表象に関する教育人類学的研究

Yimin 伊敏 (イミン) 中国 滋賀県立大学大学院人間文化科学研究科博士後期課程単位取得退学

研究課題：中国における少数民族言語地名の漢字表記にみる歴史と文化——内モンゴル地域におけるモンゴル語と満洲語の地名を中心に

ZHAO Furong 趙 芙蓉 (チョウ フヨウ) 中国

研究課題：中央・北アジア展示の電子ガイドコンテンツの製作——モンゴル地域の宗教文化を中心に

ZONG Xiaolian 宗 曉蓮 (ソウ ギョウレン) 中国 福岡女子大学国際文理学部非常勤講師

研究課題：中国雲南省麗江市における「世界遺産テーマパーク」開園以降の文化の資源化をめぐる研究

相島 葉月 (あいしま はつき) 日本 マンチェスター大学人文学部・講師 (現代イスラーム)

研究課題：現代エジプトのオルタナティブ・モダニティとしての空手実践に関する社会人類学的研究

荒田 恵 (あらた めぐみ) 日本 関西大学政策創造学部非常勤講師

研究課題：アンデス形成期の祭祀遺跡における工芸品製作

安念 真衣子 (あんねん まいこ) 日本 日本学術振興会特別研究員

研究課題：ネパールにおける教育の市場化と生活世界の変容——貧困層の親族・移動・暴力に着目して

飯田 淳子 (いいだ じゅんこ) 日本 川崎医療福祉大学医療福祉学部准教授

研究課題：医療者向け医療人類学教育の検討——保健医療福祉専門職との協働

市野澤 潤平 (いちのざわ じゅんぺい) 日本 宮城学院女子大学学芸学部准教授

研究課題：確率的事象と不確実性の人類学——「リスク社会」化に抗する世界像の描出

伊藤 渚 (いとう なぎさ) 日本 総合研究大学院大学文化科学研究科博士後期課程単位修得退学

研究課題：ラオス北部サムヌア・サムタイ地方の女性による織りとその変容

伊東 未来 (いとう みく) 日本 大阪大学人間科学部非常勤講師／関西大学社会学部非常勤講師／龍谷大学社会学部非常勤講師／摂南大学外国語学部非常勤講師

研究課題：西アフリカにおける交易都市の歴史人類学的研究

井家 晴子 (いのいえ はるこ) 日本 アムステルダム大学客員研究員

研究課題：妊娠・出産の異常とその対処法に関する文化間比較研究

今中 崇文 (いまなか たかふみ) 日本 大阪人間科学大学人間科学部非常勤講師／摂南大学外国語学部・看護学部非常勤講師／佛教大学歴史学部非常勤講師

研究課題：中国陝西省西安市における回族の宗教指導者の変遷をめぐる人類学的研究

浮ヶ谷 幸代 (うきがや さちよ) 日本 相模女子大学人間社会学部教授

研究課題：現代日本における「看取り文化」の再構築に関する人類学的研究

- 宇田川 彩（うだがわ あや）日本 東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位修得退学
研究課題：アルゼンチンとイスラエルを中心としたユダヤ人類学の展開
- 内田 修一（うちだ しゅういち）日本 総合研究大学院大学文化科学研究科博士後期課程単位修得退学
研究課題：都市的環境におけるソングイの精霊憑依の実践
- 梅津 綾子（うめつ あやこ）日本 南山大学人類学研究所非常勤研究員
研究課題：親子・家族概念の再考——ナイジェリアの里親養育と日本のセクシュアル・マイノリティの家族を事例に
- 大石 高典（おおいし たかのり）日本 東京外国語大学世界言語社会教育センター特任講師
研究課題：消費からみた狩猟研究の新展開——野生獣肉の流通と食文化をめぐる応用人類学的研究
- 太田 好信（おおた よしのぶ）日本 九州大学大学院比較社会文化研究院教授
研究課題：政治的分類——被支配者の視点からエスニシティ・人種を再考する
- 大場 千景（おおば ちかげ）日本 日本学術振興会特別研究員 PD（大阪府立大学）
研究課題：南北エチオピア、ライヤにおける社会変動と歴史認識の動態
- 岡田 朋子（おかだ ともこ）日本 筑波大学大学院人文社会科学研究科歴史・人類学専攻一貫制博士課程修了
研究課題：インドにおける名づけと名乗りに関する人類学的研究
- 岡田 浩樹（おかだ ひろき）日本 神戸大学大学院国際文化学研究科准教授
研究課題：宇宙開発に関する文化人類学からの接近
- 岡本 尚子（おかもと なおこ）日本 国際基督教大学高等学校教務員
研究課題：『千一夜物語』仏語訳者マルドリユス再考——〈遺贈コレクション〉の分析を中心に
- 奥村 京子（おくむら きょうこ）日本 大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学
研究課題：1980年代以降のジェルジ・リゲティ作品における異文化表象
- 小尾 淳（おび じゅん）日本 大東文化大学国際関係学部研究補助員
研究課題：インドの宗教歌謡「キールタン」の環流とソーシャルメディアの役割
- 鏡味 治也（かがみ はるや）日本 金沢大学人間社会研究域人間科学系教授
研究課題：生活用品から見たライフスタイルの近代化とその国別差異の研究
- 金田 純平（かねだ じゅんぺい）日本 神戸大学大学院国際文化学研究科非常勤講師
研究課題：笑い話に注目した日本語ナラティブの「型」と「技」の地域比較
- 金谷 美和（かねたに みわ）日本 京都大学地球環境学堂三才学林研究員／大阪芸術大学芸術学部非常勤講師
研究課題：インド災害後のローカル文化再編におけるコミュニティ資源としての「手工芸」の意義
- 川田 牧人（かわだ まきと）日本 成城大学文芸学部教授
研究課題：呪術的实践＝知の現代的位相——他の諸実践＝知との関係性に着目して
- 神田 每実（かんだ つねみ）日本 愛知県立芸術大学美術学部教授
研究課題：造形美術様式と風土の関係
- 工藤 由美（くどう ゆみ）日本 東邦大学看護学部看護学科非常勤講師
研究課題：チリの先住民マプーチェによる文化復興運動に関する人類学的研究

- 窪田 幸子（くぼた さちこ）日本 神戸大学大学院国際文化科学研究科教授
研究課題：表象のポリティックス-グローバル世界における先住民／少数者を焦点に
- 児玉 茂昭（こだま しげあき）日本 アジア太平洋無形文化遺産研究センターアソシエイトフェロー
研究課題：学術コーディネートを通してみる手話の言語性と手話話者の当事者性への理解
- 呉屋 淳子（ごや じゅんこ）日本 山形大学教育開発連携支援センター講師
研究課題：高等教育機関における伝統芸能の教授に関する研究
- 是澤 博昭（これさわ ひろあき）日本 大妻女子大学家政学部准教授
研究課題：モノにみる近代日本の子どもの文化と社会の総合的研究——国立民族学博物館所蔵多田コレクションを中心に
- 近藤 宏（こんどう ひろし）日本 立命館大学衣笠総合研究機構専門研究員
研究課題：20世紀における南米低地地域の人類学の発展と先住民権の展開
- 齋藤 剛（さいとう つよし）日本 神戸大学国際文化科学研究科准教授
研究課題：個-世界論：中東から広がる移動と遭遇のダイナミズム
- 杉島 敬志（すぎしま たかし）日本 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授
研究課題：エージェンシーの定立と作用——コミュニケーションから構想する次世代人類学の展望
- 杉本 敦（すぎもと あつし）日本 東北学院大学文学部・法学部非常勤講師／盛岡大学文学部非常勤講師
研究課題：EU農政下におけるルーマニア牧畜の再編に関する文化人類学的研究
- 鈴木 博之（すずき ひろゆき）日本 Laboratoire Parole et Langage (CNRS) PD 非常勤研究員
研究課題：言語多様性の記述を通して見る中国雲南省チベット語の方言形成の研究
- 高橋 晴子（たかはし はるこ）日本 大阪大学コミュニケーションデザイン・センター招へい教授
研究課題：服装・身装文化デジタルアーカイブ
- 高村 美也子（たかむら みやこ）日本 南山大学人類学研究所非常勤研究員
研究課題：スワヒリ地域におけるヤシ科植物の利用についての環境人類学的研究
- 田中 鉄也（たなか てつや）日本 関西大学大学院文学研究科博士課程後期課程修了
研究課題：現代インドにおける公益信託と信仰に基づいた市民活動の政治学
- 玉山 ともよ（たまやま ともよ）日本 南山大学人類学研究所非常勤研究員
研究課題：北米先住民族聖地での地下資源開発をめぐる国際的な「協働」のありかたについての研究
- 辻 輝之（つじ てるゆき）日本 The University of the West Indies Visiting Fellow
研究課題：多宗教共存とエスニシティ共生——旧英領カリブ社会における民族紛争抑制のメカニズム
- 辻本 香子（つじもと きょうこ）日本 総合研究大学院大学文化科学研究科博士後期課程単位修得退学
研究課題：東アジア地域におけるリズム楽器を使用したパフォーマンスの研究
- 中田 梓音（なかた しおん）日本 総合研究大学院大学文化科学研究科博士後期課程単位修得退学
研究課題：対人関係の構築過程における言語コミュニケーション研究

長谷 千代子（ながたに ちよこ）日本 九州大学大学院比較社会文化研究院講師

研究課題：宗教人類学の再創造——滲出する宗教性と現代社会

中野 歩美（なかの あゆみ）日本 関西学院大学大学院社会学研究科博士課程単位修得満期退学

研究課題：インド・タール砂漠地域における定住後の移動民に関する人類学的研究

中原 聖乃（なかはら さとえ）日本 中京大学社会科学研究所准教授

研究課題：放射線影響をめぐる「当事者性」に関する学際的研究

中村 真里絵（なかむら まりえ）日本 岡山理科大学非常勤講師／四條畷学園短期大学 非常勤講師

研究課題：世界文化遺産バンチェン遺跡と地域社会——住民の生活史の視点から

中村 亮（なかむら りょう）日本 福井県里山里海湖研究所研究員

研究課題：インド洋西海域世界の比較研究：資源利用と管理にみる多民族共存と環境・生活影響評価

西本 太（にしもと ふとし）日本 長崎大学大学院国際健康開発研究科助教

研究課題：ラオス農村社会の人口変化に関する人類学研究

野澤 豊一（のざわ とよいち）日本 富山大学人文学部准教授

研究課題：音楽する身体間の相互作用を捉える：ミュージッキングの学際的研究

登 久希子（のほり くきこ）日本

研究課題：社会をつくる芸術——「ソーシャリー・エンゲイジド・アート」の人類学的研究

萩原 英子（はぎはら えいこ）日本 大阪芸術大学大学院芸術研究科博士課程（後期）修了

研究課題：喫茶文化にみられる和様化と日常性の研究

長谷川 清（はせがわ きよし）日本 文教大学文学部教授

研究課題：資源化される「歴史」——中国南部諸民族の分析から

比嘉 夏子（ひが なつこ）日本 京都中央看護保健大学校非常勤講師

研究課題：ふるまいの同期と社会空間の生成：オセアニアにおける相互行為プロセス

平田 晶子（ひらた あきこ）日本 日本学術振興会特別研究員（京都文教大学総合社会学部）

研究課題：身体技法をめぐる科学技術の利用に関する学際的研究

福岡 まどか（ふくおか まどか）日本 大阪大学大学院人間科学研究科准教授

研究課題：東南アジアのポピュラーカルチャー——アイデンティティ、国家、グローバル化

藤倉 康子（ふじくら やすこ）日本 The New School for Social Research (USA) Ph.D.

研究課題：ネパールにおける移動の記憶——共同体の再編と家族形態の変容

堀田 あゆみ（ほった あゆみ）日本

研究課題：モンゴル遊牧社会における情報の人類学的研究

松岡 格（まつおか ただす）日本 獨協大学国際教養学部准教授

研究課題：文化実践としての命名——台湾原住民族の姓名についての研究

松岡 葉月（まつおか はつき）日本

研究課題：全天候ドームスクリーンを活用した文理融合的アプローチによるデジタル科学映像の研究と教育普及

松田 有紀子（まつだ ゆきこ）日本 日本学術振興会特別研究員
研究課題：花街の担い手コミュニティの日常実践に関する歴史人類学的研究

松平 勇二（まつひら ゆうじ）日本 日本学術振興会特別研究員
研究課題：シヨナ音楽文化と憑依儀礼の政治・宗教人類学的研究

盛 恵子（もり けいこ）日本
研究課題：セネガル、ニアセン教団における境界の超越とアフリカ諸国への拡大の比較研究

森田 剛光（もりた たけみつ）日本
研究課題：滞日ネパール人の生活実践と労働動態の研究

矢野原 佑史（やのはら ゆうし）日本 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士後期課程単位修得退学
研究課題：知識・経験・想像の共有を目的とした映像人類学

山崎 浩平（やまざき こうへい）日本
研究課題：インド・ヒジュラ社会における共同性と移動の人類学研究

山本 文子（やまもと あやこ）日本 和歌山県立医科大学保健看護学部非常勤講師
研究課題：現代ミャンマー都市部における精霊信仰の民族誌的研究

吉江 貴文（よしえ たかふみ）日本 広島市立大学国際学部准教授
研究課題：近代ヒスパニック世界における文書ネットワーク・システムの成立と展開

吉村 健司（よしむら けんじ）日本 総合研究大学院大学文化科学研究科博士後期課程単位修得退学
研究課題：沖縄県本部町におけるカツオー一本釣漁の存立基盤と生産技術体制の変容

米山 知子（よねやま ともこ）日本
研究課題：マイノリティーの美的パフォーマンス実践の場としての映像——トルコのセマーを事例として

特別共同利用研究員

本館は、大学共同利用機関として研究活動を展開すると同時に、大学院教育の一環として、全国の国公立大学の博士後期課程に在籍する学生を、当該大学院生の所属する大学院研究科からの委託を受けて特別共同利用研究員として受け入れ、一定の期間、特定の研究課題に関して研究指導をおこなっている。

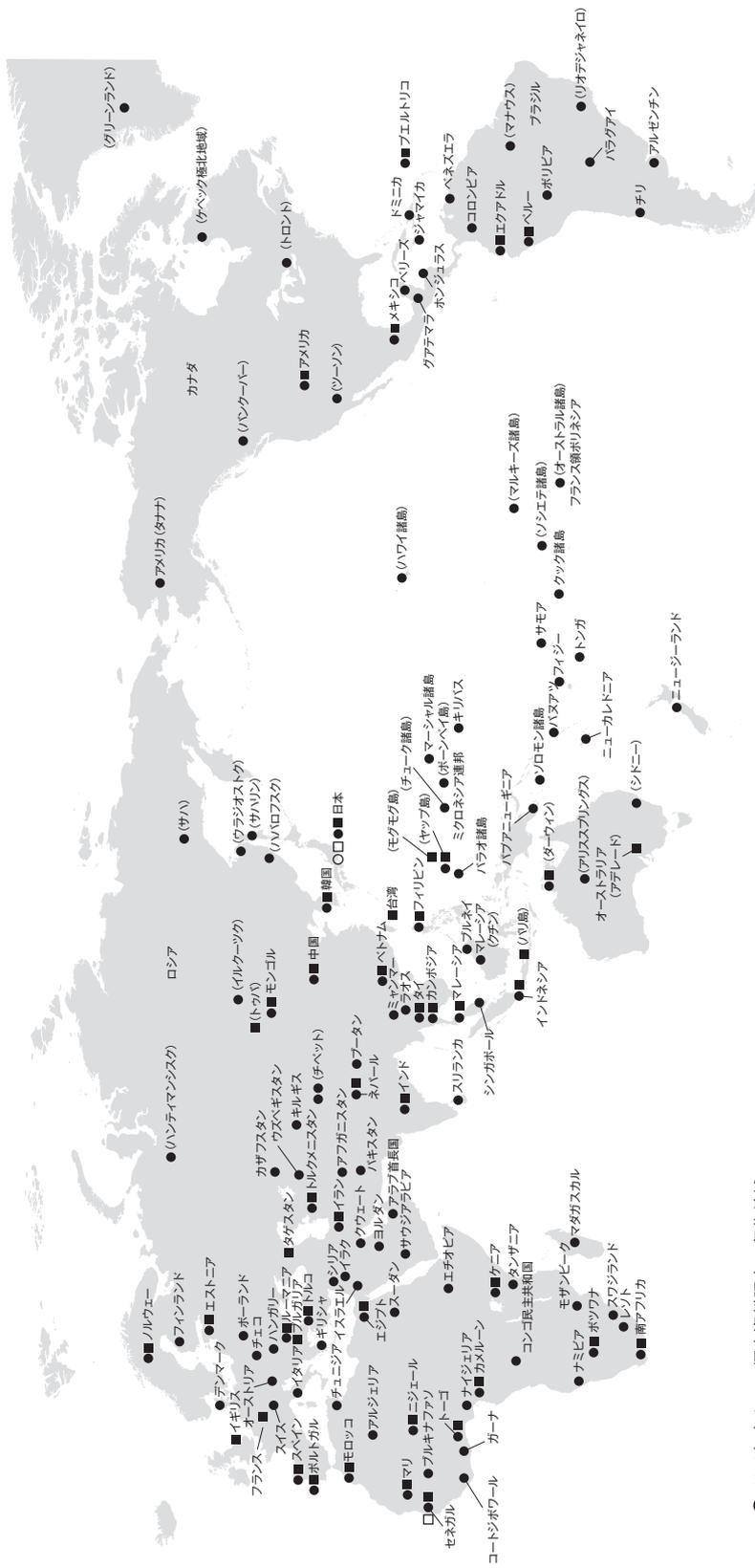
特別共同利用研究員は、各々の特定の研究課題に応じて指導教員から研究指導を受け、本館の諸施設を利用し研究を遂行するだけでなく、本館に設置されている、総合研究大学院大学文化科学研究科の講義を受けることができる。

2016年度は、国立大学2人、公立大学4人、計6人の大学院生を受け入れた。

2-7 データの利用

標本資料および映像音響資料に関するデータ

● 標本資料および映像取材地域



- 2016年度までの標本資料調査・収集地域
- 2017年度の標本資料調査・収集計画地域
- 2016年度までの映像取材地域
- 2017年度の映像取材計画地域

研究および
共同利用

●標本資料の収集・利用状況

• 2017年3月31日現在の収蔵資料数

海外資料／178,864点 (未登録資料含む) 国内資料／164,717点 (未登録資料含む) 総点数／343,581点 (未登録資料含む)

• 大学・博物館等への貸し出し

総点数／691点

●映像音響資料の収集・利用状況

• 取材

寺田吉孝 在日コリアン音楽の現状

埼玉県桶川市 (2016年12月9日)

川瀬 慈 地域社会の伝承歌の記録、継承、創造

岐阜県郡上市 (2016年6月4日～6月5日、6月10日～6月11日、8月27日～8月28日)、岐阜県揖斐郡 (2016年8月6日～8月7日、9月20日、11月16日)、岐阜県本巣市 (2016年11月15日)、徳島県三好市 (2016年10月10日～10月11日、11月27日～11月29日、2017年1月23日～1月24日、2月26日～2月28日)、岡山県倉敷市 (2016年10月9日)、愛知県名古屋市 (2017年3月6日～3月8日)

• 2017年3月現在の収蔵資料数

映像資料／8,168点 音響資料／62,651点 総点数／70,819点

• 資料の利用

利用総件数／121件 (内、大学38件) 資料利用総点数 542点 (内、大学205点)

館内利用など

利用件数／64件 資料利用点数／257点

特別利用 (館外での上映・試聴など)

利用件数／57件 資料利用点数／285点

文献図書資料の収集・整理・利用状況

●2016年度図書室の活動

1. 利用者サービス

- 1) 教員からの要望で研究に資するため、館内貸出冊数を制限なしと規定改正した。
- 2) 万博記念公園入園時間や博物館入館時間に鑑み、一般利用者の入室時間を16:30までと定めた。

2. 利用者講習会の開催——教育・研究支援

- 1) 外来研究員オリエンテーション
- 2) 総研大新入生ガイダンス
- 3) 博物館学コース (JICA) オリエンテーション
- 4) 国立国会図書館職員研修
- 5) 若手研究者奨励セミナー 等
*随時受付のツアーも、実施している。

3. 資料整備関係

- 1) 遡及入力を引き続き実施し、図書約1,700冊、雑誌174タイトル、マイクロ資料約5,570点 (北米学位論文約5,000点、新聞雑誌86タイトル570点) を登録した。図書の遡及入力はほぼ完了した。
- 2) 昨年度より5年計画で開始した蔵書実査 (4年目) として、書庫5層および書庫4層の一部、探究ひろばなどの別置図書も含め、234,915冊の蔵書実査を行った。
- 3) 研究の重要な情報源となり得るため、図書のカバー装備を開始した。

4. 施設整備

- 1) 厚みのあるブックエンドを薄型のL字ブックエンドと交換し、書庫狭隘化の軽減を行った。
- 2) 請求記号のインデックスを見直し、代本板からカードケース方式に変更してわかりやすい表示とするとともに、書庫狭隘化の軽減となった。
- 3) 蔵書の増加率に従い書庫3層の空きを見直し、今後の資料増加に備え、再配架を行った。

- 4) 書庫2・4・5層の電灯をLED化および人感センサーにした。
 5) マイクロリーダー本体1台および27インチ縦型モニター、A3対応プリンターを整備した。
 6) 書庫1層にてカビが発生したため資料の隔離、カビの除去および空気清浄機を設置し対処を行った。データロガーを3台置き、定期的に温湿度を測る体制を整えた。

5. 広報、社会貢献その他

- 1) 「みんぱく図書室ニュース」を月に一度発行し、図書室の情報提供を行った。
 2) 中学生の職場体験学習受入れ。
 箕面市立止々呂美中学校 (2016年10月19日 2年生男子1名)
 茨木市立豊川中学校 (2016年11月9日 2年生男子1名)
 箕面市立第一中学校 (2016年11月18日 2年生男子2名)

●2016年度新規受入数

日本語図書	2,233点	外国語図書	2,149点		
AV資料他	50点	製本雑誌	659点	合計	5,091点

●2016年3月末現在の収蔵図書数

日本語図書	270,944点	外国語図書	399,113点	合計	670,057点
日本語雑誌	10,114種	外国語雑誌	6,913種	合計	17,027種
HRAF	385ファイル	HRAF原典(テキスト)	7,141冊		

●利用状況(2016年度)

入室者	全体	11,113人
	館外者	1,659人
時間外入室者		130人
うち日曜、祝日		43人
貸出	図書	11,783冊
	雑誌	539冊
うち館外貸出図書		3,129冊
HRAF利用受付		7件 (カウンター受付件数)

文献複写	受付	国内(うち謝絶)	1,451(212)件
		国外(うち謝絶)	37(25)件
		来室*	4,213件
	依頼	国内	251(16)件
国外		4(0)件	
現物貸借	受付	国内	659(34)件
		国内	447(12)件
	依頼	国内	4(0)件
		国外	4(0)件
事項調査	受付	34件	

*うち大学等の機関1,380件

民族学資料共同利用窓口

本館の所蔵する民族学資料は多岐に渡り、館内外における諸分野の研究や教育、他の博物館への貸し付けなどを通して社会に還元し利用されるためには、各種問い合わせに効率よく対応する必要があった。そうした観点から、2006年度から「民族学資料共同利用窓口」が設置された。

2016年度の問い合わせ利用件数は、277件であった。

問い合わせ者別	(件)
教員(大学)	34
大学院生	7
大学生	5
教員(小・中・高)	6
学生(小・中・高)	2
博物館・美術館関係	19
図書館	6
教育・研究機関	2
マスコミ関係	9
会社・団体	45
一般	65
民博教職員	77
計	277

問い合わせ者の所属機関別	(件)	
公的機関	大学・大学図書館	47
	博物館・美術館	33
	小・中・高	9
	その他教育機関	0
	研究機関	1
	公共図書館	4
	地方公共団体	4
	各種団体	0
	民間	研究機関
会社	38	
団体	12	
個人	館外	65
	館内	63
	不明	0
計	277	

資料の利用目的

(件)

調査・研究	研究* ¹	72
	論文作成	7
	学習* ²	3
	図書館から	4
	授業で利用	44
	その他	34
	小計	164
館内利用	刊行物作成	1
	館の事業	11
	参考資料	1
	資料の複製	9
	小計	22

業務用	展示用	36
	番組制作	13
	出版物作製	19
	参考資料	15
	入手方法	2
	その他	0
	小計	85
その他	寄贈申出	4
	その他	2
	小計	6
合計		277

* 1 大学生以上の調査を「研究」とする

* 2 高校生以下の調査を「学習」とする

民族学研究アーカイブズの構築事業

本館には発足以来、民族学者の研究ノートや原稿、フィールドワークで生成、収集された映像・録音記録など、さまざまな資料が蓄積されている。2005年、民博創設30年を迎えるにあたり、民族学研究の拠点である本館が備えるべき機能の一つとして、アーカイブズ管理体制整備の必要性が検討され、かつ、これらの資料・情報を公開し、研究・教育での共同利用や社会還元に供してその価値を再認識しようと、「民族学研究アーカイブズ」の構築事業が開始された。

2007年度に、民族学研究アーカイブズ Home Page を立ち上げ、これまで青木文教、泉靖一、岩本公夫、梅棹忠夫、大内青琥、桂米之助、鹿野忠雄、菊沢季生、杉浦健一、土方久功、馬淵東一、及び「日本文化の地域類型研究会」アーカイブの資料目録の作成等を行い、その成果を順次公開している。

2016年度は、昨年度に引き続き資料の整理作業を行い、沖守弘・インド民族文化資料アーカイブの目録を Web 公開した。また、資料の受入れの流れについて現状に合うように整理検討を行った。

目録を公開し、利用に供しているアーカイブは13件である。2016年度の利用状況は閲覧29件、特別利用11件であった。

データベースの作成・利用状況

●館外公開しているデータベース

• 標本資料目録

本館が所蔵する標本資料（生業や生活、儀礼、製作技術にかかわる用具類など）の情報（画像あり）。ほぼすべての資料について、標本名、地域、民族、寸法・重量、受入年度などの基本情報を収録。

2015年度までの作成件数	279,540
2016年度の作成件数	3,735
2016年度のアクセス件数	61,072

• 標本資料詳細情報

本館が所蔵する標本資料（生業や生活、儀礼、製作技術にかかわる用具類など）の情報（画像あり）。標本名、現地名、訳名、収集地、使用地、使用民族、使用年代、用途・使用法、製作地、製作法・材料など、より詳しい情報を収録。

2015年度までの作成件数	61,578
2016年度の作成件数	6,441
2016年度のアクセス件数	7,077

• 標本資料記事索引

本館関連出版物から所蔵標本資料の解説部分を抽出し、その書誌事項を標本資料別に整理した情報。

2015年度までの作成件数	58,949
---------------	--------

- | | |
|---------------|-------|
| 2016年度の作成件数 | 1,524 |
| 2016年度のアクセス件数 | 2,888 |
- 韓国生活財

ソウルの李さん一家の生活財を網羅した情報。アパートの中にあったすべての物について、配置と入手方法、物にまつわる家族の思い出を記録（画像あり）。

2015年度までの作成件数	7,827
2016年度の作成件数	0
2016年度のアクセス件数	3,190
 - ジョージ・ブラウン・コレクション（日本語版、英語版）

宣教師であり神学博士でもあったジョージ・ブラウン氏が19世紀末から20世紀初頭にかけて南太平洋諸島で収集し、現在、本館に収蔵されている民族誌資料の基本情報（画像あり）。

2015年度までの作成件数	2,992
2016年度の作成件数	0
2016年度のアクセス件数	2,992
 - 映像資料目録

本館が所蔵する映画フィルム、ビデオテープ、DVD など映像資料の情報。

2015年度までの作成件数	8,009
2016年度の作成件数	159
2016年度のアクセス件数	5,348
 - ビデオテーク

本館展示場で提供しているビデオテーク番組の情報。番組をキーワードで検索したり、ビデオテークブースと同じメニューから探すことができる。

2015年度までの作成件数	740
2016年度の作成件数	27
2016年度のアクセス件数	5,555
 - 音楽・芸能の映像

本館が世界各地で取材したビデオ映像から、音楽演奏や芸能に関係する部分を、1曲または1テーマごとに抽出した動画データベース。映像は館内限定公開。

2015年度までの作成件数	849
2016年度の作成件数	0
2016年度のアクセス件数	302
 - 松尾三憲旧蔵絵葉書コレクション

松尾三憲（みのり）氏が、1919年から1923年までの海軍在職中に、訓練航海の途上訪れた現地で買い求めた絵葉書の情報（画像あり）。

2015年度までの作成件数	170
2016年度の作成件数	0
2016年度のアクセス件数	1,277
 - 京都大学学術調査隊写真コレクション

「京都大学カラコルム・ヒンズークシ学術探検隊」（1955年）、「京都大学探検部トンガ王国調査隊」（1960年）、「京都大学アフリカ学術調査隊」（1961年～1967年）、および「第二次京都大学ヨーロッパ学術調査隊」（1969年）が撮影した写真の情報（画像あり）。

2015年度までの作成件数	22,316
2016年度の作成件数	45
2016年度のアクセス件数	7,946
 - 西太平洋およびインドおよびを中心とする海洋民族写真資料——大島襄二写真コレクション

大島襄二氏が、1967年から1991年にかけてアジアやオセアニアなどの調査で撮影した写真の情報（画像あり）。

2015年度までの作成件数	—
2016年度の作成件数	7,889
2016年度のアクセス件数	—

• アフリカ カメルーン民族誌写真集——端信行コレクション

端信行本館名誉教授が1969年から90年代にかけて行った、おもにアフリカ カメルーン共和国の民族学的調査で撮影した写真の情報（画像あり）。

2015年度までの作成件数	—
2016年度の作成件数	6,530
2016年度のアクセス件数	—

• 沖守弘インド写真（日本語版、英語版）

沖守弘氏が1970年代後半から20年あまりにわたりインド全域で撮影した、宗教祭礼・民俗画・芸能・生活文化に関する写真の情報（画像あり）。

2015年度までの作成件数	—
2016年度の作成件数	20,125
2016年度のアクセス件数	5,678

• ネパール写真（日本語版、英語版）

「西北ネパール学術探検隊」（1958年）に参加した高山龍三氏（当時大阪市立大学大学院生）らがネパールで撮影した写真、および、同隊が収集し、現在本館に収蔵されている標本資料の情報（画像あり）。

2015年度までの作成件数	3,879
2016年度の作成件数	0
2016年度のアクセス件数	3,817

• 音響資料目録

本館が所蔵するレコード、CD、テープなど音響資料の情報。

2015年度までの作成件数	62,651
2016年度の作成件数	0
2016年度のアクセス件数	1,471

• 音響資料曲目

本館が所蔵する音響資料について、音楽の曲単位、昔話の一言単位で収録した情報。

2015年度までの作成件数	351,802
2016年度の作成件数	0
2016年度のアクセス件数	646

• 図書・雑誌目録

本館が所蔵する図書・雑誌資料（マイクロフィルムなどを含む）の書誌・所蔵情報。

2015年度までの作成件数	645,663
2016年度の作成件数	4,961
2016年度のアクセス件数	400,215

• 梅棹忠夫著作目録（1934～）

梅棹忠夫本館初代館長の論文・著書から本の帯の推薦文まで、あらゆる著作を網羅した目録情報。

2015年度までの作成件数	6,594
2016年度の作成件数	49
2016年度のアクセス件数	4,685

• 中西コレクション——世界の文字資料——

世界のさまざまな文字で書かれた図書・新聞・手稿・標本などの資料に関する分析情報と書誌情報、文字サンプルの画像。これらの資料は、中西印刷株式会社・故中西亮氏が世界各地で収集。

2015年度までの作成件数	2,729
2016年度の作成件数	0
2016年度のアクセス件数	43,977

• 吉川「シュメール語辞書」

吉川守氏（広島大学名誉教授）が40年ほどの年月をかけて完成させた、シュメール語の研究ノート。親字33,450語をキーワードに検索・閲覧できる。

2015年度までの作成件数	33,450語（40,596頁）
2016年度の作成件数	0
2016年度のアクセス件数	400

- Talking Dictionary of Khinina-ang Bontok (ボントック語音声画像辞書)

Lawrence A. Reid 氏 (ハワイ大学名誉教授) が編集した、フィリピン・ルソン島北部で話されるボントック語のギナン方言の辞書。語の派生関係、例文、音声・画像などのデータを結びつけたマルチメディア・データベース辞書。

2015年度までの作成件数	7,637
2016年度の作成件数	0
2016年度のアクセス件数	665

- 日本昔話資料 (稲田浩二コレクション)

稲田浩二氏 (当時京都女子大学教授) らのグループが、1967年から1978年にかけて日本各地29道府県で現地録音取材した日本昔話資料 (446本のテープ・約190時間) の情報 (音声あり)。音声は館内限定公開。

2015年度までの作成件数	3,696
2016年度の作成件数	0
2016年度のアクセス件数	1,332

- rGyalrongic Languages (ギャロン系諸語) [英語、中国語]

長野泰彦本館名誉教授と Marielle Prins 博士が編集した、中国四川省の西北部で話されるギャロン系諸語のデータベース (音声あり)。81の方言ないし言語それぞれについて、425または1200の語彙項目と200文例を収録している。

2015年度までの作成件数	39,826語 (文例: 15,706件)
2016年度の作成件数	0
2016年度のアクセス件数	8,378

- 衣服・アクセサリ

本館が所蔵する衣服標本資料とアクセサリ標本資料の詳細分析情報、および関連フィールド写真の情報 (画像あり)。

2015年度までの作成件数	25,237
2016年度の作成件数	1,302
2016年度のアクセス件数	23,140

- 身装文献

身装文化に関する雑誌記事、図書の索引情報。1) 服装関連日本語雑誌記事 (カレント)、2) 服装関連日本語雑誌記事 (戦前編)、3) 服装関連外国語雑誌記事、4) 服装関連日本語図書、5) 服装関連外国語民族誌で構成。

2015年度までの作成件数	170,115
2016年度の作成件数	3,271
2016年度のアクセス件数	12,759

- 近代日本の身装電子年表

洋装がまだ日本に定着していなかった1868年 (明治元年) から1945年 (昭和20年) の日本を対象とした身装関連の電子年表。「事件」と「現況」、「その年の情景」、「回顧」、テキスト画像で構成される。当時の新聞記事と身装関連雑誌から情報を収録。

2015年度までの作成件数	10,049
2016年度の作成件数	1,500
2016年度のアクセス件数	1,370

- 身装画像——近代日本の身装文化

和装と洋装が拮抗していた期間である1868年 (明治元年) から1945年 (昭和20年) までの日本を対象とした身装関連の画像データベース。当時の新聞小説挿絵、写真、図書中の図版、ポスターなどから画像を収録。

2015年度までの作成件数	—
2016年度の作成件数	5,108
2016年度のアクセス件数	16,104

- 館内で利用できるデータベース

- 標本資料詳細情報 (館内専用)

本館が所蔵する標本資料 (生業や生活、儀礼、製作技術にかかわる用具類など) の情報 (画像あり)。標本名、現地名、訳名、収集地、使用地、使用民族、使用年代、用途・使用法、製作地、製作法・材料など、より詳しい情報を収録。

2015年度までの作成件数	264,404
2016年度の作成件数	25
2016年度のアクセス件数	39,060

• **カナダ先住民版画**

本館が所蔵する代表的なカナダ先住民版画の基本情報と解説（画像あり）。特別展「自然のこえ 命のかたち——カナダ先住民の生み出す美」（2009年）の展示資料を中心に収録。

2015年度までの作成件数	158
2016年度の作成件数	0
2016年度のアクセス件数	93

• **音楽・芸能の映像**

本館が世界各地で取材したビデオ映像から、音楽演奏や芸能に関係する部分を、1曲または1テーマごとに抽出した動画データベース。

2015年度までの作成件数	849
2016年度の作成件数	0
2016年度のアクセス件数	102

• **3次元CGで見せる建築——東南アジア島嶼部の木造民家**

佐藤浩司本館准教授が1981年以来調査してきた東南アジア各地の木造建築物の情報。3次元CGで再現した民家を元に作成したgifアニメーションで、建築物内外を巡回して見ることができる。

2015年度までの作成件数	—
2016年度の作成件数	50
2016年度のアクセス件数	—

• **京都大学学術調査隊写真コレクション**

「京都大学カラコルム・ヒンズークシ学術探検隊」（1955年）、「京都大学探検部トンガ王国調査隊」（1960年）、「京都大学アフリカ学術調査隊」（1961年～1967年）、および「第二次京都大学ヨーロッパ学術調査隊」（1969年）が撮影した写真の情報（画像あり）。

2015年度までの作成件数	42,060
2016年度の作成件数	135
2016年度のアクセス件数	865

• **梅棹忠夫写真コレクション**

梅棹忠夫本館初代館長が、世界各地における調査研究活動の過程で撮影した写真の情報（画像あり）。

2015年度までの作成件数	35,420
2016年度の作成件数	61
2016年度のアクセス件数	1,018

• **オーストラリア・アボリジニ研究フィールド写真**

小山修三本館名誉教授が、1980年から2004年にかけて、オーストラリア・アボリジニ文化の調査で記録した、儀式から風景までの多彩な写真の情報（画像あり）。

2015年度までの作成件数	7,999
2016年度の作成件数	0
2016年度のアクセス件数	153

• **朝枝利男コレクション**

朝枝利男氏が1930年代にアメリカの学術調査団に数回にわたり同行し撮影した、南太平洋の人々や動植物の写真の情報（画像あり）。

2015年度までの作成件数	3,966
2016年度の作成件数	0
2016年度のアクセス件数	375

• **西太平洋およびインドを中心とする海洋民族写真資料——大島襄二写真コレクション**

大島襄二氏が、1967年から1991年にかけてアジアやオセアニアなどの調査で撮影した写真の情報（画像あり）。

2015年度までの作成件数	—
2016年度の作成件数	8,842

- | | |
|---------------|---|
| 2016年度のアクセス件数 | — |
|---------------|---|
- 沖守弘インド写真（日本語版）
沖守弘氏が1970年代後半から20年あまりにわたりインド全域で撮影した、宗教祭礼・民俗画・芸能・生活文化に関する写真の情報（画像あり。）

2015年度までの作成件数	—
2016年度の作成件数	20,274
2016年度のアクセス件数	396
 - 西北ネパール及びマナスル写真
「西北ネパール学術探検隊」（1958年～1959年）が撮影した写真の情報（画像あり）。一部に「日本山岳会第一次マナスル登山隊」（1953年）科学班の写真（推定）を含む。本館に移管された旧文部省史料館資料の一部。

2015年度までの作成件数	620
2016年度の作成件数	0
2016年度のアクセス件数	44
 - タイ民族誌映像——精霊ダンス——
田邊繁治本館名誉教授が調査したタイの精霊ダンスの写真情報（画像付き）。精霊ダンスの系統、開催地域、祭主から写真群を閲覧できる。写真は調査報告（タイ語）とも関連づけられている。

2015年度までの作成件数	10,082
2016年度の作成件数	0
2016年度のアクセス件数	33
 - 東南アジア稲作民族文化総合調査団写真
日本民族学協会が1957年から1964年にかけて三次にわたり東南アジアに派遣した調査団のうち、第一次調査団（1957年）と第二次調査団（1960年）が記録した写真の情報（画像あり）。

2015年度までの作成件数	4,393
2016年度の作成件数	0
2016年度のアクセス件数	105
 - 日本昔話資料（稲田コレクション）
稲田浩二氏（当時京都女子大学教授）らのグループが、1967年から1978年にかけて日本各地29道府県で現地録音取材した日本昔話資料（446本のテープ・約190時間）の情報（音声あり）。

2015年度までの作成件数	3,696
2016年度の作成件数	0
2016年度のアクセス件数	67
 - 国内資料調査報告集
日本国内における、1）民具などの標本資料類の所在、2）伝統技術伝承者の所在、3）民族・民俗映像記録の所在、4）民族・民俗関係出版物の所在、に関する情報。本館が委嘱した国内資料調査委員による調査報告集（1980年～2003年）をデータベース化。

2015年度までの作成件数	21,373
2016年度の作成件数	0
2016年度のアクセス件数	31
- 2016年度に館外公開されたデータベース
 - 沖守弘インド写真（日本語版）（2016年4月28日公開）
 - 身装画像——近代日本の身装文化（2016年5月25日公開）
 - 沖守弘インド写真（英語版）（2017年3月29日公開）
 - アフリカ カメルーン民族誌写真集——端信行コレクション（2017年3月29日公開）
 - 西太平洋およびインド洋を中心とする海洋民族写真資料——大島襄二写真コレクション（2017年3月29日公開）
 - 2016年度に館内公開されたデータベース
 - 西太平洋およびインド洋を中心とする海洋民族写真資料——大島襄二写真コレクション（2017年2月24日公開）
 - 3次元CGで見せる建築——東南アジア島嶼部の木造民家（2017年3月24日公開）

2-8 みんなく施設の利用

博物館施設の利用状況

●国立民族学博物館（展示場）を利用した大学・研究機関等（50音順、カッコ内は人数）

愛知県立大学 (33)、アジュ大学 (22)、ECC 国際外語専門学校 (402)、上田安子服飾専門学校 (116)、追手門学院大学 (229)、大阪デザイン専門学校 (10)、大阪大谷大学 (76)、大阪学院大学 (68)、大阪観光大学 (7)、大阪教育大学 (136)、大阪経済法科大学 (26)、大阪芸術大学附属大阪美術専門学校 (14)、大阪芸術大学 (252)、大阪工業大学 (14)、大阪樟蔭女子大学 (15)、大阪成蹊大学 (51)、大阪総合デザイン専門学校 (158)、大阪体育大学 (5)、大阪大学 (179)、大阪デザイナー専門学校 (55)、大阪電気通信大学 (8)、大阪文化国際学校 (13)、大阪文化服装学院 (5)、大阪モード学園 (53)、大谷大学 (7)、岡山大学 (6)、岡山県立大学 (17)、沖縄県立芸術大学 (23)、金沢大学 (82)、関西大学 (130)、関西学院大学 (11)、岐阜女子大学 (53)、京都外国語大学 (62)、京都光華女子大学 (4)、京都嵯峨芸術大学短期大学部 (35)、京都産業大学 (16)、京都市立芸術大学 (166)、京都精華大学 (252)、京都造形芸術大学 (87)、京都橘大学 (148)、京都ノートルダム女子大学 (2)、京都府立大学 (27)、近畿大学 (17)、甲南大学 (169)、甲南女子大学 (36)、神戸大学 (133)、神戸芸術工科大学 (33)、神戸女学院大学 (49)、神戸女子大学 (126)、神戸親和女子大学 (14)、神戸山手大学 (2)、札幌大学 (23)、滋賀県立大学 (28)、滋賀大学 (4)、四天王寺大学 (15)、首都大学東京 (10)、杉野服飾大学 (30)、杉野服飾大学短期大学部 (39)、駿台観光&外語ビジネス専門学校 (15)、成安造形大学 (27)、成蹊大学 (9)、摂南大学 (154)、専修大学 (10)、専門学校アートカレッジ神戸 (12)、専門学校ルネサンス・デザインアカデミー (23)、千里金蘭大学 (45)、宝塚大学 (4)、タキイ研究農場付属園芸専門学校 (84)、帝塚山学院大学 (41)、帝塚山大学 (15)、東亜大学校 (22)、東京大学 (96)、東京芸術大学 (17)、同志社大学 (31)、東北学院大学 (60)、東北生活文化大学 (25)、獨協大学 (14)、ドレスメーカー学院 (107)、名古屋大学 (9)、奈良大学 (6)、奈良教育大学 (13)、奈良女子大学 (14)、日韓学生観光交流促進プロジェクト (40)、日本メディカル福祉専門学校 (20)、Bangkok University (21)、阪南大学 (33)、広島女学院大学 (17)、広島大学 (22)、福井大学 (5)、佛教大学 (7)、文化服装学院 (60)、北海道教育大学 (3)、宮城学院女子大学 (5)、桃山学院大学 (12)、大和大学 (93)、立命館大学 (5)、龍谷大学 (285)、LAKELAND UNIVERSITY JAPAN (16)

*注 利用申請手続きを行った大学・研究機関等

●来館目的（アンケート回答より、順不同抜粋）

- ・ 新入生の研修
- ・ 学生が個人的に鑑賞しに行くことが少なく「博物館」にふれることもほとんどないため
- ・ 世界中から集められた器物を間近で見ることができるため
- ・ 本校1回生の授業課題にて、各学生のこだわりの道具を制作するにあたり、様々な機能やかたち、素材を備えた道具をたくさん鑑賞できる場所だと考えたため
- ・ 多様な文化コンテンツを展示しているので、異文化をよりわかりやすく理解することができると思ったから
- ・ 民族学・文化人類学という他館と異なる専門分野、研究機関としての役割に重点をおく博物館施設の特色から
- ・ アジアに関する民族資料を多数所蔵しているため
- ・ 大学院のアジアンデザイン授業
- ・ 世界の民族や地域の文化に触れ、また今後の研究活動で利用してほしいと思ったため
- ・ 地域のことを魅力的に展示している一番良い事例となるから
- ・ 様々な文化の中で生まれた色や模様、形を観察し、その中から生徒の気になるものを見つける
- ・ 学芸員課程の履修者を対象にした学外見学実習
- ・ 展示方法をはじめ、コレクションの内容や運営理念等が独創的であり、一般的な美術館、博物館との比較に有効
- ・ 博物館実習の授業の一環
- ・ 異文化表象をテーマとしたゼミ
- ・ 学部生が文化人類学について考えるいい機会になると考えたため
- ・ 国内最大級の規模をもち、豊富な実物資料と映像資料を公開する博物館の活動の実際を学ぶため
- ・ 民族学資料と展示方法の調査
- ・ フィールドワークに根ざした研究を奨励している科目において、関西方面でのゼミ旅行のプログラムの一環として取り入れた
- ・ ギャラリーが十分に広く、かつセミナー室も使える
- ・ 近いということとキャンパスメンバーズなので

- ・授業（コース）内容と、民博の展示場のあり方（展示方法・方針、リニューアルとその背景など）が密接に関係していたから
- ・映像資料を含む数多くの民族誌資料が多いため

●国立民族学博物館キャンパスメンバーズ利用実績（カッコ内は人数）

大阪大学、京都文教学園大学・短期大学、同志社大学文化情報学部・文化情報学研究科、千里金蘭大学、学校法人立命館、学校法人塚本学院（2,503）

施設の整備状況

博物館施設の整備状況

1) 障害を有する来館者等への配慮についての取組状況

- ・講堂1階に身障者の方が安心して利用できる多目的トイレを設置し、オストメイトやベビーベッド、フィッティングボードも設置した。
- ・講堂舞台に、車いすの方でも登壇できるように、移動式の段差昇降機を設置した。

2) 既存施設・設備の有効活用への取組状況

- ・施設の有効利用及び適切な管理のための施策の検討を行うために、施設マネジメント委員会を2016年度は10回開催した。

3) 施設の維持管理の取組状況

- ・防災設備の誘導灯設備や自火報設備、非常放送設備、ガス消火設備等の経年による老朽修繕改修や現行法に適合させるための改修を行った。また、展示場にカメラ及びスプリンクラーの補助散水栓を増設し、防災設備の強化を行った。
- ・電波の届かないエリアでの作業時の緊急連絡手段としてPHS設備を導入した。
- ・本館3階の廊下の床材が経年により劣化していたため、張替を実施した。
- ・代表電話番号に自動応答設備（音声案内）を導入した。
- ・衛生的環境を確保するため、2016年度も館内害虫駆除を行った。
- ・自主点検及び保全業務の報告書に基づいて、予防保全・不良箇所を含めて計画的に改修計画を推進し、修繕経費の抑制を図った。
- ・安全対策として、館内（展示場・収蔵庫除く）の状況調査を行い、防災管理点検、安全巡視点検の結果と照合し、危険箇所の改善を行った。

4) 省エネルギー対策等や地球温暖化対策に対する取組状況

- ・昨年に引き続き、夏季及び冬季における省エネルギーへの取組について館内に周知した。
- ・書庫の4層、5層や収蔵庫等の点灯時間が長い場所の照明器具をLEDタイプに更新し、省エネルギー化に努めた。
- ・誘導灯についてLEDタイプに更新し、省エネルギー化に努めた。

2-9 受賞・特許

受賞

●2016年度の職員受賞者

日高真吾	2016年6月26日	第10回文化財保存修復学会業績賞
關雄二	2016年7月20日	外務大臣表彰
小長谷有紀	2016年11月3日	第3回ゆとりぎ賞

知的財産形成・特許出願など

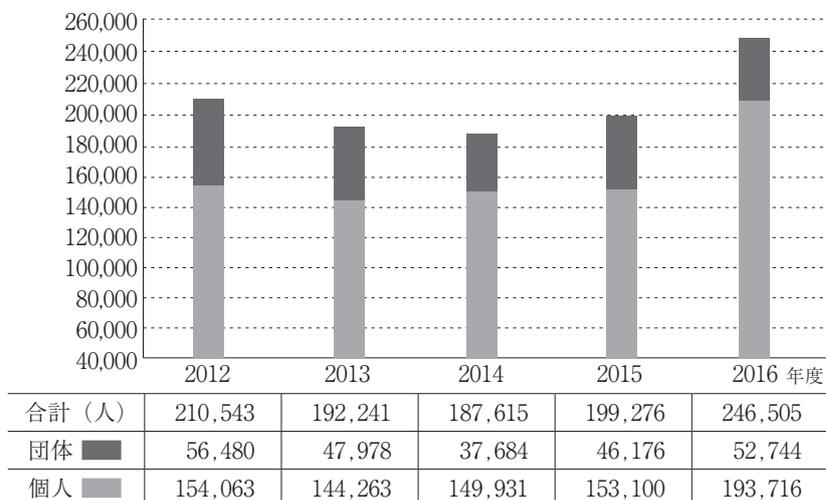
2016年度 なし

3 展示

入館者数

●2016年度総観覧者数（共催展、巡回展含む） 328,252人

●入館者数（5年間。共催展、巡回展除く）



本館展示

●展示専門部会

本館展示新構築にかかわる支援・連絡調整と本館展示の運営にかかわる連絡調整をおこなう組織として、文化資源運営会議のもとに展示専門部会を置く。同部会は本館展示プロジェクトチームリーダーで構成する。なお、展示専門部会の下に、特別展・企画展の実施内容の点検支援をおこなう組織として、特別展・企画展ワーキングを置く。

●本館展示プロジェクトチーム

	代表者	構成メンバー					(五十音順)
オセアニア展示	Peter J. Matthews	印東道子	菊澤律子	須藤健一	丹羽典生	林 勲男	
アメリカ展示	伊藤敦規	岸上伸啓 關 雄二	齋藤 晃 八木百合子*	齋藤玲子	鈴木七美	鈴木 紀	
ヨーロッパ展示	宇田川妙子	新免光比呂	森 明子				
アフリカ展示	三島禎子	飯田 卓	池谷和信	川瀬 慈	竹沢尚一郎	吉田憲司	
西アジア展示	山中由里子	相島葉月	上羽陽子	菅瀬晶子	西尾哲夫		
音楽展示	福岡正太	川瀬 慈	笹原亮二	寺田吉孝			
言語展示	菊澤律子	西尾哲夫	吉岡 乾	相良啓子*			
南アジア展示	三尾 稔	上羽陽子 南 真木人	竹村嘉晃* 吉岡 乾	寺田吉孝	中川加奈子*	松尾瑞穂	
東南アジア展示	信田敏宏	樫永真佐夫	佐藤浩司	平井京之介	福岡正太		
中央・北アジア展示	藤本透子	池谷和信	辛嶋博善*	小長谷有紀*	寺村裕史		
東アジア展示（朝鮮半島の文化）	太田心平	林 史樹*					
東アジア展示（中国地域の文化）	横山廣子	河合洋尚 小長谷有紀*	韓 敏 陳 天璽*	塚田誠之	野林厚志	卯田宗平	
東アジア展示（アイヌの文化）	齋藤玲子	伊藤敦規	岸上伸啓	北原次郎太*	吉田憲司		
東アジア展示（日本の文化）	日高真吾	池谷和信 寺村裕史	卯田宗平 野林厚志	笹原亮二 廣瀬浩二郎	菅瀬晶子 南 真木人	出口正之	
情報・インフォメーション	丸川雄三	飯田 卓 福岡正太	伊藤敦規	寺村裕史	野林厚志	廣瀬浩二郎	
イントロダクション展示	日高真吾	山中由里子					

*併任教授、客員教員、特別客員教員、機関研究員等を示す

●展示総括チーム

日高真吾 山中由里子 平井康之（特別客員教員）

●特別展・企画展ワーキング

展示専門部会部会員2名（輪番制）、文化資源研究センター所属教員1名（輪番制）、文化資源研究センター長

●本館展示の新構築（展示チームは一般公開日現在）

アフリカ展示

一般公開 2009年3月26日～

アフリカ展示チームリーダー 飯田 卓

アフリカ展示チームメンバー（館内）池谷和信 川瀬 慈 竹沢尚一郎 三島禎子 吉田憲司

内容

人類誕生の地とされるアフリカは、常に外部世界と結びつきながら変化を重ねてきた。私たちが、現在目にするアフリカ大陸の中の、文化や言語の多様性は、そうした変化の結果にほかならない。新たに構築したアフリカ展示では、人びとの「歴史を掘り起こす」営みに目を向けるとともに、現在のアフリカに生きる人びとの生活のありさまを4つの「動詞」（憩う・働く・装う・祈る）のコーナーに分けて紹介する。

西アジア展示

一般公開 2009年3月26日～

西アジア展示チームリーダー 山中由里子

西アジア展示チームメンバー（館内）上羽陽子 菅瀬晶子 西尾哲夫

内容

中東ともよばれる西アジアの人びとは、自分たちが暮らす地域をマシュリク（日出ずる地）とよび、マグリブ（日没する地）と呼ばれる北アフリカと深い関係を保ってきた。乾燥地帯が大部分を占め、遊牧を生業とする人びとが移動する一方、バグダードやカイロなどでは古来より都市文化が栄えてきた。多くの住民はムスリムだが、ユダヤ教やキリスト教発祥の地でもある。新たに構築した西アジア展示では、地域規模の変動の時代に移りゆく人びとの暮らしを紹介する。

音楽展示

一般公開 2010年3月25日～

音楽展示チームリーダー 福岡正太

音楽展示チームメンバー（館内）川瀬 慈 笹原亮二 寺田吉孝

内容

私たち人類は、音や音楽によって意志や感情をつたえ、自分の位置を知り、訪れたことのない場所や過ぎ去った時に思いを馳せ、心を奮い立たせたり慰めたりしてきた。また、神仏や精霊など見ることのできない存在と交わってきた。この展示では、音や音楽と私たちの存在とのかかわりを、世界各地の「太鼓」、「ゴング」、「チャルメラ」、「ギター」等の例を通して考える。

言語展示

一般公開 2010年3月25日～

言語展示チームリーダー 庄司博史

言語展示チームメンバー（館内）菊澤律子 西尾哲夫 八杉佳穂

内容

音声や身ぶりを媒体とすることは、高度に発達した伝達手段で、感情から科学的な知識まで多くの情報を伝えることができる。文化の多様性を反映すると同時に、人間のもつ認知能力や創造性などを生みだすことは、人類のもつかけがえのない資産である。言語展示では、「言葉を構成する要素」、「言語の多様性」、「世界の文字」というテーマを中心に構成する。

オセアニア展示

一般公開 2011年3月17日～

オセアニア展示チームリーダー Peter J. Matthews

オセアニア展示チームメンバー (館内) 印東道子 菊澤律子 久保正敏 小林繁樹 須藤健一 丹羽典生
林 勲男

内容

海がほとんどの面積を占めているオセアニアには、大小数万をこえる島々が点在している。そこには、発達した航海術をもち、根柢農耕を営む人々が暮らしてきた。「移動と拡散」「海での暮らし」「島での暮らし」では、資源の限られた島環境で、さまざまな工夫をして生活してきた様子を展示している。「外部世界との接触」「先住民のアイデンティティ表現」では、外の世界と出会うなかで、人びとが伝統文化をどのように継承、発展させてきたかを紹介する。

アメリカ展示

一般公開 2011年3月17日～

アメリカ展示チームリーダー 鈴木 紀

アメリカ展示チームメンバー (館内) 伊藤敦規 岸上伸啓 齋藤玲子 鈴木七美 齋藤 晃 關 雄二
八杉佳穂

内容

広大なアメリカ大陸には、極地から熱帯雨林まで、さまざまな自然環境が見られる。人びとは、それぞれの環境に応じた生活を営んできた。一方で、ヨーロッパ人による征服と植民の歴史を経験したこの地には、日常生活の隅々まで、外来の文化が浸透していった。ここでは衣、食、宗教に焦点をあて、アメリカ大陸の多様性と歴史の重なりを明らかにするとともに、土着の資源に現代的価値を見出そうとする芸術家や工芸家のすがたを紹介する。

ヨーロッパ展示

一般公開 2012年3月15日～

ヨーロッパ展示チームリーダー 宇田川妙子

ヨーロッパ展示チームメンバー (館内) 庄司博史 新免光比呂 森 明子

内容

ヨーロッパは、16世紀から20世紀にかけて、キリスト教や近代の諸制度をはじめ、さまざまな技術や知識を世界各地に移植した。現代、この流れが逆転するなかで、世界中からの移民とともに、彼らの文化も社会の一部となりつつある。ここでは、時間の流れに注目しながら伝統的な生活様式と宗教、近代の産業化、さらに現代の新しい動きが層をなしてヨーロッパをつくりあげていることを示している。

情報・インフォメーション

一般公開 2012年3月15日～

情報・インフォメーションチームリーダー 野林厚志

情報・インフォメーションチームメンバー (館内) 飯田 卓 伊藤敦規 田村克己 廣瀬浩二郎 福岡正太

内容

展示資料の情報を検索して調べることができる「リサーチデスク」、研究者が取り組んでいる調査を紹介する「研究の現場から」、展示資料を見てさわって理解する「世界をさわる」の3つのコーナーを通して、みんなの研究や展示をより詳しく知ることができる。展示場で見た資料についてもっと知りたい、みんなの研究って何を調査しているの、モノと身近に接してみたいという探究心を満たし、知識をさらに深める場としてご活用いただきたい。

東アジア展示 (日本の文化)

一般公開 「祭りと芸能」「日々の暮らし」 2013年3月22日～

「沖縄の暮らし」「多みんぞくニホン」 2014年3月20日～

東アジア展示(日本の文化)チームリーダー 日高真吾

東アジア展示(日本の文化)チームメンバー (館内) 池谷和信 近藤雅樹 笹原亮二 庄司博史 菅瀬晶子
野林厚志 出口正之

内容

北海道から沖縄県まで、南北に細長い日本列島は、多様な自然に恵まれています。こうした環境のなかで、隣接する諸文化と影響しあいながら、さまざまな地域文化を展開してきた。また、近年では多くの外国人が私たちの隣人として生活をともにしている。ここでは、「祭りと芸能」、「日々の暮らし」、「沖縄の暮らし」、「多みんぞくニホン」という4つの角度から、日本文化の様相を展示している。

東アジア展示（朝鮮半島の文化）

一般公開 2014年3月20日～
東アジア展示（朝鮮半島の文化）チームリーダー 朝倉敏夫
東アジア展示（朝鮮半島の文化）チームメンバー （館内）太田心平

内容

朝鮮半島の人びとは、外部の民族から影響を受けつつも、独自の文化を育んできた。有史以前は東シベリアの諸民族から、その後は中国から取り入れた文化要素を、独自のものに再編し、世界に例を見ないほど高度に統合された文化を獲得してきた。近代には日本に植民地支配され、独立後にはふたつの分断国家として急速な近代化を進めた。そして現代には、積極的に世界に進出する韓国人や、コリア系の海外生活者の姿も見られる。こうした文化の歴史的な重なりや躍動性を、精神世界、衣食住、あそびと知をテーマに紹介する。

東アジア展示（中国地域の文化）

一般公開 2014年3月20日～
東アジア展示（中国地域の文化）チームリーダー 塚田誠之
東アジア展示（中国地域の文化）チームメンバー （館内）韓 敏 小長谷有紀* 田村克己 野林厚志
横山廣子

内容

中国地域では、広大な面積と高低差のある地形がうみだす多様な自然環境のもと、さまざまな民族文化が育まれてきた。漢族が人口の90%以上を占め、平野部を中心に全国に居住している。大陸の55の少数民族は、おもに西南、西北、東北地方の高地や草原に居住しており、台湾には漢族のほか先住のオーストロネシア系民族が居住している。また、世界各地に、中国を故郷とする華僑・華人がくらしている。多様な生活環境から生みだされたさまざまな民族の文化を、歴史や地域性をふまえ、生業、装い、楽器、住居、工芸、宗教と文字、漢族の婚礼や祖先祭祀、台湾の原住民族、華僑・華人をテーマに紹介する。

南アジア展示

一般公開 2015年3月19日～
南アジア展示チームリーダー 三尾稔
南アジア展示チームメンバー （館内）上羽陽子 杉本良男 寺田吉孝 松尾瑞穂 南 真木人 吉岡 乾
竹村嘉晃* 豊山亜希*

内容

南アジア地域は、北部の山岳地帯から西はアラビア海沿岸、東はベンガル湾沿岸にいたるさまざまな自然環境のもと、多様な宗教や文化、生活様式をもつ人びとが共存しあう知恵を育んできた。経済発展が著しい現代においても、その知恵は保たれている。この展示では、宗教文化や生業・工芸の多様性、都市を中心とした活気あふれる大衆文化、またグローバル化のなかで花ひらく染織文化のすがたを紹介する。

東南アジア展示

一般公開 2015年3月19日～
東南アジア展示チームリーダー 信田敏宏
東南アジア展示チームメンバー （館内）樫永真佐夫 佐藤浩司 平井京之介 福岡正太 吉田ゆか子*

内容

森と海に囲まれた東南アジア。熱帯・亜熱帯の気候にくらす人びとは、早朝の涼しい時間から働きはじめ、40度近く達する日中は屋内でなどをして暑さをしのぐ。夕方、スクールが通り過ぎた後は、少し暑さが和らぎ、人びとは買い物や農作業に出かける。日が落ちて涼しくなると、友人や家族と屋台に出かけたり、演劇を見たりして余暇を楽しむ。本展示場では、「東南アジアの1日」をテーマに、その多彩な民族文化を紹介する。

中央・北アジア展示

一般公開 2016年6月16日～
中央・北アジア展示チームリーダー 藤本透子
中央・北アジア展示チームメンバー (館内) 池谷和信 佐々木史郎 寺村裕史 小長谷有紀*

内容

中央・北アジアは、ユーラシア大陸の北東部を占める広大な地域である。古くから東西南北をむすぶ交渉路としての役割を担い、多様な民族が行き交った。20世紀に社会主義を経験した後、市場経済に移行し、グローバル化の波にさらされながら伝統を再評価する動きがみられる。「自然との共生」「社会主義の時代」というふたつの共通テーマをふまえて、「中央アジア」「モンゴル」「シベリア・極北」の3つの地域に生きる人びとの今を紹介する。

アイヌの文化展示

一般公開 2016年6月16日～
アイヌの文化展示チームリーダー 齋藤玲子
アイヌの文化展示チームメンバー (館内) 伊藤敦規 岸上伸啓 佐々木史郎 吉田憲司 北原次郎太*

内容

アイヌは、北海道を中心に日本列島北部とその周辺に暮らし、寒冷な自然環境のもとで独自の文化をはぐくんできた先住民族である。江戸時代に幕府による支配が始まり、明治時代に同化がすすめられると、アイヌは差別を受け生活に困るようになった。しかし近年、日本政府はその歴史的事実を認め、アイヌ民族を尊重した政策に取り組みはじめた。ここでは、伝統を継承しつつ、あらたな文化を創造する人びとの姿を紹介する。

*併任教授、客員教員、特別客員教員、機関研究員等を示す

特別展示・企画展示など

●特別展示

特別展「夷酋列像——蝦夷地イメージをめぐる 人・物・世界」

会期 2016年2月25日～5月10日
会場 特別展示館
主催 国立民族学博物館、「夷酋列像」展実行委員会（北海道博物館、一般財団法人北海道歴史文化財団、北海道新聞社）、国立歴史民俗博物館
協力 ブザンソン市（フランス）、松前町、一般財団法人千里文化財団
後援 在日フランス大使館／アンステイチュ・フランセ日本、外務省、文化庁、北海道教育委員会、公益社団法人北海道アイヌ協会、NHK大阪放送局
入場者 33,375人
実行委員長 日高真吾
実行委員 (館内) 佐々木史郎、野林厚志、吉田憲司
(館外) 右代啓視（北海道博物館）、内田順子（国立歴史民俗博物館）、吉本 忍（国立民族学博物館名誉教授）

内容

蠣崎波響が描いたとされる、フランスのブザンソン美術考古博物館の《夷酋列像》と函館市中央図書館所蔵の御味方蝦夷之図とともに、松平定信筆の詞書を伴う模写（国立民族学博物館所蔵）、平戸藩主松浦静山の命でつくられた模写（松浦史料博物館所蔵）、徳島藩御用絵師の渡辺広輝による模写（常楽寺所蔵）、真田家に伝来する模写（真田宝物館所蔵）などの諸本や粉本を展示し、模写の系譜や各本の特徴を紹介した。

特別展「見世物大博覧会」

会期 2016年9月8日～11月29日
会場 特別展示館
主催 国立民族学博物館、国立歴史民俗博物館
協力 京都文教大学、株式会社JVCケンウッド・ビクターエンタテインメント、株式会社乃村工藝社、株式会社ポスターハリス・カンパニー、株式会社テラヤマ・ワールド、見世物学会、安田興行社、一

- 般財団法人千里文化財団
 助成 日本万国博覧会記念基金
 入場者 49,033人
 実行委員長 笹原亮二
 実行委員 (館内) 野林厚志、山中由里子
 (館外) 鶴飼正樹(京都文教大学)、川添 裕(横浜国立大学)、川村清志(国立歴史民俗博物館)、
 松尾恒一(国立歴史民俗博物館)

内容

日本では、細工物・軽業・曲芸・動物見世物といった様々なジャンルの見世物の興行が都市の盛り場や社寺の祭を中心に盛行し、人々を魅了しました。本展では、こうした江戸から明治・大正・昭和を経て現代に至る多種多様な見世物の姿を、絵看板、錦絵、一式飾りや生人形などの資料をとおして紹介する展示をおこなった。

●企画展示

企画展「ワンロード——現代アボリジニ・アートの世界」

- 会期 2016年6月9日～7月19日
 会場 企画展示場
 主催 国立民族学博物館
 共催 オーストラリア国立博物館
 協力・助成 Catalyst-オーストラリア芸術文化基金、オーストラリア外務貿易省、オーストラリア大使館
 協賛 キヤセイパシフィック航空会社
 後援 日本文化人類学会
 実行委員長 丹羽典生
 実行委員 (館内) 野林厚志、ピーター・マシウス
 (館外) 窪田幸子(神戸大学)、川崎和也(神戸学院大学)、栗田梨津子(明石工業高等専門学校)

内容

世界最長の牧畜移動路とされるオーストラリア西部の砂漠を縦断する1850キロの一本道は、先住民と西洋社会が交差する場所であった。その場所で、オーストラリア国立博物館が現代のアボリジニ・アーティストと行ったプロジェクトから生まれた作品を紹介する展示をおこなった。

企画展「順益台湾原住民博物館所蔵・学生創作ポスター展 台湾原住民族をめぐるイメージ」

- 会期 2016年8月4日～10月4日
 会場 企画展示場
 主催 国立民族学博物館
 共催 順益台湾原住民博物館
 特別協力 原住民族委員会原住民族文化發展中心、凱達格蘭文化館、順益関係企業、国立情報学研究所
 後援 中華民国(台湾)文化部、原住民族委員会、台北市政府原住民族事務委員会、台北駐日経済文化代表処 台湾文化センター
 実行委員長 野林厚志
 実行委員 (館内) 丸川雄三、河合洋尚

内容

本館と学術交流協定を締結している台湾の順益台湾原住民博物館が2006年より隔年で主催、実施している学生ポスターコンテストに出品され入選を果たした作品を中心に紹介した。コンテストの主題となってきたのは、台湾の先住民族である台湾原住民族の文化や歴史である。情報産業がめざましい発展を遂げた台湾では、若い世代がデジタルコンテンツの制作に取り組み、豊かな構想力や創造力を発揮している。学生たちがとらえた原住民族のイメージが表現されたポスターをご覧いただくとともに、イメージとむすびつく原住民族の物質文化を紹介した展示であった。

●巡回展示

巡回展「イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる」

- 会期 2016年10月8日～11月27日

会場 香川県立ミュージアム 2階特別展示室

担当者 吉田憲司

内容

みんなくが所蔵する膨大なコレクションのなかから、厳選された約390点を出品した。世界各地の仮面や神像をはじめ、民族衣装、美術家の作品までも、あえて地域や時代ごとに分類せず、造形性や効果、機能に着目し、美術作品と歴史資料、西洋と非西洋といった垣根をとりはらって紹介した。この展示は2014年2月～6月に国立新美術館にて、また同年9月～12月に本館にて、2015年6月～8月に郡山市立美術館へ巡回した。

展示関連出版物およびプログラム

●本館展示

「国立民族学博物館展示ガイド」(第4版)

発行日 2016年7月15日

●特別展示

「見世物大博覧会」(初版)

発行日 2016年9月1日

編集 国立民族学博物館

発行 国立民族学博物館

「見世物大博覧会」(第2版)

発行日 2016年11月1日

編集 国立民族学博物館

発行 国立民族学博物館

「ビーズ—つなぐ・かざる・みせる」(初版)

発行日 2017年3月9日

編者 池谷和信

発行 国立民族学博物館

●ビデオテーク

「韓国の『もう一つの』産後習俗の空間：産後調理院」(番組番号2816)

製作：国立民族学博物館、韓国国立民俗博物館

韓国の新しい習俗、産後調理院を一人の産婦を中心に描きました。現代韓国の産後処理についての情報が得られます。

「韓服、今を着る」(番組番号2817)

製作：国立民族学博物館、韓国国立民俗博物館

韓国の伝統服飾である「韓服」が現在、韓国社会でどのような姿で現れているかを描こうと制作されました。

「喪を始める新しい空間、葬礼式場」(番組番号2818)

製作：国立民族学博物館、韓国国立民俗博物館

専門の葬礼式場で3日間執り行われる現代の韓国社会での葬礼文化を紹介するために制作されました。

「新城の囃子曲持：神奈川県川崎市中原区新城」(番組番号1745)

制作監修：笹原亮二

神奈川県川崎市中原区新城の新城神社秋季例大祭で行われる、囃子曲持の上演の様相を紹介する。囃子曲持では、力士と呼ばれる演者が、様々な道具を用いて米俵を投げ上げたり差し上げたりして、力業の妙技を演じてみせる。

「平組梯子虎舞：岩手県大船渡市末崎町」（番組番号1746）

制作監修：笹原亮二

2015年、震災の影響で8年ぶりに開催された岩手県大船渡市末崎町の式年大祭における平組梯子虎舞の上演の様相を紹介する。梯子虎舞は末崎町の平地区の人々によって演じられ、虎が高さ約16メートルの梯子を登り、てっぺんで身を乗り出して舞う。

「龍ヶ崎の撞舞：茨城県龍ヶ崎市」（番組番号1747）

制作監修：笹原亮二

茨城県龍ヶ崎市の毎年7月の天王祭では、高さ十数メートルの柱の上とそこから張り渡した綱を伝い、曲芸風の演技の撞舞が行われる。

「今治の継ぎ獅子：春祭りの獅子舞奉納」（番組番号1748）

制作監修：笹原亮二

愛媛県今治市の十数カ所で春祭を中心に行われている継ぎ獅子は、3人から5人の演者が継いで演じられる軽業風の演技で知られる。

「東湖八坂神社の統人行事：秋田県潟上市天王・男鹿市船越」（番組番号1749）

制作監修：笹原亮二

東湖八坂神社では統人と呼ばれる人びとによって祭や行事が行われてきた。7月の天王祭では、蜘蛛舞や牛乗り神事が行われる。

「新築祝い：雲南省回族の家屋落成式典」（番組番号1750）

制作監修：横山廣子

三階建ての家の新築祝いの礼拝に集まった村の人々。インタビューで家主は、一家で出稼ぎをして資金をためてきた経験を語る。

「アラビア書道家：雲南省大理市南五里橋村の回族」（番組番号1751）

制作監修：横山廣子

回族のアラビア書道家がその腕前を披露する。インタビューでは書体と筆の種類、どのようにアラビア書道を学んだかを語る。

「回族の村の生活：雲南省大理盆地のイスラム教徒」（番組番号1752）

制作監修：横山廣子

モスクとその周辺、墓地の映像を通して、ペー族が多数派の大理で暮らす回族の人々の生活とエスニック・アイデンティティを描く。

●研究用映像資料

「ネパール 楽師の村 バトゥレチョールの現在」（番組番号7239）

制作監修：南 真木人、寺田吉孝、藤井知昭（1982年番組）

1982年に民博がネパールで映像取材を行なった楽師の村を34年後に再訪。生業や社会の変化を追った映像ドキュメント。

●マルチメディア番組

「音楽展示エンサイクロペディア」（番組番号6046）

制作監修：寺田吉孝、福岡正太、笹原亮二

音楽展示場で見ることができる楽器について、演奏、作り方、演奏される儀礼や芸能などを映像で紹介します。

「息づく仮面：バリ島の仮面舞踊劇トベンと音楽」（番組番号6057）

制作監修：吉田ゆか子、福岡正太

バリ島の舞踊家2名を迎え、日本人の舞踊家・演奏家と合同でおこなった研究公演とワークショップの記録。

● 「みんなく電子ガイド」プログラム数（2017年3月31日現在）

展示プロジェクト地域	プログラム数			
	日本語版	中国語版	英語版	韓国語版
オセアニア	23	23	23	23
アメリカ	27	27	27	27
ヨーロッパ	12	12	12	12
アフリカ	17	17	17	17
西アジア	16	16	16	16
南アジア	40	40	40	40
東南アジア	32	32	32	32
中央・北アジア	30	30	30	30
東アジア				
朝鮮半島の文化	47	47	47	47
中国地域の文化	39	39	39	39
アイヌの文化	10	10	10	10
日本の文化	35	35	35	35
音楽	0	0	0	0
言語	0	0	0	0
総 計	各 328			

4 国際連携と研究協力

海外研究機関との研究協力協定

国(地域)名 ペルー
相手機関名 国立サン・マルコス大学
協定書等名 国立民族学博物館とペルー・国立サン・マルコス大学との間における考古学調査と学術交流に関する協定
締結日 2005年6月14日
協定終了予定日 2020年5月17日
目的 考古学分野における共同調査の遂行、ならびにそれに基づく学術交流を促進する。
協定内容 パコパンパ考古学プログラム

国(地域)名 台湾
相手機関名 順益台湾原住民博物館
協定書等名 国立民族学博物館と順益台湾原住民博物館との学術協力協定書
締結日 2006年7月1日
協定終了予定日 2016年3月31日
目的 台湾原住民に関する学術調査、研究を推進する。
協定内容 ・台湾原住民族の現代的動態に関わる人類学的、言語学的、歴史学的調査
・国立民族学博物館ならびに他の博物館に収蔵されている台湾原住民族関連の資料に係る調査
・上記に係る報告書ならびに研究誌の発行

国(地域)名 韓国
相手機関名 国立民俗博物館
協定書等名 国立民族学博物館と大韓民国国立民俗博物館との文化交流協定
締結日 2007年7月11日
協定終了予定日 2017年6月14日
目的 学術、文化交流を通して友好関係を強化し、この関係を発展させる。
協定内容 国際共同展示に係る協定
・教職員及び研究者の交流
・共同研究及び研究集会の実施
・博物館の展示及び教育活動に関する協力
・学術的情報及び出版物の交換
・両機関で合意されたその他の事業

国(地域)名 中国
相手機関名 内蒙古大学
協定書等名 国立民族学博物館と中華人民共和国内蒙古大学との学術協力の協定
締結日 2008年9月22日
協定終了予定日 2018年7月24日
目的 相互に理解を深め、両機関の学術協力を通して友好関係を強化する。
協定内容 ・双方の教職員・研究者の交流
・研究プロジェクトの展開
・博物館展示品の展覧及び教育分野における協力活動
・学術研究資料、学術情報及び公開出版物についての交換と相互利用の展開
・その他両機関で合意された分野における協力

国(地域)名 台湾
相手機関名 国立台北芸術大学
協定書等名 国立民族学博物館と台湾国立台北芸術大学との学術協力の協定
締結日 2009年5月15日

協定終了予定日	2019年 5月14日
目的	相互の学術交流と両者の発展を目的とした学術協力関係を築く。
協定内容	<ul style="list-style-type: none"> ・双方の教職員・研究者の交流 ・研究プロジェクトの展開 ・博物館展示品及び教育分野における協力活動 ・学術研究資料、学術情報及び公開出版物についての交換と相互利用の促進 ・その他両機関で合意された分野における協力
国(地域)名	中国
相手機関名	故宮博物院
協定書等名	国立民族学博物館と中華人民共和国・故宮博物院との研究交流協定
締結日	2009年10月16日
協定終了予定日	2015年 8月27日
目的	相互理解と互酬性の原則に則り、両機関の学術研究交流を強化し、発展させる。
協定内容	<ul style="list-style-type: none"> ・学術研究に関し、両機関が合意する事業の交流・協力
国(地域)名	英国
相手機関名	エジンバラ大学
協定書等名	国立民族学博物館と英国・エジンバラ大学との研究交流協定
締結日	2010年 5月17日
協定終了予定日	2020年 5月16日
目的	相互理解と互酬性の原則に則り、両機関の学術研究交流を強化し、発展させる。
協定内容	<ul style="list-style-type: none"> ・学術研究に関し、両機関が合意する事業の交流・協力
国(地域)名	マダガスカル
相手機関名	アンタナナリヴ大学
協定書等名	国立民族学博物館およびマダガスカル国アンタナナリヴ大学の学術協力に関する協定
締結日	2010年11月22日
協定終了予定日	2016年11月21日
目的	互恵性と平等の理念のもとに、学術分野で相互に利益ある協力活動を進める。
協定内容	<ul style="list-style-type: none"> ・研究者の交換 ・共同研究プロジェクトの実施運営 ・シンポジウムや講演の開催・学術情報や資料の交換 ・互いに同意したその他の学術協力の推進
国(地域)名	ペルー
相手機関名	教皇庁立ペルーカトリカ大学
協定書等名	国立民族学博物館と教皇庁立ペルーカトリカ大学との間の学術協力の一般協定
締結日	2010年12月 1日
協定終了予定日	2016年11月28日
目的	双方の利益になる協力活動を実現するためのガイドラインを定める。
協定内容	<ul style="list-style-type: none"> ・共同の研究活動とアウトリーチ活動 ・講演会とシンポジウムの共同策定 ・教員の交流 ・学術的または科学的資料、および双方の利益となる刊行物の交換 ・その他、両者が互いに合意し、双方にとって有益な活動
国(地域)名	ロシア
相手機関名	ロシア民族学博物館
協定書等名	国立民族学博物館とロシア民族学博物館との間の博物館学及び文化研究の分野における学術協力

に関する協定
 締結日 2010年12月3日
 協定終了予定日 2015年12月2日
 目的 博物館学、調査研究、文化財保護の各分野における協力・相互支援関係を樹立する。
 協定内容 ・両博物館が保有する歴史的、文化的財産の保存状態改善を目的としたプロジェクトの支援
 ・両博物館の研究者交流
 ・ロシア民族学博物館が実施するシベリア、中央アジア、極東、北コーカサスでの民族学的ワールドワークへの民博の研究者の参加
 ・両博物館が指名する経理、データベース構築、収集品の考証、資料の分類、保存科学などの諸分野の専門家の交流

国(地域)名 ロシア
 相手機関名 ロシア科学アカデミー極東支部極東諸民族歴史学考古学民族学研究所
 協定書等名 国立民族学博物館とロシア科学アカデミー極東支部極東諸民族歴史学考古学民族学研究所との間の協定
 締結日 2011年6月1日
 協定終了予定日 2016年5月31日
 目的 考古学、人類学、及び民族学の共同研究を目的とする。
 協定内容 2011年から2016年にわたって行われる考古学、人類学、及び民族学の共同研究を本協定の対象とし、下記の事項を実現させる。
 ・考古学、民族学の分野における共同調査
 ・ロシアと日本における共同の研究集会
 ・研究成果の共同出版

国(地域)名 ロシア
 相手機関名 ロシア科学アカデミー・ピョートル大帝記念人類学民族学博物館（クンストカメラ）
 協定書等名 国立民族学博物館とロシア科学アカデミー・ピョートル大帝記念人類学民族学博物館（クンストカメラ）との間の協力および文化交流に関する協定
 締結日 2011年10月21日
 協定終了予定日 2016年10月20日
 目的 学術、文化の両分野において相互交流および協力関係を発展させる。
 協定内容 野外調査および学術・理論的研究、博物館関連活動の分野における交流を以下の項目について実施する。
 ・教職員の交流
 ・野外調査、学術・理論的研究、学術集会の共同実施
 ・展示および教育プロジェクトの共同実施
 ・学術情報および刊行物の交換
 ・両博物館の合意による、その他のあらゆる学術分野の活動

国(地域)名 ベトナム
 相手機関名 生態学生物資源研究所
 協定書等名 国立民族学博物館とベトナム生態学生物資源研究所の学術協力に関する協定
 締結日 2012年3月22日
 協定終了予定日 2017年3月21日
 目的 相互の理解、利益および協力の原則に基づいて学術研究および交流の強化、発展のために本契約を締結する。
 協定内容 共同研究、研修、出版、展示等に関するプロジェクトにおける学術的な研究および交流の促進

国(地域)名 米国
 相手機関名 アシウィ・アワン博物館・遺産センター

協定書等名	国立民族学博物館とアシウィ・アワン博物館・遺産センターの学術協力に関する協定
締結日	2012年6月3日
協定終了予定日	2017年6月2日
目的	相互に理解を深め、両機関の学術協力を通して友好関係を強化する。
協定内容	<ul style="list-style-type: none"> ・双方の教職員・研究者の交流 ・共同研究プロジェクトの展開 ・博物館資料の展覧および教育分野における協力活動 ・学術研究資料、学術情報および公開出版物についての交換と相互利用の展開 ・その他両機関で合意された分野における協力
国(地域)名	フィリピン
相手機関名	フィリピン国立博物館
協定書等名	国立民族学博物館とフィリピン国立博物館の学術協力に関する協定
締結日	2012年7月18日
協定終了予定日	2017年7月17日
目的	相互の理解、利益および協力の原則に基づいて学術協力および交流の強化および発展のために本契約を締結する。
協定内容	<ul style="list-style-type: none"> ・共同研究、研修、出版、展示等に関するプロジェクトにおける学術的な研究および交流の促進
国(地域)名	中国
相手機関名	中国社会科学院民族学・人類学研究所
協定書等名	国立民族学博物館と中国社会科学院民族学・人類学研究所との学術交流協定
締結日	2012年8月28日
協定終了予定日	2015年8月27日
目的	両機関の学術交流を通して国際的な連携を進めるため、平等互惠と相互尊重の理念のもとに、この協定を締結する。
協定内容	<ul style="list-style-type: none"> ・研究プロジェクトの展開 ・双方の教員・研究者交流 ・研究資料、学術情報及び公開出版物についての交換と相互利用の展開 ・その他両機関で合意された分野における協力
国(地域)名	フランス
相手機関名	国立パリ・デカルト大学人口開発研究所
協定書等名	国立民族学博物館と国立パリ・デカルト大学・人口開発研究所との学術協力に関する協定
締結日	2012年11月30日
協定終了予定日	2015年11月29日
目的	これまでの建設的な共同研究を評価し、これをさらに強化すべく相互の理解と関心という行動指針に基づき、今後の学術的共同研究を発展させるため、本協定を締結する。
協定内容	両機関は共同研究事業において、学術的交流および協力を推進する。
国(地域)名	マリ
相手機関名	マリ文化省文化財保護局
協定書等名	国立民族学博物館とマリ文化省文化財保護局との学術協定書
締結日	2014年5月7日
協定終了予定日	2018年5月6日
目的	マリにおける文化財の研究、保護及び普及のためのプロジェクトに関する協力活動を推進する。
協定内容	<ul style="list-style-type: none"> ・マリにおける考古遺跡の保存、保護、研究に関して指導的役割を共同して担う。 ・両機関が実施してきたこれらの考古遺跡に関する研究を継続して行う。

国(地域)名 米国
 相手機関名 北アリゾナ博物館
 協定書等名 国立民族学博物館（日本国 大阪）および北アリゾナ博物館（米国 アリゾナ州 フラッグスタッフ）との学術協力・協働協定書
 締結日 2014年7月4日
 協定終了予定日 2019年7月3日
 目的 学術交流・研究を強化・発展させる。
 協定内容 より一層の交流、情報共有、協力関係、良質な民族誌的記録向上を目的として、博物館やソースコミュニティと共に諸活動を研究・促進するプロジェクトの発展のために協働する。

国(地域)名 台湾
 相手機関名 国立台湾歴史博物館
 協定書等名 国立民族学博物館と国立台湾歴史博物館との間の学術研究交流に関する協定書
 締結日 2015年10月17日
 協定終了予定日 2021年10月16日
 目的 相互に理解と友好を深め、両機関における学術研究交流を促進する。
 協定内容

- ・研究者の交流
- ・共同研究及び研究集会の実施
- ・博物館の展示や教育活動に関する協力
- ・学術情報及び出版物の交換
- ・その他両機関が合意した事項

国(地域)名 米国
 相手機関名 ヴァンダービルト大学
 協定書等名 国立民族学博物館（日本国）とヴァンダービルト大学（アメリカ合衆国）との協定合意書
 締結日 2016年1月15日
 協定終了予定日 2021年1月14日
 目的 両機関が友好と相互平等と利益互惠の原則に基づいて学術的に協力・協同する。
 協定内容

- ・講演会やシンポジウム、研究会
- ・共同研究
- ・文化交流

国(地域)名 中国
 相手機関名 浙江大学
 協定書等名 日本国国立民族学博物館と中華人民共和国浙江大学人類学研究所・図書館との学術交流に関する協定書
 締結日 2016年4月19日
 協定終了予定日 2019年4月18日
 目的 両機関の刊行物を互いに寄贈することにより、民博側は浙江大学に創設された「民博文庫」の充実に努め、浙江大学側は民博図書館における中国（語）関係資料の充実に努める。
 協定内容

- ・研究者などの人材交流
- ・人類学及び人類学資料事業に関する研究
- ・学術出版物の寄贈・交換
- ・その他両機関が必要と認める研究活動の実施

国(地域)名 カナダ
 相手機関名 プリティッシュコロンビア大学人類学博物館（UBC）
 協定書等名 日本・国立民族学博物館とプリティッシュコロンビア大学人類学博物館の学術協力に関する協定書
 締結日 2017年3月9日
 協定終了予定日 2022年3月8日

- 目的 研究交流や人材交流を行い、両博物館における研究活動や博物館活動を促進・活性化させる。
- 協定内容
- ・研究者などの人材交流
 - ・人類学及び人類学資料事業に関する研究
 - ・学術出版物の寄贈

MINPAKU Anthropology Newsletter

Newsletter 42 (June 2016)

Special theme: Research Project 'Anthropology of Heritage: Communities and Materiality in Global Systems'

- Athentic Change in the Transmission of Intangible Cultural Heritage ————— Taku Iida
 Cultural Diversity and the 2003 ICH Convention ————— Masami Iwasaki-Goodman
 Authenticity and Change in the Revitalization and Preservation of Cultural Heritage ——— Christina Kreps
 Safeguarding and Promoting Intangible Cultural Heritage in the USA: A Brief Overview of Public Folklore
 ————— Michelle L. Stefano
 Cultural Heritage Practices of Hakka District, China ————— Hironao Kawai

Newsletter 43 (December 2016)

Special theme: Reflection on Research in Africa and Asia

- Looking back at my Zhuang Research ————— Shigeyuki Tsukada
 From Mali to Tohoku: Frontlines of Fieldwork ————— Shoichiro Takezawa
 Discovery of the Royal Cities of Gao, Mali ————— Mamadou Cisse
 Master Keaton Takezawa, a Fieldworker in East Japan ————— Hiroyuki Takahashi

みんぱくフェローズ

客員研究員等で国立民族学博物館に在籍した研究者で、帰国後も継続的な関係を維持するためにMINPAKU *Anthropology Newsletter*を送付している研究者、および国立民族学博物館と関連の深い国内外の研究機関で、MINPAKU *Anthropology Newsletter*を送付している機関。

アジア・中東・オセアニア		ヨーロッパ		北米・中南米		アフリカ	
アラブ首長国連邦	2	アイスランド	2	アルゼンチン	1	エジプト	14
アルメニア	5	イタリア	2	米国	158	エチオピア	5
イスラエル	11	英国	48	エクアドル	3	エリトリア	5
インド	13	オーストリア	3	カナダ	18	ガーナ	3
インドネシア	17	オランダ	13	ガイアナ	2	カメルーン	1
オーストラリア	23	キプロス	1	グアテマラ	3	ケニア	3
韓国	40	ギリシャ	1	コロンビア	2	コートジボワール	2
カンボジア		スイス	4	ジャマイカ	3	ザンビア	11
サウジアラビア	4	スウェーデン	12	チリ	1	スーダン	1
サモア	3	スペイン	2	パラグアイ	1	スワジランド	2
シンガポール	5	スロベニア	1	ブラジル	5	タンザニア	2
スリランカ	3	チェコ	3	ペルー	14	ナイジェリア	3
ソロモン諸島	2	デンマーク	3	ボリビア	3	ナミビア	1
タイ	27	ドイツ	31	ホンジュラス	1	ボツワナ	2
台湾	31	ノルウェー	3	メキシコ	5	南アフリカ	5
中国	192	フィンランド	1			マダガスカル	2
トルコ	4	フランス	19			モーリタニア	1
ニュージーランド	5	ブルガリア	3			セーシェル	1
日本	211	ベルギー	3				
ネパール	8	ポーランド	5				
パキスタン	2	ポルトガル	2				
パプアニューギニア	1	マケドニア	1				
パレスチナ	7	ルーマニア	2				
フィジー	8	ロシア	14				
フィリピン	7						
ブータン	3						
ブルネイ	1						
ベトナム	7						
香港	4						
マレーシア	10						
ミャンマー	11						
モンゴル	8						
ヨルダン	6						
ラオス	4						
小計	685	小計	179	小計	220	小計	64
総計							1,148

国際研修博物館学コース

国際協力事業団（JICA）が主宰し、本館が中心となって1994年から10年間実施してきた「博物館技術（収集、保存、展示）コース」は、開発途上国における諸博物館の技術向上と、博物館間の国際的ネットワーク構築に大いに貢献してきた。また、その過程を通じて、本館はじめわが国の博物館関係者も、研修参加者から多くのことを学ぶことができた。

研修コースの設置から10年の節目を迎えた2003年、国際協力事業団は独立行政法人国際協力機構に衣替えし、本館もまた、2004年4月より法人化し、大学共同利用機関法人・人間文化研究機構の1機関となった。この機に当たり、改めて過去10年の成果を点検し、いくつかの点でコースの改変を行い、2004年度からは「博物館学集中コース」として再出発した。

この新たな「博物館学集中コース」は、本館がJICAから全面的な事業委託を受け、滋賀県立琵琶湖博物館と協同で運営することとなった。もとより、研修の実施に際しては、国内の多くの博物館・美術館とその関係者から協力をあおぐことはいうまでもない。本館のもつ国際的ネットワークは、対象国の博物館事情を踏まえた研修実施に不可欠な要因であり、またその先進的な情報・資料管理や博物館運営は、研修に大きな効果をあげている。その一方で、研修員の多くにとって切実な問題である、自らの属するコミュニティの資料を収集・整理し、展示するという課題については、主として海外資料の収集・展示に関わる人文社会系の博物館である本館での研修に限界があることも事実である。そこで、2004年度からの新しいコースでは、自然科学系の博物館としてこの分野の活動で先進的な業績をあげている、琵琶湖博物館と密接に連携することで、より充実した研修を進めている。また、研修プログラムの設定にあたっては、各講義を講師による一方向の教育ではなく、講師と研修員とが自らの経験や知識を共有する議論の場として位置付け、相互に学び合うコースとなるように留意している。

その後、2009年度からは、JICA 集団研修全体の枠組みが大きく変更され、3年間を一区切りとして、その間は研修員受入れ割り当て国を変更しない、という基本原則が定められた。日本の国際協力事業全体を見直す動きの中で、同一国に継続的な協力を行ってその結果が現地に確実に還元される仕組みを作り、それを3年ごとに確認して当該コースを継続すべきかを外部評価の判断にゆだねる、というJICAの方針から、このような枠組みの変更が行われたものである。しかし、本館としては、この枠組みの変更に際し、博物館関係者を3年間にわたり継続して派遣することが困難な国も多いことを勘案して、「大きな需要を持ちながらも博物館人材の少ない国を切り捨てる結果に陥らないこと」を要望してきた。その結果、2012年度以降は、JICAが各国に向けて要望調査を行う際の、割り当て国の固定をやめ、全世界に要望調査を行うことになった。2015年度においては、「博物館学集中コース」を博物館が地域社会に果たす役割により重点を置いたコースへと改組し、合わせて「博物館とコミュニティ開発」コースへと名称変更を行った。

2016年度は、アルメニア、エジプト、イラン、ラオス、メキシコ、ペルー、サモア、ヨルダン、パレスチナ自治政府の9か国・地域から12名の研修員を受け入れ、9月28日から12月16日まで研修を行った。本館と琵琶湖博物館での講義・実習等の実施だけではなく、新潟県中越地震の被災地に設けられた中越メモリアル回廊、東京国立博物館や国立科学博物館、広島平和記念資料館などへの研修旅行も行った。その他、あしや秋祭りのだんじり巡行にも参加するなど、地域社会とのつながりや日本の伝統を間近で体験する機会も本研修に盛り込んだ。

また研修員全員が、自国の博物館の活動や課題を報告し、検討する「公開フォーラム世界の博物館2016」を2016年11月23日に国立民族学博物館で開催した。85名の参加者があり、報告者と活発な意見交換を展開した。また、全期間にわたって日本のさまざまな博物館関係者と直接ふれあい、その一部の現場を訪ねることで、研修員が日本側の経験に学ぶと同時に、日本側も研修員の目を通して、日本の博物館の持っている可能性と課題に気づかされるなど、たがいに経験と知見を分かちあうことができたと思える。

●博物館とコミュニティ開発コース研修員

KOBELYAN Khachatur (コベリアン ハチャトゥール) アルメニア

————— セルゲイ・パラジャーノフ博物館 展示普及部 部長

SOLIMAN Fatma Ahmed (ソリマン ファトマ アハメド) エジプト

————— エジプト考古庁 大エジプト博物館 (GEM) 教育センター・子供博物館 キュレーター／ツタンカーメン王展示担当メンバー

IBRAHIM Mariem Danial-boktor (イブラヒム マリエム ダニエル ボクトール) エジプト

————— エジプト考古庁 コプト博物館 教育部 キュレーター

HASSANZADEH Yousef (ハッサンザデ ユセフ) イラン

————— イラン国立博物館 出版部 部長
 SIHACHAK Vilayvanh (シハチャク ヴィライヴァン) ラオス
 ————— ラオス情報文化観光省 ラオス国立博物館 副館長
 MOSCO JAIMES Alejandra (モスコ ジェイムス アレハンドラ) メキシコ
 ————— 国立保存／修復／博物館学学校 博物館学大学院プログラム 研究教授
 CARRILLO HERRERIAS Magdalena Sofia (カリリョ エレリアス マグダレナ ソフィア) メキシコ
 ————— エクス・テレーザ国立現代美術センター 副センター長
 ARCE TORRES Emma Susana (アチェ トレス エマ スサナ) ペルー
 ————— 文化省 イカ州博物館 館長
 AH KEN ETEUATI Ailini (ア ケン エトゥアティ アイリニ) サモア
 ————— 教育・スポーツ・文化省 博物館上級スタッフ
 ALFARAJAT Rami Mohammed Akeela (アルファラジャト ラミ モハメド アキーラ) ヨルダン
 ————— ベトラ開発観光局 (PDTRA) 観光部 広報担当
 RJOOB Jaber A. J. (ルジューブ ジャベル エイ ジェイ) パレスチナ
 ————— 観光遺跡庁 遺産保護部 調査官 (Al Badd Museum 担当)
 MANSOUR Mohammed Ii (マンスール モハメド) パレスチナ
 ————— 観光遺跡庁 博物館部 キュレーター

国内研究機関等との研究連携、協力の推進

相手機関名	日本文化人類学会
協定名	人間文化研究機構国立民族学博物館と日本文化人類学会との連携に関する協定
締結日	2008年2月27日 (更新) 2011年4月15日
概要	研究連携、研究交流、相互の研究成果の活用を促進し、もって人類社会における学術の発展と普及に寄与する。
終了予定日	なし
相手機関名	日本国際理解教育学会
協定名	人間文化研究機構国立民族学博物館と日本国際理解教育学会との連携に関する協定
締結日	2013年3月28日
概要	研究連携、研究交流、相互の研究成果の活用を促進し、もって人類社会における学術の発展と普及に寄与する。
終了予定日	なし
相手機関名	金沢大学
協定名	大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立民族学博物館と国立大学法人金沢大学との連携・協力に関する協定
締結日	2014年3月23日
概要	金沢大学と民族学博物館とのこれまで長年にわたり培ってきた信頼関係と連携・協力の実績を基盤に、より緊密かつ組織的に行う体制強化を図る。
終了予定日	2017年3月31日
相手機関名	立命館大学
協定名	国立民族学博物館と立命館大学との学術交流に関する協定書
締結日	2014年4月10日
概要	食に関する学術研究、その他の諸活動の発展に向けた連携協力を行う。
終了予定日	2019年4月9日
相手機関名	大阪工業大学

協定名	国立民族学博物館と大阪工業大学との学術交流に関する協定書
締結日	2015年3月23日
概要	情報メディア・デジタルコンテンツに関する学術研究、その他の諸活動の発展に向けた連携協力をを行う。
終了予定日	2020年3月22日
相手機関名	追手門学院大学
協定名	国立民族学博物館と追手門学院大学との学術交流に関する協定書
締結日	2015年4月22日
概要	地域文化の継承と創造に関する学術研究、その他の諸活動の発展に向けた連携協力をを行う。
終了予定日	2018年4月21日
相手機関名	株式会社 海遊館
協定名	大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立民族学博物館と株式会社海遊館との連携・協力に関する協定
締結日	2015年11月19日
概要	産学連携の推進、学術研究の振興、研究成果による社会貢献、その他の諸活動の発展に向けた連携協力をを行う。
終了予定日	2017年3月31日
相手機関名	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
協定名	大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立民族学博物館と国立大学法人東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所との連携・協力に関する協定
締結日	2015年11月25日
概要	世界諸地域の言語と文化に関する学術研究、その他の諸活動の発展に向けた連携協力をを行う。
終了予定日	2019年3月31日
相手機関名	神戸大学大学院人文学研究科
協定名	大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立民族学博物館と国立大学法人神戸大学大学院人文学研究科との学術交流に関する協定
締結日	2016年7月15日
概要	研究教育のための学術交流を推進する。
終了予定日	2022年3月31日

概観

開館40周年に向けて

2017年に開館40周年を迎えることを記念して、次世代を担う小・中学生の観覧無料化を2017年4月1日からスタートさせることを決定した。来館経験のある小・中学生を増やすことで、「みんぱく」ファンを増やし大学生・大学院生の利用へとつなげるとともに、生涯をとおして利用可能な施設というイメージを定着させ、長期的な入館者数と入館料収入の増加を両立させる計画である。

併せて、2017年度から無料観覧日を9日から4日に変更し、無料対象を本館展示のみとする。展示のテーマと内容のレベルアップ等による入館者の増加を目指すという、博物館としての本来の活動を重視する方向にシフトする。

開館40周年を積極的に発信するため、記念ポスターとチラシを作成したほか、本館オリジナルカレンダーを関係各所に配付した。月刊みんぱくでも、創刊号からの月刊みんぱく総索引を作成し、創刊号からの記事を一望できるようにした。総索引は2016年12月号の付録として配付した。

地域に根ざした広報活動

2015年に開業した大型複合施設エキスポシティ内の各施設と連携し、下記のさまざまな広報活動を行った。

- (1) 吹田市情報発信プラザ「Inforest すいた」で2ヶ月間、「みんぱくフェア」を開催した。ミニ展示や参加型キャンペーンを実施し、本館の認知度向上と集客を図った（入場者数33,810名）。
- (2) 無印良品ららぽーとエキスポシティと、開業1周年記念イベント「みんぱく・無印良品ららぽーと EXPOCITY オープン1周年記念みんぱくツアー」及び国立民族学博物館開館40周年記念特別展「ビーズ」公開記念ツアー「ジュズダマを知ろう プレスレットを作ろう」を実施した（参加者数計32名）。同店内には継続的に本館のチラシや関連書籍を陳列し、無印良品利用者に本館の活動を訴求した。
- (3) 連携協力協定を締結したニフレと、開館記念「ニフレ×みんぱく×アクタス トークセッション『眠りに目覚めよう ～生きものと人の“すみか”と、より良い眠りの工夫～』」を開催した（参加者数51名）。

万博記念公園内の飲食店4店舗との観覧料及び飲食料等の相互割引を継続し、また、同じく公園内の自然観察学習館と連携し、特別展「ビーズ——つなぐ・かざる・みせる」関連イベントとして「プレスレットを作ろう——植物ビーズの魅力」と題し、ワークショップを開催するなど、公園内における利用者の回遊性を高め、集客を図った。

北大阪8市3町の美術館・博物館計53館が参加する「北大阪ミュージアム・ネットワーク」による文化祭「北大阪ミュージアムメッセ」に参加し、会場提供した。他にもミュージアムぐるっとバス・関西2016に継続参加するなど、地域における美術館・博物館の活動における中心的役割を担い、注目度を増した千里を起点として発信する広報活動を展開した。

学校教育・社会教育活動

本館研究者の研究成果を幅広い層に社会還元するため、積極的なアウトリーチの講演活動を行った。主に社会人を対象とした生涯教育として、大阪梅田のグランフロント大阪において、連続講座「みんぱく×ナレッジキャピタル」を「世界の『台所』」及び「展示キュレーションの誘惑——新しいみんぱくの展示ができるまで」のテーマでそれぞれ7回シリーズで開催した。各講座のうち1回は、本館展示ツアーとすることで、館外での催しを展示観覧につなげることを狙った（参加者数計549名）。大阪阿倍野のあべのハルカス近鉄本店においては、連続講座「カレッジシアター地球探究紀行」に特別協力した（産経新聞主催、20回開催、参加者数計808名）。大阪府高齢者大学の講座（29回開催、参加者数計1,160名）において、引き続き本館教員が講座を担当した。

大学教育の発展に向けて、千里文化財団の協力のもと、「国立民族学博物館キャンパスメンバーズ」制度を継続実施し、高等教育への本館の活用を推進した。平成28年度は、新規申し込み1件（学校法人塚本学院（大阪芸術大学、大阪芸術大学短期大学部、大阪芸術大学附属大阪美術専門学校））、継続申し込み5件（大阪大学、学校法人 京都文教学園（京都文教大学・短期大学）、同志社大学文化情報学部・文化情報学研究科、千里金蘭大学、学校法人立命館（立命館大学、立命館高等学校、立命館宇治高等学校、立命館守山高等学校、立命館慶祥高等学校））、計2,503人の学生、教職員が来館した。また、本館を大学教育に広く活用するためのマニュアル「大学生・教員のためのみんぱく活用」を本館ウェブサイトに掲載し、98件、3,168名の大学関係者が展示場を利用した。

初等・中等教育への貢献として、近隣の教育委員会と連携して、大阪北摂地域の中学校5校から10名を職場体験として受け入れた。さらに、小・中学校の教諭を対象に、博物館見学の準備や事前・事後の学習に役立つツール、貸出学習キットなどの紹介を目的としたガイダンスを2回実施し、52団体152名の参加があった。

学校団体（小・中学校、高校、大学）による特別展観覧料の優待措置も継続し、相互観覧による理解度の向上及

び入館者数の増加に貢献した。

インターネットによる広報活動

インターネットによる情報発信とアクセシビリティを一層向上させた。

ホームページに関しては、英語トップページのレイアウト刷新やLINE等ソーシャル・メディアのシェアボタンの設置、CMSセキュリティの向上等リニューアルを重ねた。ホームページの利用者数は、訪問者数 774,417、ページビュー数 2,415,344であった。

メールマガジン（みんぱく e-news）に関しては、利用者アンケートの結果等を参考に内容の見直しを図りながら、毎月1回継続して発信している（配信数は57,574件）。

ソーシャル・メディアに関しては、海外を含む発信力の強化及び若い女性を中心とした新たな客層の開拓を図るため、新たに公式 Instagram（写真の撮影・加工・共有サービス）ページを開設した。既存のソーシャル・メディアの利用者も順調に増加し、自前の広報メディアとして、着実に地歩を固めている。（Facebook いいね！数 14,109件（合計）、Twitter フォロワー数 34031件、YouTube 総再生回数 14,675回（2016年度））。

マスメディアによる広報活動

特別展「見世物大博覧会」の関連イベントとして、日本文化にも精通しているタレントの浜村淳さんと、MBSの若手アナウンサー2名、笹原亮二（本館教授・特別展実行委員長）によるトークイベント「みんぱく×MBSラジオ presents 浜村淳がせまる！驚きと幻想の見世物大博覧会」を開催した（参加者数 446名）。本イベントは、ラジオ番組及びテレビ番組で紹介された他、関連してラジオ番組の生放送に教員が出演したり、特別展や関連イベントのラジオCMを流したりして、マスメディアの発信力を利用し、社会に向けて広範に本館の活動をアピールする格好の機会となった。

新聞に関しては、新たに朝日小学生新聞で毎週日曜日に本館研究者によるコラム「先住民族を知ろう」を連載した（2016年10月～12月）。毎日新聞の「旅・いろいろ地球人」や毎日小学生新聞の「みんぱく世界の旅」（2017年3月まで）、京都新聞の「考える舌 みんぱく食の民族誌」（28年6月まで）の連載も継続し、研究者がそれぞれの研究内容を多様な年齢層、地域の読者向けにわかりやすく解説した。また、新たに文部科学教育通信で月2回「国立民族学博物館の収蔵品」を連載し、各研究者が研究内容と本館収蔵資料について解説した。千里ニュータウンFM放送番組「ごさげん千里 837（やあ、みんな）」も継続している。

プレスリリースも随時発信し、マスメディアに情報提供した（年間36本）。報道関係者との懇談会は、8月を除く毎月、年16回（うち内覧会7回。参加者数182名）開催し、共同研究をはじめとする最新の研究成果を積極的に紹介した。2016年度は、テレビ 20件、ラジオ 71件、新聞 884件、雑誌 72件、ミニコミ誌 177件、その他 155件の各媒体総数1,379件で、本館の活動が紹介された。

研究成果の社会還元及び教育普及活動

研究成果の社会還元として、継続して文化人類学・民族学の最新の研究成果を発信する「みんぱくゼミナール」を12回（参加者数 2,744名）、「映像に描かれる出会いと創造」をテーマに、映画の上映と研究者による解説をおこなうみんぱくワールドシネマを3回（参加者数 877名）、研究部のスタッフと来館者が展示場内でより身近に語り合う「みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう」を40回実施した（参加者数 1,695名）。

さらに、震災復興支援の一環として、研究公演「黒森神楽×雄勝法印神楽 in みんぱく公演」（参加者数426名）、研究公演「城山虎舞 in みんぱく」（参加者数 353名）を実施した。

また、シンポジウムを交えた民族誌映像の上映会「台湾文化光点計画民族誌映画にみる文化への視点——台湾、日本、ノルウェー、エチオピアの作品より」（参加者数 217名）及び「極北の自然とチュクチのくびと——みんぱく展示場と映画『ツンドラブック』をつなぐ」（参加者数 226名）を実施した。

特に、展示関連では、新構築した中央・北アジア展示場を広報するため、夏のみんぱくフォーラム 2016「中央・北アジアを駆けめぐる」と題し、映画会、コンサートなどの新展示に関連したイベントを6月～8月にかけて合計15回開催し、延べ11,865名の参加があった。同じく新構築したアイヌの文化展示場を広報するため、冬のみんぱくフォーラム2017「アイヌ展示チアシカラ！」と題し、公演、実演などの新展示に関連したイベントを12月～2月にかけて合計13回開催し、延べ8,040名の参加があった。これらの事業に関連して展示場内でのギャラリートークを実施し、新展示をより多くの来館者に紹介することができた。

また、特別展・企画展・展示イベントに関連するワークショップ、ゼミナール、ウィークエンド・サロン、上映会、公演など多数のイベントを開催し、展示の理解を深めることに寄与した。

これらの活動は、みんぱくカレンダーやチラシを制作し、関係諸施設を通じて配布したほか、広報誌『月刊みんぱく』を国立民族学博物館友の会会員に配付したり、全国の研究機関、大学等に寄贈したりすること等によって、広く情報発信した。視覚障がい者向けの同誌音訳版も並行して製作・配付した。

来館者サービスを向上させるため、スマホチケットサービス提供会社及び前売券の販売代理店を見直した結果、新たに特別展等期間限定前売券の販売も可能となり、利用者の手数料も抑えることができた。また、社会の節電対策として開始した夏季無料キャンペーンを28年度も実施し、8月の一ヶ月間高校生以下と65歳以上の方の観覧料を無料とした。

その他の活動

本館敷地内の案内誘導サインを、多様な来館者がアクセスしやすく快適に観覧できるよう視覚障害者を含めて検証実験をおこなったうえで視認しやすい配色に工夫した他、ベビールームやAED等の必要な情報が必要な人に伝わるようサインを全面的に見直した。

高齢者や身体が不自由な方等多くの方が快適に来館できるよう、特別展会期中に大阪モノレール「万博記念公園駅」から本館まで無料のシャトルバスを運行した。

今後の課題

平成29年度から小・中学生の無料化が始まる。さまざまな広報機会を捉えて無料化を積極的に発信していく。すでに学校団体向けに遠足・校外学習ガイドスの案内状の送付を従来の約200件から約5,000件に広げるなどPRに努めているが、各自治体の教育委員会との連携を強化するなど小・中学校とのさらなる協力体制を構築する。また、無料観覧日の見直しにより、一時的には入館者数の減少が危惧されるが、小・中学生の無料化をはじめ、展示の魅力を一段と高めることによって、長期的視野から本館の存在価値を高めていく。

研究成果の社会還元や教育普及活動においては、長年継続してきた既存の活動に加え、各種研究プロジェクトや外部資金による研究の成果を還元する活動を促進したり、近隣諸施設と連携した活動を積極的に企画・実施したりするなど、さらなる新規事業の検討が必要である。

国立民族学博物館要覧2016

- ・和文要覧 2016年7月発行
- ・英文要覧 2016年12月発行

ホームページ <http://www.minpaku.ac.jp/> (2017年3月31日現在)

本館の研究活動、博物館展示・事業活動、大学院教育の他、刊行物、文献図書資料、標本資料等あらゆる情報を、インターネットを介して世界に発信するためにホームページを作成している。

提供している主な情報は以下の通り。2016年度の訪問件数は774,417件。

・研究活動

研究部スタッフの研究活動や業績、本館が推進する研究プロジェクトや共同研究およびシンポジウム、研究出版物などの情報。

・博物館展示・事業活動

本館展示・企画展示・特別展示などの展示紹介、学術講演会・ゼミナール・研究公演・映画会などのイベント案内、博物館の利用案内、国立民族学博物館友の会などの情報。

・大学院教育

総合研究大学院大学の専攻概要、授業と研究指導、在学生の研究内容等および特別共同利用研究員制度などの情報。

・データベース

本館が所蔵する文献図書資料、標本資料、マルチメディア情報などのデータベース。

また、「みんなく e-news」を発行し、毎月開催している「みんなくゼミナール」、随時行われる「シンポジウム／フォーラム」「研究公演」「みんなく映画会」「特別展」などのお知らせを、月1回電子メールで配信している。2016年度の配信数は57,574部。

報道

●報道関係者との懇談会

2016年4月21日	10社（13名）	研究公演「黒森神楽×雄勝法印神楽 in みんなく公演」、連続講座「みんなく×ナレッジキャピタル——世界の『台所』」、新任紹介ほか
5月19日	9社（17名）	企画展「ワンロード——現代アポリジニ・アートの世界」、みんなく映画会「映画で知る中央・北アジア」、音楽の祭日2016 in みんなくほか
6月16日	14社（20名）	本館展示リニューアル完成、中央・北アジアを駆けめぐる——夏のみんぱくフォーラム2016関連コンサート&トークイベント、展示ツアー（企画展「ワンロード——現代アポリジニ・アートの世界」、中央・北アジア展示場、アイヌの文化展示場）ほか
7月21日	9社（12名）	特別展「見世物大博覧会」、企画展「順益台湾原住民博物館所蔵・学生創作ポスター展 台湾原住民族をめぐるイメージ」、みんなくワールドシネマ今年度テーマ「映像に描かれる〈出会いと創造〉」、みんなく秋の遠足・校外学習 事前見学&ガイダンス、身装画像データベース〈近代日本の身装文化〉、第10回文化財保存修復学会業績賞受賞について、新任紹介ほか
9月7日	19社（29名）	特別展「見世物大博覧会」報道・出版関係者向け内覧会
10月13日	6社（7名）	「人間ポンプ 安田里美 浅草木馬亭公演 上映会」「伊勢大神楽の獅子舞と放下芸——伊勢大神楽講社による総舞」、年末年始展示イベント「とり」、公開講演会「私たち人類はどこへ行くのか？ スイカで踊る、クジラを祭る——生き物と人 共生の風景」、上映会・シンポジウム「民族誌映画にみる文化への視点——台湾、日本、ノルウェー、エチオピアの作品より（台湾文化光点計画）」、公開フォーラム「世界の博物館2016」ほか
11月17日	8社（14名）	企画展「津波を越えて生きる——大槌町の奮闘の記録」、冬のみんぱくフォーラム2017「アイヌ展示チアシリカラ！（アイヌの展示をリニューアルしました）」、みんなく公演「アイヌ民話人形劇 ふんだりけったりクマ神さま」、アイヌの伝統的儀式「ミンパク オッタ カムイノミ（みんなくでのカムイノミ）」、みんなく映画会・みんなくワールドシネマ「パレードへようこそ」、国際公開セミナー「極北の自然とチュクチの人びと——みんなく展示場と映画『ツンドラブック』をつなぐ」ほか
12月15日	11社（15名）	学術潮流サロン「人と動物——つながりとその変化」、みんなく公演「トンコリ×ウポポ——アイヌ音楽ライブ by OKI / MAREWREW」、フォーラム関連イベント「アイヌ・アートにふれる日——木彫の可能性」、みんなく映画会・みんなくワールドシネマ「幸せのありか」、展示ツアー（年末年始展示イベント「とり」）ほか
2017年1月19日	8社（11名）	開館40周年記念事業について、開館40周年記念特別展「ピース——つなぐ・かざる・みせる」、国際シンポジウム「エイジフレンドリー・コミュニティ——変わりゆく人生を包みこむまち」。展示ツアー（企画展「津波を越えて生きる——大槌町の奮闘の記録」）ほか
2月16日	9社（14名）	小・中学生の本館展示・特別展示の観覧無料化について（開館40周年記念事業）、本館展示新構築完成記念式典・須藤健一館長退任記念講演会、アイヌの伝統的家屋「チセ」の屋根葺き替えについて、研究公演「城山虎舞 in みんなく」、連続講座「みんなく×ナレッジキャピタル——世界のピース」、国際シンポジウム「現代アジアにおけるお盆・中元節・七月の祭り——あの世とこの世をめぐる儀礼」、みんなく春の遠足・校外学習 事前見学&ガイダンス、公開講演会「恵（めぐ）みの水、災（わざわ）いの水——川、

		湖、海」ほか
3月8日	15社（20名）	開館40周年記念特別展「ビーズ——つなぐ・かざる・みせる」報道・出版関係者向け内覧会
3月22日	8社（13名）	本館展示新構築完成記念式典・須藤健一館長退任記念講演会

●新聞等報道件数

2016年度は、テレビ20件、ラジオ71件、新聞884件、雑誌72件、ミニコミ177件、他155件、計1,379件の報道があった。

月刊みんぱく

4月号	（第463号）	2016年4月1日発行	特集「体育会系」
5月号	（第464号）	2016年5月1日発行	特集「たまり場」
6月号	（第465号）	2016年6月1日発行	特集「ワンロード——現代アボリジニ・アートへの招待」
7月号	（第466号）	2016年7月1日発行	特集「変貌する中央・北アジア」
8月号	（第467号）	2016年8月1日発行	特集「『負』の遺産」
9月号	（第468号）	2016年9月1日発行	特集「見世物大博覧会」
10月号	（第469号）	2016年10月1日発行	特集「造る人と博物館」
11月号	（第470号）	2016年11月1日発行	特集「交流の場としてのアイヌ文化展示」
12月号	（第471号）	2016年12月1日発行	特集「人類学における映像」
1月号	（第472号）	2017年1月1日発行	特集「とり」
2月号	（第473号）	2017年2月1日発行	特集「災害を越えて」
3月号	（第474号）	2017年3月1日発行	特集「ビーズ」

みんぱくゼミナール

第455回 夷酋列像を考える【特別展「夷酋列像——蝦夷地イメージをめぐる 人・物・世界」関連】

2016年4月16日

講師 右代啓視（北海道博物館 学芸主幹）
内田順子（国立歴史民俗博物館 准教授）
日高真吾

受講者 288名

内容 特別展「夷酋列像——蝦夷地イメージをめぐる 人・物・世界」の概要と、夷酋列像が描かれるきっかけとなったクナシリ・メナシの戦い、フランスにおけるアイヌ文化の関心について実行委員メンバーがリレー形式で紹介し、夷酋列像の歴史的、文化的な意義について考えた。

第456回 ヒンドゥー聖地と巡礼の現在

2016年5月21日

講師 松尾瑞穂
受講者 228名

内容 インドには古代からたくさんの聖地があり、各地から巡礼者が集ってきた。近年では、交通網やメディアの発達、観光化、世界遺産化等により、巡礼のスタイルにも変化が見られる。今日の聖地の変化について考えた。

第457回 ポスト移行期モンゴルの文化変容【新展示（中央・北アジア展示）関連】

2016年6月18日

講師 小長谷有紀
受講者 226名

内容 モンゴルは世界で2番目に社会主義国となり、その後市場経済へ移行、現在はポスト社会主義期を経て、ポスト移行期を迎えている。新展示ではこうした歴史が生活や信仰に与えた影響を表したことを、紹介

した。

第458回 カザフ女性たちの結婚と子育て【新展示（中央・北アジア展示）関連】

2016年7月16日

講師 藤本透子

受講者 175名

内容 中央アジアのカザフスタンでは、旧ソ連からの独立を経て、結婚と子育てに大きな変化がみられる。近代、伝統、イスラームという複数の価値観のあいだで揺れ動く家族のあり方について考えた。

第459回 飛ばねえカワウは、ただのカワウだ——鵜飼研究の魅力を語る

2016年8月20日

講師 卯田宗平

受講者 157名

内容 鵜飼のカワウはなぜ飛んで逃げないのか。どのような魚が獲れるのか。鵜飼にかかわるさまざまな疑問を切り口に、中国と日本の自然環境や食文化の違い、そして鵜飼研究の魅力について説明した。

第460回 軽業の系譜と民俗芸能——特別展「見世物大博覧会」から【特別展「見世物大博覧会」関連】

2016年9月17日

講師 笹原亮二

受講者 242名

内容 古来演じられてきた軽業は、その後田楽や大神楽に引き継がれ、やがてそれに魅了された各地の人びとが自ら演じ、民俗芸能として伝来するに至った。そうした軽業の系譜と民俗芸能について考えた。

第461回 言葉から文化を考える——「アラブ的思考様式」再考

2016年10月15日

講師 西尾哲夫

受講者 186名

内容 名著『風土』のなかで和辻哲郎はアラブ人を「服従的、戦闘的の二重の性格」をもった「砂漠の人間」と評しているが、このまなざしは日本人の中東世界観に依然として受けつがれている。アラブ遊牧民の日常的世界観を彼らの言葉を分析することで再考した。

第462回 博物館の中の古代アメリカ文明

2016年11月19日

講師 鈴木 紀

受講者 175名

内容 マヤ、アステカなどの古代アメリカ文明は博物館でどのように展示されているのだろうか。これらの文明は消滅した過去の文明だろうか、それとも、現代にも影響を及ぼしているのだろうか。主に北米と中南米諸国の博物館を比較しながら、古代文明展示が発するメッセージを探った。

第463回 アイヌ語はどこから来たのか。そして、どこへ行くのか。【新展示（アイヌの文化展示）関連】

2016年12月17日

講師 中川 裕（千葉大学 教授）

齋藤玲子

受講者 326名

内容 アイヌ語と日本語の歴史的な関係、アイヌ語はどのような言語と似ているのかなどということについて言語学的に解説するとともに、現在の保存・継承の取り組みや将来への展望についてもお話した。あわせて「アイヌの文化」新展示で見ると聞くことのできるアイヌ語を紹介した。

第464回 アイヌ文化と観光【新展示（アイヌの文化展示）関連】

2017年1月21日

講師 齋藤玲子

受講者 226名

内容 アイヌの工芸品販売や舞踊公演は明治・大正時代からおこなわれていた。かつては「文化を売り物にする」ことへの批判もあったが、観光が文化継承を支えてきた面もあり、現在は経済的自立や文化発信の手段としても評価されている。歴史を踏まえて、さまざまな事例を紹介した。

第465回 津波を越えて生きる——大槌町の奮闘の記録【企画展「津波を越えて生きる——大槌町の奮闘の記録」関連】

2017年2月18日

講師 竹沢尚一郎

受講者 229名

内容 企画展「津波を越えて生きる——大槌町の奮闘の記録」は、被災地のひとつである岩手県大槌町に焦点を当てて、被災前のまちの姿と、被災直後のまちの風景、そして被災直後から半年間、まちの各地で実現された人びとの助け合いの様子を再現したことをお話しした。

第466回 人間にとってビーズとは何か？——特別展「ビーズ——つなぐ・かざる・みせる」から

【開館40周年記念特別展「ビーズ——つなぐ・かざる・みせる」関連】

2017年3月18日

講師 池谷和信

受講者 286名

内容 わずか直径が数ミリのものからつくりだされるビーズの世界。これは、10万年前に生まれて現在では世界中にひろがっている。美しさに秘められた世界各地の人びとの知恵を紹介した。

みんなくウィークエンド・サロン——研究者と話そう

第419回 2016年4月3日 「アフリカの」布はどこから来たか

講師 三島禎子

参加人数 45人

内容 アフリカらしさがにじみ出る工業製プリント布は、誰がどのように創りだしたもののなのか。今日にいたるまでの変遷を、布を取引きする商人の視点から話し、アフリカと世界のつながりを考えた。

第420回 2016年4月10日 スイスにおける高齢者のウェルビーイングと地域の癒し文化

講師 鈴木七美

参加人数 21人

内容 4つの公用語をもつスイスでは、各地の特徴的な食文化や養生の習慣がみられる。様々なヒーリング・アートが実践されてきたアッペンツェルやエメンタール地方をとりあげ、高齢者たちが日々の生活で続けている癒しや養生の文化とウェルビーイングについて考えた。

第421回 2016年4月17日 兵士の写真は語りかける——第二次エチオピア戦争のイタリア兵

講師 川瀬 慈

参加人数 26人

内容 1930年代半ばの第二次エチオピア戦争の際、イタリア軍が現在のエチオピアとエリトリアにおいて撮影した写真を紹介し、当時の諸民族やイタリア兵の生活について考察した。

第422回 2016年4月24日 夷酋列像展をめぐる旅

講師 日高真吾

参加人数 85人

内容 夷酋列像は、クナシリメナシの戦いで、立ち上がったアイヌに戦いをやめるよう説得したアイヌの有力者12人を描いたものである。今回は夷酋列像をめぐる人の交流、物の交易、そして当時の日本人の世界観について紹介した。

第423回 2016年5月1日 万博とみんなくアンド大阪・日本の将来

講師 出口正之

参加人数 40人

内容 近くにEXPOCITY（「万博都市」の英訳）が誕生している。みんなくと万博も切っても切れない関係にある中、猪瀬直樹元東京都知事が2025年大阪万博開催を強力に支持し、「フィランソロピー首都構想」を発表した。万博とみんなくの不思議な縁を考えながら大阪と日本の将来を考えた。

第424回 2016年5月8日 グローバル化の中のアラビア語と中東地域の人びと

講師 西尾哲夫

参加人数 37人

内容 イスラームの聖典「クルアーン（コーラン）」はアラビア語によって書かれている。クルアーンとアラビア語の関係が、イスラーム文明の基盤を作ってきた。人間の移動・移住やIT化によって、アラビア語が作り出す公共的なコミュニケーション空間はおおきく変化している。言葉の面からアラブの民主化について考えた。

第425回 2016年5月15日 南太平洋のサンゴ島を掘る

講師 印東道子

参加人数 24人

内容 南太平洋の小さな島に住む人たちは、いつ、どこからやってきて、どんな生活をしていたのか。それを雄弁に語る証拠が土の中に眠っていた。ミクロネシアのファイス島で行った発掘調査から見えてきた島の暮らしを紹介した。

第426回 2016年5月22日 ネパールの楽師ガンダルバ——1982年の映像を手がかりに

講師 南 真木人

参加人数 37人

内容 もと不可触カーストとされ、サランギという弓奏楽器の弾き語りを生業としてきた楽師ガンダルバ。現在彼らはどのように暮らしをたて、音楽と関わっているのか。34年前の映像も用いながら、ガンダルバの動態を考えた。

第427回 2016年6月26日 オーストラリア先住民アボリジニのアートとワンロード

講師 丹羽典生

参加人数 71人

内容 オーストラリア西部の砂漠には、世界で最も長いとも言われる1850キロメートルの長さの一本道がある。その道を題材としたアボリジニ・アートについて、アボリジニの生活の変化に触れつつ紹介した。

第428回 2016年7月3日 言語と文化と翻訳——なぜ漱石は“i love you”を訳さなかったのか

講師 吉岡 乾

参加人数 62人

内容 文学作品などが、多くの言語に翻訳されて世界中で出版されることは、古今にわたって見られる。時代が下って世界は更に狭くなり、翻訳・通訳の出番が増えた。ここで改めて、ある言語の表現を別の言語の表現にすると伴う問題点を考えた。

第429回 2016年7月10日 極北の民チュクチの暮らし

講師 池谷和信

参加人数 46人

内容 ロシアの北東部にチュクチの人びとが暮らしている。彼らは、海岸部ではクジラやセイウチなどの海獣類の狩猟、内陸部ではトナカイ飼育などを伝統的な生業として従事してきた。ここでは、過去100年間のなかで社会主義体制という国家の変化とチュクチの暮らしとのかかわり方を紹介した。

第430回 2016年7月17日 メルボルン中華街の春節

講師 河合洋尚

参加人数 43人

内容 オーストラリアのメルボルンには、南半球最大といわれる中華街があり、春節（旧正月）時には龍舞などのイベントで賑わう。メルボルン中華街の今を、春節を中心に紹介した。

第431回 2016年7月24日 ウズベキスタンの人々の暮らしと食文化——遺跡の発掘調査から探る

講師 寺村裕史

参加人数 46人

内容 6月に中央・北アジア展示が新しくオープンした。本サロンでは、新しくなった展示場の紹介も兼ねつつ、ウズベキスタンの都市遺跡の発掘調査で見つかったパン焼き窯や部屋跡と、現代の窯や建物とを比較しながら、現地の人々の暮らしや食文化について紹介した。

第432回 2016年7月31日 中央アジアの手工芸

講師 藤本透子

参加人数 103人

内容 新展示では、中央アジアの人たちが作り、日常生活で使用しているものを数多く公開する。敷物や壁掛け、鞭などの各世帯で作られてきたものから、楽器や陶器などの工房で製作されているものまで、市場経済化のなかで変化してきたもの作りについて紹介した。

第433回 2016年8月7日 「無視覚流」の極意を求めて——ユニバーサル・ミュージアムの新展開

講師 廣瀬浩二郎

参加人数 24人

内容 7月2日から開催された兵庫県立美術館の企画展「つなぐ×つつむ×つかむ」では、来館者がアイマスクを着けて、彫刻に触れる展示がおこなわれた。本展に全面協力した話者が、この展示の意義をユニバーサル・ミュージアムの立場から紹介した。

第434回 2016年8月14日 デジタル時代の原住民イメージ

講師 野林厚志

参加人数 48人

内容 情報産業がめざましい発展を遂げる台湾では、若い世代が豊かな構想力や創造力を発揮しデジタルコンテンツの制作に取り組んでいる。こうした創作活動が台湾における民族間関係にも深く関わっていることを紹介した。

第435回 2016年8月21日 訪ねてみよう、手話の世界！

講師 飯泉菜穂子

参加人数 14人

内容 「手話って身振り・手振りだから語源がはっきりしていてわかりやすいですよね？」「手話って世界共通なんですよ？」答えは「いいえ」である。近くて遠いワンダーランド、手話の世界を言語・コミュニティ・異文化をキーワードに案内した。

第436回 2016年8月28日 イタリア人と食

講師 宇田川妙子

参加人数 37人

内容 イタリアというと「食」というイメージがあり、彼らも自分たちの食に誇りをもっている。昨年、ミラノ万博のテーマは食であり、スローフード運動の発祥もイタリアであった。なぜ、イタリアでは食との関係がそれほど緊密なのか、彼らの生活や歴史の中から探った。

第437回 2016年9月4日 民博所蔵「ジョージ・ブラウン・コレクション」の来歴をたどる

講師 林 勲男

参加人数 15人

内 容 当館は、キリスト教宣教師ジョージ・ブラウンが、南太平洋の島々で収集した約3,000点の民族誌資料を所蔵している。1917年に彼が亡くなった後、コレクションは売却され、複数の博物館を転々とし、その間に分散してしまった資料もある。コレクションの来歴をたどり、当館で新たに始まったプロジェクトについて紹介した。

第438回 2016年9月25日 宗教と文字から見た中国——中国展示のひとつの見方

講 師 横山廣子

参加人数 47人

内 容 中国は多民族で構成され、文化も多様である。しかし、文字と宗教を通して全体を見わたすと、漢字を発達させた中国文明圏のほかに、いくつかの文明の潮流が中国をかたちづくってきたことがわかる。中国における文明・文化の展開と交流を鳥瞰図的にとらえてみた。

第439回 2016年10月2日 ベトナムの民族観光——マイチャウの白タイ村落

講 師 檜永真佐夫

参加人数 24人

内 容 マイチャウは1990年代以来、ベトナムにおける代表的な少数民族観光地として発展してきた。なんと言ってもそこでの魅力は、白タイ族の高床式家屋にホームステイできることである。マイチャウに行ってももしかすると聞けない、現地白タイ族の歴史と文化について紹介した。

第440回 2016年10月9日 魅せるモノ・魅せられるモノ——見世物のおもしろさを巡って

講 師 笹原亮二

参加人数 44人

内 容 9月8日から開催の特別展「見世物大博覧会」の全体的な内容について、紹介した。展示全体は、人が自らのカラダを用いて演じる軽業・曲芸・見世物小屋の芸・芝居仕立ての芸などと、人間以外のモノを用いた籠細工・一式細工・生人形・菊人形・動物などから構成されている。それらを通じて、日本の見世物の全体像を考えた。

第441回 2016年10月16日 人間にとってカフェとは何か

講 師 太田心平

参加人数 27人

内 容 コーヒーの歴史とともに発達したカフェの文化。サロンとして花開いた過去から、ノマド・ワーキング（特定の場所にしばられない仕事や勉強の仕方）の場としての現在までの歴史や、地域ごとに多様な実情を紹介し、人間にとってカフェとは何か、参加者と考えた。

第442回 2016年10月23日 南米アンデス文明「ヘビ・ジャガー神官の墓」の発見

講 師 關 雄二

参加人数 38人

内 容 日本・ペルー合同考古学調査団は、2015年9月に南米ペルー国の北高地に位置するパコパンパ遺跡で、紀元前600年頃にさかのぼる、金製首飾りと、ヘビとジャガーを象った土器を副葬した墓を発見し、世界的に話題となった。その発見の過程と、学術的意義を紹介した。

第443回 2016年10月30日 食からみる中国文化および世界とのつながり

講 師 韓 敏

参加人数 45人

内 容 「民以食為天」という言葉は、中国社会における食の重要性と、人類社会における食のもつ普遍性を語っている。食べものや加工道具などの展示品から、「食」がいかに人と自然、人と人、人と神、そして異なる民族と文明をつないできたのかを考えた。

第444回 2016年11月6日 アンケートが語るビデオテークとみんぱく電子ガイド

講師 山本泰則

参加人数 12人

内容 長年展示場で活躍してきたビデオテークとみんぱく電子ガイドのリニューアルの時期をむかえている。今回は、来館者がビデオテークとみんぱく電子ガイドをどう見ているか、今年とったアンケートを通して見える姿について、紹介した。

第445回 2016年11月13日 アラブ人キリスト教徒の視点からみた中東情勢

講師 菅瀬晶子

参加人数 52人

内容 2010年末に起こった「アラブの春」以降、中東各地では政変や紛争が相次ぎ、スンナ派ムスリム以外の宗教的マイノリティの存在がクローズアップされるようになった。今回はユダヤ人国家イスラエルに住んでいるアラブ人キリスト教徒たちに焦点を当て、彼らがパレスチナ・イスラエル問題やイラク・シリア情勢をどのようにみているのか、彼ら自身に起こっている変化をまじえて紹介した。

第446回 2016年11月27日 博物学と見世物——珍獣幻獣大集合

講師 山中由里子

参加人数 81人

内容 駱駝、象、虎、鰐、駝鳥など、外国からもたらされた珍しい動物は江戸の人びとの好奇心を刺激し、見世物の対象となった。一方、人魚のミイラは、日本から輸出され欧米でも見世物として大流行した幻獣である。博物学と娯楽のこの境界には、たこ娘にかに男といった、妖しいハイブリッド獣たちも生息している。

第447回 2016年12月11日 民族音楽学の考え方

講師 寺田吉孝

参加人数 30人

内容 民族音楽学は1950年代に北米で生まれた比較的新しい研究分野で、世界中の音楽を研究の対象としている。一体どのように研究が行われているのか、この分野の成り立ち、基本的な考え方、調査方法について紹介した。

第448回 2016年12月18日 先住民とアート——アイヌとカナダ先住民の比較

講師 岸上伸啓

参加人数 49人

内容 世界各地の先住民は歴史的に培ってきた技能を用いてさまざまな美術・工芸品を創り出してきた。カナダの北西海岸先住民によるトーテムポールや仮面、木箱、版画の制作とアイヌの木彫り彫刻品やタペストリー、衣類の制作を比較し、その意義について検討した。

第449回 2016年12月25日 みんぱくの資料をあつめてみよう——データベースを活用した仮想展示の作り方

講師 丸川雄三

参加人数 20人

内容 みんぱくの標本資料は、そのほとんどがホームページ上で公開されている。展示場で気になる資料を見つけたら、もっと詳しい情報を標本資料データベースで調べることができる。使いこなすと自分の好きなテーマで標本資料をあつめて自分だけの展示を作ることなどもできるようになる。

第450回 2017年1月8日 アマゾンの聖人祭——在来の伝統とキリスト教の融合

講師 齋藤 晃

参加人数 15人

内容 南米ボリビア・アマゾンのモホス地方には、在来の踊りや音楽を取り入れたカトリックの聖人祭が伝わっている。サン・イグナシオの町の祭礼はとりわけ盛大で、ユネスコの無形文化遺産に指定されている。モホス地方の聖人祭の現状を紹介し、歴史を振り返った。

第451回 2017年1月15日 日本の鵜飼文化は誰が守るのか

講師 卯田宗平

参加人数 13人

内容 鵜飼とはウミウやカワウを使って魚を捕る漁法である。日本各地の鵜飼の現場では船頭さんの高齢化問題や、鵜飼道具の作り手不足といった問題がある。なかでも、野生のウミウを捕獲する技術の継承は無視できない問題である。ここではウミウ捕獲技術から鵜飼文化の今後について考えた。

第452回 2017年1月22日 東日本大震災の教訓

講師 竹沢尚一郎

参加人数 29人

内容 甚大な被害を出した2011年の東日本大震災。その一方で、被災者たちの沈着で助け合いの精神に満ちた行動は世界中で賞賛を受けた。なぜ、彼らはそのような行動をとることができたのか。私たちはそこから何を教訓として受け取るべきなのか。企画展に合わせて考えた。

第453回 2017年2月5日 アイヌの衣文化

講師 齋藤玲子

参加人数 73人

内容 アイヌの衣文化は明治時代から研究者の関心の的となり、多くの実物資料や文献が残されてきた。しかし近年、作り手による研究や、織物の素材や技法に注目した調査により、新たな知見が得られている。既存の研究の概要とともに、最近の成果について紹介した。

第454回 2017年2月12日 博物館資料をソースコミュニティと再会させる

講師 伊藤敦規

参加人数 16人

内容 民族誌資料を作った人、使った人、その子孫（ソースコミュニティ）を博物館に招待し、自分たちの文化に関係する資料を見たり、触れたり、文字記録を確認してもらって研究を行っている。時間と空間を超えた「再会」のねらい、作業の進め方、得られた結果などを紹介した。

第455回 2017年2月19日 アイヌの信仰・儀礼

講師 北原次郎太

参加人数 92人

内容 アイヌ民族の信仰と儀礼からは、様々な祭具類などのアイヌ文化の特色と、日本をはじめとする周囲の文化との共通点が見えてくる。この講座では「カムイの観念」や「死生観」など、アイヌ民族の信仰を知るための基本的な事柄について解説した。

第456回 2017年2月26日 展示場のなかの資料を「まもる」工夫

講師 園田直子

参加人数 27人

内容 展示場には、観覧者の目につかないところにも、資料を「まもる」ための工夫がたくさんある。光の影響から資料をまもるフィルム、湿度を一定にたもつ調湿効果のあるケース、銀製品を変色させないフィルター付きケース、などなど。保存の目で、展示場を回った。

第457回 2017年3月5日 イスラームとムスリムの関係性

講師 相島葉月

参加人数 41人

内容 人類学的なイスラーム研究を行っている者は、自分の研究対象がイスラームなのか、ムスリムなのかという問いに直面する。イギリス人ムスリムによってYouTubeにアップロードされたファレル・ウィリアムスの『ハッピー』のパロディー版より、その違いについて検討した。

第458回 2017年3月12日 新構築展示のころとかたち

講師 須藤健一

参加人数 96人

内容 新構築展示は、アイヌの文化展示のチセ（伝統家屋）の屋根替えて完了する。フォーラム、グローバル、ハンズオンなど、新しいコンセプトによる展示の出来栄やこの展示刷新のねらいとそのすがたについて考えた。

研究公演

「黒森神楽×雄勝法印神楽 in みんなく公演」

2016年5月29日

司会 日高真吾

解説 林 勲男、小谷竜介、神田より子

出演 黒森神楽衆、雄勝法印神楽衆

参加者 426名

内容 岩手県、宮城県の神楽で、国の重要無形民俗文化財に指定されている黒森神楽、雄勝法印神楽の公演を行った。また、それぞれの神楽を調査している研究者も交えて、震災の影響や地域の復興に向けた活動などについてパネルディスカッションを行った。

「アイヌ民話人形劇 ふんだりけったりクマ神さま」

2016年12月3日

司会 齋藤玲子

解説 遠州まさき、秋辺日出男、澤井和彦

出演 平澤隆二、河田泰子、渡辺かよ、平久美子、西田正男、平加代子

参加者 594名

内容 2012年にオープンした阿寒湖アイヌシアター「イコロ」で上演するために共同制作された1作目の人形劇を上演した。欲ばりなクマ神がほかのカムイたちから懲らしめられ、その後、人間によって撃ち取られ、送り儀礼でカムイの国へ帰るという物語。人間と動物との関係をわかりやすく楽しく理解し、口承文芸がアイヌの世界観や戒めを伝えてきたことを紹介した。

「トンコリ×ウポポ 2017——アイヌ音楽ライブ BY OKI / MAREWREW」

2017年1月29日

司会 齋藤玲子

出演 OKI (オキ)、MAREWREW (マレウレウ)

参加者 739名

内容 樺太や北海道北部で演奏されてきたトンコリという弦楽器（「五弦琴」とも呼ばれる）を復活させ、アイヌ音楽をひろめてきたミュージシャンと、輪唱が特徴的な伝統歌・ウポポを再現する女性グループを招き、アイヌ音楽の地域性や伝統を基盤とした現代の文化活動の一端を紹介した。

「城山虎舞 in みんなく」

2017年3月19日

司会 日高真吾

解説 橋本裕之、中川 眞、笹山政幸

出演 城山虎舞

参加者 353名

内容 岩手県の三陸沿岸部を代表する郷土芸能「虎舞」の公演を行った。今回は広く分布する虎舞の一つ、「城山虎舞」を招へいし、城山虎舞の出演者や岩手の芸能支援に尽力した協力者とともに、芸能の継承のあり方をテーマとしたディスカッションを開催し、地域文化の重要性について考えた。

みんなく映画会

2016年6月12日

映画で知る中央・北アジア【新展示（中央・北アジア展示）関連】

「デルス・ウザーラ」

司会 藤本透子

解説 佐々木史郎（国立アイヌ民族博物館設立準備室 主幹）

参加者 252名

内容 新しくなった中央・北アジア展示を広く知っていただくため、展示のテーマに関連した映画の上映会を、研究者の解説付きで4回にわたって実施。第1回は、手つかずの森の中で自然とともに生きる先住民族と、ロシア人探検家との友情を、美しい映像美で描いたソ連・日本合作映画「デルス・ウザーラ」を上映。解説ではそこに描かれた虚実を解きほぐし、20世紀初頭の極東ロシアの先住民族たちの現実を見つめた。

2016年6月25日

映画で知る中央・北アジア【新展示（中央・北アジア展示）関連】

「モンゴル」

司会 藤本透子

解説 小長谷有紀

参加者 249名

内容 新しくなった中央・北アジア展示を広く知っていただくため、展示のテーマに関連した映画の上映会を、研究者の解説付きで4回にわたって実施。第2回は、ロシア人のセルゲイ・ボドロフが監督、主役に日本人の浅野忠信、準主役に中国人の孫紅雷が扮し2007年に公開された「モンゴル」を上映。解説では他のチンギス・ハーン映画と比較し、本作におけるグローバルな異文化理解について考えた。

2016年7月9日

映画で知る中央・北アジア【新展示（中央・北アジア展示）関連】

「山嶺の女王 クルマンジャン」

司会 藤本透子

解説 吉田世津子（四国学院大学 教授）

参加者 427名

内容 新しくなった中央・北アジア展示を広く知っていただくため、展示のテーマに関連した映画の上映会を、研究者の解説付きで4回にわたって実施。第3回はロシア帝国が中央アジアを次々と勢力下に治めていった時代に、ひとりの女性として苦悩しながらも政治手腕を発揮したクルマンジャン・ダトカの生涯を描いたキルギス（クルグズスタン）映画「山嶺の女王 クルマンジャン」を上映。解説では映画の背景について説明し、みんなくの展示や映像資料との関連についても紹介した。

2016年7月18日

映画で知る中央・北アジア【新展示（中央・北アジア展示）関連】

「くるみの木」

司会 小長谷有紀

解説 佐野伸寿（映画製作者）、藤本透子

参加者 452名

内容 新しくなった中央・北アジア展示を広く知っていただくため、展示のテーマに関連した映画上映会を、研究者の解説付きで4回にわたって実施。第4回はカザフスタンの人びとの日常を、風刺のきいたコメディ・タッチで生き生きと描いた「くるみの木」を上映。解説ではカザフスタンやカザフ人の暮らしについてお話しし、関連するみんなくの中央・北アジア新展示についても紹介した。

2016年9月22日

みんなくワールドシネマ 映像に描かれる〈出会いと創造〉

「禁じられた歌声」

司 会 鈴木 紀

解 説 竹沢尚一郎

参加者 378名

内 容 〈出会いと創造〉をキーワードに、研究者による解説付きの上映会「みんなくワールドシネマ」を実施。第34回はフランス・モーリタニア合作、イスラーム武装勢力に占拠されたマリ共和国の古都トンプクトゥを舞台とする「禁じられた歌声」を上映。過酷な状況の中での人びとの静かな抵抗と自由への叫びをとおして、今、世界で起きている出来事について考えた。

2016年11月12日、13日

台湾文化光点計画上映会・シンポジウム

民族誌映画にみる文化への視点——台湾、日本、ノルウェー、エチオピアの作品より

「虹の物語」

「靈山」

「受け継ぐ人々」

「僕らの時代は」

「怒 大阪浪速の太鼓集団」

司会・解説

野林厚志、川瀬 慈

パネルディスカッション

比令亞布（「虹の物語」監督）

蘇弘恩（「靈山」監督）

李佳玲（「靈山」プロデューサー）

ロッセッラ・ラガツイ（「受け継ぐ人々」監督）

川瀬慈（「僕らの時代は」監督）

寺田吉孝（「怒 大阪浪速の太鼓集団」監修）

野林厚志

参加者 217名

内 容 台湾原住民の映像作家が、自らの文化や社会の変容をテーマに制作した民族誌映画の上映を行い、さらに台湾との比較の見地から、ノルウェーの先住民や、日本、エチオピアのマイノリティの音楽文化をテーマにした民族誌映画の上映を行った。あわせてシンポジウムを開催し、それぞれの主題に関する映像のアプローチについて制作者間で論議を行った。

2016年12月4日

みんなくワールドシネマ 映像に描かれる〈出会いと創造〉

「パレードへようこそ」

司 会 松尾瑞穂

解 説 吉田俊実（東京工科大学 教授）

参加者 203名

内 容 〈出会いと創造〉をキーワードに、研究者による解説付きの上映会「みんなくワールドシネマ」を実施。第35回は1984年サッチャー政権下のイギリスを舞台に、ストライキを敢行する炭坑労働者と、彼らを支援するゲイグループが、理解しあい結束するまでを描いたイギリス映画「パレードへようこそ」を上映。異なった環境や立場にいる人びとが、偏見や差異をどのように乗り越え、交流することが出来るかを考えた。

2016年12月23日

人間文化研究機構北東アジア地域研究推進事業 国立民族学博物館拠点 国際公開セミナー

極北の自然とチュクチの人びと——みんなく展示場と映画『ツンドラブック』をつなぐ

司 会 池谷和信

総合討論 アレクセイ・ヴァフルシェフ（「ツンドラブック」監督）

呉人徳司（東京外国語大学 准教授）

山田孝子（金沢星稜大学 教授）

- 池谷和信
 参加者 226名
 内容 新しくなった中央・北アジア展示場の資料が収集された場所と同じ地域の民族誌映像を上映し、チュクチの文化をより深く紹介した。また、モスクワから映画の監督を招いて、映画の背景について話をうかがった。

2017年2月11日

- みんなくワールドシネマ 映像に描かれる〈出会いと創造〉
 「幸せのありか」
 司会 菅瀬晶子
 解説 信田敏宏
 参加者 296名
 内容 〈出会いと創造〉をキーワードに、研究者による解説付きの上映会「みんなくワールドシネマ」を実施。第36回は民主化へと移行する時代を背景に、脳性麻痺を患っている少年の成長を描いたポーランド映画「幸せのありか」を上映。自分の意思と感情が明確にも関わらず、家族にも伝えられないでいる青年の視点をとおして、健常者の障害者への理解について考えた。

博物館社会連携

●学習キット「みんなく」

学校機関や各種社会教育施設を対象に、本館の研究成果をわかりやすく伝えることを目的として学習キット「みんなく」の貸し出しを実施している。みんなくは世界の国や地域の衣装や楽器、日常生活で使う道具や子どもたちの学用品などをスーツケースにパックしたもので、2017年3月現在で14種類23パックを用意している。

名称	個数	2016年度貸し出し回数
極北を生きる	2	20
アンデスの玉手箱	2	26
ジャワ島の装い	1	11
イスラム教とアラブ世界のくらし	1	15
ブータンの学校生活	1	8
ソウルスタイル	2	20
ソウルのこども時間	2	20
インドのサリーとクルター	2	20
プリコラージュ	3	3
アラビアンナイトの世界	2	19
アイヌ文化にであう	1	12
アイヌ文化にであう2	1	13
モンゴル	2	31
あるく、ウメサオタダオ展	1	5

●ワークショップ

2016年7月23日（土）に夏休みこどもワークショップ「カザフのひつじ ウズベクのひつじ——フィールドワークに挑戦！」を実施した。小学4～6年生を対象に参加者を募集し、13名が参加した。参加者は、展示場で調査したことや講師から聞いたことなどを報告書にまとめて発表した。

また、展示イベント「ハチュカル——アルメニアの十字架石碑をめぐる物語」（開催期間：2016年9月29日（木）～10月11日（火））に関連して、2016年10月9日（日）にワークショップ「ハチュカル——拓本づくりでまなぶアルメニア十字架」を開催した（参加者数19名）。

●ワークシート

テーマに沿って展示場を見学できるガイドマップ「みんなく見どころアラカルト」や、年末年始展示イベント「とり」（開催期間：2016年12月8日（木）～2017年1月24日（火））に関連して2017年1月9日（月・祝）に開催したイベント「みんなくでバードウォッチング！」で配布したガイドマップなどを本館のホームページ上に掲載し、ダウンロードして利用できるようにしている。

●みんなく春と秋の遠足・校外学習 事前見学&ガイダンス

春のガイダンス 2016年4月7日（木）、8日（金）

秋のガイダンス 2016年8月23日（火）、25日（木）

本館を利用する学校団体の引率教師を対象としたガイダンスを春と秋に実施し、春には24団体80名、秋には28団体72名、計52団体152名の学校関係者が参加した。

当ガイダンスでは、遠足や校外学習など、博物館見学の準備や事前・事後の学習に役立つツールを紹介したほか、見学に関するさまざまな相談も受けた。

●職場体験

2016年10月18日（火）～11月18日（金）

学校教育及び社会教育における体験活動の促進を図り、中学校等の生徒の社会性を育む観点から、中学生に「職場体験学習」の機会を提供しており、2016年度は5校10名を受け入れた。

その他の事業

●「ミュージアムぐるっとバス・関西2016」

関西地区の美術館・博物館の宣伝・広報と新規需要の掘り起こし、関西文化の振興等を目的として、実行委員会世話人会の一員として参画した。

●「音楽の祭日2016 in みんなく」

実施日：2016年6月19日

フランスで始まった夏至の日を音楽で祝う「音楽の祭典」が、2002年から日本でも「音楽の祭日」として開催されるようになり、当館もその趣旨に賛同し音楽を愛する一般市民に広く当館を解放して開催することとなった。当日は26のグループや個人の演奏があった。

●展示場クイズ「みんなQ」

クイズ「みんなQ」は、展示を観覧しながら知識や興味を広げてもらおうと、クイズ形式で本館展示を楽しんでもらう企画である。

本館展示の新構築に合わせ、2016年7月21日（木）～8月23日（火）に「みんなQ 中央・北アジア編」、2016年12月15日（木）～2017年1月24日（火）に「みんなQ アイヌの文化編」を実施した。

●「みんなく×MBS ラジオ presents 浜村淳と美女がせまる！見世物大博覧会」

特別展「見世物大博覧会」の関連イベントとして、日本文化にも精通しているタレントの浜村淳さんと、MBSの若手アナウンサー2名、笹原亮二（本館教授・特別展実行委員長）によるトークイベント「みんなく×MBS ラジオ presents 浜村淳がせまる！驚きと幻想の見世物大博覧会」を開催した（参加者数446名）。

●カムイノミ

実施日：2016年12月1日

カムイノミというアイヌ語は「神への祈り」という意味であり、その実施は本館が所蔵するアイヌ標本資料の安全な保管と後世への確実な伝承を目的としている。従来は萱野 茂氏（故人、萱野茂二風谷アイヌ資料館前館長）によって非公開でおこなわれていた。2007年度からは、社団法人北海道ウタリ協会（現 公益社団法人北海道アイヌ協会）の会員がカムイノミと併せてアイヌ古式舞踊の演舞を公開により実施し、2016年度は阿寒アイヌ協会の協力を受けた。

●北大阪ミュージアムメッセ

2016年11月19日（土）、11月20日（日）に、北大阪の8市3町の美術館・博物館の文化祭「北大阪ミュージアムメッセ」を本館にて開催し、展示やワークショップ、楽器の演奏等がおこなわれた。

●連続講座「みんなく×ナレッジキャピタル」

一般社団法人ナレッジキャピタルとの間に取り交わした連携協力協定に基づき、グランフロント大阪において連続講座「みんなく×ナレッジキャピタル」を、上半期は「世界の『台所』」をテーマに、下半期は「展示キュレーションの誘惑——新しいみんなくの展示ができるまで」をテーマに合計14回（うち2回は展示ツアー）開講した。

ボランティア活動

「みんなくミュージアムパートナーズ（MMP）」は、本館の博物館活動の企画や運営をサポートする自立的な組織として2004年9月に発足した団体である。

来館者からの要望に応じておこなう視覚障がい者に対する展示場案内や、学校団体に対する教育プログラム「わくわく体験inみんなく」、一般来館者向けのものづくりワークショップなど、多岐に広がる活動を本館との協働で進めている。また、館外でおこなわれるワークショップフェスやボランティア交流会にも積極的に参加し、他の博物館や施設との交流を広めている。

一般財団法人千里文化財団の事業

●国立民族学博物館友の会講演会（協力：国立民族学博物館）

◎大阪：国立民族学博物館 第5セミナー室（毎月第1土曜日開催）

第453回 「アイヌの衣服から見えてきたこと」【特別展「夷酋列像」関連】

2016年4月2日 講師 吉本 忍（民博名誉教授） 参加人数 55名

特別展「夷酋列像——蝦夷地イメージをめぐる人・物・世界」に展示されていた最古の衣服資料を手がかりに、16、7世紀におけるアイヌの対外活動について紹介した。

第454回 「国境の地に生きる——フィンランド・カレリアとエストニア・セトゥの人びと」

【第87回民族学研修の旅関連】

2016年5月7日 講師 庄司博史（民博名誉教授） 参加人数 49名

国境により分断された人びとが暮らすカレリア地方、セトゥ地方に着目し、過疎化と多数派への同化の波のなか、伝統文化を維持し続けようとする人びとの姿を紹介した。

第455回 「シンドバード航海記の成立の謎を追って——中東地域の民衆文化研究への新視点」

【現代中東地域研究推進事業拠点設置関連】

2016年6月4日 講師 西尾哲夫 参加人数 41名

新しく発見された「シンドバード航海記」の「第七の航海記」の第三の写本を紹介するとともに、物語成立の謎をさぐった。

第456回 「中央アジアのイスラーム——ある家族の物語から」【新中央・北アジア展示関連】

2016年7月2日 講師 藤本透子 参加人数 55名

カザフスタンに暮らすある家族に注目し、世代や個人で異なるイスラームの受け止め方を比較しながら、中央ア

ジアにおけるイスラームの変容と継承のあり方について考えた。

第457回 「フィリピンから海外に向かう人びと——日本と韓国の事例を中心に」

2016年8月6日 講師 永田貴聖（民博機関研究員） 参加人数 22名

日本と韓国に住むフィリピン人移住者に注目し、コミュニティの活動や現地社会との関係構築のあり方について紹介した。

第458回 「ネパール、『市民社会』の再編を展望する」【第88回民族学研修の旅関連】

2016年9月3日 講師 南 真木人 参加人数 50名

1951年の「開国」以降、民主化やマオイストの台頭、王制の廃止など、節目のたびに社会再編の機運が高まりを見せたネパール。社会再編のいままでとこれからを概観した。

第459回 「見世物の昭和・平成——人間ポンプ・安田里美のライフストーリーから」

【特別展「見世物大博覧会」関連】

2016年10月1日 講師 鶴飼正樹（京都文教大学教授） 参加人数 51名

見世物小屋芸人・安田里美の生涯を追いながら、昭和・平成の見世物文化、「見せる側」からみた見世物興業の実態について紹介した。

第460回 「エジプトにおける空手道の新地平——大衆文化にさぐる中東のいま」

【現代中東地域研究推進事業拠点設置関連】

2016年11月5日 講師 相島葉月 参加人数 28名

中東地域を代表する空手大国、エジプト。宗教や政治的な動向ばかりが注目されがちな中東世界を大衆文化から紐解き、グローバル化するエジプト社会の動向を紹介した。

第461回 「インドにおける出産をめぐる信仰と産後ケア」

2016年12月3日 講師 松尾瑞穂 参加人数 30名

インドにおける出産は「けがれ」の観念と深く結びつく一方、病院出産の普及とともにその慣習は変化してきた。出産と産後ケアの変化を追い、インド社会への理解を深めた。

第462回 「アイヌ文化を楽しく学ぶ——関西での活動を例に」【新アイヌの文化展示関連】

2017年1月7日 講師 藤戸ひろ子（ミナミナの会代表）、齋藤玲子 参加人数 65名

アイヌ文化の普及・継承活動に携わる人物をゲストに迎え、大阪を拠点に展開する、手仕事や芸能など「体験」を重視した活動を紹介した。

第463回 「世界各地のイスラーム——みんぱくでその広がりを考える」

【現代中東地域研究推進事業拠点設置関連】

2017年2月4日 講師 山中由里子 参加人数 62名

中東では一神教が共存する一方で、布教活動や移住により、イスラームは世界各地に広がった。みんぱくの展示や教材をヒントに、各地のイスラームの在り方について考えた。

第464回 「パキスタン北西部の“異教徒”カラーシャ人」

2017年3月4日 講師 吉岡 乾 参加人数 55名

カラーシャ人の宗教や、それに基づく生活のあり方、使用言語について、周辺民族との関わりや歴史的な背景なども踏まえながら紹介した。

◎東京：モンベル渋谷店

第115回 「国境の地に生きる——フィンランド・カレリアとエストニア・セトゥの人びと」

【第87回民族学研修の旅関連】

2016年4月23日 講師 庄司博史（民博名誉教授） 参加人数 46名

国境により分断された人びとが暮らすカレリア地方、セトゥ地方に着目し、過疎化と多数派への同化の波のなか、

伝統文化を維持し続けようとする人びとの姿を紹介した。

◎東京：アイヌ文化交流センター

第116回 「『アイヌ・アート』をもっと身近に——イラストレーションから踊りまで」

【新アイヌの文化展示関連】

2017年1月9日

講 師 小笠原小夜（アイヌ文化交流センター非常勤職員、イラストレーター）、齋藤玲子

参加人数 55名

アイヌ文化の普及・継承活動に携わる人物をゲストに迎え、伝統を踏まえつつ、あらたな表現方法に挑戦する作家・アーティストたちの活動について紹介した。

◎東京：モンベル御徒町店

第117回 「異文化が交差する物語——アラビアンナイトからのぞく中東世界」

2017年2月25日 講師 西尾哲夫 参加人数 48名

ヨーロッパ人によって「発見」された物語、アラビアンナイトを通して、中東に向けられたまなざし、中東に暮らす人びとが育んできた文化や信仰心、世界観をさぐった。

●みんなく見学会（協力：国立民族学博物館）

第63回 特別展「夷酋列像——蝦夷地イメージをめぐる人・物・世界」

2016年4月2日 講師 吉本 忍（民博名誉教授） 参加人数 52名

第64回 中央・北アジア展示

2016年7月2日 講師 藤本透子 参加人数 46名

第65回 特別展「見世物大博覧会」

2016年10月1日 講師 鶴飼正樹（京都文教大学教授） 参加人数 40名

第66回 アイヌの文化展示

2017年1月7日 講師 齋藤玲子 参加人数 60名

●体験セミナー（協力：国立民族学博物館）

第72回 「長良川鵜飼漁見学——鳥と語らい、川とともに生きる」

実施日 2016年7月14日～15日 [2日間・岐阜県]

講 師 卯田宗平

参加者数 20名

漁業技術や景観を包括して、ユネスコ文化遺産登録を目指す長良川鵜飼漁の文化的価値を糸口に、自然と人との関わりについて考えた。

第73回 「目と舌で知るネパール——映像鑑賞と国民食『ダール・パート』を手で食べる」

実施日 2016年9月30日 [東京都]

講 師 南 真木人

参加者数 26名

「食」と「映像」とをとおして、多様な民族が暮らすネパールの文化や人びとの価値観について理解を深めた。みんなく映像番組の周知をはかり、ネパールの30年の社会変化を紹介した。

第74回 「遠山霜月祭見学——神と人が集う夜」

実施日 2016年12月10日～11日 [2日間・長野県]

講 師 櫻井弘人（飯田市美術博物館学芸員）、吉田憲司

参加者数 18名

地域に密着した信仰と、日本古来の祭のあり方や文化継承について考えた。300近い面を保有することを踏まえ、

国内外の事例を比較しながら仮面の文化的意味も考えた。

●民族学研修の旅（協力：国立民族学博物館）

第87回 「フィンランドとエストニアの原風景に出会う——森の恵みと唄を愛する人びとを訪ねて」

実施期間 2016年8月1日～9日 [9日間・フィンランド、エストニア]

講師 庄司博史（民博名誉教授）

参加者数 24名

フィンランド東部のカレリア地方、エストニア南東部のセトゥ地方。両地域では、民俗文化や宗教面でロシアの影響が見られるとともに、両国にとって周縁の地であるがゆえに独特の文化がのこっている。両地域を訪ね、境界に生きる人びとについて考えた。

第88回 「多民族国家ネパールの生活文化にふれる旅：映像がつなぐ人びとを訪ねて」

実施期間 2017年1月8日～15日 [8日間：ネパール]

講師 南 真木人

参加者数 20名

標高差のある自然と多様な価値観をもつ人びとがすむ国ネパール。みんぱく映像番組の取材先とさまざまなかたちでネパールに携わる在住日本人を訪ねながら、都市と地方、山地と平地を移動し、ネパール社会の諸相をさぐった。

●午餐会（協力：国立民族学博物館）

第201回 「なぜ日本食が世界にひろがったか」

2016年10月13日 参加者数 29名

講師 石毛直道（民博名誉教授）

「和食」の世界文化遺産登録を踏まえ、日本の食文化がどのように海外各地で受け入れられているのかを紹介した。

●『季刊民族学』（国立民族学博物館友の会 機関誌）

協力：国立民族学博物館

編集・発行：千里文化財団

156号：「かつての朝食——フィリピン食文化の変容と普遍」ほか（2016年4月25日発行）

157号：特集「信州の山」ほか（2016年7月25日発行）

158号：「二一世紀モンゴル民族衣装考（前編）甦る大モンゴル帝国の栄華？」ほか（2016年10月25日発行）

159号：特集「日本酒 古今東西」ほか（2017年1月25日発行）

●連続講座（協力：国立民族学博物館）

タイトル：素顔の地球に出会う——人類学者たちのフィールドワーク

◎東京：モンベル渋谷店

第1回 「南太平洋のサンゴ島を掘る——女性考古学者の謎解き」

2016年6月11日 講師 印東道子 参加人数 31名

ミクロネシア・フェイス島における発掘調査を紹介するとともに、島嶼居住の戦略のひとつに島嶼間のネットワーク構築が鍵になることを明らかにした。

第2回 「人間にとってスイカとは何か——カラハリ狩猟民と考える」

2016年9月10日 講師 池谷和信 参加人数 38名

短い雨季をのぞけば、地表水を得ることが難しいカラハリ砂漠。「砂漠の水がめ」スイカをとおして、カラハリ狩猟民サンの生活とその調査を紹介した。

第3回 「シベリアで生命の暖かさを感じる」

2016年11月12日 講師 佐々木史郎（国立アイヌ民族博物館設立準備室主幹） 参加人数 31名

マイナス40度の極寒世界で人はどのように生きるのか。シベリアやロシア極東、中国東北部の遊牧民・狩猟民を追った30年の調査を紹介した。

●みんぱくに集積された資料と情報を活用した出前授業プログラム

2016年9月3日

実施場所：相楽東部広域連立笠置小学校

プログラム内容：オーストラリアのブーメランをとばそう

参加人数：15名（内訳：1年生～6年生10名、大人5名）

●巡回展「イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる」

名称：瀬戸内国際芸術祭2016連携事業

「イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる」

会期：2016年10月8日～11月27日 51日間

会場：香川県立ミュージアム（〒760-0030 高松市玉藻町5番5号）2F 特別展示室

企画：国立民族学博物館、国立新美術館、日本文化人類学会

入場者数：7,163人

〈関連企画〉

1) 開会式・内覧会

日時：10月7日

会場：2階西側ロビー

参加者：75名

2) 講演会「イメージの力をさぐる——国立民族学博物館から」

講師：吉田憲司

日時：10月8日

会場：香川県立ミュージアム 地下1階 講堂

共催：国立民族学博物館友の会

聴講者：143名

3) ワークショップ「キラキラ☆光の力——インドの伝統ミラー刺繍にチャレンジ!」

講師：上羽陽子

日時：10月23日

会場：香川県立ミュージアム 地下1階 研修室

対象：小学生5年生以上

参加者：26名

4) フリーワークショップ「ビックリ!仮面づくり」

日時：11月3日、12日、13日

会場：香川県立ミュージアム2階 西ロビー

参加者：計197名

5) ミュージアムトーク

日時：10月30日、11月20日

会場：香川県立ミュージアム2階 特別展示室

参加者：計38名

6) ナイト・ツアー

日時：10月21日、11月4日、11日、18日、25日

会場：香川県立ミュージアム2階 特別展示室

参加者：計45名

7) LAST ツアー

日時：11月27日

会場：香川県立ミュージアム2階 特別展示室

参加者：23名

●カレッジシアター「地球探究紀行」の開催協力

会場：あべのハルカス近鉄本店ウイング館9F「スペース9」（大阪市阿倍野区）
主催：産経新聞社
共催：近鉄文化サロン、スペース9
特別協力：国立民族学博物館、千里文化財団

- 2016年4月13日 「身をもって知る技法——マダガスカル漁師に学ぶ」
講師：飯田 卓 参加人数：48名
- 2016年4月27日 「インド染織の現場——つくり手たちに学ぶ」
講師：上羽陽子 参加人数：44名
- 2016年5月11日 「クジラとともに生きる——アラスカ先住民の現在」
講師：岸上伸啓 参加人数：51名
- 2016年5月25日 「言葉から文化を読む——アラビアンナイトの言語世界」
講師：西尾哲夫 参加人数：44名
- 2016年6月8日 「人間にとってスイカとは何か——カラハリ狩猟民と考える」
講師：池谷和信 参加人数：52名
- 2016年6月22日 「仮面の世界をさぐる——アフリカとミュージアムの往還」
講師：吉田憲司 参加人数：43名
- 2016年7月13日 「コリアン社会の変貌と越境」
講師：朝倉敏夫（民博名誉教授） 参加人数：44名
- 2016年7月27日 「城壁内からみるイタリア——ジェンダーを問い直す」
講師：宇田川妙子 参加人数：41名
- 2016年9月14日 「音楽からインド社会を知る——弟子と調査者のはざま」
講師：寺田吉孝 参加人数：37名
- 2016年9月28日 「大地の民に学ぶ——激動する故郷、中国」
講師：韓 敏 参加人数：30名
- 2016年10月12日 「身体でみる異文化——目に見えないアメリカを描く」
講師：広瀬浩二郎 参加人数：42名
- 2016年10月26日 「アンデスの文化遺産を活かす——考古学者と盗掘者の対話」
講師：關 雄二 参加人数：36名
- 2016年11月9日 「西アフリカの王国を掘る——文化人類学から考古学へ」
講師：竹沢尚一郎 参加人数：39名
- 2016年11月30日 「ドリアン王国探訪記——マレーシア先住民の生きる世界」
講師：信田敏宏 参加人数：33名
- 2017年1月11日 「タイワンイノシシを追う——調査で出会う食文化」
講師：野林厚志 参加人数：34名
- 2017年1月25日 「アンデスの聖地をめぐる」
講師：八木百合子（民博機関研究員） 参加人数：40名
- 2017年2月8日 「スリランカで運命論者になる——仏教とカーストが生きる島」
講師：杉本良男（民博名誉教授） 参加人数：46名
- 2017年2月22日 「ブタを連れて海を渡った人たち——ミクロネシアの発掘調査から」
講師：印東道子 参加人数：37名
- 2017年3月8日 「南太平洋の伝統医療とむきあう——マラリア対策の現場から」
講師：白川千尋（大阪大学教授） 参加人数：31名
- 2017年3月29日 「小さなビーズがつくりだす世界——アフリカ、アジア、そしてアメリカ」
講師：池谷和信 参加人数：36名

●その他、普及活動

- ① 国立民族学博物館オリジナルグッズの制作及び頒布
ピンズ「羊と少年」、マスキングテープ（新色）、

あいさつスタンプ（ロシア語、カザフ語「こんにちは」・「ありがとう」）

特別展「見世物大博覧会」関連グッズ：クリアファイル「おもちゃ絵」「錦絵・象の興行」、
Tシャツ（2色）、人間ポンプ柄Tシャツ

特別展「ビーズ」関連グッズ：カットソー、キャップ、キャンバスバッグ、
クリアファイルビーズ資料3種、民族衣装型抜き絵はがき3種

② 2017年度国立民族学博物館オリジナルカレンダー「BEADS」の制作及び頒布

③ 外部連携事業

1) ジュンク堂書店「みんなくブックフェア」での委託販売

会 場：ジュンク堂書店 大阪本店 3F

期 間：2016年5月9日～7月10日

2) 夏のインテリアスタイル「フォークアートと暮らす」での出張販売

会 場：阪急うめだ本店 9階祝祭広場

期 間：2016年5月25日～5月30日

3) 東急ハンズ京都店「みんなくがやってきた!!」での委託販売

会 場：東急ハンズ京都店 1階

期 間：2016年7月19日～8月9日

4) 三省堂書店神保町本店「みんなくブックフェア」での委託販売

会 場：三省堂書店神保町本店

期 間：2016年7月25日～8月31日

5) 巡回展「イメージの力」での委託販売

会 場：香川県立ミュージアム

期 間：2016年10月8日～11月27日

6) 巡回展「見世物大博覧会」での委託販売

会 場：国立歴史民俗博物館

期 間：（1期）2017年1月17日～3月20日、

（2期）2017年4月18日～7月17日

7) みんなくフェアへの協力

内 容：ショップで販売している民族楽器の展示と民博およびショップの紹介

会 場：ららぽーと EXPOCITY内 Inforest すいた

期 間：2016年9月1日～10月31日

参加人数：9月17,007人、10月16,803人

6 研究戦略センター

研究戦略センターの設立の趣旨と経緯

研究戦略センター（英語名 Center for Research Development）は、2004年4月に行われた国立大学と大学共同利用機関の法人化に伴う、国立民族学博物館の改組の一環として生まれた組織である。本館が所属する大学共同利用機関法人人間文化研究機構の組織規程には、本センターの設立目的について、「文化人類学及び関連諸学に関する研究動向並びに社会的要請を把握し、研究戦略の策定を行うため、研究戦略センターを置く。」（『人間文化研究機構組織規程』第25条4項）と記されている。また、同機構の中期計画にも、「国内外の研究動向及び社会的要請を把握し研究戦略を策定するための「研究戦略センター」——後略」とある（人間文化研究機構第1期中期計画I-1-(2)-(カ)（2009年12月24日変更））。すなわち、本センターの主要な任務は、国立民族学博物館の中心的な研究分野である文化人類学、民族学とその関連諸分野の研究動向と社会的な要請を、国内だけでなく国際的にも調査、把握し、その上で、館の研究戦略を策定することにある。2016年度の主な活動は以下のとおりである。

2016年度の活動概要

1. 研究戦略の策定

- 1) 2016年度に実施されたリサーチ・アシスタント2名による「『歴史の記憶と語り』に関する人類学的研究——中国とモンゴルを対象とする研究の動向」、「文化人類学における現代イタリアの刺繍文化に関する研究動向調査」に関する研究動向調査について成果公開として、2016年9月14日に報告会を実施した。
- 2) 海外の特色のある研究所、あるいは先端的な研究を展開している拠点や機関について、その研究動向を調査した。韓国に2度派遣された永田（機関研究員）は、韓国・釜山市東西大学校における日本研究と日本植民地期の建物と記憶を活用した観光実践研究、韓国における在外韓人研究としての在日コリアン研究と韓国国立民俗博物館多文化パッケージ製作過程に関する研究動向を調査した。メキシコに派遣された八木（機関研究員）は、メキシコにおけるカトリシズムに関する研究動向を調査した。アメリカに派遣された深川（機関研究員）は、ハワイ（カウアイ島）で開催されたオセアニア社会人類学会第50回研究大会における太平洋地域研究についての動向を調査した。
- 3) 2009年度より開始した「みんぱく若手研究者奨励セミナー」について2016年度は「人類学的営みにおける映像」をテーマとして設定し、参加者を公募した。全国から8名の若手研究者が参加し、施設見学と研究発表を合わせて、2日間のセミナーを行った。優秀発表者に対して「みんぱく若手セミナー賞」、「みんぱく若手セミナー作品賞」を授与し、セミナー後はアンケート調査を行った。
- 4) 2007年度より開始した「学術潮流サロン」について、2016年度は「人と動物——つながりとその変化」と題して、外部から研究者2名を講師として招聘し、公開セミナーを開催した（参加者30人）。

2. 研究プロジェクトの企画・立案・運営

- 1) 2009年度に、人間文化研究機構地域研究推進事業「現代インド地域研究」国立民族学博物館拠点（MINDAS）事務局が設置されるにあたって、研究戦略センターはその設立準備を支援してきた。2010年度より同拠点のプロジェクトが本格始動し、2016年度には「北東アジア地域研究拠点」、「現代中東地域研究拠点」、「南アジア地域研究拠点」を設置し、研究戦略センターは、ひきつづきその運営や研究活動を支援した。
- 2) 前年度にひきつづき、外部資金による研究助成に関する情報をメールにて随時、教員に通知するとともに、ウェブにて情報提供した。
- 3) 科学研究費補助金説明会として、外部から講師を招き、科研応募に関する説明会を行うとともに、研究協力課が科研費応募の手続きと使用のための説明会を催した。

3. 研究プロジェクト・研究体制の評価について

- 1) 2015年度人間文化研究機構業務実績報告書の本館分担部分の作成を支援し、あわせて資料編を作成した。
- 2) 2006年度から行っているウェブサイトでのプロジェクトごとの研究活動の実績紹介を、引き続き行った。研究成果公開プログラムによる館の国際的なシンポジウムや研究フォーラム、ワークショップなどの活動実績についても明示し、『研究戦略センター活動報告2015』にも報告した。

4. 他の研究機関との連携、協力

- 1) 2011年度に締結された学術協定に基づき、日本文化人類学会と本館との連携として、日本文化人類学会が主催

した大会への民博の協力を行った。

- 2) 2006年よりメンバーとなっていた地域研究コンソーシアムに関して、2008年度からは幹事組織として研究戦略センター長を理事として、センター教員2名を運営委員として派遣している。この体制を本年度も継続した。
- 3) 本館の機関研究と JICA 大阪・阪大 GLOCOL とが行ってきた「研究者と実務者による国際協力勉強会」が2010年7月に終了したこととともなって、3機関の担当者が検討して、「研究者と実務者による国際協力セミナーに関する覚書」をかわした。2016年度はセミナーを開催しなかった。
- 4) 2016年11月27日にアキバ・スクエアにおいて開催された大学共同利用機関シンポジウム2016に、本館は教員1名（講演題目「生業を裏打ちする文化を探る」）および研究戦略センターの教員3名を派遣し、展示ブースを開設し、本館の研究と活動を紹介した。
- 5) 神戸大学大学院人文学研究科と協定を締結した。

5. 研究活動の情報収集と公開

- 1) 教員の個人業績の集積を引き続き行った。
- 2) 共同研究や機関研究の研究成果の集積を行い、評価のための基礎資料とした。
- 3) 『研究年報2015』を発行した。
- 4) 『研究戦略センター活動報告2015』を発行した。
- 5) 公開講演会を東京（2016年11月10日）と大阪（2017年3月21日）で開催した。
- 6) 2008年度に学術情報リポジトリ委員会が発足し、2009年度から公開しているリポジトリの、コンテンツの登録と許諾取得の作業を順次進めた。

7 文化資源研究センター

文化資源研究センターの設置目的

文化資源研究センター（英語名 Research Center for Cultural Resources）は、文化資源の体系的な管理と情報化、およびその共同利用や社会還元に向けて調査や研究開発をおこなうとともに、実際に事業を推進する際の企画・調整をおこなうことを目的として、2004年4月に設置された。

文化資源には、人間の文化にかかわるさまざまな有形のモノやそれについての情報のほか、身体化された知識・技法・ノウハウ、制度化された人的・組織的ネットワークや知的財産など、社会での活用が可能な資源とみなされるものが広く含まれる。こうした文化資源を人類共有の財産とすることで、グローバル化する世界で人びとが異なる文化への理解を深め、互いに共生していくための基盤を作り出そうというのが、文化資源研究センターのめざすところである。文化資源研究センターは、独自に研究事業を企画・運営するほか、文化資源関連事業として、館内、館外の研究者が参画して実施する多様な文化資源プロジェクト等の企画・調整を通して、文化資源の運用全般に寄与することを役割としている。

文化資源研究センターの研究事業

2016年度に文化資源研究センターが独自に実施した研究事業の概要は以下のとおりである。

- 文化資源研究センター会議を定期的に開催し、文化資源プロジェクトの運営、進捗状況の確認、標本資料・映像音響資料等の管理・運用にかかわる協議をおこなった。
- 文化資源プロジェクト、文化資源計画事業、情報管理施設の基盤事業の今後の体制に関する意見交換をおこなった。
- 文化資源プロジェクト「東日本大震災で被災した文化財の保管環境に関する調査研究5」を、文化資源研究センター事業の一環として実施した。
- 文化資源計画事業「朝鮮半島の文化」に関する映像資料の開発と制作：韓国国立民俗博物館との交流事業（映像資料収集）を、文化資源研究センター事業の一環として実施した。
- 文化資源研究センターの教員1名をドイツへ派遣し、民族誌映画の製作・公開に関する国際的な状況を調査し、当該分野の専門家を対象にして情報交換をおこなった。
- 企画展「津波を越えて生きる——大槌町の奮闘の記録」の資料借用のため、文化資源研究センターの教員1名が打合せに参加したほか、借用資料の輸送費、演示実演の経費の支援をおこなった。
- 特別展「ビーズ——つなぐ・かざる・みせる」について、露出展示とした借用資料や標本資料の安全性を確保するための対策を提案し、実施した。
- 2008年度から実施した本館展示新構築が完了したことから、新構築した全展示場を対象として、平成29年3月30日に合評会を企画し、館内教員と展示プロジェクトチームによる講評・意見交換の場を設けた。
- 標本資料撮影設備を充実させるための支援をおこなった。
- 『文化資源研究センター活動報告2015』を編集・発行した。
- イコム日本委員会 2016年度委員会・総会に出席した。

文化資源関連事業

文化資源に関する主な開発研究や事業は、文化資源関連事業として運営される。そのねらいは、目的、計画、経費、責任を明確にし、それぞれの成果を的確に評価して、さらなるプロジェクトの発展を図ることにある。文化資源関連事業は、「文化資源プロジェクト」「文化資源計画事業」「情報管理施設のプロジェクト的な業務」からなり、文化資源運営会議が毎年募集し、選定する。

また、「文化資源プロジェクト」「文化資源計画事業」は館内外の研究者の運営のもとで遂行されるが、文化資源研究センターや情報管理施設の専門スタッフの支援・協力を受けて、効率的かつ機動的に推進されている。

2016年度の文化資源関連事業の概要は以下のとおりである。

1. 文化資源関連事業の体制整備

2009年度から再編を実施した文化資源関連事業について、「文化資源プロジェクト」「文化資源計画事業」「情報管理施設のプロジェクト的な業務」の3種類のカテゴリーによって運用した。また、文化資源共同研究員の制度を運用し、共同利用体制を推進した。さらに外部有識者による意見をプロジェクトの審査に反映させた。

また、文化資源関連事業として実施してきた事業の一部を、2017年度から情報関連事業に再編するための体制を整備した。

2. 文化資源プロジェクト

文化資源プロジェクトは、本館の大学共同利用機関法人としての共同利用基盤を整備するとともに、本館あるいは関連する他機関が所有する学術資源の体系化をすすめ、共同利用を促進し、学術的価値を高めるための研究プロジェクトである。

プロジェクトは、5つの分野（調査・収集、資料管理、情報化、展示、社会連携）に関わる研究開発、または研究成果の前記5分野への展開を目的とするもので、その成果は共同利用に供するとともに、社会への還元ができるものであることを前提とする。

1) 調査・収集分野

現代アメリカのパッチワークキルトおよび関連資料の収集——アーミッシュキルトを中心に

提 案 者：鈴木七美

アメリカ合衆国において、未だ十分ではないヨーロッパからの移民に関する収集物の充実を目的として、アーミッシュに注目し、パッチワークキルトを中心に生活文化用品を収集した。

インドの古典音楽楽器と民俗絵画カリガートの購入

提 案 者：寺田吉孝

インド関連資料、音楽関連資料の充実を図るために、サンディップ・タゴール氏（追手門学院大学名誉教授）所蔵のインド楽器8点を購入した。タゴール氏は音楽家であり、楽器資料は実際に氏が公演などで演奏していたものである。このうち弦楽器シタールは、1907年に制作された歴史的資料であり、タゴール氏の祖父であるP・N・タゴールが愛用した楽器である。他の楽器も、収集当時の最高水準の技術で作られており、民博に所蔵することは歴史的にも意義がある。

研究公演「息づく仮面——バリ島の仮面舞踊劇トベンと音楽」に基づいたマルチメディア番組の製作

提 案 者：福岡正太

2015年12月6日に開催した研究公演「息づく仮面——バリ島の仮面舞踊劇トベンと音楽」の映像記録をもとに、前日に開催したワークショップの映像および吉田ゆか子氏提供の現地映像とあわせて編集をおこない、マルチメディア番組を制作した。

研究公演「時を超える南インドの踊り」に基づいたマルチメディア番組の製作

提 案 者：寺田吉孝

2015年11月22日に開催した研究公演「時を超える南インドの踊り」の映像記録素材を編集し、日本語、英語対応のマルチメディア番組を制作した。全演目のうち歌詞のある6曲に字幕をつけ、踊りの所作と歌詞の関連がわかるようにした。

在日コリアン音楽の現状に関する映像取材

提 案 者：寺田吉孝

大阪市および埼玉県桶川市において計4回の映像音響取材を実施し、在日コリアンの音楽家である安静民と李政美の活動記録と関係者へのインタビューを行った。

軽業系民俗芸能の短編映像番組の製作

提 案 者：笹原亮二

2015年度に申請者が実施した日本各地の軽業系民俗芸能である蜘蛛舞・継ぎ獅子・撞舞・囃子曲持・梯子獅子舞に関する映像取材の成果を基に、それぞれの芸能が行われる祭の次第や芸能の上演の様相を現す短編映像番組を製作した。

地域社会の伝承歌の記録、継承、創造をテーマにした映像民族誌『よみがえる歌』（仮題）の制作

提 案 者：川瀬 慈

徳島県三好市祖谷、さらに岐阜県郡上市、同本巣郡界隈の民謡やわらべ歌を対象に、それらの記録と伝承活動に携わる歌手の活動を映像記録した。以上の映像記録を編集し、民謡の継承と創造をテーマにした映像民族誌『めばえる歌——民謡の継承と創造』を制作した。

ネパール関連ビデオテープレック番組の制作

提 案 者：南 真木人

2015年度（2016年1月）に撮影した素材を用いて、研究用番組「ネパール 楽師の村 バトゥレチョールの現在」（91分31秒）を制作した。

中国雲南省の回族に関する映像番組の編集製作

提 案 者：横山廣子

本館の文資プロジェクトでこれまでに取材した映像素材を編集し、中国雲南省大理盆地の少数民族、回族に関するビデオテープ番組3本を製作した。①新築祝いと過去を含む回族の出稼ぎ状況、②村の生活、③アラビア書道について、具体的な理解を導く内容である。

展示記録映像のあり方に関する実践的研究

提 案 者：日高真吾

昨年度までに確立した、展示記録パノラマ映像として必要な撮影ポイントの設定、及びコンピュータでの効率的な展示場再現が可能な画像の製作方法に習いパノラマムービーを製作した。展示資料の画像や詳細データを効率よく配置することにより Web 上で展示空間を違和感なく閲覧できるコンテンツとなった。

2) 資料管理分野

有形文化資源の保存・管理システム構築

提 案 者：園田直子

本プロジェクトでは、①有形文化資源の保存対策立案：総合的有害生物管理の考えに基づいた生物被害対策、②資料管理のための方法論策定：博物館環境の調査、収蔵庫の狭隘化対策、これら資料管理に関わる基礎研究・開発研究と事業を企画、実施、統括した。

東日本大震災で被災した文化財の保管環境に関する調査研究 5

提 案 者：日高真吾

新潟県村上市奥三面歴史交流館収蔵庫、宮城県気仙沼市旧月立中学校の文化財一時収蔵庫について、軽微な改修による効果を生物生息調査、塵埃調査、浮遊菌調査、有機酸等の空気環境調査の観点から検証し、過去4年間の測定結果と比較して、その効果を明らかにした。

3) 情報化分野

「沖守弘インド写真」データベースの英語化

提 案 者：三尾 稔

2015年度中に館内公開し、これに引き続いて2016年4月に一般公開した「沖守弘インド写真」データベースは全て日本語によるものであった。2016年度はこれを全て英語化し、英語版としても一般公開した。

端信行氏撮影アフリカ関係写真資料コレクションのデータベース作成

提 案 者：吉田憲司

本館名誉教授である端信行氏が、1969年から1990年代の初めにかけて、おもにアフリカのカメルーン共和国で調査した際に撮影した民族誌写真6,750コマの整理を行い、総数6,530件のデータベースを構築し、民博のデータベース検索システム上での館内公開ならびに一般公開をした。

「大島襄二コレクション」の整理とデータベース作成

提 案 者：飯田 卓

大島襄二氏が1967年から1991年にかけてアジアや大洋州などを調査した時の記録写真9,150コマの整理を行い、総数8,842件のデータベースを民博のデータベース検索システムの館内公開セクションにて公開した。さらに、総数7,889件のデータベースを、民博のデータベース検索システムの一般公開セクションにて新たに公開した。

4) 展示分野

特別展「夷酋列像展——蝦夷地イメージをめぐる人・物・世界」

提 案 者：日高真吾

本展示は、蠣崎波響筆「夷酋列像」の実像を明らかにするとともに、この絵画が描かれた18世紀の蝦夷地とその国際性を広く紹介するものであった。

特別展「歿後150周年 シーボルトの見たかった日本」(仮題) 準備

提 案 者：園田直子

本特別展は、国立歴史民俗博物館、東京都江戸東京博物館、長崎歴史文化博物館、名古屋市博物館との巡回展示である。現在、資料借用先と借用契約は締結準備中であり、本館での展示開催のための展示図面の入札の準備、チラシ等のデザイン検討を進めている。

特別展「見世物大博覧会」(仮題)

提 案 者：笹原亮二

民博の特別展示館において、特別展「見世物大博覧会」を2016年9月8日から11月29日の会期で開催した。展示に合わせて、映画「人間ポンプ 安田里美 浅草木馬亭公演」上映会、「伊勢大神楽の獅子舞と放下芸——伊勢

大神楽講社による「総舞」公演、民博ゼミナール「軽業の系譜と民俗芸能——特別展『見世物大博覧会』から」、ウィークエンドサロン「魅せるモノ・魅せられるモノ 見世物のおもしろさを巡って」などの催し物を実施した。

特別展『世界のビーズ——美しさに秘められた人類の知恵』（仮題）

提 案 者：池谷和信

特別展示『ビーズ——つなぐ、かざる、みせる』を開催するための準備をおこなった。展示の基本理念にもとづいて、館外資料を借りるための交渉、館の内外の資料の空間構成および演示手法などを決めて展示を完成した。

企画展示「原住民族のイメージ・色・かたち・物語——順益台湾原住民博物館ポスター作品コレクション」（仮称）

提 案 者：野林厚志

本館と学術交流協定を締結している台湾の順益台湾原住民博物館において、2006年より隔年で開催されている学生ポスターコンテストに出品された作品を展示し、台湾の若い世代がとらえる原住民族イメージを紹介するとともに、そうしたイメージが形成される民族誌的背景を本館の来館者が理解できるように館蔵の標本資料、台湾側からの借用資料の展示を行った。

企画展『One Road——オーストラリアの砂漠が生んだアボリジニ・アート（仮）』の開催

提 案 者：丹羽典生

本展示は、オーストラリア先住民のアボリジニ・アートを通じてオーストラリア史を問い直すとともに、オーストラリアにおける先住民社会の過去から現在までの変化を視野に入れつつ、絵画に映像資料を交えて紹介するものである。

人類学者が見た東日本大震災

提 案 者：竹沢尚一郎

企画展「津波を越えて生きる——大槌町の奮闘の記録」を、2017年1月19日から4月11日まで企画展示場で実施した。これは、①津波は人智を超える、②災害を生き延びるヒント、③共同性を育む文化と未来への胎動の3部からなり、東日本大震災で甚大な被害を受けた大槌町に焦点を当てながら、それを生き抜いた人びとの行動を示すことを目的とした展示である。

特別展「子ども・誕生——モノからみる子どもの近代」準備

提 案 者：笹原亮二

大人とは異なる存在としての近代日本における「子ども」の誕生に関する展示会の開催に向けて、民博を初め、各地の博物館や資料館などが所蔵する、玩具を初め、様々な生活用品の調査及び、展示の内容の検討を行った。

特別展「驚異と怪異の世界へ」（仮題）準備

提 案 者：山中由里子

「驚異」や「怪異」の表象の展示を通して、人間の好奇心と想像力、自然界・神に対する畏怖の念についての思考を喚起するような展示の構想を練る。具体的には、「人魚」（幻獣）、「犬頭族／犬戎」（異形の民族）、あるいは「彗星」（天変地異）といったテーマを設定し、関連する絵画、書籍、民族資料、映像音響資料を展示する。

平成29年度企画展「カナダにおける先住民文化の過去、現在、未来」（仮題）の準備

提 案 者：岸上伸啓

2017年に建国150周年を迎えるカナダにおける国家と先住民文化の関係の変遷を歴史的に検証し、カナダにおける先住民文化の過去、現状そして未来について儀礼具・生活具やアート作品等のモノ、写真、パネル等を用いて紹介する企画展の準備を実施した。

次世代ユニバーサルミュージアム展示空間にむけた自己評価手法と動線誘導手法の開発研究

提 案 者：吉田憲司

次世代ユニバーサルミュージアムの実現に必要な自己評価手法を開発し、その活用を進めるとともに、多様な来館者を対象とした展示動線誘導手法の開発作業をおこなった。

「みんぱくビデオテークビューア」のインタフェースの研究

提 案 者：福岡正太

今年度は主に可搬型の端末について設計と実証および検討を行った。①デジタルビューアの実証試験としてMac miniを活用した貸し出し用の端末2台を新たに設計・実装し、香川県立ミュージアムで開催した巡回展「イメージの力」への設置を行った。約2か月の会期中、同システムはトラブルなく安定に稼働することを確認した。②端末を配送により貸し出すケースを想定し、「みんぱく」としての展開と、その前提となるタッチパネル付

きの一体型PCの導入を検討した。③デジタルビューアを展示場でのビデオテーク上映用インタフェースとして活用するための課題の検討を行った。

次世代みんぱく電子ガイドの開発に向けた実証実験

提 案 者：福岡正太

次世代みんぱく電子ガイドの開発に向け、館内ネットワークを利用した情報提供と iBeacon を利用した位置情報の取得の実証実験を行うとともに、多様な利用者を想定したコンテンツのあり方の検討を進める。本プロジェクト提案後、iBeacon では展示場内の位置特定の精度や実際の運用方法等で検討すべき事項が明らかとなり、今年度（2016年度）に設置された情報基本構想会議で展示場の情報提供のあり方についての包括的検討の中に盛り込むこととなった。

展示場における情報提供システム再構築計画の作成

提 案 者：福岡正太

ビデオテークとみんぱく電子ガイドの更新を中心とした展示場等における情報提供システムの再構築の計画、及び、それにとまなうコンテンツの性質に応じた情報連携のあり方を検討し、さらに適切なコンテンツ作成への指針の検討をおこなう。本プロジェクトで提案した内容は、今年度（2016年度）に設置された情報基本構想会議の検討事項に含まれることになり、同会議での計画策定とした。

中央・北アジア展示及びアイヌの文化展示用電子ガイドコンテンツの製作

提 案 者：福岡正太

「中央・北アジア展示」及び「アイヌの文化展示」の新構築にとまなない、みんぱく電子ガイド用コンテンツ（日本語版、英語版、中国語版、韓国語版）を製作し、展示場に番号プレートを設置し来館者へのサービスを開始。

日本手話の諸方言による「手話版ももたろう」の映像コンテンツ作成

提 案 者：菊澤律子

「日本手話版ももたろう」の装置を開発し、展示場で公開した。各地で使われている手話言語6言語による「ももたろう」の語りを、字幕付き、字幕なしの二種類および、場面ごとに分けて見られるようにした。コンセプトとしては、音声日本語版のももたろうと並列するものになり、内容としてはその役割を果たしているが、既存の装置を使うという制限の中で作成しなくてはならなかったため、映像を見せる展示であるのに装置（画面）が小さい、他の装置がすべてタッチパネルになっている中、この装置のみマウスの仕様になっており座らなければ使いにくい、などの問題点は残った。このことは、音声言語と手話言語が同等であることを示すという、言語展示場全体での目的に反する印象を与える結果となってしまっている。この点については、追って、修正が必要であると考えている。

言語展示「世界の言語」装置のシステム開発およびコンテンツ修正

提 案 者：菊澤律子

「世界の言語」装置について、次の修正および改修を行った。①来館者にとって使いやすい形でコンテンツ提供ができ、また、館内で情報の修正や追加ができるシステムを開発。特に、2009年のリニューアル時になかった手話言語に関するコンテンツの充実とユニバーサルデザイン化（聴覚障害者・視覚障害者対応）に配慮した。また、将来データを積極的に追加するためのキャパシティの拡張を前提としたデザインに作りなおした。②誤情報を修正した。③手話言語を含む新情報を追加し、展示されている言語情報の偏りを修正した。

ハチェカル（アルメニア十字架）——アルメニアの文化と歴史の象徴として

提 案 者：新免光比呂

アルメニアの歴史と文化を、少数ではあるが館内所蔵の標本と外国人研究員として来日中のオルベリアン氏から寄贈されたアルメニア十字架ハチェカルを中心として、写真パネルと解説パネルによって紹介した。

5) 社会連携分野

カムイノミ及び重要無形民俗文化財「アイヌ古式舞踊」演舞の実施

提 案 者：齋藤玲子

本館が所蔵するアイヌの標本資料に対して、安全な保管と後世への確実な伝承を目的に、祈りの儀式（カムイノミ）を行った。併せて国の重要無形民俗文化財であるアイヌ古式舞踊の演舞を、一般公開で実施した。

みんぱく「世界のイスラーム」（仮題）の制作

提 案 者：上羽陽子

本館の教育機関向け貸出キット「みんぱく」に関して、イスラームのニーズが利用者から高いため、イスラームを地域横断的に取り扱ったバックを新たに制作する。2017年度の制作実施に向け、2016年度は基本コンセプトと内容を検討し、内容物の収集を行った。

3. 文化資源計画事業

文化資源計画事業は、研究成果を普及することを目的とした事業で、2つの分野（資料関連、展示・社会連携）に分けられる。

1) 資料関連分野

「朝鮮半島の文化」に関する映像資料の開発と制作：韓国国立民俗博物館との交流事業

朝鮮半島の文化に関するビデオテーク番組制作を基軸にした韓国国立民俗博物館、韓国の若手研究者と国立民族学博物館の研究交流、研究ネットワークの構築事業。

「朝鮮半島の文化」に関する映像資料の開発と制作：韓国国立民俗博物館との交流事業（映像資料収集）

朝鮮半島の文化に関するビデオテーク番組制作を基軸にした韓国国立民俗博物館、韓国の若手研究者と国立民族学博物館の研究交流、研究ネットワークの構築事業。

標本資料の寄贈受入

- ・元機関研究員の吉田ゆか子氏がインドネシア・バリ島で収集した楽器資料1点（ペレレットと呼ばれるチャルメラの一種）の寄贈受入をおこなった。
- ・インドネシア・ジャワ島の街中で近距離移動に利用される、自転車の前部に2人掛けの座席をつけた乗り物ベチャの寄贈を受け入れた。本資料にはジャワの影絵芝居ワヤン・クリットが描かれている点に特徴がある。
- ・株式会社宝酒造が本館名誉教授である吉田集而と共に東南アジアなどで収集し、当初は民博が受け入れる予定で長らく保管されていた、酒器および蒸留器一式を受け入れた。
- ・宝塚市在住の田村美代子氏より、「アツシ（厚司）織」およびワニ革ハンドバッグの寄贈の申し出があり、時代や背景情報の付随する貴重な資料であるため、受け入れた。
- ・南アジアにおける研究や展示に活用するため、ブータンのソバ調理具とインドの素焼き土人形の寄贈資料を受け入れた。
- ・本館のモンゴル地域の収集していなかった衣装やブーツやベルト、帽子を受け入れた。また、中央・北アジア展示で展示中のゲルの内部に収めるべき生活用具資料を補う目的で資料を受け入れた。
- ・北東アジアにおける民族音楽に関する研究や展示に活用するため、モンゴル、中国、北海道アイヌに関する楽器の寄贈を受け入れた。
- ・モンゴル族の民間信仰に関する研究や展示に活用するため、中国内モンゴル自治区を1940年代に調査した地理学者の小牧実繁氏が所有していた1940年代の護符類を受け入れた。
- ・モンゴル人が、本館の展示や収蔵庫を見学した際に、不足していると判断した資料として、ブリヤート・モンゴルの衣装および子羊の毛皮による内張のあるモンゴル衣装2点の寄贈を受け入れた。
- ・モンゴル民族衣装など生活道具に関する研究や展示に活用するため、衣装等生活用品類の寄贈を受け入れた。
- ・石毛直道 元・本館館長が特別顧問を務めていた甲南大学探検部によって、1977年にパプアニューギニア・セピック川流域の村々で収集された資料を受け入れた。収集の経緯や情報が明確であり、これまでに収集した同地域の資料を充実させることができた。
- ・本館名誉教授の和田正平が科研に参加し、ジョージ・リランガ氏についての調査を行った際に購入した絵画1枚の寄贈を受け入れた。ジョージ・リランガ氏は国際的に評価されており、他の収蔵品のアフリカン・アートの中での位置づけができる。
- ・1977年11月、本館名誉教授・端信行が本館館長・須藤健一と共に、沖縄県・石垣島の登野城地区の調査を行った際に収集した水中めがね3点を受け入れた。
- ・1950年代のビルマ（現ミャンマー）で踊り子を描いた油彩絵画をビルマ民族資料として寄贈を受け入れた。
- ・竹中大工道具館において、伝統的技術と道具をもちいて建造された三陸型の和船の寄贈を受け入れた。震災以前の三陸は日本でもっとも多くの木造船が集積する土地だったが、津波でその9割が消滅したため、造船技術の復興を目的にこの和船は建造された。和船本体だけでなく、その建造記録が残されている例はあまりなく、三陸の漁撈文化や日本の技術史を理解するために重要な資料となる。
- ・本資料は、ゲヴォルグ・オルベリアン氏のイベント企画「ハチェカル（アルメニア十字架）——アルメニアの文化と歴史の象徴として」で使用されたものであり、アルメニア文化を紹介する手段として有効であることが示された。今後の本館展示においても有用である。
- ・南米ベネズエラ・コロンビア国境地域のカリブ語系先住民ユッパ／ユコの調理なべ1点、パイプ6点、お守り1点の寄贈を受け入れた。
- ・在大阪・神戸インド総領事館より寄贈申し出のあったインド製織機を受け入れ、将来の南アジア展示場改修や「南アジア地域研究」プロジェクトの研究成果公開の一環としての展示企画に備える。

- ・モンゴルにて実際にシャーマンが使用するために作成した衣装および道具一式を受け入れた。
- ・西宮市の中尾祐次郎氏から、デザイナーの貝澤珠美氏が制作した「ファブリックパネル」等の作品の寄贈の申し出があり、今後の展示等に活用できる資料であるため、寄贈を受け入れた。
- ・滋賀短期大学名誉教授 成田巳代子氏による寄贈資料を受け入れた。資料は、1997年から1998年にかけて、当館名誉教授である故江口一久教授とともに同氏がカメルーンを訪れた際に、マルア市市場で購入した生地を、現地の裁縫職人であるアリユーム氏が縫製した衣装である。寄贈資料には、男性用衣装、帽子、サンダル、女性用衣装などがある。
- ・本資料は、タイおよびミャンマー現地においてほとんど使用されなくなった漁具および生活用具でありたいへん貴重なものである。本寄贈を受け入れることで、すでに本館に所蔵されている東南アジア大陸部の漁具および生活用具についての資料を充実させることができ、他館への貸付や研究者の熟覧を通じて、東南アジア大陸部の生活文化、また他地域の生活文化との比較研究の進展に寄与することができるようになった。
- ・1991年に本館で開催された特別展「大インド展」の際に収集・利用されたが、これまで資料登録されていなかった研究資料を一括して受け入れ、保存・整理し、研究等への活用に供した。
- ・本館の立川武蔵名誉教授が調査研究の一環として収集し、同名誉教授が本館在任中に責任者として2003年に開催した特別展「マンダラ——チベット・ネパールの仏たち」で展示した、マンダラ白描画のコレクションの寄贈を受け入れた。
- ・日本における酒を用いる行事に関する資料を受け入れた。日本国内の記念式典等の鏡開きの際に使用される典型的なこれらの道具は、日本の行事での酒の扱われ方やそれに関わる道具等への理解を深めることができる資料である。
- ・日本の各地で着用されていた日常着、ゼンマイ式録音機や手動編物機、ゴットン（鹿児島県の弦楽器）など、過去の生活文化を伝える資料をうけいれた。日常着や楽器は使われていた地域特有の生活の形式を知る際の助けとなり、小型機械は手仕事の道具と現代の電化された道具の中間的なものとして興味深い資料である。
- ・20世紀のアメリカ合衆国におけるキルトと布の使用状況を研究し、その成果を展示等で発信する目的で、アメリカンキルトの寄贈を受け入れた。
- ・渡島出身の武部吉博氏（高槻市在住）より、アットゥシ（樹皮繊維製着物）2着および、裂織等木綿衣3着の寄贈の申し出があり、古く貴重な資料であるため、寄贈を受け入れた。

2) 展示・社会連携分野

巡回展「イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる」

2014年2月から6月に国立新美術館で開催され、同年秋、本館特別展として開催された「イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる」を巡回展として、2016年10月8日から11月27日の会期で香川県高松市の香川県立ミュージアムにて開催した。

東南アジア展示の部分改修

2014年度に新構築した東南アジア展示について、来館者アンケートの調査および担当者による再確認に基づき、部分改修を実施した。

南アジア展示の部分改修

2014年度末までに行われた「南アジア」展示場の新構築について、2015年度に実施された来場者アンケートの結果、南アジア展示チーム内で実施した自己点検、及び日本内外の専門的研究者を含む来館者から受けた修正や改善に関する提言を踏まえ、展示の意図がより良く伝わる展示空間へと発展させるため、部分的な改修を行った。改修内容は大きく以下の3点にまとめられる。すなわち、展示品の追加や展示方法の修正による展示の改善、展示用什器の追加や改修によるより快適な展示の実現、キャプション等の修正・追加による展示説明の改善である。

ボランティア活動支援

国立民族学博物館におけるボランティア活動者の受入要項に基づき、登録したボランティア団体であるMMP（みんなくミュージアムパートナーズ）の活動支援を行なった。

ワークショップの実施ならびにワークシートの運用

ワークショップの実施、展示新構築にともなうワークシートの更新作業、ワークシート新規作成に向けた調査などを実施した。その目的は、本館での研究活動と展示の内容を、来館者を中心とする利用者に、たのしみながら効果的に理解してもらうためであり、また利用者からの様々な意見や要望を本館の活動に反映させるためである。

3) その他

年末年始展示イベント「干支展」

年末年始期において干支を題材にした展示ならびに関連催事を行い、来館者に季節感を伝えるとともに、世界各地の「とり」と人びととの関わりを示し、民博の教職員を対象にした、展示目的・構成の設定から展示資料の選定、および展示に至る活動の研修を行った。本年度は卯田宗平准教授が中心となり事業を実施した。

4. 情報管理施設のプロジェクト的な業務

「情報管理施設のプロジェクト的な業務」は、情報管理施設が実施する、文化資源に関する研究支援業務である。

みんなく映像民族誌の作成及び配付

民博制作のビデオテーク番組や研究映像から12番組を選び、みんなく映像民族誌第22集～第25集として4枚のDVDにまとめた。これを800セット制作し、図書館や研究機関などに配布したほか、テーマに応じ個別のDVDを学会など623カ所に配布した。

標本資料の撮影等業務

標本資料を研究、展示、情報提供等に有効活用するため、561点の撮影、計測、画像の利用及びそれらに付随する業務を行った。実施内容：①2016年度新規受入資料 ②フォーラム型情報ミュージアム関連資料等。また、スタジオ照明をハロゲン灯からLED照明に変更し、スタジオ内の機器の整備と更新をおこない、撮影環境を改善した。

ビデオテープの媒体変換

本館の映像資料として保管しているDVCPRO媒体353本の媒体変換として、HDにファイルベースで保存した。

常設展示場新構築撤去資料の点検・クリーニング・再配架及びデータ整理作業

2015年度の新構築（中央・北アジア展示、アイヌの文化展示）にともない撤去された約1,200点の資料の状態のチェック（点検）、長期間展示されていた資料に関する情報のデータ作成および適切なクリーニングをおこない、収蔵庫に再配架した。

第3収蔵庫収蔵資料の配架見直し及び再配架作業

第3収蔵庫内の資料1,842点の配架見直しおよび再配架作業をおこない、標本資料の収蔵状況を改善し、新たな配架空間を確保した。

標本資料の補修・保存処理

現在、常設展示場で展示されている資料の点検や、資料の他館への貸出等での資料点検の際に発見される資料の破損、汚損などの異常に対して、適切な処理を随時行った。また、特別展・企画展に選定された資料、緊急に補修する必要がある資料などの補修を行い、資料を展示可能な状態に復した。

多機能資料保管庫の資料再配架作業

多機能資料保管庫の温湿度環境や虫害発生の現状を改善するため、収蔵状況の調査をおこない、調査結果をもとに配架状況を見直し、収蔵計画を立案した。また、その計画に基づき、1層と2層の間での船資料の移動を実施した。

みんなく運用・保守

147の学校や社会教育施設に、延べ223回の貸出を行った。また、貸出先での紛失や破損に伴う補修、老朽化した資料の交換等を行った。

8 国際学術交流室

設置目的

国際学術交流室（英語名 Center for International Academic Exchange）は、組織的な国際交流を円滑に進めることを目的にして、2010年4月に設立された。

本館は、創設以来グローバルな視野をもち、積極的に海外の研究機関や研究者と連携、協力しながら研究活動と博物館活動を行ってきた。国際学術交流という点では大学共同利用機関の中でも先駆的な役割を果たしてきたといえるであろう。

20世紀末に始まった情報通信技術革命は、国際的な情報交換のスピードと量を飛躍的に増大させた。その結果、本館の国際的な活動はもはや個人の努力や関係では処理しきれない状態となり、組織的、戦略的な国際交流が求められている。国際学術交流室は、これまで蓄積されてきた海外の研究機関、研究者との関係を活かしつつ、本館がより戦略的、より組織的に国際的な研究連携や共同研究を推進するために、以下のような活動を行っている。

機能

国際的な学術交流の戦略策定

- 学術交流のガイドライン策定
- 海外の研究機関との研究連携、研究協力の推進についての検討

学術協定の締結および協定に基づく研究交流事業の推進

- 学術協定の締結の準備支援、協定書の翻訳・校閲
- 学術協定内容についての審議
- 協定に基づく研究交流事業の支援
- 協定に基づく事業の年度計画書、年度報告書の受付と検討
- 国際シンポジウム・国際共同研究・国際連携展示などの支援
- 海外からの協定締結の申し出、問い合わせに対する対応

外国人研究者に対する支援

- 外国人客員教員、機関研究の外国人共同研究員、海外からの外来研究員などの受け入れの支援
- 外国人研究者向けみんぱく利用マニュアル *Guide for Visitors* の作成・改訂

その他国際学術交流に関すること

- 広報・展示関連の翻訳・校閲
- 英文要覧、英語版HP、*MINPAKU Anthropology Newsletter* の発行
- みんぱくフェローズの名簿のデータ管理、*MINPAKU Anthropology Newsletter* のフェローズへの発送
- みんぱくが発行する刊行物等において使用する英語表記の検討

国際学術交流事業の評価資料のとりまとめ

- 国際学術交流事業の業務実績報告書、自己点検報告書等の資料とりまとめ

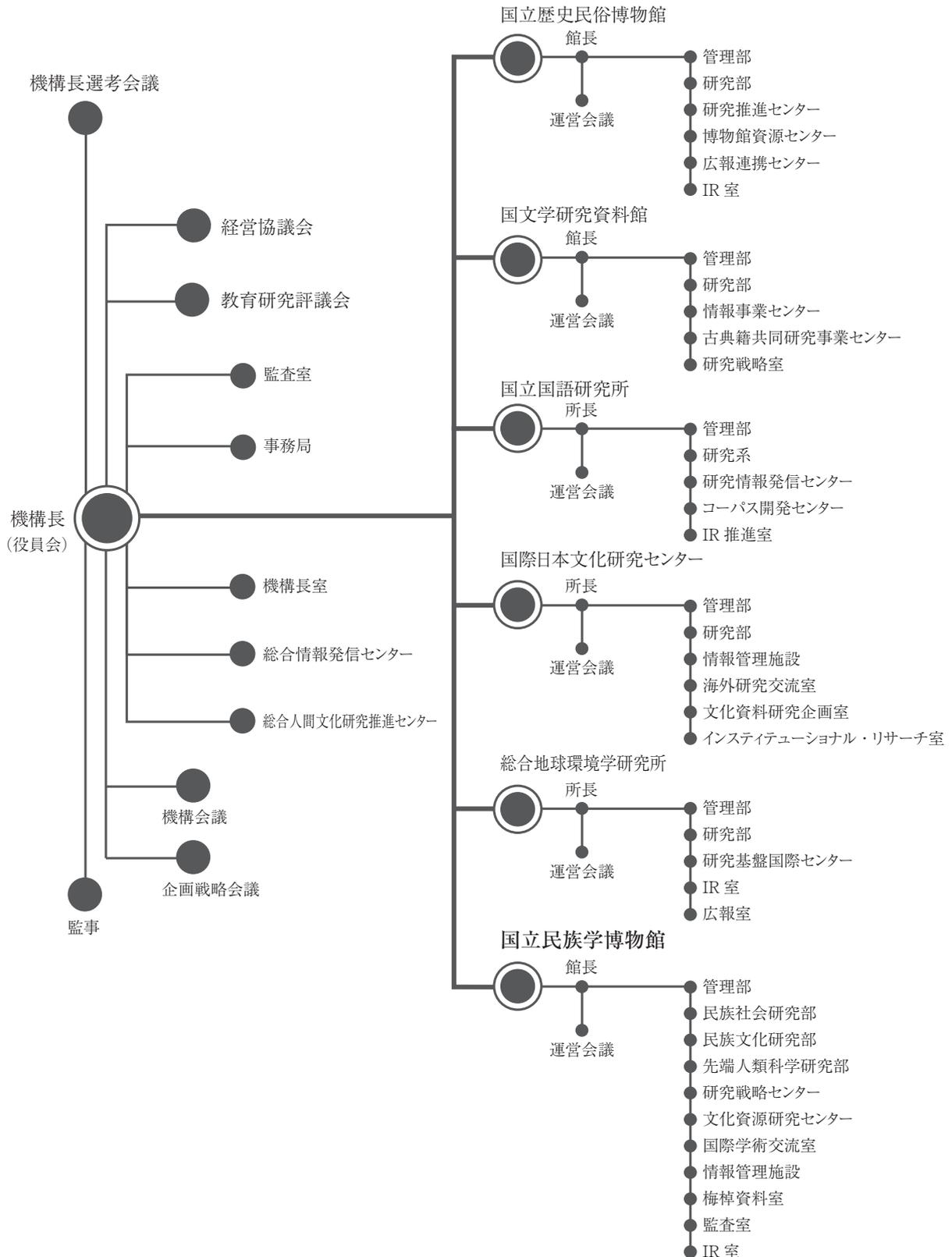
2016年度活動内容

- 1) 学術協定に基づく活動2015年度報告書ならびに2016年度計画書の確認。
- 2) 研究連携や研究協力のために、海外の研究機関との協定について、調査・準備を進めた。2016年度は、4月に中国・浙江大学人類学研究所・図書館、3月にカナダ・ブリティッシュコロンビア大学人類学博物館（UBC）との協定を新規に締結した。
- 3) 2016年度に国際学術交流室を通して行った翻訳校閲件数は以下の通り。
翻訳 7件 校閲 7件
- 4) 外国人研究員7名の受け入れ手続きを行った。
- 5) 英語版ホームページを改訂した
- 6) 本館組織の英語名称の作成・変更の検討を行った。
- 7) *MINPAKU Anthropology Newsletter* を2回発行し、みんぱくフェローズへ発送した。

9 人間文化研究機構

人間文化研究機構は、本館を含む6つの大学共同利用機関を設置し、各機関において人間の文化活動並びに人間と社会および自然との関係に関する基盤的研究を進めるとともに、各機関の連携協力を通して、人間文化に関する総合的で多様な研究を展開させ、学術文化の進展に寄与することを目指す。

組織構成図 (2017年3月31日現在)



運営組織 (2017年3月31日現在)

●役員

機構長	立本成文
理事	平川 南
理事	小長谷有紀
理事	佐藤洋一郎
理事	榎原雅治
監事	小泉潤二
監事	二ノ宮隆雄

●経営協議会

立本成文	人間文化研究機構長
平川 南	人間文化研究機構理事
小長谷有紀	人間文化研究機構理事
佐藤洋一郎	人間文化研究機構理事
榎原雅治	人間文化研究機構理事
久留島 浩	国立歴史民俗博物館長
今西祐一郎	国文学研究資料館長
影山太郎	国立国語研究所長
小松和彦	国際日本文化研究センター所長
安成哲三	総合地球環境学研究所長
須藤健一	国立民族学博物館長
青柳正規	前文化庁長官
岩男壽美子	慶應義塾大学名誉教授
大原謙一郎	大原美術館名誉理事長
岡田泰伸	総合研究大学院大学長
嘉田由紀子	びわこ成蹊スポーツ大学長
弦間 明	資生堂特別顧問
佐村知子	日本生命保険相互会社顧問
武田佐知子	追手門学院大学教授
永井多恵子	ジャーナリスト
藤岡一郎	京都産業大学名誉教授
宮崎恒二	東京外国語大学特命事項担当室教授
望月規夫	讀賣テレビ放送株式会社代表取締役社長
森 正人	尚綱大学・尚綱大学短期大学部 学長
小池良高	事務局長

●教育研究評議会

立本成文	人間文化研究機構長
平川 南	人間文化研究機構理事
小長谷有紀	人間文化研究機構理事
佐藤洋一郎	人間文化研究機構理事
久留島 浩	国立歴史民俗博物館長
今西祐一郎	国文学研究資料館長
影山太郎	国立国語研究所長
小松和彦	国際日本文化研究センター所長
安成哲三	総合地球環境学研究所長
須藤健一	国立民族学博物館長
藤尾慎一郎	国立歴史民俗博物館副館長
寺島恒世	国文学研究資料館副館長
木部暢子	国立国語研究所副所長
稲賀繁美	国際日本文化研究センター副所長
谷口真人	総合地球環境学研究所副所長
西尾哲夫	国立民族学博物館副館長
荒木敏夫	専修大学文学部教授
大塚柳太郎	自然環境研究センター理事長
酒井啓子	千葉大学法政経学部長
佐藤友美子	追手門学院大学地域創造学部教授
野家啓一	東北大学教養教育院総長特命教授
速水洋子	京都大学東南アジア地域研究研究所教授
三田村雅子	フェリス女学院大学名誉教授
吉田和彦	京都大学大学院文学研究科教授

国立民族学博物館（民博）には、総合研究大学院大学（総研大）の文化科学研究科（地域文化学専攻・比較文化学専攻）が設置されている。総研大は、学部を持たない大学院博士課程だけの国立大学法人で、大学共同利用機関の人材と研究環境を基礎とし、各機関の行っている高度の研究活動に密着した教育・研究を行っている。民博に基盤をおく2専攻は、長期のフィールドワークで得られた資料に基づき博士論文を作成することを目的とし、個別の教員による授業や研究指導と、複数の教員の指導のもとに行われる共通のゼミナールを通して、広い視野を持った人間性豊かな研究者の養成をめざしている。

本年度の文化科学研究科長は、日本歴史研究専攻（大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国立歴史民俗博物館に設置）の小島道裕がその任にあたり、地域文化学専攻長は横山廣子、比較文化学専攻長は平井京之介が務めた。

●葉山キャンパス・文化科学研究科の動き

2016年度は、総研大も国立大学法人化13年目を迎えた。

葉山本部において、入学式に続いて合宿によって行う全学総合教養教育プログラム（フレッシュマン・コース）は、本年度は、3泊4日にわたって実施されたが、比較文化学専攻からは新入生2名が参加した。

文化科学研究科においては、かねてより連携強化が図られ、2005年度から文部科学省の「魅力ある大学院教育イニシアティブ」事業として専攻を横断して「総合日本文化研究実践教育プログラム」が2ヵ年実施された後、2007年度より「文化科学研究科連携事業」が始まり、民博に基盤を置く2専攻もこれに参加してきた。本年度の連携事業としては、査読付き学術雑誌『総研大文化科学研究』第13号が刊行され、地域文化学専攻在籍生の論文1点、研究ノート2点、比較文化学専攻在籍生の研究ノート1点が掲載された。また、「総研大文化フォーラム2016 異文化へ旅する、異文化を旅する——文化科学からの招待状——」が2016年12月10、11日に国際日本研究専攻の基盤機関である国際日本文化研究センターで開催され、比較文化学専攻の1年次生2名が学生企画委員として、その企画・準備・運営に携わった。さらに「学術資料マネジメント教育プログラム」として、文化科学研究科の各基盤機関が所蔵する学術資料を活用し、高度な知識と技術の習得ができる授業が開講されており、本年度は比較文化学専攻の岸上伸啓教授による「学術映像の基本」、園田直子教授による「資料保存科学」が開講された。

第62回教授会（2016年9月16日）において比較文化学専攻から1名の課程博士、第63回教授会（2016年2月24日）において地域文化学専攻から1名の課程博士、1名の論文博士の学位授与が承認された。

●教員の異動

2017年4月1日付で、相島葉月准教授、河合洋尚准教授、齋藤玲子准教授が地域文化学専攻担当に、菅瀬晶子准教授が比較文化学専攻担当になった。

竹沢尚一郎教授と塚田誠之教授は民博の定年退職に伴って2017年3月31日付で総研大の併任解除となった。

●学位の授与

【課程博士】

中田 梓音（比較）『スナックにおける言語コミュニケーション研究

——対人関係を調節する接客言語ストラテジー』[文学]

〔審査委員〕岸上伸啓、竹沢尚一郎、南 真木人、庄司博史（国立民族学博物館名誉教授）、早川治子（立命館大学教授（元職））

〔予備審査委員〕平井京之介、宇田川妙子、菊澤律子

高木 仁（地域）『自然資源の利用に関する環境人類学的研究

——ニカラグアの先住民による商業的ウミガメ漁の事例』[文学]

〔審査委員〕野林厚志、南 真木人、池谷和信、池田光穂（大阪大学教授）、秋道智彌（総合地球環境学研究所名誉教授）

【論文博士】

山本真鳥（地域）『グローバル化する互酬性——サモア世界の儀礼財の循環と首長制』[文学]

〔審査委員〕岸上伸啓、林 勲男、丹羽典生、柄木田康之（宇都宮大学教授）、遠藤 央（京都文教大学教授）

〔予備審査委員〕岸上伸啓、森 明子、丹羽典生

なお、これまでに学位論文を単行本として、『研究年報2014』掲載以降に刊行したものは、以下のとおりである。
小河久志（2012年 [平成24年] 3月課程博士）

2016 『「正しい」イスラームをめぐるダイナミズム——タイ南部ムスリム村落の宗教民族誌』大阪：大阪大学

出版会。

●学生の就職状況

学生の受入を開始した1989年以来、2017年3月末日までに地域文化学専攻・比較文化学専攻を巣立った125名の修了生および退学生のうち、合計65名が常勤の教育研究職に就いた。内訳は、国立大学16名、公立大学7名、私立大学34名、海外等その他の機関5名、歴博1名、民博2名である。

●入学者選抜試験

2017年度入学者の選抜試験には、地域文化学専攻3名、比較文化学専攻2名、計5名の志願者があり、地域文化学専攻3名、比較文化学専攻1名、計4名の合格者を第61回教授会において決定し、4名が入学手続きをとった。入学定員（各専攻3名）に対する出願者の倍率は累計平均より低めの1.3倍であった。合格者、「志望研究題目」、(主任指導教員、副指導教員)は以下の通りである。

【地域文化学専攻】

新海拓郎

「生き物の鑑賞基準の成立について——金魚の新品種創出と品評会に着目して」(池谷和信、野林厚志)

拉加本

「中国青海省海南チベット族自治州貴南県におけるチベットの伝統的民間信仰に関する研究——貴南県沙溝郷ボンコル村の事例から」(南 真木人、檜永真佐夫)

謝 春游

「アイデンティティの形成と食文化の関連性について——広島県中国人移民次世代の食生活を中心に」(野林厚志、宇田川妙子)

【比較文化学専攻】

KANTEEWONG THITIPOL

「A Study of the Puja Drumming Culture of Tai Lue Ethnic Groups in Nan Province, Thailand」(寺田吉孝、福岡正太)

2017年度入学者も、ここ数年と同様、研究対象である現地での経験を持つ者が多い。出身大学の内訳は、国立3名、海外1名で出身大学院の地方別では、関東、中国、海外となっている。

2017年3月現在、地域文化学専攻と比較文化学専攻それぞれ11名と17名、あわせて28名が在籍しているが、このうち3年次以上には両専攻あわせて21名がいる。これは、教育研究の柱としている長期フィールドワークにそれぞれ出かけているためである。

2016年度は、館内でオープンキャンパス(入試相談会/2000年度から開催)を7月23日と10月26日の年2回開催した。総研大および民博の概要説明、施設見学、在学生・修了生・教員との懇談会等が行われた。第1回目は、関東、中部、近畿、中国から6名の参加者があり、第2回目の参加者は16名で関東、中部、近畿、中国、海外からの多岐にわたった。

●日本学術振興会特別研究員(DC2)への採用

2016年度は比較文化学専攻の荘司一步、松岡とも子が日本学術振興会特別研究員(DC2)に採用された。また、2016年に申請した2017年度特別研究員採用者として地域文化学専攻の那木加甫、比較文化学専攻の田村卓也、西山文愛、八木風輝の計4名が内定を獲得した。

●地域文化学専攻・比較文化学専攻教員数(2017年3月現在)

専攻	専攻長	担当教員数
地域文化学専攻	1	22(基盤機関の長である民博館長を含む)
比較文化学専攻	1	22

●地域文化学専攻・比較文化学専攻の学生（2017年3月現在）

専攻	入学定員	現員			計
		1年次	2年次	3年次	
地域文化学専攻	3	0	2	8	10
比較文化学専攻	3	3	4	9	16

●年度別学位記授与者数

	地域文化学専攻		比較文化学専攻		計
	課程博士	論文博士	課程博士	論文博士	
1991（平成3年）年度			1		1
1992（平成4年）年度					0
1993（平成5年）年度			1	1	2
1994（平成6年）年度	2		1		3
1995（平成7年）年度	2		1		3
1996（平成8年）年度		3			3
1997（平成9年）年度	3		4		7
1998（平成10年）年度	4	2			6
1999（平成11年）年度					0
2000（平成12年）年度	2		2	1	5
2001（平成13年）年度	1	1	2	1	5
2002（平成14年）年度	1	1		2	4
2003（平成15年）年度					0
2004（平成16年）年度	2	3			5
2005（平成17年）年度	4	2		2	8
2006（平成18年）年度	2		3		5
2007（平成19年）年度	2	1	3		6
2008（平成20年）年度	1		1		2
2009（平成21年）年度		1	1	1	3
2010（平成22年）年度	2		2	3	7
2011（平成23年）年度	3		1	1	5
2012（平成24年）年度	1	1	1	1	4
2013（平成25年）年度			1	1	2
2014（平成26年）年度	2	1	2		5
2015（平成27年）年度	3	1			4
2016（平成28年）年度	1	1	1		
計	38	18	28	14	98

●研究部の人事異動

• 2016年4月1日

民族社会研究部教授	朝倉敏夫	2016年3月31日	定年退職
民族文化研究部教授	杉本良男	2016年3月31日	定年退職
先端人類科学研究部教授	佐々木史郎	2016年3月31日	辞職
研究戦略センター教授	岸上伸啓	2016年3月31日	副館長(研究・国際交流担当)・国際学術交流室長併任終了
研究戦略センター教授	西尾哲夫	2016年3月31日	民族社会研究部部長併任解除
民族文化研究部教授	寺田吉孝	2016年3月31日	先端人類科学研究部部長併任解除
民族社会研究部教授	園田直子	2016年3月31日	館長補佐免
先端人類科学研究部准教授	菊澤律子	2016年3月31日	国際学術交流室兼務免
先端人類科学研究部特任准教授	飯泉菜穂子	2016年4月1日	新規採用
先端人類科学研究部特任助教	相良啓子	2016年4月1日	新規採用
民族文化研究部准教授	齋藤玲子	2016年4月1日	民族文化研究部助教より昇任
研究戦略センター准教授	菅瀬晶子	2016年4月1日	研究戦略センター助教より昇任
民族社会研究部教授	園田直子	2016年4月1日	文化資源研究センターより配置換
民族社会研究部教授	塚田誠之	2016年4月1日	研究戦略センターより配置換
民族社会研究部教授	平井京之介	2016年4月1日	研究戦略センターより配置換
民族文化研究部教授	寺田吉孝	2016年4月1日	先端人類科学研究部より配置換
先端人類科学研究部教授	關 雄二	2016年4月1日	民族社会研究部より配置換
研究戦略センター教授	西尾哲夫	2016年4月1日	民族社会研究部より配置換
先端人類科学研究部准教授	三尾 稔	2016年4月1日	研究戦略センターより配置換
文化資源研究センター准教授	伊藤敦規	2016年4月1日	研究戦略センターより配置換
研究戦略センター教授	西尾哲夫	2016年4月1日	副館長(研究・国際交流担当)・国際学術交流室長併任
民族社会研究部教授	園田直子	2016年4月1日	民族社会研究部部長併任
先端人類科学研究部教授	關 雄二	2016年4月1日	先端人類科学研究部部長併任
先端人類科学研究部准教授	菊澤律子	2016年4月1日	先端人類科学研究部日本財団助成手話言語学研究部門准教授併任
文化資源研究センター助教	寺村裕史	2016年4月1日	人間文化研究機構総合文化研究推進センター研究員併任
民族文化研究部教授	寺田吉孝	2016年4月1日	館長補佐命

• 2016年7月1日

先端人類科学研究部准教授 相島葉月 2016年7月1日 新規採用

• 2016年11月1日

民族文化研究部准教授 藤本透子 2016年11月1日 民族文化研究部助教より昇任
研究戦略センター准教授 河合洋尚 2016年11月1日 研究戦略センター助教より昇任

●来館者抄(役職名・肩書きについては来館者当時のもの)

2016年

- 4月1日 范 佐銘(台湾、客家委員会副主任委員)、廖 美玲(同 副處長)、曾 貴恵(同 科長)、黄 水益(台北駐大阪経済文化辦事處副組長)、蔡 元良(同 係長)、陳 荆芳(日本関西崇正會)
- 4月6日 石垣鉄也(奈良国立博物館副館長)、室溪 浩(同 総務課長)、福島正樹(同 総務課長補佐)
范 雅竹(華藝數位股份有限公司チーフエディター)、周 雯玲(同 情報技術部システムグループマネージャー)
- 4月7日 朝賀 浩(文化庁文化財部美術学芸課主任文化財調査官・文化財保護調整官)
- 4月10日 Laretma T. Adishakti(インドネシア、ガジャマダ大学世界遺産保護センター准教授)、Wisnu Edi Pratignyo(インドネシア、在大阪インドネシア共和国総領事館総領事)、Herry Laksono Maryadi(同 領事)
- 4月13日 Srisakra Vallibhotama(タイ、シリントン人類学センター教授・エグゼクティブコミッティー)、

- Siraporn Na Thalang (同)、Pongard Treekitvatanakul (同)、Somsuda Leyavanija (同 エグゼクティブ
ディレクター)、Apinan Thammasena (同 Publicity & Networking 部長)、Tanongsak Lerdpipatworakul
(同 Database 部長)、Chetapong Klongprong (同 Information Technology and Audiovisual 部長)、
Siriporn Muensaiyat (同 Strategy and Finance 部長)、Jutamas Limrattanapan (同 研究員)、Sittisak
Rungcharoensuksri (同)、Sumitta Sappakit (同 図書館司書)、Alongkot Wannavichaikul (同 Plan
and Policy アナリスト)、Tanyanun Varapipong (同 国際関係事務担当)
- 4月19日 羅衛東 (中国、浙江大学教授・副学長)、袁清 (同 社会科学院)、田禎 (同 図書館副館長)、才小菲
(同 図書館資源建設部主任)、繆哲 (同 芸術与考古博物館研究部主任)、阮雲星 (同 人類学研究所教
授・常務副所長)、金健人 (同 韓国研究所長)、盛弘強 (中華人民共和国駐大阪総領事館教育担当領
事)
- 4月20日 Bourdin Emeline Michele Estelle (フランス、ブザンソン博物館アシスタントキュレーター)、右代啓
視 (北海道博物館)
- 4月21日 金英善 (韓国、ASEAN-Korea Center 事務局長)、Kim Ki-Hong (同 発展計画主任)、Yoo In-Sun
(同 文化・観光部門)、Jung Ji-Seung (同 秘書)
- 4月26日 宮里 正 (一般社団法人沖縄美ら島財団国営公園管理部企画運営管理チームリーダー)、泉 千尋
(同 海洋文化館・郷土村担当主査)
- 5月24日 Ryu Jeong-Hyun (韓国、Ministry of Foreign Affairs、South Asian and Pacific Affairs、Deputy
Director-General)、崔 有繕 (Choi Yu-Sun) (韓国、駐大阪大韓民国領事館専門調査役)、Ham Jeong-
Han (韓国、Ministry of Foreign Affairs、South Asian and Pacific Affairs Bureau Southeast Asia
division、Counsellor)、Kim Myeong-Gwon (同 Construction Management Professional)
- 5月26日 牛尾則文 (文部科学省研究振興局学術機関課長)、熊谷果奈子 (文部科学省大学研究所・研究予算総括
係長)、伊藤麻里 (文部科学省機構調整・共同利用係)
- 6月9日 Catherine Taylor (オーストラリア、在大阪オーストラリア総領事館総領事)、Alexandra Siddal (オ
ーストラリア、オーストラリア大使館広報・文化担当参事官)、徳 仁美 (同 広報文化部・豪日交流
基金事務局マネージャー)、Mathew Trinca (オーストラリア、オーストラリア国立博物館長)、Sarah
Ozolins (同 国際プログラムオフィサー)、前田 礼 (株式会社アートフロントギャラリー／株式会社
現代企画室)
- 7月6日 Nattapat Poomriew (タイ、チェンマイ大学人文学部日本研究センター)、Methee Phutthawong (同)、
西田昌之 (同 レクチャー)
- 7月11日 春野 享 (天理大学附属天理参考館館長)、松田真一 (天理大学附属天理参考館特別顧問)
- 8月1日 黒澤眞次 (イカリ消毒株式会社代表取締役会長／一般財団法人環境文化創造研究所理事長)、石橋陽見
子 (イカリ消毒株式会社主任研究員)、川越和四 (一般財団法人環境文化創造研究所主席研究員)、本
田光子 (九州国立博物館学芸部特任研究員)
- 8月2日 長岡國人 (京都精華大学名誉教授)
- 8月4日 林 純姫 (台湾、純益台湾原住民博物館理事長)、朱 文清 (台湾、台北駐日経済文化代表処顧問／台
湾文化センター長)、羅 國隆 (台北駐大阪経済文化弁事処)、久光重夫 (久光文化施設研究所代表取
締役)
- 8月23日 Hassan Wirajuda (インドネシア、元外務大臣)
- 8月30日 Rattapong Gatruam (タイ、The National Gallery、Practitioner Curator)、Piyakerk Intajak (タイ、
Kanchanaphisek National Museum、Curator)、Watcharee Chomphu (タイ、National Museum、Fine
Arts Department、Curator)、Sermkit Chaimongkol (同)、西島亜木子 (九州国立博物館企画課アソ
シエイトフェロー [教育普及] / きゅーはく女子考古学部マネージャー)
- 9月29日 Grant R. Pogoyan (アルメニア、在日アルメニア共和国大使館特命全権大使)
- 10月4日 チャム・ウガラ・ウリヤトゥ (エチオピア、エチオピア連邦民主共和国大使館駐日全権大使)、ヘイマ
ノット・ゼリフン・ウォルク (同 駐日全権大使令夫人)、小林義明 (日本、在大阪エチオピア連邦民
主共和国名誉領事館名誉領事)、小林研二郎 (同 名誉領事代理)
- 10月7日 細江茂光 (岐阜市長)、若山和明 (同 教育委員会事務局長)、内堀信雄 (同 教育委員会歴史遺産活用
推進審議監兼社会教育課長)、高橋方紀 (同 教育委員会社会教育課副主幹)、見廣篤彦 (同 市長公室
秘書課主任)、鳥本浩平 (同 教育委員会社会教育課主任主事)
- 11月2日 Daan Kok (オランダ、ライデン民族博物館日本・中国・韓国担当学芸員)、Rik Herder (同展示企画・

映像専門)

- 11月4日 Noda Renate (ドイツ、ユーバーゼー博物館)
アレン・グリーンバーグ (アメリカ、アメリカ総領事館総領事)
- 11月15日 Rossela Ragazzi (ノルウェー、トロムソ大学 Associate Professor)、蘇 弘恩 (台湾、小花映像監督)
- 11月28日 Habil BIRTALAN Agnes (ブタペスト大学モンゴル内陸アジア研究センター長/国際モンゴル学会長)
- 12月14日 EREGZEN Gelegdorj (モンゴル、モンゴル科学アカデミー匈奴・歴史考古学研究部門)
- 12月19日 Laurent Mignon (イギリス、オックスフォード大学セントアントニーズカレッジ Associate Professor)、
Katja Triplett (ドイツ、ゲオルク・アウグスト大学ゲッティンゲン)
- 12月26日 鹿野敬文 (明治学園中学高等学校)

2017年

- 1月25日 松田知己 (秋田県美郷町町長)
- 1月27日 武田 洋 (総合研究大学院大学監事 [事業])、磯川寛光 (総合研究大学院大学監事室専門職員)
- 2月20日 Tatiana Thelen (ウィーン大学・Prof.Dr.)、Kwanchewan (チェンマイ大学・博士)
- 3月7日 山岡 昭雄 (UCC ホールディングス株式会社・UCC コーヒー博物館・館長)
田中 慶一 (甘苦社)
楠 正暢 (UCC コーヒー博物館・元館長)
- 3月8日 溝口 勝美 (学校法人 栗岡学園 阪奈中央リハビリテーション専門学校・副校長)

索引

あ

アートル、ジョン	238
相島葉月	81
飯泉菜穂子	96
飯高伸五	178
飯田淳子	242
飯田 卓	83、213
池谷和信	41、206、246、267、272
市田泰弘	182
市野澤潤平	244
伊藤敦規	120、208、219、272、273
印東道子	18、139
上羽陽子	123、225、273
王 向華 (ウォン ヒョンワ)	198
浮ヶ谷幸代	253
卯田宗平	86、248、272
宇陀則彦	164
宇田川妙子	31、273
内田吉哉	140
ヴチニッチーネスコヴィッチ ヴェスナ	197
エングベルグ・ベデルセン エリザベト	191
大石高典	254
太田心平	33、273
太田好信	229
岡田浩樹	240
オルバイアン ゲヴォルグ	193

か

鏡味治也	230
樫永真佐夫	102
辛嶋博善	157
河合洋尚	114、258
川瀬 慈	135、273、279
川田牧人	231
菊澤律子	88、274
岸上伸啓	104、206、211、245、273
北原次郎太	172
窪田幸子	220
黒田賢治	158、273
コープマン ジェイコブ	190
児玉茂昭	154
小長谷有紀	21、303
呉屋淳子	244
是澤博昭	233

さ

齋藤 晃	79、139、226、273
齋藤 剛	243
齋藤玲子	60、212

相良啓子	98、272
笹原亮二	48、273
佐藤浩司	37
サベール ジェイムズ マイケル	200
サム サムアン	194
下道基之	185
シュミット ヴォルバート G. C.	201
新免光比呂	63
末森 薫	142、259、272
菅瀬晶子	108、273
杉島敬志	222
杉本良男	218
鈴木七美	100、273
鈴木 紀	64、272
須藤健一	8、272
関本照夫	173
關 雄二	76、272、303
園田直子	15、273

た

高城 玲	175
高野明彦	177
竹沢尚一郎	50、259
竹村嘉晃	159、272
田森雅一	180
陳 天璽 (チェン ティエンシ)	170
蔡 志祥 (チャイ チーチョン)	189
蔡 素娟 (ツアイ ジェーン・スーチュアン)	195
塚田誠之	23、256、273
出口正之	52、249、274
寺田吉孝	55
寺村裕史	137、273
戸田美佳子	145、274

な

中生勝美	167
中川加奈子	161、272
永田貴聖	147
長谷千代子	222
長野泰彦	235、272
中原聖乃	241
縄田浩志	165、251
西尾哲夫	13、108、139、268、272
丹羽典生	110、237、273
ネルム ポール	162
野澤豊一	252
野林厚志	116、210、266、272、273
信田敏宏	118

は

長谷川清	232
馬場幸栄	152
林 勲男	126、215
林 史樹	174
原 大介	162
韓 敏 (ハン ミン)	19
日高真吾	128、263、273、303
平井京之介	28
平井康之	183
平田晶子	255
廣瀬浩二郎	67、250
深川宏樹	149
福岡正太	132、214
福岡まどか	223
藤本透子	73、272
ブホフスキ ミハル	186
彭 宇潔	155

ま

マシウス ピーター ジョセフ	25、139
松尾瑞穂	90、235、272
丸川雄三	93、273
三尾 稔	95、270
三島禎子	38
南 真木人	111、272
森 明子	58、227、273、281

や

八木百合子	150、274
山田孝子	168
山中由里子	70、139、236
山本泰則	134
横山廣子	30、212、257
吉江貴文	224
吉岡 乾	39、273
吉田憲司	9、120、140、272
吉田ゆか子	234

利用案内

• 開館時間——10:00~17:00 [入館は16:30まで]

• 休館日——水曜日 [水曜日が祝日の場合は、翌日が休館]
年末年始 [12月28日~1月4日]

• 観覧料

区分	個人	団体 (20名以上) および割引※
一般	420円	350円
高校・大学生	250円	200円
中学生以下		無料

特別展は、その都度別に定めます。

毎週土曜日は、高校生は無料で観覧できます。

(ただし、自然文化園 (有料区域) を通行する場合は、同園の入園料が必要です。)

障がい者手帳をお持ちの方は、付添者1名とともに無料で観覧できます。

日本文化人類学会会員及びICOM (国際博物館会議) 会員・日本博物館協会会員の方は、無料で観覧できます。(要会員証)

※以下の方々は、割引料金で観覧できます。

20名以上の団体、大学等*の授業でご利用の方、授業レポート等の作成を目的とする高校生、3か月以内のリピーター、満65歳以上の方 (要証明書等)

*大学等は、短大、大学、大学院、専修学校の専門課程

*なお、短大生・大学生・大学院生の方は、教員が同行し、当館の展示場で授業を行う場合は、事前にお申し込みいただくと、観覧料が無料になります。詳しくはお問い合わせください。自然文化園各ゲートで当館の観覧券をお買い求めの場合は、当館窓口で差額を返却いたします。

• お問い合わせ先——電話 (06) 6876-2151 (代表) FAX (06) 6875-0401

国立民族学博物館

みんぱくホームページ——<http://www.minpaku.ac.jp/>

みんぱく facebook——<http://www.facebook.com/MINPAKU.official>

• 交通のご案内

■大阪・万博記念公園内

□大阪モノレール…「万博記念公園駅」または「公園東口駅」下車徒歩約15分

□バス…阪急茨木市駅・JR茨木駅から「万博記念公園駅 (エキスポシティ前)」 「日本庭園前」下車徒歩約13分

□乗用車…万博記念公園「日本庭園前駐車場」(有料) から徒歩約5分

□タクシー…万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れできます。

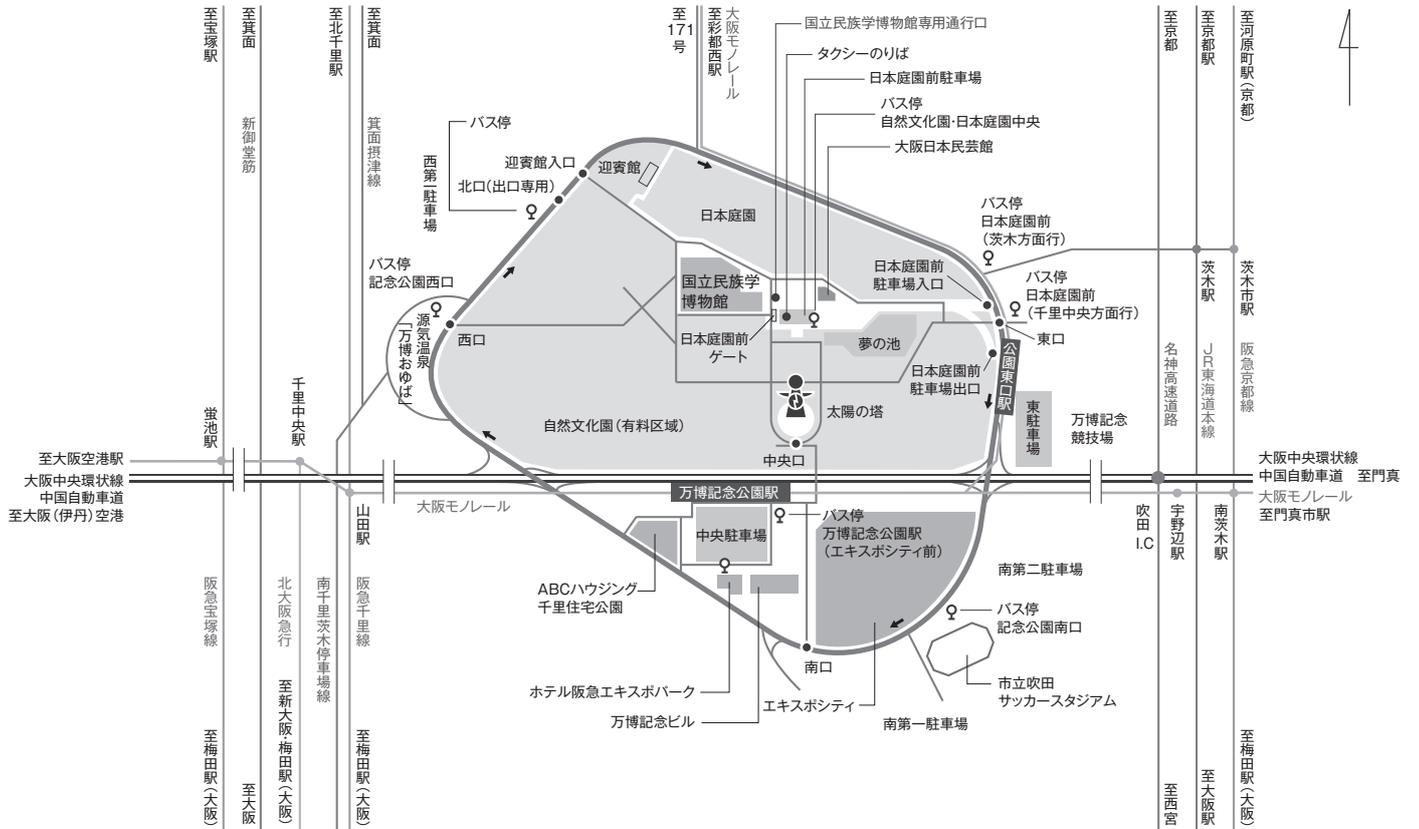
「日本庭園前駐車場」を利用される方は、「日本庭園前ゲート」横にある当館専用通行口をお通りください。

※自然文化園 (中央口、西口、北口) 窓口で、当館の観覧券をお買い求めください。同園内を無料で通行できます。

※東口からは、自然文化園 (有料区域) を通行せずに来館できます。

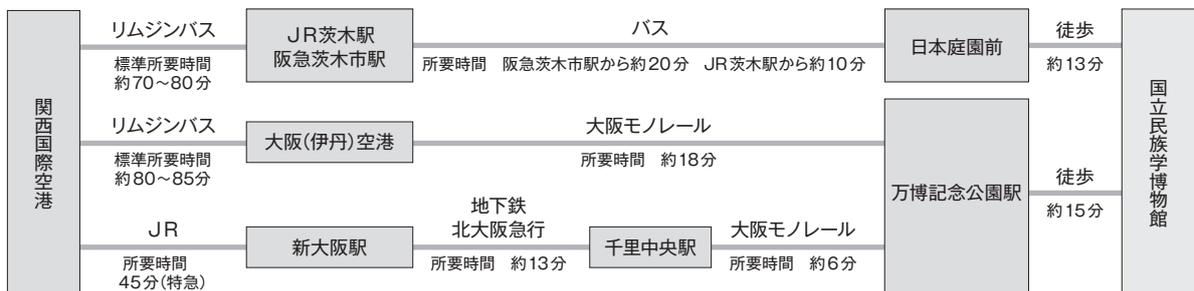
※東口または日本庭園前駐車場から来館し、自然文化園 (有料区域) を通行してお帰りの場合は、同園入園料が必要です。

・周辺図



・主要ターミナルからのアクセス

当館までの交通手段はいくつか方法がありますが、主要ターミナルからのアクセスには、次の方法が便利です。



[研究年報 2016]

編集・発行——大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国立民族学博物館

印刷——株式会社 遊文舎

発行日——2018年3月30日
〈非売品〉